昭和七年三月十日　印刷
昭和七年三月十四日　發行

有朋堂文庫
南總里見八犬傳　第二卷（非賣品）

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
塚本哲三

印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地
三浦捷一

印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地
合資會社　有朋印刷社

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地
有朋堂書店

せじとて、言のこゝに及べるなり。

又曰、予が著したる册子物語の二三十年に及べるものは、その刻板若干散失て、全からざるの故をもて、久しく刷出さゞるあり。さる刻板をあなぐり求めて、足らざるを補刻し、予に校訂を乞ずして、恣に畫を易、文を衍脱して、再刷するものありと聞ぬ。所云括頭巾縮緬紙衣、化競丑三鐘、この他なほあるべし。これらは予が名號ありといふとも、補刻に予が校訂を經ずして、他人の手に成れるものなり。看客の爲に、このことわりをいふのみ。

るを、須本太はなほ脱さじとて、驀直に追蒐るを、力士等透さず携著て、摘捕んとしてければ、須本太彌〻怒狂ふて、角に突被け空ざまに、投飛し反倒す、勢ひ當りがたければ、技に熟たる力士等も、駭騒ぎ辟易して、東へ崩れ西へ靡く、周章大かたならざりけり。然程に須本太は、角連次を索難て、暴に虐たる事なれば、四方に狂巡りつゝ、人をも物をも當るに任して、角に掛ては投居る、猛威に怕るゝ群集の老弱、東西に奔走し、南北に迯迷へば、出茶屋酒店、菓子蕎麥の、牀几葭簾を踏潰されて、只膽を鑠す可也。かゝれば小文吾と磯九郎は、逃る衆人に隔られて、迭に索る遑もあらず。然けれども小文吾は、些も騒ぐ氣色なく、岡の下なる小松の邊に、磯九郎を俟程に、突然として走り來る、須本太は小文吾を、掛んとするを閃りと反して、角を楚と捕留たり。畢竟小文吾が、暴牛を推駐めて、後の話説いかにぞや。そは第八輯に、解分るを聴ねかし。

曲亭主人曰、這個の闘牛の光景は、越後魚沼郡、鹽澤の里長鈴木牧之が、庚辰の春三月廿五日、彼地に到りて、目撃したる圖説に由れり。抑闘牛の一奇事は、越後雪譜中に載べきものなれども、毎歳筆研繁多にして、いまだ創するに遑あらず。且老歩旅行を歎ふの故に、いまだ彼州に遊ざれば、なほ事足らで歳月を歴たり。この故に、牧之の企望を空く

番組全からずば、神慮もこゝに測がたかり。人に見すべき爲のみならぬ、鎭守の神の祭禮なるを、今さら阽むことやはある。もし孰にまれ負色見えなば、諸懸りにして引分んに、なでふ事のあるべきや、とく鬪せよ。と敎圍にぞ、裁判人等立入りて、かくまでにいはるれば、鬪して後に引分給へ。といふに大力士は爭ひかねて、然らばとく／＼鬪せよ。といふよりはやく力士等は、兩牛の牛縻を、雙方手ばやく解放せば、群集の衆人これを觀んとて、前なるは進むを覺えず、後なるは皆立て、前なる人の高きを罵る、聲囂々と捫擇せり。然る程に、須本太、角連次の大牛は、迭に敵手を佶と見て、しづかに進み近づきつゝ、霎時呼吸を揣るが如く、又その透を寃ふが如く、頭を低く脊をたてゝ、睨あふこと半晌ばかり、各々その圖やよかりけん、忽地角を突合して、推つ推れつ挑みあふ。汗は流れて四足に傳ひ、蹄は踏駐めて大地に滅し、含血る眼は燃る歟と怪み、鍛做す頸骨は、折るゝ歟と思ふばかりに、組合しては揮放釋き、又組合して縢へる、雙方の角の音は、戞然として拍子を違へず、三ン反ばかり推れては、又推返す勢ひに、力士等も亦奔走して、或は手を抗手を撥げ、各々牛に勢ひを、資けて勝負を見る程に、角連次は稍疲れて、既に危く見えしかば、大力士等聲を被けて、疾引分よ。と叫ぶになん、東西の力士數十名、簇々と走りかゝりて、推隔引分れば、角連次はその隙に、路を討て逃躲る


牛力士
自若として小文吾暴牛を駐む


牛力士
牛力士
小文吾

き、その身は彼此とわけ入りて終日柴を刈る程に、澤の中より雲起りて、晦曚として黑白をわかず。牛奴は慌惑ひて、こはいかに、とばかりに、軈て樹蔭に走躱れて、雨を避んとする程に、且くして雲霽けり。澤邊にゆきて牛を見るに、聊異なる事もなし。但、龍涎の如きもの、流れて牛のほとりにあり、そは龍の精なるべし。是よりして、その牝牛孕むことあり、月滿て生る犢は、今闘合する彼牛也。現形體の大きやかなる、面魂の猛きはさら也、見給へ、雜毛の鱗に似たるは、是龍種なれば也。當國の守長尾殿、緈のよしを聞食て、件の牛を徴れしかども、牛主惜みて進らせず。今茲は五六歳にやなるべからん。けふの壯觀は只是のみ、意を認て見させ給へ。といふに小文吾微笑て、あの牛の異様なればや、龍種といふ說は、いと信られぬことながら、現怪有の奇物也。又敵手の黑牛も、尋常の物にはあらず。こはよく觀べき事にこそ。と應てそなたへ推向る、膝に片手を突立て、勝負甚麼と見る程に、力士等は件の兩牛を、東西より牽よせて、はや闘せんとしたりしを、大力士等推禁めて、やよや等ね人々、須本太は龍種也、又角連次も二十村にて、聞えたる暴牛也。闘して失あるときは、後悔其處に立がたし。已ね已みね。と制するを、力士はさら也、東西なる、牛主これを肯かず、いはるゝ趣由なきにあらねど、俺們がこの牛は、けふの角力の結局なるに、今闘せずして已むときは、始ありて終なし。

なく招きて管待することあり。この角突に負たる牛は、敵手の牛を、後々まで認忘れず、大約この二十村は、深雪郷郡に彌增せる、山里なれば樵路熊徑、いと陝き處多かり。これにより、米粟を負ひ、柴薪を負たる、牛と牛の行遣るに、途を讓るに由なきも、この角突果て後、負たる牛のゆくりなく、敵手の勝牛にあふときは、頭を縮め立駐りて、これを避ずといふことなし。又雙方甲乙なかりし牛は、あふといへども途を讓らず。これらは總て牛奴の、手を勞せずしてよくゆく事、自然の勢にてこそ候へ。と語るに小文吾いよ〳〵感じて、遺る番ひを見る程に、唯この大牛一ト番にて、けふの結角と聞えたる、一方は、逃入村の角連次、四尺六寸ありといふ黑牛の、骨逞しく脂滿て、磨立たる毛の澤は、現天鵞絨に異ならず。その角の長く鋭き、彼石劍を欺くべし。又一方は、虫龜村の須本太牛、高サは敵手の牛に優て、四尺七八寸ありといふ、連錢葦毛といふものめきたる、その雜毛すべて鱗に似たり。その角は烏犀を欺き、形は犎牛に敵すべし。眼は紫銅の鈴かと怪しみ、蹄は治ざる鐵に似て、實に象駝をも伏すべき勢ひあり。人衆これを觀て胸を潰し、目を驚さずといふものなし。登時磯九郎は、又小文吾に聶くやう、あの須本太牛は龍種なり。初あの牛主の、家に逞しき牝牛ありけり。一稔夏の比、その家の牛奴が、これに薪を負せんとて、牽つゝ深山に赴きて、牛を水澤のほとりなる、樹下に繫置

負を果さずして、一方の牛やうやく弱るを、其方の力士阽みて、引分んと欲するを、敵手の力士等聽ずして、いまだし〳〵。と呼はりつゝ、絶の四方を遶ること、相撲の行司に彷彿たり。かくても勝負なき牛は、雙方の力士等和譚して、大勢入て推隔、辛くして引分るにその牛共はなほ飽かで、迭に突んと走り蒐るを、力士等手段を旋して、敢又鬪はせず、竟に牛縻を引融して、牽て舊所に到るに、その兩牛欣々然と、自負するものに似たる氣色あり。迭に負ぬ故をもて、なほその勇を示すなるべし。されば這數十番なる勝負の間に、觀者宛醉るが如く、惘然として食を忘れ、愕然として膽を落し、日の傾くを覺ずして、奇也妙也。と稱る聲は、彼颪に鳴る海の如く、又遠山の雷を聞くに似たり。實に是、北國中の無比名物、宇内の一大奇觀也。(この牛の角突の事は、次團太の物がたりの段より、こゝに至りて皆眞說也。傳聞の來由はこの篇の左に詳なり。)かゝりし程に犬田小文吾は、この幾番なる鬪牛を觀て、且驚き且感じ、現無智の畜生も、敵にあふに手段あり。史記に所云角觝の、その義をこゝに會得せり。奇妙にこそ。と嘆賞すれば、磯九郎微笑て、某などは角突を、今玆で三たび觀つれども、興あらずといふことなし。されば牛の主たるものは、角突の前月より、朝夕神厨に燈燭を獻りて、わが牛の捷を祈り、思ひの隨に勝得て歸れば、濁酒を醸し餅を搗て、賀席を開き、その村中の老弱を、遺

士們は、僉歡で掌を鳴らし、推ゆく牛に從て、只洪波の打ごとく、走ること無數也。群集の老弱瞬きもせず、彼や負なん、既にはや、弱りにけり。と相憐みて、手に汗を握るもの、各贔屓あれば也。牛角の勝負に爭論あればや、彼牛裁判てふ男、東西の力士に渉りて、商量して牛主と贔屓のものを和寛などす。強弱その差ありといへども、既に負色になる牛は、忽地角を退外して、驀直に迯走るを、夥の力士等、動搖々々と追蒐て、搦捕るを手柄とす。もし追ふことの遲かるときは、その逃牛遠く走りて、郊原田圃の差別なく、山林嶮岨の嫌忌なく、樹を倒し石を輾す、勢ひ名狀すべからず。况勝牛のこれを逐へる、勇猛奮震十倍して、當るべうもあらざるを、この技に熟たる力士等は、牛の左右に拘らず、横ざまに衝と寄せて、角を兩手に楚と握て、その牛の前足を、わが足もて絡まへて、背に尻を掛るもあり、或は牛の後足に携著き、或はその尾に携り曳れて、吊れながら駐るもあり。これにも優たる大牛の、暴てせん術なきときは、その牛の睾丸を、兩手に摑て引駐れば、やうやくに怯む處を、毛をもて糾る牛縻を、雉の羽をもて鼻に融せば、鎭らずといふことなし。有此而絆索を繋添て、人夥して牽もて返すに、牛は意氣揚々と、勝誇りたる驕慢の、氣色この時に顯れて、吼る聲牟々たり。力士等これをうち護りて、齊一凱謌を揚る聲、山谷に相答へて、勇ましといふも疎也。或は又、牛角の勝

観るに、且東西より牛主各一頭を牽もて出して、牛と牛と相距しむること、その間若干丈、力士等牛縻を解放てば、雙方齊一奔蒐りて、角を突合するもあり、或は迭に疾視て、左右なくは蒐らず、相逡ること數回にして、やうやく相近づくとき、突然として額を合し、角を搦て推すもあり、亦牛縻を解くとそが儘、一隻の角をもて、田を鋤き圃を打ごとく、大地を數間蹴り進みて、角を闘する牛もあり。又敵を見て進み得ず、俄然として逃るもあれど、大かたは牛縻を、解くとそが儘相進みて、角を闘する牛多かり。迭に膂力の捷れし牛は、推戻し衝返され、漸に眼中含血て、朱を沃ぎたるものの如く、全體より汗を流して、四箇の角を闘する音、戞々として遠く聞えたり。掎角の勢ひ怕るべし。又手段ある强牛どちは、組では離れ、はなれては突く、その勢ひ迅速にて、もし舛て突外さば、忽地眉間を劈かれん、と見る目危く思ふものから、よく煅煉して懲つことなし。就中大牛の、膂力大象に敵するものは、角をもて投仆し、更に又角をもて、突殺すべく見えたるとき、力士等群蒐推隔て、捷誇りたる牛を駐む。事及ずして拄ざれば、負牛は膌を突れて、矢庭に斃れざることなし。角の鋭きこと鉾のごとく、その勢ひ箭に似たり。かゝる故に、東西の力士七八十名、繩の四方を輪立して、闘する牛 五間十間、衝然として推行ときは、力士も共に靡れ動散て、縱横無导に奔走す。されば勝色見ゆる牛かたの力

凹に曠坦なる、鬪牛の地所に至れば、はやくも聚合ひし老弱男女、この日を晴と裝做したる、その衣の色々なる、花の如く丹楓に似て、妖艷として美しきに、北國の風土にて、桃櫻の花さへに、又只一時に綻びて、彼此にいと匂やかなる、翠を含む楊柳の糸に、遊糸もゆる春景色、(四月上旬なるも、北國はなほ春也)鹿兒斑に消殘る、白雪も亦愛たし。この日は雨後の晴天にて、一朶の雲なく、猛風發らず。連山の波濤に似たる、青葱として蒼きあり、白きもありて尖からぬ、晴巒既に霞を籠め、礀道稍春深し。人聚りて岡いよ〱高く、鳥啼て谷の深きを知る。寛歩して到る處、興あらずといふ事なし。かくて磯九郎は、正面なる岡の邊に、華筵を布儲て、小文吾を上座に請登し、その身は傍に扈從しつ、問ることを具に答て、いと正首に慰めけり。然程に、鬪牛の時刻にもなりければ、村人各々彼此に、繫置たる牛共を、漸々に牽もて出して、迭に勝負を決せしむ。その事の爲體、今の相撲の土俵入、攪組といふものに異ならず。且その牛と牛とを鬪するとき、東は某村の厶右衞門、西は甲村の乙兵衞。と呼はり名告て、看官にこれを知しむ。初は形體巨大からず、膂力飽まで猛からざる、牛をもてこれを鬪し、中は大ならず、又小ならず、強からず弱からぬ、前頭たる牛を鬪し、後は大關小結と唱らるゝ大牛の、強勢なるを鬪すること、亦是今の相撲の如し。既にして一番二番と、勝負を爭ふものを

し。かゝれば僕は、件の者共を推鎮めて、和睦させんと思ふなり。これにより今日の、おん供に立がたかり。僕が相撲の弟子に、鮫守磯九郎と呼るゝものあり、寓居人で候へば、認りてこそをはすらめ、渠を案内にまゐらすべければ、將てゆかせ給へかし。縱僕がゆかずとも、渠も亦土地の人に、粗知られたるものなれば、よき假度を取るなるべし。この義を允させ給へかし。といふを小文吾うち聞て、そは遺憾き事にこそ。勿論和殿は角突を、幾遍も見給ひけん。所要果なば遲くとも、來給へかし。と應をすれば、次團太は歡びて、然らば早飯をまゐらせん。僕は彼議に就て、今より彼處へ赴く也、許させ給へ。と遽しげに、外面望て出にけり。かくて早飯も果しかば、鮫守磯九郎は、准備の偏提と一卜卷の、華筵を肩にうち被て、一刀を腰にしつ、誘とて褊室に來にければ、小文吾は叮嚀に、けふの案内を勞ふて、中刀を腰にしつ、大刀を引提て立出れば、磯九郎は先に立て、鹽谷木澤の兩村なる、境を投していそぎけり。既にして小文吾は、磯九郎を郷導にして、千隈河を舟渡りす。千隈或は千曲に作る、一名を信濃河といへり。魚野川落合て、北國中の大河也。この河を渡し果て、又ゆくこと數町にして、相川といふ山村を過るに、こゝらはすべて山路にして、或は陟り或は又、降ること無數也。是より角突の地所までは、なほ二里あまりありといへば、休ふに暇あることなし。とかくして、彼

又看官の中に入らず、只その平坦にして數十間なる、四下を彼此と徜徉す。久しく雪に閉籠られたる、夥の牛は野邊珍らしげに、なほ繫れて敵手をおもふ。その大きなるものは、高四尺二三寸、四五寸にも及ぶあり。鉢膝と名づけたる、角の餝は緋の縮緬、或は紅なる圓統の紐をもて、兩角に緘みたる、その事の爲體に、目を驚さぬものもなし。かくてぞ牛は期を俟貞に、折々高く吼る聲、呴然として犨々たり。介の葛盧にあらざれば、何といふらんよしを知らねど、谺に響き霞を劈く。彼淮南が丹を舐て、雲に入りけん勢ひあり、月に喘ぎし吳牛には、似るべうもあらざりける、海內無雙の壯觀也。扠角力の光景と、衆牛の勝負は、本日を俟て行て見給へ。わが訥辯には盡しがたきに、いひ遺せる事多かるべし。こは九牛が一毛のみ。嗚呼がましくこそ候へ。と息吻あへず物がたれば、小文吾坐に興に入りて、そはおもしろき事也かし。素より急ぐ旅ならねば、いはるゝ隨に逗留せん。と應てその日を俟程に、間纔に一日を置て、はや鬪牛の日になりぬ。時に文明十四年、壬寅の夏四月初旬、天よく晴て長閑やか也。小文吾は未明に起て、あるじの案內を催促す。登時あるじ次團太は、小文吾がをる褊室に來ていふやう、けふの牛の角突には、僕案內に立べし、と豫ては思ひ候ひしに、昨宵吾鄕なる壯佼等が、川口人と鬪諍をしいだして、いとむづかしくなりたり、と今朝報られて候へば、今さらに默止がた

帯手拭まで、をさ〳〵風流を旨とせし、草鞋は白紙を締に拈り、紺の麻索をもて紐とせしもの、この日を晴と装做せるが、七八十名もありぬべし。そが中に木澤村なる雪車九郎、荒屋村なる漏右衛門、逃入村なる跣四郎、小栗山村の毬右衛門、これらは宗徒の大力士にて、僉よく牛を攎ふもの也。又牛裁判といふものありて、東西の力士共、倘争ひを起すときは、このもの必これを和寛て、無異に治むる事を宗とす。牛には主の名を被けて、某村の某右衛門、ム村の乙八など、呼ぶを地方の習俗とす。彼いにしへの名馬のごとく、別に名づくることはなし。扨隔明日興行するなる、闘牛の地所を討るに、鹽谷木澤兩村の境節にて、逃入、荒屋、虛木の、三ヶ箇村の合保より、其地を借て當場とせり。この地は三方小山にして、その凹に坦然なる佃圃をも借て絶とす。この遠近なる連山は、秣苅てふ藩山なれども、草葉いまだ萠出ず、處々に斑消たる、遠山の雪に霞天引く、春色今さらに珍しく、枯結縷草の上に莚布渡したる、出茶屋あり酒舗あり。蕎麥團子煮染物、餅駝菓子を鬻ぐものは、只この一日の爲にして、いくばくといふことを知らず。鄰鄕鄰郡いへばさら也、遠き境の老弱男女も、覩んとてこゝに聚ひ來るもの、僉高きより見おろさんとて、岡に依りつゝ徘徊す。抑幾億萬人なるべき、宛塘渡る蟻に似たり。彼牛裁判補助人など、その中に雜りて、異あるときはこれを鎭む。力士は處々に隊をなして、

北國の沿習にて、戸々なる牛馬は、初冬の比よりして、明年の三四月まで、皆是厩櫪に閉籠られて、外に出るものあることなければ、秣に足り氣を養ふて、肥太らずといふことなし。況闘牛に、出さんと思ふ牛のぬしは、物の費も敢厭はず。そが妻子奴婢までも、牛の爲に心を用ふる、鍾愛月比に彌增したり。有此而本日になりぬれば、磨き立たる牛共を、各々牛孤屋より牽出すに、畜生なれどもその意を得て、欣然として前足を屢大地に蹴立たる、奮勇の氣色顯れたり。牛は南部の牧多かり。罕には佐渡あり地牛あり。その毛色も一ならねば、黄牛、蒼牛、黑白桃花、四足白、虎文、額白、牡丹絞りに六出樣、その雜毛もさまぐ〳〵にて、枚擧るに遑あらず。又形體にも大小あり、膂力勇猛その差あれば、今定かにはいひがたけれども這回の大牛は、逃入村なる角連次、牛田村なる孟右衛門、虫龜村なる須本太郎、木澤村なる幹之助、蓬村なる艾三郎、鹽谷村なる辛之助、小栗山村の判官八、これらが牛は最手拔手、俗に大關と稱へたる、只これのみにあらねども、いまだ見ざれば大略也。又その村落より出るなる、牛奴を力士と唱へて、究竟なる壯少者、或は紺染、或は花田の山灰衣に、紺の股引脚絆を穿きぬ。又附融といふものを、穿たるも多くあり。又手甲にも華手を盡して、或は栲の絳纈に、或は蒼く或は白き、緣をさまぐ〳〵にとらざるものなく、肚甲には郡内縞絹、繻半は故ら美を盡して帶蹈皮、副

角觝を好みしよしは、史記前漢書に見えたり。）蓋唐山戰國の時、武を講ずるの禮を増て、もてこの戲樂を爲りしとぞ。かゝれば相撲を嗜むものの、そを見ずはあるべからず。なほ詳に聞まほし、その光景はいかにぞや。と問へば次團太歡びて、扇を笏に物々しく、うち咳きつゝ講ずらく、抑越後州古志郡なる二十村は、東山邊の摠名にて、實は二十六村あり。そが屬村を相加えて、細かにこれを數れば、五十箇村にも及ぶとなん。然れば這二十村なる、荒屋、逃入、虛木の三ヶ箇村、合保の鎭守の神を、十二大權現と齋稱へて、各々その村落に神社あり。この神の祭祀と倡へて、年の三月四月の間、宿雪の消果る、遲速によりて定日なく、又定りたる地所もあらねど、大約寅か申の日に、當る吉日を卜定めて、里人鬪牛を興行す。これを地方の俚語に、牛の角突と呼做したり。この事いづれのおん時より、當郡にのみあることやらん、昔より今に至て、こゝに斷絶あらずといへども、よくその始をいふものなし。そはともかくもあれ、家に豢る牛ありて、出して鬪せんと思ふものは、いまだ本日の定らずとも、彌生になれば飼料に、生平より糗を多くして、折々餅などを食しつ、旣に本日の定りては、牛の澤をよくせんとて、蠟種或は油雜巾もて、幾遍となく拭ふ程に、毛色日比に十倍して、就中黑牛は、天鵞絨をもて包る如く、彼羽毛に芥子せしといふ、魯國の鬪鷄さへ、想像られていと勇し。されば

梁に吊し置き、夜毎に鞭懲すこと、三夜にしてなほ死ざれば、釋卸して追放ち、死すればその亡骸を、千隈河へ流しけり。こゝをもて悪棍等は、怕れて他郷へ走りしかば、郷中久しく無異也けり。閒話休題。却説石龜屋次團太は、小文吾が身長の、人に倍して骨逞しく、力士めきたるを見て稱賛しつゝ、角力の物がたりをする程に、小文吾も、素より好む技なれば、思はずも興に乘して、論辯讓ることなかりしを、次團太駭き感服して、欵待はじめに彌增けり。既にして小文吾は、次の日あるじに別を告て、立去らんとしてけるを、次團太頻りに推禁めて、などてやさのみ急ぎ給ふぞ。當國古志郡二十村には、毎年三四月の比、或は丑の日、或は寅の日の、吉辰を卜定て、角突と倡たる、鬪牛の神事あり、今玆は隔明日興行す、と既に定かに聞えしを、見ずして何地へかゆかるべき。なほ且く逗留し給へ。かゝる便宜は得がたからん。といふを小文吾うち聞て、そは珍しき事也かし。某嘗舊里に在りしとき、博識家に聞ることあり。鬪牛は原是西戎の戲也。唐山戰國の時、胡國なる鬪牛によりて、角觝の戲を作れり。その樂たるや、力士二人〻牛頭を戴きて、兩々相抵てもて勝負をなせり。秦はその國胡に近かり。こゝをもて二世胡亥、角觝を好めり。漢の武帝の時に迨りて、その臣張騫をもて、初て西域に到らしむ。これによりて、武帝又角觝の戲を作れり。是今の角觝の權輿也。(二世及漢武の

こゝは國地へ遠ければ、歸らんとするによすがを得ず。罪なくて見る配所の月も、慰めかねつ、吾影の、外には友もなみ枕、磯山おろし音はすれども、風の便も絶果て、島に在ること既にして、一ト稔あまりに及びし比、浪速へ歸る高瀬船の、難風を避んとて、一日この島に歇りしかば、よしを告相譚よりて、その船人等に伴れ、思ひもかけぬ浪速津へ、辛くして著にけり。身のいといたう疲れしかば、有馬に湯治し、南都左界に保養して、その年を空に暮しつ。次の年の春よりして、北陸道に遊ぶこと又一ト稔、石濱の厄難釋て、鎌倉へ赴きしより、四稔といふ三月下浣、（濱路姫の安房へ歸り給ひし翌年也）越後州苅羽郡、小千谷の郷に旅宿をせしに、あるじは鯛聟源八と呼れたる、侏儒なれども角力の最手也。今はさる技を已て、名字を石亀屋次團太と改め、是よりして客店をもて生活とす。爾るもなほ次團太は、地方の壯佼頭領と稱られて、鬪諍の和談などには、立入らずといふことなし。されば當時、この地方の習俗にて、盜竊密夫の惡事はさら也、もし人の害になるものあれば、郷の壯佼等、これを搦捕て、活さず殺さず、神慮任しと命けたる、私刑に行ふを恒例とせり。この神慮任といふ事は、小千谷より十町ばかり藩山のかたに、ふりたる庚申堂ありけり、近曾大く頽破して、その神像は亡たれども、堂は荒たる儘ながら、人の憩所に遺したり、かくて件の罪人を、この堂内に牽もてゆきて、矮樓の

叮嚀に、いへば道節沈吟じて、犬塚は何と思ふらん。このおん金は俺們にのみ賜ふものとしも聞えぬに、盤纏に物を闕ずとて、推辭奉るは無禮なるべし。自餘の犬士の窮するあらば、君の惠に預らせん。御邊のこゝろいかにぞや。と問れて信乃も沈吟じつゝ、いはるゝ趣その理あり。(句)然らばこの一包金を、(句)且く預り奉らん。と應て齊一額をつきて、倶に君恩を謝し奉れば、濱路姫は二犬士の績を譽て、送別のはる〴〵なるを、勞ひ給ふ。されば、照文夥兵等も二犬士にうち對ひて、僉再會をぞ契りける。言果て濱路姫主從は、渡船にうち乘て、前面島に著給ふを、二犬士はこなたの岸に、霎時立在て目送りけり。爾後濱路姫は恙なく、安房の瀧田に還り給ひし比、大父義實朝臣と、二親義成御夫婦と、男女の、胞兄弟達に甲斐に在りける年來の、事どもを告給ふものから、木工作が犬塚信乃に、妻はせんと欲せし事と、信乃が結髪の妻濱路が事、そが寃魂の事などは、恥ていひ出給はねば、義實も義成も、つや〳〵思ひかけ給はず、照文だにもこの事をのみ、知るよし絶てなかりけり。不題犬田小文吾悌順は、犬坂毛野にあはんとて、曩に鎌倉へ赴きしに、毛野は其處にも在らずして、絶て往方をしるよしなければ、伊豆の山家を索ねんとて、下田船に便りを討め、いそぐ水行に風暴れて、破船を伊豆の大島に、繕ふこと兩三月、稍纜を解たる日に、又惡風に吹流されて、這囘は三宅島に著けり。

るべきことながら、奴隷の爲には則主也。よしや惡人なりといふとも、其を傷けて逃亡たる、媼内も亦安穩ならんや。久後想像るべきのみ。といふに照文も進み寄て、這奈四郎は姫うへの、養父木工作叟の仇也しに、はやく甲府を逐電して、刑罰を脱れしを、本意なく思食たるに、圖らずこゝに怨を復せし、犬塚生の功、賞すべし。かゝれば養父の白骨と、讐敵の首級を齎して、安房へ還らせ給ひなば、是に優たる家苞なし、いと歡しく候。と稱へて軈て云々と、姫うへに報まうせば、濱路姫歡びて、信乃が功をぞ感じ給ふ。かくて蟇崎照文は、奈四郎が衣の袖を切取て、首級を包み夥兵にもたして、その宵は二犬士共侶に、四谷の里に宿りを投め、次の日の巳の比及に、墨田河の上に來にけり。登時信乃道節は、濱路姫と、照文等に別を告てまうすやう、河を東へ渡し給はゞ、下總に候へば、道中いよ〱無異なるべし。某等はこの處にて、身の暇を給はるべし。莊助その餘の犬士等をも、索ねて坌く聚らば、僉共侶に安房に到りて、見參に入るべけれ。といふに濱路姫も照文等も、餘波を惜みて別るゝに忍びず、切て眞間、國府の臺の、頭までもとて放さゞりしを、二犬士は從はで、立去らんとしてければ、照文は已ことを得ず、金一百兩をとり出して、二犬士に贈りていふやう、このおん金は犬士の爲に、某によさし給ひし、吾君の賜もの也。盤纏に乏しからずとも、受納めて後日の所要に、用ひ給へ。と

にいけ袋、江五田のかたへ逃亡けり。然程に犬塚信乃、犬山道節は、濱路姫を送らんとて、暫く蟹崎照文等に相倶して、石禾の指月院を出しより、第三日の曛昏に、武藏の四谷まで來にけり。信乃は宿りを討ん爲に、濱路姫の轎子に、先だつこと兩三町、人家あるかたへ急ぐ程に、と見れば、先路の枯芒花のほとりに、砍仆されたる旅客あり。近づく信乃が足音の、忽地に耳にや入りけん、發起と立て刀をうち振り、素奴媼内迯さじ。と呼はりながら撃んとせしを、信乃は騒がで身を反しつゝ、利腕を楚と拿留めて、面をあはし佐と見て(句)泡雪奈四郎、(句)犬塚信乃歟。とかはす言語の聲の中に、迯んと掙扎く奈四郎が、刀を奪ふて礮と砍る、拳の冴に霎時もあらず、春を得またぬ泡雪が、首は地上に滾落て、消る枯野の草の葉を、軀の鮮血に浸しけり。浩處に道節照文等は、轎子をいそがして、はやこの野邊に來にければ、信乃は奈四郎が爲體を、如此々々と報知して、這奴は既に深痍を負ふたる、眼も其處に闇みけん、某を見て媼内、と呼かけて砍らんとしたる、刃を奪ふて頸撃落しぬ。おもふにこの奈四郎は、倶したる奴隷媼内に、傷けられしに疑ひなし。仇なすものの多かるとも、從僕の手にかゝりしは、現積惡の報ひにこそ。といふに道節頷きて、彼媼内奴は路用の金を、奪んとての所行なりけんを、奈四郎は倘死なずして、御邊に首を刎られしは、天の分配、寔に妙也。奈四郎が終る所は、斯あ


主を賊して堀内更に亡命す


道節
信乃
五の君を送る道中の信乃はからず親の仇を撃つ

原を過る程に、下哺になりにけり。この地は當時郊原にして、西南に、多摩川の里あるのみ。民屋稀にして、疎林枝をまじえ、岐道多くして、冬畔人を迷しむ。既にして媼内は、惡心頻に已ときなく、こは究竟の處也、と思ひつゝ四下を見るに、來る人絕てなかりしかば、腰に帶たる一刀を、引拔きて聲をもかけず、背より走り懸りて、奈四郎が髆を、項背かけて丁と砍る。斫られて苦と叫びつゝ、倒れんとして踏留り、拔あはせんと見かへる處を、疊かけて撃つ刀尖に、又頤を砍られたる、奈四郎怒れる聲を立て、虎狼野心の奴隷が敵對ひ、主をうつ海の野間ならぬ、世を武藏野の迯水も、終に脫れぬ身のをはり、天罰思ひしらせん。と佞僭きながら拔兇かす、刀を頻りにうち振りて、斫らんと進むを物ともせず、噫小ざかしき天罰呼はり。人を殺せば又殺さるゝ、報ひをかくてもおもはずや。年來の好みには、木工作を殺したる、業をこの世で果さする。無益の口を啗んより、彌陀を念じて死天の旅、十萬億土へ獨ゆく、覺期をせよ。と不敵の嘲哢、又幾刀歟砍伏々々、十々滅を刺んとする折から、西のかたより是方を望て、來る人影に刃をとゞめて、叙次わろし、と見かへり呟き、奈四郎が懐なる、財布を手ばやく引出して、紐切はなちてうち戴き、是さへ取れば死ふとも、生ふとも要はなし、寬哩と御座れ。と血刀を、拭ひ斂むる強惡非道、何處へいなん稲叢の、陰を日柴に足の向く、方を先路

他采地也。こゝまではいかにして、追捕の兵を被るべき。觸内が追著くを、候ばや、と思ひしかば、媼内にこゝろ得さして、客店に宿りを討め、櫓に目標を出し措て、逗留しつゝ渠を候ども、觸内は竟に來ず。既にしていたづらに、はや四五日を歷にければ、原來彼奴は做損じて、搦捕られたるにやあらん。實にならぬ財に靦されて、日を過せしこそ悔しけれ。投て往方を定めんとて、媼内と商量するに、媼内聞て頭を傾け、近屬兩管領の沒落せしより、鎌倉は兵火に荒れて、昔の鎌倉に候はず。陸奥には富榮る、諸侯の城下多かれば、世渡る便著なからずやは。奥なる大崎殿の御内人には、僕が故主あり。彼處へ赴き給へかし。と眞實だちて薦めしかば、奈四郎この議に從ふて、その十一月の廿日あまり、三四日の比にやありけん、八王寺の客店を、朝未明に立出て、ふたゝび路を急ぎけり。登時媼内は、肚裡に思ふやう、彼身の惡事發覺れて、落人となりし主の後に跟て、陸奥三界佮傍ふとも、行すゑは頼しからず。甲府に在りし時にこそ、主從といはれたれ、かうなりては面々の、蜂を拂ふに優ことなし。曩に宿所の小簞笥なる、金を遺れしといふ事を思へば、盤纏に不足なければならん。人家遠き所にて、結果て金を略るとも、落人なれば祟もあらじ。この分別を果さずは、臍を噬とも及んや。けふとて翌を過さじ、と思ふ心を色にも見せず、なほさり氣なく慰めて、ゆき〳〵て同國なる、四谷の

受ざる事、衆人の知る所也。且拙禿は、抖藪行脚を旨として、一寺に住持たることを願はず。當院に杖を駐めしは、先住の憑に依るのみ、眞の住職には候はず。大檀那の布施を退けて、我隨をまうす事、罪得がましき所行なれども、只是出家の寡慾なるは、素よりその所也。この義をもつてしかるべく、聞えあげ給はらばや。と諂ふ色なく答まうして、屢薦れども受ざりければ、堯元はせん術なくて、三種の贈物をもたし歸りつ、國守にかくとまうすにぞ、信昌頻りに太息を吻て、彼和尚が一錢ならでは、施物を受ずといふ事は、われも粗傳聞たり。恂らくは由斷して、信乃道節を走らせし、わが憾は顏闔を、招き得ざりし魯君に似たり。兵を煉り謀を旋らして、鄰國を伐とる事は、なほ難しとすべからず、信乃道節が如きを得て、家臣とせん事寔に難かり。惜むべしをしむべし。と繰返せども今さらに、嘆息の外なかりけり。かくてぞ信乃道節が、豫ての遠慮の符合せしを、丶大法師は後々まで、いひ出て稱賛せしとなん。案下前齣復說泡雪奈四郎は、嚮に躑躅が崎を逐電せし時、宿所に遺し置たりける、三十金を取らせんとて、篠子嶺のこなたより、幗内を還せし後も、そを俟に暇あらねば、夜を日に續て走る程に、大路(三十六町一里をいふ)廿五六里を、只二日にうち過ぎて、次の日の黄昏には、八王子の驛に來にけり。この地方は武藏なる、都筑郡なりければ、武田家の封邑に、鄰るといへども

遠近を爭ふは、時によるべき事ならずや。といふに又信乃も諫めて、姫うへに倶し奉りて、海上は好しからず、遠くとも陸をゆき給へといふ。照文則その議に任して、濱路姫に云々、と縡の趣を告まうしつ。その夜主從起行の、準備いとなく曉方に、濱路姫の乘り給ふ、乘物を夥兵に舁して、照文は、信乃道節と共侶に、丶大法師に別を告て、東を投て立出れば、丶大法師は沙彌念戌と、三箇の夥兵と、無我六等を從へて、門前までぞ送ける。現留別の悲しき事、賢と不肖の差別なければ、ゆくものは屢見かへり、送るものは惆然たり。そが中に濱路姫は、歡しさと哀しさに、袖はまだ乾ぬ旅衣、たつとしなれば水鳥の、羽音も寒き霜月の、廿日あまりの朝開き、沈む月影、浮む身も、西と東へ別れ路を、いとゞ惜せ給ひけり。是より纔に三日を經て、信昌の使者、甘利兵衛堯元、指月院に來て、丶大法師に主命を述傳へ、前日對面の歡びとして、住持には白銀十枚、犬山道節、犬塚信乃には、衣裳各一襲を贈り給ふといふ、物みな廣蓋にうち乘したるに、目錄を相添て、遞與さんとしてけるを、丶大は國守の恩を謝して、敢その貺物を受ず。扠いふやう、信乃道節は三日已前に、濱路を故郷へ送らんとて、彼地へ赴き候ひぬ。豫ても申あげし如く、渠等は異姓の兄弟を、索ね巡るものなれば、かへり參るべうもあらず。かゝればこの貺物は、もてかへらせ給へかし。又拙禿は貴賤となく、一錢より外に施を

俺們を留ん爲に、惠るゝこと遍累らば、その恩竟に羈となりて、立去らん事難かるべし。只その惠を受ざる先に、他鄉へ避るにます事なし。蜑崎生もこの議に就て、姫うへのおん供して、はやく安房へかへり給へ。猶豫せば必後悔あらん。といふに、丶大も照文も、異議に及ばず頷きて、二犬士の意見愚意に愜へり。しからば今より起行の、準備をせん。と應果て、はや立んとせし照文を、道節急に推禁めて、且俟給へ、いふ事あり。俺們も翌未明に、共侶に立去て、相摸武藏の盡處までも、姫うへを送りまゐらすべし。よりて夥兵七人を、三人はこゝに遺し置て、四人を姫うへに隷給へ。俺們この地を去るといへども、莊助がうち遶る、彼七箇國の中にあらん。然るを莊助はしらずして、この處へかへり來つる歟、或は火急の要事あるとき、夥兵三人を走らしなば、言速に達すべし。こは豫て俺們が、商量したる所也。といふに照文こゝろを得て、彼夥兵七名は、犬士の非常に備へよとて、吾君の隷させ給へば、四人ン五人ンを留るとも、なほ多しとすべからず。左にも右にも各々の、便宜に任し給へかし。某つらく先路を思ふに、相摸路に赴きて、鎌倉より舟行にかゝらば、はやく安房へ屆るべし。然りけれども、海上は、風濤の難み測りがたし。道德は何と思ひ給ふ。と問つゝ傍を見かへれば、丶大は頭をうち掉て、路は貪るによりて禍あり。只武藏より下總をうち過ぎて、上總に到るを順路とすべし。

よ。この餘の事は如此々々。と言掟給ひしかば、堯元これを奉りて、形のごとくに行ひけり。されば夏引幮内等は、身首所を異にせし、尸を市に棄られて、餓たる狗を肥すめる、隱慝の報ひ怕るべし。かゝりし程に猿石なる、村の故老の百姓等は、堯元の下知を受て、木工作が亡骸を、村人に舁しつゝ、指月院に送り來にければ、ゝ大法師受とりて、その宵火葬にしたりける。登時信乃道節照文等は、木工作が死後の名迹を、件の百姓們と商量して、親族の子を索るに、猿石の隣村に、四六城氏の百姓あり。則木工作が養父より、五世前に分れたる、血脈相續の氏族なれども、今は迭に疎遠なりき。この四六城氏に、三箇の男子あり。次男は尤才ありて、文筆を好めり。このものしかるべしといふに、二犬士照文等歡びて、濱路姫に云々、とこれらのよしを告まうしつ、木工作が白骨を、半分ちてその一壺を、四六城の香華院へ葬らしめ、卽便隣村なる、四六城氏の二男をもて、木工作が名迹たるべし、と約束す。これにより、故老の百姓們が媒妁しつゝ、件の二男を呼び迎へ、名を木工作と更めて、養父の家を嗣しけり。かくてぞ前の木工作に仕へたる、奴婢杣人等も又後の木工作に從ふて、その家ふたゝび榮えけり。是より先に道節信乃等は、その宵、ゝ大照文に相譚ふやう、姬うへの情願も、綷十二分に成就したれば、この地の逗留しかるべからず。何となれば、國主信昌ぬしは、士を愛する良將也、

第七輯　卷之七

第七十三回

仇を謬て奈四郎頭顱を喪ふ
客を留て次團太鬪牛に誇る

却說國守は城に還りて、堯元等に宣ふやう、わが指月院に赴きしより、住持の凡僧ならぬを知れり。國中の士民渴仰して、活菩薩と稱する事、虚名にはあらざりき。況彼二犬士の面魂、實に一人當千の勇士也。渠等意を固して、こゝに勤仕を推辭むとも、間なく時なく物を贈りて、日に月に恩を積まば、竟に心を傾けて、當家に隨從することあらん。就て木工作が後家夏引は、手づから良人を害せしにあらねども、密夫奈四郎が木工作を、殺せしよしを聞ながら、隱して惡事を資けたり。かゝれば良人を害せしにおなじ。當に厳科に行ふべし。又奈四郎が從僕嚮内も、月比主の惡を資けて、盜竊殘忍、せざることなし。これ亦頭を刎べきものなり。只彼木工作が小斷出來介は、奈四郎夏引等が惡事を知らず、鈍く夏引に謀られて、信乃を誣んとしたるのみ。かゝればその罪に輕重ありて、夏引等と同じからず。渠は一百鞭ちて、國境より追放て

の從者前に立、後に從ふ行列は、冬枯野邊の花紅葉、幾春秋を累ねたる、數世の國主の勢ひにその甲斐見えて目覺しき、武備を後にぞ傳へける。(傳に云、武田氏は、源義家の弟、義光より出たり。義光の二男義淸初て武田と稱す。義淸より淸光、信義、信光、信政、信時、時綱、信宗、信武、信成、信春、信滿、信重、信守、信昌に至て、十五世なり)。

により、濱路は、木工作が亡骸を火葬して、その白骨を舊里へ、葬らん事を願へり。且木工作に男兒の、家を嗣べきものなければ、渠が遠き親類たりとも、その子共を遺迹として、香華を續し給はらば、又是國の大恩也。この義を許させ給へかし。と迭代に乞ひまうせば、信昌聞つつ頷きて、そはいと易きこと也かし。奈四郎が積惡は、夏引等が首伏により、縡既に發覺たれば、宿所へ捕手を遣せしに、その前夜に逐電しつ、追へども竟に及ばずして、奈四郎が從僕なる、鰔内といふものを生拘たり。かゝれば夏引出來介と共侶に、刑戮せしむべきもの也。この義を濱路に知らすべし。又彼妙に實父あれば、故鄕へ歸らんと願へるも、養父木工作が白骨を、濱路が故鄕へもてかへりて、菩提を弔んと欲するも、皆是孝義の情願なれば、いかでか許さざるべき。又木工作が養嗣の事は、村の故老と相謀て、ともかくもなさばなしてん。われ又甘利堯元等に分付て、下知せば障りなかるべし。寔に不測の事によりて、蓋世の義士勇士、道德にさへ對面して、欝胸を霽せし事、限りなき歡びなれ。法務の暇あらん時、和尚も城中へ來臨せられよ。かへすがへすも二犬士は、春まで杖をとゞめよかし。異日亦復面會せん、さらばにこそ。と別を告て、床几をはなちて立給へば、、大道節、信乃共侶に、恩を謝し奉りて、門前迥に送り出るを、信昌しば〳〵禁めさして、馬に閃りとうち乘て、躑躅が崎へ還り給へは、夥

してわれに仕へよ。住持この義を介して、望を遂さし給ひね。と又他事もなく宣へば、丶大は莞爾とうち笑て、明君上にをはします。賢を招き、士を選み給ふ事、駿馬を畎畝に拔くが如し、寔に二犬士の幸ひ也。しかはあれども二犬士は、廻國の宿志ありて、いまだ仕官の望あらず、恐らく承引候はじ。と答て左右を見かへれば、信乃道節は頓首して、不肖の俺們罪ありて、一介の功なきに、その罪を免されて、高祿をもて招せ給ふは、有がたきまで忝し。さばれ素より某等は、異姓の兄弟數人あり、相別れてより往方を知らず。渠等に環會ずして、仕官に就くはこれ不義也。縱一箇國を給ふとも、今は從ひ奉りがたし。只速に身の暇を、賜んことを願ふのみ。と言語齊一推辭しかば、信昌しば〳〵嘆息して、しからば當家に勤仕の事は、權くこゝに議すべからず。切て一年三箇月、この地に杖を駐めよかし。城中に請待して、薄酒を羞めて、寸志を表せん。枉てこの義を允してよ。といと叮嚀に聞え給ふを、二犬士又まうすやう、某等は邊鄙なる、浮浪人で候へば、疎食に熟て、美味を嗜ず。かゝれば三鬻七醢の、饗饌を給はらんより、なほ願しき一條あり。木工作が養女濱路は、仂かりし時、鷲に捉られて、當國中山なる樹杈に、捨措れたるものなれば、實の親を知らざりしに、その折被たる兒服もて、這回素生の定かになりぬ。某等はその實父母に、舊緣の候へば、故鄕へ送り遣らん事を許諾たり。これ


石禾の寺
了信昌
二犬士を
知る


道節
信乃

後悔其處に立べからず。よしや人の姓名を、冒し掠る罪ありとも、罪なきものを搦捕る、惡政には優すよしあらん、とみづから許して膽太くも、御家臣甘利兵衛堯元と僞稱へ、木工作が小斷出來介を欺きて、信乃と濱路を救ひとりしは、某が所爲に候也。然りけれども他郷に走らず、罪を當院に俟こと久し。賢察あらば幸ひならん。と憚る氣色もなく答まうせしかば、信昌只顧嘆賞して、勇なる哉勇なるかな。權を怕れず、衆敵を憚らず、義に仗て辭を盡し、難に臨て辭する所なし。その器その量、億萬人に超然たる、俊傑にあらざりせば、いかでかこゝに及んや。抑信昌が、放鷹に事を托て、けふ當院に立よりしは、專これらの爲也かし。住持も先よくこの意を得られよ。道節が僞名の詭策は、その罪なきにあらねども、われも亦家臣等の奸曲惡行を察せずして、他郷の旅人を苦しめたり。是に由てこれを觀れば、わが政事に暗き所なく、賞罰その度に稱なば、人焉ぞ隱さんや。下情上に達せずして、民の僞を行ふ所以は、政事の暗きによれり。かゝれば犬山道節が、甘利堯元と僞稱て、犬塚信乃等を救ひしは、わが國政の闕たる所を、補れしといはまくのみ。彼奸賊が邪計もて、人の姓名を僞稱へ、多慾の愚者を欺きて、金銀衣裳を掠略れると、日を同くして語るべからず。今その義勇を感ずるのあまり、ここに捨がたきおもひあり。もし小國を嫌れずは、半郡をもて宛行ん。犬塚も犬山も、けふより

恭しく拜謁す。登時信昌進み對ひて、當院の住持は、和僧なる歟。法風四箇郡をうち靡けて、勸懲の主人公と仰るゝよし、豫て聞ゝ所也。信昌放鷹殺生の次をもて、漫に佛地に遊ぶ事、後世を思はぬに似たれども、武門の沿習、用捨あるべし。左右に侍るは何人ぞや。と問れて、大は臆する色なく、孤獨の貧院、老弱男女の、詣來ることの稀なるに、國守賁臨し給ふ事、寺門の面目、何事かこれに優すべき。こゝに候もの共は、拙禿が俗縁ある、武藏の處士、犬塚信乃戍孝、同國の浪人犬山道節忠與と、呼れたる勇士等に候。といふに信昌頷きて、その犬塚信乃とやらんは、嚮に猿石の村長、木工作が家に寄宿して、あるじを殺せしもの也、といひ立られたる旅客に候歟。と問れて信乃は進み出、さゝ候。某則木工作許抑留せられし、犬塚信乃戍孝也。曩には思ひがけなくも、御家臣泡雪奈四郎等に憎れて、寃屈に陷されんとしてけるを、親友等の資けによりて、縲絏の辱めを、免れてこそ候なれ。といふに信昌又頷きて、然らば犬山道節は、所云親友なるもの歟。と問れて道節進み出、さゝ候。某は、信乃と異姓の兄弟なる、犬山道節忠與也。いぬる日泡雪奈四郎と、淫婦夏引等が密謀の、洩聞えしに驚きて、出訴せばやと思ひしかども、敵手は守の御家臣也。舟中流に横はりて、渡りに檝を得ざるときは、信乃は忽地搦捕られて、笞の下に寃死せん。しからば竟に及ばずして、轍鮒を枯魚の市に訪ふ、

後方に續きて來よ。さのみ怕るゝことかは。とうち微笑つゝ諭し給へば、堯元終に感服して、翌の准備をしたりける。却說武田民部大輔信昌は、次の日放鷹に假托て、石禾の郷に逍遙しつつ、指月院に立より給へば、豫て彼寺にその聞えあり。この時住持丶大法師は、國守の沙汰を聞んとて、劵緣の爲に近村に出ず。日々に二犬士照文等と、うち相譚て在りけるに、忽地國守光臨の、案内を聞て眉根を顰め、武田殿はこの年來、賢明の聞え有といへ共、みづからこゝに來給ふこと、その吉凶測りがたし。といふを道節聞あへず、吉にもあれ凶にもあれ、出迎へずはあるべからず。蜑崎生は姫うへを、守り奉りて潛びて居給へ。某と犬塚は、道德の左右に扈從して、資けて國守と論辯せん。いとおもしろし、面白し。と勇めば信乃もこの議に任して、俱に衣裳を更めて、丶大法師の左右に從ひ、はや外面に立出れば、照文は七箇の、夥兵を紙戸の陰に躱して、素破といはゞ共侶に、出て二犬士を資けよとて、玄關の戸の節窓より、信昌の來給ふを、闞窺てぞゐたりける。然程に甲斐の國守、民部大輔武田信昌は、十餘名の近臣と、甘利兵衛堯元を從へつゝ、この餘幾十人の從者と、列卒雜人を退けて、僉門前に留め置き、しづかに進み入り給へば、當院の住持、丶大法師は、香染の法衣に、皂き袈裟を被けて、手には一枝の如意を把たる、左右に犬山犬塚の二犬士を相從へ、門面のこなたなる、甃石の邊に出て、

さればとて、捕手の兵を遣して、搦捕せん事しかるべからず。何となれば、木工作を撃殺して、信乃を誣たる犯人は、是則わが家臣也。然れば渠等が私の相謀もて、假討手となりし事、その罪なきにあらねども、吾政事正くして、家臣に奈四郎が如きものなくば、明々地に訴出て、信乃が寃をいひ釋ん、と欲する事のなからずやは。然るを訴出ずして、後暗き所行をしたるは、奈四郎と親しきものに、拄られんと思ひしなるべし。法度はその君の定めたるを、その君先これを破らば、誰か法度を守るべき。彼者共が僞名の罪は、わが政道の是非に依れるを、己に返さずして人を罪せば、世の豪傑に笑れん。翌は放鷹に事托て、彼寺に立よりて、住持にあふてみづから問ん。この意を得よ。と宣へば、堯元只管感佩しつゝ、且くして又申すやう、御諚では候へども、信乃を將てゆきしもの共の、善惡いまだ知るべからず。且指月院は新地にて、住持は抖擻行脚の僧也。倶に野心を挾まば、安危をこゝに測がたし。某おん使を奉りて、彼處に到りて糾明せん。この議を許させ給へかし。と諫めまうせば、信昌は、頭を左右にうち掉りて、堯元が意見は、遠慮に過たり。昔蜀漢の昭烈は、三たび草盧を顧て、やうやく臥龍を得たりと聞くに、われみづから赴かずは、彼處に智勇の浮浪人の、聚合たりとも當國に、留めん事は難かるべし。さばれ非常の爲なれば、堯元は夥兵二三十名を、列卒の模樣に打扮して、わが

したるを知らで、その兩刀と路用の金を、奪略んとしてければ、信乃にいたく打懲されし、その事のはじめより、夏引と密通の緈の趣、木工作を殺せし事、又石禾の指月院なる、道人を欺きて、夏引と其處に密談しつゝ、信乃を陷れんと伎倆たる、惡事を悉首伏す。その言、曩に夏引が首伏の趣と吻合せり。只この數箇條のみならで、奈四郎は、預る所の材木を伐て、坊賈に賣與し、或は寺の要用と僞りて、豪家の錢財を借りて、返さゞりける奸曲私慾まで、この時露顯に及びけり。かくて甘利堯元は、次の日問注所へ祗候して、主君信昌に、奈四郎が逐電の事、その僕蝙内が首伏の趣を聞えあげて、又まうすやう、夏引蝙内等が首伏によりて、愚按を回らし候に、いぬる日に奈四郎は、石禾の指月院なる、道人を欺きて、夏引と彼寺に密會しつゝ、信乃を陷れん事を、商量せし折などに、信乃と親しきものゝ竊聞して、某が名を僞稱へ、信乃と濱路を將て去たる歟、と心つきて候へば、竊に人を遣して、彼寺のやうを探聞せしに、武士の浪人とおぼしきもの、數人彼寺に寓居すといへり。さらば某か姓名を、僞稱へたる癖者は、原是信乃が親友歟、然らずは一所不住なる、俠客の類にもや候べからん。はやく捕手の兵をもて、彼癖者等を搦捕せ給はん事こそ緊要ならめ。と案文をもて聞えおけしかば、信昌つら〳〵うち聞て、現堯元が猜する如く、信乃も濱路も彼癖者も、件の寺に在らんずらん。

より紊入て、御諚ざふとぞ呼りける。されば又幮内は、奈四郎が遺れたる、三十金に心迷ひて、首尾よく件の金を取らば、わが身は獨信濃路より、北國へ影を隱して、身の落著を謀らんものを、と肚裏に尋思をしつゝ、飛が似くに走りしかども、途にして天は明たり。さばれ不敵の癖者なれば、明朝巳の比及に、躑躅が崎なる宿所に還りて、奈四郎が誨たる、小簞笥の鍵を索ねて、抽匣を彼此と、引散しつゝ件の金を、既に取らんとする折から、御諚ざふと呼りて、追捕巻たる夥兵の大勢、前後左右に競ひ蒐れば、幮内大く驚きながら、腰に帶たる脇挿の、刀を晃りと引拔て殺脫んと角へども、多勢なれば物ともせず、竟に刃を打落して、突倒し折累て、押へて索を被てけり。かくて甘利堯元は、幮内を打懲さして、あるじ泡雪奈四郎が、往方を緊く責問ふに、幮内苦楚に堪ずして、奈四郎は、昨宵媼内を將て、篠子のかたへ走りし事、又幮内は、奈四郎が遺れたる、三十金を取らんとて、途よりかへりし縡の趣を、云々と首伏せしかば、堯元則兩箇の夥兵に、幮内を追立さして、城外なる獄舍に遣し、その身は馬にうち跨て、自餘の夥兵を從へつゝ、奈四郎を追蒐たれども、既に一夜を歷し事なれば、得及ばずして歸りにけり。かくて又堯元は、その夜さり、幮内を牽出さして、又奈四郎が事を責問ふに、幮内熟むことを得ず、彼穴山のほとりにて、奈四郎が愆て、信乃を烏銃もて撃倒せし時、信乃が虛滅

れ。きのふ材木商人が、林の枯木、落葉の價を、三十餘金もて來たるを、いまだ守には進らせず、そが儘小簞笥に藏め措きしを、捨て來にける疎さよ。誰にもあれ走り還りて、件の金を取もて來ば、そが中十金を分與ん。よしや捕手を向らるゝとも、問注所の評議決らずは、なほ權く猶豫せられん。嫗内嬶内いかにぞや。と問ども嫗内は虛耳聾して、冷笑ふのみ應をせず。嬶内是をうち聞て、見に宣するごとく、縱天の明たりとも捕手の遲速は測りがたし。運よくば件の金を、取出さん事手の隙入らず。こは運鉼に候へば、僕こゝより走りかへらん。この嶺を踰給はゞ、徐にゆかせ給へかし。といふに奈四郎歡びて、盛なるかな汝が膽勇、三十金を悉取らするとも惜からず。とくゆきてとく追著ね。といふに嬶内勇みたちて承りぬ。と應もあへず、躑躅が崎へぞ引かへす。然程に甘利兵衞堯元は、その日巳の左側に、泡雪奈四郎が宿所の前後を犇々と捕卷して、一箇の夥兵を遣しつ、裡面のやうを張せしに、そのもの籔走り還りて、奈四郎は既にはや、逐電をしたりけん、物引散せしのみにして、それ歟と思ふ影もせず。奥に一箇の奴隷あり、只今外より還りしにや、脚絆に裳を引折たる、行裝の儘にして、小簞笥の抽匣を、かき撈りてこそ候なれ。と報るを堯元聞あへず、原來はやくも絆の洩れて、奈四郎は逃たる歟。奴隷なりとも捕な逃しそ、疾こみ入て搦めずや。と烈しき下知に夥兵們、前後の木門

堯元はこゝろ得果て、遽しく宿所に退き、夥兵十名許從へて、奈四郎が住ひする、小袋町へぞいそぎける。有如之程に、泡雪奈四郎は、きのふ竊に蠏内を、猿石村へ遣して、木工作が家内の爲體、信乃濱路等が搦捕るゝや、否の事を張はせしに、蠏内はその曛昏に、喘々かへり來て、初假堯元が、信乃と濱路を將て去きし事、爾後眞の堯元が、夏引出來介等を綁めて、大く責懲せしかば、夏引出來介は苦痛に堪ず、木工作が殺されたる、その絆の始より、信乃を誣て、木工作が、仇也といひ立たる、計策の終まで、遺なく首伏したる事、村人の風聲と、又みづから竊聞したる、趣は箇樣々々。と主に聶き報にければ、奈四郎は呆れ果て、且駭怕るゝこと大かたならず。しからんにはわが計較の、夏引が言より發覺たれば、捕手をこゝへ向らるべし。三十六計逃るにしかず、今宵の中に逐電せん。媼内にもこの意を傳へて、疾起行の准備をせよ。と只その眉に火の移ごとく、語急く聶き示せば、蠏内も媼内も、皆逃支度に暇なく、衣裳調度を竊に典して、宅邊近き坊賈に賣與し、主從盤纏を懷にして、その宵亥中の比及に、武藏を投て走りけり。現に世の鄙語にいへることとあり。凍るものは衣を擇まず、走るものは路を擇まず。されば奈四郎主從は、頻りに路を急ぎしかば、已にして曉がたには、篠子嶺のほとりまで來にけり。登時奈四郎は、媼内蠏内を見かへりて、あまりに絆の慌しさに、われ忘れたる物こそあ

照文は沈吟じて、首鼠兩端に決め難つゝ、ゝ大法師に意見を問ふに、ゝ大ゝ霎時頭を傾け、おれ程までに姫うへの、宣ふをいかゞはせん。犬山生も意を枉て、僉共侶に當院に、逗留の議に從ひ給へ。と辭を竭して和寛しかば、道節僅に頷きて、衆議稍一決したりける。是により、ゝ大法師は、奥まりたる離舍に、濱路姫を潜して、照文を傅としつ、信乃道節夥兵等も、齋を薦めて欵待しけり。案下某生再說、甘利兵衛堯元は、夏引出來介等を搦取て、蹴蹈が崎へ牽もて還り、その夜獄舍に繫して、一通の讞書を寫め、詰旦問注所へ出仕して、綷の便宜を伺ふ程に、當國の守、武田信昌は、この日もみづから民の訟を聽定めて、國中の賞罰を、政ごち給ひけり。登時甘利堯元は、進み出主君に謁して、件の讞書を呈り、且泡雪奈四郎秋實が、惡事の顚末、猿石の村長、木工作が枉死の事、そが後妻夏引が罪犯、幷に小斷出來介等が、首伏の趣をもて、きのふ甘利堯元と僞稱て、武藏の旅人犬塚信乃及、木工作が女兒濱路を横略せし、辦者の爲體を聞えあげしかば、信昌は件の讞書を、讀しめて聽給ひ、又堯元がまうすよしを問攷へ、うち驚きつゝ眉を顰めて、かゝれば泡雪奈四郎は、殘忍無頼の惡人也。堯元みづからうち向ふて奈四郎主從を搦捕るべし。この者共を責問ば、信乃濱路とやらんが往方も、其を將てゆきし辦者等が、實名宿所もおのづから、考得らるゝよすがあらん。とく〳〵せよ。と命じ給へば、

や。その犯人は外にあらで、國守の家臣なるものを、かくても己を責ずして、人を咎る沙汰あらば、國民必叛き離れん。何もの歟これを稱へて、善政也、といはんや。討手來たらばこの義を說ん。說くといふとも聽れずは、思ひのまゝに殺靡けて、その時他所に走らん事、今にして遲きにあらず。餘の人々は立退給へ。と應て承引氣色なきを、信乃は頻りに稱贊して、適微妙くいはれたり、愚意も亦相同じ。犬山と共侶に、こゝに討手を俟んと欲す。蜑崎ぬしは道德と共に、姬うへに具しまゐらせて、立退き給へ。と勸るを、濱路姬聞給ひて、喃刀禰們、淡き女子の心もて、勇士の論議を推辭にあらねど、わが身ひとつを脫れんとて、再生の恩いと高き、人人の危からんを、知りつゝ何處へかゆかるべき。綷よく無異に治らば、いかで養父の亡骸を、煙となして白骨を、安房へ携もて還りて、ながく菩提を弔まほし。願ふはこの意を果すべき、相計を賴むのみ。といひかけて目を拭ひ給へば、丶大照文感嘆して、孝義の御こゝろ淺かりせば、かゝる事やは宣ふべき。所詮命運を天に任して、國守の沙汰を聞くまでは、僉この處にあるべけれ。といふを道節肯はず。この地の事は某と、信乃に任して、姬うへの、おん供してとく立退給へ。綷よく無異に整はゞ、木工作叟の白骨を、後日に安房へ贈るべし。今さらに義理をいはるゝは、無益にこそ。と奬せども、濱路姬はうち泣て、從ひ給ふべくもあらねば、

き忠告の、歡びをなん述給ふ。登時、大は二犬士と、照文を見かへりて、諸君子心づき給はずや、這回の事に功あるもの、亦啻念戌のみならず、彼無我六がいと無我なる、甘く奈四郎に欺れて、魯く褊窒を貸すにあらずは、縱念戌ありとても、彼密談を聞くによしなし。然れば世界に棄才なし。奇伏は糾ふ繩に似たり。きのふは非にして、けふは是也。愆の功名とは、渠が事にぞあらんずらん。といふに三人は腹を抱て、堪ぬ笑ひに興じけり。かくて又照文は、向後の事を相譚ふに、丶大は霎時沈吟じて、犬山生の計略もて、姬うへと犬塚生を、輙く拯とりたれども、この事竟に人に知られば、こゝへ捕手の兵を、向られん事疑ひなし。かゝればはやく蟹崎ぬしは、夥兵們共侶に、姬うへを護奉りて、一ト圓安房へ還り給へ。二犬士も亦速に、この地を立去り給へかし。貧道は素是出家の事也、國主の咎めを受るとも、命に恙あるべからず。よしや頭を刎らるゝとも姬うへと諸君子に、恙なくば悔しからず。この議に從ひ給ひね。といふを道節聞あへず道德の教諭は、愚意と違へり。犬塚はとまれかくまれ、某は今憎く、この處を立去るべからず。何となれば、甘利兵衞が名を嫁りて、信乃と姬うへを拯ひとりしは、是已ことを得ざる所行のみ。然るを後日の祟を怕れて、影を隱し迹を埋めば、奸盜騙兒に異ならず、勇士の恥る所なり。はじめ木工作を撃殺して、信乃と姬うへを危くせしは、抑誰が所爲なるぞ

の庇により、實の親もわがうへも、定かになりし歡びに、就て悲しく恥かしき、過來しかたをいかゞはせん。胤は賤く生れねど、仂きより民間に、養れつゝ上ざまの、事は見もせず聞もせぬ、田舍女兒が親の名を、汚さん事こそ惶けれ。只いつまでも木工作が、女兒と思ふて、とせよかし、かうせよかしと、いはれなば、郤に後やすからんを、倩思へば世間に、薄命人の多くとも、わが身にます事あるべしやは。實の母御は哀別に、朽折て世を逝り給ひ、又傳の老黨と、女房も亦わが爲に、仕を致して法師になり、尼になりぬ、と今こゝに傳聞つゝ哀しきに、養育の恩彌高き、親は非命に身まかりし、菩提を弔ずは舊里へ、飾る錦も何にせん。願ふは道徳を導師にして、尼にならんと思ふのみ。この儀を相計ひ給ひね。といひかけて又泣給ふを、丶大照文、二犬士も、齊一慰めまゐらせけり。且くして、丶大法師は、庖湢のかたを見かへりて、念戌は其處にやをる。とく／＼來よ。と呼立れば、阿唯と應て立つ念戌は、皸痛む足引の、遠山形の重紙戸の、蔭より頭をさし出すを、是方へ進め。と招きよして、濱路姫にまうすやう、この沙彌も亦二犬士に、等しかるべき績あり。彼奈四郎と夏引等が、密談を聞くものなくば、誰か亦姫うへの、おん素生を知るよしあらんや。願ふに渠が法名の、念戌の戌も亦犬なり。名詮自性といはまくのみ。おん目を給はり候へかし。といふにさこそ、と濱路姫は、思ひがけな

ば照文頷きて、いはるゝ趣寔に以あり。又某と犬川生は、血絡親しき再從兄弟也。さばれ山河を隔し故に、いまだ對面を得ざりしに、彼人は御邊と共に、圖らずこゝに宿りを討めて、名告あひしも亦奇也。かゝれば離合はみな時あり、丶大道德も某も、豫て相識る三犬士、犬田犬飼に遭ずして、迭に面を識ざりける、犬川犬山の二犬士に、遭ぬる事も天なり時也。これに由て彼を思ふに、自餘の犬士に遭んと欲せば、時の至るを俟には不如。といふに道節、信乃共侶に、誠に然なり。と答けり。會話の果しかば、丶大は後邊を見かへりて、喃諸君子、濱路姬は先の程より、次の間なる爐の邊に、休はしまゐらせて、湯劑を薦め奉れ、と念戍無我六等に分付たれば、既に落つき給ひしならん。然らばこゝにていひつる事を、遺なく聞せ給ひけめ。彼おんうへに大功ある、二犬士は改めて、見參に入り給はずや。といふを照文うち聞て、その義は既に某も、こゝろ得て候也。且姬うへに申あげん。といひつゝ次の間に赴きけり。權くして照文は、舊の處に立出て、姬うへのおん痞の、痊らせ給ふ程に、人々の物がたりを、彼處にて聞給ひしとて、哀歡交おん涙に、かきくれてをはしませしを、諫め慰し奉りぬ。誘見參に入り給へ。と案内をしてぞ、隔なる、重紙戸を推開けば、道節信乃は其方に向て、十有四年の厄释て、故鄕へ歸らせ給ふべき、時來れるを祝きまうすを、姬は羞たる面色にて、道節諸彦

篠龍膽は、源家の鼻祖六孫王(經基)より以來、用ひ給ひし服章なれば、山名畠山の一族は、今もなほこれを用ひ、里見殿は篠龍膽を、副服章にし給ひにき。有如之故にや、嫡男にあらざれば、中黑の服章をもて、平服に用ることを許し給はず。是によりて姫御達の、衣には篠龍膽を附られたり。又只この事のみならで、姫うへ達の衣の模樣に、七寶を摺らせ給ひしは、この時義成朝臣の息女、七はしらあり、嫡男太郎御曹子、義通君と共に、八はしらになんをはします。俗に子寶といふ事あれば、七箇の姫上達を、七ッの寶に表し給ひて、同胞の衣同じかりき。濱路姫の亡給ひて、白前のおん腹に、又姫うへの産れ給ひて、はや七八才になり給ひぬ。と綷詳に說諦せば、信乃はさら也道節も、共侶に會得して、喃道德、蜑崎ぬしも聞給へ。豫て聞れしことにやしらねど、信乃が結髮せられし妻は、某が女弟なりき。いと憚あることながら、姫うへとおなじ名にて、渠も濱路と呼れたり。爾るに曩に圓塚にて、濱路が深痍を負ひし時、某不測に、名告りあひつゝ、救ふによしもなかりしに、けふは女弟と同名なる、里見殿の姫うへを、救ひとりしも亦奇也。且犬塚は、姫うへの養父なる、木工作許身を寄せしより、濱路姫のおん素生も、不憶洩聞えたり。况姫の外祖父なる、下河邊爲清ぬしは、信乃が母黨の親族にて、木工作も亦信乃に舊緣あり。又姫うへの外祖父にも、由緣あることいよ／＼奇也。といへ

大道德に、初て環會し時、濱路姬のおんうへを、具に聞きたりしかば、道德は件の趣を、はやくこゝろ得たるにより、彼夏引が云々と、奈四郎に答たる、木工作が養女の素生、衣の事、その名も異なることなければ、義成朝臣のおん女兒なるべきよしを、はやく猜して、犬山生に如此々々、と說示したりしかば、犬山も亦歡びて、形のごとくに計ひつ、御邊と共に姬うへを、救ひとりまゐらせし、この義は獨に某が、還ると聽て、大道德の、報られて候。と一五一十を說示せば、信乃は頻りに駭嘆じて、寔に物の因緣あること、蓮根の糸を引く如く、斷れども盡ぬ者になん。濱路姬の實母と聞えし、盧橘の父なりける、下河邊爲清の從弟なる、井丹三直秀は、某が外祖父也。又姬うへを十四年、養育しまゐらせし、村長四六城木工作は、直秀の老黨なりし、蓼科太郎市が獨兒なりき。その故は箇樣々々、如此々々に候。と報るに照文道節等、ゝ大法師も感嘆して、奇緣也とぞ稱へける。當下信乃は兒服を、又とり揚てつくゞゝと、見つゝ照文にうち對ひて、蟹崎ぬしこの衣に、(中黑)の服章を附ずして、(さゝりんだう)をつけられしは、こも亦その故ある事歟。と問へば照文頷きて、その疑ひはことわり也。大新田小新田は、御先祖上西公(新田大炊亮義重朝臣)より以來、里見、鳥山、堀口の三同宗も、嫡家中將家(新田贈中納言義貞卿)と等しく、中黑を以家の服章に、し給ふことは勿論也。さばれ

白前養ひとりて、愛慈み給ふ事、正腹なる姫上達に、異なる事もなかりしを、濱路姫亡給ひしかば、實母盧橘はさら也、白前も大かたならぬ、おん歎きは日に増て、返らぬ事をかへすがへすも、思ひ出いひ出て、かき口説給ひしを、若殿諫奨し給ひて、大約貴きも賤きも、人の命に厚薄あり。わが姉伏姫の事を聞ずや。親の爲には只一箇なる、愛女なりけれども、一言の信を守りて、八房の犬に伴れ、富山の奥に山籠りして、廿に足らぬ齢を一期に、非命に世を逝り給ひにき。この折親のおん歎きに、思ひ比奉れば、われには女兒夥あり。濱路一箇を喪ふとも、慰るよしなきにあらず。歎くは要なき事也、と說諭し給ひしが、盧橘は思ひ細りて、遂にむなしくなりにけり。是より先に若殿は、近習の侍、女房等を誡めて、濱路姫の亡にし事を、漫に人にいふものあらば、越度たるべし、と下知し給ひしを、大殿傳聞給ひて、歡で宣ふやう、吾兒は理義に惺惚しくて、惻隱の遠慮あり。かくては家の榮ん事、亦疑ふべからず、とひとりごち給ひしとぞ。然ればにや、曩に某に命じ給ひて、出にし儘に信なき、ゝ大法師の存亡を索べく、且徳誼賢良の智者、武藝拔羣の勇士あらば、劵りて隨從せしめよとて、關の八州を巡らし給ひし、首途の見參に、兩屋形は濱路姫の事とてはいひ出給はず。綷の次に彼姫うへの、死けん地方を索よといふ、仰は絕てなかりしかども、某この義を思ふをもて、鎌倉にて、

のうへの又損也。この事鄰國に聞えなば、當家の武威は初に似ず、大く衰たりといはれん。祕て人にな知らしそ、といと叮寧に諭し給へば、登等は感涙にかきくれながら、恩を拜して、軈ておん前を退出しが、悲歎やる方もなかりけん、爾后病痾に假托て、身の暇を乞ひまうしつ、遂に頭髮を剪捨て、下總の眞間に赴き、弘經寺の徒弟になりて、濱路姫のおん菩提を弔ひ奉る、と聞えしが、今もなほ世に在りや、しかりし後の事を知らず。この他傅の女房も、尼になりしもの、兩三人ありけり。又姫うへのおん母は、義成朝臣の側室にて、井直秀が從弟なりける、下河邊太郎爲清の女兒にて、盧橘とぞ呼れたる。親爲清は結城にて、直秀と共侶に、落城の日に戰沒しつ、盧橘は當歲なりしを、その母懷にかき抱き、彼此に流浪して、果は安房に漂泊せしを、當時よく知るものありて、義實朝臣に如此々々と、聞えあげ奉りしかば、親の忠義を愛させ給ひ、件の母子を扶持し給ひて、五十子方に隷られけり。有此而八九年を歷る程に、爲清の母は身まかりぬ。盧橘が孤なるを、大殿（義實をいふ）特に憐み給ひて、後堂にて養し給ひしに、はや年來になる隨に、容止の美しく、心操も恰悧かりき。この義をもつて召使はゞ、しかるべきものならんとて、義成朝臣に賜はりけり。年齡は若殿（義成をいふ）より、姉なりけるを嫌ひ給はで、軈て側室になされしかば、この腹に二の君と、濱路姫の產れ給ひしを、嫡室

せ給ひつゝ、山の丹楓の褐散りて、池水に浮べるを、瞰さんとて餘念なく、結縷叢を歩せ給ふ折から、背後の方に颯と音して、いと大きなる暴鷲の、羽嵐高くおろし來て、濱路姫のおん背を、衣の上より搔抓て、虛空遙に翥去りにき。綷の勢ひいふべうもあらず。時に姫うへおん年三才也。左右のおん手を引まゐらせし、嫡母女房等さへ撲倒されし、嫡母はそが儘呼吸絶けり。おん守役に候ひし、齡坂登はさら也、おん供なりける女房等、女の童に至るまで、あれよ〳〵、と叫ぶのみ。翅なければ蒼天を、うち瞻仰て音にぞ泣く、三保の浦曲にとり遺されし、天津少女に異ならず。幸にして恙なかりし、姫上達の傅等は、各々主を守奉りて、御館へ歸しまゐらせたる、周章大かたならざりけり。然程に、齡坂登等も、已ことを得ず云々と、件の綷の趣を、兩屋形（義實義成）に聞えあげて、腹を切らんとしてけるを、義成朝臣驚き給ひて、且その自殺を禁めさせ、身邊近く召よして、みづから諭し給ふやう、わが子共等の多かるに、そが久後は知らねども、只濱路のみ薄命にて、暴鷲に捉られし事は、汝等が罪にあらず。されば劍戟弓砲を、門戸に植て武を示す、この城墎には天飛ぶ鳥も、怕れて過らざりけんを、縱後園に出て遊ぶとも、義成が女兒と生れて、彼鷲の餌にならん事、豈人力の是非に依らんや。過世に定る業報ならんを、汝等早りて腹を切らば、事に益なきのみならで、女兒を喪ひ家臣を亡ふ、損

しつゝ、誘とて信乃が身邊に措くを、信乃はやをら取揚て、この衣の事はしも、いぬる比木工作が、昔語に聞るのみ、とり出しては見せざりしを、けふこゝに見るも亦奇也。喃蜑崎ぬし、實の親の定かならぬ、濱路がうへを知られし歟。察するにこの衣は、正しき徴になるものならめ。縁故はいかにぞや。と問へば照文微笑て、さればとよその事なれ。この兒服は一布千金、もし是なくばいかにして、道德も又某も、彼妙子の素生を知るべき。抑四六城木工作に、この年來養れて、渠が女兒になり給ひし、濱路どのは別人ならず、吾君里見治部大輔義實朝臣の御嫡男、安房守源義成朝臣の、第五の息女になんをはします。縡の證據は幼稚き時に、被させ給ひしと傳聞たる、七寶に篠龍膽の、其兒服のみならず、五の姫うへはおん耳垂珠に、黑子ありき、と豫て聞ば、郷に犬山生に伴れて、當院に來ませし時、乘物より出給ふを、扶掖つゝ熟視しに、亦是右の耳垂珠に、顯然として黑子あり。給といひ恰と云ひ、四六城木工作が養女濱路は、應仁二年の秋の比、鷲の爲に掻攫はれて、往方も知れずなり給ひし、と聞えたる、義成朝臣のおん女兒にて、五の君と呼れ給ひし、濱路姫に疑ひなし。僂れば十有四年の昔語になりにけり。應仁戊子の秋九月、下浣の事なりき。天よく霽て風もなく、いと暖なりければ、濱路姫はおん姉妹の、姫御達共侶に、嬭母女房等に傅れて、一日瀧田の城中なる、園林に出さ

第七輯　卷之六

第七十二回

三士一僧五君を敬ふ
信乃道節甲主に謁す

再說、蟇崎十一郞照文は、犬塚信乃にうち對ひて、曩に下總なる市川にて、別れし後の哀歡苦樂を、遺もなく報果て、この餘なほ一ト條の、歡しき事候也。そは彼濱路のうへにこそ。犬山ぬしは既にはや、道德の物がたりにて知られけん、奇々妙々たる事ならずや。といひつゝ傍を見かへれば、道節含笑頷きて、寔に推量せらるゝ如く、某は彼奇談を、昨宵道德に聞たれば、礪に木工作が小厮なる、出來介を大く權して、彼七寶を揚箔にして、篠龍膽の服章附たる、孤身衣の衣一ト襲を、取出さしてもて來れり。礪に夥兵の甲乙に、預け置候ひしを、いまだ受とり給はぬ歟。と問ば亦照文も、うち頷きて、傍なる、袱包を解披きて、こは緊要の物なればとて、犬塚ぬしに對面已前に、夥兵等が遞與せしを、そが儘こゝに携たり。道德もこれを見給へかし。といひつゝ軈てさし寄する、孤身衣の兒服を、ヽ大法師は手に拿て、見つゝ只管嘆賞

りうきうは、琉球より來たる小狗也。さつまたねは、琉球狗とこの土の小狗と、尾りて生れるをいふ。この故にその耳垂れずして、形圓かり。まじりは、小狗と地犬とまじはりて生れるをいふ。又紅毛狗と尾りて生れるもあり。紅毛狗は、地犬よりちひさし。穀食せず、或は魚鳥、或は琉球芋もてこれを養ふ也。強て飯を食しむれば、稍大きくなれり。この他小狗を養ふに、くさ〴〵の口傳あり。且常に用ふべき藥方、子を産する時のこゝろ得など、いと多かり。これらのよしを書つめて、好るものに示さばや、と思ひつゝ、さる暇のあることなければ、久しうして得果さゞりき。こはその崖略のみなれど、八犬傳の名にしおふ、小狗の事しも漏さじとて、諳記のまゝにしるすになん。

文政十年丁亥冬十一月大寒前六日　　蓑笠老逸

云、淳和天皇天長元年、四月丙申、覽越前國所進、渤海國信物、幷大使貞泰等別貢物。又契丹大狗二口𤠔子二口在前進之。これ天朝に、異邦の小狗あるはじめなるべし。𤠔子も拂菻狗に類せる矮狗也。天寶遺事云、「天寶末云々、上夏日、嘗與親王碁。令賀懷智獨彈琵琶。貴妃立於局前觀之。上數子將輸。貴妃放康國猧子於坐側。猧子乃上局、局子亂。上大悦」といへり。これらによりて、猧子の小狗たる事を想像るべし。拂菻狗は、稍若水の本草綱目別集に、留青日札、肇慶府志、吳縣志を引て考證あり。若水云。「今之矮爬狗、卽古小狗之種。蓋與中國狗交而、漸高大者也。」馬鐙狗長四寸、可藏之馬鐙中、(留青日札摘要)番狗長毛痺脚身絕小高四五寸、爲哈叭狗、來自京師最貴。(肇慶府志)犬小者、有金獅閙獅。(吳縣志)今按ずるに、近來この間に畜る小狗は、絕小きもの稀なり。今の小狗に八種あり。そを鬻ぎて生活になすものの、俗呼を聞くに、所云八種は、つまり、ちやんぱげ、かぶり、小がしら、しかばね、りうきう、さつまたね、まじり、是也。つまりは、その毛つまりて、長からぬをいふ。ちやんぱげは、占城毛なるべし。かぶりは、頭毛長く垂れて、面上を掩ふをいふ。小がしらは、頭ちひさく、眼大なるもの、これを上品とす。しかばねは、鹿骨也。瘦てその脚長きもの、下品也。

し。毎歳三四月の間、雪の消果るに及びて、寅申の兩日の吉辰をえらみてこの事あり、土人は牛の角突と唱ふ。原是件の村々の城埠なる、十二權現の祭祀によりて、この戲を興行す、といへり。この鬪牛の光景は、本輯第七の卷に載たれば、こゝに具にせず、左の圖と合し見るべし。(原本此の圖を缺く)原圖は牧之の筆するもの、紙中甚闕して、且二三頁あり。そを縮圖して漏さず、裒めて欄紙一頁の中に盡せしは、畫者溪齋の筆力に成れり。上古には、陸奥はさら也、越後近江さへ夷俗に擬せられて、夷長を置せ給ひしよし、國史に見えたれば、この鬪牛の戲は、いとふたりたる風俗の、波及にこそあるならめ。昇平既に久うして、邊鄙も文物に乏からねば、今は東奧北越の盡處迄も、夷めきたる事はなきに、此鬪牛の戲の、偶越後に遺しは、古俗を知るの端崖ならずや。倘崔安潜をして世に在しめば、神遊して見まく欲するなるべし。(崔安潜好レ看二鬪牛一。見二五雜組人部三一)

因にいふ、ちぬは、(ちひさいぬの略辭なりと、閑田畊筆に見えたり)拂菻狗の種類なり。一名は哈叭狗、一名は馬鐙狗、又これを猧子といふ。唐高祖武德年中、高昌(國名)獻二狗。高六寸長尺、能曳レ馬銜レ燭、云出二拂菻一中國始有二拂菻狗一。(唐書摘要)天朝は則淳和天皇の天長元年、渤海國より、契丹(國名)の猻子を獻りぬ。(猻通作レ猧)類聚國史(殊俗部)

へり。唯牛のみにあらず。西域には、鬪羊槖駝さへあること右の如し。されば又瀛海勝覽云、「勿魯謨斯國、羊有四種。大尾綿羊重七八十斤、其尾闊一尺餘、拖地。重二十斤。狗尾羊如山羊、尾長二尺餘。鬪羊高二尺七八寸、前截毛長拖地。後半剪淨。頗似羊。角彎向前、上帶小鐵牌。好鬪、好事者養之、賭博爲戲。」（類函）かゝる事を鑿出さば、猶いくらもあらんを、大かた似たる事なれば、此に許多せず。又按ずるに、周末戰國の時、角觝の戲を爲れり。憶に秦晋北燕など、胡國に近かりし、諸侯、彼鬪牛に擬して、この戲を作れるならん。正字通角字註に、「角觝戲名。觝通作抵。六國時所造、兩兩相當、角力相抵。漢武元封二年、作角觝戲。史記李斯傳作觳抵。張騫傳作角氐」と見えたり。角は競也、觝は抵なり。唐山の俗語に、言葉戰を、角口といふ。その義これと同じ。角觝は力士牛頭を戴き、兩々相當り、相抵て勝負をなせり。その形勢宛鬪牛に似たり。是則今の角力の權輿なり。鬪牛は、本邦にもむかしより、越後州古志郡二十村に在り、人多くこれを知ざるのみ。吾友鈴木牧之は、越後魚沼郡、鹽澤の里長也。いぬる庚辰年春三月二十五日、予が爲にその地に赴きて、鬪牛を觀て、手づから圖說を爲りておこしたり。牧之云、二十村は地方の摠名也。鬪牛の地所は、定りたることな

れば、面會に異ならず。いと歡しく候ふ。といふに照文頷きて、又この外にも歡しき、一條の候也。そは彼濱路の事也とぞいひける。畢竟照文、又濱路がうへに就て、甚麽なる事を說出せる、そは次の卷に、解分るを聽ぬかし。

八犬傳第七輯卷之五に附記す。●鬪牛考并に小狗の略說

鬪牛は、原西羌の戲なり。西陽雜俎境異篇云、「雜兹國、元日鬪ニ牛馬駝一爲レ戲。七日觀ニ勝負一、占ニ一年羊馬減耗蕃息一也」といへり。是より先に、三國の時、魏の曹植が牛鬪の詩に「行ニ彼山頭一、欻起相搪突」といひしは、二牛の自然に鬪へるなり。事は太平廣記、又野客叢書(二十)に見えたり。又淵鑑類函(卷ノ四百三十五牛ノ部)に、仇池筆記を載て、「牛鬪、尾入ニ兩股間一」といへり。(鬪牛竪レ尾鬪、經ニ織者指摘一、見ニ五雜俎一)又昭代叢書(卷ノ二十六)竹枝詞の附錄土謠部、苗人を詠ずる詞に、「身被ニ木葉一揷ニ鷄頭一銅鼓家家賽ニ鬪牛一」といふ句あり。註に、「歲時召ニ親戚一撾ニ銅鼓一鬪ニ牛於野一、剖ニ其負者一、祭而食レ之」とい

その往方を知らず。妙眞悲嘆に堪ずして、共に死んとうち泣きしを、某文五兵衛と共に、さまざまに諫て、安房に將てかへりしかば、吾君ふかく憐み給ひて、厚く扶持せられにけり。有此而文吾兵衛は、妙眞に立別れて、武藏なる大塚に赴き、小文吾幷に四犬士の在處を索しに、街談巷說紛々たるのみ、存亡定かならざれば、これらのよしを報んとて、安房に到著してけるを、吾君又憐み給ひて、恩祿彌々淺からず。この折某に、究竟の夥兵七名を隷させ給ひて、なほ又ゝ大が迹を慕ひ、六犬士(犬塚、犬山、犬川、犬飼、犬田 犬江)、の往方を索ねて、將て參るべしと命せらる。文五兵衛妙眞も、共侶に起行て、親兵衛が存亡を索極め、五犬士の往方をも、索んと願ひまうせしに、吾君これを許し給はず、老人婦人の長旅は、寒暑に就て危かるべし。こゝにて老を養へ、と叮寧に仰られけり。かくて某は夥兵を將て、再瀧田を首途しつ、關の八州をうち巡る程に、その次の年の夏の比、文五兵衛は二月十五日にやありけん、安房に在て身まかりつ。妙眞は小廝依介に、姪の水澪とかいふものを妻して、犬江屋の名迹にしつゝ、その身は尙安房に在り、と聞えしが、爾后の事をしらずといふ。信乃はいよ〱駭嘆して、里見の殿の洪恩を感じ奉り、且親兵衛が存亡の、定かならぬをうち歎き、文五兵衛が死をいと惜みて又いふやう、今この圓居に莊介と、對面を得ざれども、この處を宿としつゝ、往方定かに聞ゆ




以作者少時所吟發句為賛
住持
谷同宿

伊勢に赴き、伊賀をうち踰、大和紀國を歴て、四國九州に推渡るに、是首に一ト月、彼首に半載、逗留しつゝ途を急がず。かゝる時にも某は、軍用の爲に貯藏たる、その財嚢に在るをもて、犬川を相伴ながら、盤纏には乏しからず。かくて東に立かへりて、この州に至りし時、料らずも、こゝに宿を討し由は、道德のいはれしことの如し。と報るに信乃は感嘆して、又照文にうち對ひ、蟇崎生も市川より、又俺們が迹を追ふて、諸國を巡り給ひし歟。何等の故に五七名の、夥兵を相具し給ひしぞや。と問へば照文、さればとよ、某は四稔已前、犬田生の歸るを俟て、犬江屋に逗留せし折、各々の安危を問んとて、武藏へ赴きたる、丶大道德も亦かへらず、折から暴風舵九郎と呼れたる惡棍が、妙眞を挑みしより事起りて、房八夫婦が義死、身代の事を覬著られ、市川の住ひ危ければ、某則文五兵衞と商量して、妙眞に說薦め、親兵衞と妙眞を、一ト間安房へ相伴んとて、犬江屋の小厮依介をしたがへ、文五兵衞も途までとて、送りゆくその黃昏時、彼舵九郎が埋伏して、夥計の惡棍を、多く駈催し、妙眞を奪んとて、群立塞て遮留しを、某并に文五兵衞、依介も血戰して、惡棍等を擊散す程に、妙眞の抱たる、犬江親兵衞を、舵九郎に俘にせられて、せん術もなき折から、一朶の叢雲天降て、舵九郎を空中に引登し、韓竹なんどを割るごとく、兩箇に裂て墜してけり。この折に親兵衞も、雲中に推登されて、遂に

を出なば、報よとて遣したる。是より先に某は、蜑崎生の遺し措たる、野装束を身に著て、遣る夥兵に、饗子を弔しつゝ、中途に出て暗號を俟しに、已前の夥兵走り來て、云々と報しかば、この人々をも從へて、木工作が宿所に赴き、捕手の頭人、八代の眼代、甘利兵衛堯元と名告つゝ、和殿と濱路を救ひし也。と縡詳に說示せば、信乃は耳を傾けて、感涙坐に進むを覺ず。やうやく貌を改めて、思ひきや二犬士は、ヽ大道德蜑崎生と共侶に、この禪院に在らんとは。某何等の洪福にて、免れがたき大阨を、救れしこそ不測なれ。抑四稔前つ秋、謀月七日の朝未明に、白井の討兵を殺脫つゝ、亂軍の中に相別れしより、某かうへは箇樣々々、と諸國を索巡るに、盤纏竭れば、その處に逗留し、文學武藝を人に誨て、その束脩を盤纏とせし事、いぬる月の下浣、當國富野穴山の間にて、泡雪奈四郎主從を、擊懲したる縡の顚末、この折木工作に和解られて、渠が宿所に誘引れ、長逗留になりにたる、縡の趣云々と。詳かにぞ告にける。さばれ木工作が濱路をもて、信乃に妻せんと欲せし事と、信乃が結髮の妻濱路が寃魂、生る濱路に賨緣て、夙念を告しよしは、有繋に恥ていはざりけり。當下道節又いふやう、某も亦荒茅山にて、各々と相別れて、犬川生と二人になりぬ。よりて三犬士に遭んとて、信濃路より美濃尾張に到りしに、犬山はわが先祖の、苗字の地なるをもて、且く其處に杖を留め、それより

には緋の衣を襲しよしも、その衣共は今もなほ、木工作が宿所なる、納戸の葛籠に藏あるよしもしられ、又木工作は四箇日前に、奈四郎に撃れし事、並に木工作が亡骸は　昨宵更闌る比、奈四郎が奴隷、媼内轎内して、四六城が宿所の背門の邊なる、雪中に瘞置き、和殿の刀に、鳥獸などの血を塗らして、木工作を殺せしものは、和殿也、と誣んと計較、武田家の眼代、甘利兵衛堯元に訴て、搦捕せんと計りし事、又和殿を欺きて、泥庫中に捕籠、濱路は和殿と密通の罪ありと誣て、宿遊に賣んといひし事まで、渠等が密談によりて發覺れたり。有此而その嚥昏に、貧道も犬山生もかへりにければ、念戍は俟著て、けふしもかゝる事の候ひし。その故は如此如此、と有りし事共を報知するに、記憶よければ一事も漏さず、その折親しく聞るが如し。つら／＼と聞果て、且驚き且歡びたる、心の中を察し給へ。といふに道節語を續て、當時某思ふやう、犬塚生の寃屈を、國守に訴出るとも、奸臣蠹吏これを拒みて、守に達せずはその甲斐あらじ。方便をもつて犬塚を、救ふに不如、と尋思をするに、蟹崎生の遺したる、夥兵五六名は寺に在り、日々に近郷を徘徊しつゝ、きのふも暮て還りにき。そが中に、心利たる夥兵三四名に、計策を説示して、夜中に猿石なる、木工作が宿所のほとりに遣し、彼亡骸を埋るや、否の事を撈り聞しめ、今朝は又、彼夏引が、躑躅が崎へ赴きて、眼代甘利堯元に、訴んとて宿所

の愁なかるべし、と商量既に定りければ、是より二犬士交代して今日に至れる也。されば今玆は犬川生の、旅行の年番なりしかば、武藏下總、常陸陸奥出羽、越後信濃の七箇國をうち巡らんとて、如月の比首途せしが、いまだ歸來ざる也。かくてきのふも例の如く、貧道は近村へ劵緣に出にき。犬山生も晝は出て、日暮ざれば寺にかへらず。蟇崎生は隔昨日より、郡内に赴きたれば、留守は無我六といふ老僕と、念戌といふ沙彌のみをり。浩處に、齡四十前後なる、一箇の武士、三十あまりなる女人と、一箇の奴隷を將て、當院に詣來つ、無我六に院中の、無人の趣を訊問ふて、住持のかへるを俟んとて、無我六に粒銀、一顆を取しつ、女人と共に裡面に入りて、褊室にをり、居ること久くして、晡時に、辭せずしてかへり去れり。爾るに念戌は、足痛の愁あるにより、寮に籠りて徒然に堪ず、彼褊室の板壁を隔し、緣頰に曝背して、聞くとはなしに件の男女の、密談を竊聞せしに、武士は國守の家臣なる、泡雪奈四郎と呼るゝものにて、女人は猿石の村長、四六城木工作が後妻にて、その名を夏引といふ事も、奈四郎と密通したる、情由も定かにしられたり。加以いぬる頃より、和殿は木工作許、逗留の緯の趣、又木工作が、女兒濱路は拾子にて、二三才なりし比、鷲などにや攫れけん、黑驪中山のほとりなる、樹杈に挾れてありし時、七寶を揚箔にして、篠龍膽の服章ある、袖長き袿衣を被て、下

て、去々歳の秋信濃路より、この甲斐が峯に杖を曳て、且く當院に同宿せしに、住持の老僧遷化して、法脈を嗣ものなかりしかば、已ことを得ずそが臨終の、頼に任して寺を領り、思はずこゝに三稔を歴たり。さればとてこの處に、長く住するわれならねども、遭と不遭は、天なり時也。縱日本國中を、生涯幾遍うち巡るとも、時至らずは遭がたからん。又この處に留るとも緣竭ずはあふことあらん、と思ひにければ他州を討めず、或は三里、或は五里、日毎に彼此を修行して、市中の旅客に心をつけしに、果して去歳の春に至りて、蜑崎生が、夥兵六七名を、旅若黨に打扮して、この地に來つるに、直と遭ぬ。よりて當院に作ふて、貧道の志を告しかば、蜑崎生もこの議を喜して、又他州に赴かず。この年の夏又圖らずも、犬山犬川の二犬士の、こゝに宿りを乞ひし夜に、心ともなく名告あひけり。蜑崎生も對面せし、歡びいふべうもあらず。是よりして二犬士は、蜑崎生と共侶に、當院に寓居せり。爾後二犬士のいふやう、三人鼻を衝合して、こゝにをらんも亦益なし。かゝれば荘助と道節は、或は一年或は半歳、迭代に遠方なる、國々をうち巡りて、犬塚、犬田、犬飼等、并に犬江親兵衛の、存亡を索極むべし。かくて遺れる一犬士は、蜑崎生と部をして、近郡近國を遊歷せん。かくて件の四犬士に、環會るものあらんに、これを當院に作はゞ、是おのづから會所あり。一人に遭ふて一人を失ふ、離散

入さして、從者を勞ひつゝ、もたし來ぬる兩刀を、そが儘に信乃にかへして、誘とて軈て案內をしつゝ、住持の便室に趣く程に、こは珍しや。といひかけて、出迎る老僧あり。是則別人ならず、金碗入道、丶大なり。只是のみにあらずして、蜑崎十一郎照文も、目今遠方よりや還りけん、行裝の儘にして、丶大と共に立出て、みな信乃に對面す。各々別後の情を演て、その恙なきを祝したる、歡び氣色に顯れしを、信乃は夢中の心地して、何事とも思ひわかず、只再生の恩義を謝して、且不慮拯れたる、緣由を詰れば、丶大法師先いふやう、忘れも得せぬ四稔已前、陸月廿四日の曉がたに、和殿は犬飼犬田と倶に、武藏の舊里に還り給ひし折、約束の日に迨りても、小文吾は歸來ず。この故に蜑崎生も、文五兵衞も妙眞も、只顧に俟不樂て、商量果しなかりしかば、貧道大塚に赴きて、そが安否を問んとて、渫月二日の黃昏に、行德より便船して、次の日彼地に到りしに、その前日額藏の莊助を、和殿と犬飼犬田の三友が、拯ひとりたることの趣、且戶田川の上にて、大石家の加勢の頭人、仁田山晉五が鋭兵に、和殿も犬川莊助も、撃れたるよしの聞えしかば、梟たる首級を見てけるに、假首なれば心おちゐて、よしを行德市川なる、人々に報る暇もなく、只顧和殿等に遭んとて、下總に赴き常陸に赴き、それより下野、奧の白川、越路の盡處まで經歷たれども、竟に亦和殿等に得遭はず、兩稔近く行脚し

泡雪奈四郎が積惡の一五一十を、詳に說示しつゝ、又いふやう、夏引出來介等は、大辟不赦の罪人なれば、かくの如くに搦捕たり。この餘の奴婢杣人等は、すべて罪なしといへども、穿鑿落擧せん日まで、百姓們はかはる〴〵に、日夜これを戍るべし。又信乃濱路は更也、彼辨者の在處を知らば、速にまうし出よ。木工作が亡骸は、親族これを葬らんと請はゞ、宜くその意に任せよ。と言嚴に告掟て、夥兵等をいそがしつ、夏引出來介等を追立さして、躑躅が崎へ還る程に、この日もはやく暮れしかば、且夏引出來介等を、緊く獄舍に繫して、天も明ばこれらのよしを、主君に聞えあげんとて、その准備をぞしたりける。案下某生再說、犬塚信乃戍孝は、嚮に夏引に欺かれて、泥庫中に捕籠られしとき、武田家の捕手の頭人、八代の新眼代、甘利兵衞堯元と問答して、寃のよしをいひ釋んとて、庫の網戶の透間より、初て面を對せしに、彼堯元と名告れるものは、その人にあらずして、犬山道節なりしかば、一トたびはうち驚き、又一トたびは訝りしを、氣色に猜してそのよしをいはず、なほ堯元と對面の趣にもてなして、道節がいへるまに〳〵、腰刀を夥兵に遞與して、濱路と俱に相倡れ、四六城が宿所を出しより、道節は只管に、簸子をいそがして、飛ぶがごとくに走りしかば、大約一晌ばかりにして、石禾の鄕の片邊なる、指月院にぞ著にける。登時犬山道節は、濱路を簸子に乘したる儘に、奧房に昇

背門なる、雪の中に瘞んや。この兩條もて推すときは、汝等信乃に怨ありて、寃枉に陷さん、と伎倆る事は知られたり。こは必色慾にて、木工作を害せしもの、夏引出來介にぞあらんずらん。目今緊しく打懲らさずは、いかにしてその實を吐くべき。とく〳〵鞫問せられよ。と姦邪の膽を拉ぐ、理非明亮の讞斷に、夥兵等はこゝろを得て、十手を手に〳〵閃かして、夏引出來介が背の皮肉の、傷るゝまでに打懲らす、苦痛に堪ぬ出來介は、昨宵夏引に賴れたる、綷の趣を首として、その身は豫てあるじの女兒、濱路に懸想したれども、竟にその本意を得遂ず。爾るに木工作が、濱路を信乃に妻せん、と欲せしを娟く思ひて、輙く夏引に相譚れ、信乃を誣たる尾りまで、具に首伏してければ、夏引は脫るゝに路なくて、悪事を遺なく首伏す。されば泡雪奈四郎と、密通の綷の趣、濱路と信乃を鬱悒く思ひて、追失んと計較し事、又奈四郎が木工作を、撃殺したる綷の顚末、きのふ石禾の指月院にて、奈四郎と密會せし折、渠が謀に任して、深夜に木工作が亡骸を、背門なる雪の中に埋させし事、又信乃が短刀をもて、鷄を刺殺し、その刃に血を塗らして、信乃を木工作が仇とし誣たる事、且信乃を欺きて、泥庫の中に捕籠たる、始より終まで、既に露顯に及びしかば、堯元は又家内なる、奴婢杣人等と、猿石村なる故老の百姓、五六名を召聚へて、夏引出來介が首伏の綷の趣、信乃濱路を奪去たる、癖者の事、




鼠璞非璞兎絲非絲其名同而其物異也
慎之慎之出於爾者返於爾也
信乃

に扶乗し、信乃が短刀行囊はさら也、濱路が木工作に拾れし時被たりといふ、孤身衣の衣さへ
に、皆悉出さして、夥兵にもたして遽しく、僉もろ共に動搖々々と、出て行候ひき。夏引は
所要の筋あれば、宿所に留めしよしさへいへれば、小人疑ふよしもなく、信乃と濱路を走らし
たる、越度は又今さらに、おそれ入て候へども、據なき趣を、御賢察なし下され、只御憐愍お
ん慈悲を、願ひまつり候。と悲み告る緣由を、堯元つく〴〵とうち聞て、察するにその者共は、
信乃が寃をよく知りたる、俠者などなるべき歟、然らずは信乃と交厚き、友人にもやあらんず
らん。まづ木工作が亡骸を、檢覽しつべし、案内をせよ。といふに夏引は戰々兢々、出來介と
共侶に、隔の紙戸を推開けば、堯元は進み寄て、瘡口を得と見つ、又亡骸を穿出せしといふ、
泥庫の背に到りて、其處を見てうち頷き、舊の座席に立かへりて、眼を睜り聲高やかに、夥兵
達この癖者等を、とく〳〵搦捕ずや。と烈しき下知に夥兵等は、承つ。と應も果ず、走り蒐て
出來介と、夏引が肘を揉曲げ揉揚げ、押へて繩を被しかば、兩人齊一驚き騷ぎて、吾儕們犯せる
罪あらず。といはせもあへず堯元は、礑と睨て聲を苛立、大膽不敵の毒婦主從、汝等何でふ罪
なからんや。木工作が身の瘡は、突瘡に似たれども、鳥銃瘡に疑ひなし。譬は信乃が木工作に
怨ありて害するとも、人の得しらぬ山陰などへ、その亡骸を棄ずして、消ると知りつゝ宿所の

白徒が宿に居つゝ、野狐に魅されし歟。堯元さまが幾人ありて、兩三度來給ふべき。朽をしや鍵を預けし、賴甲斐なく阿容々々と、肝要なる信乃を走らしては、堯元さまへいひわきなし。とく追留て引もて來よ。逃して事の濟むべき歟。と聲戰して敦圍く背後に、夥兵共侶立在む堯元、怒れる聲をふり立て、夏引しづまれ。胡論の爭ひ、われみづから糾明せん。夥兵們は、この兩人を、捕な脫しそ。と下知しつゝ、はや上座に進み登りて、床几に尻をうち掛れば、夥兵は夏引出來介を、推捕卷てぞ戍りける。登時出來介は、おそる〳〵進み出、堯元にうち對ひて、額づきたる頭を擡、おそれながら申あげ候はん。今より半時ばかりさきつ比、甘利兵衛堯元と、御姓名を告れる武士、夥兵四五名と、一挺の箯子を吊し來て、木工作が死骸を展檢し、又信乃が血刀を引拔見て、木工作が身中の痍は、鳥銃傷にして、金瘡にあらず。又この刃に塗れし鮮血は、些も乾かで潤ひあり。よりて思ふに、四五日已前に撃れしといふ、木工作が橫死の時日と相違あり。かゝれば木工作を殺せしものを、信乃也とは定めがたし。さばれ夏引等が、訴まうせしよしもあれば、搦捕ん事勿論也。泥庫の戸を開くべし、と仰られて候へば、假討手とは心もつかで、軈て雜庫の戸を開きしかば、姑く信乃と問答して、帶たる刀を夥兵に受とらせ、信乃には繩を被けずして、夥兵們にうち戍らせ、又濱路にも穿鑿の筋ありとて、准備の箯子

第七十一回

寃尸を檢して堯元姦を知る
禪院に寓して舊識再會す

されば又木工作が宿所には、昨宵あるじを索に出たる、小斷杣人等も、この時やうやく歸來て、婢共ともろ侶に、甘利堯元と信乃が問答の趣を、竊聞したるものはあれども、恠れて一人もその處へ出す、出來介一箇困じ果て、やうやくに出し遣りしかば、あな嬉しや、と思ふものから、妻せんといはれたる、濱路さへ將てゆかれしが、心もとなさ限りもあらねど、命に恙やはある、と思ひかへして物とり斂め、夏引が還るを俟程に、且くして外面に、人の足音動搖めくを、と見れば人に先だちて、夏引は走りかへり來つ、やよ出來介よ。堯元さまの、訴を聽うけ給ひて、今はや彼處へ來ましたり。僉共侶にとく出て、とく迎へまつらずや。といふに出來介訝りて、そはこゝろ得ぬ事になん。堯元さまは先の程、夥兵們四五名と、別に徙子を吊し給ひて、みづから來させ給ひしかば、出迎へ下知を受て、信乃を搦捕らせまゐらせしに、又娘さまをば、彼乘物にうち乘し給ひ、信乃が兩刀行囊皮、娘さまの幼稚き時、被させ給ひしといふ、搊縮の衣さへに、みな出さしてもてゆき給ひき。勿論おん身は所要あれば、宿所に留措れし、と仰られて候ひしに、又程もなく彼人さまの、來させ給ふは故もやある。と問ば夏引は焦燥て、この

いふ、搨箔の衣あらん。濱路に問ふて出し來よ。この他、信乃が行嚢も、遺なく夥兵們にわたせかし。といふに出來介こころ得て、蟲曝の折見ておける、納戸の葛籠を搔撈りて、件の衣をとり出し、又褊室に赴きて、信乃が行嚢をも取もて來つ、これ彼共に夥兵に遞與して、濱路が臥たる身邊に赴き、縡如此々々と報知して、扶起して堯元が、目前へ將て來れば、堯元これを憐みて、准備の箯子にぞ乘せにける。されば濱路は恩高き、養父の枉死のかなしきに、おほえなき身を罪人と、いひ立られつ囚れて、何となる海の浦ならで、胸の風波立騷ぎ、翅しをる磯衛、籠になく音ぞ哀れなる。當下甘利堯元は、窻の日影を瞻仰て、時もや移る、と出來介を、又遽しく呼つけて、出來介慥に承れ。木工作が身の痍は、金瘡にあらずして、鳥銃傷に疑ひなし。加以犬塚信乃が、短刀の血も四五日已前に塗れたるものにあらず。これらのよしをあるじの親族、村の故老と奴婢等にも、得と傳へてこゝろを得させよ。誘ゆくべし。と身を起せば、夥兵は信乃を捕卷て、出る門邊に擡起す、濱路を乘せし箯夫に、先へ舁して主從數人、群立いそぐ鳥自物、飛ぶが似くに走去りけり。

るじ木工作を殘害の緈の趣、後家夏引等が愁訴によつて、當郡の眼代、甘利兵衛堯元が向ふたり。とく〳〵出て對面せよ。と高やかに呼るを、信乃は聞つゝ些も騷がず、しづかに階子を下立て、某犯せる罪あらず。然るをあるじの仇といふ、家族の誣言、是非に及ばず。只賢察を願ふのみ。と應て立在む銅網の透より甘利堯元を、うち見て猛に臆しけん、うち驚きたる面色を、堯元さこそ、と透し見て、出來介庫の鎖を開け、とく〳〵せよ。と焦燥ば、阿と應つゝ鍵とり出して、開く戸口に夥兵共、十手を揺て捕卷たり。登時信乃は庫より出て、堯元にうち對ひ、目今既に陳ずるごとく、某いかでか木工作を、殺害したるものならんや。但その緈の趣を、召問るゝまでならば、何處までも牽給へ。まうし解すぢ夥あり。かくても縄を被けらるゝや。といふに堯元頷きて、そは勿論の事也かし。しかはあれども罪の有無、事の虚實の定かならねば、縲絏は用捨せん、その腰刀を遞與されよ。こは只武士の情にこそ。といはれて信乃は感謝に堪ず、村雨の名刀を、そが儘拿てさし寄するを、一箇の夥兵受取けり。既にして堯元は、又出來介を呼び近づけて、木工作が女兒濱路とやらんも、信乃が事に拘づらひて、穿鑿すべきものなれば、召捕て將てゆくべし。渠は多病のよし聞えて、且少女子の事にしあれば、即輿子を吊し來つ、又是守のおん慈悲也。又濱路が仆かりし比、木工作に拾れたる、その折に被たりと

額を地上に搨つけて、小人即木工作が恩顧の從僕、出來介と呼れたるものにこそ候へ。といふに堯元頷きて、出來介とやらん承れ。嚮に木工作が後家、夏引が訴まうすにより、則、木工作が横死の尸を展檢し、且犯人犬塚信乃戍孝、幷に信乃と密通の聞えある、濱路を搦捕ん爲、甘利兵衛向ふたり。但し夏引は故あつて、且く予が宅に留めたり。まづよくこの義をこゝろ得て、案内をせよ。といそがせば、出來介はおそる〳〵、承りぬと應して、先に立つゝ木工作が、死骸のほとりに請ずれば、堯元うち見て眉を顰め、この瘡口に疑ひあれども、そは後の沙汰に及ん。やをれ出來介、彼血刀をとく見せよ。といふに出來介編室なる、桐一文字の短刀を、搔拿もて來てさし出せば、堯元受とり拔はなちて、つく〴〵と見て冷笑ひ、佗と疾視て聲高やかに、やをれ出來介これを見ずや。木工作が撃れしは、四五日已前の事といへるに、刃に塗れしこの鮮血は、些も乾かず潤ひあり。これ彼共に訝しきを、こも又後の沙汰に及ん。さばれこの短刀は、この儘に召措くべし。といひつゝ軈て鞘に斂めて、夥兵に遞與して左右を見かへり、かゝれば今さら信乃をもて、犯人とは定めがたし。なれども亦夏引等が、訴まうせしよしあれば、搦捕んこと勿論也。とく泥庫に案内をせよ。といひつゝやをら床几をはなちて、庫の戸口に赴きて、銅網の戸の間より、矮樓を見あげて聲をふり立、武藏の旅人犬塚信乃、あ

得がたし。と敦圉ば、褊室より出て來る、夏引は聞つゝ冷笑ひて、不敵者と知りながら、論は無益ぞ、出來介置ね。今さらに證据なくて、彼奴を指て仇といはんや。吾儕疑ふよしあれば、竊に彼奴が短刀を、引拔て見てけるに、刃に塗れし鮮血は顯然、かばかり正しき徴はなし。吾儕は今より眼代さまの、おん宿所へ走りゆきて、討兵を請ふて彼奴を捕ん。鍵はそなたに預るぞ。餘の小廝等が歸來るとも、漫になる人に任しそ。と辭急しく說示しつゝ、腰を捞りて泥庫の、鍵を遞與て遽しく、裳褰げて、春ならぬ、躑躅が崎へぞ走去りける。信乃は夏引が云々、といひけるよしをうち聞て、原來這奴等が謀し合して、われを寃に陷さん爲に、何の程にかわが短刀に、衂りて如右はいふならん。わが命運の微くて、いと淺はかなる女子小人に、欺れつゝこの庫へ、捕籠られし事なれば、よしや渠等と爭ふとも、鄙語にいふ川向ひの、闘諍に似てその詮なし。遮莫武田家の、捕手の兵走向はゞ、その折にこそ論辯して、わがこの寃をいひ釋べけれ、と尋思をしつゝ諍はず、再矮樓にうち登りて、武田家の眼代を、俟こと大約一トㆍ晌ばかり、只憤胸に充て、恨のやるせなかりけり。然程に、八代一郡の新眼代、甘利兵衛堯元は、肚甲に野裝束して、錫粉鞘なる兩刀を跨へ、究竟の夥兵四五名と、雜兵二十名に、從者を吊せしを、前後に從へ、四六城が宿所の門邊より、者共出よ。と呼立れば、小廝出來介走り出、

て、出るを遲し、と俟著たる、夏引は透さず庫の戸を、楚と引閉鎖を固して、扠出來介に如此如此。と事情を囁き示しつ、ひとり褊室に赴きて、信乃が刀を索るに、村雨の一刀は、渠姑くも身を放さず、この時も腰に帶たれど、桐一文字の短刀は、行嚢と共に褊室なる、床の間にありしかば、竊に拿あげ背門に出て、朝餌を拾ふ鷄を、引捕つゝ彼刀もて、思ひの隨に刺殺せば、鮮血は刃に塗れたり。人もや見る、と慌しく、血刀を鞘に斂めて、又鷄の亡骸を、手ばやく溷へ投棄て、持る刀の璫もて、泥の底へ推隱し、再褊室へ赴きて、件の刀を舊のごとく、床の間にさし置て、一ト息吻とつきにけり。然程に、信乃は泥庫の矮樓にをり、ひとり出來介を俟わびて、更に階子を下り來つ、出んとするに戸は開かず。見れば鎖を固したり。こはいかに、と訝りて、やよ内方よ、出來介よ、こゝ開ずや。と呼れば、出來介呵々と冷笑ひて、この白物何をかいふ。汝は己等が親方の、親切に壻にせん、といはれしを聽ずして、虚辭誼しつゝ底意では、はやく家督を奪んとて歟、竊に親方を殺したる、その亡骸の顯れたれば、守へ訴奉りて、立地に怨を復さん。さばれその間にも、逃亡することあらんとて、新後家さまの計策もて、庫の中へ捕籠たれば、終に漏さぬ天の網、覺期をせよ。と罵れば、信乃は驚き且怒りて、理無盡なる小厮が誣言、何をもてあるじの枉死を、わが所爲也、と定かにいふや。こゝろ

入れて、眼代さまへこれらのよしを、訴まつらん、とくせよ。といふに出來介立あがりて、そはこゝろ得て候へども、甲乙もまだ歸らねば、この身ひとつでせん術あらず。誰手傳ふて給はらずや。といふに信乃も進みよりて、われ手傳ふて得させんず、足方を揚よ。と二人して、吊もて便室に扛入るれば、泣沈みてぞちからなき、濱路は兩箇の婢共に、扶掖れて亡骸の、後に跟つつやうやくに、母屋に入れど又さらに、發る痞の苦しげなるを、人手届かでいかにぞ、とこと問ふものもなかりけり。當下夏引は、信乃出來介と、額を合して相譚ふやう、吾儕は今より躑躅が崎なる、眼代さまへ赴きて、所天の横死を訴まうさん。先々の眼代は、近曾身まかり給ひしかば、甘利兵衛堯元とか呼れ給ふ、新眼代を隷られたり。まだおん目には被らねど、彼處へゆかば宿所も知れん。扠訴まうしなば、展檢の爲甘利さまの、時を移さず來まさんに、茶碗菓子皿その餘の物も、准備せでは不便也。客前の家具雜具は、雜庫の矮樓に在り。憚ながら犬塚ぬしも、出來介と手繰して、とり卸し給へかし。と賴めば信乃は一議に及ばず。そはいと易き事になん。さらば案内をせられよ。といひつゝ軈て身を起せば、出來介は先に立て、信乃共侶に庫の戸を、開つゝいそしく矮樓に登るを、夏引は急に聲ふり立て、出來介とく來よ。倘別に、分付ることもあり、獨とく來よ、やよ喃。と呼返されて出來介は、又遽しく階子を下り

叉き、なほ且くは嗟嘆に堪ず、愀然として左右を見かへり、出來介の推量は、そのよしあるに似たれども、あるじの仇がいかにして、死骸をこゝに埋んや。おもふに人の夜に紛れて、他所よりもて來て捐たる歟、これも亦知るべからず。そはとまれかくもあれ、あるじの父はわが母の、親に仕へし忠義の老黨、主の爲に追腹切て、後の美譚となりにたる、その子も理義に怜悧くて、善に與し惡を疎めば、犯せる罪障なからんに、過世いかなる業報にて、かくは非命に終りけん。そはその壯なりし時、飽まで耽りし殺生の、因果やうやく廻り來て、今この歎きを遺せるもの歟。むかし唐の孫眞人は、生を起し死を回す、仁術稀世の名醫なれども、千金方を著して、水蛭、蝱虫、鼠婦の類、多く活る物をもて、藥劑に加えたる、殺生の報ひにより、齢は九十に止るのみ、仙たることを得ざりしとぞ。現天道は生を好して、殺を憎ませ給ふこと、是日の神の御こゝろ也。木工作叟が非命の死も、彼殺生の報ひといはずは、何をもて叉善を勸ん。いと惜むべしをしむべし。と繰返しつゝうち歎けば、出來介これを聞あへず、そは宣ふことながら、物の因果の有無はしらねど、人を殺してはるゞゝと、死骸を贈りてその家の、背門へ瘞る馬鹿ものあらんや。燈臺還て下暗しといふ、常言もあるものを、仇はこゝらに逍遙て、在んもいまだ知るべからず。といふを夏引は推禁めて、出來介漫にものをないひそ。且亡骸をとり

より、大く南風の吹隨に、背門の邊に氷れる雪も、三が二ッは消にけり。既にして天は明て、烏の聲に覺されたる、出來介は淨手をせんとて、背門のかたに赴きて、と見れば雜庫の後なる、活大根の穴の邊に、斑消たる雪の中より、死人の足の顯れたれば、こはいかに、と驚騒ぎて、事あり〳〵。と叫ぶになん、そは何事ぞ。と倶に騒ぐ、婢共に先立て信乃はいちはやく走り來つ。夏引濱路も忙惑ひて、齊一背門に出て見るに、現疑ふべくもあらぬ、活大根の穴の中より、死人の足の顯れたれば、いよ〳〵駭き且訝りて、出來介に雪を搔しつ、信乃も亦手傳ふて、穿出してこれを見るに、あるじ木工作が亡骸に、紛ふべくもあらざれば、周章悲愁限りなき、闔宅の騒動沸が如く、濱路は父の亡骸に、携つき伏沈みて、聲を惜まず號哭くを、慰めかねし婢共も、與に涙にかきくれたり。登時夏引は目を拭ひて、扠も〳〵淺ましや、大人は何ものにか殺されて、ここらに埋まれ給ひしを、神ならぬ身のしらずして、遠く索し悔しさよ。讐敵を誰としるよしの、心當りはあらずや。と虛泣しつゝかき口說ば、出來介さこそ。と歎息して、察するに家公の讐敵は、遠方の人なるべからず、四鄰比屋歟、倘らずは、家の內かも測りがたし。阿家さまさのみな泣給ひそ。終には仇を納攀出して、怨を復さでやは已ん。且く俟せ給ひね。といひつゝ腕を扼りて、信乃を見かへり疾視たる、氣色に信乃は心もつかで、頭を傾け手を

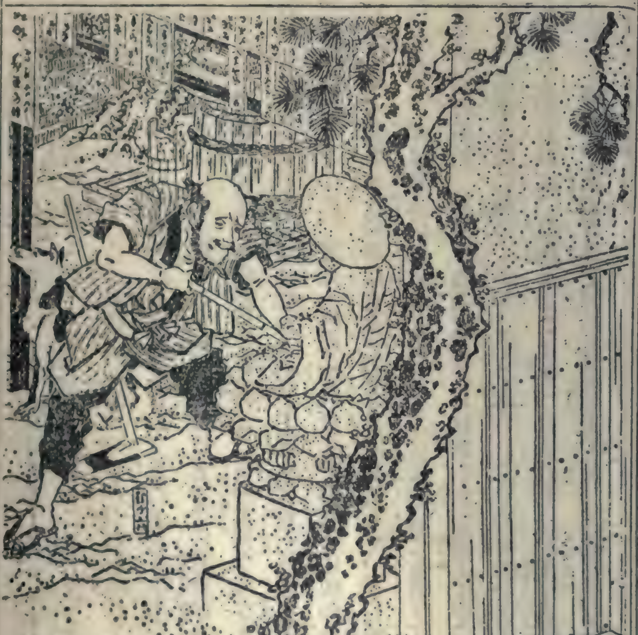
へ赴きて、家公の安危存亡を、賣卜者に占問ひしに、劍難の卦の顯れたれば、ちか比宿に逗留などする、客の所行にやあらん、といひにき。かゝれば信乃が所爲なるべし。渠は濱路を妻せん、といはれしを待かねて、はやく家督を奪んとて、さるおそろしき事をしたる歟、是も亦測がたかり。しかはあれども證なければ、漫に人には告かたし。これをそなたの胸に祕て、事の證据を見出しなば、吾儕を資けて家公の仇を、逃さぬ手配り肝要ならん。よく働きて大功あらば、濱路をそなたに妻して、四六城の家督にすべければ、虛々となし給ひそ。といはれて歡ぶ出來介は、異議に及はず諾なひて、仰うけばり候ひぬ。現推量し給ふごとく、家相續を待かねたる、信乃が所行にぞあらんずらん。今より彼奴に目をつけて、證据を見出し候はん。憑しく思し召れよ。といと精悍しく慰めけり。かくてその夜は更闌て、草木も眠る丑三比、奈四郎が奴隸、媼内癩内は、彼亡骸を舁もて來て、四六城が宿所の背門を推すに、夏引が亥中の左側に、鎖を外し措たれば、音もせで開きたり。されば件の惡僕等は、泥庫の後の方に、宿雪のいと多且活大根の爲にやあらん、穿かけたる穴あるを見て、こは究竟。とその穴へ、木工作が死骸を滾して、上には壤を少許被け、又その上を雪もて埋めて、密と出るとき背門の戶を、舊のごとくに引寄して、躑躅が崎へ還りしを、知るもの絕てなかりける。かゝりし程にこの曉がた

性、記憶に捷れしかば、後々までも竟に忘れず、院主のかへるを俟著て、縡云々と報にけり。こは只天のいはするなるべし。嗚呼奸賊の人を謀るや、奪ふにその智の長たるも、敗るゝ事を慮らず。この故に、鬼神を欺く邪計あるも、敗れに至て甚愚也。彼楊震が四知の誡、思ふべし。亦怕るべし。然程に、夏引は、指月院を走り出たる、途にて奈四郎主従と、立別れ宿所に還るに、既にして日は暮けり。扨濱路等にうち對ひて、けふは彼躑躅が崎なる、賣卜者許赴きて、大人のうへを占問しに、生死は定かならねども、兩三日にはおのづから、音耗のあらんといひにき。これに聊慰めて石禾の八幡宮に參詣し奉り、この他、通途の神社佛閣へ、詣て祈願をかけしかば、思ひしよりなほ時も移りぬ。什麼幾里の路なりけん、疲勞果て侍るは。といふに濱路は頃日の、憂苦を聊慰めて、婢共を呼立つゝ、母の爲に洗足の、湯を汲し夜食を薦めて、大かたならず勦りけり。登時夏引は肚裏に、ひとりつら〳〵思ふやう、奈四郎ぬしの示されし、計策よしといへども、一人わが身の資なくば、よろづのうへに不便ならん。出來介はちかき比より、濱路に心ありけなれば、竊に渠を引入れて、資にせめ、と尋思をするに、僕共は今宵も亦、木工作を索に出しに、出來介は風ひきたりとて、獨宿所に在しかば、折こそよけれ、と歡びて、人なき間を窺ひつゝ、出來介に乖くやう、吾儕けふははる〴〵と、躑躅が崎

來て、二雙の草履を推直すを、夏引は手を抗うち戴きて、いそしく足に引穿れば、奈四郎は裹物を、そが儘に又媼内に、もたして三人悠々、と寺門を出たる大膽不敵、飽まで謀り課せたる、伎倆を悟らぬ道人は、この時既に掃除をしはてゝ、奈四郎等に茶を薦んとて、ひとり庖湢に退きて、地炕に折燒く蒼柴の、燃ぬ生木を吹く折なれば、渠等が出てゆきしをしらず。やうやく茶釜の沸揚にければ、初の茶碗を取らんとて、褊室へゆきて見れば、奈四郎等は居ざりけり。こはいかに。と訝りて、又外面へ走り出て、彼從者をしば〳〵呼ぶに、絶て應のなかりしかば、原來院主を俟わびて、彼主從はかへり給ひけん、宿所も名をも問ざりければ、院主に何とか報まうさん、脱落にけり。とひとりごちて、かくても深く疑はず。素より愚直の老人なれば、欺れしをなほ曉得らねど、この餘、念戌と呼れたる、年十四五なる小僧あり。渠は住持に從ひて、日毎に修行に出たれども、足の皸を踏腫して、起居もやうやく不自由なれば、且く修行に出ること稱はず、きのふより籠居たるが、件の褊室なる板壁の背は、住持の便室より厠へかよふ、長やかなる緣頰にて、且正南をうけたれば、終日日光のさし入れて、いと暖なる處也。こゝをもて念戌は、奈四郎等が來ざりし前より、彼緣頰に出てをり、曝背に心地よければ、繻半の虱を拾ひつゝ、聞くとはなしに奈四郎と、夏引が惡事の密談を、一個も漏さず聞とりしに、その

濱路ならんと猜しつゝ、軈て濱路と名づけしとぞ。いぬる夜信乃が亡妻の、濱路とやらんが事に就て、この事も亦なき人の、物がたりにて人も知りぬ。噫漫也、興に乘して、益なき言に時もや移らん。扠もおん身はいかにして、この寺には住持もをらず、人影のなきをよく知りて、商量攸にし給ひたる。これも奇妙に侍るかし。といへば奈四郎うち笑みて、こゝなる和尙は日毎日毎に、修行に出て暮ねばかへらず。晝は人影のなきをもて、世の人遂に綽號して、晝無住院といふよしを、豫て聞たることあれば、且試に來て見しに、世の風聲に違ふことなく、鹿谷なる俊寛の、別莊よりもいよ〳〵妙也。既に所要の果たれば、寒も一トしほ堪難し。然らば藥を用ひんとて、とり寄措たる裹物を、披けば軈て顯れ出る、木地臘の吸筒小重筥、鷄卵烹魚、燒鳥を、殺に仰飮る茶碗酒、忽地腹に滿汐の、さしつ酬つ餘念なき、牝牡無慙の辭者等が、素より佛地を憚らねば、寒風袪て、春心搖動き、密談果てもまだいなず、又何事をなすやらん、霎時が程は音もせず、鼻息のみぞ暴かりける。既にこの日も傾きて、晡時になりしかば、奈四郎は誘ゆかんとて、夏引が裹む吸筒と、重筥を引提て、立出るとき四下を見るに、彼道人は何處ゆきけん、そこらに人影あらざれば、首尾いとよし。と舌を吐て、窃に夏引をいそがしつゝはや外面へ赴きつ、媼内を招寄するに、既に日影を追失ふて、俟不樂たりし媼内は、遽しく走り

子共などの、總角なるを養とりて、そなたが家事を政たんに、われ亦木工作と山獵の、友たる義をもて外ながら、後見をすと倡て、親しく交加するに至らば、木工作が遺財、山林の利潤も、われとそなたの物なるべし。この計策よからずや。とわれを忘れて誇良に、辭急しく說示せば、夏引は只顧感嘆して、吁おん身は智慧無量なる、世に憑しき才子ぞかし。濱路は元來拾子なれば、縱遊女に售るとても、障りをいはん人はなし。この計策妙也。としば〳〵譽て已ざれば、奈四郎然こそ。と頰髯掀て、現濱路は木工作が、實の女兒ならざるよしを、人の噂に聞しかど、まだ具なる事をしらず。實の親は知れずや。と問へば夏引は頷きて、原來まだよく知らでやをはする。濱路は二三才の比、鷲などにや攫れけん、黑驪と中山の山間なる、樹の杈に挾れて、うち泣て侍りしを、如此々々の事により、なき人が見出して、とり卸し宿所に將て來て、字育て女兒にしたり。渠は貴人の息女にやありけん、彼樹杈に在りしとき、七寶を搨箔にして、篠龍膽の服章ある袿衣の、袖長きを衣て、下には緋の衣を襲しとぞ。其孤身衣の衣共は、今もなほ納戸なる、葛籠の底に藏めてあり。拾ひ取られしその比は、舌もまはらぬ稚兒なれば、何といひけん其名も知れねば、餌漏とやらん名づけられしに、絕て應をすることなかりき。不圖せし事にて奴婢などの、濱路〳〵と呼べるを聞て、笑つゝ應をしてければ、原來この子の舊名は、




晝無住院に窃懇して
奈四郎夏引と密談す

濱路と信乃を追失ふて、おん身と二人末長く、樂む方便はいかにぞや。と問へば奈四郎頷きて、されば、とよその事なれ。日に增ていと寒く、物みな氷る比なれば、木工作が亡骸は、今もなほ腐爛れず。よりて思ふに、そなたの宿所の背門などにも、宿雪の多かるべし。さらば今宵暗に紛れて、われ媼内等に分付て、彼亡骸を扛出さして、そなたの背門なる雪中へ、竊に埋措すべし。そなたこの議をこゝろ得て、背門の鎖を外しておきね。有右而兩三日を歷るときは、その雪漸々に消失て、木工作が亡骸の、手まれ足まれ顯れ出ん。當下そなたは箇樣々々如此々々に詐欺りて、信乃を泥庫に捕籠給へ。扠爾後に信乃が刀に、犬猫などの血を塗らして、鞘に斂め措くまでは、勉、人にな知られ給ひそ。かくするときは計策の、十二分に成れる也。既に信乃を捕籠措て、そなたははやく眼代なる、甘利兵衛堯元が宿所に到りて、云々と訴給へ。然らば兵衛は時を移さず、夥兵を隨へ走向ひて、矢庭に信乃を搦捕るべし。縱信乃は伏せずして、寃のよしを陳ずるとも、刀に鮮血の證據あれば、その陳狀達ずして、獄舍に繋れんこと疑ひなし。われ亦甘利が黨に、多く賄賂を贈りなば、信乃は刑罸を俟ずして、獄舍中に殺さるべし。扠又濱路は豫てより、信乃と密通の罪ありと倡て、宿遊に儔ときは、その身價もてこれ彼の、事の沒匁を補ふに足らん。斯して信乃と濱路とを、結果て爾後に、四六城の家の名蹟には、里人の

強情張て從はず、剩われを飽までに、罵辱めて出てゆきしを、遣過しつゝ門邊より、兩銃丸にて撃殺しぬ。只是堪も忍れぬ、一朝の怒りに乘して、思はず矢庭に撃留たれば、豫てそなたに示したる、計較いよいよ行れず。勿論郎君信綱君の、美しき嬖妾を、討め給ふといふ事は、濱路をはやく遠離て、わが宿所に留措き、扨爾後に局親を、こしらへて仂者に、なさばやと思ひたる、又是當座の詐欺りにて、さる密謀のあるにあらねば、木工作が過言のよしを、守へ訴まうすとも、竟にそのすぢ融らずして、村長を害したる、わが身の安危心もとなし。所詮死骸を推隱して、木工作を殺せしは、犬塚信乃が所爲也、といはするときは彼奴にも、先度の遺恨を復すに足れり、とはやくも思ひつくよしあれば、媼内嚇内に分付て、彼亡骸を祕おきぬ。と報るを夏引はうち聞つゝ、眉根を顰め、太息を吻て、三日以來歸らぬ人の、安穩にはよもあらじ、と思はざりしにあらねども、受たる恩のなきにも侍らず。好ぬ夫といひながら、むごく撃れし趣を、聞ては物のおそろしくて、心地よくも侍らずかし。といふを奈四郎聞あへず、心弱きことをいふ人かな。そなたが己と情由ある事を、はやく木工作に知られなば、立地に妻敵撃れて、きのふけふは土になるべし。かゝれば良人は名のみにて、身の仇なりしを思はずや。いと烏滸也。と斷せば、夏引は莞爾とうち笑て、今さら悔ても返らぬ事を、われながら愚痴に侍りき。

などの數奇もなく、北向にして背は板壁也。只一方口なりければ、密談にはよき處なれども、日光に疎ていと寒かり。かくて道人は、素燒の火盆に、百會のあたり少計あからみかゝれる、團炭を活たると、生溫げなる晩茶、汲入たる茶碗兩箇を、山折敷に載して、もて來つゝ薦れば、奈四郎は懷より、瑣小なる銀を取出て、鼻紙に推包み、これを道人に贈ていふやう、こは些ながら足下へ布施也。見れば只一人にて、留守せらるゝとおぼしきに、管待態は益なき事也。所要あらば出て呼ぶべし。とくゆきて雪を片つけ給へ。といふに歡ぶ道人は、件の銀を雙手に、取つゝ額に押當て、こは思ひがけもなき、法捨にこそ候なれ。然らば仰に隨ひて、退りて雪を平すべし。火の滅たらば掌を、うち鳴らして呼び給へ。院主のかへらせ給ふには、尙二時も三時もあらんを、俟不樂しくこそをはすらめ。といひつゝ立を奈四郎は、こや〳〵。と呼留て、外に出給はゞ從者に、もたしたる累物あり、そを取寄て給ひね。と憑めばはやくこゝろを得たる、道人は外面に、出て媼内が携たる、累物を受とり來つ、そが儘に奈四郎に、遞與して又遽しく、外面へぞ出にける。登時奈四郎は、霎時そなたを目送りつ、首尾いとよし、と紙戸を閉て、夏引と額を衝合し、扠いぬる日に木工作を、招き寄たる絆の一條、箇樣々々、と囁きて、襲にそなたに示せし如く、濱路をいかで信綱君の、娶妾に進らせよ、と說勸めしを木工作は、

軈て走り來で、こは早かりし。と許りに、うち告笑むのみ何事も得いはず、倶に床几に尻をかけて、一碗の茶を喫了れば、奈四郎は媼内に、煎茶の價を取らせよ。といひつゝ出て先に立ば、夏引は頭巾を深くして、少許後れて立程に、媼内は遽しく、錢十四五文つき並べて、あるじに遞與して、財布の紐を、結びもあへず、旣にゆく、主の後方に從ふたり。かくて三人は程もなく、指月院に來にければ、角門より進み入るに、道人は日北に氷れる、雪を鍬もて摧きてをり。登時奈四郎は、道人にうち對ひて、院主は修行に出給ひし歟、來たりし客はあらずや。と問れて見かへる道人は、鍬柄杖に突立て、然なり、院主は出られたり。日暮ならではかへり給はじ。けふは客も候はず。もし所要の事あらば、仰置るべうもや。といふを奈四郎うち聞て、否人傳には賴みがたし。われは院主に要談あり、よしや日の暮るゝとも、還り給ふをこゝにて俟ん。携たるはわが妻也、心おかるゝものにはあらず。客殿を貸給ひね。といふに道人微笑て、そは退屈にてをはさんが、俟んとならばいつまでもをはせよ。さばれ見させ給ふが如く、客殿はいぬる比より、普請に緈の果ざれば、いまだ簀子も候はず。いざ褊室へ案内をせん、こなたへ來ませ。と先に立て、本堂の傍なる、一室の紙戸を推ひらきて、上座にぞ請じける。當下奈四郎夏引等は、頭を回らして四下を見るに、この處は無緣の席薦を、四枚布儲しのみにて、床の間

徳高かり。日毎に錫を鳴らし鉢を捧げて、近郷を修行するに、人一箇より一錢の外を受けず、或は里人の夫婦角口して、打つ罵る煩惱の、門邊に立在たりし時、或は悪少年等が故もなく、物の命を捕らんとする處へ、行あはしぬる折には、必これを推禁めて、因果覿面、輪廻應報の理りを説示し、愚痴の夫婦を和げて、物の必死を救ふこと、これ彼共に多かりければ、人僉隨喜渇仰して、活菩薩とぞ稱へける。かゝりけれども件の寺は、前後二代の新地にて、墳墓累世の檀那なきに、住持は日毎に修行に出て、只募縁をのみ事としつ、在院の日の稀なれば、參詣の人も罕にして、院中常に寂寞たり。留守するものは、火打水汲む、唯一箇の道人と、年十四五なる沙彌のみあり。沙彌も住持に從ふて、折々修行に出しかば、晝は宛無住に似たり。されば住持の俗縁ある、他郷の客の寄宿して、久しく逗留することあれども、渠等も多く晝は出て、嚥昏毎にかへり來ぬれば、人その客のあるだも知らで、綽號してこの寺を、晝無住院といひけり。例の人の癖なるべし。然ば泡雪奈四郎は、指月院の爲體を、豫て知たる事なれば、今朝夏引に密書を贈りて、彼處で會んと約束しつゝ、時刻を料りて宿所を出るに、從者には媼内一人を將て、件の郷に赴きつ。かの蘭若の門前なる、樒賣る茶店に尻を掛て、今か今かと俟程に、前面より來る女房あり。是則夏引也。媼内はやく外に出で、手を抗て招くにぞ、夏引は

に濱路は起直りて、家尊大人のおん往方の、けふまで三日吉左右なきは、淵回に滾落て、空しくならせ給ふにあらずや。亡骸だにも見え給はぬは、神隱しとかいふ事にて、誘引れてや亡給ひけん。想像のみせられ、も、かゝる時には在るにしも、甲斐なきものは女子に侍り。といひつゝよゝと泣沈めば、夏引は聲を勵して、噫、忌しき事ないひ給ひそ。夜も日もわかず泣たりとて、かへらぬ人の出てや來べき。留守し給へ。と窘めて、いそしく衣を脫更て、信乃出來介等に云々と、よしを告留守を委ねて、宿所を出て足ばやに、石禾のかたにぞ赴きける。抑甲斐州石禾の鄕は、(今は石和に作る、)八代郡に在り。この地方いにしへは、山梨郡に屬たる也。或はいふ石禾鄕は、武田大膳大夫信光以來、館舍してこゝに住り。信光より十世の君、刑部大輔信綱の時、躑躅が崎へ遷りしとぞ。又一說に、信綱の父、信昌の時、躑躅が崎に新城を築きて、石禾より移住にきといへり。さばれ石禾の城迹は、今亡失せて定かならず。且移徙の世代歲月も、兩說にして分明ならねば、姑く後の一說をとり用ひて、この編には信昌父子、當時既に躑躅が崎に、在城のよしをいへり。又猿石と呼做す地方も、今は地を易たるにや、彼處の地理にくはしき人は、おのづから知るよしあるべし。閒話休題。この時石禾の鄕盡處に、指月院と呼做したる、いと編小なる禪刹ありけり。住持の老僧は、近曾遷化して、後住の法師の道

して、ゆかんといひし、とまうしてたべ。筆把る暇のあらざれば、回翰は進らせず。よき折からで侍ればこそ、端なくあふてものいはれしを、今にも人の歸來て、怪しめられなばいかゞせん。とく〳〵かへり給へかし。といふに嫗内こゝろ得て、爾らば件の處まで、來給ひてよ。と期を推して、立別れつゝ手拭に、面を隱して足ばやに、還るを霎時見送たる、夏引は背門を引閉て、雜庫の庇間にて、件の艶簡の封度を柝て、讀了り引裂て、小石を包み推鬮め、傍の溝瀆へ投棄て、母屋へかへり入る程に、昨宵夜すがら彼此と、空行せし出來介等は、迎に出たる信乃に倶して、僉動搖々々と歸來つ。是よりの後幾隊なる、村人等も立かへりて、遭ぬ恨みを鳴々と、夏引に報て、けふは又、まだ出ぬ人をとり易て、索ありく手配せん。かゝる折には神佛の、利益を祈るに優ことあらじ、なほよく深信し給へ。と衆共侶に慰めて、裏面へも入らず門邊より、各々家路へいそぎけり。とかくする程に、はやこの日も亭午近くなりしかば、夏引は奈四郎と約束の、時こそよけれ、と思ふのみ、氣色にも顯さず、濱路が枕邊に赴きて、昨宵より村の衆まで、部して索あるかれしに、大人の往方は知れずとよ。躑躅が崎なる十字町には、奇しき賣卜者ありと聞ぬ。今より彼處へ赴きて、大人の存亡安危を問ふべく、又石禾へも立よりて、彼處に名だたる八幡宮に、祈願をかけばや、と思ふ也。納戸に心をつけてたべ。といふ

しを告んとする程に、村人等も亦件のよしを、傳聞驚きて、或は五人或は十人、漸々に聚來て、隊を建部を定め、手に〳〵鉦鼓を携て、その曛昏より八方へ、別れて木工作を索にければ、四六城が家の小斷等は、杣人と一隊になりて、心當ある處々を、索んとてぞ立出ける。かくて詰旦に迨りても、小斷等のまだ歸來ざれば、信乃は便りを聞んとて、村盡處まで出てゆきつ、濱路は痞の發りしとて、衣引被ぎて臥てをり。絆の不便は是のみならで、婢共はこの二夜さ、睡らざりしに疲勞果て、呼べども早に起ものなければ、夏引はひとり焦燥て、うち呟くのみいふかひなし。かゝる時には盜兒の、用心こそ肝要ならめ、と思へば開て程もなき、背門の戸を復鎖んとて、庖湢口より雜庫の、背を遶りて家尻に出れば、頬被りせし一箇の癖者、背門のほとりに立在をり、夏引を見て遽しく、被りし手拭を搔拿るを、と見れば是別人ならず、奈四郎が奴隷媼内也。登時媼内は、且四下を見かへりて、懐にしたりける、艶簡を夏引に遞與していふやう、委細の事はその消息に、載せられて候はんが、面會ならでは稱ざる、火急の密談候へば、今未の比までに、石禾の指月院へ來給へかし。彼處で俟ん、といはれたり。時刻を違へ給ふな。と聶けば頷きて、そはゆく事はゆくべけれども、きのふよりして迷子騷動、索に出たる小斷等の、昨宵の儘にまだかへらねば、留守するもののあらずかし。さばれそは左も右も

かば、夏引も有繋に安からねば、人を奈四郎許遣して、きのふ木工作を招かれしに、來つるや否。と問せしに、俟こと二晌あまりにして、その人やうやくかへり來つ、泡雪ぬしへ赴きて、云々と問まうせしに、執次の胥靡のいふやう、木工作どのは申の比に、詣來給ひて程もなく、所要果てかへり給ひぬ。然るを今まで歸宅なきは、途にて狐に魅されし歟、心もとなき事になん。なほ又外を索られよ、といはれてこそ候なれ。と報るを夏引は聞あへず、然あらんには思ひ得たり。途にて山の材木を、買んといふ人などありて、そが儘人と連立て、山へ赴き給ひしならん。這回は出來介とくゆきて、杣孤屋を見よかし。といふに出來介こゝろ得て、燈を引折て出てゆきしが、日もはや西に傾く比、これもむなしくかへり來つ。家公は山の杣孤屋にも山林中にも見え給はず、そこら一遍索しかども、得遭ずしてかへりにき。といふに衆皆訝りて左やらん右やあらんとて、評議區々果しなければ、濱路は涙さしぐみながら、いかにせまし。と母に問ふに、夏引もせん術あらずといふ。この時信乃も縁由を、傳聞つゝ驚きて、夏引によしを諮るに、奴婢等がいひし趣に、違ふことのなかりしかば、いと訝りたる面色にて、爾らんにはなどて速に、村人に告知して、部して索給はざる。無益の評議に日を過さば、後悔すとも甲斐やはある、とく〱。といそがすにぞ、夏引はやうやく騒立て、人を彼此へ走らして、よ

第七輯　卷之五

第七十回

指月院に奸夫淫婦を伴ふ
雜庫中に眼代戍孝を捕ふ

再說、泡雪奈四郎は、豫ての奸計行はれず、木工作に辱められて只その怒りに堪ざりければ、折戸口まで追蒐つゝ、携出たる鳥銃もて、木工作を擊殺せしに、この時下晡にて、且奈四郎が住ひすなる、幾十坪の第宅は、躑躅が崎の城外なる、有底坊なりければ、人の往還の稀にして、これを知るものなかりけり。然により奈四郎が奴隷媼内鰐内等は、はやく木工作が亡骸をとり隱して、鮮血を洗ひ流しなどす。現惡人の下に良僕なければ、這媼内鰐内等も、その心ざま主に劣らず、奸事にはいと疎くて、惡事には骨を折る、無慙の癖者共なれば、この日も手廻し速なりしを、後々までも主に誇て、よき事しつと思ひけり。然程に猿石村なる、四六城木工作が宿所には、その夜さり更闌るまで、あるじの歸り來ざりしかば、濱路は特に俟不樂て、通宵いもねられず、いかに〳〵と思ひつゝ、いたづらに天を明せしに、なほ音耗だもなかりし

蘭雛衣曳手單節の四婦人は、各々良人に齊眉く日の、久しきにあらねども、既に鴛鴦の衾を襲て、潘楊の睦み密しからず、只濱路のみ爾らず。赤繩足に繫ぐといへども、合巹いまだ整はず。身は惡棍に傷殺せられて、箕箒を冥府に執るに由なし、誰かこれを憐ざらん。かゝるゆゑに、別に一個の濱路ありて、更に信乃と匹配す。便是二女一體、冤鬼陽人異なれども、前身後身一般の如し。この處作者一段の工緻にして、初より意中に包藏す。看官後話をおもひ得ず、只見るところをのみ推て、評するもありと聞えたり。細工は流々落成を見よといふ、鄙語に似たる事、よろづのうへに多かるべし。

出んとす。奈四郎は飽までに、木工作に罵辱められて、怒氣胸に滿、腸燃て面色宛焼くが如く、爭んとするに辭を得ざれば、柱に掛たる鳥銃を、かい取りはやく丸を籠て、火繩の頭を指燻る、火盆を閃りと跳り踰て、遣り過しつゝ追蒐出たる、折戸口より見わたせは、木工作は一町ばかり家路のかたへゆく處を、火蓋を反て撻と放せば、憐むべし木工作は、七九の兪の邊より、腹まで磤と撃拔れたる、兩銃丸に霎時も得堪ず、骨碎け腸斷離れし、苦痛の聲と共侶に、仰反仆れて息絶たり。この物響に走ていで來る、兩箇の奴隷嫗内等を、奈四郎はやく見かへりて、あの百姓奴が法外なる、過言を汝等も聞つらん。とても活てはかへされぬ、癖者なれば撃留めしを、此儘守へ訴まうさば、わが身の安危測がたかり。なほ計較もあるなれば、とく〳〵死骸をとり入れよ。といふに嫗内嬶内は、齊一彼處に走りゆきて、木工作が亡骸を、宙に吊して、奥庭なる、樹蔭へ軈て隱しけり。畢竟奈四郎が、木工作を撃殺して、又甚麼なる物語かある。そは次の卷に、解分るを聽ねかし。

曲亭主人自評して云、大約犬士の妻子眷屬たるもの、濱路沼藺雛衣曳手單節等は、貞操心烈よのつねに捷れしも、咸薄命にして、夫婦偕老に至らず。これらも所以ある事なるを、こゝには解盡しがたかり、全輯結局の段に迨て、看官冰解するよしあらん。そが中に、沼




拙工不成自又破之
奈四郎
かや内

家のみならず、わが身の罪を脱れがたし。一期の浮沈こゝにあり、漫にものをいふことかは。深念しかえよ、いかにぞや。と睨詰たる面振やかに、刀を拈て權せども、木工作は些も怯まず、いかばかりに宣ふとも、親の許さぬ獨女を、理なく側室に召れんとて、罪なき人を殺し給はゞ、民の父母なる君々たらず。さらば甲斐四箇郡は、常闇になり果ぬべし。みづから思ひ給へかし。婚姻はその住所の、遠近に依るものならず、よしや他郷の客也とも、媚を結べば是より親し。況て舊緣ある人をや。さればおん身が誠心もて、濱路が爲に給事の、汲引せんと思ひ給はゞ、初より某が、胸中をよく問決めて、扠爾後に云々と、聞えあぐべき事なるに、他人の女兒をわが物良に、親にもしらせず姪也とて、守を誘へ給ひしは、いと憚りあることながら、只是千慮の一失歟、尤疎忽といふべきのみ。某は數にも足らぬ愚痴の匹夫に候へども、獨女の色をもて、榮利を欲する事を恥とす。願ふは女兒濱路が代に、犬塚殿を薦揚て、御内人に召措るゝ、おん計ひこそあらまほしけれ。彼犬塚は武藝の達人、當今無雙の賢者也。かゝる俊士を汲引して、守の御用に達給はゞ、美女を薦めて榮利を料る、先案と庭逕あり。かくて君の祿を食む、良臣といはれ給はん。これより外に陳ずべき、おん答は候はず、暇まうす。と身を起す、酒氣を帶たる木工作が、常にもあらで敦圉く、席を蹴立、紙戸をひらきて、はや外面へ

て、嫛妾にまゐらせよとある、密旨を承奉りぬ。就て愚按を回らすに、和殿の令愛濱路とやらんは、標致といひ、心操といひ、世の評判に隱れなし。某も亦貴宅にて、外ながら見てこれを知れり。かゝれば濱路を某が姪也とまうし做して、信綱君にまゐらせんに、御寵愛日に倍して、世嗣の君を產し給はゞ、その身の榮華、いへばさら也、和殿は國守の外戚たるべし。その流に依る某さへ、面を起す出世の緒、誰かはこれを羨ざらん。再得がたき洪福なれば、且試に云々と、聞えあげ奉りしに、おん歡び淺からず、とくその濱路をまゐらせよ、と今朝しも仰下されたり。よりて御諚を傳る也。はやく支度を整へて、わが宿所までおくり來されよ、忽諸になし給ひそ。と眞しやかに說示せば、木工作聞つゝ太息を吻て、呆れて霎時ものいはず、いと恨みたる氣色にて、思ひがけなきおん汲引もて、濱路を召さるゝ綷の一條、一兩月も已前ならば、障りなく候へども、渠は某が主筋なる、犬塚信乃と旣にはや、婚緣を結びたり。いまだ披露に及ねども、主ある女子に候へは、おん承を仕らず。この義をもて左も右も、聞えあげ給へかし。といはせも果ず奈四郞は、眼を瞪らし聲ふり立て、木工作、そは何とかいふ。犬塚信乃は他鄕の浪人、猿石村の人別に、載られたるものならぬに、口約束の姻談ありとて、まうしわきになるべきや。濱路が事は某が、おん承をまうせしに、今さら障りをまうし出なば、汝等一

きおん夢也。けふ一日は齋して、出給はぬに優ことあらじ。と禁るを夏引は冷笑ひて、噫ものものし、何かはべらん。然る物に魘れ給ふは、おん身の壯なりし比、殺生をのみ事として、獵くらし給ひしを、今では悔しく思ひ給ふ、心よりなす夢にこそあゝなれ。よろづの事は祝ひ柄に、よるとしもいふものを、泡雪ぬしに招れて、行んといひつゝ行給はずは、その祟こそ、見し夢に、ましておん身の爲に得ならじ。とく〳〵出させ給ひね。と言語雄々しく說破れば、木工作然也と頷きて、もて來る袴の前とりつゝ、片足替りに踏入るゝ、後方に膝を突立て、夏引が宛る腰板も、良人の心は斜なき、桟留縞の三條建、結ぶ手加減四條の紐の、長し短し定めなき、人の命の果敢なくも、是をこの世の別れとは、後にぞ思ひ合されける。然程に木工作は、只管路をいそぎつゝ、奈四郎が宿所に到りて、云々と呼門へば、奈四郎聽て己が便室に、呼入れて對面す。迭に口誼言訖れば、豫て准備やしたりけん、媼内嬶内給仕して、盃を勸め肴を拔排て、欵待大かたならざりけり。盃四五度に及びしとき、奈四郎は兩箇の僕を、庖厨のかたに退かして、膝を進めて木工作と、額を合して竊くやう、今日招きまうせし事は、愛たかるべき密議によれり。足下にも豫て知らるゝ如く、御曹司信綱君(武田信昌の嫡子信虎の父也)には、いまだおん子ましまさず。是により、容止いと美しくて、素生賤しからぬものゝ女兒を擇み

が宿所に遣しければ、木工作はわが懈の、便なかりき。とひとりごちて、軈てその書を披き見るに、初はいぬる日饗應の歡びを書盡して、次に公私の所要あれば、けふ翌の間に、對面せまく欲する也。就て珍しげなき物ながら、この一ト壺はいぬる日の、謝議としてまゐらする、餘は面會を俟とあり。木工作しば〳〵讀返し、いそしく硯を引よして、囘報を叮嚀に書寫め、みづからもて出て使に遞與とき、高味の一種を給はる事、有がたきまで辱し。追つゞきて參るべし。此よしまうし給へといふを、艸內はこゝろ得果て、躑躅が崎へぞ歸りける。且して木工作は、掌拍らして、夏引を呼て、泡雪ぬしより使をもて、招き給へば今よりゆくべし。例の袴を出し給へ。兩三日已前より、行ていぬる日光臨の、歡びを演ばや、と思はざりしにあらねども、村役に拘づらひて、きのふまではその義を得ざりき。けふは朝より暇のありしを、昨宵の夢の心にかゝりて、胸さへ折々うち騷げば、いと懶くて後手になりぬ。告るも益なき事ながら、昨宵わが枕方に、得も得しれぬ鳥獸の、いくらともなく聚ひ來つ、牙を顯し嘴を鳴して、責ること大かたならず。或は頭を喙くあり、或は吭に啖著くあり、その苦痛いふべうもあらざれば、叫んとするに聲たゝず。はや全身を食盡されて、骨も遺さずなりにき、と思ひつゝ駭き覺たり。怪有なる夢にあらずや。と告る傍に濱路もをり、つく〳〵とうち聞て、そはいと怪し

ん身とあふ夜の邪魔なるに、信乃さへ女婿にせられなば、いよ〳〵中垣を居られて、あふ瀬は遂に絶果なん。濱路を遠離、信乃を去する、謀はあらずや。と問ふを奈四郎聞あへず、彼犬塚奴はわが仇也。かの折他郷へ赴かば、扠ありなんをいかにぞや、けふまでこゝに留めたる、木工作も亦怨しけれ。且等給へ。と頭を傾け、霎時按じて、莞爾とうち笑み、縡倉卒の折なれども、妙策胸にいで來たり。箇樣々々に詭計りて、濱路をはやく遠ざくべし。濱路がをらずなるときは、信乃も亦退屈して、必他郷へ赴かん。登時途に埋伏して、闇撃するときは、先度の遺恨を霽すに足れり。この議はいかに。と囁くを、夏引は聞つゝ含笑て、そは究竟の妙案也。不覺に脱落給ふな。と謀し合して遽しく、先に立つゝ又案内して、舊の座席に伴ひけり。然程に奈四郎は、いたく醉たる面色して、頻りに盃を推辭しかば、木工作も浮かねて、奴婢に盃盤を納さして、茶を薦め菓子を引く程に、二更の鐘の聞ゆるにぞ。奈四郎は饗應の、歡びを述別を告て、從者等をいそがしつゝ、宿所をさして出てゆけば、木工作夫婦信乃さへに、端ちかくこれを送りて、無異に酒宴の果しを祝しぬ。却說次の日木工作は、泡雪許赴きて、駕を枉られたる歡びを、述ばやと思ひながら、猛に村役の事いで來て、兩三日その義を果さず。かゝりし程に、第四日に至りて、奈四郎は、奴隷鵙内に、一通の手簡と、一ト壺の葡萄羮を齎して、木工作

たり。あらずもがな、と心では、爪彈をしつれども、渠はともあれかくもあれ、木工作が懇切に、誘引へるを許諾つゝ、ゆかで已べき事ならねば、行袱をうち披きて、衣とり出し袴を穿て、村雨の一刀を、腰に帶つゝ扇を拿て、件の席に赴きつ、奈四郎に對面して、一別已後の安否を訊ね、そが席末に座を占れば、奈四郎羞て席を讓り、上座に請薦れども、信乃はいよ〳〵謙退りて、聊も膝を進めず、靜に四表八表を相譚ふに、辭寡く愛敬あり。先度の事ば忘れし如く、武藝に誇る氣色なければ、奈四郎は思ふに違ひて、豫ての用心齟齬したる、その機を測りかねしかば、心ともなくうち解て、只管信乃を敬ひけり。然程に木工作は準備の殽、數を盡して、屢奈四郎に盃を薦め、從者媼内幗内さへに、次の間に呼登し、出來介等を相手にして、酒うち飲せなどする程に、冬の日はやく沒果たり。かくて木工作は、彼此に燭を點さして、奈四郎主從、信乃等にも夜食を羞め、復盃を更めて、饗應ますます叮嚀なれば、客もあるじも醉ぬはなし。且して奈四郎は、中刀を引提て、ひとり淨手に立んとすれば、夏引は纔に便宜を得て、紙燭を秉りつゝ先に立て、緣頰なる障子を推開き、東の陝室に案內をして、物の蔭に立聚合、扠いぬる夜の絆の趣、濱路とおなじ名に依て、犬塚信乃が亡妻の、靈の憑しといひし事、及木工作は信乃をもて、女壻にせまく欲する事まで、辭みじかく囁きて、濱路が宿所に在るだにも、お

ふこそ樂みなれ。と實しやかに應對しつゝ、扨茶を薦め菓子を羞めて、大かたならず管待ければ、木工作は意外の首尾に、且歡び且感じ、翌を契りて遽しく、家路を望てかへりけり。かくて次の日になりしかば、泡雪奈四郎秋實は、この年來親しく使ふ、嫗内觸内といふ兩箇の奴隷に、事情を竊き示して、助大刀の爲にとて、兩人共にこれを從へ、曾試の利刃、寢刃をあはして、肌膚には鏁の著籠をものしつ、小倉織の馬上袴に、仁田山紬の小袖、二ばかり被て、未の半過る比、四六城が宿所に赴きければ、木工作みづから出迎へて、客房に請じつゝ、軈て盃を勸れば、後妻夏引も良人と共に、肴を添え酌に立たる、欵待態大かたならず、盃一巡に及びしとき、木工作は褊室に赴きて、信乃にいふやう、いぬる日途にて事ありし、奈四郎ぬしの詣來給ひて、對面を請給ふ也。聊酒食も候へば、客房に赴き給ひね。然らば籠りてをはさんより、亦徒然を慰る、よすがにこそ候はめ。誘給へとていそがし立るを、信乃は行縈に推辭かねて、そは一段の事也かし。衣脫更て程なくゆかん。和殿はまづこのよしを、泡雪ぬしに報給へ。といふに木工作遽しく、爾らば彼處で俟奉らん、疾來給へ。といひかけて、又客房に赴きけり。當下信乃は思ふやう、彼奈四郎は小人也。武士に似げなく濱れたる、手癖は既に見屆けたるに、彼奴と席を俱にして、酒食の欵待に與らば、そは盜跖を友として、惡木の蔭に遊ぶに似

れば、遺恨あるべき事ならねども、時宜によりて彼人も、長く當地に在著くべし。よりて入懇を願ふが爲に、薄酒を薦めまゐらせんとて、案内がてらに推參せり。願ふは翌の未の比より、光臨を給へかし。待奉る。と叮寧に、いはれて奈四郎歡ばず、肚裏に思ふやう、われ頃日は獵にも出ず、四六城が宿所へ立よりて、夏引にもあはざるは、今初てその名を聞し、彼犬塚信乃とやらんに、主従いたく打れたる、面目なきによりて也。然るを翌又宿所に招きて、彼奴と一席にて、酒を勸んといふ木工作は、又是信乃が方人にて、飽までわれを破滅に付ん、と較計たるにぞあらんずらん。爾りともゆかじといはゞ、われ只後れたりといはれん。その意に任し彼處に到りて、若堪がたき事あらば、信乃と木工作一家の男女を、鏖にして逐電せん。三十六計詐欺を上とす。嗚呼爾也、と思ふ心を、氣色にだにも顯さず、頻りに頷き含笑て、今にはじめぬ和殿の親切、いかでかは行ざらん。彼犬塚ぬしとやらん、和殿に舊縁あるよしにて、逗留は珍重也。かくと知らば疾にも訪ふて、教諭の益を得べかりしに、疎遠の怠慢、悔れども及ばず。犬塚ぬしにもこれらのよしを、言傳て給へかし。翌は些の公務ありとも、そは同僚に委ね措て、今もなほ逗留せり。勿論かの時某が、和解によりて無異に治り、當座に和睦し給ひけて、時刻を違へず必ゆかん。さばれ我等が爲のみならば、酒食の儲はあらずもよし。うち相譚

ども、いぬる日いたく犬塚ぬしに、打れしをなほ遺恨に思はゞ、又是一箇の拒障也。且何となく彼人を、招きよして犬塚ぬしと、一席に酒食を羞めて、いよ〳〵中を直しなば、彼人遂に恨を祛て、わが願事の執次しつべし。是に優たる捷徑あらじ、と尋思やうやく決りしかば、後妻夏引に囁きて、はじめて信乃と奈四郎と、鬪諍ありし縡の趣、箇樣々々と報知して、且奈四郎を妁にせんと思ふ、信乃が仕官の事の一條、これ彼和睦の方便まで、遺もなく說示して、又その意見を問しかば、夏引は聞て歡ばねども、いと逞しく腹黑き、女人なれば些も騷がす、倶に歡ぶ面色すれども、腹裡はさにあらず。濱路が宿所に在るだにも、目上の萌く瘤なるに、又犬塚を壻にして、守の御内人にせられなば、いかにしてわが爲になるべき。縡の障の是彼にて、奈四郎ぬしにあひがたからん。然ばとて今禁ては、疑れんは必定也。霎時その意にうち任して、奈四郎ぬしを招して、扠彼人の來ませし折に、意中を告て商量せば、又よき尋思のなからずやは、と思ひにければ只管に、その分別を稱贊して、泡雪ぬしを一ト日もはやく、招き給へ。といそがすにぞ、木工作いよ〳〵心決して、次の日奈四郎が宿所に到りて、對面を請ふて寒暄を演、いぬる日より預り置たる、彼鳥銃を返していふやう、いぬる比穴山にて、彼事ありし旅客は、某が主筋にて、犬塚信乃戍孝と呼れたる、武藏州の人氏なり。よりて宿所に伴ひかへり

まうさずや。犬塚ぬしはわれらが主筋、一トわたりなる客人ならず。倘又無禮の言を出さば、その度はわれ決して允さじ。とく勸解ずや。といそがせは、夏引は纔に膝を進めて、然る方ざまとは思ひもかけず、腹立しさにわれを忘れし、こよなき過言は持病の癇症、只後悔の外は侍らず。海なすまでにかき流して、御心にな被給ひそ。欵待とては侍らねども、猶いつまでも逗留を、願しくこそ。とうち賠話れば、出來介も稍膝行出て、お客人さま御免なりませ。出る幕でもなかりしに、呼起されて宵一夜いもねず、翌の眠さを想像れば、主に忠義も要なきもの歟。とにもかくにも奉公ばかり、苦しきものは候はず。御免々々。と虚口誼、喞がましく賠話れども、胸あひがたき陜身衣、無褌なる膝頭、隱さん爲に額づけば、衆皆咄とうち笑ふ。信乃も笑ひを咳逆に、うち紛して夏引等に、無異の應酧言訖れば、木工作は又改めて、濱路を信乃に引あはしつゝ、賓主和譚の歡びに、久後はいざしらま弓、はるかに響く曉六の、鐘に衆皆立別れて、霎時臥房に退きけり。かくてその後土工作は、肚裏に思ふやう、犬塚ぬしをこゝに在らして、長く足を駐んには、守ざまに願まうして、御家臣になすにしくことなし。然けれども故もなく、わが職分にあらざるに、まうし出ん事輙からず。獨泡雪奈四郎ぬしは、わが少かりし時殺生の、友なりければ今もなほ、公私の事にものいひ易かり。この人を誘へて、賴ばやと思へ

みて、限りなき日を俟に由なし。然れば婚姻を整へて、爾後に彼人々を、索ね給ふとも遲きにあらじ。枉てこの議に從ひ給へ。と辭を盡して薦れども、信乃は頭をうち掉りて、否、何ばかりにいはるゝとも、わが心は巖の如し、聊も轉すべからず。しかれども婚姻を、只管に嫌ふにあらず。亡妻の云々と、告たるよしもあるなれば、緣竭ずは娶りもせん。目今は承引がたし。大丈夫の一言隻句は、年を歷るとも變易あらず。かくまでいふて聽れずは、袖を拂ふて去らんのみ、强るは要なき事ならずや。と言語急しく說諭せば、木工作望を失ふて、沈吟ずる事半晌ばかり、やうやくに頭を擡て、如右宣へばせん術あらず、なほその時を俟の外なし。就て一箇の願ひあり。今茲は雪のしば〳〵降りて、道中尤不便なり。よりて春まで逗留して、世間長閑にならん比、出て友人を索給へ。冬籠りする寒けき日には、都鄙の巷に行人稀也、人を索る時節にあらず。切てこの議をうけ引給へ。と又他事もなくかき口說ば、信乃は僅に頷きて、四稔以來環りもあはぬ、わが友達を索ることの、よしや一月五十日、こゝに遲速を爭ふとも、その甲斐ありともいひがたければ、今茲をこの地に送るべし。こは只好意に悖らじ、と思ふばかりに愚意を枉たり。今少選貴宅の衆の、厄會にこそあるべけれ。といふに木工作歡びて、一寸延れば仭といふ、常言あれば逗留は、本意に愜ふていと愛たし。やよ夏引も出來介も、面推出して勸解

稚き比、二親の夜話に、直秀ぬしの戰歿の、その絆の趣も、故鄕へ訃を告來したる、彼老黨の忠死のよしも、傳聞にし事のありしを、そが姓名を何とかいひけん。定かに記憶せざりしに、和殿が今宵の物がたりにて、稍具なる事を得たり。寔に不測の因緣なりき。といふに驚く木工作は、且歡て頭を掵、あら思ひかけざりき。おん身はわが家父の主君なる、直秀ぬしの外孫ならば、わが爲にも亦主筋也。扨も〳〵。とばかりに、只顧感歎したりける。されば又この幾條を、側聞する後妻夏引は、直と呆れていふよしもなく、出來介と目を注しつゝ、あらずもがなと思ふめる。養母の心と表裏なる、濱路は實の親の名を、知るよしもなき身の幸なさと、又掬育の恩高き養父の心を思ひ汲む、淚の泉いと切て、押拭へどもなほ竭ぬ、袖に暇はなかりけり。信乃も頻りに慷慨嗟嘆の、貌を改めあるじに對ひて、喃四六城の叟、親には大く劣りたる、吾儕なれども懇望せられて、令弱をもて妻せん、といはるゝを推辭にあらず。さばれ嚮にもいへるが如し。年來死生を契りたる、異姓の兄弟若干あり。相別れしより往方をしらず。この人々に得あはずして、妻を娶らん事はさら也、仕官に就くも亦不義也。靜に時を俟んのみ。この義をこゝろ得給へかし。といふを木工作聞あへず、そは然る事もあるべけれども、その友達を索るとて、一たびこゝを立去給はゞ、いづれの日にかかへり來まさん。某今玆は五十になりぬ。末遠からぬ餘命を憑

はなき人の、再結ぶ縁しにこそ。願ふは愚衷を憐みて、この婚姻を許し給はゞ、世に某が望足りてん。承引給へ。と繰かへす、苧環ならで長物がたりに、冬の夜還て短きや、はや曉方になりにけり。

第六十九回

仕官を謀て木工作信乃を豪留す
給事を薦て奈四郎四六城を撃つ

信乃はあるじ木工作が、昔がたりをうち聞て、感歎しつゝ扨いふやう、一樹の蔭一河の流も、縁なければ寓がたし、と世の常言にいへるは宜也。吾儕初は和殿をもて、居停主人(宿屋の主)とのみ思ひしに、原來井丹三直秀ぬしに仕へたる、蓼科太郎市とやらんの兒なりし歟。今さらに又何をか愿ん。わが母は諱を手束と呼れて、則直秀ぬしの女兒なりき。わが大父大塚匠作三戌大人は、直秀ぬしと共侶に、結城に籠城したる折、子共の爲に秦晉の、因を結び給ひし事あり。さばれその義を果さずして、わが大父も直秀ぬしも、共に戰歿し給ひしに、爾後如此々々の故ありて、わが父犬塚番作大人と、直秀の息女と環會て、迭に素生を諦しつゝ、親と親とが結髮たる、妹と伕なれば異議もなく、軈て夫婦になり給ひて、吾儕を產し給ひし也。かゝればわが幼

女兒の見かへりて、笑つゝ必應けり。扨はこの子の舊名は、濱路と呼れしものならん。濱路と呼ぶに優ことあらじ、と妻もいひ某も、如右思ふによりこの時より、形のごとくに名づけたり。かくて六七才の比よりして、手習縫刺の技はさら也、書よむ事も管絃も、その師を招き學して、はや年來になりにたり。爾るに前妻麻苗は、四稔已前に身まかりて、内を賄ふもののなければ、濱路が乳母を推登して、後妻にしたるもの、こゝに侍る夏引是也。渠は良人もその子さへ、死別れせしものなれば、久しくこゝに仕へたる、素より乳母の事にしあれば、得しらぬ女人を娶らんより、濱路が爲によかるべし、と思へば如右計ひつ。このうへはよき壻をとて、春の比よりこれ彼と、心に擇めどしかるべき、ものしもあらでうち過せしに、思ひがけなき事により、おん身を宿所に留めまゐらせ、器量骨相進止、武藝に捷れ給ひし事まで、面りに見て情願あり。いかで濱路が壻に欲得と、思ふものからいかにして、村長列の某などが、壻養嗣になり給はんや。便を討め守に薦めて、御内人に成しまゐらせなば、この便宜を以云々と、由を告媚を結びて、わが宿願を果さんず、と思ひしのみにて女兒にも、妻にもいまだ告知らせず。おん身が立まくし給ふを、事に假托け推制めて、一日々々と過せしに、豈測らんや今宵の一奇事、世になきおん身の内君と、わが女兒は同名にて、その亡魂の女兒に憑りて、ものいはれし

う、かゝる深山の樹上に、稚兒のあるべき理なし。彼は鷲などに攫れて、暫時彼處に措れしならん。然らば鷙にわが撃たりし、鷲はあの子を攫へるもの歟。そはとまれかくもあれ、うち捨措んは不便の事也。とり卸して見ばやとて、その樹に登り辛うじて、抱き卸してよく見るに、尙伃き女の子也。貴人の息女にやあらん、七寶を摺箔にして、篠龍膽の服章つきたる、袿衣の袖長きを被て、下には緋の衣を襲たり。何處の誰が子なるぞ、と問へどもものを得もいはぬ、二才歟三才の稚兒の、泣より外に所爲もなければ、且懷にかき抱きつ、撃留たりし件の鷲は、只美羽をのみ拔とりて、相携つゝ宿所にかへりて、妻麻苗に云々と、有つるよしを通知せしに、麻苗おどろき且歡びて、この兒は天より俺們夫婦に、授給ひしものなるべし。是に就ても殺生を、思ひ止り給ひねとて、淚さしぐみ諫るにぞ、某やうやく感悟して、これより後は獵に出ず、扠女の子には乳母を隷て、愛慈み養ふに、そが名をだにも知るよしなければ、軈て餌漏と名づけにき。こは鷲の餌に漏れて、わが子となれる義を取りたり。かくてその名を呼び諭ても、顏を背けて答せず。こは名のこゝろに愜ぬ故歟、と思へば屢名を更て、呼べども〳〵應をせず。かゝりし程にこの村より、一里ばかり東のかたに、字を濱路といふ六齋の市場あり。奴婢などが其處に到りて、物を買とり來つる每に、こは濱路なる物ぞかし。濱路濱路といふ每に、わが

は春王安王、兩公達のおん身方にて、結城の城に籠り給ひつ、嘉吉元年夏四月、落城の日に血戰して、竟に陣歿し給ひにき。このとき蓼科太郎市も、既に深痍を負しかど、辛くして信濃にかへりて、その方ざまに云々と、報つゝ軈て腹かき切て、冥土の供を仕りぬ。某は尙總角なりしに、母は年來多病によりて、そのさきつ春世を去りたり。されば結城の殘黨とは、里人だにも心をおけば、舊里の住ひ遂に稱はず、この地に外伯父ありしかば、たづね行て身を寓せしに、伯父夫婦に男兒なくて、只一箇の女兒あり、その名を麻苗と呼做したり。有此而迭に年長て、女兒を某に妻しつ、壻養嗣にぞせられける。爾後養父母は世を去りて、某村長の職を承嗣ぎ、且相傳の山林あれば、富むにあらねど貧しくもあらず。爾るに某弱冠より、殺生を好みしかは、暇ある折毎に、只山獵を事として、鳥獸の命を捕ること、いくそばくそといふを覺ず。かかる故にや、齡四十に近かるまで、子ども一箇もある事なければ、麻苗はこれをうち歎きて、こは殺生の報ひなるべし。子孫の榮を願ひ給はゞ、山獵を歇給へとて、只管に諫めしを、よくも得聽かでありけるに、一日黑驪の邊、中山の山間にて、いと大きなる鷲を擊にき。かゝりし程にその處より、一町あまり山邊なる、樹杪に小兒の泣聲せしかば、怪しと思ひてゆきて見るに、年二三才許なる侲子の、老たる榎の杈に挾れて、聲嗄るゝまで號てをり。登時某思ふや

を、從はずして節に死したり。さればその名も年紀も、似たる息女の肢體を借りて、今宵竊に某に、ものいひしものは亡魂の、所爲としられて寔に奇也。かゝれば疑似の傍難を、解れん事こそ願しけれ。といへば出來介腹を抱て、俯しつ仰ぎつうち笑ひ、扨こしらへたり、かゝれたり。餘程實のある作なれば、死靈にしたる當座の脫路、有理らしく聞ゆれども、僕などはこゝろ得ず。阿家さま感心なされし歟。とむかひ火つけて嘲けるを、さこそ、と夏引は頷きて、人の得しらぬ故鄕の事、結髮せられたる、妙もおなじ名なりし歟。そが寃魂の所爲なゝどとは、證据もあらで疑はしゝ。然とも正しき證や侍る。と詰るを木工作推禁めて、復しても出來介奴が、濟路が事の穿鑿を、なでふ汝に賴むべき。無益の口を噤んより、臥房へ退りて睡らずや。夏引も亦大人氣なし。數にも足らぬ小厮の過言に、相槌を打つことやはある。寔に女子と小人は、養ひがたきものにこそ。と歎息しつゝ信乃に對ひて、犬塚ぬし、よしなき口舌を、傍痛く思ひ給はめ。妻孥は左もいへ右もいへ、某は疑心なし。願ふは介意なし給ひそ。殊さらに歡しきは、女兒と貴所の亡室と、同名の義に仗て、且く渠が身に憑りて、ものいはれしといふ一奇談は、俺們親子の幸ひ也。旣にこれらの便宜を得たり。先や胸憶を盡すべし。某原は信濃の人氏、蓼科太郎市と呼れしものの獨兒なり。親にて候太郎市は、井丹三直秀ぬしに仕へしが、直秀ぬし

小夜深たるに人騷しなる、出來介を呼起すことかは、不覺なりき。と窘れば、夏引は忽地勃然として、おん身が例の落つき良なる。妾が豫ていはざる事歟。濱路を守へ願ひまうして、給事にまゐらせ給へ。生ごころのつきたるものを、遊してのみ宿所に在らせば、よき事あらじ、と諫めしかども、兎の毛の頭に置露ばかりも、聽かで今宵に及びしを、悔しく思ひ給はずや。と席薦敲きて敦圄くを、木工作聽かず頭を掉て、あな囂や伪なし。濱路はとまれかくもあれ、犬塚ぬしは人の女兒と、みそか事やはし給ふべき。われ今渠に問ふよしあり。默してしづかに聞給へ。と推禁めつゝ女兒に對ひて、濱路は何等の所要ありて、夜深てこゝへ來たりしぞ。慝ず告よ、いかにぞや。と屢問れて恥はしげに、頭を擡て四下を見かへり、何の故にや知らざりしを、問せ給ふに心はつきぬ。甲夜よりわらははうち臥して、熟睡したりし夢ごころに、いと美しき少女子の、枕に立て呼覺し、今宵おん身を勞して、犬塚ぬしに如此々々と、いはまく欲き事侍り。こなたへ來ませ、と先に立て、伴るゝと思ひしのみ、その後の事はしらず侍り。そは何事をいへるにや。はじめて覺たる心地して、面目もなく侍りといふ。當下信乃は感歎の、髀を礮と打拍らして、これにて思ひ合するよしあり。あるじ御夫婦聞給へ。某舊里に在りし時、結髮の未通女あり。その名を濱路と喚做したり。爾るに渠は故ありて、惡棍の爲に勾引されし


有花不語春
鳥寄聲有水
無意蟾蜍遺
墜
蓑笠題
信乃



やさのみ厭はせ給ふぞ。人の形貌を假染に、ものいふ暇を得たれども、靈玉おん身を守らせ給へば、心後れて思ひし事を、いひ盡さぬにかへれとは、曉報るきぬぐ〱の、鐘より強顔き捨言葉、心づよし。と怨ずる折から、隔の紙戸を礑とひらきて、淫奔者を見出したり。衆皆起よ。と呼はるもの、是則別人ならず。あるじの女房夏引也。叶嗟と驚く濱路より、信乃は有繋にうち騒ぐ、胸を鎭めて、やよ內儀、漫なることないひ給ひそ。令弱のこゝに來ませしは、不軌密通の爲ならず、別に所以ある事なるに。といはせも果ず冷笑ひて、否、宣ふな論より證据、親の寢息を窺ふて、夜歧ひし女兒を引容れても、不軌ならずといふいひわき立んや。僉とく起よ。と呼立れば、應と答て、子舍より出來介、寢衣の儘なる犢鼻褌帶に、麪棒引提て走り來つ、豫て濱路に思ひをかけても、稱ぬ戀の遺恨の返報、胸の燄にまだ冷ぬ、火盆に攙地と跳けば、搖れる團炭の破れ口、とても圓くはおさまらぬ、折を得たり、と聲振立て、客人よき事せられしな。ぬしの祕藏の筥入女兒を、疵物にして勇悍しく、いひ爭ふとも誰かは聽ん。豆盜兒には相應しき、連枷代りにこれ喫せん。と持たる棒を振揚れば、やよ等出來介、無禮なせそ。と禁るあるじの一聲に、進みかねたる出來介は、麪棒杖につき立て、夏引が背後に退きけり。登時あるじ木工作は、進み入り坐を占て、左見右見つゝ夏引に對ひて、濱路に些の情由ありとても、

る事こそこゝろ得ね。といふ皃を屢うち目戍りて、縁故を知らでをはせば、如右思はるゝは無理ならず。妾は四稔さきつ夏、彼左母二郎が非道の刃に、命果敢なく圓塚なる、火定の穴に葬られて、骨も留めずなりしかど、魂魄はなほ旦暮に、おん身のほとりに貪縁て、いはまく欲き事しもあるを、陰鬼陽人方異なれば、本意を得遂ずいたづらに、光陰を過し侍りしに、こゝなるあるじの女兒の名の、妾と同じきのみならで、おん身と月下に結れたる、宿因あれば形體を借りて、事情を告侍り。曩におん身は妾が爲に、生涯妻を娶らじ、と宣はしたる御心操の、有がたきまで忝く、歡しうは侍れども、その言の葉の末遂て、わらはを忘れ給はずは、縡の便宜にうち任して、只この妙を妾ぞ、と思ふて縁しを結ばし給へ。よしやこれらの事に就て、いたく禍鬼の暴るゝとも、亦ゆくりなく幸草の、花さき實結るよしの侍らん。かゝれば先路を急がずに、こゝに逗留し給へかし。と告る言語も容止も、よく亡妻に似たりける、縡の不測に些も騒がぬ、信乃はつら〳〵うち聞て、幽冥の事鬼神のうへは、凡智に測り易からねども、男女夜深て相譚はゞ、是瓜田の履、李下の冠、人の疑ひをいかゞはせん。その身の宿意を告んとて、人の女兒に濡衣を、被するは仁義の所行にあらず。われも亦この故に、あるじ夫婦の恨を惹かば、いひとくによしなかるべし。とく〳〵立去給はずや。といはれてよゝとうち泣て、など

皆人の世にあるときは數ならで、憂には漏ぬわが身也けり

と聞えしに、その妻、

誰見よと信を人の留めけん。堪て有べき命ならぬに

とよみて、倶にむなしくなりし事、又廿二の巻なる、鹽谷高貞讒死の段、この他、新田楠氏父子の誠忠、亦新田の四天王と聞えたる、勇臣等の終り定かならぬ事などを、これ彼と讀味ふに、現忠臣の時に遇ざる、佞人の驕恣なる、夫婦の情態、朋友の信不信、古を見て今を思へば、相別れしよりけふまでも、遭はで年歴し、五犬士のうへ心もとなく、且妹と伏は名のみにて、節に死したる濱路が事さへ、胸に浮めば浩歎しつゝ、巻を掩ふて愀然たる、背のかたに來る人ありて、足音もせず近づくを、誰也と問へば、濱路と答ふ。信乃は驚き訝りながら、貌を改め其方に對ひて、日比その名を呼るゝが、洩聞えしより纔に知りぬ。おん身はあるじの令嬢歟。何等の故に小夜深て、獨こゝへは來ませしぞや。と問へば頭をうち掉て、否、妾はあるじの女兒なれども、今宵はあるじの女兒に侍らす。おん身と二世の契りある、濱路を忘れ給ひし歟。といふにいよ〳〵怪みて、そは何事をいはるゝやあらん。わが舊里にありしとき、結髮の妻の名も、濱路とは呼れしかども、身まかりてはや四稔になりぬ。然るをおん身に云々、といはる

しう年來の願ひ足なん。しかはあれども いぬる比、穴山のほとりにて、大く打れし泡雪生が、しうねく恨みて妨せん歟、これも亦測りがたかり。彼人などより上ざまなる、御家老達に願ひまうさば、障りあるべき事ならねども、そは亦容易き所行にあらず。この事は且祕措て、犬塚ぬしだに放遣らずは、便宜を得ることなからずやは、と肚裏に尋思をしつゝ、辯に假托け辭を設て、頻りに信乃を留めたる、あるじ態の懇切なるに、振拂ふべき袖のなければ、信乃は殆困じ果てつゝ、姑くその意に任しても、只徒然に堪ざれば、この家にいとふりたる、太平記の闕本ありと聞て、借よせて繙きつゝ、獨僅に慰るに、はや十一月の比にしあれば、田舍は耕作に暇あれば や、奴婢等も甲夜より臥房に入りて、夜はいとゞしく蕭然なれども、然とて信乃はいもねられず、今宵も孤燈にうち對ひて、彼太平記を閱するに、第四の巻なる、中納言藤房遁世の段に、藤房豫て相契りたる、左衞門局とか聞えし女房許、剪たる頭髻を遣り遣すとて、

黑髪の亂れん世までながらへば、是を今般の形見とも見よ

とありしを、女房いたくうち泣て、

書置し君が玉章身にそえて、後の世までの像見とやせん

と詠て、河水に身を沈めし事、又第十の巻なる、佐介左京亮貞俊が辭世の歌に、

りなるも、木工作は從はず。聞つゝ頭をうち掉りて、おん身の意見は然ることなれども、給事にまゐらせては、こゝに姻譚整ふとも、年限果ねば親の自由に、身の暇を乞ふこと得ならず。又愆ることなどありて、猛に暇を給ふことの、あらずとはいひがたし。さる首尾わろき筋あらば、親の難義にならざらんや。且うち捨て措き給へ。と制めてうけ引氣色なければ、夏引は心焦燥て、いひ甲斐なしと思へども、强て勸るよしのなければ、いかにせましと思ふ程に、木工作は又いぬる頃、犬塚信乃を誘引かへりて、留めて既に日を彌れば、夏引はいよゝ歡ばず。人目の關のみ多くなりしに、奈四郎も亦出て來ず。音耗久しく絶しかば、いよゝます〳〵氣をもみて、怒りを移せばさもなき事まで、濱路を大く罵れども、あるじが宿所に在るときは、一毫も然る氣色を見せず、濱路にはいと優しく物して、信乃にも茶をまゐらせよ。爐に炭を繼てまゐらせよ。と折々奴婢に分付て、眞實しげに欵待しければ、木工作は陰陽ある、妻の底意を知らねども、信乃はこれらの事情を、大かたに猜せしかば、屢あるじに別を告て、立去らんとしたれども、木工作は只管とゞめて、管待はじめに彌增たり。以あるかな木工作は、信乃が骨相進止の、人に捷れしのみならで、その武藝の比類なき、本事を既に見てければ、いかで國守へこの人を、薦めまつらば重用せられて、俸祿思ひの隨なるべし。有此而濱路を妻せなば、わが

るに、濱路が乳母の事なれば、外より娶るに優べしとて、木工作これを推登して、後妻にぞしたりける。然ば夏引は思ひがけなく、村長の妻になりしより、家の女兒はわが爲に、主なりけるを子とすれば、初一年あまりの程は、行狀を愼みて、些も繼母の面色せず、いよ〱濱路を慈愛て、よく内をおさめしかば、木工作竊に歡びて、物の出納その他の事も、やうやくに任用する隨に、夏引は早晩驕りつきて、衣裳髮の餝まで、己が身にのみ綺羅を盡して、濱路を初の如くにせず。剩國の守の山林管領、泡雪奈四郎と密通して、良人木工作が、杣木見にゆきて、山菰屋に曉す夜は、奈四郎を母屋に引入れて、不義の樂みを取らざることなく、然らでも又奈四郎は、或は村役、或は山獵に假托て、四六城の宿所に起臥すれども、木工作はこれを曉得らず。只濱路のみ聽く猜して、淺ましう思へども、母を諫んよしもなく、父に告ぐべき事ならねば、心苦しさ限りもなきを、夏引も亦その氣色に察して、濱路を鬱悒きものとしつ、いかで彼奴を遠離て、後やすくすべけれ、と思へば折々良人に勸めて、濱路も既に年ごろになりぬ。春より女婿を擇み給へど、いまだ相應しきものも侍らず。然ばとて、生心つく妙子を、遊しての宿に在らせば、果はよき事ありとしも思はれず。守の奧隸達に便り討めて、給事にまゐらせ給へ。夥の傍輩に揉るゝも、亦是修行の一箇にて、その身の爲に侍りといふ。うち聞く所の理

ひ給へとて、辭を盡してとゞめしを、信乃も有繫に推辭かねて、僅にその意に任せしかば、木工作斜ならず歡びて、きのふ泡雪奈四郎が贈りたる、兎を調理し酒を薦めて、終日相譚ひ消しけり。これより後も日次よからで、或は曇り或は風ふき、雪さへしば〱降にければ、信乃は頻りに留められて、思はずも日を累る隨に、つら〱この家のやうを見聞くに、女房は後妻なるべし、その名を夏引と呼れたるが、年才は三十四五許にやならんずらん。そが容止も醜からず。又二八ばかりなる女兒只一箇あり。當面にはいまだよくも見ねど、顏は三月の櫻花に似て、雨を厭ひ風を恨る風情あり。姿は秋夜の新月に優て、雲に挨れ靄に消さるゝ歎きあるが如し。常に奧まりて搔撈す、筑紫琴の調妙にして、彼倭蔭が女兒にも、劣らじとこそ聞えたれ。その名を濱路といふにやあらん、濱路〱と呼るゝを、紙門隔に聞く每に、信乃は了得に亡妻の、事をしこゝに思ひ出て、壁に向ひて嘆息す。現田舍には罕なるべき、女兒をもてる親ながら、繼しければや仂なく、母は折々叱り懲すを、一言だにも悖らはで、よく機を攬るは孝行の、大かたならぬ故なるべし。是より外は他人の、揣り知るべきよしのなきを、後に具に原るに、木山作が前妻は、名を麻苗と呼れしが、四稔ばかりさきつ比、時疫にて身まかりつ。後妻夏引は乳をもて仕へし、女兒濱路が姻母なりしを、渠が良人は世を去りて、よるべなきものな

歟。何と呼るゝ人やらん。と問ば木工作聲を密めて、寔に賢察せらるゝ如く、彼人は國守の御家臣、泡雪奈四郎秋實と呼れて、山林管領を職とすなるに、殺生を好み給へば、暇ある折毎に、こゝらの山に獵くらして、小人が宿所へも、留らせ給ふ夜のあれば、見過しがたく和解ふて、綷圓やかに治りしは、但彼人の爲のみならず、とかく村には事なかれといふ、鄙語に似たる幸ひ也。誘給へ夜の深ぬ間に、宿所へ伴ひまゐらせん、是方へ來ませ。と先に立て、ゆくこと既に一ト時ばかり、その夜初更の左側に、猿石の宿所に屆りぬ。かくてあるじ木工作は、女房夏引に由を告、小斷出來介等を呼立て、信乃を徧室に休らはしつゝ、夜食を薦め浴をさして、大かたならず欵待にぞ、信乃は世に淺からぬ、歡びを述て、奴婢共が、布儲たる臥簟に入りつ、軈て枕に就きしより、翌は夙めて出てゆかん、と用意をしたれども、この夜俄頃に初雪ふりて、詰旦もなほ歇ず、山も里も白妙に、積りて深く見ゆめれば、いかにせまし、と思ひかねて、早飯も果し比、あるじ木工作は、徧室に來て信乃にいふやう、今茲は夏の閏にて、今は十月の季ながら、節は十一月の中を過たり。さればにや雪もはやくて、うひ〳〵しきには似げもなく、野も山も降埋めるを、急がせ給ふ旅にあらずは、且く逗留し給へかし。かくては山野の挊了もならず、小人も亦徒然なれば、辭敵に足らずとも、聊慰めまゐらすべし。この議に從

と推辭を武士は聽ずして、それこそよしなき謙退なれ。けふは役義を離れたる、われは遊山の獵戸なるに、さばかりの物受られずは、後日に面を向けがたし。今宵の肴にし給ひてよ。と頻りに薦めて已ざれば、木工作は推辭かねたる、兎を受て鳥銃へ、索引掛て肩被たり。登時武士は恭しく、信乃に對ひて別を告て、躑躅が崎のかたにかへりゆけば、從者も遽しく、主の後方に引そふて、等しく走る後影の、看々見えずなりにけり。於是乎信乃は木工作に、歡びを述勞ひて、立別れんとしてけるを、木工作急に引とゞめて、言卒爾には候へども、彼主從を打伏給ひし、おん身の武藝を見て知りぬ。諸國をうち巡りて、武者修行をし給ふにや。俺までに武を磨せ給ふ、こゝの國守の御内人にも、儔あるべうも候はず。何處を宿にし給ひたる。既にはや日の暮たれば、今宵のお宿を仕らん。さのみ數はせ給はずは、名告らせ給へ。と慇懃に、問れて信乃は憑むに由なく、見かへりながら微笑て、寔に和殿の親切なる、われこの州に相識なければ、いと憑しき心地ぞする。然るを今さら隱さんや。吾儕は武藏浪人にて、犬塚信乃戍孝と呼るゝもの也。豫て死生を契りたる、異姓の兄弟五名あり。故ありて別れしより、既にはや四稔を歷たり。いかで遭んと思ひつゝ、旅より旅に旅宿して、この地へ來つるもその爲のみ。定宿とてもあらざれば、今宵のあるじせられん事、歡び思ふ所也。扨も彼武夫は、武田殿の家隷

ふ如し。先非を悔たる歸降の怠狀、あれ程にいはるれば、好も歹も小人に、預けて放ち還し給ひね。おん腰に携りても、無異の用捨を願まつりぬ。うけ引給へ。と寛解れば、信乃はやうやく怒りを斂めて、持たる鳥銃傍に投捨、和殿の和解徹りせば、允すべき事ならねども、武士たるものの恥を得しらで、命を乞ふをわれ又打んや。然らばこの儘立別れん。とくくいなし給へかし。といふに木工作歡びて、物數ならぬ小人が、寛解まうすをうけ引給ふ、早の御許容辱し。折から薄暮の事なれば、この鳥銃は小人が、預り措てこの主從を、先にいなさば刺返しの、御疑念もなかるべし。喃泡雪さま、所もしらず名もしらで、行あひの間の闘諍なれば、遺恨あるべき事ならねども、この火砲を遺し給ひて、はやく還らせ給へかし。といふに頷く武士主從は、刄を斂め立あがりて、いはるゝ趣その意を得たり。既に和睦の整ふたるに、いかでか遺恨を含むべき。さばれ如右思はれなば、その鳥銃は和主に預けん。遺れてもこの事を、祕て人にな知らし給ひそ。思ひがけなく勞したる、謝義とてこゝには物もなし。媼内兎を進らせよ。といふに奴隷はこゝろ得て、四足を括し獲ものの兎を、兩手に捧げてさし出すを、木工作うち見て、頭をうち掉り、そはよしもなき貺もの也。配下に世渡る俺們が、斯ばかりの事したればとて、紙一枚でも受まつらんや。況多くもあらぬ獲ものを、給はりて何にせん。そはそが儘に置給ひね。




甲斐の道中の信乃奈四郎を懲す

としつる事、是則引剝也。かくても愆也といはんや。汝等國守の家隷ならば、君に仕へて忠もなき、盜臣にこそあらんずらめ。武士たるものの懲しめに、打殺さんず、覺期をせよ。と敎圍悍く鳥銃を、又振揚て打んとす。浩處に一箇の老人、齡は五十許なるべし、裁著とかいふ袴を穿たる、腰に藤柄の短刀を跨へ、嚮よりこゝに來かゝりて、老たる槇の蔭にをり、縡の要を闞窺つゝ、忽地に走出て、打んとしたる信乃が袂に、携隔て推禁め、御旅人暫時等せ給へ。小人事は當國なる、猿石の村長にて、四六城木工作と呼るゝもの也。こゝらに先祖相傳の、山林の候へば、日毎に杣人を遣して、木を伐出すを旁の、活業にしたるにより、けふしも山よりかへるさに、不憶來あはして、事情を纔に知れり。おん腹立は理りなれども、この方ざまは小人が、年來相識る主從也。よりて和解奉る。枉て許させ給へかし。と勸解れば件の武士主從は、自脈を診りつ、打れたる、手足を捺り身を起して、面目なけに跪き、木工作よくこそ來給ひたれ。われいかにして賊心あらん。媼内奴が出來心もて、ぬしの刀に手を被けしより、かくの如くに打れたり。左も右も誘へて、縡穩便を賴むのみ。といへば又媼内も、只今主人のいはるゝ如く、いと苛刻く打伏られても、皆是做せし祟りにこそ、と思へば济て敵對ひせず。賠話してたべ。と掌を、うち合してぞ憑みける。木工作さこそ、と頷きつ、再信乃にうち對ひて、只今聞せ給

もあらせず件の武士は、刀を晃りと振揚て、眞額臨で斫らんとするを、信乃は騒がず鳥銃もて、受流し拂退て、六七合戰ふ程に、媼内やうやく身を起して、半鎗たる中刀を、拔欹めつゝ背後より、はや近づくを尻目にかくる、信乃は日比の本事を出して、銑こと宛電光の、甍を走るに異ならず。既にして件の武士の、刃を礙と打落す、背後に閃めく媼内が、刃にはやく身を反して、肩尖丁と打しかば、臀居に撻と平伏たり。透もあらせず件の武士は、組んとするを、組しも果ず、又腢を礙と打つ、拳の冴に霎時も得堪ず、云とばかりに仰反たる、主を資る媼内は、起あがらんとする程に、信乃は鳥銃ふり揚て、又媼内を打伏たる、本事に怯む件の武士も、起んとしたる背腢、席薦の塵埃を拂ふがごとく、これ彼齊一打居られて、主從息もたえ〴〵に、免し給へ。と叫ぶになん。信乃は怒れる聲高やかに、汝等人を識らずして、不良の心を起せしは、睡れる虎の髯を曳く、鼠に似たる白徒也。吾身に恙なしといへども、仇を寄せんと思ふにより、倒臥せしをしらざるや。汝等はこれ主從歟。今見る所は本來の、山賊にはあるべからず。初はわれを鹿也、と思ひ違へて放被し、銃丸に命を喪るゝとも、そは愆なればいかにせん。只命運の微かりしを、泉下に思ひをらんのみ、深く怨るよしもなけれど、汝等は然にあらず。愆て人を撃しを、還て僥倖にして、路銀の多寡を相揣り、腰刀に目をかけて、奪略らん

給へかし。といへば然なりと頷きて、主従二名足ばやに、走去らんとしてけるを、忽地に又立留りて、媼内は何とか思ふ。彼旅客の兩刀は、その刃こそ鋭きや鈍きや、定かに知るよしなけれども表裝に金銀多くて、鮫も亦貴價あり。且身のざまの賤しからねば、盤纒も腰に多かるべし。世の常言を引にあらねど、毒を啖はゞ皿を舐れ。人を殺さば血を見るべし、といふことあるをいかにぞや、寶の山に入りながら、手を空しくして歸ることかは。人として毒なきも、眞の丈夫とすべからず。死人に要なき名刀を、今取らずして捨てゆかば、後悔爰に立がたし。とく物せよ。と囁けば、媼内莞爾とうち笑て、仰寔に至極せり。然らば路銀は山分にして、僕にも賜れかし。といはせも果ず頷きて、いふにや及ぶ疾せよ。といそがし立て主従は、舊の所にかへり來つ、且先后を見かへりたる、媼内は既にはや、信乃が刀に手を被けて、略らんとしたる腕を、信乃は臥つゝ楚と捉へて、曳一曳て投甃せば、媼内は吽嗟と叫びて、筋斗れる身を虚ざまに、三間ばかりあなたなる、株に腈を撲惱されて、霎時は起も得ざりけり。件の武士はこの光景に、駭くこと大かたならず、持たる鳥銃振閃かして、撃仆さん、と走り蒐るを、信乃は透さず足を飛して、亦脇腹を礙と蹶る。蹴られて苦と叫びもあへず、鳥銃憂哩と投捨て、兩三歩踏地ろぎつゝ、刀を抜んとする程に、信乃ははやくも身を起して、遺たる鳥銃とり揚る、程

わけゆく黃昏時、背後より放つ鳥銃に、左の腋を撃れしかども、幸ひにして身に中らず、袖の縫處に銃丸は拔けしを、仇を間近く引よせん、と思へばそが儘身を轉して、虛滅しつゝ俟程に、且して一箇の武士、齡は四十許なるべし、眼圓に色淺黑く、蒼髯頤に滿て、身長高きが、狩裝束に行縢して、紫銅作りの兩刀を跨へ、手に携たる鳥銃もて、枯芒花を推分々々、是方を投て來る後方より、獲物の兎を引提たる、一箇の奴隷從ひ來つ。件の武士は旣にはや、信乃が身邊に近づきて、見つゝ忽地膽を潰して、こは什麽いかに。とばかりに、呆るゝこと半晌ばかり。從者も亦うち駭きて、扠も〳〵。と口隱る、頭を搔つ先後に、人もや來る、と跪立て、項を伸す遠見は、蘆間隱れの鷺鷥に似て、倶に心を苦しめけり。かくてあるべきにあらざれば、件の武士は從者を、見かへりて聲を潛め、こゝらに居たる挾牡鹿に、寃違はぬ兩銃丸、擊留めたりと思ひしに、鹿にはあらで旅客を、擊倒せしこそ愆なれ。この人年のいとわかきに、甚麽なる星の祟りてや、かくは非命に絕たれば、今さらにせん術なし。身に兩刀を帶たれば、御內人の親類などにて、他鄕より來つるものの歟。倘爾らんにはわがうへ也、いかにすべき。と囁けば、從者も亦信乃を、つく〴〵と見て聲を低め、現宣するごとく、もし御內人の親屬にて、その方ざまの人知らば、敵手どられてむづかしからん。折よく四下に來る人なし。疾々かへらせ

第七輯 巻之四

第六十八回

穴山の枯野に村長秋實を救ふ
猿石の旅宿に濱路濱路を誘ふ

奈末與美の甲斐州は、州の四境皆山也。よりて甲斐と名づけたり。甲斐は峽なり。峽は間也。人僉山の峽に住り。よりてこれを甲斐といふ。抑富野穴山の兩郷は、西に白峯、鳳凰山、(又法王山ともいふ。)地藏嶽、藥師嶽あり、西北に駒嶽、八嶽あり、北に金峯山あり。白峯は古歌に、甲斐が峯と詠るもの是也。この他身延山、七面山、夢山、狹山、櫻尾岳、鹽山、神座山、中山篠子、天目山あり。蕃山禿山に至りては、僂るに遑もあらず。されば當時の國守、武田家の城は、八代郡躑躅崎に在り。これを古府と呼做せしは、中府新府のいで來しより、後世の稱呼也。就中富野穴山は、西と南北の、三方みな山にして、又この山脚に富士川あり、迺川の中流を、河鹿川と呼做しつ、上を釜無川といふめり。かゝれども此わたりは、當時村落罕にして、樵夫獵戸ならぬものの、往還跡絶し麓路也。然程に犬塚信乃は、富野穴山のほとりなる、芒花

定正を諫めしかども、定正一毫も聽ずして、貳なきものに思ふになん、幾程もなく逸東太を、老臣の次にをらして、家の政事を任せしかば、逸東太は勢ひつきて、人の耳目を驚す、權家にぞなりにける。不題犬塚信乃戍孝は、曩に荒芽山の厄難に道節莊助、現八小文吾等の、四犬士に別れしより、只管環會んとて、信濃路より越後に赴き、なほ陸奥出羽に杖を曳くに、路費竭ればその地方に、逗留しつゝ文學武藝を、人に誨て束脩を受け、盤纏又整へば、その地方を立去て、他所に遊歴せし程に、既に三とせの光陰を送りて、四年といふ陽月の下浣、（大角が現八と共に赤岩を首途せし年也）甲斐州に旅宿をしつゝ、一日巨摩郡なる、富野穴山の山脚を過るに、小春の天の癖なれば、いそぐとすれど暮るゝにはやき、山腹の冬枯野邊、尾花搔わきゆく程に、忽地背後に銃響高く、撻と放せし鳥銃に、信乃は左の腋を撃れて、そが儘撲地と倒れけり。畢竟信乃銃丸に撃倒されし、生死存亡甚麼ぞや。そは次の巻に、解分るを聽ねかし。

舊の客店にかへり來つ、この夜もこゝに逗留して、主從額を病しけり。登時逸東太は、肚裏に思ふやう、縱船虫は逃亡たりとも、彼短刀だになほあらば、立かへりてまうし解く、よすがは其處に無にしもあらぬを、短刀さへに奪れたれば、白井へは還りがたし。いかにすべき、と頭を傾け、手を叉きて尋思をするに、鎌倉の管領、扇谷定正ぬしは、近曾上毛白井の城を、わが主君長尾景春殿に責落されて、今は武藏なる、五十子の城に在り。定正數度の敗軍によりて、長尾家を怨ること、既に骨髓に徹すと聞り。われ五十子に赴きて、定正ぬしに降參し、白井攻の案內たるべき、計策を具に述て、年來長尾に仕へたる、趣をもて仕官を願はゞ、定正必歡て、われを重用せんずらん。さばれ扇谷家は、わが故主なる、千葉自胤と合體久し。爾るに自胤は、近曾滸我の成氏朝臣に、志を運ぶをもて、扇谷家と睦しからず、と豫て聞たる事もあれば、定正ぬしに仕るとも、影護きことはなし。是より外に身を寓せて、高祿を得んよすがはあらず、と計較やうやく定りければ、從者等によしを告て、軈て五十子の城に赴き、主なりける長尾景春を恨るよしあつて、降參す。といひ入れけるに、定正初は疑ふて、問答數回に及ぶといへども、逸東太は言葉を巧にして、よくその機を攬りしかば、定正遂に逸東太を留めて、これを用ること大かたならず。扇谷の老臣等及、定正の內室蟹目前は、なほ逸東太を疑ふて、屢

面色しつゝ、しば〳〵四下を見かへりて、船虫物は欲しからずや、晝餉の割籠の餘れるあり、又吸筒に酒もあらん。喫一喫て寢まりね。といひつゝ割籠も吸筒も、臂長に引よして、假の妹伕の三三九度、媒妁不用の盃は、仇と情の細々言、煮染の肴を抓食ひ、冷酒もはや傾盡せし、半醉機嫌に春は來て、はや引容るゝ夜衾裏、甚麽なる夢をや結びけん、楚の襄王にあらねども雨の箭頭に雲の盾、鬪戰數刻更闌て、疲勞果たる逸東太は、前後もしらず臥たりける。却說その天は明はなれて、烏の聲に驚覺たる、逸東太は左右を見るに、枕ならべし船虫は、何處ゆきけんあることとなし。こは什麽いかに。と駭騷ぎて、厠浴室の四隅まで、索求るに影だに見えず。原來彼奴が奸計もて、われに一碗態俤し、一口物に頰を燒れて、捕逃せしこそ朽をしけれ。者共起よ。と呼立れば、次の間に臥たりける、從者すべて起て來つ。船虫は夜の中に、索を脫て逃亡たり。と聞くに衆皆駭くのみ。逸東太が謀られたる、よしを誰とて知るものなければ、その綁を脫たる事、妖猫に優せし博煉也とて、舌を掉ふて罵騷げば、逸東太は竊に羞て、失たる物のありもやするとて、衣を振ひ駄荷を披きて、物悉く檢見るに、彼木天蓼の短刀と、主君より賜りたる、三十金の盤纏なし。原來件の二種も、船虫奴に奪去られたり。遠くはゆかじ、追蒐よとて、主從四方に部して、その日は終日索ねしかども、絕て往方を知るよしなければ、

沈めば、逸東太は心動きて、肚裏に思ふやう、この船虫は歳もはや、四十に近き欲落の花、さのみ見どころあるものならねど、然とて捨たる女人にあらず。われ長尾家に仕へてより、妻は三人まで娶りしかども、或は一トせ、或は半年、添ふや添ずに身まかりて、只一はしらの子倘なし。かゝれば去歳より無妻にして、何がしの僧正にも、優て精進潔齋の、枕寂しき折なるに、是奴を一ト宵調戯まば、飯盛に似ず、瘡毒なからん。海士が鹽燒く辛き世に、勘定盡もあるものを、道中ばかり妾にして、遂に白井へ牽もてゆきて、この身の罪を贖はゞ、孰にしても損はなし、と計較既に定りければ、頻りに頷き含笑て、船虫汝が願ひの趣、うけ引くべき事ならねども、心操の不便さに、霎時縛の索を放して、今宵一ト夜さ女夫にならん。勿論わが從者等には、深くも愼む事にしあれば、天の明ぬ間に又縛て、白井へ牽て云々と、主君へ聞えあげて後、命は運に任すべし。先よくこの義をこゝろ得て、後に異論をいひ被ずは、われ又互く相計んや。こゝろ得たる歟、いかにぞや。と問へば船虫涙を斂めて、そは歡しく侍るかし。一ト宵情に預らば、又縛めて何國迄、牽るゝとても恨なし。とく縛を解てよ。といふに歡ぶ逸東太は、遽しく立よりて、縛の索釋捨て、縊れしところを撫てやる、その手をやをら携て、臥房の內へ伴へば、船虫は笑しげに、秋波つかふ虚靨、もたれ懸れば逸東太は、魂飛で戰るゝを、なほも騷がぬ

なき心ぞや。斯鬼々しきおん身なれども、憎しとのみは思ひ侍らず。浮世に幸なき妾が罪障、兩彼一角を妖怪變化と、知らで妻にはなりしかど、耻しながら一ト宵も、眞に枕を替せし事は、歳以來絕てなし。老たる人の癖なれば、調戲物にせらるゝと、思ふて辛防しはべりにき。然るを夫に異ならで、妾も首を召れなば、いかでかおん身を恨し、と思ふ祟をなさでや已ん。過世甚麼なる業報にや、おん身と妾は今世にて、讐敵になり侍れども、熟視ればおん身の面影、わらはが武藏に在りし時、幼稚馴染で睦かりし、良夫に似させ給ひにき。舊の良人は故ありて、世をはやうし侍りしかば、わらはは處々に流浪して、奸に就、歹に就き、思ひ出さぬ日はなきに、見れば見る隨よく似給ひし、おん身に情願あり。そをうけ引せ給はんや。といふに訝る逸東太は、枕を擡身を起して、この老狐が何をかいふ。よしやわが面影の、汝の舊夫に似るとも、そをわが知れる事にはあらず。といへば船虫うち泣て、如右宣へば情もなく、竹木に等しき君にぞあらん。妾が願ひは餘の議に侍らず。この道中の日子の程、密々におん身をさして、妾に良人と呼し給はゞ、世になき夫にあふ心地して、よしや刃の鏽となるとも、良人の爲に捨る命と、思はゞ怨もなかるべし。况おん身がうち解て、一ト宵たりとも眞の夫に、なりて慰め給はらば、そは歡びて首級の座に、直りて成佛し侍りてん。うけ引給へ。と密音に、かき口說つゝ泣

たるのみ。（唐山にて所云、金華の猫王、つれ〴〵草にいへる、連歌師何阿彌がおそれたるねこまたも、亦是山猫の類なるべし。）

案下某生再説、籠山逸東太縁連は、辛く二犬士の怨を免れて、搦捕たる船虫を、行轎子にうち乘して、主從纔に三四名、白井の城を投ていそぐ程に、ゆき〳〵て信濃州、沓掛の驛に宿を求し宵、不慮の難儀のいで來にけり、その所以を原るに、逸東太は赤岩にて、賴切たる從者の、尾江内墓内を、現八に撃れしより、既に從僕二名を闕たり。是により、大約宿に就毎に、船虫を從者して、通宵戍らせんと、欲するにその人足らねば、船虫をわが臥房なる、柱に痛く繋措て、わが身は臥つゝこれを戍れり。かゝりし程に此地方は、山腹なる驛路の、深ゆく秋の季なれば、峯上に牝戀ふ牡鹿の聲、檐下に暢ふ秋の風も、みな膓を斷媒にて、悲猿一聲山峡月といひけん、逆旅の情に堪ぬ夜なるも、心なき從者等は、皆次の間に枕を並べて、鼾睡の聲と齣齒の、背のみ耳に就までに、逸東太は寐も寢られず、幾遍となく臥轉りて、心苦しく思ふ折、枕邊に繋れたる、船虫は哀しげに、逸東太を呼覺して、喃籠山ぬし、木天蓼の短刀の、失たる事も、その鞘を、摧きて藥に用ひし事も、假一角が所爲にして、初は妾が心もて、夫に薦めし事にはあらぬを、おん身の罪を脱れん料に、妾を痛く鞫めて、はる〴〵白井へ將んとは、現惜

傀師といふもの出來にけり。こは傀儡師に似たるものにて、多くは乞者の所爲なるが、今はこは絶たり。又繪草子にも、當時山猫物語、猫又づくしなンどいふ、小兒の翫好物多く出たり。これらの草子は、今罕に傳ふ。近曾予、寫山樓にて、明畫の猫を見たり。その猫の相貌人家の猫と同じからず。尤兇惡にして、仰て飛鳥を窺ふものの如し。その紙中は青壁蒼岩を畫るのみ。よくこの猫に、名字を定むるものあることなし。予これを觀て、こは山猫ならんといひにき。かゝれば唐山にも、一種の山猫てふものあるなるべし。いまだ具に、筆に載たるものを見ざるのみ。又按ずるに、虎と猫とはその形狀相似て、その氣を同くす。虎の人を蹈で、撲殺せしとき、速にこれを啖はず。死人の上を跳踰て疾視ときは、その死人おのづから立て帶を解き、衣を脫で又倒る。こゝに於て、虎その赤裸になりしを見て、初てこれを啖ふといへり。猫も亦死人のうへを跳踰れば、その死人立て徘徊す。一たび水を飲むときは、力よく百人に敵す。この時、棕梠箒をもて打ときは、その人又倒るといへり。是に由て彼を思へば、虎と猫と啻その形狀の相似たるのみならず、亦よくその氣を同じうするもの也。人家の老猫化てその家の老母となり、或は食事を人に見せず、或は竊に、行燈の油を舐れるなンどいふ物語は、こともふりにたり。山猫の怪談は、聊等類を遁れ

半分を省くべし。といふに現八頷きて、そこらの遠慮は某も、御邊と亦同意也。さばれ且この儘に、鎌倉に赴きて、便宜を討めて形貌を更ん。と兩人潛に商量しつゝ、詰旦宿りを出て、いくそばくその日を累ね、信濃路より上毛武藏の名所古迹をうち巡り、澳津波よる相摸州は、山にも富て薪樵る、鎌倉に旅宿しつゝ、いかで犬塚犬川等の、五犬士に環會んとて、日々に巷に遊べども、聊似たる人にもあはず。そが中に大角は、里の飼猫なんどはさら也、土もて作れる猫を見ても、舊怨忽地胸に浮みて、亡親の爲に物を諱むこと、勝母に車を返せしが如し。現終身の喪ありといはれし、孝子の情こそ有がたけれ。

曲亭主人曰、唐山にて山猫と唱るものは、卽虎の事也。皇國の俗の所云、山猫は猫也。或はいふ。人家の猫逃て、山林に入て返らざるもの、鳥鼠を食としてみづから養ふ。年を歷て、形巨大に至れば、人の家を張て、小兒を捕啖ふことあり。これを俗に山猫といふ也。或はいふ。山猫は一種の妖獸也。その小大狗の如く、猛きこと虎に似たりとぞ、いまだ孰か信なるを知らず。嘗海東風土記、及八丈筆記を閲せしに、山猫は八丈なる嶋山にあり。この他、邊境の深山には、稀にこれありといふ。むかし慶長寛永年の間、いづれの州にか有けん、山猫を獵出せし事ありけり。この風聲、都下の人口に膾炙せしかば、世に山猫

現八うち見て訝りて、鵙平が事を問ふに、女房答て、鵙平は正月の比より、病とはなしに老病の、漸々に身にそふて、本月の初旬、竟に身まかり侍りにき。赤岩なる一角ぬしの、怪談こゝらへも聞えたる、去歳の冬まで健にて、なほこの店に侍りにき。庚申山の麓なる、怪物の風聲絕しより、導者を傭ふものなく、弓箭も賣れずなりにければ、男子が店にをるも要なし。妾は只今諮給ひし、鵙平が娘に侍り。といふに現八歎息して、老幼不定の世に幸あり。齢に不足なき叟ならんが、脆きは人の命也。われ去歳の秋こゝに憩ひて、あるじの翁が長物がたりに、益を得たる事多かり。その歡びをいはんとて、立よりぬるに、その人は、黃泉に歸去りぬ、と聞けばいと〳〵遺憾し。これ靈前へ手向給へ。といひつゝ懐掻撈りて、取出す粒銀を、紙に拈りて取らすれば、女人はこゝろを得ざれども、亦推辭んはさすがにて、受戴きてぞ收めける。有此しかば現八は、大角と共侶に、いそしく茶店を立出て、この宵は網苧の客店に宿とりつ、投て往方を相譚に、大角霎時沈吟して、京師のかたは既にはや、御邊三とせに及ぶまで、久しく逗留し給ひたれば、這囘は且鎌倉へ赴くべし。よりて思ふに、兩人斯苛しき、打扮して遊歷せば、里の總角牛打童も、武藝を嗜む今の世也、皆武者修行ならんとて、勝負を望み怨を含みて、仇をなすもの多かるべし。かゝれば形貌を窶してこそ、さる殃厄の起ることなく、盤纏も

ること半晌許。既に祭了れども、なほかへり去るに忍びず。軈て沙石の尖れるを拾て、傍なる青壁に識すを見れば、

呉竹の世になき親の渡りけん跡をみやまの雲の棧梯

現八這これを吟じて、且感じ且哀戚の、眼包を倶に潤しけり。既にして二犬士は、奥院に赴きて、三猫窟を遥拝す。更に又東窖より、投降を下らんとするに、日ははや大く闌たるに、割籠を遺れてもて來ざれば、物欲うなりて堪られず。時に老たる兩箇の樵夫、路傍に憩てをり、二犬士の來つるを見て、喃々。と喚留め、殿原割籠を忘れ給はずや。俺們が貴食の餘あり。是進せん。といひかけて、餅十枚許を取出て、誘とて軈て贈りにければ、二犬士は歡び受て、つゐゐでこれを腹するに、その味ひ尤妙也。立地にこれを盡して、石澇を掬びて飲んとて、初て倏を見かへるに、兩箇の樵夫はなかりけり。二犬士驚き怪みて、事情を考るに、處に山猫の亡びしを歡びて、舊所へかへるとて別を告たる、彼山神と土地の神が、假に樵夫と見れて、餅を遺けて俺們が、饑に充たるものにやあらん。と思ふに感心大かたならず。等しくそなたを伏拝みて、歡びを述德に答、舊の胎内竇を出て、その晡當に網當に來にけり。これにより現八は、大角によしを告て、鳴平が茶店に憩ふに、あるじの翁はあらずして、わかき女房一人ゐたり。

れよりなべて角太郎を、大角とぞ唱へける。この時までも奴婢五六名、假一角に仕へし隨にて、なほ赤岩の宿所にをり。彼等は初め假一角に、使れたるものといふとも、主の妖怪たりしを知らねば、大角はこれをも憐みて、衣裳調度を紀念に與へて、この日皆身の暇をとらしつ、次の日大角は、現八と共に、香華院へ墓參して、諸靈へ起行の別を告、且香奠を寺へ贈りて、遲々として去るに忍びず。現八も亦、異姓の兄弟たる義をもつて、大角が父母、雛衣等を祭りけり。かくてあるべきにあらざれば、大角は現八とともに、その曛昏に、赤岩に立かへりて、宿所を買主に遞與しつゝ、兩人行裝を整て、その詰旦首途す。これを送らんといふもの多かりけるを、大角禁めて敢許さず。然りけれども氷六等、その他も里人見え隱れに、送りて四五里に及ぶもの、一百餘人に及びけり。有然程に大角は、且庚申山へ赴きて、亡父の遺迹を見んとて、現八を郷導にして、件の深山に攀登れば、聞しに優たる神迹靈地に、目を驚さずといふことなし。鳥路熊徑の幽なる、奇峯怪松の巧なる、筆に載するとも、辯に述べくもあらず。彼石橋の危殆なる、又石門の亭々たる、實に是神作なるべし。かくて一十二の岩橋を渡り盡して、曩に現八が、一角の寃魂に遭にきといふ、岩窟の邊に至れば、冷風面を撲、山氣膚を犯して物凄じく、こゝに懷舊の泪を沃ぎて、恍忙として徘徊す。即便行潦の奠して、亡父の靈魂を祭


名を改めて大角留別の小集す
村長
村長


犬飼現八
犬村大角

些の坊料を物しつ、こゝを定念佛堂に造り更て、篤實なる老僧を住しめ、又二百金は、赤岩犬村なる民の、貧きものに施行して、遺る限なく賑せし、そが中に十金は、雛衣が寓居の料として、氷六に贈遣しければ、衆人これを徳として、怡悦の聲兩村に滿けり。かくて又角太郎は、殘れる二百金を、亦兩箇に分ちて、百金は現八が路費として、その腰に纏しめ、百金は自分の盤纏に充て、准備やうやく整ふ程に、あら玉の年立かへりて、春も如月の中浣になりぬ。山々の雪はまだ消ねども、里はなごりなく春色を催して、世は暖和になりしかば、日ならず首途すべけれとて、又赤岩犬村の村長里人、氷六等を招き聚へて、留別の酒食を薦め、扨衆人にいへりけるは、某ちかきに相別れんとす。再會尤測りがたし。抑一角と呼るゝ事、赤岩の家、世代の通稱なり。かゝれば某も亦角太郎を改めて、一角と名告るべし。さばれ一角の稱はこの年來、妖怪の爲に冒し瀆されたるを、よしや家の通稱也とも、承嗣んこと快からず。且某は犬村の養嗣たり。實家に兒孫なきをもて、則兩家を混合して、某一人家督たり。かゝれば一角の一文字は、妖怪の爲に取らず。則一に萬物の、靈たる人の人字を加えて犬となし、今より犬村大角禮儀と名告るべし。この義をこゝろ得給ひね。といふに衆皆感佩して、いとゞ餘波を惜みけり。既にして現八も、この席上に在り。角太郎が名を取ることの、宜さをふかく感じつ。こ

八と、倶に諸國を遊歴して、環會んと思ひけり。かくて爾後角太郎は、浴せんとするときに、現八に請ふやう、御邊の痣は面部にありて、隱れあるべうもあらざれども、某が痣は臂に在り。最尾陋なる處なれば、輙くは見せがたし。浴する折見給へ。といふに現八こゝろを得て、その赤裸になりしを見るに、痣の形のわれに等しく、彼も牡丹に似たりしかば、いよ〳〵犬士たるよしを、感悟して倍歡び、わが信の字の玉を取出て、角太郎に見せければ、角太郎も亦感じて已ず、いよ〳〵異姓の兄弟たるべき、志を盡しける。かゝりし程にこの年の、陽月も過る比、五十日の中陰の果にければ、角太郎は、赤岩犬村の村長等、並に赤縄新田なる、氷六を招きよして、赤岩犬村兩家相傳の田園家庫を、沽却さんことを相譚に、衆皆そのこゝろを得ざれば、且疑ひ且禁めて、承引べくもあらざりしを、角太郎は、同因の友達を索ん爲に、現八と共侶に、萬里の逆旅に赴くよしと、安房の里見家に仕ふべき、約束あるよしを告しかば、衆人遂に推辭難て、やうやくその意に任しけり。しかれどもその田園家庫を、買んといふもの早になければ、姑く時を候程に、この年の暮に至りて、望る人のいで來にければ、價を廉して賣渡すに、六百五十餘金を獲たり。則この金を四箇に分ちて、二百金は香華院に布施して、赤岩犬村の兩家、三世の父母の爲、並に亡妻雛衣の祠堂料とし、又五十餘金は、返璧の草菴に、

赤岩の里人、近邨の百姓まで、すべて柩を送るもの、一千餘人に及びけり。その次の日も吉日なれば、又雛衣が柩を出すに、送ゆくものきのふの如し。されば赤岩犬村兩家の墳墓は、おなじ寺にあるをもて、寺門も兩日賑ひけり。是よりして角太郎は、父と妻との石塔を造立、七七の忌日毎に、經を讀し墓參りして、追薦の佛事怠ることなく、喪中の勤務叮寧なれば、人僉殊勝の事とし稱て、いとゞ哀れを催しけり。有然程に犬飼現八は、赤岩の宿所に逗留して、角太郎が徒然を慰るに、犬塚信乃が孝友、その父番作が志氣、母手束が貞操、その伯母龜篠、大塚蟇六等が奸計、信乃が結髪の妻濱路が薄命、犬川莊助が人となり、且莊助が主の仇、簸上宮六を擊し事、及軍木五倍二等に誣られて、寃枉に獄舍に繫れ、命も既に危かりしを、信乃小文吾現八等、これを救ひし縡の趣、犬田小文吾が人となり、その父文五兵衞が事、山林房八が義烈、その妻沼藺が貞順、房八が母妙眞、犬江親兵衞が事、犬山道節が復讐の縡の顚末、その舊僕姥雪猾平、その妻音音、その子力二郎尺八が戰歿、その媳曳手單節が薄命、又現八が父糠助が事、養父犬飼見兵衞夫婦の事、その身も滸我の管領に仕へしとき、犬塚信乃と組擊したる、その縡の一五一十、面りに見し事はさら也、傳聞たる事までも、日毎に物がたりして慰めければ、角太郎は聞く毎に、感激せずといふことなく、いよゝ五犬士の慕しくて、忌だに闋なば現

赤岩の宿所へ赴く程に、犬村の里人も、これを送りて共侶に、陸續として徐行けり。吁瑞玉の靈たるや、犬士にあらざれば奇特なし。されば雛衣が呑たる玉は、仇を仆して良人に返しぬ。實に是返璧てふ、地方の字空しからず、亦一奇事といはまくのみ。頤ふに、犬塚信乃が感得したる、孝の字の靈玉は、初與四郎狗が呑たりしを、その瘡口より顯れたり。又山林房八が妻、沼藺は、仂きとき父の網せし、仁字自生の玉を呑しに、その玉腹に在ること十五年、その子大八の親兵衛が生るゝに及びて、件の玉を握もてり。然るを人よく知るものなし。親兵衛甫て四才になるとき、初てその掌をひらきしかば、玉は人間に顯れにき。有如之者彼與四郎狗と、沼藺と雛衣が身の中より、玉の顯れ出し事と、呑たる事は違はねども、その趣各々異也。看官これをおもひねかし。

第六十七回

禮儀義家祿を捨つ
船虫謀て縲絏を脱る

却說犬村角太郎は、その次の日より棺材を集て、兩箇の柩を造らするに、五六日にして造出せしかば、迺吉日を卜定て、父一角武遠の白骨を、香華院へ送り葬るに、赤岩の舊弟子、犬村

は云々と、従者にこゝろを得さして、船虫をわが轎子に、うち乗してあちこちと、雨戸を操げて戍を固くし、みづからこれに附そふて、網苧のかたに走去りけり。嗚呼逸東太縁連は、犬坂毛野が父の讐也。然るを現八角太郎は、この時世に毛野ありて、同因果の犬士たりしを、夢にだも知るよしなければ、船虫をすら乞ふに任して、故して白井へ還せしは、仇の為に刃を借し、盗児に糧を齎すといふ、古語に似たりとて、後に悔しく思ひしとぞ。かゝる事世に多かるべし。有然程に角太郎は、妖怪親子の亡骸を、焼捨ばやと思ひしかば、里人等を召近づけて、如此々々と相譚に、衆皆一議に及ずして、三個の首級、両個の軀を、外面へ擡出しつ、樹の枝枯草を積累ねて、そが儘に焼立れば、皆灰燼となりて亡にけり。かくて雨後この処に、怪しき事のありしかば、これを見るもの病煩ふて、殆死せんとするに至れり。この故に里人等は、件の灰を哀埋みて、猫塚とぞ名づけゝる。これよりしてさる祟もなく、十里四方は田畑も、鼠の憑ことなかりけり。毒薬變じて薬となる、鄙語に似たるなるべし。閒話休題。かくて又角太郎は、雛衣が亡骸を、赤岩の宿所へ遣さんとて、氷六村長等に相譚に、船虫の乗捨たる、轎子のありしかば、氷六等相計て、亡骸をこれに斂め、里人等幾人か、既にして舁もて出せば、角太郎は父の髑髏を、布に裹みかき抱きて、庵を老たる里人に守らしつ、現八を相伴て、

て、雛衣が亡骸を、扛て納戸へ容るゝ折から、氷六を首として、犬村赤岩なる村長等、各々母立たる里人の、利鎌連枷などを、携たるを夥將て、はやくも聚ひ來にけるを、里人等は居あまりて、僉庭面に土居たり。角太郎はこれを見て、且氷六村長等に、現八を引あはして、雛衣が自殺の趣、假一角親子の事、大約仇撃の顚末を、𥳑短く説示せば、氷六村長等はさら也、外面なりし里人等も、雛衣が死を憐み、又妖怪に舌を振ふて、駭怕れざるものなく、只二犬士の孝義武勇を、感嘆しつゝ譽々と、霎時罵り已ざりけり。かくて角太郎現八は、逸東太が非義、船虫が濺惡、且そのいひつろ絆の趣、二犬士の思ふよしさへ、村長等に報知するを、衆皆齊一うち聞て、籠山も船虫も、いと憎むべきもの共なれども、この事官府へ訴られなば、假一角が弟子なりし、里人も引出されん。然らば犬村赤岩の村の雜費の多く被りて、難義に及ぶものもおらんを、籠山を許しかへして、船虫をさへ捕し給はゞ、風波立でいとめでたし。後日に異論の起りもせば、俺們證人たるべし。と僉共侶に應しかば、角太郎現八は、逸東太に云々と、所望を允すよしを答て、木天蓼の短刀と、渠が兩刀を返しにければ、縁連歡び再拜して、二犬士に別を告、船虫を牽立て、はや外面へ出る程に、逸東太が從者は、何の程にか還來にけん、行轎子を舁居て、柴門のはとりになり、主の出るを見かへりて、軈て轎子をよせしかば、逸東太

勇士の獵箭に射て落されしを、幸ひにして肩に引被け、扶けて赤岩に還りにき。又只俺們のみならで、件の山の木精すら、役使れ馬に變じて、この年來赤岩なる、宿所の厩に繋れしが、けふ山猫の撃れしよしを、聞くとそが儘絆を外して、舊の山路に還りたり。犬飼犬村兩豪傑の、資によりて怨敵亡び、俺們ふたゝび舊所に安堵す。歡び譬を取るに物なし。よりて赤岩犬村なる、村長里人等に、徇知らし、及赤岩の弟子等に、緣由を告しかど、弟子等は皆駭くのみ、妖怪を師とし仰ぎて、その大刀筋を稟たりしを、羞てこゝへは來べくもあらねど、村長里人等は僉來つべし。これらの由を告んとて、且くこゝへ立よりぬ。去來々々と。別を告て、はや外面へ出ると思へば、忽地二朶の雲と變じて、庚申山のかたに飛去けり。逸東太船虫は、かさねかさねし奇異怪事に、呆れてそなたを仰ぐのみ。角太郎と現八は、件の惡獸兩箇の首級を、引寄してつら〳〵見るに、貒も貂も尋常ならず、現稀なるべき妖怪也。只是のみにあらずして、牙二郎が首級も亦、惡相を顯して、齒を切りて睨詰たる、眼は宛猫に似て、金銀のごとく光つゝ、全身斑に毛さへ生たり。現山猫の胤なること、疑ひなしと思ふにも、なほ歎息に堪ざりけり。かくて角太郎は、里人を俟程に、筧の水を掬びかけ、靈玉の血を洗ひ流して、袋に斂め項に懸け、讐の十々滅に刺たりし、像見の短刀を拔とりて、赤血を拭ひ鞘に納め、現八と相譚

逃亡たり。といふに現八沈吟じて、爾らば緣連和主を勞せん。件の村に赴きて、村長等を將てかへり來よ。とく〳〵せずや。と分付る、權を執られし逸東太は、是すら推辭ことを得ず、承りぬ。と應つゝ、船虫を綁たる、索の端を柱に繫ぎて、走去らんとする程に、外面に又人ありて、やよ等給へ。と呼禁め、障子の蔭に立別れたる、左右齊一進入るを、と見れば是別人ならず、月蓑團吾、八黨東太なりければ、角太郎現八は、縡のこゝろを揣りかねて、些も油斷せざりけり。當下團吾東太等は、携來つる異類の頭顱を、席上に推並べ、二犬士にうち對ひて、年來名を藉り、形を似せたる、妖怪やうやく發覺れて、仇を撃れし縡の趣は、曩に假一角親子の從者の、逃て赤岩へかへり來て、云々と報るにより、その歡びを述ん爲に、兩個の首級を齎したり。是はこれ、彼山猫の眷屬なる、最も年老る貒と貂也。山猫に相從ふて、塾生の形貌に變じ、貒は玉坂飛伴太と呼れ、貂は佶足潑太郎と呼れて、人間に在ること久し。然るを昨宵犬飼ぬしの、大刀風に殺立られて、是奴等既に深痍を負ぬ。さばれなほ死ざれば、逃て深山へ隱れんとしてけるを、某等相謀て、刺殺して首級を捕たり。今は何をか憑むべき。俺們も亦人倫ならず。庚申山の麓なる、土地の神と山神也。神通山猫に及ねば、こゝろならずも役使れて、亦塾生に變じつゝ、團吾東太と呼れし也。眞實歸降したるにあらねば、一昨の宵山猫が、胎内竇の邊にて

せしを、禁めて便を得たりしかば、軈て夫婦を一處にしつゝ、勘當をさへ許さして、親の威光に胎内なる、子を求んと計較しに、いく程もなく、木天蓼の、良材も亦手に入ければ、いよゝ一角と謀合して、縡云々と謀りにき。今さら後悔その詮なけれど、世に女子と生れしものゝ、好も歹も夫の爲に、心を用ひぬ事のなければ、夫の指揮に已ことを、得ざりしよしを猜し給へ。といふに現八冷笑ひて、夫の爲に謀るとも、惡事と知らば諫めもすべきに、殘忍邪慳を事として、夫に忠ある貞女といはんや。寔に烏滸の痴者也。と叱懲せば船虫は、頭を低てふたゝび得いはず。登時現八は、又逸東太にうち對ひて、緣連和主が辯舌もて、言を飾りてかなしみ乞ふとも、允すべきよしはあらねど、武士たるものゝ恥をしらで、阿容々々として命を惜むは、志ある百姓にも、町人にも劣りたり。さる白物を敵手にして、官府を勞し奉らば、不狂人も走るに似たり。犬村ぬしに意趣なければ、われも亦怨をおもはず。乞るゝ隨に木天蓼丸も、斷虫なも取らすべし。さばれ赤岩犬村なる、村長里人等に報知さで、この儘允さば證人なし。後の異論の爲なれば、件の人々を招きよすべし。赤岩より隨ひ來つる、妖怪親子の從者等は、なほ外面にをるならん。彼等を使に遣すべし、とく呼でよ。といそがせば、逸東太はこの幾條に、初て生たる心地して、遽しく答るやう、否赤岩の從者等は、關に妖怪の喚りたる、聲に怕れて

かへせば、現八も又領きて、然らば船虫に問ふことあり。汝は假一角を、妖怪也と知たる歟、大かたは知らぬなるべし。爾るにきのふ雛衣とのの、入水せんとせられし時、媒人氷六と共倶に、禁めてその死を救ひし事の、その本意ならぬはさら也。聽て十字竹輿にうち乘して、この草菴へ伴ひ來つ、巧言利口、舌に在して、遂に夫婦を一處にせしは、胎内の子を奪ん爲歟。しかりともその折には、彼木天蓼をいまだ得ず。抑汝はいかにして、はやく矢傷の藥法に、用るよしを知りたるぞ。無益の問に似たれども、後の疑ひを釋ん爲なり。明々地に首伏せよ、いかにぞや。と責問へば、船虫隱むことを得ず、跪きつゝ陳ずるやう、おん疑ひは理り也。妾は素より連副ふ夫を、妖怪也とは夢にも知らず。きのふの朝一角が、不慮に眼を傷しよしを、妾に告て又いふやう、わがこの眼の矢傷の藥に、百年土中に埋れたる、木天蓼の眞木と、胎内の子と母の血と、この三種を用れば、目子舊のごとくに愈て、物を見ること明ならん。或は木天蓼を獲て胎を獲ず、或は胎内の子のみを獲て、木天蓼を獲ずといふとも、何にまれ一種にても用るときはその效あり。但物を見がたきのみ。雛衣は有身て、四五箇月になりぬといへば、究竟の藥劑也。惜らくは離別せられて、今はその子を求るに由なし。便宜を得なば左にも右にも謀給へ、といはれし事あり。かくて妾が日出の歸さに、圖らずも彼婦人の、身を枚川に投ん

は、假一角が幻術もて、竊略り鞘を摧きて、末とし服せし趣さへに、竊聞してはじめて悟れり。幸ひにして彼短刀は、今菴中にありといへども、鞘失たればなきに同じ。兩君子は悍しといへども、心ざま慈善にして、好て人を殺し給はず。有如之者犯せし科を免して、その短刀を給ふとも、某白井へ立かへりて、主君へいひとく辭はあらず。この船虫も假一角が、悪を資けし耦賊也。短刀と共侶に、某に賜らば、白井の城へ牽もて歸て、まうしわきの種にしつべし。某おもひ足らずして、兩君子に強面當りし、先非は臍を噬までに、その罪萬死に當れども、幸ひにして免されなば、そは再生の大恩也。賢慮を仰ぎ奉る。と卿がましくかき口説く、額を席薦に蟄埋めて、哀しみ告る佞辯邪計を、憎しと思へど二犬士は、冷笑ふのみ訾讁めず。且して現八は、角太郎にうち對ひて、緣連、事の敗れに及びて、船虫を搦捕り、猶且辭を巧にして、竊に利を揣らんとす。この議を何と思ひ給ふ。と問へば角太郎頷きて、逸東太は御邊の仇也。又船虫は、わが妻の怨敵也。免すべきものならねども、渠既に兩刀を、投わたして命を乞へり。斬らば刃を瀆さんのみ。又船虫はちかき比、妖怪に相狎て、そが後妻になりたれども、わが父の讐にはあらず。但雛衣に強顔かりしは、その牡妖に媚るの所以也。かゝれば白井へ遣して、その刑罰を人に任せば、假にも繼母といはれたる、わが恥辱に遠離らん。この議はいかゞ。と問

じて、凡わが犬士の黨、皆祕藏せる靈玉の、奇特あらずといふ事なし。既に玉の冥助によりて、妖怪親子は討れしかども、そが妻たりし船虫は、虛死をして逃亡たり。聊時の移りしかども、何地まで走るべき。先追蒐て引搨來てん。といひつゝ裳を高く引折て、外面望て出んとすれば、緣頰に人ありて、犬飼ぬじ俟給へ、霎時々々。と呼留めて、母屋に進入るものあり。是則別人ならず、籠山逸東太緣連也。當下逸東太は、大刀の緒をもて綁たる、船虫を牽立來つ、その身も亦大小の腰刀を除却けて、二犬士の身邊にさし措き、障子のこなたに退きて、恭しく額をつき、犬飼犬村の兩豪傑に、勸解るも面なき所行ながら、凡眼玉石を辨し得ずして、妖怪の爲に惑され、犬飼ぬしを賊とし誣て、推捕籠て撃んとしたる、そは某一人の、心もてせし事にはあらねど、今さらいひ解く由もあらず。然るを亦牙二郎に、そゝのかされて追蒐來つ、犬村ぬしを罵りたる、過言は駟も及ばず。爾るに猾に假一角、夫婦がこゝへ來つるとき、某に說諭して、とく赤岩へ退け、といはれし事のこゝろ得がたく、從者をのみ且いなして、某は又執て返しつ、この庭面なる袖墻の、蔭に躱れて竊聞したれば、雛衣どのの自殺の一條、妖怪親子の綷の顚末、且仇撃の爲體に、駭羞て今さらに、出るにも出がたければ、なほも便宜を窺ひしに、この船虫が脫れ出て、走るを矢庭に引捕へて、かくの如くに綁たり。某主君より預りて、携來つる短刀

にわがうへ敗れて、深疵を負へるのみならず、牙二郎さへに命を隕せし、累る怨は禮儀信道、犬士と唱る名詮自性、犬はわが身の仇なりけり。かゝれば一昨小夜深し、庚申山のほとりにて、吾を遠箭に被たりしも、現八汝が所爲なるべし。二人ながら引裂て、血を吸ひ肉を啖はずは、わが通力もその甲斐なし。覺期をせよ。と罵るを、二犬士呵々とうち笑ふて、言をかしや畜生が、些の魔術に長たりとも、竟に漏さぬ天の網、父の讐妻の仇、名器兩ながら瀆されたる、けふ復讐の天運循環、（句）庚申山の樹の上に、われ在としもしらま弓、本事はその身に覺あるべし。退な、進め。と雙方齊一、寄するを寄せじ、と山猫は、飛鳥のごとく甚遽るを、現八戸口に立塞りて、初大刀を譲る勇士の進退、頻りに勇む角太郎は、是首に追詰彼首に攻つけ、撃閃かす刃に怯まぬ、妖怪ますます哮り狂ふて、窓の鐺子に爪うち懸け、脱れ去らんとする處を、丁と撃たる角太郎が、手煉の刀尖愆たず、さしも猛かる山猫は、腰の髎を砍放されて、臀居に撑と轉輾ぶを、得たりと刀を拿直し、登し蒐て吮のあたりを、鍔も徹れ。といくたびとなく、刺貫きてぞ山猫は、やうやくに息絶にける。既にして角太郎は、父の像見の短刀を、懐より取出して、十々滅を刺せば奇なるかな。彼禮の字ある靈玉は、瘡口より顯れ出しを、角太郎ははやく見て、血を押拭ひうち戴きて、現八に云々と、告てその玉を見せしかば、現八も亦歡び感

刀の冴に、細頸丁と撃落せば、叫びもおへず牙二郎が、軀は後さまに踏地ろぎて、間近く俯たる假一角に、うち累りてぞ仆れける。物の響と恩愛の、その氣や自然に通じけん、死せしと見えたる假一角は、忽地嘯く聲震動して、障戸紙戸も裂るが如く、雙手を張て身を起せば、はじめに異なる奇怪の相貌、既に手老る山猫の、形體を露す面部の斑毛、眼の光は百煉の、鏡を並掛たる如く、髟然として長く鋭き、髯は宛雪を串ぐ、枯野の芒に異ならず。耳まで裂て凄じき、口は血を裝る盆に似て、牙を鳴らし爪を張り、四下を疾視で吻く息は、狹霧となりて朦朧たる、庵の中は雲に入る、月下の宿鰍と疑ばる。角太郎は妖怪の、本體を見て些も騒がず、持たる血刀拭ふに隙なく、敵の左手に間近くよせて、姑く透を窺へば、後方に引添ふ現八も、倶に刃を拔歛めて、呼吸を揣る初太刀の進退、倘手に餘らば資んとて、等しく心を配りけり。この時までも虚滅したる、船虫は驚怕れて、其處に俯つゝをるに勝ねば、一ト膝拔きに跂退きて、外面投て迯出るを、角太郎も現八も、大敵既に前にあれば、後を見かへる暇なく、勝負をこゝに決せん、となほ近づくを睨へて、頻りに哮る妖怪は、人語自由の聲高やかに、朽をしやこの年來、われ人間に交參て、妻に狎れ子を産せ、夥の人に敬れて、快樂に光陰を送りしに、角太郎が祕藏の玉は、雛衣が呑しより、そが腹中に在るを思はず、胎を求めて自殺を薦めし、只この一事

で聞侍り。髑髏の奇特に舅公の、讐を初めてしられし事、不思議といはんもあまりあり。大約人の命根の、長き短き等しからぬも、稟たる定數ありとか聞けば、十九の厄を一期にして、非命に終る幸なさも、何憾むべき良人の爲に、功ありといはるゝ事、妻たるものの面目なり歡しや。とばかりに、いよ〳〵細る聲絶て、纔に動く唇の、色さへ變る知死期時、左右に薦る唱名の、聲をちからに雛衣は、持る刃を投捨て、南膜とばかりに合掌の、心神索れぬ烈女の終焉、忽地礑とうち俯せし、そが儘息は絶にけり。豫て期したることながら、人木石にあらざれば、角太郎は愀然と、且く立も難たりしを、現八慰め且奬して、雛衣が亡骸を、とり片よせんとする程に、牙二郎忽地息出て、身を起しつゝ銑鋧を、搔抓み拔取りて、前面に立たる現八が、胸前望で投かへすを、現八透さず中刀の、柄もて丁と受留たり。登時牙二郎ます〳〵怒りて、僓ながら刀をうち振り、敵手を擇まず撃んと進むを、角太郎推隔て、人面獸子の惡少年、汝鬱には罵て、われを人面獸心なンどと、いひしは陋わがうへならで、汝が事としらざるや。汝が實母はわが繼母でも、父は四足の人非人、胤を人倫に瀆したる、天の冥罰いかでか免れん。刃を受よと罵て、拔合したる手煉の刀尖、一上一下と殺結べば、牙二郎は初度の巨瘡に、大刀筋取次の亂打、遂に刃を打蛩されて、又中刀を拔んとせしを、拔しも果ず角太郎が、閃かしたる

りて、虎彪にもます妖猫の、鳩尾骨碎けて仆れしかども、怨の十々滅をとく刺ずは、甦生れることもやあらん。今さら猶豫すべからず。といふに角太郎嗟嘆して、某とてもその事を思はざるにあらねども、舊體を露さで、親に似たらん儘なるを、頸搔捕らんは快からず。大凡老たる妖怪の、死して本體を露さずとも、二十四時捨置ば、舊體になるとかいへば、姑く時を俟んのみ。彼に就き此に就ても、遺憾きは雛衣也。乳の下を思ひの隨に、かき斬て伏たれば、又華陀蒼公在とても、救るべうはあらねども、狗彘ならぬ渠が大功、絆の趣如此々々と、報知せなば後の世の、迷ひもことに霽ぬべし。然はあらずや。といひかけて、妻の身邊へ立よれば、現八も亦感涙の、眼包を共に數瞬きて、寔に御邊は孝子也。妖怪は且捨措て、雛衣どのを呼活ん。さはとて軈て客あるじが、傷人の右より左より、手をさし入れて引起せば、鮮血に塗れし雛衣は、大腸小腸溢れ出て、目も當がたき光景に、兩人聲を隱らして、やよ雛衣、ひなぎぬどの、心を慥にし給へかし。おん身が自殺の功德によりて、曩に謬て呑たりし、靈玉瘡口より顯れ出て、親の寃家を擊仆しぬ。かゝれば腹の腫張たるも、亦彼玉の所以にして、懷胎にはあらざりき。やよ喃々。と呼活る、聲屈きてや雛衣は、吻く息も目も細やかに、やをら左右を見かへりて、喃わが所天よ、犬飼ぬし歟。嚮よりこれ彼二はしらの、長物がたりを、現ども夢ともわか

藝の精妙、かの白刃の下にして、一言によく義を盡されし、その縡の用心を、今さらに思ひ合すれば、きのふ武藝を討論せられし、言次に何となく、親子久しく離別して、眞偽に疑ひあるものゝ、或はその血を合して試み、或は親の白骨に、子の血を灑ぎて知るといふ、俗説をいひ出て、和漢の出處を問れしに、某はさる心もつかず、梁書新唐書を引出て、云々と答にき。これ將後に疑念を釋する、方便と知られて、意味深かり。然るにてもこの年來、身は深山の土と化したる、寃を伸るに由なかりけん、亡父の怨を復せし事、皆是御邊の賜ものにて、且雛衣が命を棄たる、不用意の資によれり。併靈玉の、奇特は神速、至妙の天刑。一箇獸でも通力不測の、讐を撃こと難かるべきに、神と人との助によれり。只わが不肖を顧れば、いと恥しくいと悲し。爾はあれども不憶、世の豪傑たる犬士の隊に、うちも入りぬる歡びあり。安房の里見に由あることさへ、亡父の御邊に示したる、詞句は奇にして、誠に當れり。死して靈ある事を思へば、然しも在世の志操、想像られて痛ましけれ。悔の八千遍百千遍、かき口說とも甲斐でなき。往事はこゝに遂ふべからず。憂苦に得堪ぬ譫言は、女々しきものと思はれん、許し給へ。とうち賠話て、家廡の紙戸を押ひらき、髑髏を斂め、額つき拜みて、霎時祈念を凝したる、廻向了て退けば、現八は撲仆されたる、假一角等を見かへりて、犬村主々々か、靈玉の威徳によ

第七輯 卷之三

第六十六回

妖邪を斬て禮儀父の怨を雪む
毒婦を叩て緣連白井に還る

再說。犬村角太郎禮儀は、信友犬飼現八が、長物語に初て聞得し、父の眞僞は鮮血の明證、疑ふべくもあらざれば、像見の髑髏短刀を、受戴々て、視る目に流るゝ千行の、涙をやうやく歛めても、後悔慚愧やる方もなく、歎息の外なかりしを、思ひかへして貌を改め、現八にうち對ひて、賢なるかな犬飼ぬし。御邊の忠告なかりせば、某悟るに由なくて、眞の父の横死を得しらず、なほ仇をもて親とし事へて、又只非人妖怪に、苦めらるゝのみならで、その毒惡の術にこそ死なめ。然るを今賜られし、父の白骨像見の短刀、これを見彼を思ふにも、和漢今昔例稀なる、一大奇異といふべきのみ。父の横死は某が、四五歲の比なりしかば、實にこの短刀も、けふはじめて見る心地して、一毫だも認らねど、僅に遺る家の紋、魚葉牡丹は紫銅の、轆によりて分明也。いはんや亦某が、一肱の鮮血を髑髏に受て、早に疑ひを解れたる、緯の進退武

てありしかば、假一角が竊略て、薬劑に用ひながら、某を賊とし誣たり。木天蓼はなべての猫の、よく好むものにして、薄荷銅杓子の粉と共に、究めてこれ妙薬也。然るを醫師の云々と、いひしといへるは虚言ならん。但山猫と唱るものは、又是一種の妖獣にて、人家の猫と同じからず。その小大犬に等しく、猛きこと虎に似たり。深山には罕にこれあり。好みて人家の小児を竊て、啖ふことありとなん。况数百歳を歴たらんものの、通力變化さこそありけめ。かく逞しき妖怪の、脆く婦人に斃されしは、御邊夫婦の孝友貞烈、人に捷れしその徳その義を、神明佛陀の憐助けて、仇を復さし給へるならん。袷といひ恰といひ、唯痛しきは雛衣どの也。その心操賢にして、愆つこともなかりしを、良人に添ふ日の長からで、非命に終り給ふこと、唯薄命といふべき歟。名を揚げ良人を資けたる、貞烈末世に傳ふに及ばゞ、亦洪運といはれん歟。禍福は糾ふ縄の如し、誰か奇伏を前知すべき。抑これらの趣を、初より告ざりしは、御邊の信じがたからんと、彼妖怪にはやく知られて、洩もやせん、と思へば也。今こそ遞與す尊父の短刀、髑髏と倶に受納め給へかし。といひかけて、像見の兩種をさしよすれば、角太郎は愕然と、初て夢の覺たるごとく、且驚き且恥て、遽しく戒刀の、鞘とり揚て歛たる、手首さへに戰くまでに、感涙さながら泉の如く、胸を拍胸を拊て、懷舊悲歎に堪ざりけり。

ありとも、皆伏姫のおん子に等し。曩に安房へ伴んとて、照文の勸にけれど、八人いまだ具足せざれば、推辭てその議に從はず。折から不慮の厄難起りて、犬江親兵衞の往方を知らず。犬塚犬田某等は、丶大照文に相別れて、犬川莊助と共侶に、上毛なる荒芽山に至りしとき、彼處にも亦災害起りて、犬山犬塚犬田犬川の四犬士に別れしかば、索巡りてこの地に至れり。かゝれば智字の玉をもてる、一犬士なほあるべし。いまだ遇ふことを得ざるをもて、八犬未周、と彼詞句に示されたり。さばれ八犬具足して、安房に至りて里見家に仕るよしを示さんとて、南總雖遠、終歸一流の句あり。因緣かくの如くなれば、彼靈魂の賴みなくとも、某既に御邊をもて、犬士の一人たらんを知れば、いかで死力を竭さんとて、縡のこゝに及べる也。よりて思ふに、あの山猫の、通力自由を得たりしも、彼靈玉に怕るゝ故に、年來御邊を害することかなはず。且昨宵弟子等が、某と試撃せし折、その身は病痾に假托て、某と試撃せず。夜深て又彼惡棍等が、某を害せんとしつる折、假一角は出ざりしも、わが懷中に信字の、靈玉あれば怕れしならん。然けれども雛衣どのゝ、呑たる玉の腹中に、あるよしをのみ知らずして、懷胎なりと思ひつゝ、胎内の子を求るとて、その靈玉に撲仆されしは、是天罰の時節到來、その數こゝに竭たるならん。これらによりて又思ふに、緣連が携來つる短刀は、柄も鞘も木天蓼に

犬塚、犬川、犬山、犬田、犬江等、五犬の人々、御邊と某と倶に七名、皆是安房の里見殿に、因縁あるをいへり。緈の濫觴を原るに、里見殿の息女伏姫君、一言の信を失はじとて、八房といふ犬に倶して、富山の奥に入り給ひつ、彼犬の氣を感じて、腹ふくよかになり給ひしを、懐胎にやと思ひ愁ひて、自殺せんとて覺期の折、里見の忠臣金碗大輔、彼八房を撃斃せし、鳥銃の鐵丸抜て、姫うへも瘢を負ひ給ひつ、みづから刃に伏し給ひし、その瘡口より白氣升りて、八方へ散亂し、且役行者より、感得せられし水晶の、数珠の數とりの大玉八箇も、共に散亂して往方をしらず。件の玉には仁義禮智、忠信孝悌の八箇の文字の、自然に見ゆるものになん。かくて金碗生は出家しつ、件の玉を索んとて、抖擻行脚に年を歴たり。加旃里見の家臣、蜑崎十一郎照文も、主君の密意を稟奉りて、金碗入道の迹を慕ひ、智勇の賢士を募ん爲に、渠も諸國に遊歴して、金碗丶大法師と共に、下總なる行徳に旅宿せし折、某等ゆくりなく、丶大照文に對面して、里見殿に因縁ある趣を感悟せり。その因縁をいかにといはゞ、俺們七名幼稚き時より、仁義禮智忠信孝悌の文字あらはれたる、靈玉を感得せり。便是件の數珠の、數とりの玉なること、文字によりて分明也。又只是のみならずして、吾儕七名は、各々その身の中に、牡丹に似たる痣ある事、彼八房の犬の毛色に、類せしを知るべきのみ。有如之者各々親は

へ。眞僞やうやく顯るゝとき、角太郎が迷ひを解く、よすがには短刀あり。これは是當初、彼山猫が略遺れて、この岩窟へ殘し置たる、某が短刀なり。よりて今に祕藏せり。しかれども角太郎は、この短刀を認らずして、なほも疑ひ解がたくば、わが髑髏こゝにあり。彼が鮮血をこれに灑がば、親子の徴据分明ならん。只願憑むとかき口說て、髑髏と短刀を遞與されたり。かくてその曉に、立別れんとしつるとき、靈魂四言十四句の、讖詞を吟じて示されたり。某記憶したれども、その折には解しがたかりしを、今さら思へば的如として、當らずといふことなし。さればその詞に、相遭講武、相別誘仇といふ起句あり。是則きのふ某こゝへ訪來て、御邊と武事を討論し、爾後又某は、赤岩へ赴きしを、牙二郎船虫、假一角すら、追ひつゝこゝへ來つるをいふ也。又その次に、越全露玉、菊花謝秋といふ兩句は、雛衣どののうへをいへり。露玉は則禮字の靈玉、烈女これを全して、謝秋はその死をいふのみ。又その次に、再阨不釋、更問髑髏といふ二句あり。是日今の事にして、こゝに主客の再阨も、髑髏によりて安かり。又その次に、妖邪亡處、中山應遊といふ兩句あり。是は此、假一角の山猫亡びて、庚申山に妖邪絕たり。是より衆人登山を得つべし。又その次に、八犬具足、八犬未周。窮達有命、離合勿謀。南總雖遠、終歸一流といふ六句あり。こはきのふ告たる義兄弟、

て、病こと久しうして身まかりぬ。かゝりしかば假一角は、嬖妾をのみ物しつゝ、近曾來たる嬖妾の、船虫といふものを、後妻に執立たり。彼船虫は心ざま、邪智奸惡の淫婦なれば、同氣かならず相求るにや、妖邪に觸ても恙なし。又犬村なる蟹守夫婦は、うち續きて世を逝りしかば、遺財田園を利せん爲に、船虫が欺詐りて、角太夫婦を召とりつ、箇樣々々の口舌起りて、雛衣は離別せられ、角太郎も亦追出されて、今は返璧なる庵にあり。假一角は幾回となく、角太郎を害せん、と思ふこと大かたならねど、角太郎は身を護る、禮字自生の靈玉あり、身に又如此如此の憑さへあれば、僅に害を脱るゝのみ。その危きこと雞蛋を累ねたるに異ならず。和殿返璧に赴きて、角太郎に對面して、渠を資けてわが爲に、假一角等を撃果して、冤を雪め給へかし、といとも哀れに頼れし。某感涙やる方もなく、御邊かくまで靈あれば、枕に立夢に見えて、縡の趣云々と、などてその子に告ざりし、と詰りにければ尊父の靈魂、いと恥たる面色にて、さればとよその事なれ。後妻窗井が在し比より、如此思はぬにあらねども、妻もわが兒も只管に、假一角を眞の良人、眞の父ぞと思ひをれるに、よしや夢に入て告るとも、いかでか實事と思ふべき、只疑ひを起すのみ、彼等はいよ／＼危うからん、と深念をしつゝ默止たり。和殿返璧に赴きて、角太郎に對面するとも、これらのよしを且くいはで、箇樣々々に談し給

と綷に告られし。某頻りに、駭嘆して、爾らば御邊は何ものぞ、と問ふに彼人又答て、われは是陽人ならず。赤岩一角武遠が亡魂の、假に見れ出たる也。今玆より十あまり、六七年さきつ冬、十月の比なりき。某發起するよしありて、昔より人のかよはぬ、庚申山に登らんとて、門人纔に三四名を將て、未明より登陟する程に、第二の石橋の邊に至て、怕れてよく渡るものなし。この故に、某一人橋を渡りて、この岩窟の邊に來つ。時に山風猛に發りて、沙石に眼を撲れしかば、弓投捨て目を拭ひたる、後に窺ふ件の山猫、驀直に走り蒐りて、引倒さんとする程に、腰刀を引拔て、吭を刺んとしつれども、腕狂ふて山猫の、前足を劈しに、淺痍なれば物ともせず、勢ひ籠で某が、吭に啖著しかば、霎時もあらで綷斷れし、死骸を岩窟に引入れて、宍を啖ひ骨を遺し、軈て某が衣裝を被て、某が大刀を佩き、相貌言語進止まで、よく某が似くに變じて、如此々々と欺詐りつ、次の日赤岩にかへり來にければ、門人里人いへばさら也、後妻窻井すら欺れて、一毫も疑ふものなし。かくてその次の年、窻井が腹に男兒產れて、牙二郎と名づけたり。是よりして假一角は、某が兒の角太郎を、憎むこと甚しく、日每の呵責間斷なければ、外伯父なりける、犬村の鄕士、犬村蟹守儀淸夫婦、角太郎を憐みて、養ひとりて教導き、近曾獨女なる、雛衣をもて妻したり。是より先に後妻窻井は、妖邪に精氣を吸耗れ

りを得て、弓に箭番ふて彎固め、漂と發てば愆たず、彼怪物の大將の、左の眼に丁と立つ。窮所なれば堪ずやありけん、馬より撞と落けるを、從ふ兩箇の怪物等が、傷者を肩に引被て、何地ともなく逃亡たり。さばれ件の怪物が、なほ等類を駈催して、來ることあらば當りがたし、と尋思をしつゝ樹杪を下りて、庚申山に攀登るに、第二の石橋を渡り果て、前路に岩窟夥あり。そが中に、いと大きなる窟の中に、火を燒てゐたる異人の、某を呼近づけて、不測の値偶を歡れぬる、語次に某は、彼妖怪の事を告て、その本性を諮しに、その人答て、馬上なりし妖怪は、むかしよりこの山の、麓に棲たる山猫也。又相從ふ若黨二人は、山の神と土地神也。通力山猫に及ばねば、神ながらも彼怪物に、駈捕れて扈從せり。實に歸伏せしものならねば、その痍を負ひしを幸ひにして、扶掖つゝ逃亡たり。この他兩箇の從類あり。そは老たる猫と貂也。もしこのものども從ひ來なば、仇を復さんとこそ揣るらめ。又彼馬は木精也。これも亦山猫の、猛き勢ひに威服せられて、役使るゝものになん。件の猫はこの年來、當國赤岩の郷士なりし、赤岩一角武遠が、形貌に變じ濟して、今もなほ彼村に在り。さばれこの山を景慕して、折折夜半に來遊べり。今宵眼を射られしも、遊山に餘念なければ也。渠は神通無量にして、十里の外の事を知れり。然るを今宵眼前なる、和殿を知らで、痍を負ひしは、こも不用意に依て也、

つゝ疑ひの、なほ解ねども勢ひ折けて、折布く膝に戒刀の、柄押立て由斷せず。こゝろ得がたし犬飼ぬし。彼處に仆れしわが父を、父ならずといはるゝ事、いかなる所以ぞ、聞まほし。と問へば現八歎息して、儔稀なる孝子烈女も、妖怪の爲に欺れて、うちも累る厄難に、雛衣どのの自殺により、腹の中より顯れたる、彼靈玉に假一角の、撃仆されしは天の冥罰、彼もの御邊の父ならねば、牙二郎も亦弟にあらず。廼妖怪の胤にして、船虫は妖怪に、列添ふ妻といふべきのみ。縡の來歷一朝に、盡すべうはあらねども、繁きを芟て所要を摘ん。抑一昨晡時に、某網苧を過るとて、里の茶店に憩ひしに、茶店のあるじ鵙平が、問ずがたりに御邊親子の、噂を大抵聞得たり。かくて茶店を走り出て、神子内のあなたなる、巓村を投ていそぐ程に、思はず途に日は暮て、天さへ俄頃に結曇る、路次に迷ふて其處ともわかねば、行べきかたに得ゆかずして、庚申山にありといふ、胎内竇の邊に來にけり。網苧より携たる、弓と箭を身の護にして、こゝに一夜を曉す程に、丑三にやと思ふ比、東のかたより忽然と、怪しきものの近づき來つ。その本體を見ん爲に、弓箭手挾み老たる松に、攀登りつゝ窺へば、その面猫に類せる異人、野裝束して馬に乘たる、その馬も亦異形にして、自然木の木馬の如し。左右に從ふ兩箇の從者、いづれも夜叉に似たりけり。彼馬上なる怪物の、眼光りて四下を照らせば、某これに便




一角
牙二郎
船虫

太郎は、右手の臂を一寸許、かすり痍負つゝ右に拄え、左に當る一期の重厄、最も危く見えたる折から、戸棚の紙戸の間より、打出す銑鋧に、牙二郎は乳の下三寸、背齗くまでにうち串れて、叫苦と叫ぶ聲と共に、刃を捨てぞ仆れける。程もあらせず現八は、衾戸磤と蹴放ちて、棚より撻と飛下れば、船虫いよ〳〵驚き慌て、逃んとするを迯しもやらず、現八はやく走懸りて、利手を捕て引被ぎ、向ふざまに投しかば、船虫は火盆の稜に、膅を大く打悩されて、灰に塗れて倒れけり。角太郎はこの爲體に、且駭き且怒りて、無益しき犬飼現八。人も頼ぬ助太刀は、われを不孝に陥さん爲歟。われ豈弟と繼母を害して、身を脱るゝものならんや。交遊の義も親族の、怨には易がたし。とく〳〵勝負を決せよ。と敦圉猛く名告かけ、戒刀晃りと引抜て、鞘投捨てふり揚る、刃の下を現八は、搔潜りつゝ捕留る、角太郎が二の腕より、流るゝ鮮血を仡と見て、遽しく懐より、出す髑髏に、霑る鮮血の、吸入如く塗著て、瓦に沃ぐ水に等しく、只一滴も髑髏より、下に溢れぬ親子の明證、奇特に勇む現八は、思はず聲をふり立て、慓り給ふな犬村ぬし、打仆されし一角は、御邊の眞の親ならず、この髑髏こそ眞の亡父、赤岩一角武遠大人の、白骨なるをしらざるや。今面りに骨と血と、ひとつに凝りしは親子の徴据。告ぐべき事の多かるに、怒を刃と倶に斂めて、よく聞れよ。と突放せば、角太郎は思ひがけなき、奇特を見

の妻、武士の女兒に生れし甲斐に、後れじとこそ思ひ侍れ。爹々公母御前二はしら、世を松竹と共侶に、御壽命長くをはしませ。名殘は盡ぬわが所天には、思ひあまりて卻に、いひ遺すべくもあらざりき、こゝろを猜し給へかし。さらば。と許り拔放つ、刃の光りに角太郎は、そなたへ膝を推向て、うちも目戍れば降そゝぐ、膝に涙の玉あられ、胸は板屋の妻夫、迭に顔を見あはして、共に無言の告別。とく〳〵せずや。と一角が、焦燥聲は冥官の、使に似たる阿鼻泥黎、外に弘誓の船虫も、牙二郎も亦とく〳〵。と死天を促す無常の首途、後れはせじ。と雛衣が、はや握持つつかの間に、晃したる刃の電光、刀尖深く乳の下へ、ぐさと衝立て引繞らせば、颯と濆る鮮血と共に、顯れ出る一箇の靈玉、勢ひさながら鳥銃の、火蓋を切て放せし如く、前面に坐したる一角が、鳩尾骨礙と打碎けば、苦と一聲叫も果ず、手足を張てぞ仆れける。緈の不測に船虫牙二郎、驚きながら見かへりて、こはわが所天は撃れ給ひぬ。大人は緈絶給ひし歟。悖逆不孝の角太郎、妻雛衣と謀し合して、親を害する人面獸心。其處な動きそ。と呼かけて、撃んと進む牙二郎を、資て引添ふ船虫も、等しく懐劍拔閃かして、面も振らず殺て蒐れば、角太郎は戒刀を、鞘ながらに握持て、受流しうち拂ひ、慓り給ふないふ事あり。某夫婦いかにして、親を害ふ惡心あらん。やよ等給へ。と禁めても、些も聽ぬ無法の大刀風、禦ぐのみなる角

復さば人といはんや。われは一切せん術あらず。と推辭て立も難たりしを、雛衣はなほ近づきて、爾宣へば妾をのみ、惜むといはれ給はんのみ。喃母御前、牙二郎ぬし、いふ甲斐もなきわが所天に、任して時を移さんより、とく手にかけて爹々公の藥の、所用に立させ給へかし。といふに頷く船虫牙二郎、虚々しき目を押拭ひて、噫、見あげたる雄々しき孝烈、いと痛しく哀しきを、又俺們なればとて、今さら刃を當られんや。喃わが所天、家尊の大人、いかゞ相謀まうさんや。と問へば一角含笑て、適愛たき孝女也。曩に示せし木天蓼丸の、鞘は摧きて末としつ、大抵用ひ盡したれども、眞木は柄にあり。便是良劑なれば、祕藏して携來れり。この短刀をもて雛衣に、自殺を勸めよ。如右するときは、自業自滅といはまくのみ。媳を害する譏もなく、妻を殺す恨みもあらじ。はやくこの意を得させよ。といひつゝ懐に手を入れて、とり出す短刀の、異鞘合せし儘なるを、いざとてやをらさし寄すれば、船虫聽て受とりて、雛衣が身邊に措つ、喃媳御前、杖の下へ立つ侲子は、打ことかたき親心、おん身の覺期の健氣さに、誰とて當ん刃はなし。よりて自殺を勸めよとある、爹々公の仰默止がたく、この短刀をまゐらする。心しづかに臨終の、彌陀の名號肝要ならん。と虚泣しつゝ說示せば、雛衣は短刀を、とり揚てうち戴き、脆き女の腕には、潔く死を遂んこと、心もとなく侍れども、然りとて妾も武士

脘の病痾、過ゆく光陰共侶に、かう腫張たることにし侍れば、疑るゝも無理ならず。爹々公の爲に今この中脘を、割も發きもせられんに、内には物の有なしを、定かに知られて濡衣を、乾すよしあらば蜻蛉の、命をいかでか惜むべき。そは本望で侍るかし。とは思へども悲しきに、天見つ山の山鷄の、峰上隔てなき明し、泣暮しつゝやうやくに、願ひ愜ふて妹と伏の、一處に住むも昨けふ、別れし後の憂事を、黄楊の小櫛の告る間も、なき世がたりにならんとは、思ひがけなや黒髪の、神ならぬ身ぞ是非もなき。いはまく欲き思ふ事、いひ盡されぬ言の葉の、春にもあはず花開かで、身のなる果の哀れさを、浮世の秋の露しぐれ、籬の菊のさく毎に、思ひ出させ給ひなば、只一遍の手向草、受つゝ待ん後の世の、蓮の臺法の雲、半座をわけて侍るべし。只願くは百年の、命めでたく名を揚、家をも起して孝と義の、人の鑑となり給はゞ、死して榮あるこの身の幸。とく〳〵殺し給ひね。と身を衝つけし烈女の魂、悍く見えても目に餘る、涙ぞ遣る瀬なかりける。角太郎はつく〴〵と、聞つゝ眼包をしばたゝきて、雛衣微妙き覺期也。とてもかくても脱れがたき、命運ならんと思へども、おん身の親はわが養父、只一わたりの縁しにあらず。養父は則わが伯父にて、幼稚き時より字育れ、文學武藝何くれとなく、教導き、人となして、只一箇なる愛女を、妻せられし洪恩を、實父の爲とはいひながら、仇もて

く博士貌。さまで不孝の心より、親を欺く當座の誓言、みづから破て妻をのみ、惜まばわれ又何をかいはん。今良薬の有ながら、目の痍愈ずは左手の敵を、見ること竟に稱ずして、武術は是より大く劣らん。長生すれば恥多しといふ、鄙語を思ひ合したり。今面りに自殺して、汝等夫婦が心を休ん。いで〳〵。といひかけて、衣領推ひらきつ、脇挿の、刃を拔んとする程に、吁嗟と駭く角太郎が、禁るをまたで船虫牙二郎、はや左右より携著て、やうやく刀を奪ふたる、船虫は恨しげに、角太郎を見かへりて、賽孝行の剝易く、醫師の正しく懐胎ぞ、といはれしにより雛衣を、一旦離別したりしを、今さらに又懐胎の、定かならずと欺かる。現口ばかり世の中に、朝髈なるものはなし。うたてや親を死しても、おん身は何とも思はぬか。心づよし。と怨ずれば、牙二郎も亦聲を苛立て、兄貴の孝子といはるゝも、嫂御の貞女といはるゝも、今この答一箇にあり。尻口でものいはんより、思ひきらずや、いかにぞ。と等しく嚾立られて、弱り果たる角太郎、思ひかねてぞ默然たる、良人の心を思ひ汲む、雛衣は初より、涙はいとゞ涌かへる、苦しき胸のみ塞りて、ものいふべくもあらざれば、只伏沈みてゐたりしを、やうやく思ひ絕にけん、涙を斂め頭を擡て、喃わが所天、あれ程までに宣はするを、よしや妾が有身たる歟、否を定かにせられずとも、竟に脱れぬ定業ぞ、と覺期究めて侍るかし。身に覺なき中

も口說ば牙二郎も、目をしばたゝきて、喃母公、さのみ大くな泣給ひそ。小の虫を殺すとも、大の虫を助けよといふ、諺もあるなれば、兄貴も嫂御もよく諦めて、歡でこそ給はんを、泣立られなば郤に、心弱くぞなりぬべき。淚を斂め給ひね。と慰められて船虫は、頻りに瞼を押拭ふ、親子三人の愁嘆に、窘らるゝ角太郎は、頭を低手を叉きて、且く應をせざりしを、天うち仰ぎつ數回、嗟嘆に聲を曇らして、推辭に由なき大人の御所望、只某がうへのみならば、身を八劒にせらるゝとも、惜むべきにあらねども、雛衣はわが養家の嫡女、特に義理ある妻なるに、懐胎もまだ定かならず、倘血塊の類ならば、その功もなく狗死ならん。その義は許させ給へかし。と推辭を一角聞あへず、眼を瞋し聲ふり立て、さはいはせじ角太郎。親の爲には何事まれ、背じといひしその座も去らず、時も移らぬ今の間に、許諾し事を忘れし歟。と敦圉猛く詰らるゝ、角太郎は髀を進めて、その義は忘れ候はねども、仰も事によるべきもの歟。一旦傷れしおん目の藥に、媳と孫とを殺し給はゞ、誰か不仁といはざるべき。且雛衣が懐胎は、爾るや否や定かならぬ、その腹を今發して、懐胎ならずはいよ〱不仁の、後悔其甲斐あるべからず。父に爭ふ子あるときは、その身不義に陷らずといふ、聖の教も候はずや。禁めまうすは親の爲。賢慮を仰ぎ奉る。といふに一角ます〱怒りて、一言いへば二言返して、青標紙を引

くに愈て、物を見ること鮮明ならん。もし胎内の子を獲ずば、件の木天蓼一種を、飲むとも立地に疼痛去りて、七日にしてその痍愈ん。只見ることを得ざるのみ、といはれにけれど、一ッながら、いとも獲がたき薬剤なれば、姑く思ひ捨たるに、きのふ不測に彼木天蓼の、百年あまり土の中に、埋れけんと見ゆる良材、既にはや手に入りぬ。且試に細末にして、昨宵しばしば用ひしかば、暁がたには疼痛を覺ず、痍も大かた乾きたり。かゝる經驗のあるなれば、況てその餘の二種を、加味して用ひばわが眼の、故のごとくにならん事、絶て疑ひなきもの也。親の爲には命だも、惜まじといひし孝行に、甘へて頼む薬種の調達、むかし平の貞盛ぬしは、その身の病痾の良薬に、その子の娘の胎内なる、子を求たる例もあり。この事は今昔とか、いへる草子に見えたり、と曩にある人のいへりしを、不仁の所行ぞと思ひたるも、けふはわがうへわが娘の、うへになりけるうたてさよ。飽まで孝ある子共ならずは、いふともいかでか承引べき。推辭はせじ、と豫てより、思へばいとゞ不便にこそ。といひつゝ拭ふ虚泪を、見まねに船虫鼻うちかみて、喃角太郎よ、雛衣よ、凡生とし活る物の、命を惜ぬ例はなきに、その胎内の子も母も、爹々公の病痾の良薬に、なるはこよなき孝行節義。廿四孝と名にしおふ、唐山人も及んや。甚麼なる過世の業報にて、親子と生れ娘とはなりけん、痛ましさよ。と聲立て、かき

理なき事を仰るとも、身に相應しき事ならば、力を竭し骨を折り、成し果んとこそ思ひはべれ。いかでか背きまつらんや。と夫婦齊一諾ひたる、回答に一角頷きて、背かじといはるゝ證人には、船虫牙二郎等もこゝにあり。且試にうち出さん。殊に無心の所望なれども、祕藏の物を給へかし。といはれて角太郎こゝろを得ず。某一旦遁世の、志ありしその日より、金銀珠玉も懸念せざれば、祕藏の物は候はず。といへば一角頭を掉りて、否わが所望は然るものならず。されば古歌にも

白かねも黄金も玉も何せんに子にます寶世にあらめやは

父が所望はこの意を以す。祕藏といひしは雛衣が、胎内にはや五箇月の、子をとり出して給へかし。といふに駭く角太郎、雛衣は只呆れ果て、顏つく〴〵とうち目戍れば、船虫は携來たる、壺とり揚て犬村夫婦の、間へ直と推居たり。當下一角儼然として、緣由を具に告ねば、驚きもせん、疑ひもせん。已ことを得ぬ所望の顚末、わが兒も媳も聞ねかし。われ一昨の宵愆て、左の眼を傷りしかば、醫師を招きて診せけるに、一個の名醫誨ていふやう、この眼瘡には妙藥あり。百年土中に埋れし、木天蓼の眞の細末と、四箇月已上の胎内なる、子の生膽とその母の、心の臓の血を取て、彼細末に煉合して、屢これを服すれば、刺破られたる目子の、再故のごと

吻々とうち笑へば、牙二郎は頭を搔つゝ、角太郎にうち對ひて、曩には緣連に囑賂を餉れて、大く不敬を仕りぬ。許させ給へ。とうち勸解れば、角太郎歡びて、われ周公の聖ならねば、和殿に管叔の惡もなし。兄弟志をひとつにして、親に事へまつらん事のみ、願しく候。といふに一角笑しげに、既に親子兄弟夫婦、一家和合の時來ぬれば、そが歡びの盃せん。轎子の中に齎せし、偏提あるべし、とく〳〵。といふに雛衣緣頰に、出て偏提を拿もて來つ、蓋をひらけば盃吸筒、肴は鯡の鹽物に、鰊鯑一種添られたり。一角は盃を、これへと召てとり揚て、今朝は未明の事なれば、肴の准備整はず、鯡は卽二親也。又鰊鯑は數の子也。かばかり愛たき物はなし。然らば角太郎酌んずとて、はや傾けて取らすれば、角太郎は膝行頓首の、禮儀も正しく受戴きて、飲了て又返す、親子の獻酬三たびにして、是より船虫牙二郎も、角太郎雛衣に、取かはしたる盃の、數も巡りて僉歡びの、一席に二夫婦、三組偏提とり納め、紐引結ぶ四手纓、五人寄てむつましき、笑坪の會ぞ樂しけなる。當下一角は、只管欵待す角太郎と、雛衣を見かへりて、言改めていふにはあらねど、老ては物に怺情なく、むじんなる事をいひもせん。さばれ孝行を盡さんと、目今いひし和殿也。雛衣も何にまれ、親のいふことを背きはせじ。さりとも背く賊、いかにぞや。と笑つゝ問ふを角太郎、雛衣も聞あへず、そは宣はするまでもなし。

く、折れて愛たき深雪の竹の、子をいと惜む恩愛の、情義に感ずる角太郎は、且怕れ且歡びて、額づきたる頭を擡げ、思ふに餘るおん慈愛の、かくあるべしとは知らざりし、不孝の罪を省ぬれば、應奉るもいとかしこし。曩に別れ奉りしより、勸解奉らんよすがもあらで、かゝる住ひはみな是親の、罰にやあらんと思ひしのみ。然とて親を疎略にせざりし、彼はこの情由、こは彼情由、とまうし解ば今さらに、身の非を飾るに似たらんのみ。又何をかまうすべき。勘當をだに免し給はゞ、なほ又粉骨碎身して、命と共に事へまつらん。雛衣も歡び給へ。とくおん答をまうさずや。といひつゝ傍を見かへれば、雛衣も稍頭を擡て、愚魯なる身は等閑に、仕へまつると思はねども、よろづに心つきなくて、おん身邊に侍りし折、孝行らしき事はしも、あらざりけんを咎め給はで、妙に優しきおん寵みの、心言葉に聞え給ふは、天おそろしく侍るかし。澤の摩吒陀の水の月、届かぬ事は幾遍も、御こゝろ隈なく叱らせ給はゞ、この身の爲になりぬべし。水を火に成す仰でも、いかでか背き侍らんやとて、夫婦齊一問對の、歡び氣色に見れしを、船虫さこそ、と含笑て、けふといふけふ月ごろの、吾儕が願ひのかなひしぞや。日ごろは和さぬやうなりしを、心の底は骨肉の、誠はこゝに顯れて、現爭ゐぬものになん。牙二郎も身の非をしらば、けふより心を改めて、家兄を敬ひ給へかし。はや童ではなきものを。といひつゝ

くまで、勸解るを聞くも不樂しくて、いかにせましと思ふ程に、昨宵籠山逸東太等が、旅客犬飼現八と、試撃の勝負に怨を含みて、年わかければ血氣に慓る、牙二郎さへにそゝのかして、撃捕んとしたれども、還て現八に殺立られて、痍を負へるもの死せしもの、三四名に及びたり。然るをなほ懲ずまに、現八を追蒐て、こゝらへ來つると聞えしかば、けふこそ親子對面の、便宜を得たり、と思ふをもて、病苦に勝る轎子を、舁走らして船虫共侶、こゝへ來つるは逸東太等を、寛めて無異を計らん、と思ひしのみにはあらざりき。彼現八は盗賊ならず。そを盗賊と呼做せしは、逸東太が所爲なるを、牙二郎は悟らでや、渠が爲に兄を誣たる、寔に嗚呼の白物也。有加之者縱現八を、舍藏たりともけしうはあらず。絆のこゝろを得られよかし。とばかりならできのふは亦、船虫が神詣せし、かへさに和殿夫婦を諭して、一處にしつと聞えしかば、歡でいもねられぬ、親の心を子はしらぬ、譬喩を身に摘て、親を親とし思ひなば、われ又何を足らずとすべき。老ては翌だも憑れず。假のこの世に多くもあらぬ、兩箇の子共を持ながら、一箇は不和の板廂、月の影より漏易き、袖の雨こそ苦しけれ。雛衣もしかこゝろ得て、夫婦旦暮睦しく、孫共夥産出して、見せられんこそ孝行なれ。此意をみづから告んとて、來つるを哀れと思はずや。夫婦の心甚麼ぞや、いかにぞや。とこれ彼に、言問ふ親の口ごろに似げな

へ退きて、吉左右を俟給へかし。と諭せば縁連推辭に由なく、爾らば貴敎に從ひまつりて、某ははや退りてん。かへすぐ\も件の一議を、憑み奉る。と期を推して、一角夫婦牙二郎等に、別を告て外面へ、出て從者をいそがしつ、ゆくこと纔に一町あまり、從者等を見かへりて、箇樣箇樣と囁けば、從者等はこゝろを得て、そが儘に立別れつゝ、赤岩のかたに趣くを、縁連霎時目送りつ、ひとり竊に立かへりて、庵の庭なる袖墻の、蔭に躱るゝ狐疑邪猜、裡面のやうをぞ窺ひける。

第六十五回

媳に逼て一角胎を求む
腹を劈て雛衣讐を仆す

登時赤岩一角は、角太郎夫婦を呼近づけて、いはんとしつゝ且くいはず、思はずも歎息の、貌をやうやく改めて、やをれ角太郎、雛衣も聞ねかし。麒驥も老ては駑馬に及ばず。賢達たる子共の目には、老耄にきと見られけん。今さらに又いふにはあらねど、嚮には些の情由ありとて、雛衣は離別せられ、角太郎も亦親を恨みて、宿所を出て遂に還らず。さればとて親甲斐もなく、呼かへさんは有繋にて、かくは光陰を過せしに、船虫が折々に、義理ある子とてうち歎

ひしを、あるじ夫婦はなほ聴で、爭ひ果しなき折から、大人の來ませしに憚りて、霎時穿鑿を寛うせり。願ふは大人のおん勢ひもて、彼偸兒をおし出さして、搦捕せ給はらば、あるじ夫婦は同類の、罪を免るゝ歡びあらん。この議を揣らせ給へかし。といへば一角歎息して、偸兒のこゝに入りしを、認めしといふも證據なく、又爭ふて偸兒を、舍藏ずといふも證據なし。角太郎はいぬる比より、こゝに離居してありとても、官府へ訴まうして、遠絕したるものにあらねば、今も則わが兒なり。角太はわが兒なるときは、雛衣も亦わが媳也。さる疑ひの解がたくば、はやく愚老に報てこそ、その弟たる禮に違はず、その舊友たる義にも稱ふを、血氣に乘りて罵り爭ひ、迭に鎬を削るに及ばゝ、理ありといふとも科は免れず。寔に疎忽といはまくのみ。彼偸兒の有無は、愚老が代りて穿鑿せん。別に所用もあるなれば、籠山生は赤岩の、宿所へ退りて俟給へ。噫無益しや。と呟けば、牙二郎はこの幾條に、確められて再得いはず、しばしば傍を見かへれば、緣連羞たる面色にて、老先生の教諭の趣、感心少からねども、何とやらん角太どのを、最屓せ給ふごとく聞えて、某安心仕らず。彼短刀の紛失したるに、偸兒だにも捕得ずして、還らば主君の咎めにあはん。この義を憐み給へかし。といふを船虫うち消して、そはわが所天の胷三寸に、斂められての事なれば、おん身あしかれとは謀り給はじ。とく赤岩

下赤岩一角は、縮の長絹長袴、腰に朱鞘の兩刀も、四下を拂ふ苛物造りの、刀を引提て立出れば、次に居たる轎子の、戸をひらかして出るもの、是則船虫也。綾の袿衣緋の小袖、下に襲し白無垢も、倘巳の時なる揚褄の、所天を資て左手には、細小なる壺搔抱き、はや共侶に母屋に入りて、上座に著しかば、角太郎雛衣は、等しく怕り敬ふのみ、綷間かねてぞ畏る。そが中に牙二郎は、意氣揚々と親の身邊へ、髀を進め肱を張りて、こは思ひかけざりき。大人も家母もうち揃ふて、勘當したる子の宿所へ、來ませしは所以もやある。こゝろ得がたく候。といへば又縁連も、先生は病中を、歎せ給ふこともなく、よくこそはる〲來給ひけれ。御眼瘡のおん疼痛は、いよ〱たひらぎ給ひし歟。と問ふを一角見かへりて、昨宵夜深に不慮の騷動、牙二郎は和殿と倶に、彼獬者を追蒐て、返璧のかたへ走りにき、と告るものあるにより、綷の成敗心もとなく、病苦を忍びていで來れり。然るを又船虫が、路次の往還の覺束なしとて、迹を慕ふてこれも亦、竹輿を甞して今來たり。彼偸兒はいかにぞや。と問れて歡ぶ縁連牙二郎、辭ひとしく、さン候。彼偸兒はこの草菴へ、走り入りしを認めにければ、透さずこゝへ推蒐しに、いかなる心あるやらん、あるじ夫婦は狎あふて、舍藏はずとのみ陳ずれども、問ふには落ず語るに落る、言語の中に舍藏たる、徵は既に顯れたり。こゝをもて某等は、家搜をせんとい


牙二郎逸東太
讐で角太郎を詰
角


角太郎

論より證據、家捜せん。誘立給へ。と共侶に、奥へ進むを、さはさせじとて、引戻して立塞る、良人を資る雛衣も、紙戸の尻に手をかけて、そは聞わきなし。白屋の、裏も返さぬ下地壁、凌かねたる夜寒の床も、良人の爲には一城墎、捜して見てもその人の、をらずはいかにし給ふぞや。といふに角太郎微笑て、雛衣微妙くいひけるよ。禁るに無禮を働かば、弟也とて許さんや。事を好みし昨宵の試撃、五人齊一撃伏られたる、怨を竊に復さんとて、世に盗賊の悪名を、負する伎倆は淺はかならん。といはれて駭く縁連牙二郎、驚としながら些も怯まず、問ふには落ず語るに落たる、試撃の事まで知てをれば、舍藏たるに疑ひなし。先踏入て引捌出さん。者共背門へ心をつけよ。と示す双聲勢ひ猛く、ふたゝび進むを角太郎、雛衣も亦共侶に、前に遮り後に引つ、挑み爭ふ兄弟夫婦、他人も一箇こき雜て、春の錦に秋筵、善悪邪正の抓織、組つ綻つ隱口の、はてしなければ縁連牙二郎、刀の柄に手をかけて、拔放さんとする折から、何の程にか舁もて來にけん、庭に二挺の轎子の、裡面より高く呼かけて、やをれ牙二郎慓りなせそ。逸東太も大人氣なし。且く等ね。と禁めたる、聲に驚く兩箇の悪棍、彼は正しく家尊の大人。什麼先生がいかにして、みづからこゝへ來給ひけん、思ひかけず。とばかりに、猛に衣紋搔繕ふて、舊の席に座を占れば、角太郎と雛衣は、迭に面をあはしつゝ、そが偕出てぞ迎ける。當

太郎にうち對ひて、絕て久しき犬村ぬし、某這回當地に來つるは、主君長尾殿の仰を稟て、村雨丸に相似たる、短刀の鑑定を、赤岩大人に請ん爲、そを携て赤岩の、宿所に逗留したりしに、昨宵同所に宿りを討めし、旅客犬飼現八が、竊略て走り出るを、某并に塾生達、牙二郎ぬしと俱に八名、推捕籠て擊んとせしに、彼現八は手煆煉にて、某が從者なりし、尾江内墓内は命を隕し、塾生飛伴太潑太郎は、深痍を負ふて倒れたり。この故に現八を、擊漏しつゝ遺恨に堪ず、牙二郎ぬしと共侶に、なほ脫さじとて追蒐しに、天は明朝日の升る比、逈に見れは現八は、この菴中へ走り入たり。罪あるものを舍藏事、桑門の習俗にて、是も非も分ぬ佛ごころを、慈悲善根ぞ、と思はれんが、偸兒に荷擔せよといふ、佛の敎あることを聞かず。これらの理義を汲わきて、とく現八を遞與給へ。異議に暨ばゞ家搜ししても、搦捕ずは得こそ還らじ。深念を決めて應給へ。と賺しつ威す老狸、一穴なる牙二郎も返答遲し。と焦燥たり。然けれども角太郎は、騷ぎたる氣色もなく、籠山生の來歷話說は、虛實を奈何としるよしなけれど、偸盜戒は世尊の妙法、偸兒と知て舍藏ものは、出家といふともあるべからず。有如之者件の現八が、この柴門へ入りたりとも、脫路多る野中の孤館、しかも天明の比ならば、何地ゆきけん夢にもしらず。なほ又外を索ね給へ。といふに標立緣連牙二郎、爭ひ給ふな、その術は喫はず。

あへず、幾間もあらぬ草庵にて、この儘在らんは無謀に似たり。最窮屈にはあるべけれど、姑く戸棚へ躱れ給へ。是頼朝の伏木に隱れ、漢の高祖の野中の井に、敵を避たる例に同じ。誘とくとく。といそがせば、現八竟に推辭に由なく、袱包を著たる儘に、刀を引提身を起して、家廚に鄰る戸棚の中へ、左手をかけてうち登れば、角太郎も立よりて、衾戸閉て、追來る人の、ありもやする、と俟程に、跫然として走著たる、赤岩牙二郎、籠山緣連、若黨奴隷を後に立して、柴門窄しと込入て、呼門もせず緣頬に、足踏かけてうち登れば、角太郎は戒刀を、腰に跨へ出迎へて、こは珍し牙二郎、籠山氏とつれ立て、朝霧わけてはる〴〵と、訪來られしは故もやある。と問へば牙二郎冷笑て、兄弟牆に鬩がねども、親の勘當受たる兄貴は、鄙語にいふ他人の權輿、胡越の如くなりにたるを、訪はで叶はぬ這回の緊要。とく偸兒を出し給へ。といはせもあへず角太郎は、其方へ膝を推向て、こゝろ得がたき偸兒呼はり。出せといはるゝ覺はあらず。といへば牙二郎項を伸して、又呵々とうち笑ひ、否、宣ふな隱し給ふな。跟より人の來るともしらで、こゝの柴門を推開て、裡面へ入りしを遙に見たり。益なき口を嘀んより、推出して遞與給はゞ、異母でも兄弟の、好みに阿爺へ勘當の、勸解して取する法もあらん。强情張らば他人扱ひ、用捨は得せず、いかにぞや。と聲高やかに譴問ふを、緣連暫時。と推禁め、角

せ、又二人に痍を負したり。然ども大人一角殿は、その處へ出給はず、牙二郎ぬしも恙なし。又上毛白井の來客に、籠山逸東太縁連といふものあり。原是塾生なりしといへば、主人も豫て相識ならん。彼人頻りに箭を射かけしを、某辛く防ぎ留めて、箇樣々々に謀りつゝ、竟に外面に脱れ出て、路を求て走る程に、天結陰りてゆくてをわかず。時に一團の燐火燃出て、某を導きしが、天の明る比消失にき。これらの由を報んとて、立かへりては候へども、程もなく追手蒐りてこの菴中を閙すべし。わが身は今さら惜むに足らず。主人夫婦を連係せば、後悔すとも及んや。姑く餘毒を避てこそ、又再會を料るべけれ。暇まうす。といひかけて、立上らんとしてけるを、角太郎も雛衣も、慌忙き推禁めて、こは何事をいはるゝやらん。刎頸の交りは、憂樂禍福を俱にこそせめ、よしや赤岩より追人蒐りて、家搜せんとて閙くとも、某かくてあらん限り、阿容々々として遞與さんや。方便を盡して、そがうへにも、脱れがたくば俱に死ん。要なきことな宣ひそ。と言語尖く怨ずれば、雛衣も亦慰めて、俺們夫婦の爲にとて、赴き給ひし赤岩にて、うたてや寃をいひかけられて、萬死を出て一生を、保ちてかへり來給ひしを、又何處へか遣らるべき。とにもかくにもわが所天の、いひつるよしに任し給へ。と夫婦齊一禁むれば、現八只管感嘆して、爾らば主人はいかにして、こゝに追人を俟給ふぞ。と問ふを角太郎聞

こと七八町、誰が連城を照しけん、踏も迷はで返壁なる、庵の中に入りしかば、縁連見つゝ歡びて、今あの庵へ走り入りたる、背影は疑ひもなき、現八に極れり。彼處は何といふ里やらん、菴主をしりてやをはする。と問へば牙二郎含笑て、彼處は犬村の野盡處にて、返壁と字せり。菴主は則わが兄なる、角太郎にこそあンなれ。犬村なる里人等が、建たる庵と聞しのみ、まだ一遍もゆきては見ねど、既に彼處へ追籠ては、袋の物を取より易かり。往きて左いはん、右せん。といと高やかに相譚つゝ、いよ〳〵歩をぞ早めける。有然程に、返壁なる角太郎は、雛衣と共侶に、現八がうへをのみ、いかに〳〵と思ひ不樂て、その通宵寐も寢られず、詰旦は未明に起て、雛衣をいそがしつ、朝の炊に柴折燒て、をさ〳〵その還るを俟に、僅に旭の出る比、現八は喘々、折戸推開けかへり來つる、爲體の遽しくて、衣に鮮血の塗れしは、縡ありけり、と驚き立たる、夫婦は右より左より、犬飼ぬしいかにぞや。彼處の安危心もとなし。有けんよしを聞まほし。といふに現八息吻あへず、赤岩の宿所にて塾生們と試撃の趣、且その怨を復さんとて、件の徒黨凡八名、盗賊入りぬと呼りて、現八を撃んとしたる、その縡の爲體、勝負の進退如此々々と、言語急しく報告らすれば、あるじ夫婦は又驚き、且感嘆して已ざりしを、現八又報るやう、兵は寔に凶器にて、戰ひの間是非に及ばず。某かの折二人を斫伏

る刀をとり揚て、血を押拭ひ鞘に斂めて、走り去らんとする程に、曉がたの天ふたゝび曇りて、其處ともわかず野干玉の、路いと暗くなりしかば、岐道多き刈田の畔に、投て往方を定めかねしに、忽然として一團の、陰火目前に燃出つゝ、先に立つゝ現八を、導くごとく隱々と、閃きてゆく程に、現八これに便りを得て、件の鬼燐を心當に、返璧を投て走りけり。されば又、牙二郎逸東太、團吾東太等は、思ひがけなく小門より、走り出たる現八を、透さず追んとしつれども、外面よりいと大きなる、石を倚かけ措れしかば、開んとするにその戸動かず。迭に罵り推重りて、戸爪戸尻に諸手を掛け、諸聲合して推す程に、遂にその戸を推外して、倒れかゝりし牙二郎は、石に小鬢を磨傷りて、霎時は起も得ざりしを、人僉咄とうち笑へば、向腹立ても今こゝに、いひ爭ん暇なければ、稍身を起し塵うち拂ふて、われに續けといふ儘に、はや現八を追蒐れば、緣連も亦後れじとて、走り出たる背後より、赤岩が若黨奴隷と、籠山が從者等は、船虫が指揮によりて、後走に走り來つ、主の後方に引添んとて、喘々ぞ追ふ程に、團吾東太は留りて、尙片息なる潑太郎と、飛作太を肩に引被て、且容房まで退きける。かゝりし程に牙二郎は、緣連と共侶に、敵の往方を認めねども、足に信して追ふ程に、はや幾十町か走りけん、天はやうやくに明わたる、橫雲の間よりして、前面遙に眺れば、現八は頻りに走りて、相距る

隅よりぞ大袈裟に、斫られて仰反倒れたり。牙二郎東太團吾等は、いまだ深瘡を負ねども、既に身方を四人まで、撃して初の勢ひ衰へ、只三方に立塞りて、頻りに加勢を呼ぶ程に、逸東太緣連は、玄關に掛たりける、弓箭搔拿客房なる、緣頰に立顯れて、弦音高く射かくる征箭を、現八は刀もて、斫拂ひ砍落し、なほ牙二郎等と挑爭ふ、必死の血戰些も怯まず、前後左右に當れども、緣頰には船虫が、箭種をしば〳〵拿もて來て、よく緣連を資しかば、射出す箭聲に委みなく、差詰引詰め切て發すを、現八は一ト叢茂き、羅漢杉を盾にして、纔にその箭を禦ぎつゝ、肚裏に思ふやう、われ今こゝにて狗斃せば、庚申山にて亡魂に、許諾し事もその甲斐なく、且年來五犬士と、契りし事も始ありて、終なからんは丈夫にあらず。一トたびこゝを殺脫て、武運を爲すに增すことあらじ、と深念をしつゝ大刀をも箭をも、受流し砍落し、漸々に逡巡して、彼板垣の小門なる、引戶のほとりに近づきて、左の手頸を働しつゝ、件の引戶を逆手にとりて、忽地礑と開ながら、後ざまに走り出て、はやくその戶を引閉るに、外面に大きなる、葛石のありしかば、血刀投捨雙方をかけて、手ばやく起すかの石を、引戶へ楚と倚かけたり。これにより裡面なるものは、推續きて追んとするに、推せども引けども戶のひらかねば、こは什麼いかに、と焦燥つのみ。緣連さへに戶口に聚ふて、ふたゝび悶擇したりけり。有然程に現八は、捨た

あらじを、栽籠の隈などに、躱れをらんも知るべからず。とく獵出し給はずや。と急しく報る高聲を、雨戸のあなたに停立たる、尾江内墓内うち聞て、こゝろ得たり。と逸足飛して、驀直にぞ走遶る。庭に渡せし索麻に、兩人齊一足を捕られて、齊一撲地と轉輾べば、現八得たり。と顯れ出て、起んとしたる墓内が、細頸丁と撃落せば、尾江内怕驚きて、身を起しつゝ聲ふり立て、やよ偸兒はこゝに在り、とく來て撃留給はずや。と呼せも果ず現八は、はやく血刀うち振て、走り蒐れば尾江内も、脫れがたしと思ひけん、拔合したる刃の電光、兩三合撃よと見えたる、尾江内は肩先より、乳の下かけて韓竹劊に、斫倒さるゝ樹下蔭、鮮血の丹楓を散しけり。程もあらせず牙二郎飛伴太、東太團吾と潑太郎、或は短鎗打刀、應手物々々を引提うち振り、はや現八を推捕籠て、撃んと競ふを物ともせざりし、勇士の大刀風向ふに前なく、是首に見はれ、彼首に隱れて、一上一下と術を盡す。六口の刃は田每の月の、波のうねりに晃く如く、何に暇なきものから、先に進みし飛伴太は、短鎗の蛭卷斫落されて、刀を拔んとする程に、現八透さず踏入て、肱の尖骨を丁と斫る、刃の冴に飛伴太は、苦と叫て倒れたる、身方の上を踏越て、頻りに進む潑太郎、三尺に近き燒刀の、稜うち鳴す奮擊突戰、心ばかりは猛かれども、既に巨瘡を負しかば、迯足踏で腕も、倶に紊るゝ繁芒、吻と息をつく暇なく、流るゝのりの苔衣、


驟兇挾く夜
現八を害
せんとす
現八



雨戸さへ、やをら閉つゝ庭面なる、足場を揣る樹立の蔭に、身を潜してゐたりける。現八が今宵の舉動を、後に聞くもの舌を振ふて、身の中すべて膽なるべし。といはぬものなんなかりける。有如之程に丑三の、鐘鎬々と響くを暗號に、潜び近づく八箇の癖者、奥のかたより牙二郎飛伴太、西のかたなる次の間より、東太團吾潑太郎、外面には縁連主從、尾江内墓内すべて三人ン、雨戸に添ふて埋伏しつゝ、八人ン三隊に立別れし、出口々々を殺塞ぎて、競ひ蒐れる諸聲高く、盜賊入りぬ、とく撃留よ。と叫びも果ず兩方齊一、隔の紙戸を蹴放ちて、閃かしたる短鎗の刃頭に、襖の上よりぐさと刺す。各々寃ひは違ねども、手畣もせずぬしもなし。原來甲夜の計較を、はやく猜して逃たるならん。遠くはゆかじ追蒐よとて、迭に叫びつ罵りつ、僉後れじと捫擇しつゝ、はや縁頰より出んとするに、豫て身方の倚かけ措たる、小桶、擂盆、白火盆に、跌き倒れて、手に持てる、刃に面を劈れ、人の短鎗を蹂躙て、同士撃すな。と叫ぶのみ。早には起も得ざりけり。登時外面に後詰をしたる、縁連は驚きながら、且縁頰へ登り來て、狼狽騷ぐもの共を、頻りに罵り鎮むる程に、船虫はこの物音に、紙燭を秉りて走り來つ、現八ははや逃亡たり、と聞くに望を失ふものから、然ともと思ひかへして、はやく臥簟へ手首を、さし入れて莞爾とうち笑み、人々こゝをまだ試給はずや。夜衣も蒲團も溫まり耗ねば、脫出て尙程も

も身をし放さぬ、護身囊の中なりける、彼信の字の瑞玉の碎る如き音せしに、驚き覺て眼を開けば、枕邊なる行燈は、はや滅果て黑白もわかず、護身囊を表より搜るに、玉は碎けしごとくならねば、原來夢にてありける歟、と思ふに胷のうち騷げば、心いよ〳〵安からず。臥しつゝつら〳〵尋思をするに、彼緣連等が執念深く恨て、今宵竊に害せん、と謀れるよしをしらせんとて、身に添ふ玉の戞然と、音して眠りを覺せし歟。こゝにて物を思はんより、密と立出て見ばやとて、身を起し衣を襲て、緣頰の障子を開るに、怪むべし障子の外方に、物多く並べ累ねて、こゝより走り出んとするとき、跌せんと操組たり、と思ふものから些も騷がず、ふたゝび徐かに臥簟にかへりて、袱包を腰に著け、大小の兩刀を、腰に帶つゝ搔撈々々、又緣頰のかたに出て、措れしものを一兩箇、音せぬやうに片よせて、出れば雨戶に關鎖あり。これを一枚竊に外して、遂に前栽に出て見るに、こゝには足を捉せん爲に、麻索を引渡したり。甲夜には天の結陰しを、日今僅に霽るゝを見れば、八日の月は沒しかど、星光の晃めけば、現八聊便りを得て、件の索をうち踰つ、なほ彼此と見遶るに、南のかたなる板垣に、一ト枚の引戶をものせし、細小なる門ありしかば、これ究竟と鎖捩捨て、密と開閉を試るに、戶走り轢ることもなければ、手懸可開措て、又緣頰に立戾り、障子引よせ、夥の物を、舊の似くに倚かけて、外に出るとき

を失ひては、まうし解べきよしのなければ、綷相違なき證までに、賊の首級を齎したり、と聞えあげ奉らば、縦罪科を被るとも、五十日歟百日で許さるべし。この議はいかゞ。と聶けば、衆皆亦復感佩して、籠山ぬし説得て妙也。爾らば左せん右せよ。と迭に聶く手配の、商量に小夜深にけり。有然程に犬飼現八は、客房に赴て、既に臥簟に入りつゝも、肚裡に思ふやう、さしも赤岩一角は、頼切たる弟子等の、遺なくわれに撃伏られしを、聊怒る氣色もなく、いよいよわれをも欵待たる、その奸詐測るべからず。且渠が左の眼の、矢傷は昨宵庚申山にて、正しくわれに射られしを、童蒙に射を敎るとて、不憶く箭の飛返りて、眼を傷られたりとかいへるは、その本性を妻にも子にも、隱すが所以の食言也。さはさりながらかの折に、彼奴はいまだわれを認めず、仇なる由を知らねども、昨宵眞の一角ぬしの、寃鬼の告たる事と、是彼共に吻合す。亦何をか疑ふべき。なほよく謀りて便宜を窺ひ、老妖怪を退治して、赤岩犬村親子の爲に、この年來の寃を釋ずは、許諾し事もその甲斐なし。さばれ渠には羽翼多かり。且角太郎は孝心篤くて、彼妖猫を妖怪と、知らで眞の親とし思へば、相讐敵となすこと難かり。いかにすべき、と肚に問ひ、腹に答て左に右に、心おちゐぬ旅宿の床に、目睡もせで在けるを、夜はやうやくに深ゆく隨に、頻りに睡眠を催せば、なほ睡らじと思ひつゝ、何の程にか目睡けん、起臥するに

笑て、その手配はさることながら、なほ漏さじ、と謀らんには、庭にも繩を引渡して、二重も三重も准備をよくせば、檻の獸籠の鳥、迯とも脱しはせじといふ、助言に牙二郎勇立て、然らば丑三過る比、潜びよりて寢首を捕ん歟、火事ありと呼りて、慌忙き起んとするを、總蒐りにして撃べき歟。と問ふを一角聞あへず、閑暇無事の時ならば、寢首を捕らるゝこともあらめ、渠は今大敵の中にあり。いかでかは熟睡をすべき。又火事ありと呼らんに、其聲隣へ聞えなば、四隣の人々走聚ふて、妨になることもあるべし。所詮五人ゞも十人ゞも、三四隔に捕籠て、盜賊入りぬ、と呼懸々々、起んとするを撃こそよけれ。然はあらずや。と誇貌に、左右を佗と見かへれば、衆皆齊一感服したる、そが中に緣連は、うち含笑つゝ聲を潜めて、仰寔に理り也、某が腹心の若黨に、尾江内といふものあり。又奴隷に墓内といふものあり。兩人俱に心悍くて、さる所行を歡べり。是回も共に將て來たれば、渠等を加勢にし給へかし。かゝれば身方八人ゞあり。現八なほも武勇に闌て、三面六臂になりぬとも、撃漏すことあるべからず。かくて彼奴を撃捕給はゞ、首級を某に給へかし。白井の城へ齎して、主君長尾殿にまうさんには、道中なる某の驛にて、强偸數人うち入りて、御大刀を奪ふて走り出るを、某透さず追蒐て、頭立たる一人ゞを、矢庭に撃留候へども、先なるは逃亡て、ふたゝび追へども遂に及ばず。既に御大刀

西はしらねども、關東にては武藝をもて、大人の右に出るもの、ありとしも覺ぬに、高弟達の現八に、撃伏らるゝを外に見て、還て彼奴を譽給ひしは、抑甚麼なるこゝろぞや。是より當家の武名降らば、弟子も亦必離れん、いと朽をしき事にこそ。と敦圉悍く怨ずれば、一角呵々とうち笑ひて、そは和主等が知ることならず。みづからよく思へかし。彼現八が武勇藝術、籠山だにも捷こと難かり。然るを和主が手を出して、いよ〳〵後れをとることあらば、吾も亦見てはをられず、推捕籠て撃に至らば、縱現八を撃捕とも、こゝにも傷人多かるべし。われはこの義をおもふをもて、些も色に顯さず、感服したる體にもてなし、由斷さして熟睡を窺ひ、結果れば人も得しらず。こゝらに心つかずや。といふに牙二郎有理と曉りて、又いふよしもなかりけり。登時船虫は、屛風の背より立出て、良人の身邊に進み近づき、妾も嚮には腹のみ立て、抓みも蒐まほしかりしを、わが夫の深念の格別なる、さばかり手輕き事はなし。皆慮々してをることかは。撃捕る準備をし給はずや。といはれて緣連眼を睜りて、縱宿鳥を刺とても、彼奴が武藝は侮りがたし。倘撃漏すことあらば、後悔その詮なかるべし。出口々々に一兩人、埋伏せんこと肝要ならん。といふに飛作太潑太郎、東太闌吾も僉頷きて、爾らば臥房の出口には、臼樹などを倚かけ措て、走り出んとするときに、趺き輾ぶを撃こそよけれ。といへば船虫舍

第七輯　卷之二

第六十四回

現八單身にして衆惡と戰ふ
緣連牙二郎信道を逐ふ

却說赤岩一角は、緣連を首として、大約五名の塾生等の、僉現八に撃伏られしを、媢て恚る氣色なく、又現八を欵待す程に、夜はやうやくに深初て、既に人定になりしかば、客もあるじも醉ぬはなし。そが中に現八は、素より酒量に乏しとて、しば〳〵盃を推辭にければ、一角やうやくその意に任して、童扈從を呼近づけ、盃盤を納さして、又如此々々と分付れば、こゝろ得果て退きつ。客房に屏風建遶らし、現八が臥箪を儲て、云々と報しかば、一角これをうち聞て、犬飼ぬし、さぞ疲勞給ひけめ、とく退りて睡り給へ。籠山生は家族に同じ、牙二郎が子舍に至りて、共侶に寢まるもよけん。愚老も臥房に入るべきに。といふに現八席をくだちて、あるじ幷に衆人に、よろこびを述別を告て、童扈從に引れつゝ、はや客房にぞ退きける。牙二郎これを目送りて、父のほとりへ髀を進め、大人はなどてや心弱く、嚮に某を禁め給ひたる。京より

て、身邊へ引著け、ふたゝび立せず。その間に現八は、縁連を扶起して、些も誇る氣色なく籠山ぬし、おん身の中の、何處も痛み候はずや。鄙語にいふ怪我の功名、大く無禮を仕りぬ。且く休ひ給へかし。といはれて縁連答るよしなく、只憤りに胸塞りて、圓なる目を睜るのみ。遺たる刄をとり揚て、そが儘鞘に斂れども、なほ治らぬ怒を忍びて、目禮しつゝ共侶に、舊の席に著しかば、現八は、潑太郎、飛伴太、東太、團吾等にうち對ひて、諸君の懇望、辭するに由なく、おん大刀筋を受たりしに、殆感心仕りぬ。勝負は時に依るものなれば、必介意し給ふな。といふに四人は頷くのみ、顏を背けつ、捩尻しつゝ、應するものなかりけり。登時あるじ一角は、襷を外して現八を、上座に請薦め、扇を披きて扇立、扇立つゝ言語を改め、思ふに優たる犬飼ぬし、いにしへの八幡太郎、九郎判官なればとて、いかにしてその右に出べき。某病中ならざりせば、又おん敵手になるべきに、ならぬは幸ひならんのみ。總て己が力を料らで、負腹を立ものは、皆その器量の窄き所以也。弟子們にはこの年來、よく〳〵儆たりければ、竊に遺恨を含むものの、あるべうも候はねど、改めて又一獻酌ん。僮共とく銚子を替よ。といふに衆皆怒を斂て、又盃を巡らすにぞ、物の蔭なる船虫は、歎息しつゝ退きける。畢竟現八が、こゝに武藝を顯して、又甚麼なる話說かある。そは次の卷に、解分るを聽ねかし。

技に、兩人齊一筋斗りて、足空ざまに輾轉び、四挺の鍬を逆さまに植並しに似たりけり。既に四箇の塾生等は、皆直輪に負しかば、怺難たる籠山縁連、適候犬飼生。頻りに勝に乘給へば、及びがたしと思へども、負て恥辱を遺さんより、撃殺さるゝも勇士の本意也。誘眞劍にて勝負せん。その木刀は措給へ。と言語急しく呼かけて、野袴の稜結み、刀を引提て立向へば、現八莞爾とうち笑て、現勇しき所望の器械、その義は貴意に任し給へ。某は恨みもなき、人を害する心なければ、なほ木刀こそ相應しけれ。誘撃給へ。と騒がぬ膽勇、憎さも惡し、と縁連は、應も得せず身を斜りて、捧四五寸拔蒐る、臂を駐し拳法の祕訣、沈でふたゝび引拔く刄を、左へ拂ふて引組だり。縁連も亦覺ある、膂力は剛く、骨逞しく、身長六尺に近ければ、拗んと刀を捨て、笠に被りて角へども、現八は席撃組撃、捕物の祕術を極し、坂東無雙の手煅煉なれば、組だる儘に些も撓ず、推せども突けども、不爭の受身に、剛柔進退法に稱ひて、挑みあふこと半晌ばかり、飽まで敵を疲勞しつ、透を窺ひ、やと聲かけて、朽たる柱を拔く如く、左へ撐と捺伏せて、登し蒐て動かせず。坐席のかたを見かへりて、諸君子勝負は見えつらん。といひつゝ膝を退けて、引起さんとする程に、牙二郎は數人の不覺を、見る目不樂しく齒を切りて、刀を引提身を起し、はや現八を撃んと進むを、一角は聲高やかに、牙二郎等。と呼禁め


現八
ハツ太郎


牙二郎
一角
ひぞん太

戸を開放ちつゝ、竈の中に跳入れば、現八も推續きて、件の男と對ひてをり。かくて一角を初として、衆皆其方にうち向へば、この時までも竊聞したる、船虫も物の隙より、勝負いかにと見る程に、且して飛伴太は、忽地ヤッと聲を被て、撃んとするを現八は、兩三刀受拄て、遶巡をしてければ、飛伴太得たりと踏入て、ふたゝび撃んとする處を、現八はやく引外して、左の肩尖丁と撃つ。さしも尖鋭き大刀風に、飛伴太は苦と叫て、矢庭に仰反り倒れけり。現八は今この敵手の、眉間を撃ば撃べかりしを、倘撃殺すこともやとて、只その肩を撃しなり。飛伴太既に打倒されて、やうやくに身を起せば、はや立代る八黨東太、參るぞふと呼びかけて、赤樫の木刀を、閃かしたる勢ひの、猛きを現八ものともせず、六七撃合しつゝ、ヲッと嚏て右の拳を、痿痺るゝばかり撃しかば、東太は持たる木刀を、三間ばかり反飛されて、怯むを現八衝とよせて、左手に襟上搔抓み、力を究めて投たりける、勇士の手煉目覺しく、東太は腰を蹉らして、霎時は起も得ざりけり。この者共が再度の不覺に、齊一慓立潑太郎、團吾も倶に作法を紊して、兩人右より左より、只陽燄の閃くごとく、透間もなく撃木刀を、現八も亦右に拄、左に拂て寄せつけず、三人の被辭撃刀音は、冬の深山に杣木樵る、斧鉞の響に異ならず。勝負も果じ、と見る程に、現八は足を蹉して、團吾が腨を礙と蹴て、返す刀に潑太郎が、腰骸拂ふ早

問ふまでもなき犬飼ぬしは、武者修行にこそあらんずらめ。といへば縁連頷きて、若先生の鑒定は、某も同案也。進止を見て知りぬ。武邊に長たる人にこそ。と虚稱しつゝ目を注すれば、團吾飛伴太含笑て、然る術藝の達人ならば、一ト大刀敎を受まく欲す。此義はいかゞ。とそゝのかせども、現八騷ぐ氣色もなく、諸君の鑒定甚過たり。勿論某もはやくより、武藝を嗜み候へども、武者修行するものにはあらず。いかにして各位の、敵手にせらるゝものならんや。その義は免し給へかし。といふを衆皆聞あへず、そは食言也、謙退ならん。是も非も容らずお敵手に。と牙二郎さへに諸聲立て、動搖懸りて已ざりしを、一角大く叱り禁めて、現八にうち對ひ、壯佼們が大輕忽なる、さこそ可笑く思はれけめ。愚老が病中ならざりせば、一ト大刀試み候はんに、おもふにも似ず遺憾し。切てこの壯佼們に、敎へ給はゞ幸ひならん。と他事なくいはれて、現八は、推辭によしなくうち頷きて、武藝を業にせざれども、只兩刀を帶たる甲斐に、かくまでに宣へば、脫るゝ路の候はず。誰々なりとも敎給へ。といふに衆皆歡びて、童扈從を呼近づけ、この一ト室に隣たる、稽古所に大きなる、蠟燭夥點さして、准備立地に整ひければ、飛伴太は逸速く、稽古所の柱に掛たる、木刀多くとり卸して、現八がほとりにもて來つ、孰なりとも擇み給へ。といふに現八含笑て、いと短きを取りしかば、飛伴太は長きを拿て、間の杉

々といひかけて、先に立、案内をして、圓居の席へ伴へば、船虫はひとり避て、屏風の背に躱れつゝ、なほも竊聞したりけり。有然程に現八は、席末に列りて、あるじに對ひ、今宵止宿の、歡びを述しかば、一角纔に肱をはなちて、遠遊の客人進み給へ。某近曾病痾に嬰りて、迎接に親まず。不敬は用捨を給へかし。こゝに候弱冠は、拙兒赤岩牙二郎也。又それなるは愚老が高弟、今は長尾の家臣なる、籠山逸東太縁連也。又同席なる壯佼共は、孰も皆塾生にて、彼は某甲、此は乙某、丙某に候。と一箇々々に告しらすれば、衆皆齊一膝を進めて、不測の對面をぞ祝しける。且くして一角は、牙二郎を見かへりて、犬飼ぬしは珍客なれども、不用意にして管待なし。食暴せし肴なれども、盃をまゐらせよ。といふに牙二郎こゝろ得て、犬飼ぬし、弱年者の、特に禮なき所行なれども、巡り來つる小盃あり。異議なく受て過し給へ。といひつつ羞を現八は、恭しく受戴きて、今宵の止宿を允さるゝすら、無是上幸福で候に、諸君の圓坐に列りて、酒宴の餘興に與る事、口果報さへありといはまし。いかでか貴意に背んやとて、半受つゝ飲盡して、その盃を返せしかば、これよりして縁連等も、皆相識の爲にとて、現八をのみ敵手にしつゝ、獻つ酬つ時移るまで、武藝に誇る高笑ひ、醉に乘する澀太郎、東太も共に進みよりて、犬飼ぬしは何等の爲に、この地に遊歷し給ふやらん。といふを牙二郎うち消して、

近會主人は眼疾にて、日夜徒然に堪ざれば、𨻶敵を討る折也。いはるゝよしを通達せば、うけ引れんこと疑ひなし。誘こなたへ。と先に立て、玄關のほとりに將て來つ、一箇の奴隸を呼出して、此如々々と分付れば、奴隸は軈て小盥に、溫湯汲とりもて來つゝ、現八に足を洗しけり。かくて團吾は現八を、玄關の次の間なる、褊室に憩しつ、その身はひとり一角等が、身邊に至りて云々と、緣由をぞ報にける。是より先に緣連は、東太、飛伴太、潑太郞等と、又盃を巡らして、團吾がかへるを俟程に、船虫は動もすれば、角太郞夫婦の事を、あしざまにのみ噂せしを、牙二郞も亦相槌打て、父の聞くだに憚らず、いと喋々しく罵りけり。浩處に外に出たる、月簔團吾かへり來て、現八が綷の趣箇樣々々と報しかば、衆皆齊一手を拍て、綷はや成りぬとうち笑ふを、一角急に推禁めて、聞くがごとくは件の旅客、犬飼とやら、現八とやら、下總浪人ならんには、二蓋松山城介が、弟子にもやあらんすらん。二蓋松は古人になりぬ。縱渠なほ死なずして、今この團坐に入りたりとも、絕て怕るゝ敵手にあらず。況その拙を受たらん、末々の弟子をや。爾はあれども小敵也とて、思ひ侮らば過失あらん。こゝろ得給へ。と儆れば、衆皆一句に承伏して、猛に威儀を繕ふ程に、團吾は又遽しく、現八がほとりに到りて、只今おん賴の一條を、主人一角に達せしに、病中には候へども、對面せんといはるゝなり。誘

各々の、大刀すぢを見しらし給へ。そはいと興ある事なるべし。といふに飛伴太、潑太郎、東太、團吾も雀躍して、おもしろし〳〵。惜らくは時移りて、日の暮たれば立去りたる歟、とく外に出で一見すべし。といひつゝ衆皆立んとするを、一角ヤヤと呼禁めて、噫喋々し四人ながら、うちも揃ふてゆくことかは、團吾一人で事足りなん。その人今なほ立在をらば、ともかくも説誘ふて、はやくこなたへ伴ひてよ。とく〳〵といそがせば、團吾は得たりと勇立て、外面さして出にけり。有然程に、犬飼現八は、赤岩が宿所の板垣の、ほとりに久しく立在て、裡面より出る人を俟しに、日は暮果ても便を得ざれば、つく〴〵と思ふやう、われ慭に遠慮して、いひも得よらず日の暮たれば、初更前後に門を扣きて、宿とり後れし體にもてなし、一宵を此家に曉すべし。しからんには一角が、矢傷の淺深と船虫が、言の虛實も定かに知れん、と尋思をしつゝゆきも得やらず。初の儘にをる程に、忽地に人ありて、挑灯を引提つゝ、角門より立出て、左見右見つゝ現八が、ほとりへ早く進み近づき、御邊は作麼何處の人ぞ。こゝにて伴侶を俟給ふ歟。と問れて現八慇懃に、否某は下總浪人、犬飼現八と呼るゝもの也。獨行にて伴侶はなし。當國は不知案內にて、思はず宿をとり後れ、いかで大家に止宿を乞ん、と思ふものから便宜を得ざれば、久しくこゝに立在たり。といふに團吾は頷きて、そは痛しき事になん。

あげなば、且當分の罪を免れん。その間に穿鑿せば、かの短刀の出ざらんや。さのみな勞し給ひそ。と慰められて緣連は、纔に色を直せども、心はいまだ安からず。當下一角が左右なる、月簑團吾、玉坂飛伴太、八黨東太、佐足潑太郎なンどいふ塾生等、やうやくに進み出、緣連に辭をかけて、恙なきを祝し祝され、或は又短刀の、紛失を悔ひ、且慰めて、又且く相譚ふ程に、その日も既に暮しかば、席上に燭を點じて、童扈從が持運ぶ、美酒珍饍のいろ〳〵なる、所狹まで按排べて、緣連を管待せば、一角が二男赤岩牙二郎、後妻船虫も出て來つ、皆緣連に應對したる、そが中に船虫は、初對面の事なれば、迭の口誼を述盡して、大酒醼にぞなりにける。主客の獻酬囂しく、盃屢巡りしとき、牙二郎は進み出、緣連にうち對ひて、籠山生は當家の高弟、こゝにさむらふ人々も、僉腹心の輩なれば、兄の如く弟の如く、意中を盡して遊び給へ。爾はあれども某などは、邊鄙の弱輩なるをもて、江湖上の琦人をしらず。越後上毛の國々には、武藝の達者も候歟。と問へば緣連頭を掉て、否、某もよくはしらねど、多くは皆是似たるものにて、老先生の小指の頭にも、向ふべきものは候はず。是にて思ひ出したり。嚮に遠來の武士かとおぼしき、年尙わかき旅客が、こなたの垣に身をよせて、試撃の音を聞つゝ居たり。おもふに渠は國々を、武者修行するものにやあらん。なほ立去らでをるならば、呼入れて

て、彼短刀はなかりけり。是はいかに。とばかりに、顔色忽地土のごとく、驚憂へてわくよしもなく、忙然たること半晌ばかり。やうやく心を推鎮めて、先生この箱を御覧ぜよ。不測の事こそ候なれ。某かの短刀を預り奉りて、首途したるその日より、轎子の内に入れ、或は若黨に持しなどして、奴隷の手には觸るゝことなく、夜も亦枕に引著て、等閑にせし事はなきに、目今蓋をひらきて見れば、袋のみにて短刀なし。既に短刀紛失したれば、罪を得んこと傻俟べし。疾退きて從者等を、一ト穿鑿仕らん。不敬を允し給へかし。と言語急しくその議を告て、退き出んとしてけるを、一角急に推禁めて、籠山生且等給へ。かの短刀を從者に、竊略たるものあらば、こゝまで從ひ來ることあらんや。然るをなほ疑ふて、愁に穿鑿せば、勞して功なきのみならず、身の過失を披露する、嗚呼の所行にぞあらんずらん。といふに緣連有理と曉りて、ふたゝび立もあがり得ず。爾らば又いかにして、この身の罪を免るべき。願ふは先生敎え給へ。と不樂しげに、救ひを乞ふて已ざりしを、一角さこそ。と嗟嘆に堪ず。愚老とても今さらに、せん術はなけれども、和殿立かへりてまうさんには、師にて候一角は、眼病によりて床にあり。病著の瘥り果なば、鑒定を仕らん。その日までおん短刀を、留させ給へかし。一角預り奉れば、前後相違あるべからず、とおん答をまうすにより、その意に任し候、と返命を聞え

いふ、木天蓼をもて造れるもの也。これは是故管領、持氏朝臣のおん物なりし、村雨丸にやあらんといへり。爾れども彼君の、滅亡よりして既にはや、夥の年を歷し事なれば、よくこれを辨ずるものなし。且く僉議を凝らされしに、所詮緣連が師匠と聞えし、赤岩一角武遠は、當世无二の武人にして、且古刀の鑒定も、をさ〳〵よくするものならずや。然らばこの短刀を、緣連にもたし遣して、一角に眞僞を問せば、玉石共に分明ならん。とく下野へ赴けとある、君命を稟しかば、夜を日に續て到著せり。御眼疾を憚らで、無心の至りに候へども、先生鑒定なし下さらば、某も亦面を起す、公私の幸ひこのうへあらじ。と絳詳に述訖りて、携來つる刀の箱を、恭しくさし寄すれば、一角聞てうち頷き、木天蓼をもて柄となし、鞘となしたる短刀は、物數奇にしていと珍し。然るも亦疑ひあり。愚老が豫て傳聞たる、村雨丸の名刀と、その長短同じからず。且村雨はうち振る毎に、その刀尖より忽然と、水氣飛散るものとぞいふなる。かの村雨と村雨ならぬは、この水氣をもて證とすべし。とはいふものゝ折のわろくて、只一眼の鑒定は、いと覺束なき所爲なれども、日の暮ぬ間に一見せん。蓋うちひらきて見せ給へ。といふに緣連こゝろ得て、萠葱の紐解く再重箱の、中より白氣立升りて、隱々として一角が、座邊に靡きて消失しを、緣連は心も得つかず。そが儘蓋を搔取れば、裏面には袋のみにし

りて、長尾家の使者なりとも、逸東太ならば、けしうはあらず。こゝにて會ん、疾せよ。といふに若黨こゝろ得果て、客房のかたへ退りし程に、塾生們は試撃を已て、各々威儀を繕ひつつ、師の左右にぞ侍りける。有然程に縁連は、彼若黨に案内をせられて、はやその席に入りしかば、遙に膝行頓首しつ、仰ぎて一角をよくも見ず。やうやくにして頭を擡げ、寒暖を述、無異を祝せば、兩箇の童扈從等が、茶を薦め菓子を羞て、形のごとくに欸待しけり。登時一角微笑て、珍しきかな籠山生、わが身無異とはいふものゝ、近屬眼瘡の患ひあり。病床の對面は、いとも無禮なる所行なれども、懐愛ければ面會せり。こゝに侍る門生們は、みな相識にぞあらんずらん。うち緩坐ぎて相譚給へ。といふに縁連髀を進めて、そは思ひがけざりき。おん目を傷らせ給ひし歟。御容體はいかにぞや。おん痛みは候はずや。と問ふを一角聞あへず、否、さしたる瘡にはあらず。和殿いぬる比の來翰に、去歳より主君に從ふて、白井に在城し給ふと歟。越後と違ふて路の程も、遠からずしていと愛たし。爾るも猛に訪るゝ事、甚麼なる所要のあるやらん。といふに縁連、さゝ候。這回の參向私要にあらず、即主君の使也。聞も及せ給ひけん、上毛なる白井の城は、去歳より寡君の手に入りしかば、用水の爲に井を鑿られしに、土中に一口の短刀あり。とり揚てこれを見るに、長は凡九寸五分、木柄にして鞘も木地也。或は

招れしに、一角推辭て從はず。某は邊鄙の野人なり。世を我隨に送らんのみ、素より官途の望なし。某が塾生に、籠山逸東太緣連といふものあり。その大刀筋の精妙なる、某に劣り候はず。このものをや召さるべき。と眞實だちて稟しゝかば、爾後使節往還りして、辭やうやくに整ひければ、緣連は思ひがけなく、越後の春日山に赴きて、景春にぞ仕へける。扨も逸東太緣連が、その師一角の意に愜ふて、夥の祿を得たりし事は、緣連その性奸惡にて、同門のもの共の、好き事も歹き事も、間なく時なく師に聶きて、その機を攬ること大かたならねば、一角これを歡びて、わが爲になるものとしつ、長尾家へ薦め擧て、その身の代にしたる也。かくて又七八箇年を歷る程に、景春は去歲の秋より、上毛白井の城に在り。白井は原是、長尾左衛門尉昌賢の居城なりしに、往る享德年間よりして、管領定正の有となりしを、去年景春これを獲て、城普請をせし程に、一日井を鑿て一口の短刀を得たり。これにより景春は、緣連を使として、赤岩許遣しけり。閒話休題、この日赤岩一角は、矢傷の疼痛をものともせず、瘡には些の膏藥を布して、白練に頭を紮ね、三四重し裀にをり、曲彔に肱を持して、塾生等が試擊するを、うち見て笑ひを催したる、折から執達の若黨走り來て、上毛白井の城中より、長尾殿のおん使に、籠山氏の渡せられて、對面を請れし候也。いかゞ計自まうさんや。といふを一角見かへ

黨はやく出迎へて、引て客房へ請じけり。こゝに至りて現八は、件の武士を一角が、客なりけりと悟るのみ、なほも便著を得ざりけり。抑今赤岩一角が宿所へ詣來し羇旅の武士を、甚麼なるものぞと原るに、是則別人ならず。籠山逸東太縁連也。されば件の縁連は、今を距ること十七八年、寛正乙酉の冬の比、主命を矯て、杉門に鄰き松原にて、粟飯原首胤度主從を殘害し、己が宿意を果すものから、その折嵐山の尺八と、小笹落葉の兩刀を、盗賊に奪略られ、剩粟飯原が從者の、撃漏されしものどもは、逃て赤塚へかへりしかば、縁連進退谷りて、罪を免るゝよしのなければ、その宵己が夥兵等を、岩槻なる古寺に捨措つ、ひとり忽地逐電して、些の由縁を心當に、下野なる宇都宮へ赴きしに、こゝも武藏と遠からねば、仕官の望み遂に稱はず。同國赤岩の郷士なりける、赤岩一角武遠は、素より武藝の達人にて、弟子二三百名あり、且熟生も少からねば、縁連は又縁を討めて、一角が家に赴き、初一兩年は、熟若黨にて在りけるを、一角殊に拔萃て、弟子頭にとり立つゝ、名代として彼此なる、稽古の席へ遣しければ、縁連は年々に、武藝やうやく上達して、侮るものはなかりけり。有如之程に、鎌倉山内家の内管領、長尾判官景春、越後上毛を伐靡けて、獨立の企あり。これにより、赤岩一角が武藝、關左に雙なしといふ、世の風聲を傳聞て、しばしば使を遣しつ、且聘を篤くして、只顧渠を

面に衡門あり。いとふりたる赤松の、枝長やかに門を掩ふて、傘蓋に似たりけり。東のかたは庭にやあるらん、いろ〳〵の樹立の、脩きあり短きあり、蒼きあり紅なるありて、秋色の日に爽然なる、樹傳ふ鳥の聲したり。この庭のあなたこそ、武藝の稽古所なりとおぼしく、擊合すらん被聲に、木刀の音をまじへて、或は笑ひ或は罵る、動搖みに餘念なきが如し。現八は莫介に、いひよるよしを得ざりしかば、菅笠を翳しつゝ、夕陽の影を遮りて、件の垣のほとりに立在み、裡面より人の出るを俟に、秋の日なれば短くて、黃昏近くなりにけり。浩處に一箇の武士の、行裝苛めしく、純子に天鵞絨の緣とりたる野袴に、長やかなる朱鞘の兩刀を跨へて、紫縮緬の三尺帶を、端長に締做たる、身長は五尺八九寸もやあるべからん。眉は濃く眼圓に、蒼髯頤に充て、年齡は四十あまり、五十には遠からじと見えたるが、從者五六名を將て、網苧のかたよりいで來にけり。そが中に若黨とおぼしきものの、長き蠟塗の筥を拿るあり、奴隸は鎗を持るあり、鎧櫃を擔るありて、後方に一挺の行轎子を吊しつゝ、はやこなたへぞ近づきたる。現八はこれを見れども、只一角が奴婢などに、便り求めていひよらん、と思ふより外他事もなければ、深く心をとめざりしに、件の武士は現八が、立在たるを怪しげに、幾回となく見かへりつ、軈て赤岩一角が衡門より進み入りて、供若黨に呼門すれば、裡面よりも執達の、若

切て今宵は休ひて、翌まで留り給ふとも、なほ遲きにはあらざるを、其も聽れぬものならば、夕饍たうべて出給はずや。といふを現八聞あへず、否、ものほしうは候はず。薄暮にならば路傍なる、人に求めて饑を凌ん。三とせ已來旅馴ては、飢寒るも苦にならず。翌は必かへり來べきに、吉左右を俟給へかし。さらば。とばかり足早に、赤岩を投て出てゆくを、霎時目送る角太郎、雛衣も只交遊の、義信に感じて忙然と、折戸口にぞ立つくす、籬笆に自生の玉蜀も、懐陜き庭ながら、拂子に似たる紫髯と、共に身の入る子もら達、端緒綴びし駒下駄を、踏な覆しそ、あぶなや。と夫に心つけられて、母屋へかへり新參の、妻は勝手にまだ狎ぬ、初々しさと樂しさの、貌にあらはれてあはれ也。

第六十三回

短刀を携來て縁連師家を賄ふ
衆兇と挑みて信道武藝を顯す

却說犬飼現八信道は、犬村夫婦に立別れて、頻りに路を急ぎしかば、日もはや西に瀰む比、同國眞壁郡なる、赤岩の莊に來にけり。途にて里人に諮たる、赤岩一角武遠が、宿所は方にこゝなるべし、と思ひつゝ外に立て、彼此を見かへるに、この家は三方を、板垣にうち圍して、南

枉てこの議を容給へ。主人の賢慮いかにぞや。と密めき問れて角太郎は、沈吟じたる眼を開きて、教諭寔にその由あり。しかはあれどもわが父も、弟も心剛にして、客を愛するものならず。他郷の人と侮りて、迭に怒りを引起さば、禍災其處に起らん歟、これも亦測りがたかり。この義はいかに。と問かへせば、現八莞爾とうち笑て、弱はよく强を征す。柳の糸に雪折なし。某彼處に至んに、彼人々禮義をもてせば、某これを敬ふべし。彼人々武をもて威さば、某も亦勇をもてせん。餘は機に臨み變に應じて、欲する所は足下の爲に、絆の虛實を撈質して、又只無異を揣るにあり。さのみは勞し給ふな。と進むを雛衣推禁めて、淡薄き女子のさし出口、いふはいはぬに增べけれども、赤岩の宿所には、玉阪飛伴太、月簑團吾、八黨東太、佐足潑太郎なンどいふ、一人當千の塾生侍り。侮り給はゞ過失あらん。といへば又角太郎も、犬飼ぬしの武備智術を、阽むとにはあらねども、身單にして危室に臨むは、寡をもて衆に敵する也。みづから深念し給へかし。といふに現八頭を掉りて、某全く微力を憑みて、心頻りに急るにあらず。さばれ虎穴に入らざるものの、いかでか虎の子を獲てかへらん。愚意の決斷已ことを得ず、疾まからん。と遽しく、袱包を搔拿て、やをら背へ投被て、端引結びつ、刀を引提て、はや緣頰に立出て、草鞋索ねて穿締れば、あるじ夫婦は禁めかねて、皆端近く出て來つ、

らせん。袪衣を脱せ給ひなば、代見出してまゐらすべし。先はや夕餉の准備をせばや。といひつゝ地炕にさし寄りて、柴折焼を現八は、つら〳〵と見かへりて、否措給へ日の短きに、晝飯たうべて程もなし。珍饌美食は魯聖の誡、世に願しき事はなけれど、いまだ五友に環りもあはず。且あるじ夫婦のうへも、心にかゝる事多かり。いといひがたくあなれども、こゝに愚衷を盡さん歟。あるじの繼母船虫どのを、嚮に某闖窺しに、郎才多辯の婦人也。きのふ網苧の宿りにて、里人の言を聞しに、繼子夫婦に強顔き事、いと腹黒き縡の由と、けふ聞く所は表裏にて、儼然として慈母に似たり。笑の中に刃を隱し、錦の嚢に毒を包む、言の虚實を察せずして、いはれし旨に迷ひ給はゞ、恐らく不測の殃厄あらん。そをいかにぞと推て試給へ。船虫どののいへるがごとく、義理ある子也媳也とて、よに慈愛の心あらば、初より夫婦の爲に、犬大人に勸解もすべきに、燃る薪に油を沃ぎて、追遣して、日比を歷つゝ、けふ媒人に呼びかけられて、雛衣どのを救ひしとて、彼氷六にはうちも任せず、みづから將て來て說諭し、絕たる緣しを結び留て、恩義の枷を被られしは、情由ありぬべき事ならずや。父子は只是天性也。然れば他人の疑ひを、容るゝは要なきことなれども、それ將時宜に依るべきのみ。もし某に任し給はゞ、赤岩へ赴きて、縡の虚實を探るべし。夫三省は曾子の謹愼、遠謀は逆、身を護るの墻なれば、

てやうやく角太郎は、愁眉を斂めて傍を見かへり、やよ雛衣、こなたへ進め。と呼近づけて、犬飼ぬし、是なるは、荆婦にこそ候なれ。おん目を給はり候へ。と引あはすれば現八は、遽しく膝を進めて、こは令政にをはする歟。某は下總浪人、犬飼現八信道と呼るゝもの也。曩に友達の往方を索ん爲、當國に杖を曳しより、主人の香名世に馥しく、景慕の懐ひに勝ざれば、けふしも柴の扃を敲きて、明教を受しかば、いよゝ捨がたき思ひあり。既にして莫逆の、友垣を結びては、胞兄弟にも優す心地にこそ。いかでか交る年月の、脩短きに依るべきや。されば古語にも、蓋を傾けて故が如し。白頭までも新なり、といへるは只その志の、合と合ぬに新故あり。あるじの爲には死をだも辭せじ。心くまなく思されよ。と他事なくいはれて、雛衣は、やうやくにうち見あげて、いと憑しき賓さまに、思ひがけなく訪れたる、夫婦のうへに幸福多かり。いと恥しき事をのみ、はやおん耳に觸たれば、今さら包んよしも侍らず。よろづに心つきなくて、濡衣さへに被せられし、妾のみかは良人すら、犬村の家、赤岩の、寓居もならで遠離る、草の莽に草の床、虫より外に友もなき、浮世の秋を身ひとつの、秋鹿と思へば膽向ふ、心細さを忘るゝまでに、慰られて歡び侍り。見給ふ儘の不樂住ひにて、欵待とては侍らねども、いつ〳〵までもおはせかし。長き旅路の風雨に、おん衣物の汚れたらんを、洗濯してまゐる

とき、倏忽心に計較あれば、いと正首に慰めて、角太郎許誘引來つ、然しも言語を巧にして、角太郎に說勸め、遂に夫婦を全うしたる、肚裏には計策の、速に成れるを歡びて、從者等をいそがしつ、その日晡時に、赤岩なる宿所に還りて、一角に云々と、角太郎がいひし事、雛衣がうへはさら也、己が伎倆の趣を、箇樣々々と聶くにぞ、一角は耳を傾けて、歡ぶこと大かたならず。日出の神の冥助より。儞の利益は捷徑ならん。その事甘く行はれなば、わが目の病は忽地愈て、物を見ること左の眼の、恙なきに等しかるべし。徹妙く謀り給ひしよ。と頻りに譽て已ざりけり。案下某生復說角太郎は、赤岩へ歸ゆく、人々の背影の、見えずなるまで目送り果て、軈て母屋に退きつ、隔の紙戶を推ひらきて、犬飼主犬飼主、大く無禮を仕りぬ。誘こなたへ。と請進れば、現八は莞然に、刀を引提進みよりて、地炕の邊に對ひてをり、不測に夫婦再會の、歡びを述しかば、角太郎は聞あへず、大く羞たる面色にて、家音の呂律調ねば、臭聲既に外に洩て、賓客を驚せり。こも欵待といふべきや。寔に面なく候。といふを現八慰めて、さな宣ひそ。唐山なる、遐きむかしを傳へ聞くに、大舜の聖人なるも、弟に象あり、父母に瞽叟夫妻あり。或は爪をもて枯田を耕し、或は井に落て免れたり。只眼前の成敗もて、始終の榮枯を論ずべからず。既にして足下の孝あり。加るに又貞烈の令政あり。久後憑しく候。といはゞ

吾を害せんとして、還て小文吾に斫仆され、その身は千葉の家臣なる、畑上語路五郎に搦捕られて、石濱の城に牽るゝ折、千葉の奸臣、馬加大記常武が資によりて、辛く途より逐電して、下野州二荒山の麓村に落留り、且く躲れて在りける程に、赤岩一角武遠が、婦妾を求るとて、媒妁するものありしかば、便りに就て彼處に赴き、一角が側室になりて、いく程もなく後妻に、執立られしは、船虫が、男に媚る才ありて、奸智に長たる所以也けり。これよりの後船虫は、一角の冢子なる、犬村角太郎夫婦を憎みて、讒言をのみ事としつ、件の夫婦を追出さして、そが養家相傳の、田園家財を留めて返さず。これらの縡の善惡邪正を、犬村なる里人等は、大方ならずよく知りて、恨憤るもの多かりければ、皆角太郎を憐愍つゝ、返璧なる草庵も、彼里人の手に成れる也。又一角が二男なりける、赤岩牙二郎と呼るゝ惡少年は、中妻窻井が產るものにて、角太郎が爲にはこれも亦、異母の弟なれども、船虫に子のなければ、孰れにしても繼しきを、船虫は左にも右にも、牙二郎をのみ愛慈みて、隔る心なかりけり。以あるかな牙二郎は、その心ざま直からず、善を疎み惡を好する、殘忍不善の癖者なれば、彼同氣は相求め、同病は相憐むといふ、古語に似たるなるべし。有此之程に船虫は、良人の矢傷平愈の爲、日出詣のかへるさに、氷六に呼かけられて、はからずも舊媳、雛衣が入水の必死を、禁よといはれし

づき承て、かさねぐ〵し御洪恩、なほこのうへは家尊の大人の、おん怒瞋を和げ給ひて、恩免めでたく見參の、おん汲引を願ふのみ。といふに船虫頷きて、そは又いはるゝまでもなし。吾儕に女才のあるべき歟。喃阿氷人、思はず時も移りたり、誘退らん。といひかけて、立まくするを氷六は、遽しく推禁めて、且俟給へ從者達の、漫行をしてもやあらん。といひつゝ外面見出して、人々は其處にや在る。赤岩殿の奥ざまの、還らせ給ふに轎子を、はやく此方へよせずや。と喚る聲に轎夫等は、應と答て彼此より、欠伸して起て來つ、擡て寄する轎子を、霎時俟する船虫は、淨手し果て立出れば、雛衣がこゝろ得て、拿れる柄杓の懸水も、落れば石の苔衣、老母草の珠に黄櫨丹葉、夕陽日映くあから引、東にあらぬ西面、潜びて北を恩にして、緣頰よりぞ乗る轎子を、みんな見送る容態に、少許後れて立つ氷六も、かへり花さく老樹の歡び、あるじ夫婦に辭別、寔にめでたしく〵。といふより外に他事もなく、傭ふて來たる十字竹輿に、足取せん。と己がゆく、後に吊して動搖々〵と、出るや柴の片折戸、迹を賴むと聲かけられて、杖もてよする轎夫が、楚と引閉て共侶に、舊來し路へいそぎけり。されば又船虫が、曩にこの地へ流浪して、赤岩一角武遠の、婢妾となりて後竟に、後妻にまでなり登りたる、その來歷を原るに、去々歲の秋の比、渠は武藏の豐島郡、阿佐谷村に在りし時、その夫並四郎は、犬田小文

浮世の人情なれば、口舌起りて引出さるゝも、みな氷人の役なるを、恩に被べき事にはあらねど、曉比の望の月、かくまで圓く納りては、寔に千秋萬歲樂、千筥の玉に千曳の石の、重荷を十々卸したり。やよ郞君、御深窓を受とり給へ。佶と遞與しまうせしぞや。いぬる比より預り置たる、三行半の休書さへ、反故になりしはいよ〳〵愛たし。慥にこゝに。と懷紙の、間を搔撈り、とり出して、恭しく推披き、やよ郞君覽せ。かゝる物は片晌も、身に添措んはいと忌はし。僉立合せ給ふ折也。今面りに夏虫せん。これ見給へ。と推揉て、地炕の中へ投棄れば、發と燃立灰埃を、船虫は扇もて、あふぎ遣ひつ、うち微笑て、喃角太郎、いつまでいふても果しなき、おなじ事には侍れども、念佛三昧うち措て、朝夕夫婦睦しく、爹々公の勘當免さるゝ、日を僂て俟ねかし。吾儕が糸を引んには、繰り損ふ事はあらじを、雛衣も如右こゝろ得て、不覺なる事し給ふな。一年三百六十日、口を開きて笑ふ日は、いくばくもなきものなるを、親子夫婦の間でも、いと美しき事のみならんや。有身てはや月も嵩みぬ。食物にも起臥にも、よろづのうへに心を用ひて、平けく安けく、產出し給はんことを、今より祈り侍るかし。なほ憚りの關の戶の、半開きなるよしあれば、音耗せん事易からず。對面はいよ〳〵難かり。其もしばしの程なるべきに、みづから愛し給ひね。と慰られて角太郎も、雛衣も感淚の、落るを覺ず額


破壁の庵
小舩虫
禍胎を贈


現八
角太郎

れば、誘こなたへ。と氷六が、扶出せど力なき、憂苦に窶れし雨中の花、彌生の後の雛衣は、浮世の秋の韓錦、飽ぬ絳地の所天の宿、こゝにこん地の歡しさも、袖はまだ乾ぬ濡衣を、解んよすがはたなしらぬ、憂身はいとゞ面目も、又今さらに泣貌の、殘の雪の白粉、眼包ははれの落合坐席、扶掖れて姑の、背後のかたに座すれども、額づく隨に撞得ぬ、頭病して重げなる。船虫さこそと見かへりて、喃雛衣、是首と彼首と遠からねば、角太郎に說勸めたる、絆の趣の聞えけめ。けふより故の妹伕川、山迹ならずも睦しき、六田の里に類りて、口舌の塵芥搔流す、風波は稍おさまりしを、おん身は娛しう思はずや。今しも何を憚りて、逡巡をすることやはある。こなたへ進み給ひね。といひつゝ手を拿り引著て、己が側にをらすれば、雛衣纔に頭を擧て、鈍く綖らぬ言語には、思ふのみにて盡し得がたき、おん慈愛は須彌より高かり。氷六ぬしにもこの月ごろ、大く劬勞を被侍りき。時の不祥にあなれども、おん親切の甲斐ありて、絕なんとせし玉の緒も、妹伕の緣しも末長かれと、再結び留られし、恩義に何を報ふべき。身の幸ひに就て又、面なく侍り。とうち掩ふ、袖の淚を拭ふのみ。有繫に恥て良人には、いまだ何ともいはねども、維摩の室に毘耶の城、いはぬはいふに彌ませし、懷ひはこゝに籠りけり。氷六これを慰めて、事あるときに佛の御足を、戴くはこれ人情、事なき時は香だも燒ぬが、なべて

公の爲、おん身の爲を思へば也。かくても否歟、辭ひ給ふ歟。みづから尋思し給ひね。と說諭さるゝ角太郎は、有无の答に當惑の、胸安からねば頭を低て、なほいふよしもなかりけり。登時媒人氷六は、髀を鳴らす感嘆の、聲も調子をふり立て、吁發明なる女中ぞかし。日比よろづに烈しくて、五分でも透ぬ性ならずば、かくまで善にも强からじ。愚魯なりける俺們すら、よく呑了る意見の妙藥、經驗は信と見ゆめるに、やよ郎君いかにぞや。とく〳〵承引給はずや。と急しく勸め諭されて、角太郎は叉きたる、手を釋き、やうやく頭を擡て、親にも他にも幾回となく、厄會を被奉る、この身の不肖いと耻かし。親の勘當免りずして、雛衣を召復さんは、本意に背く所行なれども、それ將大人の痍平愈の、爲とし教諭させ給へば、遂に脫るゝ方もなし。孝子は己を空しうして、親の爲にせざる事あらずとこそ聞くものを、この事後に大人に聞えて、當國をすら逐るゝとも、大人の金瘡瘥り給はゞ、歎きの中の驩び也。親の爲には、死をだも辭せじ。況て夫婦の間にして、些の理義に違ふをや。左も右も計らせ給へ。といふに船虫歡びて、扨は納得し給ひしな。早に商量整ひて、かばかり愛たき事はなし。喃阿氷人、雛衣を、とく〳〵こなたへ呼給はずや。といふに氷六こゝろ得貌に、笑つゝ緣頰に立出て、その竹輿ここへ。と呼寄すれば、轎夫們がこゝろ得て、擡起しつ、緣頰の、框へ軈で橫著の、筵簾を反騰

ては、犬村川もなほ淺かり。霎時共音にうち泣つゝ、いかでひとつになさばやとて、十字竹輿にうち乘して、路いそがして將て來つるは、吾儕がおん身に手土產也。よしや心に入ずとも、やよ何事も宣ふな。好も歹も吾儕に愛て、受納めて給はらば、爹々公の機嫌のよき折に、勸解る方便はいくらもあらん。枉て承引給ひね。と他事なく諭す善心實意は、表皮ばかりの空情、とは思はねど角太郎は、うち驚きて貌を改め、今にはじめぬことながら、大かたならぬおん慈愛は、彼もののみ贓某さへに、再得がたき幸ひなれども、親に稟たる勘當を、免されずして離別の妻と、ひとつにをらんはこゝろにず。と推辭を船虫聞あへず、如右思はるゝは無理ならねども、吾儕が思ふよしと異也。病痾平愈の加持祈禱も、慈悲善根に優ものなし。けふはからずも雛衣が、必死を途に拯ふても、おん身とひとつにせで措かは、又只劬勞を倍さするのみ。佛作て魂を、容ずといひけん世話に似て、眞の功德にあらずかし。必死を拯ふてそがうへに、情願を遂さしなば、これぞ眞の陰德慈善。その善報ひの何處へ遁くべき。この功德をもて爹々公の疾の、はやく痊り給ひなば、始終おん身の孝行の、空しからずといはまくのみ。これらの道理を思はずは、親に盾衝く子に手を下て、潛びてこゝへ訪も來じ。況てや舅姑には、よくも當らぬ離緣の娘を、おん身に勸解て復せとは、得こそいはれぬ情由なるを、いふは廼爹々

は、赤岩大人の刺傷は、嚕犬村の郎君、さのみ苦勞になし給ひそ。其にもまして、雛衣どのの事也かし。いひこしらへても諫めても、舊の宿所へかへしも得ならず。もてあましたる、困じ果れど老夫婦が、張番して、巷路躲れをせらるゝには、ともすれば走り出て、何の程にか見え給はねば、うちも措れず追留んとて、抜出て、身を投んとせられしを、遙に見つゝ後方より、走り著つゝ抱き禁めて、將てかへさんとしつれども、旣に必死を究めたり。放ち給へ、と身を掙扎て、留るべくもあらざりき。折から赤岩なるおん母御前の、日出詣のかへるさに、轎子吊して件の橋に、近づきたまふを呼いそがして、加勢に憑みまゐらせて、やうやく諫こしらへて、扠治りを商量せしに、かう〳〵せばやと宣ふを、ちからに同道致したり。といへば船虫語を續て、嚕角太どの、向にもいひし事ながら、生さぬ親とて惡棍ぞ、といはるゝ吾儕を世の人に、よく思はれん爲にはあらねど、只痛しきは雛衣也。飽も飽れもせぬ中を、些の言語の錯誤より、去られて久しく媒人許、かゝる歎きに身を措かねて、死んと思ひ訣めたる、心の中を思ひ汲み

時も忘るゝ間なく、うち歎きて候ひしに、みづから安否をしらせんとて歟、緈逆さまに訪來ませしは、有がたきまで忝し。時とて氣候も順ならぬに、家尊の大人は腰痛の、持病の發り給はずや。と問へば船虫微笑て、否、持病は發り給はねど、昨宵初心の弟子達に、卷藁を射さしつつ、背後に立て、左せよかし、右せよかし、と誨給ひし、その折の事ぞとよ。初學の癖なれば、腕狂ふて卷藁の、柱へ射つる箭の飛かへりて、うたてや大人は左の眼を、大く傷られ給ひにき。と告るに駭く角太郎、そは安からぬ事にこそ。瘡の淺深いかにぞや。と急しく問へば、さればとよ。背缺くまでにあらねども、亦淺瘡にはなかりしを、素より悍き大人なれば、手づからその箭を拔捨つゝ、瘡を洗ひ、藥を布て、今朝までは吾儕にだに、知らさで起臥し給ひにき。しかはあれども、立働きの、心に愜ふべくもあらねば、曲彔に身を倚かけて、訪來る人に四表八表を、うち相譚せてさり氣なく、みづから慰め給ふものから、面色さへに生平ならぬ、苦痛さこそと推量れば、患人よりもいとゞしく、側病する吾儕が苦しさ。醫師も既に三人まで、招きにけれど卽功なし。かゝるときには神佛の、利益を祈るに優ことあらじ、と思へば嚮に宿所を出て、日出の神社へ詣る程に、犬村川の下にて、氷六叟に呼かけられて、猛に思ふよしさへあれば、扠珍客を伴ふたり。是より下は、やゝ叟よ、年寄甲斐に續給へ。大夫替りで聞映あら

退けば、角太郎も手を被て、紙戸をやをら閉にけり。有如之程に船虫は、轎子を立出て、途よりして相伴へる、媒人氷六等共侶に、後方に立せし十字竹輿を、莽の庭へ舁入させて、誘とばかりに縁頬より、先に立つゝうち登れば、角太郎は遽しく、裡面より障子を推開て、こは思ひかけざりき。母御前よくこそ來ましたれ。氷六叟もこなたへ。と誘ふ辭他事もなく、そが儘立て迎ふれば、船虫は莞然に、はや上坐に著く程に、氷六は謙遜りて、地爐の邊に坐を占るを、角太郎はなほ請登して、茶を薦めなどしたる、管待態に船虫は、半ひらきし扇の風を、胸のあたりに戰がして、霎時あちこち見廻しつ、疊む扇を側に措て、膝を進めて、喃角太、世ははや秋も央を過て、朝夕は最大う、身に入む風の厭しきに、恙もなくて歡び侍り。今さらに改めて、いふは要なきことながら、初は些の錯誤にて、親子口舌の起りしより、果は縺れて釋がたき、妹と伕のみ歟、爹々公にすら、斯引別れて居給へば、安否を問んよしもなく、胸苦しきを得ぞ知らぬ、世間舅姑の言佗なく、あの鬼々しき繼母が、不忍出せしなンどといはる、憎れ役は吾儕に侍り。といふに角太郎嗟嘆して、そは宣はすることながら、親子の間は髪だも容れず。只是天性なるものを、身不肖にしてゆくりなく、親に愛を失ひし、不孝の罪の怕しく、且悲しみに勝ざれば、只顧遁世の願ひあり。垂籠てのみ候へども、然りとて親のうへはしも、一日隻

第七輯 巻之一

第六十二回

船虫奸計禮儀に説く
現八遠謀赤岩に赴く

交遊の厚薄き、只その損益二友にあり。こゝをもて、その志慊ざるものは、肝膽も猶胡越のごとく、その志同じきときは、千里といふとも合壁に似たり。紹前齣再説、犬飼現八信道は、下野國安蘇郡、返壁の白屋に、世を遁れたる一才子、犬村角太郎禮儀と、膝を交へ肝膽を吐き、文を論じ武を講じたる、主客の淸談時移るまで、ほと〳〵興に入る折から、亦復こゝへ來る客ありて、奴隷使の呼門高く、郎君はをはする歟。赤岩よりおん母公の、詣來させ給ひにき。今はや是首へといひかけて、又外面へ走去りけり。登時犬村角太郎は、現八にうち對ひて、思ひがけなくわが母に、訪るゝは何事やらん。縡のこゝろを得がたきに、紙門のあなたへ避給はずや。然とてもいつまでをるべき。且く横臥給へかし。といふに現八頷きて、そはこゝろ得て候也。いで〳〵といひかけて、刀を拿つ行裹さへ、ひとつにいそしく引提て、はや次の間へ

冰輪冷艶擅清光　銀漢斜添雁一行　船倚枯葭櫻樹岸
人忘榮利宿鷺傍　斑姬哭子狂何甚　在五思京諷詠芳
月色今宵千古似　秋寒徹水覺風霜
九月十三夜墨水賞月卽事

玉照堂主人

矣。而每歳所著。莫非稗史小說。所以然者何也。書賈揣利以求於余。余欲著之書。書賈不顧刻。既已著無益恁地書也。三十有八年于茲。潤筆以購有用之書。則用之與無用。不可得而分別也。宜乎。大聲不入里耳。稗史雖無益於事。而寓以勸懲。則令讀之於婦幼。可無害矣。且也鬻之者與書畫剞劂刷印製本諸工。咸以衣食於此。抑不亦泰平餘澤耶。乃者八犬傳復續稿。迨于第七輯。每輯有自序。讀者罕矣。又唯述愚衷於端楮。爲知音解頤。

文政十年丁亥冬十一月之吉

曲亭主人撰

八犬傳第七輯有序

世有奇才。然後奇書出焉。有奇書。然後奇評附焉。朱元晦曰。好人難得。好書難得。非但好人好書之難得。好評亦不易得。何者。人之好惡不一。加之。學之深淺。才之優劣。各有用捨焉。是故所讀書同。而其所取不同。譬若彼金聖歎水滸傳評。讀者駭嘆稱妙。以余觀之。未可盡爲妙也。聖歎尙如此。而況其他乎。近見好奇之士評稗史。徒搜索其瑕疵。批之以理義。使是圓器方蓋。更鮮有不損作者面目。或聞余言嘲之曰。稗說脞記。無用之冗籍。費工災櫻。安足道哉。嗚呼憎無用者。不知用之所以爲用也。人之一身。無貴無賤所起臥不過一席。然多席爲無用之物。廢之可乎。無用者有用之資也。余不貴虛文。所好乃經籍史傳舊記實錄已

り。かゝれば、この事、唐山の俗説に出るといへども、梁唐の時この事あり。且當時の史官、歴歴として、その經驗を書せしかば、浮たる言にあらざるなり。是等は祕藏の説なるを、こゝらでいはんは惜かれども、貴客の爲に譚ずるのみ。と問るゝ毎に古書を引く、證文疑ふべくもあらねば、現八頻りに感嘆して、應仁以來京師にすら、和漢の書籍亡失せて、四書だに全きをもてるもの稀なり。されば學問は地を拂ふて、五山の僧徒なゞどの外に、漢籍を讀むものはなきに、主人は今尚青年にて、博學宏才かくの如し。いと憑しく候。と悦びを述て已ざりしを、角太郎は聞あへず、貴客の賞美は分に過たり。多言は徳の害なり、と王通もいひにしものを、世の博物に聞れなば、傍痛しと笑れん。他聞は用捨あれかし。と互に讓る辭義口誼、笑坪の會に餘念なく、時移るまで相譚ふ折から、外面に來る人居多、女裝轎子一挺と、又一挺の十字竹輿を、折戸口に扛卸せば、先に建たる轎子の、戸を開せて出るもの、是則別人ならず、赤岩一角武遠が、賤配の妻船虫也。搨縮したる衣の下には、白小袖をうち襲つゝ、金襴の帶四下に光耀き、練の帽子の白妙に、扇翳して立あがり、呼門せよ。と鷹揚に、腮推向てさし示せば、一箇の從者がこゝろ得て、折戸を頻りに敲きけり。畢竟船虫こゝへ來て、又甚麽なる話説かある。そは第七輯に、解分るを見て知らん。


船虫奸計
犬村が
囚屋を
訪と



ふものありけり。その後淑媛は寵衰へて、いたく高祖を怨しかば、竊にその子綜に告て、おん身は是東昏君の、遺腹ならんといひしを、綜は半信半疑して、共に高祖を怨みつゝ、潜びて曲阿に赴きて、齊の明帝の陵を、拜みなどせしかども、なほ東昏の胤なるを、定かに知るよしなかりしに、當初の俗說に、生者の血を以、死者の骨に灑るに、滲れば父子也、といふものあるをうち聞て、綜は竊に東昏の、墓を發き骨を出し、己が臂の血を以、灑かけてこれを試み、又一男を殺して、その血を灑ぎて試みけるに、並に驗ありしかば、是より常に異志を懷きて、後四年にして謀叛す、と五十五卷の初丁に見えたり。又唐書(九十五)の孝友列傳なる、王少玄が傳に云、王少玄は博州なる、聊城の人なりけり。その父は隋の世の末に、亂軍の中に殺されたり。少玄甫十歲の時、父の所在を母に問しに、母云々と答しかば、哀泣て彼此と、その尸を求るに、野中に白骨多くあり。時にある人敎ていふやう、子の血を以骨に漬て、滲るものは父の骴ぞ、といふに少玄悅びて、野中の白骨を見る毎に、膚を鑱て血を灑ぐこと、凡一旬あまりにして、遂に父の骨を得て、思ひのまゝに葬りけり。かくて、その創の甚しかりしかど、一トとせ餘にして瘥てけり。時に唐の太宗の貞觀年中、州よりその狀を言上せしかば、やがて徐王府の、參軍といふ、官人になされしよし、合本の四十一の、十二丁の右に見えた

ふべし。憶ふに淸盛賴朝より、尊氏將軍に至るまで、朝家を蔑して、自家を營み、兵權を擅にして、宇內を制し給ひしかば、順逆の理に暗きものの、しか唱初たるにや。さらずは記者の當時に媚て、作出せし俗稱ならめ。といふに現八歡びて、某もさは思ひし也。又戰陣に夜討するとき、進退の笛を呼子と唱へ、國の大事を報る使を、早打といふものは、近き世よりの俗言なり。これを漢文に寫さんに、何とか書て當んや。と問ふに角太郎沈吟じて、呼子の笛は、叫子と書べし。又早拍は、羽檄におなじ。急脚遞と書こそよけれ。幷に宋の沈存中が筆談（十一十三）なる、官政權智の兩編を、見給へかし。と答るに、現八はます〳〵感じて、こゝに一條嗚呼がましき、問事の候なり。近き世の淨瑠璃本、及歌舞伎狂言に、親子迭に認らずして、その疑ひを決するに、その子の腕を劈きて、親の血と合し見るに、實の親子は鮮血滲り、親子ならねばその血よらず。或はその親の死後に至りて、白骨髑髏に血を灑るも、その驗の等しきよしは、婦幼もをさを知れり。さりけれども、この事の、本づく所定かならず。何等の書より出たるにや。素より不經の俗說歟、主人の考聞まほし。と問へば角太郎うち咲て、この義も亦管見あり。梁書（五十五）の列傳、豫章王綜が傳に、綜が母吳淑媛は、初齊の東昏の、宮中に在りし時より、梁の高祖に幸ひせられて、七月にして綜を產にき。こゝをもて宮中にて、多く疑

を知るべきのみ。近世兵學者流の書には、取るに足らざる臆説多かり。由断のならぬ事にこそ。とうち含笑つゝ答れば、現八深く感服して、昔の人もかくこそいひけめ。君と一夜の物がたらひは、十年の學に勝れる、教諭によりて年來の、疑念立地に氷解せり。序に學問せまほしきは、又劍の卷に、源氏重代の大刀、あるとき吼ること、蛇の鳴が如し。よりてその大刀の名を、吼丸とつけられし、そのことは人僉知れり。刀劍にも亦聲ありて、よく吼ることこれありや。と問ふに角太郎又答て、刀劍も亦吼ることとあり。酉陽雜俎、(卷六)境異篇に、鄭雲少かりし時、一劍を得たり。鱗鋏、星鐔、時有て吼ゆ。常に莊居に在り。晴たる日には、膝を籍てこれを玩ぶに、忽地一人有り、云々と見え、又後燕(慕容垂)の元年(晉の太元七年)に、雄劍の鳴きし事、所見あり。と説示せば、現八かさねて、盛衰記已下の軍書に、大逆謀反の徒を朝敵と誌したり。この義は穩ならずや。といへば角太郎頷きて、そはよく心づき給ひぬ。凡國家の臣民たるもの、大逆の罪あるときは、是則國賊也。唐山の史傳には、これらを賊と書したり。然るを朝敵といふて可ならん乎。敵は字書に、音狄俗字也。敵敵は小兒の喜びて、笑ふ貌と註したり。又彼國の俗語に敵手といふは、此土にて相手といふにおなじ。甲乙を爭ふもの、迭にこれを敵といふ。大逆の罪人を、朝敵といふときは、朝廷の敵手といふに同じ。記者の文盲笑

二斤半を以法とす。乃漢秤、三百四十一斤也。今之武卒の弩を蹶に、九石に及ぶ者あり。其力を計るときは、乃古之十五石なり。魏之武卒に比れば、人ごとに二人ン有餘に當れり。又三石の弓を挽者有り。乃古之三十四鈞なり。顔高之弓に比れば、人ごとに五人ン有餘に當るといへり。又按ずるに、石は重百二十斤、と國語の註に見えたり。これ漢の秤の分量也。後人一斛をもて一石といふよしは、漢の時より如此なり。漢の百廿斤は、宋の秤にて、三十二斤に當り、漢の一斛は、宋の二斗七升なるよし、沈存中いへり。又荀子に十二石の弓の事見えたり。又齊宣王、好て三石の弓を射て、これを九石とす。その實は三石のみ、九石にはあらざるよし、說苑の壅塞編、並に續博物志にも見えたり。かゝれば唐山にて、弓に三石といへるを、わが邦にては三人ン張といふ也。いかにとなれば、一斛（宋の二斗七升）の米の重をもて、一人ン力とす。三人ン力は三石也。これに由ておもふに、三人ン張といふ弓は、三石の米を掛たる、强弓なる事疑ひなし。又十三束三伏といふよしは、その箭の長大なるをいふのみ、凡一束を五寸とす。今の匠尺をもてすれば、その實は三寸也。所云十三束とは、六尺五寸の征箭にして、實は三尺九寸なるべし。又三伏は三節にて、伏は假字也。その箭竹の箭延て、僅に三節あるをいへり。凡武器の長短を、幾束といふ事は、是天朝の古實也。十束の御劍は、その長、十握ある

云、世に三人ゝ張の弓といふは、強弓の事にあらず。弓は總て三人ゝにて張るもの也。弦かけ一人ゝ張手一人ゝ、おさへ手一人ゝ也。貴人の弓など、一人ゝにて張るは、大きなる無禮也といへり。(武家故事要言といふ書に記す所これと同じ。)この說も亦こゝろ得かたし。弓は必ず三人ゝにて張るものならば、三人ゝ張とことわらずともあるべし。況て五人ゝ張といふ弓もあるをや。且軍記に誌す所は、強弓の武者にありて、貴人の弓をのみいふにあらず。主人は二代の學者にして、且武藝にも長給へば、これらの事に考あらん。件の說はいかにぞや。と問ふを角太郎うち聞て、二階松先生の、武藝はわが父もよく知りて、をり〳〵嘆賞せし事ありき。彼先生すら考の、定かならぬを某なゝどが、考得たるにあらね共、彼三人ゝにて張るといふ、臆說は貴評の如く、論ふにも足ぬ事歟。按ずるに、軍記に、三人ゝ張五人ゝ張の弓といふよしは、猶唐山にて、三石の弓五石の弓といふがごとく、弓はその力を量らん爲に、弓の眞中に索をつけて、これを梁などに吊して、その本末に、米苞を掛て見るに、強弓にあらざれば、重きによく勝ることなし。この義を彼の書に記せしは、書言故事なる、不學類の條などにも見えたれど、夢溪筆談なる、辨證の篇に載せし所を、詳也とすべし。その書に、沈存中が云、(摘要)弓と弩を挽蹶に、古人鈞石を以これを率ゆ。今人は、乃粳米一斛の、重を以一石とす。凡石者、九十

をはすらめ。さりとて今朝は炊もせず。嚮に犬村なる里人が、贈來したる團子あり。僅に飢を凌ぐべし。いざ〳〵。といひかけて、棚より卸す食籠の、蓋搔取りつ、箸を添て、そが儘現八に羞るに、地坑に麁朶を折燒て、山茶を煮つゝ共侶に、箸さし入れてうち食ふ、現隔なき客あるじ、淸きこゝろは水源下流、魚と水とに異ならぬ、欵待態ぞ賴しき。團子も旣に盡るころ、沸立山茶を角太郎は、茶碗ふたつに汲とりて、いざとて齊一飮む程に、又現八に對ひていふやう、得がたき友に訪れながら、同好の義を述もせで、いと憂しき自家的話を、さぞな鬱悒思はれけめ。犬飼ぬしは何人を、師として武藝を學び給ひし。生れ得てその師に勝る、豪傑も世になきにあらねば、その儔にこそをはさめ。といはれて現八思はずも、呵々とうち笑ひて、否、某が師は二階松山城介なりけれども、身の不器用なるをもて、大刀ぬくすべを覺しのみ。武の一藝すらかくの如し。況て文武を極んことは、いと〳〵難き所行なるべし。よに恥がましき言ながら、某は穉き時より、太平記を大く好みて、熟讀して候へども、なほ解しがたきこと多かり。そが中に、三人張の弓に、十三束三伏、篦かつぎの上まで引かけ、暫く堅めて、丁と放つなどいふこと、卷の七の三丁、この他にも處々に見えたり。この三人張といふよしを、師にも問ひ、又近曾、京師に旅宿せし折に、古實者に問ひしかど、その答定かならず。爾るにある人の說に

烏滸也と思はれなば、教給へ。と他事もなく、譶き示す心の誠を、現八は聞く毎に、憂苦さこそと慰めかねて、感嘆の外なかりしを、やうやくに頭を擡て、聞しに彌増す貴所の孝友、天感空しからざりせば、夫婦の再會期して俟べし。然るを早りて只管に、法師にならんと思ひ給ふは、亦是千慮の一失なるべし。實に推量せらるゝ如く、嚮に賢室雛衣どのの、いはれし事は洩聞つ。且その氣色を見て思ふに、逼りて漏すよしなさに、死を樂むは婦人の情也。萬一の事あるときは、後悔その甲斐なかるべし、と思ひにければ後を跟て、見屆ばやとて兩三歩、走り去らんとしつる折、忽地主人に呼留られて、その義を果さずなりにたり。爾るも婦人に不義なきを、知りつゝその死を拯ん、と思ふ心のつかざりしは、主人に似げなき所行ならずや。と詰れば莞爾と微笑て、その疑ひは理りなれども、縱雛衣わが底意を、知らで死んと欲するとも、瑞玉今なほ腹に在らば、水に入るとも溺るべからず、火に入るとも燒るべからず。憶ふに渠が腹の病痾は、彼瑞玉の所以にして、懷胎にはあらざるべし。然るを死せんといふに怕れて、慌惑ひて對面せば、妻には信ありといふとも、親の爲には後ぐらき、不孝の罪を脱れがたし、と思ひにければ禁ざりき。といふに現八有理と曉りて、又いふよしもなかりけり。且して角太郎は、窗の日影を見かへりて、今はや未に近かるに、要なき多辯に、時を移して、さぞ物ほしう

胎はこゝろ得がたし、といひし言葉に枝いで來て、さらば密夫の胤ならんに、阿容々々として産するや、といふものあればうちも置れす、いと不便には思へども、雛衣を離別して、媒妁許預け置たり。さはさりながら某は、婿養子にして、雛衣は、廼養父母の女兒也。且赤岩へ同居の折、犬村なる宅は人に住しつ、奴婢には暇を取らしたり。袷といひ恰といひ、よしや些の愆ありとも、去らるべき妻にあらず。素よりその性貞順にて、外心のなき事は、某これを知るといへども、離別してかへせしは、舊の住宅に住せん爲、明々地にはいひがたき、情由さへあるによりて也。爾るに某命薄く、仂きころよりして、愛を父に失ひつ、年歷て親に呼かへされし、その歡びは空となりて、亦復同居を許されず。この身は路頭に呻吟ふとも、犬村なる田園は、雛衣が一生涯を、送らん料にすべかるを、それすら親の返さねば、義理ある妻と世を逝りし、養父へいひ解く辭もあらず。せんかたなさに世を捨て、法師にならば、吾妹子が、怨も散れん、わが親の、思ひかへさせ給ふこと、ありもやせん、と果敢なくも、神に佛に願言を、かけ盡したる日每の戒行、初對面より懺悔話說は、恥を知らざるものに似たれど、嚮に雛衣が來ていひつることを、貴客は聞せ給ひけん。爾らば又今さらに、隱さんとすともその甲斐なし。他人にいはぬことをしも、告るは則良友を、得たる歡びのあまりにこそ。なほ

て、件の玉の奇驗を恃むに、卽功あらずといふことなければ、近頃養父母の病中にも、玉を浸せし靈水を、しば〳〵勸めたりしかど、只某が病痾にのみ、奇驗卽功あるものにて、親には驗なかりしにや、又命數に限あるにや、させる奇特はなきものから、病苦は早に退きけり。爾るに今玆夏の初より、某は妻と共に、赤岩なる親異母弟と、同居して在けるに一日吾妻雛衣は、腹痛猛に苦しく、百藥驗しあらざれば、某せんかたなき儘に、彼玉を浸しつゝ、水を飲せんとしたる折、繼母が先その玉を見んとて、雛衣がもてる茶碗を、搔取らんとせし程に、雛衣慌忙きて、愆て水もろ共に、件の玉を飲てけり。こは何とせん、とばかりに、後悔したる雛衣より、なほ某が周章遺恨は、譬るに物もなきを、然とて吐すべくもあらず。淨手に赴く度毎に、心をつけよと誨しに、腹痛ははや瘥たれども、その日はさら也次の日も、亦次の日も屎屎と共に、玉の下れる事のなければ、思ひ捨てふたゝび問ず。かくて五月の比よりして、雛衣は經水を見ず、腹は漸々にふくだみて、有身たるものに似たり。これにより醫師に見せて、その病症をいかにと問しに、寸口の脈平に增して、指頭の動脈顯れたれば、全く懷胎ならんといへり。よに恥しきことながら、某は三年以來、養父母の病中より、妻と枕を並べし事なし。況てこの春の末より、養父の忌中にいかにして、夫婦臥房を倶にすべき。然るを今雛衣が、懷

り。おもふに主人は感得の、瑞玉を持給はずや。その玉にはおのづから、禮の字の顯れて、定かなるものならずや。と問かへされて又驚く、角太郎は眼を睜りて、そをいかにして知られけん。某實にさる瑞玉を、年來祕藏したりしが。といひつゝ亦嘆息して、件の玉の事に就て、又一奇談なきにあらず。某が實母は、諱を正香と呼れたり。その性怜悧にして、且神佛を信ずること、大かたの婦女子に過たり。かくて某を產たる比、加賀なる白山權現の社頭の、粒石を乞まうして、その兒の護身嚢に納置ときは、痘瘡も痲疹も究めて輕し、とある人のいへるを聞て、北國へゆく商旅に、云々と憑聞えて、件の粒石を取よせしに、その人のもて來つるを見れば、石にはあらでこれ玉也。その玉はといひつゝも、項にかけたる珠數を捻りて、大約此大小にて、禮の字さへに顯れたるを、もて來し人も知らずして、初て驚くばかりなれば、母は殊さら尊信して、そが儘に某が、護身嚢に納たりとぞ。かくて某三才の時、脾疳によりて危かりしに、鍼灸藥餌も驗なく、療養その術竭たる折、わが母竊に心を師として、件の玉を水に浸して、その水を飲せしに、慈母の深信によりて瑞玉の、奇特やこゝに顯れけん、一トたびにして食すゝみ、二たびにして肉を增し、三たびにして本復せり。この一條は某が、稍東西を知るころに、養父母の云々と、說示されし傳聞なり。これよりの後　某が、身に恙あるときは、且藥を用ひずし

まで、初見參に等かるべし。かくいへば何とやらん、客に傲るに似たれども、某既に貴客をもて、益友也と思ふよしは、昨夜の夢に、何處とはなく、いと大きなる犬の、その色黑白雜毛なるが、その數すべて七頭あり。そが中に、隱れていまだ見えぬもあり。或は間遠くして、致しがたきも多かりしを、某深くこゝろに愛して、掌鳴らして呼ぶ程に、一隻の巨犬走り來つ、某これを搔抱くに、わが身も亦忽地に、犬になりぬと思ひつゝ、愕然として覺たりき。彼莊周が蝴蝶の夢に、似て非なるものなれば、占することもせざりしに、今又思へば琉夢ならず。貴客は犬飼氏にして、某は亦養家を嗣て、犬村氏を冒したり。且貴客の言を聞くに、異姓の兄弟五六人、ありとしもいはれしに、いよ〱因緣あるに似たり。願ふは件の人々の、姓名を知らまほし。厭しからずは示させ給へ。といふに現八感じて已ず。そは寔に一大奇夢なり。某が義兄弟等は、犬塚信乃戍孝、犬川莊助義任、犬山道節忠與、犬田小文吾悌順、犬江親兵衞仁、某と共に六名、この餘なほ二人あるべし。いまだ遇ふことを得ざるのみ。と告るに驚く角太郎は、頻りに膝の進むを覺ず。原來皆是犬をもて、氏とせらるゝ不思議さよ。こゝに至てわが夢の、夢ならざるを感悟せり。さるにても六犬士の、義兄弟となりにたる、因緣は亦いかにぞや。と問へば現八含笑て、その義を告るに難くもあらねど、外に憚るよしあれば、只今は時倘早か

骨肉にも優にあらず。されども因果同感の、過世あるをもて棄られず。素より迭に厚きこと、相別れしより往方をしらず、稍こと多く、苦樂を共にせんと誓へり。爾るに不測の厄難ありて、陸奥を志し、學術某只管索巡るに、はやくもこゝに三年を歷たり。かくて今茲は京師を出て、當國まで來る程に、きのふ網苧の茶店にて、貴所の孝友、文學武藝、並に養實兩大人の、勤行中武勇の事の趣を、傳聞て景慕に堪ず。いかで閑居の寥を敲きて、教を受んと思ひつゝ、さばれとも知らずして、早りて頻りに呼門しを、さぞ無禮也と思はれけめ。さばれ疎忽を海容せられて、呼留られしは一期の幸ひ、望足りて候。と互に應答言訖れば、角太郎は且歡び、且羞て頭を撫、某過庭の訓を稟て、和漢の學を好めども、不肖にして成ることなし。さばれ今釋教に、流れて道人にならんとするは、已ことをえざるの所行のみ。胎を稟て男子と生れ、武士たるものが阿容々々と、法師になりて可ならん乎。この義を推して、某が、薄命を察し給へ。初見參にはあなれども、前路を急がせ給はずは、先や胸臆を盡すべし。夫千金はなほ得易く、斷金の友は甚得難し。さればとて、蓋を傾けて故が如く、白頭までも猶新なりといふ、孔聖子華子の交を、例に援くべきわれならねども、その志同して、學ぶ所の異ならずは、初見參も故人の如く、合壁比隣に年を歷るとも、その志異にして、その方の同じからずは、頭に霜を戴く

面には現八が、はや雛衣を追んとて、心いそしく幾足歟、ゆかまくしたる後影を、遥にうち見て聲高やかに、犬飼生等給へ。菴主只今解行せり。誘こなたへ。と呼留れば。現八佇と見かへりて、今さら否ともいひ難つ、心ひとつを先后に、躊躇ながら引かへす。その間に角太郎は、路次金剛穿て折戸口、懸鎖外して出迎れば、現八は引るゝ隨に、且竹縁のほとりにて、行袱を解卸し、草鞋も踏皮も脱捨て、躙跐るを、角太郎は、客座に請ふて、茶を羞め、貌を斂めて慇懃に、嚮には思ひがけもなく、來訪のよしを知るといへども、戒行の最中にて、迎接に遑なかりし、失敬を許し給へ。某則當國の人氏、物の數には候はねども、犬村角太郎禮儀と呼るゝもの也。既に貴客の高姓は、屢名告られしをもて承知せり。扠も何等の所要ありて、遠く賁臨せられしやらん。某命運拙ければ、頻りに遁世の情願あり。恩愛の絆を脱離して、雅俗の交遊を絕ものから、いまだ貌を更ざれども、こゝろは毘邪氏の城に入て、維摩の室に坐せんと欲す。貴客必高論あるべし。明敎によりて迷ひを曉さば、そは幸ひ甚しからん。且寛やかに相譚給へ。といへば又現八も、袖かき合せ、手を膝にして、某は凡骨俗膓、上總に生れて、下總に成長り、近曾京師に旅宿をしたれど、をさ〳〵武藝を事として、一丁の字義だも知らず。只異姓の兄弟五六人あり。渠等は文學に長たるあり。武藝勇力の捷れたるあり。皆某が及ぶ所

折にこそ又舊の、妻と思ふて朝夕に、只一遍の唱名も、おん身の回向を受侍らば、道德智識の十念にも、萬卷千寫の讀經にも、優て成佛しはべらん。今より久しき事ながら、おん身の齢百歲の、後を恃みて臺なす、蓮華を齎て俟んのみ。さらばとばかり告別、聲は涙に結隱る、天さへ秋の雨催ひ、捨られぬ世をふり捨て、死天の旅路へいそがん、と思ひ訣てかへりゆく。うたてや妻の後影は、菴の中より見えねども、聲は定かに挾牡鹿の、夢野もかくや角太郎、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、と悟果ても活る身の、人木石にあらざれば、方寸の海に浪立て、心耳に風は吹ねども、合掌の拳搖動きて、口に銜し松の葉も、颯々として靡くが如く、斷腸の氣色顯れしを、忽地思ひかへしけん、寂寞として音もせず、なほも行ひ清しけり。さる程に現八は、女靑の樹蔭より、今雛衣が角太郎に、怨じていひつる顚末を、遺なく竊聞たりければ、悲愁嗟嘆に堪ざれども、われこそその名を豫ても知れ、その良人にすらまだ遭はで、慰むべくもあらざれば、傍痛く思ふのみ、又せんすべもなき物から、既にして雛衣が、死を訣めたる氣色言葉に、且驚き且憐み、背より竊に跟てゆきて、倘淵川へ身を投る、事しもあらば禁ん、と思へば樹蔭を立出て、遣過しつゝ足早に、走り著んとする程に、遙に聞ゆる遠寺の鐘は、亭午になりぬ、と角太郎、稍解行の眼をひらきて、松葉とり捨、經机を、搔遣りて衝と身を起す、外

からんに、言の葉絶てくちなしの、譯も知らせず慰もせで、壁生草の何日までも、憂に堪ずは死ねかし、といはぬばかりの籠居は、舊來の氣質に似げもなく、男子らしうはあらずかし。二世をかけたるおん身にすら疑れたる小腹の内を、見せも見られもせぬ苦しさは、胷に竅ある胡の國に、生れぬ身とて甲斐なけれ。かくまでいふても聞えずや。不便と思ひ給はずや。こゝあけてたべ、開給へ。心づよし。と敲きつ推しつ、入らまくすれど懸鎖に、女子のちから届きかねて、引放されぬ情緣の、いとも切なる恨みのかず〳〵、胸に痞を壓あへず、倒れかゝりし樹端に、携著つゝよゝと泣く、聲細るまで衰果て、地上に礙と伏沈む、深き歎きの霧の海に、乾かぬ袖は芭蕉葉の、露とも見えてあはれ也。且して雛衣は、涙を斂め身を起して、裳引合し引揚て、柳の腰に柳茶の、副帶楚と締直しても、空に歸れば花もなき、菴をなほも見かへりて、喃角太主角太主、とてもかくてもこの世では、得添れぬは前世で、造りし罪の報ひ來て、あかぬ別れに身を殺す、因果と思ひ締め侍れば、恨は絶てあらずかし。むかしよりして腹黒く、佞倆る人の讒言に、罪ならぬ罪を得給ひし、賢人も多かれど、終には霽るゝ雨後の月、光りは世々に顯れて、ゐるまぞかりける時に優す、例を引くに侍らねど、人の心に誠なくて、命を捨る物やは侍る。死しての後にわらはが胸を、裂も發きもし給はゞ、かの疑ひの解ずやあらん。その

世を逝り給ひし、忌の中には山鷄の、峰上隔て妹と伏が、臥房を倶にせぬものを、有身ぬるは密夫の、胤なるべし、と繼しさの、母御に濡衣著せられても、しかはあらず、と醫師すら、決めかねしは冤枉神の、この身に簑縁る一期の浮沈。宿の仇浪風騷ぐとも、神を誓ひに膽むかふ、淸きこゝろを君こそしらめ。人は左もいへ右もいへ、跡も證據もなき事を、情由も糺さで休書を、理なく取らして親品に、預けて後安良に、獨くらすが本意歟否。いはでもしるきことながら、おん身とわらはゝ從父母昆弟、養子妻せといふよしを、今さら忘れ給ひし歟。實の爹々公繼母御前の、無理を並べし仰でも、わらはゝともあれかくもあれ、外伯父なり師なり恩重き、養父の家を滅しても、何とも思ひ給はずや。切てわらはが二親達の、けふ頃までましまさば、又せんすべもあるべきに、欺詭つゝ赤岩へ、呼取られしより程もなく、去られて歸る舊里の家すら舊の儘ならで、他の宿所に機を包て、津もつかぬ掛り舟、風の便りに言告て、尼になりても共侶に、住果よとはいひもせで、爲まし良なや茅栗の、しば〳〵來ても麻糸の、有無の答も中垣に、隔る心の片折戸、固き鎖は誰が爲ぞ。親の仰に術もなく、あかで出せし妻ならば、その折にこそ難くもあらめ、今はおん身も追出されて、よに憚の關もなき、遠山里の草の戸に、秋の螢と身をなして、あくがれてのみ來るものを、對面せしとてものいへばとて、外の咎はな


大村角太郎


現八

らぬものを吹かへす、浮世の秋のあき風は、强顔人の心歟。と怨言つゝ呼かけて、喃わが所天角太ぬし、こゝあけて給はずや。いふて返らぬ事ながら、逢ねば濟ぬ胸の火の、晝さへ滅ぬ物思ひ、讎敵も媒妁の、宿にかゝりて何日までか、歎きくらして、死んより、切ておん身の捨言葉、受て覺期を究めん、といぬる比よりかよふても、無言の行に假托て、應だにせず、戸も開ず、心づよきも程こそあらめ。けふは那方思ひしことを、いひ盡しても聽れずは、それをこの世の辭別、犬村川は涸るゝとも、生て宿所へ還らじ、と思ひ訣めて侍るかし。やよ開てたべ是喃。と身の痩見ゆる手胛の、攤るゝ可敲けども、かき口説ども應せぬ、良夫はなほも不言の行に、心を凝らす莫妄想、形死灰に異ならねばや、膚撓まず目も瞬がす、庭の小草に集る虫の、聲のみ憾々と答けり。雛衣怨に堪ざれば、苦しき聲をふり立て、喃わが所天、目に見ず物を宜はずとも、是處より其處へ遠からねば、聲嗄らすまでいふよしの、聞えぬ事はよもあらじ。今さら愚痴に侍れども、二人が中は高安の、井筒よりなほ緣しは深き、ふりわけ髮の初より、親の結びし妹伕川、大和紀國いづれはあれど、外に花見ず、月見の船の、浮たる戀にあらざれば日暮て誘ふ阿曾沼の、眞孤隱れの紫鴛鴦も、及ばじと思ふ年を經て、夏の日子より小腹の病痾、可ぬ藥も、加持御符さへ、身の仇となる幸なさは、思ひがけなき誣言に、この春爹々公の

らぬが、その容止の艶麗なる、譬ば野花の目に美しく、村酒の人を酔する、類に優て、いにしへの、眞間の手古奈もかくありけん、と人は見るらめ鄙にして、鄙にはあらぬ雛衣と、まだ名告らねど匂やかに、あゆみ近づく先后に、心おく露玉なすまでに、涙を隱す袖頭巾、袖に包めどはや五月の、たゞならぬ身はおもくとも、輕き草履に跌かで、かよふ甲斐なき草の戸の、虫の名に呼ぶ横笛が、怨に似たる物思ひ、誰に羞て歟外視せぬ、頭を低て來る程に、こゝに門戍る犬飼が、立盡すとは知らざりけり。現八遙にこれを見て、はやく心に猜するやう、あの女房はこゝらに似げなき、容貌の醜からぬに、いたく愁を含めるは、雨を帶たる夕の花、雲に銷さるゝ月に似たり。且その腹のふくだみたるは、有身てより既にはや、四五箇月になれるにや。かゝれば是豫て聞く、犬村が離別の妻、彼雛衣と呼るゝもの歟。こなたへ來つるは要こそあらめ。飽ぬ別れに外目を竊びて、良人に逢はん爲ならば、われを鬱悒く思ひやせん。さは慭にこゝに在りて、中垣をするゑんより、はやく樹陰に退きて、障りにならぬも惻隱の、端なるべし、と遽しく、一反ばかり南なる、枝いと繁き女青の、蔭を小盾に躱れけり。とはしらずして雛衣は、柴の扃に立よりて、只潸然とうち泣きしを、やうやく思ひかへしけん、幾遍となく押拭ふ、涙を袖に斂あへず、眞白に細き手を抗げて、敲くもちからなよ竹の、籬笆に立る女郎花、くね

り。片折戸のかたを正面にして、端近う經机を推居たる、あなたに新藁の圓坐を布設、そが上に結跏趺坐しつゝ、項には菩提樹の、最多角數珠をうち掛たる、合掌觀念の、眼を閉て餘念なく、口に蒼松葉を、細枝ながらに銜たるは、是なん維摩の行なるべし。机のうへには、何の經文にや、五六号可あり。細小やかなる鐸一隻と、相馬製とかいふ、青磁の香爐もありけり。立升る香の煙の、靡きもあへず滅易きを、人の命に思くらべて、かくは行ひ濟すにやあらん。この人は是犬村氏、禮儀にあらずして、誰やはある、とひとり頷く現八は、偲かねて、せわしく敲く柴の戸の、こなたに聲をふり立て、卒爾ながら物まうさん。吾儕は遠來の浪人にて、犬飼現八信道と呼るゝもの也。犬村ぬしに要事あり。こゝ開給へ。と呼門て、幾遍となく名告れども、裡面には絶て應せず。閉たる眼をうちひらきて、こなたをだにも見ざりけり。登時現八思ふやう、世を隱逸に甘んじて、人と交を絶もの也とも、かくまでに音づるゝに、耳なき人の如なるは、今勤行の最中にて、思ふに任せぬゆゑなるべし。三たび草廬を顧て、志を致されけん、われに昭烈の才なくて、臥龍を起すに急なりしは、心つきなき所爲にこそ。あの勤行の果る迄、俟ずは對面しがたからん、と尋思をしつゝそが儘に、折戸のこなたに立在て、心ともなく時を移せば、亭午の日影近づきけり。浩處に前面より、年倘弱き女房の、身のざまも賤しか

第六十一回

柴門を敲きて雛衣寃枉を訴ふ
故事を辯じて禮儀薄命を告ぐ

却說犬飼現八は、その曉がたに山を下りて、胎內竇を出しより、赤岩一角武遠が、靈魂の敎しまゝに、銀山のほとりまで、一里の水澤を傳ひつゝ、その路凡四五里ばかりの、崎嶇を跻躋して、返璧を投てゆく程に、その日巳の比及に、犬村角太郎禮儀が、世を捨つ世に捨られて、日影に疎き露の身の、締ぶは名のみ花もなき、草の庵のほとりに來にけり。柴垣のこなたより、こゝかとおもふを心當に、裡面のやうを闞窺れば、樸材の柱、萱の檐、二間の竹緣、三尺の持佛棚、これより奥は見えねども、膝を容るゝに過ざるべし。裏もかへさぬ新壁に、蝸牛の液を遺し、搔も帚はぬ庭の草葉に、蛩の聲幽也。彼此に竝る冬樹は、この菴のなき時よりあるにや、流しかけたる雜炊は、昨夕の隨にいまだ乾かず。秋深けれども、東籬の菊なく、門陜して、五株の柳を見ず、とばかりだにも哀れなるに、この菴の主なるべし、年紀は二十のうへを、一ッ二ッにやならんずらん、色白く唇絳に、眉秀て居長高く、月額の迹、眞黑に延たる、髪は藁の髻結して髱ず、後ざまに放たるは、彼白河の安珍にも、似たらん歟。身には薄鼠色の袴の衣、只一領被て、皀き輪袈裟を掛たるは、華洛を出て嵯峨野に隱れし、瀧口の時頼が面影すめ

又いふやう、犬飼生、かへさには、奥院までうち上りて、平岩の断間より、東のかたへ下り給へ。かゝれば路のいと近くて、胎内竇に出るなり。扠返璧に立よりて、角太郎を訪んとならば、箇様〳〵に赴き給ひね。もし又迷ふ事あらば、側柏を見るこそよけれ。かの胎内竇より、山路三四里の間には、彼此に彼樹あり。側柏はその枝の、みな西へ指すものなれば、よく東西を辨ずべし。實に不測の奇遇にて、又遇ふよしはなきものをや。かへす〴〵もわが兒のうへを、只顧憑奉る。といふを現八慰めて、その儀は心やすかるべし。冥府人間同じからねば、いとど別の悲しけれ。しかはあれども赤岩ぬし、子息に髑髏を寄せんとて、讖語を吟じて示されしは、小野小町が芒を歎ひし、あなめ〳〵の歌に優りて、世に未曾有の靈驗也。もし生る日に膽勇武偏の、億萬人に捷れずは、死してかくまで靈あらんや。得がたかりけん武夫の、彼妖獸の爲にしも、横死をしたる事、噫惜むべし〳〵。といひつゝ後方を見かへれば、今までありつる一角が、貌は消てなかりけり。

魑魅妖怪も棲ざりしを、彼畜生は憚からで、をり〳〵に來て遊べるのみ。彼奴を退治するものならば、登山の人に患なく、神迹を世に傳ふべき、時やうやくに至れる也。なほしも告て後々のこゝろ得にすべき事、なきにしもあらざめれど、あまりに天機を漏すときは、還て神の惛に逼らん。今ははや是まで也。しかはあれども後日に至りて、思ひ合せん爲にのみ、拙きまゝの口遊を、餞別にせん聞給へ。といふに現八貌を斂めて、かさね〳〵し高論明教、よく丹田に受納て、忘るゝことなかるべし。願ふは讖語を示し給へ。と乞れて一角うち微笑み、某武藝を旨として、文墨に疎けれども、人死して靈となるときは、世に在し日に優ことありて、萬理に通ぜざることなし。いで〳〵といひかけて、聲朗に誦するを聞けば、

相遭講㆑武、　相別誘㆑仇。　越全㆓露玉㆒、　菊花謝㆑秋。
再阨不㆑釋、　更問㆓髑髏㆒。　妖邪亡處、　申山應㆑遊。
八犬具足、　八犬未㆑周。　窮達有㆑命、　離合勿㆑謀。
南總雖㆑遠、　終歸㆓一流㆒。

吟ずること三遍にして、現八記憶してければ、一角に謝し別を告て、件の髑髏を短刀と共に、行袱に包みつゝ、そが儘背にうち被て、端引結びて出てゆけば、一角は窟門まで、送り出て

きのみ。善に與する義士と見て、愛顧を憑み奉る。よくし給へ。と叮嚀に、說示しつゝ岩窟の、奧のかたより取出す、髑髏は豫て准備やしけん、欵冬の葉を二三枚、重合して包みしを、短刀と共に遞與にぞ、現八はひとつ〳〵に、受とりてなほよく見るに、短刀は鍔の色もなく、蠹蝕るまでに銹たるが、柄糸ははや朽斷離て、處々に殘れる鮫は、開後れたる梅花に似たり。況てその鞘の、斑に剝たる、只是古墳石棺中の、殘劍に異ならねば、現八は見るに就、聞くに就ても懷舊の、淚ぞいとゞ進みける。かゝりし程に星落て、東の山陝しらみにければ、一角外面うち仰ぎて、陽人陰鬼、道異なれば、久しくこゝに相譚ひがたし。縱非類に誣られて、窮阨その身に逼るとも、みづから愛して、血氣に早る、短慮の事なし給ひそ。今よりの後角太郎と、迭に扶け助られて、名を揚家を興し給へ。さればとて初對面より、玉の事などいひ出て、異性の兄弟なるよしさへ、明々地に說示さば、彼妖怪にはやく知られて、宿念合期しがたからん。彼妖怪は神通ありて、十里の外の事を知れり。彼奴は既に十七年、貌を變じて里に在れども、時として山林を、慕しくや思ひけん、月に必兩三度、小夜深る比宿所を出て、この深山に來て遊ぶことあり。彼奴が和殿に射られしは、今宵も遊山によりてなり。さればこの山の脚にて、折々人の亡たるは、彼畜生の所爲なりき。素この山は神迹にて、猛獸毒蛇あることなく、

の理をよくおもはゞ、わが兒の菴を敲くとも、交をのみ厚く結びて、且わが言をな告給ひそ。倘佻々しく說示さば、わが兒は一切信ずして、還て和殿を疑ふべし。さりとて久しきことにはあらず。竊に時の至るを俟て、その囘にこそ如此々々、と告なば無明の醉醒ん。是緊要の事にこそ。と諄かへしつゝ說諭せば、現八しば〳〵頷きて、教諭寔にその理あり。目今御邊の言葉に就て、賢息のうへをおもふに、神明佛陀彼身を護り、且瑞玉を所持すと聞るに、養父の姓を冒せしより、犬村としも名告れるは、亦是犬士の一人にて、われと異姓の兄弟ならん。然らば御邊に頼れずとも、死力を盡し相資けて、彼妖怪を亡さゞらんや。是某が願ひ也。さりけれども證據なくば、痴人の夢を說くに似て、いと烏滸也といはれやせん。この義はいかに。と期を推せば、一角も亦頷きて、現その遠慮なくてはかなはず。某年來祕藏せる、正しき證據兩種あり。その一種は短刀なり。こは當時某が、彼野猫の吭のあたりを、刺んとしつゝ差て、臂を砍たる刃なり。彼折に妖怪が、取遺れたりけるを、深く隱して今なほあり。願ふはわが兒にこの刃をもて、怨讐の胸膈を刺し給へ。さは然ながらこの短刀を、角太郎は認らずして、なほも疑ふ事あらば、この一種を證據とし給へ。これは是わが髑髏なり。說くとも解けぬ時に臨て、角太郎が鮮血をもて、これに沃がば凝著て、親子たることと分明ならん。その餘は時宜に依るべ

と拍て、原來御邊はけふ網苧にて、はじめてその名聞えたる、赤岩ぬしでありけるよ。鄕に彼里なる、茶店のあるじが、賣弄閒話に、不憶く御邊の武勇、子息の孝友、傳聞しに違はねども、豈おもはんや一角、と名告れるものに眞あり贋あり。今宵胎内竇の邊にて、某が射て墜したる、彼妖怪は贋物の、赤岩一角ならんとは、神ならずして誰か知るべき。爾るに御邊は身後に靈あり。こゝに居ながら赤岩なる、妻子のうへも、怨讐の事も、かくは定かに知りながら、などて妻にもその子にも、枕邊に立、夢に見せて、箇如此々々と告ざりける。と詰れば一角頭を掉て、そこらの事は初より、思はざりしにあらねども、角太郎は孝子也。妖怪も亦神通あれば、既に貌を變ぜしより、言語應答、常住坐臥、武藝を教る刀法まで、わが身と異なる所なきに、果敢なき夢を實事として、親を疑ふことやはせん。又窓井も如右ぞかし。目前なる良人を非として、いかでか夢を恃むべき。然る人情を思慮らで、愁なる事したらんには、却妻や子の、疑ひを惹のみならで、彼等はいよ〳〵危からん、と思ひにければ默止たり。これ某が十七年、冤を伸るよしもなく、死して朽ざる所以也けり。大約死して靈あるものも、時至らねば怨に答て、祟をなす事甚難かり。今幸ひに和殿に遇ぬ。和殿はわが兒と過世あり。夫幽明は辨じ難し。明は物に由て顯れ、幽は人に由て陳。もし人物作らずは、幽明分別すべからず。和殿こ

れる歟。わが兒を譽るにあらねども、親には大く優りたる、孝にして且仁義に篤く、忠信にして又悌なり。禮節智慧も自然に具る、世の俊傑なりといへども、妖邪の爲に勞して功なく、養父母の世を逝りし後、彼船虫が奸計もて、角太郎夫婦のものを、赤岩村へ呼かへせしは、この夏四月の日子なるに、角太郎が妻雛衣は、密夫の子を身ごもりぬ、といひ立られて妹と伕の、中を裂れし濡衣の、その妻のみにあらずして、角太郎さへ追出され、養父の遺財田園まで、推留られてすべなさに、法師にならんと思ふよしを、養家の里人に告しかば、里人等憐みて、返璧といふ地方に、褊小なる菴を締て、角太郎を容措つ、且米を贈り錢を遺りて、聊恩とせざりし事は、犬村蟹守儀清が、施しを好みたる、慈善の遺德に報ん爲、及角太郎が孝友の、誠心に感じて也。是よりして角太郎は、或は讀經、或は坐禪、無言の行を旨として、世の交を絕ものから、心に任せぬよしありて、いまだ剃髮せでをるも、亦神明の擁護によれり。しかはあれども厄殃の、なほ貧緣て雛衣が、露命を保がたきに至らん。この一條より綷破れて、善惡邪正相顯れ、玉石眞僞の別れん折に、願ふは和殿わが兒を助けて、怨讐を擊し給へかし。と賴む言葉の露深て、霜となる夜の山風に、落るや秋の木葉より、脆きは人の涙なり。現八はつく〴〵と、聞くに胷且塞れて、洪歎やるかたなかりしを、思ひかへしつ握れる拳を、解つゝ小膝を礑

夜毎に、枕の數も累りて、牙二郎と名づけたる、男子を產たれども、非類に膚を穢されし、精液漸々に衰へて、三十に足らで身まかりたり。是よりして後假一角は、妾夥買易て、只淫樂を旨としつるに、その妾等はいく程もなく、或は精氣を吸耗されて、一トとせも歷ず死するもあり。或は寵の衰へて、竊に啖殺されしを、逐電しけんといはるゝあり。そが中に近属來つる、船虫といふ妾は、邪智逞しく慾ふかく、行ひ穢れし淫婦なれば、彼同病は相憐み、同氣は相歡ぶ沿習にて、妖邪に觸れても恙なく、且妖獸のこゝろに愜ひて、はや正妻になりしかば、わが兒の爲には繼母といはる、これも亦恨むべし。ひとりわが兒角太郎は、仂きより孝友の、志疎ならねば、彼妖獸を親とのみ、思ひ違へて慕へども、妖怪は己が子の、牙二郎が生れしころより、角太郎を憎むこと、不慈なる繼父の類にあらず。日毎の呵責に慊らで、竊に殺してその宍を、啖んと欲せしかども、角太郎は過世ありて、神明佛陀の護らせ給ふに、身に亦具はる瑞玉あれば、渠いかにともすることなかりき。かゝりし程に角太郎が、母の兄なる犬村儀清、はやくその機を察しけん、養んとて宿所に呼取り、文學武藝俺まで敎て、その女兒をもて妻せたり。これにより角太郎は、養父の家に成長りて、犬村氏を冒せしも、過世の業因ある事にて、名を禮儀とつけられしは、渠禮讓を宗として、威儀を亂さぬ名詮自性、且瑞玉の字義を取

闘ふ件の山猫、この岩窟より跳出けん、某が後方より、背に爪をうちかけて、仰ざまに、引倒すを、こゝろ得たり、と輾る隨に、手ばやく短刀を拔放て、乘し蒐れる猛獸の、吭を刺んとしつれども、拳狂ふて前足を、一刀斫りしが淺痍にて、灸所ならねば物ともせず、勢籠で某が、吭に啖著たりける、牙は鋒より鋭きに、一ふり振られし大事の深痍に、霎時もあらず、縡斷れし、死骸を窟に引入られて、飽まで腹を肥されたり。かくとは知らぬ門人等は、某を待わびつゝ、その曛昏に宿所に還りて、云々と報しかば、妻子の歎きは大かたならず。さればその次の日に、里人さへに駈催したる、門人遺なくつれ立て、又この山に索來つれど、その回も長き石橋を、得渡るものなかりしかば、又徒に引かへす。折から件の野猫は、はや某が貌に變じて、某が衣、大刀行縢さへ身に著て、胎内竇の邊にをり。既にして出てゆく、衆人を呼びとゞめて、縡如此々々といひ瞞るに、容貌言語一點違はねば、誰か非なりと疑ふべき。衆皆歡び勦りて、扶掖つゝ宿所に還れば、妻子も惑ふて死したるものゝ、甦生れる心地しつ、天に歡び地に喜ぶ、欵待態こそ淺ましけれ。抑件の野猫が、某に化たりし、縡のこゝろを甚麼といふに、某が後妻なりし、窻井はこのとき廿二歲、鄙には儔なきまでに、容止美しかりければ、犯さんとての所行なりけり。憐むべし後妻窻井は、變化不測の妖獸を、良人と思ひつ夜每

來使役せらるれども、眞實歸伏せしものならねば、手を負ふたるを幸にして、資けて宿所に還れるのみ。もしかの猯と貂ならば、必和殿を索求めて、怨を復さんとこそ謀るらめ。然るをその事なかりしは、亦是和殿の洪福也。又某は陽人ならず。告るも面ぶせなることながら、この深山より程遠からぬ、赤岩村の鄕士なりける、赤岩一角武遠と、呼れしものの横死したる、冤魂こゝに留りて、假に姿を顯したり。某累世武弁の家にて、鄕士にはなりたれども、武藝は人に讓ることなく、鞍馬八流奥義を極めて、好みて人の師となりしより、鄙にはあれど弟子多かり。かくて寛正五年の初冬、某漫に武藝に自負して、名を顯さんとおもふをもて、昔よりして人の怕るゝ、この深山なる奥院を、見んとて門人等を誘引しに、衆皆齊一顰みて、諫るをいたく說破り、高弟僅に三四名と、從僕をのみ相俱して、はや山ふかく陟る程に、旣に第二の石橋を、渡らんとせし折に、門人等は顏色の、蒼くなるまで戰慄て、半に至らず引かへしつゝ、ふたゝび諫めて已ざりしを、某些も聽ずして、弓杖突て只一已、彼石橋を渡果て、この岩窟のほとりまで、頻りに登る程しもあれ、陰霧たる風颯と音して、倏忽塵埃を吹起れば、ふき倒されじ、と岩稜に、携る心の迷ふまで、前後もわかずなるのみならで、思はず沙石に眼を撲れて、怺ふべくもあらざれば、弓投捨つ、袖かき合して、頭を低て眼を掩ふ、由斷を

み。といひつゝ蒼柴折燒て、傍にありける椎實を、すゝめて餓に充るにぞ。現八は火光に就て、件の男をつら〳〵見るに、齡は三十あまりにして、形體骨立、顏色蒼然、縹緲なる仁田山紬に、龜甲形の服章染たるが、幾月日を歷たりけん、海松の如くに搔垂れし、小袖ひとつを被たりける。その爲體何となく、この世の人とはおもはれず。わが護身囊なる、玉に怕るといひしを思へば、陰鬼ならずは、狐魅貉魅。問試ずは知るよしあらじ、と思へば膝を推進めて、和主は嚮にわが射たる、妖怪を讐といへり。渠は何等の妖物にて、和主は亦甚麼なるものぞ。とくうち出して示さずや。とせわしく問れて件の男は、嘆息しつゝ額を撫て、話るも苦しき過去かたを、僂數れば十七年、いと長々しき言なるを、心靜に聞給へ。嚮に和殿が射て落しつる、妖怪はこの高峰なる、胎內竇の邊に棲りし、野猫の化たる也。渠旣に幾百歲の、星霜を歷る隨に、大きなること犢に等しく、猛きこと虎に似たり。神通自由なるをもて、この處の山神、土地を奴僕の如く、役使はずといふことなし。さらでも木精年老獸、貒貂などの類まで、相從ふて渠に媚。今宵彼奴が乘たる馬は、是千載の木精にて、老樹の精の化たる也。又彼兩箇の從者と見えしは、所云山神と土地也。さるにより野猫が、射られて馬より墜たるをり、仇を索る意なく、慌忙き野猫を、肩にかけつゝ逃亡たり。おもふに件の兩神は、神通渠に敵しがたくて、年

纔に殘る一條の、箭を拔出し、弓彎固めて、寄せは立じ、と身構たり。當時件の岩窟より、いと細りたる聲を立て、勇士われをな怪み給ひそ。吾儕は素より妖怪ならず。和殿は今宵ゆくりなく、胎內寶のほとりにて、わが讐をなん射給ひたる、その歡びをいはんとて、俟こと既に久しかりき。猶相譚て賴むべき、事しもあれば立よりて、且火にあたり給はずや。と呼かけられて現八は、些も擬議せず見かへりながら、肚裏に思ふやう、彼奴が甘言をもて、誑引寄せんと欲するとも、いかばかりのことやはする。且試て時宜に依る、術こそあらめ、と尋思をしつつ、勇氣を示す聲高やかに、浮世に遠き深山幽谷、人の住むべき所ならぬに、和主は妖怪ならずといふ歟。爾らば亦これ何者ぞや。と詰問つゝ立對へば、彼人答て、さればとよ、某年來ここに住るは、わが兒も知らぬ以あれども、一朝には說盡しがたかり。枉て且く立より給へ。といふに現八こゝろには、なほ疑ひの釋ねども、推辭ば怯したりとや思はん、ゑうこそあらめ、と頷きて、弓箭投捨岩窟に、進み入つゝ件の男の、ほとりによるを遽しく、手をうち揮て推禁め、勇士そなたに坐し給へ。和殿の懷には瑞玉あり。某憚るよしあれば、只顧に相觸るゝことを欲せず。目今もいへる如く、和殿は讐に傷けて、わが憤を洩し給へば、實に得がたき賓なれども、欵待し進らする物もなし。うち解て火にあたり給へ。夜寒を凌ぐに足るべきの

ばはつかに特む、弓に一箭を携て、胎内竇を西のかたへ、ゆき抜て又見かへれば、靈山異境の奇特なるにや、沒たる月の出るにあらねど、今まで黑白を別ざりし、星光は恒にもまして、朧夜よりも明かりければ、進退大く便りを得て、只管に攀登りて見れば、彼鵙平がいへるに違はず、臺石あり。又髯龔の難所あり。二間餘の石橋、裏見の瀑布、庚申の文字石、第二の石門、燈籠石、洪鐘石を遙にうち見て、十二三間なる石橋を、自若として渡りけり。信なるかな現八は、拳法捕物に妙を得て、且樹に登り嶮岨を渉るに、坦地をゆくより易かる事は、初滸我に在りしとき、芳流閣の屋上にて、犬塚信乃と組撃したる、働きをもて知られたり。然ればこそあれ今宵も亦、深山の樹上に登居て、妖怪を射て拳紊れず。袷といひ恰といひ、十三間なる細谷橋を、足下暗き夜深に渡りて、亦怕れたる氣色なきは、人の及ばぬ所行なれども、猶夜視にして遠景の定かならぬを憾とするのみ。既にして石橋を、渡り果て又攀登れば、前路に岩窟數箇所あり。上古穴居の迹にやあらん、といひつるは現こゝなるべし。聞くが如くばこの處より、奥院まで遠くもあらじ、と思ひつゝ又ゆく程に、就中巨大なる、岩窟の中に人ありて、火を燒てぞゐたりける。こゝに至りて現八は、心ともなく兩三歩、逡巡をするまでに、うち驚きつ且怪みて、原來こゝにも妖怪あり。漫に地方を更んとて、深入したる悔しさよ、と思へば騷ぐ胸を鎭めて、

妖王なるべけれ。先にすれば物を征し、後るゝときは征せらる。彼奴をだに射て落さば、その餘は必逃亡なん。よしや怨を復さんとて、これ彼齊一うち逆ふとも、そは怕るゝに足るものならじ、と早速の尋思は、勇士の大膽、兩條の箭は腰にあり。半弓左手に突立て、竊に件の樹に攀登るに、その神速きこと猿猴の如く、程よき枝に足踏留めて、弓に箭刺ふて彎固めつつ、霎時矢比を張ひけり。さりけれども妖怪等は、かくとは思ひかけざりけん、心のどけくうち相譚て、胎内竇に近きつ、進み入らんとする程に、寃濟せし現八が、矢聲も猛く發つ箭に、件の騎馬なる妖怪は、左の眼を箆深に射られて、一聲苦と叫びもあへず、馬より撞と墮しかば、吁嗟と騷ぐ兩箇の妖物、手負の手を取り肩に引かけ、一箇は馬を牽つゝも、舊來しかたへ逃亡けり。こゝに至りて野干玉の、又黑き夜となるものから、現八は思ひしごとく、一箭に三箇の妖怪を、射走らしたりければ、先樹の下にをり立て、かさねて思念を囘らすに、彼妖物等は不意を撃れて、怕れ惑ふて逃たれども、わが半弓は圓竹にて、箭も亦眞物ならねば、勢ひ鈍く力弱かり。かゝれば眼にあらずして、捷を取ること難かるべし、と思ひし矢坪の違ねど、さしも老たる妖怪が、あの一箭にて脆くも死んや。或は眷屬同類を、驅催してふたゝび來ば、その囘は防ぎ難かるべし。地方を易て彼奴等が、なほせんやうを見るこそよけれ、と思ひにけれ

かたより忽然と、螢火可の火光、閃々として兩三點、こなたを投て來る如く、いとも幽に見えしかば、現八ふかく怪みて、彼は鬼火歟、しからずは、天狗火にもやあらんずらん。要こそあれ、と遽しく、半弓拿て、胎内竇を、出て傍の樹蔭を、盾柴にしつゝ闚ひをり。さる程に件の火は、近づく隨に大きうなりて、そがあたりを燭すこと、炬に異ならず。既にしてその間、四五反ばかりになるまでに、現八はなほよく見んとて、瞬もせでありけるに、怪しむべしその火の光は、地狗(狐)天狗の所爲にはあらで、えもえしれぬ妖怪の、兩眼の耀る也。且その模樣を譬ていはゞ、面は暴たる虎の如く、口は左右の耳まで裂て、鮮血を盛れる盆より赤く、又その牙は眞白にして、劍を倒に栽たる如く、幾千根の長き髯は、雪に閉たる柳の糸の、風に紊れて戰ぐに似たり。しかれどもそが形體は、宛人に異ならず。腰には兩口の大刀を横佩て、騂駒に跨たるが、その馬も亦異形にして、全身すべて枯木の如く、處々に苔生て、四足は樹枝なるべく、その尾は芒の生たる也。左右に從ふ若黨あり。一箇はその面藍より青く、一箇はその色赭石に似て、頭髮さへにいと赤く、畫る諸天に彷彿たり。かくてこの妖怪主從、徐々に馬を歩せつゝ、何事やらん相譚〳〵々々、或は高く笑ひなどして、胎内竇のかたに來にけり。現八は彼爲體を、はや見定めてなか〳〵に、些も騷ぐ氣色なく、心の中に思ふやう、彼馬に騎たるこそ、

して、夜曉し走らば何處まれ、里にも到らん人にも逢ん。さはとてなほも上りつ下りつ、又幾十町歟ゆく程に、思ひがけなく最大きなる、石門のほとりに來にけり。このとき天は稍霽て、纔沒遺りたる七日の月の、山陝になほ幽なる、影を便著に睛を定めて、且彼此を見かへるに、纔に足芋の鵙牢が、說示せしにてそれかと思ふ、庚申山にありといふ、胎内竇に似たりけり。こは什麽生、とばかりに、且驚き且呆れて、忙然として立在しを、しばらくして又おもふやう、とてもかくても山深く、迷ひ入りしを又今さらに、巓村まで至らんこと、轍き路にあらざれば、今宵は且この窟寵に、曉して里に下るべし、と尋思をしつゝ坐を占て、弓箭を側に引つけて、なほ深る夜を戍てをれば、月は忽地沒果て、ふたゝび烏夜になりにけり。現幽谷の嶮岨なる、この四邊には鹿もかよはず、山氣頻りに肌膚を犯して、夜寒は里に彌增たり。熟ぬ山路に夜をこめて、迷ひあるきしことなれば、身さへ心も疲勞果て、よしなや路を貪らずは、かゝる艱苦はあらざらましを、邇言を察せず、田舍翁とのみ、思ひ侮りて、實意ある、人の諫を聽ざりしより、千金の身を危くしつるは、愚魯なりき、と亦さらに、後悔の外他事もなく、寢られぬ隨に友の事、養父母の事親の事、在となき世の過去かたを、思ひ續けて曉る天を、いと〳〵遲しと俟ほどに、ゆめにも鐘は音づれねども、星の光を仰て瞻るに、丑三にやと思ふ比、東の

只世渡りの方便のみ。土俗の言は特むに足らず。行銷したる處にて、今宵の宿りを投んに、さのみ難きことやはある、と侮りしより導者を傭はで、只かの弓箭を携て、登る山路は二里あまり、神子内村を稍うち過て、巓をさして急げども、頃は九月初旬、日影短くはや黄昏て、天さへ曇る山ふところの、さらでも闇き樹下蔭に、前路もわかずなりしかば、こゝろ有繫に安からぬ、肚裏に思ふやう、かゝるべしとは知らずして、烏夜に要なき弓箭より、買ふべきものは松明なりしを、噫悔しくも脱落にけり。任他神子内より、巓村へは路程、一里半道ありとか聞り。既にして神子内より、二十餘町も來つらんに、こゝより進むも退くも、路に損益なかるべし。瞽者も京へ登るといふ、世の常言もあるものを、暗きに怕るゝことかは、と志を奬して、其處とも知らぬ崎嶇を、辿るも果しながき夜の、深ぬ程にと辛じて、雖邁々々人に遇ねば、西歟東歟問ふよしなくて、迷ひ入ること幾町なりけん、澤邊傳ひに登ること、一二三里ならんと思へども、巓村へは至らずして、牡鹿の聲のみ聞えけり。かゝれば里へはなほ遠かり。いかにすべき、と思ひかねて、且疑ひ且跕めば、心ぼそさもますら夫が、後悔臍を噬までに、又つくぐ\と思ふやう、不知案内の深山路を、如法闇夜に辿らんより、こゝにて曉るを俟べき歟。否々こゝに留るとも、猛獸毒蛇の患ひを禦ぐ、よすがあるにもあらざれば、只命運を天に儘

瞻望て、彼樹せ。日影は欹て、彼處の榎を外れたり。晡時に程もなからんに、今より急ぎ給ふとも、神子内村で日は暮なん。さればとて彼村に、客店はなきものを、今宵は枉てわが宿に、曉し給へ、と勸めても、いはまほしうは思へども、さては宿錢の欲かる隨に、さもなき事を物々しげに、權し懲して、旅ゆく人の、足さへ禁めたりなど、思はれもせば痛まぬ肚を、摩らるるに似て朽惜かるべし。弓箭はおん身の意に稱ふを、みづから擇み給へかし。と應て軈て左右の手に、掻攫みつゝもて來て見するを、現八はこれ彼と、擇み取たる半弓を、いざとて遞與せば、鵙平は、そが儘柱に推當て、弦引かけて兩條の、獵箭共侶さし寄する、その間に現八は、腰に著たる錢解出して、弓箭の價を取らせつゝ、はや立出んとする程に、鵙平はなほ叮嚀に、客人路次に由斷なく、彼神子内をうち過ぎて、巓村まで急がせ給へ。是首よりして巓まで、大約三里半道なれども、山にしあれば四里にも敵へり。倘この風が北にかはらば、雨にならんも測りがたかり。こゝろ得給へ。と諄かへす、田舍氣質の實意ある、人の辭に現八は、歡びを演別を告て、手ばやく結ぶ笠の紐、掻取る獵箭を背のかたへ、帶にそが儘挿めども、後へは引ぬ手束弓、小脇に楚と携へて、覺くも饒路を、足に信して急ぎけり。却說犬飼現八は、今さら路を貪りて、頻りに進みて身の危きを、おもはざるにあらねども、茶店のあるじが實弄閒話は、

第六輯　卷之五　下册

第六十回

胎內竇に現八妖怪を射る
申山の窟に冤鬼髑髏を託ぬ

登時犬飼現八は、鴫平が長物がたりを、聞果て嗟嘆に堪ず、現世の人のさま〴〵なる、得がたき孝子をもちながら、かくまで不慈の親もありけり。さるにてもその子の賢なる、直き心に呉竹の、世を形なく思ひ捨てや、菩提の道に入らんとすなるは、いと惜むべき事になん。いざ退らん。と胥近に、笠引よせて、喃翁、庚申山の奇異怪談、赤岩犬村親子のうへさへ、いと詳に告られて、日數累し旅宿の憂苦を忘るゝまでに慰めたり。たま〳〵この地に來つる甲斐に、さる靈山の壤を踏ば、後々までも話柄に、なるべき事の多かめれど、此度はをさ〳〵人を索て、心急ぎのせらるれば、そは又かへさの事にせん。さばれ彼山の麓路を、過らずはいかにして、わが志すかたに至るべき。かゝれば意見に隨ふて、弓箭を買もてゆくべきのみ。和主が好と思へるを、取出てはやく賣ずや。といはれてやゝと身を起す、鴫平は微笑ながら、ふたゝび外面

なりし比よりして、赤岩ぬしは花主也。彼先生は最大、野味を嗜給へば、月の中には幾遍となく、彼處へ肉をもてゆきて、よき商ひをする日も多かり。今では殺生せざれども、餘の獵戸より中買して、なほ疎からず交加すなれば、件の口舌の折からも、ゆき合したるにより、かう具なる事を得たり。としたり貌して說誇らしつ。花主甲斐なく人事いへば、影さす鳥の驚してや、外面猛に見出して、あな無益しや、われながら、庚申山の來歷より、興に乘して思はずも、いはでもの事いはんとて、漫に時を移しつゝ、未の半過るまで、おん身の足を駐たり。許し給へ。と賠話にけり。

したれど、赤岩ぬしは見もかへらず、又彼二男の牙二郎どのは、心しぶとく頑嚚にて、兄を兄とも思はねど、角太郎どのは悖はず、三方四表に機を包て、なほ孝悌を守られしは、人のしがたきことになん。かゝりし程に雛衣どのは、今玆の夏より身おもくなりしに、彼鳩鷹の船虫が、豫て伎倆しことなるべし、雛衣どのは赤岩ぬしと、情由ありなンどといひ立て、血で血を洗ふ恥を思はず、素よりあるべき事ならねども、角太どのは已ことを得ず、雛衣どのに休書を、とらして媒人許預け遣し、飽ぬ夫婦の別れをせられし、心の中はいかなりけん。妻は義理ある養家の女兒、從母兄弟にて重姻なりしに、身ひとつにてもある事歟、有身てより既にはや、三四箇月になるとか聞けり。况て歎きは彌增る、雛衣どのの恨みのかず〳〵、涙に袖は朽るとも、乾すことかたき濡衣は、霎時浮世の笠やどり、急がぬものをとく〳〵と、彼媒人に挽立られて、泣つゝ出てゆき給ひぬ。とばかりにして猶治らず。角太どのさへとやかくと、なき事をのみいひ懲されて、遂に勘當せられしかば、犬邨よりもて來たる、金銀調度を置土產に、田園さへに推留られ、その身その儘追出されて、世を形なく思ひにけん、赤岩村と犬村の、間なる片田舍の、字を返璧とか呼べる地方に、草菴を締びてをり。さばれ貌は半俗にて、その行ひは法師も不及、と彼處より來ていふものあり。いと痛しき事ならずや。僕はその初、獵戶

り、類中とやらんにて、うち臥せしより枕あがらず、病こと二年あまりにして、これも今茲の春の比、黄泉の客となり給ひぬ。齢は六十あまりなるべし。さる程に、角太どのは、養父母前後の病牀に、晝は終日枕邊を去らず、夜も通宵帶を解かで、夫婦心をひとつにしつゝ、看とり冊き、療養祈禱に、醫師を擇み、驗者に便りて、長き月日を怠もなく、心の誠を盡しぬる、孝行その甲斐なかりしは、命數限りあればなるべし。是より先に赤岩にては、彼後妻の窓井どのは、二男牙二郎の、三歟四ッになりける比、一日頓死をしたりける。これよりして赤岩ぬしは、妾一人をものし給ひて、年來を歷る程に、その妾はとにかくに、尻の落つくものはなくて、或は半年、或は一稔、立や立ぬにいひこしらへて、身の暇を乞ふもあり、又逐電するものもありて、幾人となく置替られしに、去々歲の秋の比、武藏のかたより流れ來ぬる、船虫といふ妾のみ、いたくこゝろに愜ひけん、いく程もなく正妻に、推のぼされて二とせ歷たり。さて又犬邨の宿所には、わかき夫婦の世になりて、しば〳〵赤岩に詣來つゝ、親の安否を訪ふ程に、犬村ぬしは優にて、遺財の夥ありといふ、人の噂に船虫は、良人に薦めて角太郎夫婦のものを呼とりつ。兩家をひとつに合するは、件の金を略ん爲也。とはしらずして角太どのは、實父の招きに歡びて、取るものもとりあへず、家も田地も人に預けて、雛衣どの共侶に、赤岩に來て同居

ば、文武一道の達人なれども、舊里へかへりては、隱逸をのみ旨として、人の師となることを欲せず。只角太郎どのにのみ、力を入れて旦夕に、教導ざることなきに、子は亦その才養父に優て、一を聞て二三を知る、下學上達速にて、年十五六に至りては、文武の奧義を極めたり。されば爾後犬村ぬしは、一日その内政と相譚ふやう、角太郎もこの春は、十八才になりにたり。わが女兒雛衣は、二ッ劣りて二八になれゝば、婚姻さすべき時至れり。生ごころのつくものどもを、わかち置んは要なき事也。翌は黃道吉日なるに、とくその准備をし給へとて、軈て子どもを喚よせつゝ、絆のこゝろを告しらすれば、齊一顏を赧して、應かねてぞ立にける。かくて次の日犬村ぬしは、先角太郎どのの、額髮を剃とらして、元服の義を執行ひ、養父の諱の一字を授けて、犬村角太郎禮儀と名告らせ、女兒雛衣どのには、袖を揣させ、歯を染させして、その宵里人甲を、媒妁に憑み傭ふて、婚姻愛たく整ひければ、窻の竹に千歳を壽き、檐下の松に萬代を契りけん、いと相應しき新夫婦を、親はさら也里人等さへ、鄙には類あらじといひけり。されば浮世の月と花、盈れば虧るならひにて、歡びの果は又、哀も遠からず、犬村ぬしの內政は、その次の年の秋のころ、風のこゝちとうち臥せしより、鍼灸藥餌の驗なく、五十に足らぬ齡もて、遂にむなしくなりにけり。かゝる歎きのうち添て、犬村ぬしもその冬よ

身て、次の年八月の日子、亦男子を産れしかば、赤岩ぬし歡びて、牙二郎と名づけたり。凡世の人心、前妻の子を繼母の、憎むは和漢に多かれども、赤岩ぬしはいかなる故にや、二男牙二郎の生れしころより、前妻腹なる角太郎を、憎むこと大かたならず。さもなき事も咎々しく、穉きものを打擲しつゝ、傍痛き事多かれど、孝心深き角太どのは、搏るゝ杖の下よりも、親を慕ふて、まはらぬ舌に、勸解る辭の恰悧さを、見も聞もせし人毎に、皆痛しく思ひけり。この時赤岩に程遠からぬ、犬邨といふ地方に、亦是一個の鄕士ありけり。素より文武の達人にて、姓氏は犬村、名は儀淸、俗字を蟹守といへり。これは是、赤岩ぬしの前妻なりし、正香どのの家兄にて、角太郎どのの爲には、外伯父なりければ、愆もなき幼侄の、親に愛を失ひしを、いとゞ不便に思はれけん、わが子は女兒ひとりなれば、角太郎を呼びとりて、養子合にすべけれとて、赤岩ぬしに乞れしに、可愛くもなき子の事なれば、赤岩ぬしは惜氣もあらず、立地に承引て、そが儘おくり遣しけり。これにより角太どのは、六の歲より犬邨なる、伯父公夫婦に養れて、その孝心に親疎なく、入ては養父養母に仕へ、出ては實父繼母を顧り、七ッ八ッの比よりして、手習讀書に怠らねば、養家はさら也、里人等まで、譽ぬものなんなかりける。されば又、犬村蟹守儀淸ぬしは、弱冠のころ京師に上りて、文學武藝、その師を擇み、留學年を累しか

はあれども赤岩ぬしは、氣力日ごろに異なることなく、衆人を勞ふて、多くは途より歸し遣し、門人と從者のみ將て、宿所にかへり來にければ、內政は只死したる人の、甦生れる心地して、その歡びをいへばさら也、倘仂き角太どのは、天性孝心備りけん、稚こゝろにきのふより、かへらぬ親を思ひ屈して、昨夜は睡りかねたるも、今恙なくかへりぬる、親の袂に貪緣て、問慰るもいと可愛し。これより親族知己里人、一人かへれば又一人、詣來て絆の悅びを、述るもの少からず。一旬ばかりは庚申山の、物がたりにて日を消す、家內賑しく、赤岩ぬしの剛勇を、感ぜぬものもなかりしを、ぬしは懲たる氣色もなく、人々にうち對ひて、件の山は昔より人耳怕して登らぬのみ。山には毒蛇猛獸なく、藥草奇石、銀錫銅鉛、奇石蠟石多かるのみ。誠に海內無双の神迹、實に別世界の仙境也。愚按ずるに、疑らくは、これ神代の山陵にあらずや。某が謬て、水溪に落ても恙なく、還りしをもて魔所ならぬを、各賢察せらるべし。今よりして後、われに等しき、志あらんものは、必登山し給へ、と鼻蠢めかして誇りてけり。この一條は寬正五年、冬十月の事なれば。といひつゝ指を僂て、十七年の昔になりぬ。赤岩ぬしは形の如く、異もなげにいはれしかども、かゝりし後もかの麓にて、折々人の亡すること、今に至てかはらねば、登山するものありとは聞えず。かくて赤岩の宿所には、後妻の窻井どの、その十一月より有

にきのふ、われ奥院をおがみ果て、東陜より投降を、辿る〳〵もかへる折から、雲忽地に足下に起りて、晦瞑瞬息、暗きこと、野干玉の夜に異ならねば、こはいかに、と心迷ひて、平岩の斷間より、東へは得下らず。後に思へば謬て、釜石のほとりより、未申なる岨路へ、頻りに進みゆく程に、思はず足を踏辷らして、數十仭なる溪底へ、忽地撞と滾落たり。然けれども幸ひに、底には砂礫のみにして、水も亦膝を過ねば、右の腕を傷れるのみ、命に恙なけれども、索の絕たる吊桶に等く、人揚ざれば彌勒の世まで、出て歸らんよしもなし。とかくする程に日は暮れて、溪底に天を明せしかば、頻に飢て堪がたかり。いかにせまし、と四下を見るに、巖に岩菌の生たるを、飽まで採て飢を凌ぎ、さりとも登る路ある歟とて、彼方是方とする程に、足懸りよき處あり。このほとりには藤蔓の、上より長く降りたり。こは究竟、とこゝろ嬉しく、手繰著ては岩稜に、足踏掛つ辛して、攀登ること半日あまり。やうやく故の山路にかへりて、今あしこまで來る折から、各位の後影を、遙に見つゝ呼び留たり、と一五十を說示せば、門人、奴隷、里人等、駭嘆せざるものもなく、その高運を相賀して、且勦ること大かたならず。軈て胎内竇に憩して、割籠の飯の遺れるを、開きて羞るものもあり。或は又その衣の、溪水に濡れていまだ乾かず、處々に頳壤の、塗たりしを脫更さして、痍を勦るものもあり。しか

たるもあり。簞笥の引出してふものに似たるもあり。この餘或は舟、或は釜、或は鶴龜に似たる自然石の、巖々として立るあり。磥砢として伏せるあり。天造地工の精妙なる、見れども言葉に述がたく、畫くとも筆に寫し易からず。これより岩窟數箇所あり。上古穴居の址なるべし。既にして登盡すとき、前面に三箇の窟室あり。是則奥の院なり。駭然として向上れば、屹兮屼兮、その高きこと二三丈。磷兮峻兮、その嶮きこと近づくべからず。その窟の形たる、中宮は□にて、左は△、右のかたは○かりける。便是天地人の三才に象るもの歟。その窟口の廣きこと、おの〳〵八九尺なるべし。所謂稚日靈尊、素盞嗚、猿田日子と共に三神、邈古鎭座の舊蹟ならん歟。この窟口の神前に、石猿三隻並びたり。その形狀、非禮勿ㇾ視、非禮勿ㇾ言、非禮勿ㇾ聽の三箴にして、亦是自然の活石也。庚申山と名づけしは、蓋これに依れるのみ。神祇官の記に云、庚申の日に件の三神を奉拜すといへり。こゝに至て年來の、疑念輙氷解して、深信肝膽に銘したり。この神室を拜み果て、右の方に陟ること、數百歩の程にして、東の陜ともいひつべき、嶮峻たる山陜あり。眺望尤奇絶也。其處より又下ること、凡四町あまりにして、いと平なる大石あり。その長サ十八丈、高サは一丈餘りにして、建屛風に異ならず。この平岩の斷間より、八町あまり東へ下れば、胎内竇へかへり出づ。これ今わが來つる順路也。爾る

音に、駭騒ざるものなく、是首に三人彼首に四人、膝をまじえ額を鳩めて、とやせんかくやせましとて、群議を凝すものもあり。しかれども武藝力量、覺ある師のいかにして、命に恙あるべしやは。山路に迷ひ給ひなば、後れてかへり來給ふべし。涙を斂めて俟給ひね、と内政を慰めて、通宵戸に立迎に出て、ゆきつ戻りつするものあり。とかくする程に天は明て、日ははや高く升れども、赤岩ぬしの還らねば、存亡定めがたしとて、猛に里人を駈催し、一隊すべて五六十人、弓箭、鳥銃、竹槍など、器械々々を引提たる、門人遺なく先に立て、庚申山に攀登り、既にして彼石橋の、ほとりまで來つれども、怕れて渡るものはなく、又商量に時を移せば、冬の日影の傾き易くて、未の半はや過たり。かくてはけふも事果じ。翌はなほ又人數を倍して、ふたゝび來て礄を渡らん。とてもかくても時後れしを、さばかり急ぐことかはとて、又徒に引かへしつゝ、その日申の比及に、胎内竇を出んとせし時、忽地後方に人ありて、聲ふり立て喚かくるを、僉駭きて見かへれば、是則別人ならず、赤岩一角ぬし也けり。これはこれは、とばかりに、且歡び且罵り、引返し圍繞らして、恙なきを祝しつゝ、きのふもけふも還らざりける、緣故を諮れば、赤岩ぬし微笑て、きのふわれ頻りに進て、ひとり石橋を渡りしとき、且彼此を見かへるに、寶藏に似たる大石あり。又二重の塀に似たるもあり。又屏風に似

門人等はこゝに至て、齊一その師を諫るやう、先生膽勇武藝の德もて、昔より人のかよはぬ、この山に入り給ふこと、既に過半に及びたり。誰か感服せざるべき。是よりしてゆくてのかたも、風景大かた猜すれば、相似たるものなるべきに、とく〳〵還らせ給へかし、と迭代に禁れども、赤岩ぬしは頭を掉て、蓬きことをいふものかな。奥の院迄至らずして、この中途より空しく歸らば、初よりして來ぬこそよけれ。おの〳〵こゝに俟給へ。われ走一走りに登り盡して、瞬間にかへり來つべし。いで〳〵、といひながら、禁る袂をふり拂ひ、弓杖突て件の橋を、忽地に渡り果て、見る間に見えずなりしかば、門人等は忙然と、從僕共侶五六人、こなたの岨に立在て、齊一胷を痛るのみ。俟こと二晌あまりにして、日ははや大く傾けども、赤岩ぬしはかへり來ず。こは平事にあらじとて、迭に額を合しつゝ、商量果しなきものから、今さらにこの橋を渡りて、追索んといふものなければ、所詮一ト圓宿所にかへりて、內政によしを報て、夥の人を駈催して、ふたゝび來て索求ん。こゝにて虛々日を消さば、一人として恙なく、還らんものはあるべからず。いざ〳〵、と一人がいへば、衆皆有理と雷同しつゝ、迯るが如く故來し山路を、辿る〳〵も辛して、その黃昏に赤岩なる、宿所へ還りて、如此々々と、後妻窻井に報しかば、こはそもいかに、とばかりに、伏沈みてぞ號哭ぶ。されば留守せし門人等も、件の凶

處よりなほも下りゆくこと、亦復二町あまりにして、前溪に石橋あり。その長ヶ一丈三尺、廣さは五六尺なるべし。かくてこの天工奇絶の石橋を、辛くして渡り果れば、前面に自然の石門あり。是第一の正門歟、まさかにして東に向へり。大サ大凡十二三丈、中函は一丈二三尺、左右に兩箇の小竇あり。各九尺許にして、全體宛琴柱に似たり。是より二町あまりにして、左のかたの幽谷より、數十丈なる大石高く峙て、塔の如く櫓の如く、叢樹頂の上に生茂りて、奇ならずといふことなし。又下ること、二町あまりにして裏見の瀧あり。その幅凡五六尺、その高きこと量るべからず。こは二荒山の瀧に似て、その奇はなほも優りたり。かくて、この曝布のほとりより、登りゆくこと五町餘にして、右に五隻の大石あり。色白くしていと高かり。遙に瞻仰る所、石中に文字顯れて、庚申と讀るゝ如し。こは文字石といふべきのみ。又陟降ること、一町にして石門あり。その大丈八九尺、中央は九尺許なるべし。この二の門より一町餘にして、燈籠に似たる大石あり。高サは四五丈ばかり也。又登ること數百步にして、遙に戌のかたを眺れば、洪鐘に似たる大石あり。その高きこと二三丈、蘿生し兎絲貫縈て、蒼然として亦奇也。是より又下ること、數百步にして石橋あり。長サ七丈餘りにして、恰虹蜺の引るが如く、苔滑に雲蒸て、その澗底の見えざれば、渡らんとするに瞑眩き、足さへ戦て進雖たる、

ら也、留守せんといふ弟子さへに、翌を契りて僉共侶に、散動たちて門邊より、別れて家路にいそぎける。されば赤岩一角ぬしに、前後三箇の正妻ありけり。第一の正妻の、その名を正香と喚れしは、賢女の譽れこゝへも聞えて、よく內を脩め奴婢を愍れみ、生平に神佛を深信して、良人に愆あるときは、諷諫めて悖はず。この腹に男子うまれて、角太郎と喚れたり。惜むべし正香の刀自は、この年の春世を早うしつ。その子は四か五ッのとき也。かくて又その夏の比、迎られたる後妻の、窻井とか喚れしは、亦これ美人の聞えあり。さばれその心操は、前妻に劣れるにや、娶られ來つるその年の、初冬の比に至りて、むかしより人みな怕るゝ、庚申山へ登らん、といひし良人を諫も得せず、只その武藝を怙るにや、いはるゝ隨に出立せしを、後に悔しく思ひしとぞ。閒話休題、さる程に赤岩ぬしは、その次の日の未明より、四箇の高弟共侶に、野裝束に身を固めて、手にはおの〳〵弓箭を携へ、從者には晝餉の割籠を負して、庚申山へぞ攀登る。比は十月初の三日、天よく霽て暖く、世にいふ小春の日和にて、麓の千草冬枯ながら、孤花開るも珍しく、朝鳥の聲を聞つゝも、胎內竇の石門より、二王石臺石なンど、四方の眺望に暇なく、この處より一山の、風景眼下に盡すべき、奇絕に驚く可也。是よりして下りゆくこと、纔に二間ばかりなれども、その巖石の嶮岨なること、鬼の髯鬚ともいひつべし。是

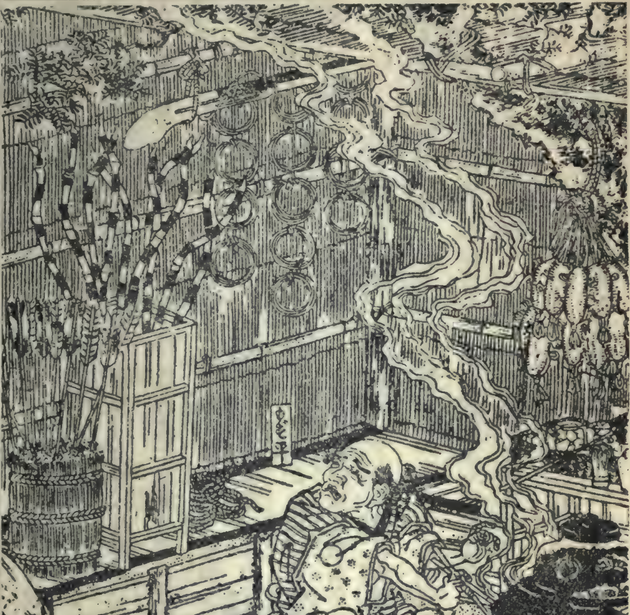
の子の爲に、自愛して危きに近づかずは、亦慈ありといはまし。みづから賢慮を回らして、おもひとゞまり給はんことこそ、願しく候へ、といはせもあへず赤岩ぬしは、呵々と冷笑て、原來おの〳〵怯せしな。大約深山大澤には、鬼魅妖怪もなからずやは。武術を學ぶは何の爲ぞ。昔平維茂は、戸隱山なる惡鬼を退治し、又源頼光は、大江山なる妖賊を、討夷たるにあらずや。爾るに武士たらんもの、魑魅妖怪に怕れてゆかずは、習ひし武藝もその甲斐あらず。かくてははやく刀を棄て、農商出家おのがまに〳〵、生業を易べきのみ。かくいへばとて只管に、武藝を恃み膂力に誇りて、人の諫を拒むにあらず。われ赤岩を氏としながら、おなじ名だたる靈山に、登陟せずは、虚稱に似たり。虎穴に入らずはいかにして、よく虎子を獲ることあらんや。おの〳〵さまで怕れ給はゞ、われ決して誘引はず。翌の留守を頼む也。うち相譚ふて俟給へ、と勢ひ悍く說破られて、洊て返すものもなし。そが中に允可の高弟、某甲某乙三四名、師の宏言に奬されて、恥しくや思ひけん、齊一膝を推進めて、現先生の卓見高論、はじめて夢の覺たるごとく、ほと〳〵感服仕りぬ。餘人はしらず俺們は、翌のおん供せまくほしけれ。この義を許させ給へかし、といふに一角歡びて、適徹妙くいはれたり。稽古の力顯れて、いと賴しくこそ候へ。然らばとく〳〵宿所に還りて、翌の准備をし給へ、といそがされたる四人はさ

柱の太神、神謨に相謀給ひて、件の山に登らせ給ひ、石を穿て室を造り、橋を渡して路を通し、住せ給ひし神迹也。かくて數万歳の後、皇朝四十八世の女帝、稱德天皇の神護景雲元歳、釋勝道志願に依て、下野州二荒山を開き初しかへるさに、庚申山に攀登りて、彼三柱の太神を、親しくおがみ奉りき、と世の口碑には傳れども、今は七百十餘年の星霜を歷るまでに、胎内竇をうち過て、件の山の奥の院を、見きといふもの絕てなし。われ當國の鄕士として、間近く住るに、彼高嶺の奥だにも見盡めずは、莊客們に異ならで、耳怕をするものに似たり。翌は夙めて登山して、數百年なる蒙昧の、迷ひを釋んと思ふのみ。各位も同意ならば、必相伴ふべし、といふに衆皆呆れ果て、辭齊一諫るやう、先生の武藝勇力もて、如右思ひたち給ひしを、理りならずとまうすにあらねど、件の山路はいと嶮しく、且谷川に渡しかけたる、自然の石橋虹の如く、苔滑にして進みがたし、と故老の口碑に傳へたり。加旃、彼山中には、木精あり。或はいふ、是數百載歷る野猫なり。その猛きこと虎の如く、その變化測るべからず。もし謬て山中に、迷ひ入るものあるときは、忽地引裂啖ふといへり。これらの事は先生も、傳へ聞せ給ひけん。さればとて露ばかりも、怕れ給ふべきにあらねど、君子は敢危邦に入らず、孝子は巖墻の下に立ずとかいふ、本文も候はずや。孝子の親を思ふのみかは、親たるものもそ

扠も件の庚申山は、乍麼なる魔所にて白日だにも、さばかり人の怕るゝにや。われは一切こゝろ得がたし。と詰れば鵙平眼を睜りて、おん身は他郷の行客なれば、縁故を得しらずとて、疑ひ給ふは疎鹵に似たり。こゝろ得の爲報まうさん、言長くとも聞給へ。抑赤岩庚申山は、下野州安蘇郡にあり。二荒山と相距ること、西のかた七里にして、こゝよりは路五里にあまれり。さればこの網苧の里より、ゆくこと十町あまりにして、前凸の山路也。既にして登ること、二十町にして嶺に至り、又下ること十町也。この所より銀山まで、一里の間水澤を傳ふ、路の苦辛はいふべくもあらず。かくて又登りゆくこと、大約三里あまりにして、庚申山中第一の、石門に至るべし。土俗これを庚申山の胎内竇と呼做したり。造化自然の石門にて、その廣きこと方十間、この處より進み入ること、二十間許にして、左右に建る大石あり。高サ各五六丈、その形二王の如し。(所云執金剛神これなり。左輔を密迹金剛といひ、右弼を那羅延といふ。正法念經、釋門正統等に見えたり)これ天工の至妙にして、鑿もて鏤れるに彷彿たり。これより奧へは人僉怕れて、絕てゆくもののなかりしに、近屬中居松原の村間、赤岩といふ地方に、赤岩一角武遠といふ一箇の鄕士あり。心飽まで猛くして、名だたる武藝の達人也。一日その門人等に告ていふやう、傳聞く赤岩庚申山は、千劍破神代に、稚日靈尊、素盞嗚尊、猿田日子、個三

ありて旅人を剝略り、或は猛獸妖怪變化に、可惜命をとらるゝもの、年には三人も四人もあり。この故に白晝といふとも、獨行はこの里より、鄕導の者を傭ふて、身の衞にせらるゝ也。さりけれども耕作に、暇なき里人等は、件の需に應じかたがり。僕は素獵戶にて、足緒の鵰平と問給へば、こゝらで知らぬものはなけれど、見らるゝ如く年老たれば、今は山野の挊了をせず、をさ〳〵旅人に傭れて、かの鄕導を仕れり。あの鳥銃はその折に、用心にもてるのみ。又圓竹の半弓は、武藝を特む行客の、導者を傭ひ給はぬも、必あの弓と箭を、買とりてもてゆき給へり。直の廉きを旨とすなれば、掛流しとかいふ類にて、いと不通束には見ゆれども、よく檠たれば矢頭狂はず。殊さらに弦と鏃は、いづれも眞物を用ひたり。おん身も亦庚申山の、麓を踰んと欲し給はゞ、導者を傭ふて將てゆき給へ。さらずは弓箭を携て、みづから衞り給へかし。鄕導者は六里の程を、鳥銃の丸と火藥と、火索も加て賃錢を、三百文と定めたり。弓箭の價もこれに同じ。そはおん好みに任してん。さばれ且く俟給はゞ、おなじ路へとこゝろざす、旅客もいで來つべし。不知案内なる崎嶇を、ひとりは要なき事にこそ。と辭せわしく說示すを、現八聞て冷笑ひ、そは然る事のあるかはしらねど、われも亦この年來、美濃信濃の深山路を、幾遍となく過りしに、導者を憑ず、弓箭も借りず。さばれ山賊猛獸の、患ひありとは聞ざりき。


網亭の茶店に現八
鴫平が舊話を聞く
犬飼現八



しかたに、戻るも獨路傍の、茅萱の露に袖濡れて、その夜を明魏山の麓なる、一白屋に曉す夜すがら、現八ふたゝび思ふやう、上野よりして武藏相摸へ、赴くは是順路なれども、去々歳の秋下總まで、はやゆきたればおなじ路也。此度は下野に赴きて、二荒山にも登るべく、なほ陸奥の盡處までも、足に信して索あるかん。吾四犬士は鎌倉なゞどの、繁華なる地はなかくに、歎ふて僑居すべくもあらず、と尋思をしつゝ次の日は、又遭坂まで立かへりて、高崎川をうち渡り、前橋、大胡、室深津、花輪、梅雨入の里を過るに、その行程は二日路にて、下野州眞壁郡、網苧と喚るゝ里に來にけり。秋の日ながら尙高かるに、五里も六里も過ばゆくべし。且くこゝにて憩ん、と思ひつゝなほゆく程に、その里盡處に茶店あり。檐下に吊せし賣草鞋の、間より見かへれば、一挺の鳥銃と、六七張の半弓を、傍の壁に並掛たり。こゝろ得がたく思ひながら、紐解く笠を引提て、凭几に尻をうち懸れば、あるじとおぼしき一箇の老人、ふりたる茶碗に汲とる煎茶の、生澁よりなほ涅みたるに、茶筌ものして泡たゝせしを、緣の離れし日光盆に、乘せていざとて羞るを、現八右手に取あげて、兩三吸喫ながら、廛後方を見かへりて、翁この弓鳥銃は、何の爲に掛たるぞや。と問へばあるじは進みよりて、いまだ知し召れずや。この處より五六里ばかり、庚申山のあなたまで、人煙はいと罕也。これによりて動すれば、山賊

勸盃、彼首の饗饌なゞどとて、招るゝ日の多きをもて、七月は過て八月さへ、既に半になりしかば、現八竊に焦燥て、頻に辭して起行の、准備に他事もあらざれば、門人等は留難て、錢を裒め銀に兌て、贈りて路費の資にしてけり。さる程に現八は、行裝を整へて、その詰旦門人等に、別れて東に歸るになん、なほ後に跟き先に立て、逢坂山のほとりまで、送りゆくもの多かりしを、やうやくに推留めて、終に袂を分ちしより、いそがぬ旅も急がれて、その日はゆくこと十里あまり、守山の里に宿りを投めて、なほ行とゆく程に、既に日を歷て、上野なる、遭坂の里まで來にけり。三とせ以來三回まで、この山里を過れども、あふ坂は只名のみにて、思ふ友には遭ふよしもなし。こゝよりして荒芽山までは、路の程も遠からず、切ては旅の心やりに、姥雪夫婦が戰沒の、迹を見ばや、と雲のゐる、明魏山邊に進み入ること、半日にして既にはや、件の山のほとりなる、彼燒迹に來て見れば、草は彼此に生繁りて、半幹焦れし常盤木の、枝を生じ葉を布て、復榮るも多かれど、有つる家は迹を埋めて、ふたゝび住る人もなし。忠臣孝子、義姑節婦も、時に遇ねば人にも知られず。主の爲に身を殺せども、祀られぬ鬼となる迄に、旅魂はなほも吟呻ふらん。いと憐むべく惜むべき、これを思ひ彼を思へば、別れし友こそなつかしけれ。とひとりごちつゝ徘徊しつゝ、惆然として嗟嘆に堪ねば、暮ぬ間にと舊來

て口を餬へば、名利を樂ふものに似たり。老幼順逆世に多かる、人の命は期しがたし。わが命數のはやくも竭て、この儘身まかる事あらば、四犬士後に傳聞て、うたてやな現八は、誓に背き約を違へて、相別れしを幸ひに、年來京師に住ひして、一己の名利を謀りにけり、といはれん事は疑ひなし。しからんにはわが爲に、誰か然らずといひ釋くべき。さでは死しても朽がたき、千載不滅の遺恨也。いでや當所を立さりて、ふたゝび東に赴くべし。西國四國も見まほしけれど、おもふにわが友達は、みな關東にて生れたり。遠く京師をうち越て、西に留るべくもあらず。そが中に犬江親兵衛は、神隱しにあへりといへば、去々歳この地に來つる比、遠きは大和の葛城大峯、近きは愛宕、高尾、鞍馬、深山々々に攀登りて、索ねしかどもその甲斐なかりき。此度はいかで東海道を、眞直に鎌倉へと思へども、伊勢尾張より東には、諸侯おのおの割居して、新關の多かれば、旅人の往還不便のよし、その聞え定か也。かゝれば、又近江路より、中山道を下るべし、とこゝろひとつに思ひ決めて、扨門人の甲乙には、舊里なる親族より、猛に招るゝ一義あり。よりて東國へ歸る也。この義を遺なく傳へ給へ。といふに人々驚きて、辭を盡して禁めしかども、留るべくもあらざれば、事の趣云々と、同門們に傳る程に、現八は一日もはやく、立去んとのみ思へども、衆皆別を惜みつゝ、留別の筵席を開く、是首の

留中の、諸雜費を省くべし、と思ひにければ如此々々と、親しき人に相譚ふに、舊を捨て新に、附くはなべての習俗なれば、その人早に承引て、これ彼弟子を汲引るに、初は一兩人なりしも、武藝の世評よき隨に、門に入り教を請ふもの、數へ盡しがたくなりけり。この時にしも現八は、久しく留るこゝろなければ、人勸れども居宅を求めず、貸座敷とかいふものの、庭を武藝の稽古所にして、雨ふる日にも請るゝ隨に、弟子の宿所に赴て幾人となく教けり。勢ひかくの如くなる、現八はこゝろともなく、京師に杖を駐ること、既に三年に及びけり。時に文明十二年、(小文吾が市川より鎌倉へ赴きし翌年也。)そのふみ月も循り來て、星祀る比になりしかば、過にし事のみ偲るゝ、現八はある旦、とく起出て思ふやう、われ四犬士に別れしより、只顧索遣んとて、東西百里を往復りして、圖らず京師に逗留の、日數つもりて今ははや、中一ト歲を隔たり。爾るに昨宵見し夢に、犬塚信乃は大八の親兵衛を扛抱き、犬山、犬川、犬田共侶、わがこの旅宿にたづね來て、最大恨みしを、いひ解んとしつるとき、枕に響く鐘の音に、驚覺て數れば、夜は倘丑の時なりき。佛說に聞く泡沫夢幻、賴むに足らぬ事ながら、遺憾しさも限りなく、さればとて又快からず。彼五犬士は異姓の兄弟、骨肉に優す刎頸の、交りを虛にして、恨みらるべきわれならねども、路費乏しき故をもて、旅宿ながらに弟子を聚へて、武藝を教え

り、安房までたづねて邁くもあらず。さるにてもこの舊里へ、還りたらんと思ひし犬田が、けふまで親にも里人にも、信なきは、甚不審し。かの折敵に撃れはせずや。曳手單節はいかにぞや。思ふのみにて問ふよしもなき、こゝもわが身の敵地也。且武藏まで退きて、又ともかくもすべけれ、と思ふ心を肚に問ひ、腹に答へて身を起せば、秋の日影の短くて、はや黄昏になる物から、その宵の出船に便り求めて、終夜漕れて江戸に赴き、なほも心は遺りたる、信濃路投て日に歩み、夜に宿りつゝ草まくら、急がぬ身にも旅馴し、袖は露けき小篠原、岐岨の御坂もうち過て、憂みの末は友人に、あふみと聞も頼しき、峯の楓葉色はませども、花の洛に近づきぬ。とてもこゝまで來し甲斐に、王城の地を踏ずして、又何國へか赴くべき。行客聚ふ都會の地は、人を索るに便りあらん、と思へば心いそがれて、軈て京師に赴きつゝ、旅宿を定めて日毎々に、名所古迹をたづね巡るに、應仁以來兵火に荒けん、京としいふも名のみにて、聞しには似ぬ光景なれども、都の手態はさすがに愛たし。されば文學武藝の師の、門戸を張るもの里巷に多かり。これにより現八も、早晩に相識いで來て、迭に訪つ訊れつゝ、今玆は暮て立かへる、春を旅宿に迎へけり。登時現八思ふやう、限りある路費をもて、限りしられぬ旅寢をせんに、遠謀なくは後悔あらん。われも年來習得たる、拳劍奪法を人に敎へて、口を餬はゞ逗

たなさに退きて、四鄰の人に訪るに、その人答て、さればとよ、小文吾どのは六月下旬に、辭家して遂に歸らず。老父は安房の親族許、呼とられしとて彼地にをり。かゝるゆゑに奴婢等には、身の暇をとらせしより、見給ふごとくなりにたり。といふに現八こゝろを得ず。爾らば古那屋の通家なる、市川の犬江屋には、異なることもあらずや。とふたゝび問へば頭をうち掉り、否、犬江屋はこゝにもまして、幸なし事の續きたり。しらでやをはする房八夫婦は、六月の日子身まかりたるに、搗て加えて穉兒は、神隱しにやあらんずらん、往方もしれずなりしとぞ。かゝればお懐妙眞どのは、こよなき歎きに身を措かねてや、これも安房なる親族許、赴きしとて今にかへらず。留守には篙工等と耳疎き、婆々のみありと聞えたり。いと痛しきことならずや。と告るに驚く現八は、それはく。とばかりに、愀然として退きかねしを、かくてもあるべき事ならねば、なほ外々しく應をしつゝ、人なきかたに立出て、ついゐて獨思念をするに、古那屋の叟も、妙眞刀自も、安房へゆきしは親族ならで、里見殿に徴れしならん。さらば兩箇の翁媼は、後安きに似たれども、最心もとなきは、往方もしらずなりしといふ、親兵衛が事になん。よしやこゝより市川なる、犬江屋へ赴きて、尋問んと欲するとも、あるじはをらぬ留守の宿に、聾詭たる篙工、耳疎き、薪水の婆々等が何を知るべき。しか也とてもわれひと

危難に、荒芽山路を越かねて、踏留りては立塞り、追來る敵を防ぐ程に、道節、信乃、莊助等と、別々になりしより、終に迯に往方を知らず。やうやく追兵を殺退けて、其處ともわかぬ深山路に、迷ひくらしつ、辛くして、信濃を投て兩三日、雖邁々道節等に、絕て得あはずなりしかば、心いよ〳〵安からぬ、肚裏に思ふやう、吾曹は幾回となく、必死の厄に遭ふといへども、神明佛陀の護らせ給ふ歟、又瑞玉の奇特に依れる歟、この身に恙なきを思へば、犬塚犬山四箇の友も、撃れしものはあるべからず。然ればとて信濃路に、誰が相識のありといふ、心當はなきものを、素より往方を定めねば、何處を投て索あふべき。進退既に度を失ひぬ。そが中に小文吾のみ、鬼手單節を相伴て、脱れて故郷へ還りけん、往方は定かに知られたり。なほ五六日この地を索ねて、三箇の友に得あはずは、且行德へ赴きて、犬田に報て相謀ん。これより外に了簡あらじ、と尋思をしつゝ彼此に、旅宿を求めて索しかども、一犬士にだもあふことなくて、七月も中浣になりしかば、やうやくに思ひ絕て、下總を望てゆく程に、その月の廿ケあまり、三四日といふ日子に、はや行德へ著とそが儘、案内知たる事なれば、古那屋の門より入らんとしつゝ、と見れば思ひがけなくも、戸を閉鎖て人影はあらず。こはいかに、と訝りながら、抜たる戸機に隻眼をよせて、裏面のやうを覗ふに、全く空房になりたるなれば、せんか

らん。そこらに用心し給へ。と推禁めつゝ囁きたる、人の實意に小文吾は、忽地曉り且驚きて、遂に望を失ひつゝ、この日もむなしく旅宿にかへりて、獨つら〳〵おもふやう、けふ里人にいはれし如く、現鎌倉の管領は、かの千葉氏の恩家にて、水火迭に相拯ふ、中にしあれば、常武が、撃れし事も告られたらん。爾るも自胤邪正を辨ぜず、是非の境に惑ひを取りて、なほ犬坂を憎しと思はゞ、彼胤智が事のみかは、わがうへさへに云々、と告て追捕を頼れけん、その議なしとは決めがたし。然るをこの地になほ日を送らば、勞して功なくわがうへに、凶多くして吉少し。心盡して索る人に、逢んよすがもなき里に、遺憾しとは思はねども、去歳より三たび三方へ、別れし知己は男女七人、そが一人にもあふこと難く、又何方をこゝろ當に、翌より索あるくべき。世にもの思ふ人はありとも、秋より秋に十三箇月、一日も胸は休からぬ、われにますものあるべしや、とおもひ沈みて鄙語の、獨商量果しなき、膝を抱きて消す日の、壁に向ひて幾遍か、歎息の外なかりしを、忽地佗と思ひかへして、日本六十六箇國、廣しといふとも限りあり。凡舟車のかよふ所、足跡の至る所、東西南北四維八荒、索巡らば必遭ん。遲速に拘ることかは、と志を奬せば、胷の欝也蒙也稍霽ても、慰めかねし窻の月、明なばこの地を立去んとて、用意をしたりける。案下一生又說一生、犬飼現八信道は、去歳の七月七日の

り。且曳手等を亡へども、亦一犬士を獲て件はゞ、さばかり面を興すに似たり。吁然也、と腹裏に、思ひ決めつ、引提たる、笠を翳して遽しく、寺門を出て、薪樵る、鎌倉を投ていそぐ程に、次の日の晡時に、既に彼地に着しかば、米町なる客店に、草鞋を解て逗留しつゝ、日毎に巷に立出て、或は茶店、尻掛酒舗、衆人聚ふ所にて、世の雜談に耳を攲、又假初に名もしらぬ、人と物いふ言の次に、こゝらに名だたる女田樂、旦開野といふものあらん。そが宿所は何處ぞ。と外々しく諮るに、知らずと答るものもあり。又復讐の爲體を、傳へ聞たるものもあれど、忌よしありとて定かに告ず。そが中に一箇の老人、小文吾が問ふに答て、索給ふ旦開野は、許多の人を殺せし折、武藏の石濱より逐電して、ふたゝび當所にかへり來ず。おもふに石濱の千葉殿は、管領家と疎からねば、こゝへもよしを告られけん、その沙汰はまだ聞えねども、渠もこの義を察しなば、その身の追捕を怕れもせで、薪を抱きて火に近づく、この地へ歸り來べくもあらず。虚實は定かならねども、彼旦開野は女子にあらず。親の冤家を擊んとて、穉き時より姿を變て、幾萬人を欺きたる、よに凄じきものぞとよ。この地に忌のあるよしは、件の情由によりて也。おん身はさりとも知らずや有けん、漫に渠が宿所を訊ふとも、今はその甲斐なきのみならで、もし惡棍に疑れて、支黨也とて誣られなば、いひ解くにいとむづかしか

なりぬ。かゝれば今さら彼地に到りて、索遭んと欲するとも、船に契して遣せし劍を、求るに似てその甲斐の、亦あるべくもあらずかし。かゝれば何處を心當に、件の四箇の友を索ん。況て曳手單節等が、存亡はなほ知るに由なし。加以日ごろより、心にかゝるは墨田河にて、ほゐなくも別れたる、犬坂毛野が事也けり。われは及ぬ膽勇智略、多く得がたき少年なるに、そが生れたる里の名の、犬坂をもて氏としたれば、彼人も亦吾曹と、同因果の犬士にあらずや。この推量に違はずは、形狀牡丹の花に似たる、痣もあらん玉も持てん。問ずは知るよしなきものを、と思はざりしにあらねども、わが身危窮の折なりければ、その義に及ぶ暇なく、別れて渠も往方は知れず。遺憾しさに、就て又、とさまかうさま思惟るに、鎌倉はこれ犬坂が、成長りたる里にして、母親の墓あるよしなれば、かの折竊に鎌倉へ、立かへりしことなからずやは。縱彼處に潜び難て、今は他鄕へ移しとても、兩三月の程なれば、われ且彼地に赴きて、しのびしのびに里人等に、搜りも問はゞかの人の、在處を定かに知るよしあらん。再會の日に意中を告て、わが推量に違ことなく、同因同果の犬士たる、證据分明ならんには、去歲より空に送りたる、月日もこゝに虛ならず。孤雁の更に侶を得て、北地に歸る歡びあらん。かくて犬坂共侶に、又犬塚等の四友を索て、環りも會ば石濱に、抑留られし吾うへを、報るに正しき證人あ

第六輯　巻之五　上冊

第五十九回

京鎌倉に二犬士四友を憶念す
下毛州赤岩庚申山の紀事

再說、犬田小文吾は、依介夫婦に辭し別れて、市川の宿を出しより、且行德へ立よりて、亡兩親に赳行の、告別をせばやとて、笠ふかくしていそぐ程に、はや香華院に來にければ、準備の樒を携て、寺門に入りつゝ、墳塋戸なる、手桶索ねて汲揚る、阿伽井の吊桶絙弛み、漏りてはいとゞ袖濡らす、歎きの霧の籬睒と、外の卒都婆も偲るゝ、憂事聚ふ身ひとつの、心づくしをいへばえに、巻柏ならぬ雨後の苔、洗ひ流して手向の水に、うつれる影もなき人の、名をのみ遺す石塔に、うち對ひつゝ額づきて、回向に時を移しけり。扠あるべきにあらざれば、稍身を起して、外面へ、退き出んとして思ふやう、萬里の逆旅に赴きながら、投て往方もまだ定めねば、繫ぬ舟の檝を絕て、よるべの岸もなきに似たり。曩に犬山犬塚等に、別れし折は信濃路へ、走りにけんとおもひしかども、曳手單節に逢んとて、ひとり東へ還りしより、丼月にはや

に、こゝにも石塔を建べき事と、月忌年忌に當る毎に、二親の追薦讀經を、叮嚀に賴み聞えて、物多く布施しけり。かくて小文吾は、次の日より喪に籠りて、七日〳〵の忌日毎に、此度行德に建たりける、親の墓に詣る程に、はやくも五十日の中陰は闋けり。既にかうと思ひしかば、依介夫婦に告別して、今こそ汝達わがうへをも、おもふよしをも妙眞刀禰に、巨細に告て慰めよ。小文吾かくて候へば、親兵衛も恙なかるべし。八箇の犬士相遇ん日に、見參に入るべき也。みづから愛して俟給ひね、と傳へよかし。といひ果て、往方も定めず出てゆくを、依介夫婦は留めかねて。里盡處まで送りけり。畢竟小文吾、市川の旅宿を去て、又甚麽なる說話がある。そは次の卷に、解分るを見て知らん。

ひしを、僕に妻せ給ひし、その名を水澪と呼れたり。おん目を給はり候へかし。といふに小文吾頷きて、名をのみ豫て聞しかど、よき折からに對面して、よに憑しく歡びも、一ト入にこそ候へ。重縁といひ、相應しき、當家の新婦になり給へば、沼藺が事さへ思ひ出て、妹におへる心地ぞする。勉て内を治め給へ。とこゝろ隔ぬ應答に、水澪は顔うち赧めて、先小文吾が安否を諮ね、且文五兵衛が悼亡を述て、又妙眞が薄命さへに、辭すくなくいひ出れば、依介霎時沈吟じて、郎公は何と思召らん。こゝまで還り給ひし甲斐に安房へ赴き給はずは、爹公の墓へ詣がたく、妙眞さまをも慰がたかり。一トたび彼處へ參り給はゞ、里見の殿のおん歡びも、さこそと想家らるゝなれ。僕おん伴仕らん。近きに思ひ立給ひね。といへば小文吾頭を掉て、いかでかは安房へゆくべき。里見殿の恩徳を、仰げばいよ〳〵高けれども、同因果の友具足せず。况てわが預りたる、曳手單節を失ひながら、その存亡をいまだ得しらず、恥有て且功もなきに、親の墓參のせまほしきとて、阿容々々として彼地に到らば、友を棄、義に背きて、榮利を急ぐ、と人僉いはん。われ亦思ふよしあれば、且くこゝに逗留して、親の中陰を送るべし。さりとて竊に消息して、妙眞どのへ報知せなば、後々までも侘と怨ん。必多言すべからず。と禁めて中の比及より、笠ふかくして行徳なる、香華院に赴きつ。廼住持に對面して、文五兵衛が菩提の爲

應をしつゝ間なる、簀戸を聊推ひらきて、半面を密とさし出すを、依介うち見て、やよ阿水澪、この春儞に預けたる、おん像見の金もて來給へ。これもてゆきね。と腰を撈りて、投出す鍵袋を、手長に取て遽しく、納戸のかたへ赴きつ、件の金をもて來にければ、依介これを受とりて、儞ち霎時こゝにゐよ。と留めて小文吾にうち對ひ、既に傳へまうしたる、こは老家公の像見なり。數檢めて納め給へ。といひつゝ軈てさしよするを、小文吾とりてうち戴き、去年蜑崎照文ぬしが、里見殿の賜ものとて、贈られたる沙金すら、今なほ過半あるなれば、盤纏に物を缺ねども、慈愛を籠られたる、親の遺財と聞くからに、なほも異日の要に充べし。さばれこの中なる十金は、和主に與へられたるならずや。然るをそが儘置れしは、律義に稱ふ心操、感ずるにあまりあり。先々といひかけて、包を解きて十金と、更に又十金を、加えて依介にわけ與へ、この十金はわが親の、遺言に任するのみ。又十金は某が、墨田河にてゆくりなく、資を得たる薄義也。受收め給ひね。といふを依介聞あへず、そは思ひがけなき事也。文五兵衞さまの賜りし、十ひらの金はとまれかくまれ、この十兩は要なし。と辭ふを小文吾推返しつゝ、辭を盡して薦めしかば、依介はやうやくに、受戴つゝ妻もろ共に、歡びをなん述にける。當下又依介は、妻を側に進まして、喃犬田の郎公、こは嚮にまうしつる、妙眞さまの姪女、船橋に候

く、睡れるごとく息絶給ひぬ。佛滅涅槃の會日に稱ふ、終焉はいと愛たし、とこゝろある人はいひけり。此よし守へ聞えあげられしに、葬りの事、七々の法筵さへ、大かたならず沙汰し給ひき。僕は二月下旬に、彼地をたちて還るとき、妙眞さまの心ぼそげに、かき口説給ひぬるを、思ひ出ても痛しきに、くだ〳〵しうて盡しがたかり。みづから察し給ひね。と報るをうち聞く小文吾は、愀然としてしばたゝく、眼包に餘る涙の雨に、猛きこゝろもうち濕る、胸を敲きつ掻撫て、悲しきかなきのふまで、親の亡日をしらずして、なほ舊里に恙なく、をはするとのみ思ひし事の、夢と覺たる悔しさよ。いふ甲斐もなきことながら、去歳の七月曳手等を、故郷へ倶してかへりなば、かゝる憾のなからんに、身は石濱に囚れて、信すべきよしもなく、たまたまかへる遠廬潟、波のよるべや水江の、浦嶋子が七世の孫に、あへるにも似て慚愧後悔。人傳に聞くなき親の、御遺言こそ哀しけれ。縦名を揚家を起して、俸祿この身に餘るとも、なほ貧くて事奉る、親あるものにまさらんや。疎なりける年來の、不孝を宥させ給へかし。と勸解て、東にうち向ひつゝ、ゐますがごとく伏拜めば、依介これを慰めて、そのおん歎は理りながら、今は千歳いふとも返らず。先はや件の一包なる、像見を遞與まゐらすべし。といひかけ後方を見かへりて、水澪よ、水澪よ。と呼立れば、女房ははや次の間に、物かたらひを聞てをれ、

く、況て怨敵殘賊に、亡るべくもあらずかし。されば、一旦不幸にして、窮阨の中にありといふとも、八人具足したらん日に、里見殿に仕へまつりて、名を揚家を起さんこと、大かたは違ふべからず。愚按のごとくならざりせば、渠等は遠く父祖に優れる、未然の功德をとり來して、親を安らに養はるゝ、里見殿に値偶せんや。去歳の秋より國守の洪恩、奴婢さへこれ彼隷られて、坐して食ひ、織らで衣る、旦暮に不足なきのみならで、心地常ならざりし初より、名醫良藥何くれとなく、恩命をなし下さるゝ、冥加あまりて感涙に、袖濡らす日ぞ多かりける。然るを餘命を貪りて、此世の名殘を惜まんや。齡も既に六十にあまりぬ。よき死時と覺るに、倘小文吾が後に聞くとも、親の終焉にあはざりしとて、憾なせそ、と傳へてたべ。させる像見はなけれども、行德なる家を售たる、一ト包の金こゝにあり。小文吾が恙もなくて、彼友達と共侶に、かへり來る日のあらんには、長き旅宿に借財の、債なンどもなからずやは。この中なる拾金は、和殿へ紀念に進らする。その餘はすべて小文吾が、物にしあれば時至るまで、和殿に預置くべきぞとて、遺言細やかなりければ、應するのみ慰めかねて、塞る胸の苦しさに、立まくしつゝ見かへれば、側にをはせし妙眞さまも、涙に咽ぶ泣聲を、袖に包みて立給ふ。この日よりして看病に、逗留一旬あまりを經たる、その二月の十五日に、文五兵衞さまは苦痛もな

へ進らせ給ひつ。三十金は里の貧民、乞食牛馬に至るまで、遺なく施行に引給ひぬ。人僉こよなき功德といひけり。此は是去歲の秋、九月中浣の事になん。是首も彼首も思ひのまゝに、事果たりと歡び給ふ、文五兵衞さまはさらに又、この市川に立より給ふを、妙眞さまは待つけて、かの夥なる從者を、相將て安房へ還り給ひき。是よりして後、文五兵衞さまは、月ごろ心機の疲勞にや、老病漸々に身にそひ給へど、然とて苦惱の氣色もなく、臥給ひしより枕あがらず。このよし守に聞えしかば、醫師に命じて療養の、術を盡さし給へども、命數既に限りあればや、病むとはなしに瘥り給はず。妙眞さまは駭き憂ひて、等閑ならず看とり給ふに、賴みすくなく思はれけん、この春二月の初旬に、こゝへ飛脚を立さして、かう〳〵となん告給ふ、おん消息に驚きて、物とりあへず飛脚と共に、日ならず安房に着しかば、妙眞さまの呼入れて、なほ詳に告給ふに、胸はいよ〳〵安からず、病牀に近づきて、ことのやうを訊まうせしに、文五兵衞さま聞給ひて、依介どの歟、よくこそ來つれ。誘こなたへ、と間近く寄らせて、枕を擧て宣ふやう、某老病身に逼れば、對面も此度を限りなるべし。わが兒小文吾、孫親兵衞が、存亡も得しらずして、長き別れになりなん事の、ほゐなきにならねども、つら〳〵思ふに彼者共は、伏姬うへに過世ある、八行八字、八犬士の、隨一人とおほゆれば、鬼神も敢害ふことな

件の從者をも、逗留中とゞめ措て、先船橋へ飛脚を遣し、件の姪御を呼とりて、云々と示させ給ひ、扠僕を故の親方、房八さまの遺迹になされて、姪御の水澪を妻し給ひ、村長へはありつる儘に、房八沼藺は世をはやうして、臘孫の大八は、神躱しにやなりにけん、出にし日より往方しれず。かくまで幸なき吾儕に侍るに、いつまで世帶を執賄ふべき。されば依介を養嗣にして、犬江屋を讓り侍りぬ。吾儕は安房の親族許、兩三年杖をとゞめて、浮世をやすく送らん、と思ひ決め侍るかし。年なほわかき夫婦のものを、賴み奉ると聞え給ふに、村長どのも四鄰の人も、いかでか異議に及ぶべき。悼むものあり、祝ぐものあり。授受を提撕て、絆立地に整ひにき。是併妙眞さまの、おん胷廣き洪恩也。絆果て文五兵衞さまは、行德にかへらせ給ひつ。これも亦村長とのへ、小文吾はしらるゝ如く、市人の所爲を嫌へば、親の迹を嗣べくもあらず。渠は近屬鎌倉へ、よすが求めて赴きたれば、かへり來ん日の測りがたきに、已は既に老髦ひて、活業も懶くなりぬ。よりて安房なる親族に、身を任せんと思ふのみ。就て客店の家扶、屋庫共に、望る人に沽遞與てん。この義をこゝろ得給ひね、とこしらへ給へば異議もなく、しかるべしとぞ答らる。扠望る人早にいで來て、商量既に事成しかば、沽劵の金は百あまり、五十兩獲給ひしを、そが中百金遺し留めて、二十金は三世の父母、幷に房八沼藺等が爲とて、近き寺々

迹に立べきぞ。儞が年來老實なる、こゝまで伴を致したる、心操に見どころあり。勉て家を守れかし。船橋は妙眞が親里で侍れども、二親世を逝給ひしより、今はさしたる親類なし。只水澪といふ一箇の姪あり。いまだよすがも求めずとぞ。年來疎遠なるものから、親き血すらの事にしあれば、儞に渠を妻すべう、思ふはいかに、と問給ふ。思ひがけなく懇切なる、この告言に膽のみ潰れて、果敢々々しくは應も得せず、畏りて候ひしに、文五兵衞さまの宣ふやう、妙眞刀禰には佳姪あり。われにはさる親族なきに、とてもかくても小文吾は、市人になるべくもあらぬを、他し人の子を養ふて、古那屋の遺迹を立るも要なし。庫をも家扶をも沽却して、後安くすべう思へば、儞ははやく立かへりて、件の用意をせよ。彼舵九郎が支黨の、いひ立たる事なからずや。これもこゝろにかゝる也。俺們は思ふよしを、守に聞えあげ奉りて、推續きて迹よりゆかん。こゝろ得たる歟、と繰返しつゝ、諭し給ふに涙こぼれて、言承しつゝその詰旦、ひとりかの地をうち起て、日ならずこゝにかへり來つ、又行德へも赴きて、文五兵衞さまの口狀を、村長どのに傳へしに、彼處は特に穩當にて、この市川も舵九郎が、支黨はをらずなりたり。かくて一旬あまりを歴る程に、文五兵衞さま妙眞さまは、里見の殿より隷させ給ひし、若黨奴隷多く將て、行幡にて還り給へば、里人驚き、且訝りて、巷に立て、觀るもの多かり。かくて

おん旨を、蜑崎ぬしに命じ給ひし、その折に大塚なる、事の趣聞えしかば、さらに又驚き給ひて、しからんには十一郎は、丶大法師に再會して、犬塚犬川四犬士の、存亡定かに撈問ふて、恙なきや否や。吉凶共に報申せとて、此度は究竟の夥兵五七名を、行若黨に打扮して、蜑崎ぬしに隷給へば、文五兵衛さまも亦、拙郎と孫の往方を索ん。お伴に召れ候へとて、只管早り給ふになん、妙眞さまも共侶にとて、身の暇を乞ひ給ひしを、里見の殿の許し給はず、志はさることながら、行歩不便なる老人と、婦女子なンどが果しなき、旅宿をせまく欲するは、勞して功なきのみならで、是禍を釀する也。十一郎を遣せば、安否をしるよしなからずやは。こゝにて便をまちねかし。文五兵衛は神餘の忠臣、那古七郎由武が、弟なるよし傳へ聞たり。爾らば又行德へ、かへりて市の活業するを、本意とはせざるものなるべし。妙眞と共にこゝにおちゐて、その子の參るを樂みに、靜に老を頤へかし。宜く扶持して得させんずとて、おん目前に召出さして、みづから慰め給ひしかば、文五兵衛さまも、妙眞さまも、只感涙のみさしぐみて、御前を退出給ひにけり。これは是去歳の秋、七月下旬の事になん。この故に起行の、願ひを思ひ絶給ひぬる、妙眞さまは、文五兵衛さまと、竊に商量し給ひつゝ、一日僕を招き寄て、辭如此々々と示させ給ひ、かゝれば俺們兩人は、この地の逗留限りしられず。よりて犬江屋の船家扶は、僑を遣

は格別にて、及ぶべき事にはあらず。しかはあれども恙なき、命めでたく還らせ給ふを、かう伴ひまゐらせたる、僕さへに面を起す、歡びにこそ候へ。とその祝壽を述しかば、小文吾聞て、さればとよ、圖らず和主の資によりて、舊里近く歸り來ながら、隻時親に面を見せずは、又隻時の不孝にこそ。とく行德へ赴きてん。草履一雙借し給へ。といひつゝ驪て身を起すを、依介急に推禁めて、なほ報遣せし事しもあるに、且くおちゐて聞給へ。噫、神ならぬ身の何事をも、知らでをはする歎きの種を、まうし出るもうれはしく、傍痛き所爲ながら、いはで叶はぬ一ト條は、老家公の事なりかし。といふに小文吾胸うち騷ぎて、そは何事ぞ、心もとなし。とく〳〵告よ、いかにぞや。とせわしく問れて鼻うちかみ、嚮にも言の緒を、とき出したることながら、文五兵衛さまは大塚なる、縁由を知んとて、安房に赴き給ひつゝ、妙眞さまに對面して、云々と報給へば、搗て加し愁歎悲泣に、涙ぞ共に進みける。是より先に里見の殿は、蟹崎ぬしの如此如此と、聞えあげ給ふにより、犬士達の奇異天縁、親方(房八をいふ)夫婦の勇敢義死、又坊さまの事までも、綷詳に聞し召れて、御感尤淺からず。かゝれば犬江親兵衛が、祖母妙眞をこゝに留めて、乏しからず扶持せよとて、奴婢兩三名冊かして、厚く欵待し給ひつゝ、いかで件の親兵衛が、存亡を見究めて、恙もなくは四犬士(信乃、現八、小文吾、莊助、)共倶、將て參れとある

て、けふまで歸り得ざりける、情由を知り給はねば、さこそは恨み給ひけめ。言益なきに似たれども、先や和主に物がたりして、當座の心遣りにせん。彼莊助は如此々々と、墓六龜篠が枉死の事より、犬川莊助が、主の仇を撃たる顚末、皴上兄弟、菴八等が事、又猾平が任俠、音音が孤忠、力二、尺八が精忠孝友、曳手單節が貞操節義、すべて犬山道節が、君父の仇を報ひし趣、犬塚犬飼等と、共に彼人を助け助られたる、荒芽山の奇遇、白井の大敵、そを殺脱て走るとき、曳手單節を相伴て、合鞍に乘したりける、馬を撃れしその日の怪談、遂に犬山犬塚等の、四犬士と相別れて、只管に彼馬の、迹を慕ふて日を累ねつゝ、遠く武藏の淺草わたり、阿佐谷畷を過りしとき、傷鎗野猪に撞見して、そを刺留たる綷の形勢、又並四郎船虫が、隱慝の事の趣、この一條に拘づらひて、石濱なる千葉の權臣、馬加常武に抑留せられて、去歲の秋より彼首にをり、命も既に危かりしを、犬坂毛野胤智といふ、義勇の少年の資によりて、辛く石濱を脫出つゝ、彼墨田河を步涉せし、事情は犬坂毛野が、乘たる船を追んと思ひし、大凡今朝の爲體まで、その要領をとり摘みて、辭せわしく說示せば、依介頻りにうち驚きて、覺ず太息を吻くまでに、感嘆しつゝ且く己ず。額に加し手を解きて、扠も危き事なりき。かゝるべしとは知らずして、きのふまでも疑ひしは、いと疎にて候ひき。俠を磨き義を守り給ふ、心がけ

扨もおん身は去歳よりして、何處にか居給ひたる。こゝらの事を云々と、傳へも聞せ給はずや。といふに驚く小文吾は、聞く事毎に歎息しつゝ、席の進むを覺ぬまでに、をさく〜耳を敧しが、忽地小膝を礙と拍て、いかなれば飛禽の、鶍の觜と齟齬ふ、思ひし事の仇なるや。去歳のその日に犬塚等を、送りて武藏へゆきたるとき、神谷河原のほとりにて、媼雪猾平と呼れたる、漁翁に邂逅しつゝ、犬塚犬飼共侶に、額藏の莊助が、冤枉の事の趣、具に聞て遺恨に堪ず。扨道傍に退きて、莊助を拯ふべき、謀を相譚ふ折、犬塚犬飼辭等しく、吾儕にはとく行德へ、還りて親にも人々にも、よしを告よといはれしを、聽ずしてわれ思ふやう、彼犬川は一トたびも、面をあはせし友ならねども、同胞に優す因果あらんを、その大厄を外にして、何處へとてか還らるべき。今行德は無事にして、こゝには火急の大事あり。先莊助を拯ふて後に、親に告、又人々に、告るとも緩遲きにあらず、と尋思をしつゝ力を勠して、終に犬川莊助が、必死を其處に拯ひ得て、かくは異姓の兄弟に、志を致せしに、豈料んや舊里にも、亦暴風の殃厄起りて、大八の親兵衛が、往方もしらずならんとは。彼處に一箇の犬士を得たれば、こゝに一箇の犬士を失ふ。これ塞翁が馬ならずは、亦彼牧家の牛に似たり。これらの故にわが父に、物を思はせ奉りし、この身の罪をいかにせん。その事果てもさまぐ〜なる、枉津魁にのみ係縁れ

藏を奪取て、戸田の河耳まで逃去りしを、陣番丁田町進、大勢を將て追蒐捕詰、あまりに大く早りしかば、丁田氏は、水中にて、敵の爲に撃れたり。然れども後詰の仁田山晋五が、新隊を以推捕籠つゝ、額藏信乃等を討捕たりとて、その首級共を梟られしに、この胥又辯者ありて、番卒等を砍仆し、件の首級を竊取て、往方もしれずなりしとなん、語るに膽を潰させ給ひし、文五兵衛さまのおん歎き、さこそと想像り給へ。とばかりにしておん身の存亡、定かに知れるもののなければ、なほさりげなき面色しつゝ、件の里に旅宿して、世の風聞を撈り給ふに、彼梟られたる首級共は、信乃にもあらず、額藏ならず。そが方人の戰歿したる、枯頸をもて云々と、守を欺く仁田山晋五が、伎倆也とて密々に、譏れるもののあるにより、疑ひいよ〳〵解はず。その假首級は何人なりし、と問給へども定かにしれねば、倘おん身にはあらずや、と思ふ心をいへばえに、いはで苦しく憂宿に、日をのみ過し給ふものから、おん身の安危も、彼人と、、大道德の往方すら、其處にしるよしあることなければ、逗留五日ばかりにして、その九日の夕つかた、行德に還り給ひつ。相譚敵もなきものを、膝を抱きて日を送らんより、妙眞どのにも、蟹崎ぬしにも、緣由を報んとて、おなじ月の十一日に、安房へ赴き給ひけり。さるをおん身に恙なく、圖らずこゝまで相伴來つる、歡しさに就て又、ほゐなき事もいと多かり。

し折から、一朶の聚雲天引降りて、風凄じく沙礫を飛す、雲の中に物ありて、磁石の塵を吸ふごとく、忽然として坊さまを、はや中天に卷登しつ。又舵九郎を卷颺て、臀より鳩尾まで、破竹の如く引裂たる、軀を撻と墜されたり。かゝれば思ひがけなくも、强敵亡滅たれども、緊要なる坊さまの、往方もそが儘しるよしなければ、妙眞さまのおん歎きは、喩るに物もなきを、蟇崎大人も、文五兵衞さまも、思ふにあの親兵衞は、神躱しなどいふものにて、且く見えずなりたる歟。然らば往方のしれずといふとも、舵九郎と共侶に、殺さるべくもあらずかし。返さるゝ日を待給へとて、頻りに諫めこしらへて、その宵の宿りにいそがせ給ひし。この時に僕は、やうやくに息出たるに、幸ひに痍の淺かりければ、妙眞さまのおん伴して、そが儘安房に赴きつ。文五兵衞さまはその夜さり、市川まで還り給ひて、おん身の安否をしらん爲、夜船に乘て武藏なる、大塚へなん赴き給ふ。扠是までの一ト條は、はじめ僕はしらざりしを、程經て後に妙眞さまの、說示させ給ひしかば、かく具細なる言を得たり。さる程に文五兵衞さまは、次の日(十六日)の巳の時ばかりに、大塚に尋ゆきて、彼額藏どのとやらんを、里人等に問給ひしに、件の人は罪決りて、いぬる初のふつかの日に、庚申塚のほとりにて、刑戮せらるべかりしを、額藏か友達なる、犬塚信乃等總て三名、法場を閙して、卒川菴八、簸上社平等を斫殺し、はや額

て、衰弱に祟る推被嫐譚、妙眞さまの入夫にならん。なさずは岡の新墓を、發きて守へ訴て、辛きめ見せん、と手醐き難題。傍へに人のなかりしかば、縺れかゝるをいひ解難て、殆困じ給ふ折から、文五兵衛さま共侶に、蜑崎大人の來給ひて、是非をいはさず舵九郎を、搔攫み投懲して、綷濟たるに似たれども、後難料りがたければ、蜑崎大人の意見に任して、妙眞さまと坊さまは、且く安房へ伴れて、彼奴が毒氣を避んとて、その曛昏に睎しく、文五兵衛さまは坊さまを、背負ひ給ひつ、途までもとて、いと精悍しく送り給へば、僕は亦要用の、物多く納られたる、袱包を背にしつゝ、おぼつかなくも主從五人シ、宿所を出てゆく程に、埋伏したる舵九郎、夥計の惡棍許多將て、忽地路を横ぎりて、搦捕んと競ひ蒐るを、蜑崎大人の引受て、防戰ひ給ふになん、文五兵衛さま僕さへに、敵に當りて暇なき、黄昏時の大厄難、是鬱せ、額の舊痍、僕ははやこゝらを撃れて、生死も知らず仆れたり。さる程に舵九郎は、透を窺ひ妙眞さまの、抱給ひし坊さまを、搔攫走り退て、己がこゝろの隨にならずは、この孩兒を撃拗んとて、稱手の石を振揚たる、殘忍非道の壓狀盡しに、妙眞さまの歎きはさら也、蜑崎大人も、文五兵衛さまも、稍惡棍等を撃退げて、齊一其處に聚合給へど、はや保質をとられしかば、亦せんすべもなかりしを、さこそと嘲る舵九郎、再礫をとり揚て、坊さまを只一ト撃に、齏粉になさんとせ

る、褊室へとて案内をしつゝ、いと正首に欵待したる、あるじ態すらこゝろ得がたき、小文吾は彼此と、しばしば頭を回して、見れば原見し家ながら、妙眞は聲もせず、又大八の親兵衛も、何處ゆきけん見ることなければ、ふかく心に訝りて、とく問ばやと思ふ程に、依介は一土瓶の、飪に茶碗とり添て、小文吾がほとりにもて來つ、けふは皐月の猛暑にて、今茲の暑熱はじめなるに、船で煮る茶は鐵氣染て、渇を止むべくもあらず。且これを利し召せ。程なく飯を進らすべし。といふを小文吾聞あへず、否、茶も饌も欲しからず。大家は何處へゆき給ひたる、親兵衛をも伴れし歟。嚮にこゝらの爲體を、報んといひしは何事ぞや。と問へば依介小膝を進めて、さればこその事なれ。忘れも得せぬ去歳の六月、廿四日の事ならずや。おん身は深く契りたる、友達を送るとて、武藏へ赴き給ひしより、日數歴れどもかへり給はず。行徳にてもこゝにても、僉最大う待わびて、心もとなく思ひ給へば、彼、大道徳とやらんが、われ大塚へ赴きて、絆の要を見て來んとて、七月二日の夕舟に、乘りて走らし給ひしに、これも亦約束の、日數に違ふて信なし。この故にこそ行徳なる、老家公も妙眞さまも、胷安からねば蟹崎大人と、左やらん右やあらんとて、商量果しなかりけり。かくてその月五日の事也、おん身も豫てしりてぞをはさん、彼惡棍の舵九郎が、こゝの親方夫婦のうへを、いつの程にか嗅着

つ四ッとり添て、精悍しげに羞れども、小文吾は心にかゝる、犬坂毛野に別れしより、終に得あはずなりければ、本意なき事の限りもあらねど、値偶も別離も時あればや、亦いかにともすべからず。勢ひかくの如くにして、市川船に乘ながら、犬江屋へも立よらで、今行徳へかへらずは、親を思はぬものに似たり、と思へどもなほ思ひ難て、とさまかうさま深念をしつゝ、やうやくその議に任せしかば、依介は歡びて、軈て舟子に如此々々、とこゝろ得さしつ、いそがはしく、船を東へ推向て、なほ只管に漕せけり。小文吾は今依介が、行徳の事、市川の爲體、報べき事のありといひしを、とく聞ばやと思ふものから、人にはしらせぬよしなるを、强て問んはさすがにて、いとゞ心は安からぬ、わがうへさへに告かねて、ひとり不樂しく落つかぬ、船に任してゆく程に、その日午の比及に、はや市川に着しかば、依介は苞物を、荷主の河岸に水揚して、船を犬江屋の門邊に繫ぎぬ。當下篙工等は、舵を引揚、艣を掛藏め、笘を卷き、筵をたゝみ入るゝとて、諠聲高く散動にぞ、裡面よりわかき女房の、遽しく走り出て、只今還り給ひし歟。思ひしよりは早かりき。晝飯たうべて休ひ給へ。と勞ふて船の椀家具と、釜を引提てとり入るゝを、依介は、ややとばかりに、件の女を呼近づけて、水澪よ、稀なる客人あり。茶をも疾煮て、晝饌の、准備をせよ。といそがして、誘給へとて、小文吾が、先に立つゝ奧まりた

ち勸解て、齊一艣を推し櫂を操り、聲を合して漕ぐ程に、然らでも流るゝくだり船の、湍はいとはやく、追風はよし。瞬間に一二里ばかり、品革澳も見ゆるまでに、南をさして追せしかども、件の舟の往方もしれず、後よりは亦わが船を、追ひ來る敵もなかりけり。そのとき依介は、彼此を見わたして、喃古那屋の令郎公、親しく臨するごとく、篙工の衆の腕限りに、漕走らしてこゝまで來つれど、尋ね給ふ柴舟は、何處ゆきけん見えざるなり。おもふに彼は荷の輕くて、舟も亦細小ならんに、遙に先だちたるものならば、勞して功のなき技なり。その事は且思ひ捨て、僕等と共侶に、市川へ立よらせ給へ。行徳の事、市川の爲體を、報まゐらする義あれど、傍に人の多かれば、船中にては盡しがたかり。さらでも去歳よりけふに及べる、おん身のうへも聞まほし。僕等は昨夕の夜船に、乾鰯を千住へ積送りたる、戾船には大豆小豆の、炊易物を受とり來つ。けふこの荷主に遞與ねば、約束違ふて不便なり。先早飯を進らせん。湍たる衣を苞の上に、披きかけて乾し給ひね。いで〳〵。といひかけて、片隅焦たる木竈に、粗朶折燒て、茶を煎じつゝ、網に入れたる飯櫃の、蓋搔除て盛出す、燕脂殼塗の二荒椀、斑剝ても誠ある、心の堅地あらはれて、烟燒なる、油揚豆腐に、黏著たる浮炭を、拂ふ火箸も木の端賊。竹の節皿推すゑつ。葛西茄子は、紫の、灰後れたる糀粀漬、屁臭くなりぬ空腹の、飢にみ

はん。われは去歳より友の爲、又身にとりてもうち續きたる、大厄難に奔走しつゝ、剰このわたりなる、佞惡人に抑留せられて、命も旣に危かりしを、ある人の資によりて、やうやく脫れ出たれども、彼見よ追捕の兵等は、西の岸に立聚て、もろ手を抗て招く也。そは怕るゝに足るものならねど、わが再生の恩人は、嚮にこの流を漕下す、柴舟に飛乘て、みづから艣を取り推切て、南のかたへ赴きたり。われ彼人に問ふべき事も、いはまくほしきことさへあるを、あの儘にして別れなば、復遭んこと難かるべし。舟子等にとく分付て、件の船を追してたべ。われも伴艣に力を勠せん。やよとく〱。といそがせば、依介はこゝろを得て、やうやくに身を起したる、舟子等を見かへりて、皆の衆よ、今聞るゝ如く、この郎公は日ごろより、和主達にも噂をしたる、彼行德の犬田の大人なり。今朝未明より故ありて、仇に追れ、友を逐ふて、馮河をし給ひつ、思ひがけなくわが船に、乘せ進らせしは幸ひならずや。今より些し先の程、南のかたへ赴きたる、柴舟のあるぞとよ。こゝでは見えずなりたれども、衆骨折らば、追もや着ん。僉艣を推しね、やよ喃。と辭せわしくいそがし立て、みづから舵を取しかば、舟子等は犬田の二字に、いよ〱驚き、ます〱怕れて、誰かふたゝび異議すべき。俺們はこの春より、犬江屋にをる者共なれば、さる兄之公とはしらずして、大く無禮を仕りぬ。免させ給へ。とう

ば、行徳わたりの鹽濱に、成長たる水煉も、遂に追着くことを得ず、いとも難義に及びし折から、物幾苞か積登したる、大平駄の船一艘、千住のかたより漕來れり。小文吾は辛くして、件の船の舷に、手をうち掛て乘移れば、兩三箇の舟子共、駭騷ぎて諸聲ふり立、この竊盗奴が朝働きに、米物せんと歟、不敵さよ。打や括れ。と罵りて、左右齊一擊んとするを、小文吾はやく身を翻て、兩三四竿彼此へ、遣違したる艪櫂の正中、諸手に摚て捩倒し、叓聲かけて奪取る、櫂眞額に振揚て、撃拗ん、と疾視へたる、腕に携る一箇の舟長、睺たる聲戰して、やよ喃古那屋の令郎公、且く怒を鎭め給へ。と勸解つゝ只管禁めけり。この人は誰ぞ。其は下回に解分るを見て知らん。

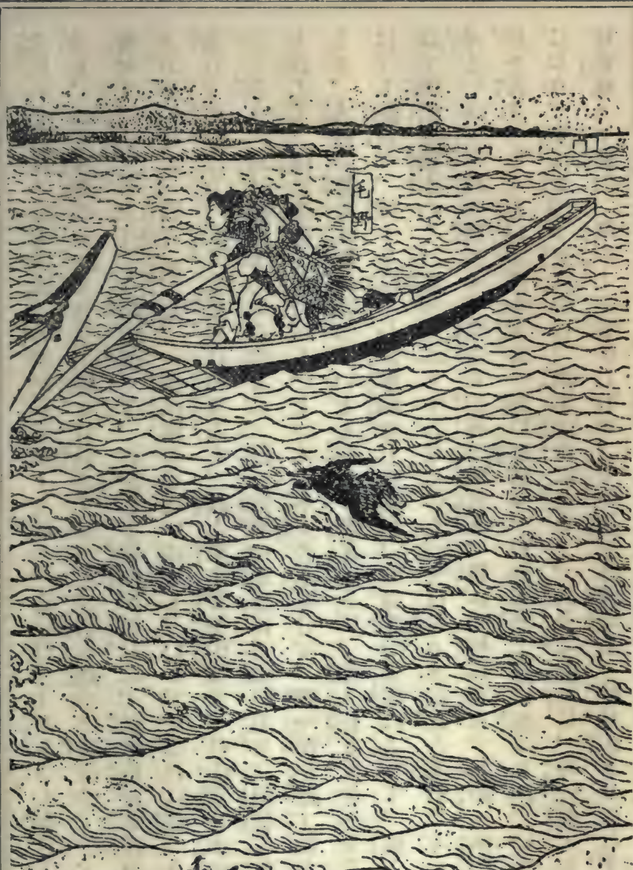
第五十八回

窮阨初て解て轉故人に遭ふ
老實主家を續て舊憂を報

小文吾は怒に乘して、篙工等を擊んとしつるとき、思ひがけなくわが親の、家號を呼て禁るものを、と見れば是別人ならず。豫て相識る犬江屋の、篙師依介なりければ、こは〳〵いかに、とばかりに、櫂を戞喱と投捨て、絕て久しき依介男、綷急なれば搔摘て、先賴むべき事のみい

海となる、坂東一の大河なるに、折しも降つゞきたる皐月雨に、水嵩増して波高く、淺瀬は絶てなきものから、岸に繫る船もやあると、おなじ河原を幾遍となく、ゆきつ戻りつせし程に、天ははかなくも明はなれて、遙に聞ゆる人馬の足音、塵埃を蹴立て轟々たり。毛野小文吾はこれを見て、追兵は既に近づきぬ。殺脱て陸をや走らん、又この河を渡さん歟とて、思はず水際に立在たり。浩處に千住のかたより、流に隨ふ柴船の、こなたの岸を離るゝこと、僅に一反ばかりにして、棹とり惱みたりけるを、毛野小文吾は齊一うち見て、天の祐と手を抗て、やよ婁時等、便船せん。こなたへ寄せよ。と招けども、頭をふりてぞ漕てゆく。毛野は機ばやく大きに怒りて、憑むに聽ぬことやある。貸ずとも今借んず。と罵りながら水際に添ふて、一町ばかり追蒐れば、舟人はなほあざみ笑ふて、棹とり收め艣を推立て、漕ひらかんとする程に、毛野は閃りと身を跳らして、一反許隔りたる、舟へ發動と飛入たり。舟人これに駭き怒て、棹搔取て撃んとするを、物々しや。と引外し、怯むところを蹴仆して、足下に楚と踏居て、漕戻さんとて艣を推せども、箭よりも早き出水の勢ひ、進退自由ならざれば、思ふにも似ず推流されて、川下遠くなりまさるを、小文吾うち見て、婁時も得堪ず、諸肌袒ぎて單衣の、袖卷込つゝ兩刀を、挿たる儘に水中へ、跳入り拔手を切て、泅着んと早れども、流烈しく波高けれ


船を逃人く小文吾舊故ふ邂逅も
小文吾


毛野

犬田ぬし躊躇ふことかは。吾儕が肩にかゝり給へ。といひつゝ背をさし向けて、その身より二岌も、いと大きなる小文吾を、輙く背負ふて徐々と、索を踏つゝ渡りゆくに、自若として面色變ぜず。小文吾ますく駭き感じて、むかし宇治河の戰ひに、彼橋桁を走渡りて、思ひの隨に大刀撃しけん、筒井明春、一來法師等也といふとも、いかでかこれに優べきやとて、不測の助けを歡びけり。かくて毛野は小文吾を、渡し果て刀を引拔き、件の索を水中へ、砍捨て、天うち仰ぎ、東ははやくしらみたるに、愁に陸地を走らば、城の追兵に殺留られん。墨田河をうち渡して、倶に進退を定むべし。といふに小文吾諾なひて、齊一踵を旋す折から、城中猛に騒しく、人數を集る大鼓の音の、いとも烈しく聞えしかば、兩人佗と見かへりたる、中にも毛野はうち點頭て、察するに、わが撃漏せし常武が、奴隷等の告訴によりて、城より夥の兵もて、はや俺們を獵索めて、搦捕せんとするなるべし。そは怕るゝに足るものならねど、なほ籠山縁連といふ、一箇の讐あり。今さら追捕の城兵と、戰ふて何にせん。誘給へ共侶に、いそぎて前岸へ渡すべし。といふに小文吾一議に及ばず。われも然こそは思ふなれ。いざとくく。と後になり、先に立つゝ足ばやに、墨田河原に赴きて、渡舟を索るに、舟一艘もなかりけり。こゝは武藏と下總の、堺川とぞ名にしおふ、その水上は逈なる、秩父山より流れ來て、末果しなき

と問れて毛野はうち頷き、某馬加許在りし程、夜毎に臥房をぬけ出て、城の要害、塹の淺深、こゝより脱れ去らんと思ふ、その處をよく見究めたり。誘給へ。といひかけて、亂れし髪を推紈ね、仇人馬加常武が首級引よせて髻を、結合して腰に著、裳を高く帶に夾みて、先に立つゝ諸折戸の、笠木に飛つき、手をかけて、閃りと外面へをり立つゝ、輙く鎖を捩斷捨て、やをら門扉を推開けば、小文吾はその神速に、感じて舌を掉ひつゝ、われは寔に及びがたし。と稱へて倶に馬加が、屋敷を出て潛やかに、うちつれ立てゆく程に、毛野は豫て見究め置たる、搦手の東の土手なる、樹杻深き中に到れり。この處は、塹の幅も廣からねど、なほ四丈あまりはあるべし。當下毛野は腰に著たる、准備の鈎索を取出すに、その索の端の處に、擊丸めきたる物を附たり。扠その物なき索の端を、こなたの松に結留め、件の丸を握拿て、前面の水際に斜に杻たる、楊を望て擲つに、寃違はずその幹へ、丸は三ッ四ッからみ着て、引結びたるごとくになりたり。さらば向へ渡さんとて、件の索に足踏かけて、走りて向へ赴くに、平地をゆくより易かりければ、小文吾頻に感嘆して、續きて渡らんと思へども、太くもあらぬ一ト條の、索には足を掛くべくもあらず、且呆れ且羞て、舊所に躊躇たり。毛野は迥にこれを見て、先からまへたる索の端を、なほも楊へ結留めて、ふたゝびこなたへ渡り來つ、

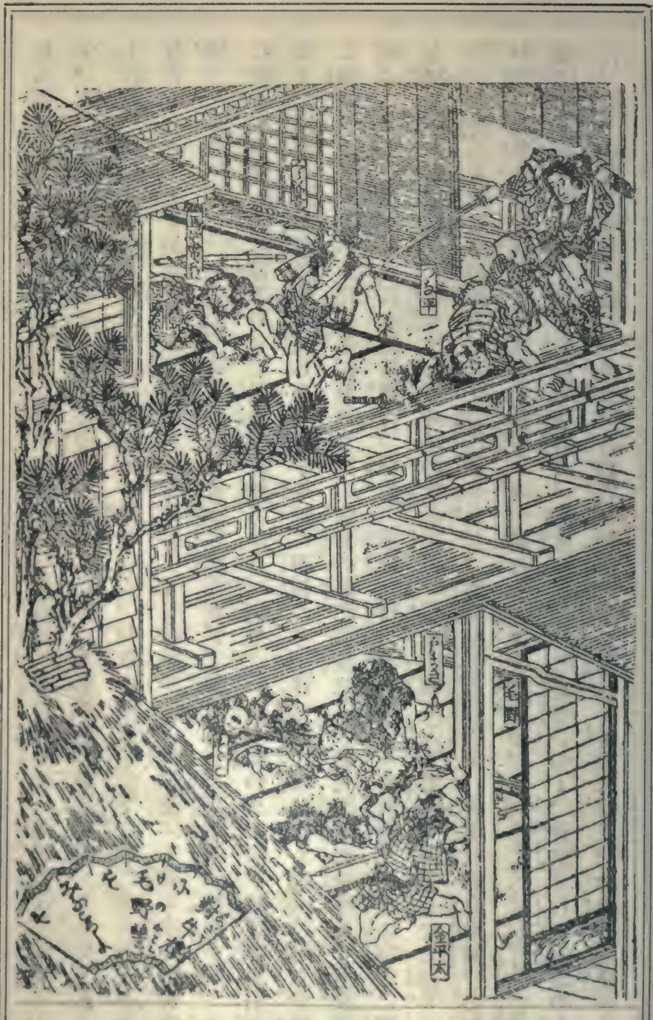
ば、密張孔目の男童等は、これに撲れて目子飛出、或は肩骨腰の骨、撲拗がれて自滅を取るもの、六七人に及びたり。残るも半死半生にて、蹉伏て手を合しつゝ、宥させ給へ、と勸解しかば、さのみは無益の殺生と、思ひ捨てこれを撃ず。ふたゝび樓上に走登りて、仇人の血をもて傍の壁へ、

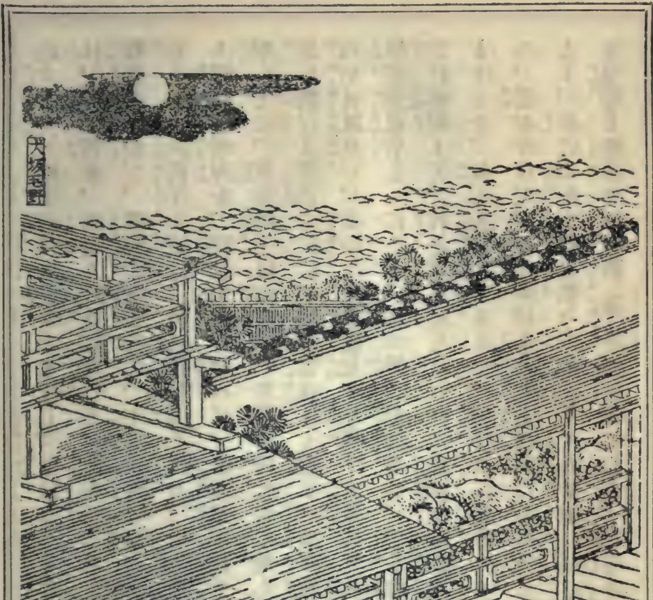
爲二父兄一鏖レ讐。爲二舊主一鋤レ奸。自レ今而後。知二君之爲一レ君。勿レ使二繻葛復倒一レ羂。

文明十一年己亥夏五月十六日、曉天粟飯原首胤度遺腹子、犬坂毛野胤智、十五歳書

と五十餘言を書留め、軈て馬加常武が首級引提て來つる也。と息吻あへず説示せば、小文吾は聞く事毎に、頻に感嘆の聲をたゝず。われ初よりその言と、行ひの凡ならぬを、世に有がたき少女にこそ、と思ひしはなほ疎にて、扠は人言に傳聞たる、粟飯原大人の子なりしよ。三歳は永き胎内にて、未生に禍害を避られしも、天孝烈の勇士を生じて、寃を伸、世を濟はせ給ふ、一大奇事といはまくのみ。御邊生年十五歳、三年胎に在りしを數て、十七歳といふといへども、單身にして十數人の、大敵を撃殫されしは、いにしへにいまだ聞かず。後の世はなほ有がたかるべし。いふべき事も夥あり、聞べき事も多なれど、こゝは清談の室にあらず。もし虚虚と夜を曉さば、城兵等に捕籠られて、擒となるの後悔あらん。とはいへ脱れ出るに路なし。御

なちたる腰車、ふたつになりて仆れたり。この大刀音に女房戸牧は、驚き覺て、霎時もあらず、こは何事ぞ、と呼掛々々、登る階子のこなたには、手疵に怯む渡部綱平、刃を引て逃んとしたる、撞見際に眼眩みて、わが助撃とや思ひけん、戸牧を一ト大刀磤と砍る、砍られて苦と叫びもあへず、階子の上より仰ざまに、落る下にて女兒の鈴子が、母を慕ふて起て來つ、母御母御、と呼かけたる、その頂の眞中へ、直倒に墮しかば、鈴子は母に項骨を、撲折かれて矢庭に死し、戸牧も共に臥累りて、忽地息は絕てけり。綱平これに心やつきけん、呆迷ふて引返しつゝ、ふたゝび吾儕に殺て蒐るを、隻手薙切に撃捕たり。はや樓上には敵もなし。殘る奴原目に物見せん、としづかに樓下にをり立て、間每の紙門蹴放せば、まだ醉醒ぬ金平太、老僕九念次、貞九郎、奴隷まじりに多勢を憑む、短鎗、桿棒、貸刀、得物々々を打振て、足並取次に撃んと競ふを、縱橫無碍に追崩す、群る羊の牧の中へ、猛虎の衝て入る如く、薄手負せし臼井の貞九が、迯んとするを韓竹割、返す刀に金平太が、短鎗を丁と砍折て、疊掛たる合掌擊、最期の十念、九念次も、數个所の痛手に傻偟々々、迯るを透さず背より、おびせかけたる大刀風に、血烟立てぞ死でける。殘る奴隷の幾人か、僮僕まじりに迯迷ひつゝ、追詰られて庖厨の土間に、高く積たる米苞の蔭に、推合減合躲るゝ程に、遂に米苞を推頽しつゝ、忽地撐と墜かゝれ





犬坂毛野
貞九郎

ぬ大丈夫、柳下惠にも恥ることとなし。今はかうと思ひしかば、城の符牌に假托て、約束しつるは、親の讐を、撃捕らん夜に相伴て、走り去らんと思へば也。天なるかな時なるかな、けふは鞍彌吾常尙が、誕辰の壽きとて、主客酒宴に日を消し、眞夜中比に席を收めて、來客は皆退き去り、常武親子主從は、彼此に醉臥したり。今宵怨を復さずは、何の時を期すべきやとて、隱し措たる利刀を、竊に引提て窺へば、常武父子綱平等は、對牛樓に假寢せり。先はや這奴等を撃んとて、登る階子は潛龍の、蜚騰を得たる心地して、潛び寄つゝ常武が、枕邊に直立て、天地に響けと聲高やかに、馬加常武とく覺よ。昔年汝が讒訴によつて、杉門路にて撃れたる、粟飯原首胤度が、妾孕なる遺腹兒、相摸の犬坂にて生れしかば、その里の名を家號に替たる、犬坂毛野胤智こゝにあり。親の讐、兄姊等の、怨を復す今曉目今、起て勝負を決せずや、と名告かけ呼覺して、枕を磤と蹴てければ、常武忽地駭き覺て、臂近なりける脇挿の、刀を拿て拔んとするを、拔しも果ず丁とうつ、刃の冴に常武が首ははるか向へ落て、餘る刃尖、立たる膝の、骨をかけてぞ斫たりける。左右に臥たる鞍彌吾綱平、齊一覺てうち駭き、扠は癖者脱さじとて、共に刀を引拔打振り、撃んとするを右に受、左に拂ふ奮擊突戰、乙と喚て鞍彌吾が、刃を戞哩と撃落せば、駭慌て迯んとしたる、背をふかく劈て、仰反るところを横ざまに、斫は

け、夜となく日となく、習覺し自得の武藝は、撃術、拳法、鎗、薙刀、銕鋧、組撃、鏁鎌、誰誨るにあらねども、心を師とせし自然の煅煉、既に三年に及びしかば、神物有てわが術を、祐らると思ふばかりに、自我一流を究めたり。父祖は千葉家の一族にて、家系正しき武士なりしに、われいかなれば幼少より、俳優人となるのみならず、たま〳〵男子と生れながら、女子となりて世を渡れるは、人間の大不幸、これにますものなしといへども、又これなくはいかにして、彼常武等に近づくべき。わが宿望を遂る日まで、なほ此儘にてあるこそよけれ、と思ひかへしつ、心にも、あらで日毎の髪化粧、物のいひざま進止ひまで、よろづ女子のおもゝちして、近ごろ女田樂の一ト隊と列立て、はじめてこの地に來たりしに、誠心の致す所、天助空しからずして、求ずも仇人常武が、招きに應じて廿日あまり、母屋に逗留せし程に、人傳に聞く和殿の行狀、世に稀なるべき勇士ならんを、捨殺しにすべきにあらず。わが宿望を遂ん日に、相伴ふて走らばや、と思ひにければ舞曲の宵に、竊に桃の花釵兒を、座邊に遺してこれを試み、爾後桃源の歌をもて、相憐むの意を示し、又昨夕は常武が、若黨季六を刺客として、和殿を害せんと謀りしを、われ洩聞て迹を跟け、あの築垣のほとりより、釵兒をもて思ひのまゝに、季六を撃留たり。さればその折艶語をもて、相譚よりつゝ情を示して、再び和殿を試みしに、色に迷は

わが名を毛野とつけられしが、兩三年の程にして、貯財も竭果しかば、母は吾儕をかき抱きつゝ、竊に其處を立出て、鎌倉へ赴くものから、さりとて世渡る便着はあらず。母は只俳優の、鼓を拍に妙なりければ、女田樂等に雇れて、その技をもてともかくも、吾儕を字育給ひしに、なほも馬加に知られじとて、八九歳の比よりして、吾儕をも亦田樂の、隊に入れつゝ旦暮に、技を習せられしかば、熟るゝに易き遊藝の、人にしられて旦開野と、もて囃さるゝ不便趣舍。かくていくその月日を送るに、わが年十三なりし秋、憂事積れる母の大病、頼みすくなく見えし比、吾儕を枕邊に近づけて、おん身が素生は如此々々と、親の事兄姉の事、馬加籠山兩箇の冤家の、事の趣遺もなく、告られしより淺ましく、いとゞ悲しく朽をしく、いかで兩箇の仇敵を、撃て亡父に手向ずは、われ人の子と生れし甲斐なし。縁連こそ往方はしれね、常武は今もなほ石濱の城にあらん。先常武を撃捕て、後に縁連を索んものを、とこの時思ひ決めしかども、母の看病に暇なければ、且く時を俟程に、哀しきかな垂乳女は、その年の冬身まかりぬ。忌ども既に闋しより、この石濱へ赴きて、いかで怨を復さん、と思ふに甲斐なきこの身の生育、輪鼓、品玉、綱渡り、或は今様田樂舞の、外には得たる技もあらず。大刀拔く術もしらずして、彼大敵を撃んこと、かなふべくもあらざれば、心ならずも復讐の、時を延しつ、田樂の、技に假托

て、左手に物を引提つゝ、はやくも走り近づきて、犬田主々々々、さこそは待かね給ひけめ。辛じて約束の符牌は手に入り侍りたり。是見給へ。といひかけて、緣頰へ投出すを、小文吾は訝ながら、裡より光さす燈火と、天に隈なき月影に、引よして見れば符牌にあらで、思ひがけなき馬加大記常武が首級なりければ、こはいかに。と駭きて、先そのよしを諮れば、且開野莞爾とうち笑みて、緣故を告ざりければ、疑惑は寔に理り也。吾儕は素より女にあらず。今は何をか隱むべき。往時寬正六年、冬十一月、馬加常武が奸計の讒訴に陷られて、籠山逸東太緣連に撃れたる、千葉家一族の老黨なりける、粟飯原首胤度が、遺腹兒は吾儕にて、犬坂毛野胤智と名告れども、浮世を潛ぶ女田樂、俗字の毛野を象りて、旦開野と呼るゝも、深き故あることぞかし。世の風聞に聞れたりけん、父の正妻、名は稻城、わが兄粟飯原夢之助、幼稚かりし姉玉枕に至るまで、常武が爲に皆喪れて、親戚も連坐の科を蒙り、家系俸祿斷絕せしより、はや十五年の月日を經たり。わが母は父の妾にて、名を調布と呼れしが、有身しより三歳まで、產の紐を解ざりければ、知音醫師等相告て、血塊也といふにより、辛く命を助けられて、軈て追放せられにけり。かくて由緣を心あてに、相摸州足柄郡、犬坂の里に落留りて、その年の十二月、安らに吾儕を分娩しぬ。然れども千葉家に聞えを憚り、女の子也と人には報て

ども、既に時刻の近づきぬらんに、准備をせばや、と遽しく、物とり集て、裳裾を、褄りからぐる三尺手拭、楚と結びて、脚絆を着て、腰に放さぬ中刀の、さして往方はまだ定めねど、大刀引提て縁頬に、立出て見れば望月の、西に近づく影清み、曉報る鐘の聲、數僂ふれば四更なりけり。時に母屋のかたに當りて、頻りに人の叫ぶが如く、踏鳴らすその足音さへに、いとも幽に聞えしかば、小文吾耳を欹て、扠は旦開野、事成らずして、見咎められて捕はるゝ歟、然らずは酒狂の鬪諍歟。心もとなしいかにぞや、と思ふに胸のみ騒がれて、外に出て見つ、入りて見つ、千々に心を碎くこと、凡半時許にして、物の音は靜りぬ。彼垣一重に隔てられて、こととふべくもあらぬ身は、靴を隔て癬を搔くに、なほその手だも屆かぬに似たり。縱令旦開野は、搦捕られたればとて、われ愁に命を捨て、救んと欲するとも、轍鮒を枯魚の市に問ひ、麀鹿を肉俎の上に、憐むに似てその甲斐なからん。よしなや渠に大事を任して、可惜烈女を殺さるべし。われ愆りあやまてり。とひとりごちつゝ縁頬に、尻うちかけて母屋のかたを、なほつく〴〵とうち見てをり。浩處にあなたの庭なる、松を傳ふて築垣を、跳越つゝ飛鳥の如く、こなたへ走り來るものあり。小文吾亦復胷うち騒ぎて、そは旦開野歟。と呼かくる、程しもあらず旦開野は、紊す黑髮、劈れたる、衣に鮮血の韓紅、右手には明晃々たる、氷の刃を拔拏

ら、この日五月十五日は、その子鞍彌吾が誕辰なるをもて、年毎に城中なる、甲乙を招聚合て、壽の席を開き、酒もり遊ぶ吉例あれば、已ことを得ず小文吾を、撃捕る一議は明後日に延して、この日午の比及より、賓主盃をめぐらして歡びを盡し、旦開野が田樂能に、各々興を催す程に、長き日ぐらし遊び足らで、燭を續けども尙飽ず、その夜子二ッの比に至りて、客は漸々に歸去り、あるじ親子主從は、泥の如くに醉ざるものなく、或は臥房に倭僂き入り、或は處々に倒たる、鼾睡の音は牝を爭ふ、田野猫よりも囂しく、前後も知らず臥したりける。されば又小文吾は、母屋にてかゝる醼會の、ありとしも知らざれば、晝は終日わがうへに、討手や來ると油斷せず、日暮ては旦開野が事のみ心もとなければ、或は外に出、背門に立、又築垣に耳をよせて、彼方の容を知らんとするに、對牛樓歟とおぼしくて、笛皷の音聞えしかば、原來今宵も酒宴ありて、舞うたはせて遊ぶにこそ。よき折なれば旦開野は、符牌を奪ふ便や得たる。いかに〳〵、と思ふ程に、夏の夜はやく更闌て、又音曲のしらべも聞えず、寂寥として夜風涼しく、樹間々々を照らすなる、月影のみぞ明かりける。當下小文吾は、舊所に退きて、さらに又思ふやう、今宵旦開野がなす事の、成る成らざるはとまれかくまれ、あれ程に迄約束したるに、用意もせでをらば、實なきものと思ふべし。行包と笠より外に、身に添ふ物はなけれ

そゝぎて、未の比より天霽たり。小文吾は心にかゝる、季六が撃れし事を、常武はやく猜しなば、多勢をもつてわれを撃つべし。今や討手の來つる歟とて、刀の寢刃を磨しつゝ、終日油斷せざりしかども、男童等が三たびの飯を、運ぶも日ごろに異なることなく、けふもはかなく暮にけり。故あるかな常武は、いぬる日對牛樓にて小文吾に、密謀を告て相譚ひしに、絕て承引氣色なければ、只速に結果て、後の患を除んとて、且男童等にこゝろ得させて、日每々々に小文吾が爲體を窺せしに、凡十日あまりを經て、小文吾は夜となく日となく、用心に隙なかりし程に、やうやくに倦疲れて、をり／＼熟睡することあり、と彼童等が報しかば、扠は心やすしとて、竊に卜部季六をもて、一夕小文吾を撃せんと謀りしに、次の日に至りても、季六はかへり來ず、還て小文吾は恙もなくて、幹淨房にをるよしなれば、常武いよ／＼疑惑ふて、又男童をもて密々に、彼處のやうを窺せしに、曲演のほとりなる、草葉に塗れし鮮血あり。又曲演の水常に異りて、薄紅なりき。と報しかば、常武頻りに太息を吻て、肚裏の思ふやう、原來昨夕季六は、返撃にせられしを、小文吾がその死骸を、水に沈めて隱せしならん。われその死骸を穿鑿して、人殺しの罪をもて、小文吾を撃せんに、幾十人をもてすとも、自胤もわれを非として、咎め給ふによしなからん。としてや撃せん、かくやすべき、と霎時肝膽を摧くものか

第六輯　巻之四

第五十七回

對牛樓に毛野讐を鏖にす
墨田河に文吾船を逐ふ

却說犬田小文吾は、旦開野が又垣をうち越て、はやくも母屋へ還りたる、そなたを霎時目送りて、軈て臥房に入りしかど、心おちゐぬ翌の事、さるにても旦開野は、田樂傀儡に儔稀なる、男魂あるのみならで、百步あまりあなたなる、築垣のほとりより、釵兒をもて季六を、擊留たりし手煉といひ、飽までわれを欺したる、心操の雄々しさよ。今圖らずも彼少女の、資によりてこの處を、脫れ出る事を得ば、海月の骨にあふにもましたる、得がたき幸ひなるべけれども、常武も亦搔揄の、敵手にしもあらざれば、城門出入の符牒なゝどを、等閑にして盜れんや。もし事成らずは旦開野は、命を其處に隕すべし。情慾とはいへど俠氣ある、可惜少女をわれゆゑに、喪ん事不便也、といふて今さら術もなし。女々しく物を思はんより、彼我が運を天に任して、翌の便宜を俟ばや、と思ふも果しなつの夜の、明れば五月十五日、この日は朝より雨降

め給へかし。といひつゝ返せば、手にとりて、睡れる龍の腮を撈りて、探る珠よりもなほなし難き、符牌を取る歟、わらはが命を、果敢なく其處に喪ふ歟。生死不定の大事を抱へて、この釵兒を何にせん。翌の首途の手向草、小柴に代て道祖神に、贄まゐらせん。と曲演へ、そが儘閃りと投入れて、伏拜みつゝ立あがり、喃犬田ぬし、いふべき事は多なれど、相譚ふ程は短夜の、こゝに明なば岩橋の、契りも遂に絶ぬべし。只翌の夜をまち給へ。さらば。とばかりいひかけて、故の樹の間を遶りゆく、裳褰げて築垣へ、登るもはやき田樂の、技に熟たる身の翩し、閃りと松に手をかけて、彼方の庭へ降ると思へば、姿は見えずなりにけり。嗚呼伶人にも隱君子あり、歌舞妓にも亦節操遊俠なからんや。むかし逢阪山の蟬丸は、榮枯得失、遇不遇の理りを諷詠し、みづからこれを琵琶に奏して、もて濁世の煩惱を脱離せり。又華夏の靜娟は、鶴岡の社壇にて、廷尉別離の愁訴に代るに、吉野山の歌を吟じて、右幕府の震怒を怕れず。況て千壽が重衡を、相憐て死に至り、又微妙が親を慕ふて、よく尼になれるが如き、亦その所を得たりといはまし。畢竟旦開野、竊に小文吾を資けて、又甚麼なる話說かある。そは次の卷に、解分るを見て知らん。

かへり給へかし。といふを旦開野見かへりて、然る御こゝろのあるならば、いかでわらはを伴ふて、竊に脱れ出給はずや。手を束つゝ寃なす人に、苦しめられて後終に、命を喪ひ給はんは、いと愚にも侍るかし。と勵されても小文吾は、嗟嘆に堪ず額を押撫、脱れ去らるゝものならば、けふまでかくてやはあらん。彼首に鎖せし諸折戸を、踰んは輙きわざながら、夜は殊更に出入を許さぬ、城の門戸をいかにかすべき。といふを旦開野聞あへず、そは亦手段の侍るなり。わらはこの廿日あまり、馬加殿に留められて、内外の事をよく知れり。大凡城を出入するもの、晝は晝の符牌あり、夜も亦夜の符牌あり。竊に方便を旋らして、その符牌だに手に入らば、出るに難きことやは侍る。と聶き示せば、小文吾は、歡び面にあらはれて、そは幸ひの事ながら、見咎められなば毛を吹て、疵を求る後悔あらん。疎忽の擧動し給ふな。とこゝろを付れば頷きて、いはるゝまでも侍らねど、只阽みて日を過さば、おん身はいよ〳〵危かるべし。命にかけて翌の夜は、件の符牌を取らん事、曉までは過し侍らじ。よろづの用意して、俟給ひね。と逞しき、辭に小文吾感激して、かくはそなたの助けによりて、脱れて出る事を得ば、これ天緣の竭ざる也。豫て契りし友の爲に、なすべき事をなし果て、やうやくこの身の落著ば、迎へとりて妻とせん。嚮に卜部季六を、撃留られし釵兒は、わが手に留めてこゝにあり。受納

夏野の男女郎花、結ぶは露の玉櫛笥、ふたゝびこゝにあはんとて、神をかけ樋に流したる、木の葉に示せし水莖の、深き思ひを今さらに、知らず負なる薄情、とても悋はぬ戀ならば、切ておん身の手にかゝりて、死んとまでに覺期して、來つるを不便と見給はずや。心づよし。と怨ずれば、小文吾聞て冷笑ひ、浮たる技もて世を渡る、俳優などはさもあらん。われは素より色を好まず。身に罪なくて囚れと、なりし憂苦を外にして、化なる戀に靡んや。そは實情にはあらずして、竊に人に相譚れて、われを惑はす便黠にこそ。といはれていとゞ恨しげに、顏つく〴〵とうち瞻仰て、嚮に贈りし歌のみならば、然る疑ひを稟もせん。女子のうへには有まじき、花釵兒に血を染しを、誰が爲なりきと思はれけん。希婦の陜布胸あはで、盡す誠の屆かずは、とく〳〵殺し給ひね。と刃に怕れず身を衝附し、覺期の氣色に、小文吾は、いふにや及ぶ、と拿をうち合しつゝついゐたるを、小文吾霎時と見かう見て、刃を鞘に納めても、治りがたき當座の難義に、霎時念じて、辭をやわらげ、死をだも厭はぬそなたの痴情、稍疑ひは解たれども、いよ〳〵逼るわが身の禍害、とてもかくても久後逢がたき、妹伕と思ひ諦めて、とく〳〵

れば死骸を推隱して、得しらぬ皃にて常武が、猶せんやうを勘察して、生死を其處に究むべし、とひとり點頭く簹竹の、ほとりに伏たる手應の石を、搔起しつゝもて來つゝ、死骸の裳に推包み、既にして曲演の、深水へやをら沈むる折から、月は忽地雲隱れして、朦朧となるまゝに、あなたの庭の松を傳ふて、はや築垣を踰るものあり。小文吾はやく透し見て、扠はふたゝびわがうへなり。えうこそあれ、と潛歩しつゝ、身の程掩ふ袖垣を、小盾にとりて隱待せり。さる程に癖者は、頰被せし手拭の、端を銜て築垣を、閃りと降立こなたの庭面、樹間〳〵を遶り來て、且緣頰に手を掛て、裡面のやうたゝ透し見つ、進み入んとする程に、小文吾はやく走り出て、癖者等。と叫びもあへず、刀を晃りと引拔て、砍らんとすれば、吽嗟とばかり、刃の下を彼此と、潛り脫つゝ一間あまり、後ざまに飛退て、やよ犬田ぬし、吾儕で侍り。早りて怪我を、さし給ふな。といふ聲聞けば女子也。小文吾は訝りながら、刃を小腋に引著て、然いふは誰ぞ。と透し見る、天にもこゝろ鮮明の、月を吐く雲、はや邁過て、隈なき光にふたゝび見れば、見忘れもせぬ旦開野也。さりとて小文吾油斷せず、いぬる日面を認るのみにて、物いひいはれしこともなきに、女子に似げなく夜をこめて、垣を乘り界を犯し、潛びて來つるは故もやある。と問質されて恥かはしげに、その疑ひは理りながら、嚮にわらはが打かけて、おん身の仇

き皐月霽に、十四日の月隈なく照らして、障子にうつる人影あり。小文吾忽地駭き覺て、脫落にけり、と遽しく、頭を擡て見かへる程に、外面に苦と叫ぶ聲して、撻と仆るゝ人音に、小文吾ふたゝびうち駭きて、刀を引提て緣頰なる、障子をやをら開つゝ見れば、紛ふべくもあらぬ鑽隙の癖者、手には刃を持ながら、仰ざまに仆れたる、その項のあたりより、血の夥しく流れ出たり。こは何もの歟わが爲に、擊留けんと思ふにも、且疑ひ且怪みて、白晝の如く明かりける、月を便りに件の死骸を、引起しつゝなほよく見れは、桃花の添餝したる、白銀の釵兒を、盆の窪の眞中より、吭までぞ打込たる。只この事の奇異のみならで、擊れて死したる癖者は、常武が股肱の若黨、卜部季六なりければ、原來常武わが虛を猜して、このものをもて擊せん、と謀りし事は違はざめれど、この釵兒も豫て認れる、彼旦開野が物とし聞けば、わが爲にこの仇を、殺せしは彼少女なる歟。渠は女田樂なれども、輪鼓、品玉、刀玉、八玉、綱渡の技などにも、をさ〳〵長たるものとしいへば、さる俳優より自然と熟して、銑鋧を擊ことさへに、その妙を得しものなる歟、それかあらぬ歟、とばかりに、惑ひは解ぬ夏の霜、傾く月の影見れば、夜は丑三の比なりけり。かくて又小文吾は、ふたゝび心に思ふやう、この季六が擊殺されしを、はやく常武に知られなば、渠かならず多勢をもて、われを擊捕んとするなるべし。かゝ

こゝろ得がたく思ひしに、渠は素より逆心ありて、その主君たる自胤ぬしを、亡さん爲にわれをもて、股肱とすべき底意によれり、と思ひ合せしその密議を、說破りつゝ窘しを、陽にはうけ引く如くなれども、さりとて今さら志を、改むべきものにはあらず。なほ懲ずまに色をもて、われを逆徒に引入れん、と謀れることのをかしさよ。しかはあれども初より、渠が密議に從はず、なほ色をもて誘ふを、怒に乘して罵辱しめば、渠又われを速に、害せんとこそ謀るらめ。とてもかくても脫れがたき、時運ならばいかにせん。今義の爲に捨ん命は、惜むによしもなきことながら、歎きを遺す親の事、迭に生死を契りたる、四犬士に環りもあはで、曳手單節が往方すら、索かねつゝ空しくならば、誰か又わが方ざまに、かうなりけり、と告やはする。これをおもひ彼を思へば、世に稀なるべき旅泊の悲しみ、腸を斷巴峽の猿の、叫ぶを聞けん人は物かは。旣に覺期を究めたれども、脫れん程は脫るゝぞよき。只用心に優ことなし、と思ひかへしつ、夜は殊さらに、目睡もせで身を護るに、三度の饌も、その餘の事も、母屋の扱護日ごろにかはらず。然ばとて復招きもせず、およそは閑暇無事にして、十日あまりを過す程に、降み降ずみ皐月雨に、櫓の玉水音のみぞする、五月中澣になりしかば、懈るとにはあらねども、やうやくに勞倦をまして、一日甲夜より假寐したれば、まだ緣頰なる雨戶も引ず、天めづらし

かでか人の佐となるべき。只その志す所は、忠信の狗となるとも、亂離の人とならじとのみ、念ずる外は候はず。と憚る氣色もなく答へしかば、常武は勃然と、怒は面に見れても、手を叉きて物いはず。忽地莞爾とうち笑て、いはるゝ趣道理に稱へり。われも亦如右思ふのみ。今の言は戲れにて、漫に和殿を試みたるに、思ふにましていと憑もし。心になかけ給ひそ。先早飯をまゐらせんに、こなたへ來ませ。といひかけて、軈て樓下に誘引ひしを、小文吾は後方に立つゝ、階子を下りて別を告、又九念次に送られて、幹淨房に還りけり。却說犬田小文吾は、ひとり緣頰に立出て、面を洗ひ口漱んとて、淨手盥に立よる程に、母屋の庭より流し入るゝ、筧の水に木葉ありて、淨手盥の中に入りたり。心ともなく取あげ見るに、こは和多羅葉と呼ぶ木葉にて、その葉の裏に書たるものあり。ふかくこゝろに怪みて、うち返しつゝよく見るに、

　わけ入りし栞たえたる麓路に流れも出よ谷川の桃

一首の歌とは讀れたり。熟そのこゝろを思ふに、こは昨夕酒宴の席上にて、彼桃源の俳優したる、且開野が所爲なるべし。もし果してしからんには、わが脇挿の刀のほとりへ、彼釵兒を遣せしも、意ありての事とはしらる。これも亦馬加が、誘せんとの爲にあらずや。彼常武は去歲よりして、われを推留め閇籠たりしに、きのふ猛に母屋に招きて、親切めかせし歌舞酒宴を、

るべし。これをわがうへに譬ていはゞ、君は船なり、臣は水なり。水はよく船を浮べて、又よく船を覆す。自胤は暗愚の弱將、菽麥をだも辨へ得ざれば、いかでか和殿を知るものならん。彼鄰國なる敵の爲に、滅されんこと疑ひなし。某も亦千葉の一族、馬加光輝が侄なれば、代て取るとも、誰か咎めん。然れば享德の例に倣ふて、自胤に詰腹切らせ、わが兒鞍彌吾常倘を、當城の主にせばや、と思はざるにあらねども、いまだ智勇の軍師を得ず。和殿今よりわれを佐けて、事成るときは葛西の中、半郡を宛行ふべし。うけ引れんや。と小膝を進めて、亦他事もなく囁けば、小文吾聞て貌を改め、こは思ひがけもなき、密議を談ぜらるゝものかな。某素より學問せざれば、聖の教はよくも知らねど、譬を取て利害を推ん。貴所は只水と船との、反覆を說給へども、順逆の理に暗きにあらずや。いかにとなれば、水の船を浮むるは經なり。その船を覆すは變也。苟も只その變を己が利として、その經を取らざるものは、亂臣賊子の心なるべし。君臣禮あり、舟車に檝あり。君臣禮を失ふときは、舟車に檝を失ふが如し。一旦その利を得るといふとも、滅亡せん事疑ひなし。いにしへより臣として、その君を弑せしもの、誰かよくその久しきを保ちたる。希望は、非義の妄想を除去て、千葉家の諸葛といはれ給はゞ、德誼後世に芳流して、子孫餘慶を承ることあらん。某武藝を好めども、短才にして文學なし。い

當下小文吾は、且頭を回して、彼此と見かへるに、樓上の東向には、僧一山が欵印ある、對牛彈琴といふ、四大字の額を掲げて、左右には、唐の王勃が、蜀中九日の詩を、白字に鏤たる竹聯あり。時は今、夏と秋との違ひあれども、犬田が爲にはこゝも亦、望鄕の臺にして、北地より來る鴻雁はなけれど、いざことゝはんと詠れたる、都鳥は今もありけり。かくて欄干に身を倚せて、つく〴〵と見わたせば、天ははや明し横雲の、色紙めきたるに筆はなけれど、誰が硯せし墨田河、前面に黒き牛嶋は、宛も水に臥せるが如く、彼方に蒼き柳嶋は、糸よる濤に靡くに似たり。世間は、何に譬ん朝開、趾なき如と、滿誓が、詠たる歌はしら波に、漁翁生涯一葉の舟、東へ漕ぐあり、西に歇るあり。葛西村落幾戸の烟、南に冲あり、北に滅るあり。鎌田、浮田、行德の浦々、あれ歟とぞ思ふ目も迥に、登る旭を舊里の、方とし見れば翁さびし、父のうへ又親戚の事、胷に湛てながらふる、甲斐こそなけれ劒刀、身を浮橋の中絕し、この石濱の玉塵より、數し蘊れる艱難憂苦の、遣瀬は絕てなかりけり。常武これを慰めて、犬田殿犬田殿、いつまで物を思ひ給ふぞ。尺蠖の伸んとするとき、且その身を縮むといへば、窮達時あり、運によるべし。あれ彼船を見給はずや。久しう水際に繋れたるあり、又眞帆揚て走るあり。繋ぎし船は走るべからず。走る船は留りがたし。和殿が今の滯留も、只この理をもて悟

を移しけり。かくて舞曲も果しかば、戸牧は豫て婢兒等に、こゝろ得させし纏頭の、小袖一襲をもていでさして、旦開野に取らせしかば、そが儘肩にうちかけて、横笛鼓の婢兒等の、先に立てぞ退きける。時は四月の下浣にて、夜はいと短き比なれば、曉るともなき鐘の聲に、東ははやくしらみたり。小文吾は困じ果たる、俳優の稍終るとやがて、あるじ夫婦に別を告て、退き出んとしけるを、常武頻りに推留めて、何どてさのみ急ぎ給ふぞ。是處も彼處もわが家也。殊さらこの新亭は、をさ〳〵眺望の爲に建たり。彼首の窗を推開けば、墨田河の流れ、大かたならず見ゆるをもて、即便これを臨江亭と命け、又樓上より眺れば、牛島葛西の海邊まで、すべて眼下にあるをもて、對牛樓と名づけたり。誘給へ。薄茶一服進らせん。といはれて小文吾推辭むによしなく、側に置たる腋挿の刀を取て立んとするに、白銀をもて造りなしたる、桃花の釵兒の、何の程にか落かゝりて、刀の緒に挾りたり。こはいかに、と訝りつゝ、そのほとりに侍りたる、婢兒共を見かへりて、こは何人の遺したる。そなた達にはあらずや。と問つゝ取てさし出せば、一箇の婢兒受とりて、こは旦開野が物に侍り。嚮に亂を舞ひしとき、振遺せしを知らざりけん。といふに小文吾頷きて、しからばそなたに遞與したり。楚と屆けて給ひね。といひかけてはや身を起し、引れて對牛樓にうち登れば、常武は婢兒等に、雨戸遺なく開せたり。

ん。是則桃源の故事に倣ひたる、いとも愛たき一曲にて、山路の桃と名づけたり。その爲開場爾いふにこそ。と唔りつらねつ逃るが如く、次の間さして退きたる、跡には咄と婢女等が、腹を抱へて立もあり。得堪ず彿と噴出しつゝ、そが儘俯して笑ふもあり。山田の畔に樹隱れて、日影不樂と集る木兎の、たつをも知らで群雀、われから狂ふ散動には、且く鳴も已ざりけり。于有然程、つゝしりうたふ笛の音に、鼓のしらべ打そえて、立ぞあがれる旦開野が、態も體も美しき、

抑是は讃岐州、八嶋壇の浦のほとりなる、弓削山の麓に住ひ候、賤婦にて候。一日里の少女子とつれ立て、同國八栗山に遊び候程に、この谷川の水上より、いとも愛たき盃の、流れ來て候へば、原來この山の奥にこそ、浮世を避たる神仙の、をはしますにや候はん。何處までもわけ登りて、たづねて見ばやと思ひ候。峯の白雲谷の水、源遠く來て見れば、

現玉鉾のみちとせに、なるてふ桃の林かな。

と唄ひ出せる聲澄て、佛の國にありてふ鳥の、迦陵頻伽もかくこそ、と見る目あやしき舞の袖、翳す扇の蝶々の、閃めく桃の花釵兒に、光照添ふ燈燭の、花や物いふ序破急の、節曲比類なべて世の、俳優人は數ならずとて、常武夫婦鈴子等は、瞬もせず見惚たる、紙門障子のあなたより、覗く奴婢等の幾人歟、人を搔わけ、推わきあへず、頭に頭をうち累ね、目に目並べて餘念なき、眺に時

もこゝろを得たれば、嚮に呼とめ置たる也。やよとく〳〵。と促せば、季六は醉に乘して、些も推辭む氣色なく、仰寔に理り也。いで〳〵。といひかけて、扇を取て禹歩に、進み出つゝ袴の襞襀を、左右に拿て披せながら、件の少女が左のかたに、おし直り膝折伏して、霎時額つき、頭を擡て、訛なる聲をふり發し、東西々々、南北中央、この席上なる大人君子へ、敬て報奉る。罷出たる少女子は、薪樵る鎌倉下り、名を旦開野と呼るゝ甲斐に、當今日の出の堪能もの。當處へは初度の見參、咲も揃はぬ初花に、降そゝぐ雨の足拍子、扇の風の手毎の間に、聊失つことありとも、そは海津藻のおん目ながに、覽し給はんことを、庶幾奉りぬ。抑〳〵田樂の幾番なる、題目も亦多なり。そを數へんはことふりにたれど、就中、呪師、侏儒舞、田樂、傀儡子、唐術、品玉、輪鼓、八玉之曲、獨相撲に、獨雙陸、無骨有骨、延動大領之腰支、蝦漉舍人之足仕、氷上專當之取袴、山背大御之指扇、琵琶法師之物語、千秋萬歲之酒禱、腹鼓之胸骨、蟷蜋舞之頭筋、福廣聖之袈裟求、妙高尼之襁褓乞、形勾當之面現、早職事之皮笛、目舞之翁體、巫遊之氣裝貌、京童之虛左禮、東人之初京上、これらは男田樂の、僉宗とす〔る〕所。しかるを又この君は、男の技にも堪能にて、幾節竹の一本立、八尋細の綱渡、これらは特に本事也。さはさりながら更闌たれば、そは後會の事としとゞめて、今宵は且今樣の儛踏の態を仕らせて、御笑に備へまつら

文吾を見かへりて、犬田どの、さぞな傍痛かりけん。壯佼輩が殺風景は、いはする酒の科なれば、心になかけ給ひそ。たま〱憂を慰ん、と思ふものから興なほ淺かり。頃日鎌倉なる女田樂の、幾人かこゝへも來たり。そが中に、一人堪能のものあれば、呼とりて留置たり。渠を肴に今一度、過し給へ。といふ聲洩るゝ、次の間には豫てより、綷の准備をしたりけん、大小の鼓を拍、笛を吹く婢兒共、いと美しき打扮して、出て緣頬にならびてをり。當下いと艶妖なる少女の、年は二八ばかりなるが、摺箔縫箔したる、六尺袖の表衣に、雜色の下襲して、炷籠たる奇南の香も、えならぬまでに、今の世にはいとめづらかなる、帶の襷めきて、幅廣きを、竪ざまに、締なしたる、腰は風に靡く柳の如く、姿は獨立る花に似たり。色好みなる心もて、今これを見たらんには、魂忽地天外に飛て、この君の爲には、命も惜からずと思ふめれど、小文吾は性として、聲色を嗜ざれば、目前に出て來ぬる、この少女をよくも見ず、こゝろの中には爪彈して、あらずもがなと思ひけり。かくて件の女田樂は、まづあるじ夫婦のかたにうち向ひて額をつき、又小文吾にも額をつき、そが儘些し退きて、この席の中央を、前面さまにしてゐたり。常武は咲しげに、遙にそなたを見いだして、やよ季六よ、汝は何と思ふやらん。これ程の俳優に、開場の白なくは、素本の源氏を讀に似たり。汝は武藝のみならで、猿ばうに

よ、とく〳〵。と急せば、次の間に聚ひ居たる、馬加が股肱の若黨、渡部綱平、卜部季六、臼井貞九郎、坂田金平太は、齊一阿と應して、進み入て額をつき、その席末に居並びて、僉小文吾にうち對ひ、曩に當所へ入來の折、主人の側に侍りしかば、面を認られ候やらん。某は渡部綱平。某は云々と、名告をすれば小文吾は、いと慇懃に禮を返して、各位は源頼光の、四天王にも劣らざる、勇士とは誰も知るべき、姓名といひ骨相といひ、いと憑しく候。といはれて四人は羞たる色なく、賢察の如く、不幸にして、腕を砍るべき鬼女に得あはず。土蜘蛛なんどの變化も出ず。野飼の牛にこゝろを付れど、鬼童丸も躱れをらず。いく野の道の遠ければ、大江山路を踏わきて、酒顚童子が舊迹だも、見ることを得ざりしは、殘念至極に候。と續語爲句の似非的宏言に、小文吾は堪がたき、笑を袖に包あへず、うち咳きて紛しける。かくて又くさ〴〵なる、殽を添ていく遍となく、盃を巡らす程に、鞍彌吾と綱平等は、いたく醉ふたる癖なれば、僉輪の如く小文吾を、とり環しつゝ誇負に、武藝相撲の技などを、いと諜々しく論ずれば、常武これを推禁めて、おながまや何事ぞ。すべて武士の武士くさきは、糂粏の粏糂臭きが如く、そは素よりの事なれば、めづらしげなく、いと嗚呼なり。立ねく〳〵。と退けて、季六をのみ呼留め、汝は曩時其處にをれ。なほ分付る要事あり。とこゝろ得さしつゝ、微笑ながら、小

け捨、肴も箸を添ながら、露ばかりも食ざりけり。とかくする程に日は暮て、彼此に置並べたる、菊燈臺の銀燭は、宛衆星の晃く如く、和漢の細工を盡たる、方圓の盃盤は、恰寶の市に入るに似たり。浩處に、年四十ばかりなる老女の、摺消したる汗衣を被て、六ッ七ッばかりなる、女の子の手を掖たると、廿あまりなる男子の、肥て脂盈たる、身長も一ト岌高きが、黄黑の袴を穿たると、うちつれ立進み入て、小文吾に揖をしつゝ、軈てあるじの傍に在り。常武これらを見かへりて、小文吾にうち對ひ、犬田どの、是は荊婦戸牧也。彼は拙郎、馬加鞍彌吾也。母のほとりに候は女兒にて、鈴子と呼るゝもの也かし。子は四五人舉たれども、多くは襁褓の中に喪して、今は家子と季女のみ。殘りすくなくなりにたり。といふに小文吾膝を進めて、歡びを述、名告をするに、戸牧はさしも鷹揚に、辭寡く應答訖れば、鞍彌吾もいと無禮げに、英名は去歳よりして、耳に轟きたる犬田どの、君父に憚るよしあれば、面をあはせがたかりしを、本意なしとのみ思ひしに、けふの圓坐は一刻千金、先や鬱胸を霽すべし。武藝は家業の事なれば、弓馬撃劒、鎗棒拳法、人に劣べうは思はねども、いまだ事に遭ざれば、戰場の進退は、熟士に譲りて、姑くいはず。折もあらば一ト試合希ひ候。といふに常武微笑て、何を孩兒が小ざかしげに、まけじ魂いはずもあれ。よき折なるに四天王等を、召よして酒を飲せよ。や

席に當らず。しば〳〵請れてやうやくに、東面に坐を占て、迭に寒暖を述、安否を問ふ程に、從倉樣に結髮したる、女童がふたりして、小文吾に茶を薦め、花紅葉數種なる、菓子を折敷に積登せしを、もて來て等しく羞めけり。是よりして配饌の男女、盃銚子を掌るあり。羹齏種々の、殽を安排るありて、饗應特に叮嚀也。かくて常武は、やをら盃をとり揚て、犬田どの、且壺嘗を仕らん。曩には君命諫るに甲斐なく、肝膽もなほ胡越に等しく、可惜世の豪傑を、久しう籠にしつる事、意外の趣舍、羞るになほ餘りあり。しかるにかううち解て、膝をまじえ歡びを盡すこと、一朝の苦心にあらず。主君の疑念を些しは釋きたる、某が月ごろの、方便さこそと亮察し給へ。いざ〳〵。といひかけて、その盃をさしければ、小文吾は進寄て、受戴きて盃を、側に措て、左右なく飲まず。寔に圖ざる事によりて、去歲より衣食の頤食に預り、今亦山海の魚蔬を羅られて、淺からぬおん欵待を受奉ること、皆是賢大夫の、客を愛し給ふ、好意にあらずといふことなし。歡び何ものかこれに優すべき。某は素市井の匹夫也。近ごろ故ありて、兩刀を帶るといへ共、身に一階の格式なく、人に敬るゝ德もなし。然るをかくまで懇切なる、謝し奉るも憚りあり。といふを常武聞あへず、そは又介意あるに似たり。故の席に着給ひね。としば〳〵いはれて小文吾は、盃を持て退きつ、酒は飲むやうにして、竊に椀中へ傾

聞えあげしかば、この一條のみ許されたり。よりて今宵後堂にて、觴盃を勸め進せんと欲す。既にして時刻もよし、九念次に案内をさして、とく〳〵こなたへ來給へかし。餘は面會を期してこそ、意中を盡すべけれとて、白章の紋染たる皀夾衣に、袴一領をとり具て、牽出物とて贈りける。小文吾は思ひがけなき、常武が懇切態なる、招請に眉を顰て、渠又何事をか計較けん。われを害せん爲なるべし、と思ふものから今さらに、推辭ば必臆せしとて、後々までも笑れん。只命運を天に儘して、ゆくには不如、と思ひ決めつ。忽地莞爾とうち咲みて、ゆくりなき懇命を、推辭奉らんは無禮ならんに、貴敎に應じて御席を、汚し奉るべきにこそ。旅にしあれば禮服に、事缺ぬるを猜し給へる、賜ものと見奉れば、これも辭はず身に着て、見參に入るべき也。且く待せ給へかし。と應て次の間に退きつゝ、刺着苧拔て、夾衣を、そが儘に被て、遽しく、片足がはりに踏入るゝ、袴の紐を前うしろ、楚と結びて、中刀の、鞴釘を潤す當座の用心、扇を腰に、さすが現、人品整ふ姿の華美ぎ、引提て出る福室に、刀の璫突立て、誘とばかりに揖をすれば、九念次は先に立て、庭より導く巻石傳ひに、開かぬ關の諸折戸さへ、開放ちつゝ彼方なる、廣庭過て、長廊の、浮橋渡る後堂、緣頬よりぞ作ひける。そのとき馬加常武は、遽しく出迎へて、小文吾が手を携つゝ、賓席に推居るを、小文吾は固く辭ひて、敢その

しめん、と思はざる日はなけれども、自胤には鎌倉なる、兩管領といふ後衞あり。管領われを非義として、大軍をもて攻られなば、毛を吹て疵を求る也、と思ひかへして年月を、いたづらに過せしが、方便をもつて小文吾を、わが腹心となすものならば、先主の孔明、後醍醐の、楠公にも劣るべからず。嘻しかなり、と方寸に、計較既に決りつ、折も欲得とおもふ程に、此ごろ鎌倉より、女田樂の色子共五六名、石濱の城下に來にけり。さらぬだに常武は、をさ〳〵聲色をのみ嗜む、烏滸の驕者なりければ、さる技に長て、且貞妍き淫婦を、多く婢妾としつゝ、生平に歌舞せなどすれども、なほ飽かで、他鄕より來ぬる俳優も、己が愛するものあれば、その費を斁ふことなく、幾月の久しきまで、なほ家に留置て、酒宴の興にぞ備ける。こゝをもてこの度も、件の女田樂等を招きよして、その技を試みたるに、そが中に、旦開野といふ少女の、年は二八ばかりにて、顏色も美しく、技に堪能のものなりければ、そを只一人留置て、一日老僕丸念次をもて、小文吾にいはするやう、去歲初秋一面識の後、白駒の足搔速うして、朞月も近づきたり。豫てもいへることながら、主君の疑念いまだ解ず、良藥口に苦きの故に、諫言その甲斐なきに恥て、心ならずも疎遠に過たり。斯長々しき籠居を、いと痛ましく思ふをもて、切てをり〳〵母屋へ招きて、慰めばや、と月ごろより、くさ〴〵方便を旋らして、主君へ

かりしかば、こはいかに、と訝りて、なほ又烈しき毒を飼ふこと、六七遍に及びしかども、僅に一日半時だも、病煩ふこともなければ、常武は呆れ果て、彼奴は神仙不死の術を、受たるものにてあるべき歟。縦令死なずとも、この處だに出さずは、何事をかよくせんやとて、いよいよ鎖を緊しつ、その害せんと謀りしことは、且く思ひとゞまる程に、この年は果敢なく暮て、次の年の春三月の比、庭掃除する蒼頭品七が、一日小文吾に聶きたる、長物がたりの事の趣、その顛末は定かならねど、わが身の悪事を告たるよし、その折配膳の男童が、おぼろげながら聞とりて、竊に常武に報しかば、常武聞てうち領き、われ日ごろより汝等を、密張孔目にしつることは、これらのよしを知ん爲也。誰にてもあれこののちも、わが陰事をいふものあらば、とく知らせよ。と聶き示して、壺なる菓子をこぼるゝばかりに、紙に包みて投與へつ。是よりして品七を、心にふかく憎むものから、然とて罪せんよしのなければ、果して小文吾が猜せしごとく、竊に毒殺しつる也。これによりて常武は、さらに思念を旋らすに、品七奴が口を啗きしより、小文吾は大かたならず、わがうへを知りたるならん。われは年來大望あり。彼享徳の例に倣ふて、自胤ぬしに腹を切らせ、わが子鞍弼吾常倚を、當城の主として、千葉介たら

まかりにき。生平には病ひ氣のなくて、風だも引ぬ老痴なりしに、食傷にもや候ひけん。健なりとて憑まれず。現命數は豫てより、量知られぬものにこそ。といふに駭く小文吾は、なほさりげなく應をしつゝ、肚裏に思ふやう、原來かの日に夕饌を、もて來てすえたる男童の、品七が長物がたりを、幾條か聞こりて、主の常武に告しより、常武いたく品七を、憎みて毒殺せしならん。噫馬加が人を害ふ、毒惡何ぞかくまでに執念深や。彼品七はわが兄弟、犬飼現八が實父糠助と、ふるき由縁のありとし聞けば、谷を隔て響をおもふ、心の悼みを誰にか告ん。寔に口は禍の、門也けり。と舌を掉ふて、是よりの後物食ふ毎に、必まづわが玉を舐りて、彼毒計をぞ禳ひける。

第五十六回

朝開野歌舞して暗に釵兒を遺す
小文吾諷諫して高く舟水を論す

馬加大記常武は、去歳の七月小文吾を、推留め閉籠たる、言と心はうらうへにて、當時既に思ふやう、彼犬田小文吾は、智勇究めて侮りがたし。渠もし當家に仕へなば、必わが身の仇とならん。さればとて今追遣りて、他し諸侯の佐とせんも、なか〳〵に快からず。かゝれば渠を竊

堪がたき日のありしに、藥の貯藏あることなければ、護身嚢をうち披き、感得祕藏の玉を出して、或は鳩尾へ推當つ、又あるときは口に含みて、その玉液を吸ふ程に、苦痛忽地たひらぎて、心持淸々しうなりたるも、幾度といふことをおぼえず。これ必かの椀中に、ありけん毒に中られしを、只この玉の奇特に依て、わが身に恙なかりしならん。嚮に犬川莊助が、大石憲重の獄舍にて、笞杖の撲傷の頓に痊しも、亦彼玉の靈應なれば、袷と云恰といひ、靈玉の加護疑ふべかへず。吁神なるかな、妙なるかな。世は塞翁が馬にして、戸田川の窮厄には、十條力二尺八等が、助によつて吾曹ば、思ひがけなく虎口を脫れ、今は千葉家の尺八ゆゑに、わが身を殆危くせり。彼は忠信義烈の兄弟、此は音曲尙古の名物、尺八の名は等して、利害損益甚異なり。わが厄今に解ずといへども、彼粟飯原に比れば、屑にもあらざりき。さるにても粟飯原氏の、遺腹なる子は生育し歟。宇宙の間に不平の事、渠にましたるものやはある。嗚呼憐むべし、憐むべし、と繰返したる胷の中に、積る日數の春過て、夏は來れども彼品七は、爾後掃除に來ることなければ、小文吾竊に訝りて、一日又草刈に來つる蒼頭に、彼品七が事を問ふに、そのもの答て、尋給ふ品七は、いぬる月、いく日にかありけん、こゝへ庭掃除に來たる、次の日の夕つかた、俄頃に心地煩しとて、うち臥して程もなく、夥しう血を吐て、眞夜中比に身

ぬものもなけれど、かの威勢に憚りて、聞え上るもののなければ、守には知し召ぬなるべし。馬加どのはよろづのうへに、疑ひふかき性なれば、彼增松が口を利しを、曉りて毒飼をせられしかば、いく程もなく增松は、一夕睡滅に死にけり。かゝればおん身も朝夕の、食物に用心して、鈍くな謀られ給ひそ。と聶く程に男の童が、はや夕饌をもて來つゝ、いつの程にか後方にをり。長物がたりに聞惚たる、小文吾が袂を引て、夕餉の箸を把り給はずや。といはれて見かへる小文吾と、共に駭く品七は、慌忙き箒を取て、塵拈隻手に引提つゝ、折戶のほとりに立出て、こゝ開ずや。と呼れば、外面より人の來て、鎖を拔きて、品七を、出して楚と閉れども、現箝られぬ人の口、吁天言は聲なくて、よくいはしむる隱慝の、掩ひがたきは以あるかな、と小文吾竊に舌を掉ふて、そが儘饌に向ひても、箸とる事の懶きまでに、なほ嘆息は已ざりける。かくてその日は暮果て、甲夜よりぞふる春雨の、音蕭然に更闌て、いとゞ寂しき鐘の聲、寐られぬまゝに小文吾は、獨つら〳〵思ふやう、彼常武が人となりは、われも大かた猜せしかども、あの品七が巨細なる、思ひがけなくその隱慝を、聞しもひとつの資にて、なほこの後の用心に、なるべき事ぞいと多かる。されば馬加が若黨なる、狙渡增松とかいふものの、毒殺せられしといふ一條にて、今さら思ひ合すれば、われも亦日ごろより、食後猛に腹痛みて、いと

箇荘、管領せしめ給ひしより、今に至て繁昌せり。されば馬加大記常武は、絆みな己が隨意謀濟して、權勢肩を比るものなく、主の自胤も、渠には憚り給ふゆゑは、はじめあらし山の笛の事も、實胤より咎なく、その家督をさへ嗣給へば、皆常武を德として、權威を貸給へばなるべし。よりて思ひ合するに、胤度の撃れし折、常武竊に地方の惡棍、並四郎を相譚て、件の笛と兩刀を、竊せたるに疑ひなし。その折の賤婦は、並四郎が女房の、船虫にこそあンなれ。爾後笛と兩刀は、並四郎が所悳にして、小篠落葉の兩刀を、竊に他鄕へ齎して、よき價に售たるなめれど、嵐山の尺八は、古き代の物にして、今の笛と異なれば、好みて買んといふ人もなく、且蒔繪したる歌などの、けやけきに憚て、年來祕おきたるにこそ。果して如此らんには、いぬる比中途にて、阿佐谷の村長等を撃走して、船虫を奪去たる、幾人の癖者も、馬加どのの間諜者、一洞穴なる狐どもならん。いかにとなれば、船虫が責られて、苦きまゝに首伏せば、彼人の舊惡の、あらはるべし、と思へば也。さればおん身を推留めて、辛く閉籠措るゝも、そこらの疑念ある故ならん。斯長々しき彼人の、年來の惡計を、誰も知るものはなかりしに、狙渡増松といふ扈從若黨は、馬加どのの腹心にて、機密を掌りたれども、絆ある毎の賞祿の、多からぬをいたく恨みて、件の機密をある人に、如此々々と漏せしかば、語續ぎ傳聞て、今では知ら

六年乙酉の冬、十一月の事にぞありける。かくて件の調布は、些の由縁を心あてに、相摸州足柄郡、犬坂といふ山里に在りける程に、かの病惱は血塊ならで、その年の暮に、子を産にきと、それより三年ばかりの後、應仁元年丁亥の秋の頃、誰いふとなく風聲せしを、常武聞て、駭きあやしみ、そは安からぬこと也とて、老僕柚角九念次を、犬坂へ遣しつ、綷の虚實を撈せしに、子を産たるは一定なれども、今は其處にも住わびて、往方しれずと聞えしかば、常武は靴を隔て、癬を搔る心持しつ、なほ彼此と索しかども、終に便宜を得ざりしとぞ。又彼籠山逸東太緣連は、千葉家恩顧の郞黨にて、その家柄も大かたならねば、年尙わかきものなれども、胤度の亞に居られて、赤塚殿の覺よかりしに、慾深く智淺うして、年來胤度と、中わろかりければ、常武に屬賂を食れて、主命を用ひ奉らず、忠信篤實なる胤度を、欺擊にせし冥罰、立地にその身に報ひて、可惜しき俸祿を、われから棄て谷蟾の、日陰者になりけるよとて、知るも知らぬもおしなべて、憎み嘲り笑ひけり。しかれども石濱なる實胤は、年來多病なるをもて、綷みな常武一人に、任用し給ひつゝ、此ごろ遁世の願ひ頻りにして、當時の領所を悉、舍弟自胤に讓まゐらせ、その身は美濃に退隱して、いく程もなく世を逝給ひき。これにより、鎌倉の兩管領より、二郞自胤を、千葉介に補任して、石濱の城にすえ置れ、武藏七鄕、葛西三十




馬加大記

たし。いかにすべき、と問給へば、常武も殊更に、うち駭きたる面色して、寔にこよなき兇變なり。所詮笛の紛失も、みな胤度より事起れば、渠が妻子を誅戮して、仰わけられあらんには、おん身に異なるおん咎めの、あるべうも候はず。某事よく計ふべし。うち任し給ひね、と答まうして退きつゝ、實胤自胤の兩下知也とて、胤度が長男に、粟飯原夢之助とて、今玆十五歳になりける美少年に、腹を切らせ、幷に胤度が妻稻城と、五才になりける女兒をも、僉おなじ日に殺してけり。只この人々のみならず、親族妻黨も罪蒙りて、或は追亡はれ、或は閉籠られて、憂死せしものも多かり。誠に邯鄲一炊の、粟飯原氏の榮枯得失、覺て悔しき夢之助を、惜まぬものはなかりけり。そが中に、胤度の妾に、調布といふものあり。有身てより三年經るまで、今もて產の紐を解かず、醫師も後にはその病症を、とにかくに決めかねつゝ、こは血塊の病也とて、をさ〳〵その療治をしてけり。かゝりし程に、常武は、彼妾調布に、胤度の遺腹ありと聞て、これをも殺さんとしたりしを、相憐むもの哀告て、醫師をもて證人としつ、決して有身たるにあらず。血塊に疑ひなしとて、くさ〴〵の方書を引つゝ、醫師も共に寬しかしも、常武はなほ疑ふて、調布に墮胎の藥を、三日つゞけて飲せしかども、させる驗のなかりしかば、原來血塊也けりとて、遂に追放されにけり。此は是今玆より、十五六年の昔なる、寬正

もはや日は暮れつ、如此も他領の事なれば、後難も亦料がたし、と思ひかへせば忙々しくて、躬方の死骸も捨措つ、胤度主從三級の、首ばかりを携て、路引ちがへて走りつゝ、その夜を岩槻のほとりなる、古寺に曉せしが、つく〴〵と思慮るに、われ胤度を討捕たれども、緊要なる笛と兩刀を、癖者に奪れたれば、まうし解んことかたかるべし。況撃漏したる胤度が從者等の、われより先に走り歸て、有つる儘に訴まうさば、わが私の恨によつて、胤度を將てかへらで、欺撃にしたりといはれん。さるときはわが罪の、命に及ぶこともあるべし。所詮赤塚へ、歸るときは甚危く、還らざれば安きに似たり。父母は既に世を逝て、いまだ妻子はあらず。人を用る今の世は、いづれの國もみな主也。赤塚にのみ日の照るものかは。三十六計逃るに不如、と肚裏に尋思しつ。その曉がたに只ひとり、往方もしらずなりにけり。從者等はこれをしらず、天明て後に驚騷ぎて、且く僉議を凝せしかども、いかにとも術なさに、三ッの首級を携て、僉阿容阿容と赤塚へ、還り參りて如此々々と、粟飯原胤度主從が、撃れたる爲體、幷に嵐山の尺八と、小篠落葉の兩刀を、その折癖者に、奪去られたる事の趣、又籠山緣連は、その曉に旅宿より、逐電したる事までも、遺なく聞えあげしかば、自胤駭き且呆れて、是非の思念に及び給はず、竊に馬加常武を招きよして、縡云々と說示し、彼笛既に紛失したれば、守のおん咎め測が

さし挾みつゝ攻戰へば、いづれ暇はなかりける。時に並松の樹蔭より、頰被りせし一箇の癖者、忽然と顯れ出て、道次に捨措たる、嵐山の尺八と、小篠落葉の兩刀を、手早く箱より引出し、小腋に抱きて逃んとす。程もあらせず胤度が鎗奴遙にこれを見て、飛ぶがごとくに走り來つ、癖者等、と呼かけて、鎗を捻て刺んとすれば、癖者は、件の三種を、後方へ撲地と投遣りて、巨刀丁と引拔受とめ、逆へ進て追つ返しつ、丁々發石と戰ふたり。その間に又樹蔭より、頰被りせし奇怪の賤婦、轉ぶが似く走り出て、笛と刀を搔取て、舊の樹蔭に躱るゝ程に、怯ず挑むこなたの癖者、鎗の蛭卷斫斷て、返す刀に鎗奴を、砍仆したる血煙の、夕映殘る王莽時、樹蔭を出る賤婦と、目を指しつゝ微笑みて、造化精妙と夕間暮、うち連拉て逃亡けり。さる程に、籠山逸東太緣連は、既に件の癖者等が、笛と兩刀を奪略たる、爲體を遙に見つゝ、吽嗟と思へど金吉銀吾と、鎬を削る眞中なれば、こゝろは忙、拳は亂れて、金吉が擊大刀に、小鬢三寸淺痍を負ふて、既に危く見えたる折から、緣連が從者等、四五人齊一走り來て、金吉銀吾を前後左右に、推取籠て攻つけ〳〵、遂に亂刀に砍仆して、やうやく頸を掭てけり。かゝりし程に、胤度が從者等は、或は擊れ、或は逃亡、敵一人もなくなりたれども、緣連は緊要なる、笛も寶刀も癖者に、奪去られたりければ、有繫にこゝろ安からず、いかで往方を索ん、と思へど

縁連が、胤度が從者等は、そが儘踵を旋せば、胤度と、雜譚しつゝいそぐ程に、この日も既に黃昏たり。浩處に、縁連が從者等、後馳に走り着くもの、或は二人、或は三人、一里餘の程にして、はや三四十人になりしかば、胤度これを訝りて、縁連を見かへりつゝ、御邊何等の故をもて、從者許多具せられたる、と問れて縁連聲をふり立、この事も亦別議にあらず。和主を誅罰せん爲也、といふ間もあらせず拔撃に、晃めかしたる刃の列缺、肩尖丁と斫著れば、こゝろ得たり、と胤度も、共に刀を拔合して、兩三合戰ふものから、初大刀の深瘡に右手衰へて、只受ながすのみなれば、縁連は踏込々々、はや頸捕て刀尖に、推貫きてさし揚たり。思ひがけなき事なれば、胤度が從者等、罵り騷ぎて別よしもなく、恰釜湯の涌くごとく、上を下へと返したる、周章大かたならざりける。當下縁連聲高やかに、粟飯原胤度逆心あらはれ、某討手を承りて、かくは誅戮せられたり。汝等もし異議に及ばゞ、皆悉首を召れん。靜れやッ、と呼れば、胤度が譜代の若黨、村主金吉、使主銀吾、主の首級をわたさじとて、はや拔連て殺て蒐れば、中間小斷に至るまで、脫れがたしと思ひけん、齊一刃をうち振りて、敵手を擇まず殺結ぶ。そが中に金吉銀吾は、恩義の爲に必死を究めて、左右等しく縁連を、

して言承しつゝ、席を蹴立て退く程に、常武は遠侍なる、建屏の蔭になり。今縁連がそのほとりを、過るを竊に呼留めて、御邊大事のおん使を、承り給ふ事、朋友の情歡ぶべし。某今一言をもて聽とせん歟。御邊胤度に追著ば、豫て了簡あるべき事也。胤度なきときは誰か亦、御邊と肩を比るものあらん。自胤の石濱に、移り給ふに及びては、某も亦下風に立べし。かならず脱落給ふな、とそゝのかされて縁連は、意中に曉得て、莞爾とうち笑み、貴諭の趣感佩せり。相こゝろ得て候、といふより速く衝と立て、走り出たる城戸のかたに、はや牽居る栗毛の駒の、鞍に手を掛け閃りと乘て、東を望て奔らすれば、續く從者四五十人、喘々ぞ逐ふたりける。されば又栗飯原首胤度は、その日申比及に、はや八九里の路を來て、杉門の里のこなたなる、並松原を過る程に、後方に聞ゆる馬蹄の響きに、心もとなく見かへれば、思ひがけなき縁連が、鞭を揚て招きつゝ、やをれ栗飯原殿、留り給へ、と呼懸々々、瞬時に乘着て、馬より閃りと下立たり。胤度は且從者に、下知してその馬を勦らせ、縁連には腰着なる、藥籠の藥を與て、その緣由をたづぬれば、縁連暫時呼吸を鎭て、御諚の趣餘の議にあらず。殿には鄰に一大事を、仰遣されたるにより、將て還れ、と仰られたり。とく引かへし給へかし、といふに胤度異議もなく、そは何事歟知るよしなけれど、遠路を厭はで、剩、御邊をもて召しめ給ふは、大

莊の采邑を、横領せん、と竊に計較み、成氏朝臣に内應して、逆心既にその間なし、と仄に聞え候ひしが、こは怨あるものの、讒奸ならんと思ひ捨て、なほ疑はで候ひしに、原來實事で候ひき、といふに自胤氣色變て、しからば霎時も捨置がたし。誰かある。とく逸東太を召よせよ、と烈しき仰に當番なる、近臣忽地奔走して、時を移さず呼繼ぐ程に、常武は謨濟したり、と思ふ心を色にも見せず、遠侍にぞ退きける。さる程に、當城第二の老黨なる、籠山逸東太縁連は、猛の召に物とりあへず、走りて御前に參りしかば、自胤なほも召近づけて、胤度が事の趣、箇樣々々と遺もなく、辭せはしく說示して、汝今よりうち立て、胤度を追留めよ。おもふに渠は路程五六里もゆきぬらん。若早敵地に到りなば、進退尤不便なるべし。栗橋よりこなたにて、追著んこと肝要也。さばれ麁忽の擧動して、暴立なば、後悔せん歟。只何となく命を傳へて、いひ遺せし事あれば、對面していはんと欲す。速に還るべし、と告て且その氣色を見よ。胤度野心なからんには、疑はずしてかへり來つべし。渠もし命を聽ずして、推て彼地に逝んと欲せば、その逆心分明なり。方便をもつて犇々と、搦捕てとく將て來よ。縱敵より加勢有て、胤度を擊漏すとも、嵐山の笛、二口の名刀を、とり復さずはあるべからず。手を空うして立かへらば、われ亦汝を疑ん。よくせよかし、と仰すれば、縁連は一議におよばず、欣然と

得ぬ事にこそ候へ。某はさる御内意を、傳へたる事絶てなし。いぬる比胤度は、某が宿所に來て、何くれとなく相譚ひし語次に、當家の重寶、あらし山の一節截は、貞胤朝臣より六世、相傳のおん物なれども、赤塚殿には、いまだ見ることを得給はざりき。この義和殿の計ひをもて、恩借を許させ給はゞ、さこそ歡び給ふらめ、と又他事もなくいはれしかば、某これを諾ひて、御祕藏の重器たりとも、他家へ貸て見するにあらず、御舍弟の御所望、何か苦しかるべき。近日便宜を得ば、貸進仕るべし、と約束したるにより、昨日かの笛を携て、胤度が宿所に赴き、前約の一節截を、持參して候也。御覽の後速に、返させ給はん事をのみ、憑み奉る、と期を推して、胤度に遞與し候ひき。しかるにきのふは、公私の所要を相兼て、なほ又ゆくべき處あれば、そが儘退出候ひし。爾るに彼笛を、故なく他家へ渡されしなば、綷某が越度となりて、忽地に罪蒙るべし。いと愚にも胤度に、欺れぬる悔しさよ、といふ聲怒をあらはして、頻に嘆息してければ、自胤いたくうち駭きて、そは安からぬ椿事なり。胤度はこの年來、忠信無二の老黨也、と思ひしものを、思ひきや、さる奸曲のあらんとは。この事必情由あるべし、思ひ合することはなきや、と問れて常武頭を傾け、そのよしなきにも候はず。近ごろ世の風聞に、粟飯原首胤度は、千葉一族の家系に誇りて、主君御兄弟を推倒し、武藏七郷、葛西三十箇

第六輯　卷之三

第五十五囘

馬大記賺言して途に籠山を窮せしむ
粟飯原滅族せられて里に犬坂を遺す

品七は興に乘して、馬加が隱慝の、長物がたりに時を移せば、小文吾耳を側だてゝ、感嘆膝の進むを覺えず、春の日も只けふばかり、短しとなん思ひける。當下品七は、小文吾が汲て出せし、茶を遽しくうち喫て、緣頰のほとりなる、扇を把て膝に突建、さる程に、馬加大記常武は、その夜腹心の若黨を、あちこちへ差向て、粟飯原胤度が起行や、否を見よとて遣せしに、そのもの詰旦歸來て、粟飯原殿は黎明の比、主從大約十人許、行裝を整へて、栗橋のかたへ赴き給ひぬ、と報しかば、常武聞てうち頷き、その日赤塚の城に伺候して、時節の安否を訊まうせしかば、自胤對面し給ひて、きのふは守の御內意を傳へられて、怡悅の至り、謹で承りぬ。就て逘り給はりし嵐山の笛に、小篠落葉といふ、予が祕藏の兩刀を相添え、これを胤度に齎して、今朝はや滸我へ遣したり、と仰も果ぬに常武は、うち駭きたる面色して、そはこゝろ

行ける。畢竟胤度、許我へ使して、又甚麼なる話説かある。そはこの巻に著したる、出像を見ても、大かたを知らん。

りける。却說粟飯原胤度は、その日自胤のほとりへ參りて、馬加常武が傳へたる、實胤の密意を演て、件の笛を進らせしかば、自胤感悅大かたならず、石濱殿のおん計ひは、某を思しめす、おん慈愛なるものを、いかでか違背致すべき。現滸我殿へ牽出物に、笛のみにてはいかゞあらん。今一品は何を欲得、とおもひかねつゝ問給へば、胤度霎時沈吟じて、曩に某鎌倉へ、おん使を承りたる折に、彼地にて購得つる、長短二口の刀の事、燒刃尋常ならざるをもて、その儘進上仕りしに、小笹落葉と名づけられて、をさ〳〵御祕藏し給ふならずや。彼兩刀こそ然るべけれ、といひも果ぬに自胤は、頻に頷き微咲て、彼大刀あるを忘れたり。牽出物は、はや整ひぬ。この使に立んもの、首ならで誰かよくせん。疲勞ながら參らずや、と亦他事もなく宣へば、胤度莞然とうち笑て、仰なくとも既にはや、用意を致したり。明朝發足仕らん、といふに自胤歡びて、次の間に侍りたる、近習の者にこゝろ得さして、小篠落葉の兩刀を、嵐山の笛もろ共に、胤度に遞與し給へば、胤度これを受とりて、いそしく宿所に退きつゝ、その日の中に細工人等に、笛と兩刀を裝らるべき、箱兩三箇造らして、猛に整ふ行裝も、現戰國とて逸早き、乘馬、持鎗、甲冑櫃、命は今宵一節切、小篠の雪歟、消にゆく、其處に落葉の兩刀を、携させし若黨二名と、從者すべて十人ばかり、その詰旦まくらかの、滸我を望てぞ起





ふ一節截を、潜やかにとり出し、これを懐にして赤塚なる、粟飯原が宿所に赴き、密議ありと倡へて、あるじと閑室に、對面しつゝ聶くやう、某けふまゐりしは、守の仰によつて也。いまだ聞給はずや。此度滸我殿と兩管領家と、おん和睦の風聞定か也。守には近き程に、家督を赤塚殿（自胤をいふ）に譲り給はん、と思召定められて候に、なほ管領の助力ありといふとも、今さら滸我殿に、わろく思はれ給はんには、よろづに後安かるべからず。されば彼おん和睦の事、世に披露なき先に、使者を滸我殿へ進らせ給はゞ、後々の爲よろしかるべし。なれども石濱より遣さば、鎌倉への聞え影護し。自胤より遣さんに、何ものか疑ふべき。就て滸我殿へ進らすべき牽出物のこと、當家本國に離れしより、させる重器もなし。この一節截は、乃祖貞胤のおん時より、相傳のものにて、御所にも知し召るべければ、これを進らせ給へかし。この餘の物は、自胤のこゝろもて、相添らるべき歟。この事尤密議なれば、汝竊に、胤度が宿所に赴きて、予が意を傳へよ、と仰られて候、と實言しやかに説示して、件の笛を遞與すになん、胤度斜ならず歡びて、一點も疑はず、仰の趣、有がたきまでに承り候ひぬ。速に聞えあげて、仰のまに／＼相計らひ、某滸我へ赴きて、歸城の後、彼處の首尾を、申上候はん。この義宜くおん執成を、憑み奉る、と答しかば、常武は謨濟したり、とこゝろの中に含咲て、石濱へぞ還

の沙汰として、康正元年の冬のころ、入道了心の長男實胤と、二郎自胤を執立て、武藏の石濱赤塚の、兩城に居置れしより、千葉家はいよ〱二流に分れて、互にながく怨讐の、鏃をなん磨ぎ給ひける。しかるに此ころ、千葉庶流の郎黨に、馬加記內常武といふものありて、孝胤に仕へしが、その身過てる事ありて、下總を逐電し、石濱殿へ降參して、千葉の爲體を演說し、奉公無二に進止ふ程に、實胤これを登用して、遂に長臣となし給へば、記內を大記と改めて、特に時めき榮ける。かゝりし程に、實胤ぬしは、年來多病なるをもて、遁世の情願あり。家督を舍弟自胤に、讓らんよしを議し給ふに、馬加常武承て、肚裏におもふやう、赤塚の城中には、粟飯原首胤度、籠山逸東太緣連といふ、兩箇の老黨あり。いづれも當家の一族にて、就中胤度は、下總志摩の如來堂にて、常瑞了心自殺のとき、主君と共に腹切たる、粟飯原右衞門尉が子なるをもて、自胤に隷られたり。自胤家督を承嗣給はゞ、彼兩人も隨ひ來て、第一の權門とならん歟。しからんには、わが權勢を削られて、外聲歹く朽をしかるべし。緣連は血氣の壯佼、ふかき思慮あるものならねば、謀るに難くもあらざめれど、心憎きは胤度也。要なからずや、と密々に、謀を旋らして、これよりの後時々に、赤塚に赴きて、自胤の安否を伺ひ、粟飯原籠山の兩老黨等と、他事なきまでに交りしが、一日常武は、實胤の寶庫より、あらし山とい

噂にて聞しのみ。現世間のさま〴〵なる、高くいはれぬ事ながら、こゝの權門馬加殿は、いとおそろしき人なれども、なすこと毎に苛く謨課て、守ざままでも憚り給ふは、甚麼なる過世あるやらん。といふに小文吾膝を進めて、その縁由聞まほし。世に惹しき筋ありとても、われは他郷のものなるに、こゝに絆問ふ人のなければ、聞とも外へ洩やはする。とくうち出し給ひね。とそゝのかされて品七は、頭を搔きて四下を見かへり、おん身はよろづに辭些く、愼み深き人とし思へば、彼一ト條を告申さん。忘れても洩し給ふな。聞も及せ給ひけん、いぬる享徳四年の秋のころ、下總の千葉家二流に分れて、合戰已ときなかりけり。縁故を原るに、當君故千葉介胤直主は、倘弱冠なりけるに、千葉の一族、原越後介胤房は、滸我の御所成氏朝臣に、從ひ給へと薦めまうし、圓城寺下野守倘任は、鎌倉の管領(山内顯定、扇谷定正)に、從ひ給へと諫めしかば、胤直遂に圓城寺が、議論を是として鎌倉なる、管領方になり給へば、胤房ふかく憤りて、成氏朝臣に加勢を乞受、千葉の馬加陸奥入道光輝と相共に、軍兵數千を引率して、同國多胡、志摩の、二箇城を攻潰し、軈て大將胤直ぬしに、詰腹を切らせしかば、胤直のおん父、前千葉介入道常瑞、舍弟中務入道了心も、齊一おん腹をぞめされける。これにより、成氏朝臣の沙汰として、陸奥入道光輝の嫡男孝胤を、千葉介に任じて、千葉の城に居置れ、又管領家

近う出たるを、品七雲時見かへりて、いたく苦勞をし給ふにや、なべての人のこゝろのどけく、浮れぬはなき花の春に、面色の病者めきたる、瘦さへ見えさせ給ふにこそ。現その該でもあらんかし、不測の事に拘づらひて、旅ゆく人の引留られ、閉籠られて旣にはや、一ト歲ちかくなりぬれば、いと痛しく思ふのみ、又せんすべもなきものから、人は過世の業によりて、智者も勇士も、趣合亙く、生涯頭を擧難るは、世にその儔多くあり。近くはこの武藏なる大塚に、犬塚番作といひし猛者は、家督を姉夫に横領せられて、憤りにや堪ざりけん、腹かき砍て死給ひき。その獨子も親に劣らぬ、器量ありとか人はいひしが、いかになりけん、よくは知らねど、今はその迹絕たりとぞ。かゝれば智者でも勇士でも、時に遇ねば埋れて、人にも知られずなるものあり。さばれ人は七轉、八起とかいふ世話もあるに、なほ年わかく見え給へば、よしや一チ年三个月、囚徒に等しきも、隨意になる日のなからずやは。あまりにいたく物を思へば、命を縮るものぞとよ。みづから心を長閑くもちて、厄の闋るを待給ひね。と慰られて小文吾は、胷うち騷ぐを推鎭め、いはるゝ趣理り也。われも亦犬塚親子の。名のみは豫て聞たるなり。和殿は相識なりし歟。と問れて品七頭をうち掉り、否相識ではなけれども、大塚の里人に、糠助といふものは、そが先代より由緣あり。渠が世に在りし程は、訪もし訊れもせしにより、そが

おそるべきの齢にして、侄は倘鳩車、竹馬の年にぞ有ける。これを思ひ彼を思へは、身はこここにありといへども、心は四方に走らぬ日もなし。佛說に聞く、火宅の煩惱、苦海の風波はこれなるべし。是併、馬加大記が姤諱に起りて、虐らるゝことかくの如し。渠は奸曲の小人なり。誠なるかな大功は、細謹を顧ず、大禮には小讓を、辭せずとこそ聞くものを、あの諸折戸を推破て、出んことの難くもあらねど、この處だも鎖を披かず。いかでか城門を出されんや。憖に抑留せられれば、求て恥辱を累るに近し。いかにすべき、と胸にのみ、思ひかねつゝ飛鳥の、翅なき身を恨み不樂、音にこそ鳴ね果しなき、籠に養れて友呼かはす、雀色時墓なくも、又夕ぐれになりにけり。かくて秋ゆき冬枯れの、寂しき宿に年暮て、明れば文明十一年、春も三月になりしかば、われのみならで見る人もなき、庭の花のいろ〳〵なる、いと美しく咲く程に、彼帚とる蒼頭の、常よりもしば〳〵來て、日ぐらし草を刈てけり。そが中に、品七とかいふ老蒼頭のみ、小文吾を訪慰めて、木訥ながら物のいひざま、老實だちたるものなれば、小文吾も亦隔なく、その鎌休めの折毎に、煎茶を飲せなどしつゝ、江湖上の事、今昔を、うちかたらはせて聞しかば、品七ふかく歡びて、稍親みを累る程に、一日品七ひとり來つ、日ながきころのことなれば、午餉過して緣頰に、尻うち掛て憩ひてをり。小文吾これを勞ひて、又端

退きける。小文吾は常武が、君命に假托て、われを留るなるべし、と既に意中に曉りにければ、敢てふたゝび爭はず。老僕九念次に誘引れて、幹淨房にゆきて見るに、二間に九尺の數奇屋にして、浴室あり厠あり。その次の間は、席薦纔に三ひらを布て、夜物を藏る板厨あり。あなたの庭より覓して曲演水盤などへ水を沃するは、夏を宗とすればにや。四目笆に咲く芳宜の、時しり顔なる、神影石に倚る小松の、插頭貌なる、夕日を抱く寒蟬は、いづれの杪ぞ。朝露に消る丹鳥は、かしこの草なり。渇するときは、爐に百年の釜あり。倦ときは、庭に䟽步の地あり。旨繫に眺なきにあらねど、惆悵たる心の憂は、亦遣かたもなかりけり。この處三方は築垣にして、南面に諸折戸あり。あれどもなきに異ならで、常にあなたより鎖したり。かゝれば罪なくして、楚囚の如く、旅館さながら獄舍に似たり。これよりの後、男の童等が、三たびの飯を贈來ぬると、老蒼頭等が、月の中に兩三日、庭の小草を刈拂ひ、落葉を掃除しに來ぬるのみなれば、譚敵となるよしもなし。わが身には似で生憎に、過る阴阳をとゞめかねたる、小文吾頻に焦燥て、憂苦に堪ず天うち仰ぎ、いかなれば枉津日の、神のしうねく黄緣て、かくまでに物をおもはするぞ。荒芽山の厄難より、別れし四友の存亡を、夢にだも知るよしなく、預けられたる兩箇の女人の、往方は今に定かならず。舊里には、親あり侄あり。父は喜ぶべく、

問給へ。舊里にはなほ老父あり。某いまだ五斗米に腰を折めず、人の爲に刺客とならず。初は市人、今は浪人、古那屋が男兒とたづね給はゞ、隱れあるべうも候はず。この義をもつて今一度、某が爲に諫め給はゞ、彼おん疑ひを解れん事、春の氷の如くなるべし。愛顧を祈り奉る。と、只管に請求れば、常武頻に嗟嘆して、いはるゝ趣みな理あり。しかれども行徳は、當家の舊領なるものから、今は千葉の孝胤ぬしの、釆邑なれば敵地也。いかでか輙く人をもて、和殿の素生を問れんや。縱問ふよしありとても、敵地の人の答るを、實言と信んは疎なるべし。とてもかくても今速に、和殿を放遣ん事は、わがちからに及びがたし。氣ながく時を俟給へ。と親切めかせし便佞利口に、うけ引くべくもあらざれば、小文吾は愀然と、手を叉きて應せず。常武これを慰めて、犬田どの聞給はずや。近き比ある人の歌にも、

いそがずは濡れざらましを旅人のあとより霽るゝ野路のむら雨

短慮は功をなしがたし。いつを限りと定かならぬ、逗留の事なるに、母屋は人の出入繁くて、煩しき事多かるべし。奥庭のあなたには、些小の幹淨房あり。けふより彼處に起臥して、志を頤ひ給へ。衣食の事、その餘のものも、心づきなきことあらば、思ひ限なく老僕等に、如此如此といひ給へ。復こそ對面すべけれ。といひ果て身を起し、童扈從を隨へて、しづかに奥へぞ

りなけれど、いかにせん、自胤和殿を疑ひ給へば、緈速には決しがたかり。その故は、彼あらし山の笛の事、和殿に船虫が贈りしを、陽受て板厨の中へ、遺置たるよしなれども、受たると授ざるとは證据なし。只是のみならで、當夜中途に癖者ありて、彼船虫を奪去りぬ。是によりて再おもふに、船虫が首伏は、苦痛に堪ぬ虛言にて、冤枉を憐むものの、奪取て走らしたる歟、これも亦料りがたし。是疑ひの一ッ也。ふたゝびこれに加るに、和殿は智勇兼備の人、武藝も亦雋れたり。人を用る戰國に、往ところとして售れずして、流浪せらるゝ事こゝろ得がたし。是疑ひの二ッなり。察するに、千葉の孝胤の間者ならずは、里見歟滸我の間諜者ならん。速に禁獄して、予が推量に違ずは、首を河原に殺梟て、武備を隣國に示すべし、と君命嚴なるものから、某しば〳〵諫めしかども、眞僞明白の證なければ某さへに疑れて、殆寒心すること多かり。今且く俟給へ。某方便を旋らして、主君の疑ひを解ん日に、進退その意に儘すべし。といはれて驚く小文吾は、又一層の患ひをかさねて、刺るゝ如き胸膈に、とさまかうさま思へども、思ひかねつゝ貌を改め、思ひがけなきおん疑ひは、理りとしも覺ぬ也。彼船虫が逐電より、還て某を疑れて、渠がまさしき首伏さへ、實事ならじとせらるゝは、抑いかなる道理ぞや。又某を敵がたの、間者ならんと思はれなば、人を行德へ走らして、彼處の里人等に


馬加常武


小文吾抑留せらる
常武よ謝す
坂田金平太
小文吾

ば幸ひなるべし。けふはたま〳〵半日の、閑暇を得て候へば、對面し候はん、といはれたり。誘給へ。といひかけて、先に立つゝ間毎の紙門を、押開々々、いと奥まりたる、小書院に將てゆく程に、馬加大記常武は、縮羅の單衣に、精好の袴を穿て、聖柄の短刀を橫佩、年十三四なる童扈從に、大刀を持して後方に侍らし、二間の棲牀を背にして、優に坐したり。その緣頰には、肥て色黑く、力士めきたる若黨四五名、蕉布の袴の稜取たるが、各々二尺あまりなる、巨內刀を帶て、肘を張り肩を怒らし、こなたを見出したる眼睛、素破といはゞ、組も伏せんと思ふ面構したり。さればこの馬加が、大く傲れる威權は、主の自胤に、十倍したるなるべし。當下老僕丸念次は、遙にあるじの方に向ひて、是なん犬田小文吾ぬしで候。と謁を執て退く程に、小文吾は、進みて紙門の裡に入り、恭しく額づきたれども、常武は只膝に、手を加えしのみにて禮を復さず。側に措たる扇を取て、こゝへ〳〵。と呼近づくるに、小文吾はなほ舊の處にをり。然とて臆せし氣色もなく、常武にうち對ひて、某不測の事によりて、當所に抑留せらるゝ事、一日千秋の思ひあり。傳へも聞せ給ひけん、途に同行を失ひて、索遣まく欲するのみ。笛の盜賊のあらはれしより、させる所要もあるまじきに、とく〳〵放遣れんことのみ、願しくこそ候へ。といふに常武頷きて、愁訴寔に理り也。某その謫を思ふをもて、心ぐるしさ限

意をもて致んには、はやく小文吾を獄舍に囚へて、笞を重く責懲し、いよ〳〵敵の間者ならば、首を河原に殺梟て、後來を誡むべし。是當家の武威を示す、第一義にこそ候へ。と言葉巧に說破れば、自胤ふたゝび沈吟じて、敵の間者と間者ならぬは、寔に測りがたしといへども、假染ながら功あるものを、賞せずして罰せん事は、よろしき沙汰ともおもはえず。事の眞僞の知らるゝ限り、只いつまでも留め置て、日每の饗應等閑ならずは、よしや敵國の間者なりとも、志を轉して、遂に服從する事あらん。これより外にせんすべなし。と又他事もなく宣へば、常武終に拒み難て、しからば彼小文吾を、某に預け給へ。衣食の賜もの、こゝろを盡して、眞僞を撈り候はん。といふに自胤歡ばしげに、疑心暗鬼を生ずといへば、疑はしき事ありとも、同僚們と僉議して、疎忽の相計ひすべからず。と儆めたまふを常武は、生應して退出けり。さる程に犬田小文吾は、その日よりして馬加が、客房に留められて、朝夕の饌を羞る外には、訪慰るものもなく、あるじも對面することなければ、ふかくこゝろに訝りて、胸安からぬ旅宿の床に、昨とくらし今と旦せば、一ト日も千載に異ならで、憂をやるせはなかりけり。かくて第三日に至りて、家の老僕、袖角九念次とか呼るゝもの、小文吾がほとりに來て、主人大記の口狀にて候。よろづの務に暇なくて、宿所にをること稀なれば、欵待もさぞ疎ならんを、許されな

も、彼小文吾が事をおもふに、並四郎に鎗もて刺れて、弱り果たる野猪ならば、撲殺すも易かるべし。又並四郎を害せしは、欺撃にて手柄にならず。就中彼笛は、小文吾が所持せしものにて、後難を思ふにより、竊に板廚へ遺し置きし歟、これも亦知るべからず。かゝればはじめ船虫が、訴出しが實事にて、小文吾が陳ずる所、虚言にてもあるべき歟。もししからんには船虫が、冤枉を憐むもの、渠を奪ふて走らせし歟。船虫既に逐電して、再度の糾問によしなければ、何をもて、この疑ひを解き候べき。然るを今更小文吾に、御對面の事などは、物體なくこそ候はめ。と憚る氣色もなくまうしゝかば、自胤且く沈吟じて、いはるゝ趣理なきにあらねど、その疑ひは人によるべし。竊に小文吾が、進止を傳聞て、つら〳〵その人となりを思ふに、詭譎をもて人を虐げ、褒譽を求て僥幸を、欲するものにはあるべからず。再三再四の勘辨こそ、あらまほしけれ。と宣へば、常武かさねて、心の惑ひは愛すると、憎むとの深きに起れり。縦小文吾智勇ありて、言と行の正しくとも、倘敵國の間者ならば、怕るべきものに候はずや。その故鄕は下總にて、行德わたりのものとしいへば、孝胤ぬしの腹心歟。(千葉介孝胤當時千葉の城に在り)然らずは里見歟、滸我殿(成氏をいふ)の、間諜者にて候はん。凡智勇に捷れしものの、人を用る戰國に、主どりもせず處々と、諸國を流浪せん事は、あるべうも候はず。今愚

なば、千騎にも優るべし。とく對面せまほしけれ、とこゝろに思ひ給へども、長臣等がまうしも出ぬに、召出すべきよしのなければ、且く默止給ふ程に、次の日馬加常武は、ひとり後堂に見參して、名笛ふたゝび寳庫に返りし、悅びを述まうし、且阿佐谷の村長等が、謬て船虫を、走らしたる絆の趣、幷に畑上語路五郎が罪科の事、箇樣々々と聞えあげて、渠等は禁獄せしめたり。なほ八方へ部して、彼船虫を駈索なば、追捕輙く候べし。縱往方のしれずとも、原是匹婦の事なれば、喪家の狗に異ならず。終にはみづから斃れんに、賢慮になかけ給ひそ。と異もなげにまうししかば、自胤聞て眉を顰め、失たる笛の復るといへども、なほ彼賊婦を鞫問せば、小篠落葉の兩刀の、いで來ることもあるべかりしに、語路五郎が疎忽によりて、村長等が過失は、禁獄いづれも法に當れり。おもふにいにしへの賢君は、古器名物を寳とせず、良臣賢者を貨とすとは、尙書に本文見えたるならずや。かゝれば予が欲するものは、あらし山の笛よりも、小篠落葉の大刀よりも、彼犬田小文吾なり。渠が野猪を搏にしたる、又並四郎に行包を、刺せて輙くこれを擊留め、又船虫が贈りたる、笛を遺して奸計の、杪を缺きしは大勇明智、賞感尤淺からず。其方も亦このこゝろもて、旅館の管待等閑ならずは、勸めて當家へ仕へさせよ。遠からず召よせて、對面すべう思ふはいかに。と問れて常武小膝を進め、仰では候へど

長も莊客等も、緊しく禁獄せしめたり。なほ同類を穿鑿せば、船虫を捕へんことも、遠からずこそ候はめ。といはせも果ず常武は、勃然として眼を瞪らし、さればこそいはざる事歟。船虫を走らしたる、村長等が罪輕きにあらねど、渠が宿所に留め措て、絆を等閑に致したる、和主が罪はいよ〳〵重かり。誰かある、是奴をはやく搦めずや。と呼はる聲に當番の、若侍等兩三名、阿と應て走り來つ、語路五郎を緣頬より、衝落し推伏せて、忽地索をかけしかば、常武獄舍に送らして、ながく陽光も見せざりけり。さる程に、阿佐谷の村長、莊客等が、親族妻子は、事の趣を傳聞て、駭歎くこと大かたならず。日每に石濱の城に參りて、哀み訴へ、或は田を售り、林を售て、竊に馬加主從に、物あまた贈りしかば、大約一月あまりを歷て、村長等は辛じて、僉禁獄を免されけり。只畑上語路五郎のみ、この恩赦に得あはずして、獄舍の中に身まかりければ、これを憐むものもあり、又譏るものもありて、渠は年來民の膏腴を絞りたる惡報にて、馬加殿の鬚の塵を、探損ねしより憎れて、可惜命を隕しぬ。と竊にこれを評するものから、妻も近ごろ世を去りて、歎きを遺す子もなければ、只親族と朋友等が、その亡骸を葬りけり。是より先に、千葉介自胤は、失せて年歷し嵐山の、尺八の手に入りしより、その日ははやく歸城して、彼犬田とか聞えたる、勇士の事を高成は、常武に告たる歟。渠を當家に留め

頻りに轟つく霹靂火の、墜るが如く聲ふり發して、是奴迯とて迯さんや。汝等不覺に船虫を、捕迯せしにはあらずして、同類に相謂れ、渠を落してさま〴〵に、虚言をまうすならん。わが夜を犯して出て來つるも、馬加殿の指揮によりて、彼罪人を翌迄またで、獄舍に繫ん爲なるに、汝等が越度もて、連係せられん朽をしさよ。一人も漏さず縛めずや。と烈しき下知に夥兵們、齊一撥と走蒐て、村長共に十人許、數珠繫にしてければ、衆皆面色菜の如く、戰慄れて齒も合ぬ、口に唱る念佛を、囃す鰍虫の鉦敲き、宿に妻子のまつ虫と、いとゞ鳴るゝ鈴虫の、りん囘應報過世の業と、悟らばおもひきり〴〵す、翌はこの野の螢より、先にや滅ん、とうち歎くを、追立させて語路五郎は、石濱の城に歸るとやがて、その夜の中に村長等を、皆獄舍にぞ繫せける。とかくする程にはや、曉がたになりしかば、語路五郎は馬加が、門戸を敲んはさすがにて、翌こそ告め、と思ひつゝ、霎時臥房に入りしより、既に天は明、日は昇て、巳の比及になりしかば、遲かりけり、と忙々しく、衣裳を改めて出るほどに、馬加常武は既にはや問注所に在りとおぼしく、われを召るゝ使に遭ぬ。胸うち騷ぐを鎭めもあへず、使とともに參りしかば、常武うち見て、待わびたり。彼船虫をいかにしたる。と問れて語路五郎蔽すに由なく、村長等が不覺にて、船虫を猾者に、奪去られしといふ一條を、おそる〳〵報知して、彼村

かくる、刀の柄の摧るばかりに、握詰てぞ睨まへたる。氣色に呆るゝ村長等は、忙慌手を抗て、御眼代さま早らせ給ふな。狐の所爲では候はず。察する所、同類の、悪棍等が所爲なるべし。嚮に船虫を將て參れといふ、おん下知狀を給はりしかば、殊さら夜行の用心して、この荘客們八九名と、彼罪人を守護しつゝ、この處まで來る程に、あの杜の樹蔭より、許多の癖者顯れ出て、或は鳥銃、或は白刃、得物々〳〵をうち放うち振り、驀直に撃んとす。これより後はまうさずとも、御推量にも定かなるべし。扠近き里人等を、駈催して加勢としつゝ、ふたゝびここに來て見れば、人ひとりもをらばこそ。只斷捨たる、捕索の、小草の上に遺りしのみ。既にはや船虫を、奪ひ去られて、剰、癖者ひとりも捕得ざれば、まうし釋は立がたからん、いかにせまし、と額を集めて、商量果しなき折から、思ひがけなく此處を、過らせ給ふに度を失ふて、まうさんことの後前なりしは、恐れ入て候。と告るに駭く語路五郎は、夥兵等と面を見合して、呆るゝこと半晌ばかり、忽地聲を苛立て、そは甚胡亂也。われは決して船虫を、將て參れといふ下知狀を、遣せし事はなし。その狀あらばとく見せよ。といはれて村長遽しく、懐袂犢鼻褌まで、搔撈りても、揮ふて見ても、鼻紙さへになかりけり。悲しや嚮に逃るとき、ふり落せしか。と身を起しつゝ、月を燭に彼此と、草推わきて索れば、ます〳〵焦燥語路五郎、

阿佐谷村、身の過をしばく勸解て、やうやく宿所にかへりつゝ、猛に夥兵を呼聚合て、石濱の城戸を出るときに、總泉寺の鐘鎬々と、夜ははや二更になりにけり。

第五十四回

常武疑て一犬士を囚ふ
品七漫に奸臣を話説す

却說畑上語路五郎は、蕉火に路振照らす、夥兵等をいそがして、阿佐谷村へ赴く程に、ゆくこといまだ六七町に過ぎず、と見れば人あまた、前程の小草折敷て、何事やらん噱々と、うち相譚ふ聲してけれぱ、ふかくこゝろに怪みつゝ、近づくまゝに呼かけて、そは何ものぞ。と咎れば、是則別人ならず、阿佐谷なる村長が、莊客們とこゝに聚合て、絆の僉議をするなりけり。當下村長は、いと面なげに立出て、道次に額をつき、御眼代さま某等を、救はせ給へ。とうち勸解れば、莊客們も異口同音に、お慈悲を仰ぎ奉る、救はせ給へ。と叫ぶにぞ、語路五郎訝りて、汝等は船虫を、うち戍りをるべきに、何等の故にこゝに聚合る。且われを見て救ひを乞ふこと、一切そのこゝろを得ず。おもふに狐に魅されたる歟。然らずは汝等が狐にて、魅さんと欲するとも、われ豈その術に乘せられんや。疾正體を顯さずは、目にもの見せん。と叱うち

くても當家の法令や建つ。奈何々々。と聲高やかに、いひ懲されて語路五郎は、頭を席薦に痤るのみ、返す辭もなかりけり。常武呵々とうち笑ひて、すべて和殿が出來過たる、けふのみに限らねど、此度の事は用捨しがたし。こは又後日に議すべき也。彼船虫はいかにしたる。と問れて僅に頭を擡、さゝ候嚢に某夥兵をもて、おん下知を伺はせしに、犬田ははやく將て參れ。船虫は村長に、預置くこそよかゝめれ。その故は如此々々と、承て候へば、彼處に遺し留めたり。といはせも果ず常武は、ふたゝび聲をふり立て、そは甚しき錯誤也。わがいひつるは然にあらず、船虫をば牽もて來よ。犬田も長途の疲勞もあらんに、今宵は且村長許、留るこそよかゝめれ、と答たるを何とか聞たる。頋ふに彼船虫は、女流に似げなき癖者なるを、武藝に疎き農夫等に、任して捕も逃しなば、笛と共に紛失したる、小篠落葉のおん兩刀を、かさねて索るよすがなし。使に立たる夥兵等が、傳へ違ることありとも、三歲兒も思はん理の當然。その職に居て心もつかず、大かたならぬ罪人を、等閑にして失あらば、抑誰が越度ぞや。和殿みづから彼處に赴き、とく船虫を牽もてかへりて、今宵獄舍に繋がずは、怠慢の罪脱れがたし。さてもさても。と繰りかへす、論議に小夜の更るまで、語路五郎は只權威に怕れて、隻言一句も陳じ得ず、理を非に枉る膝節の、折るゝばかりに居縮まる、痿痺は京へ登らずとも、ゆかでかなはぬ

る。折衷前齣再說、畑上語路五郎高成は、犬田小文吾を伴ふて、その日晡時ばかりに、石濱へかへり來て、長臣馬加大記常武が宿所に赴き、有功の旅人犬田小文吾を將て、歸城のよしを報しかば、常武聽て老僕を召て、犬田とかいふ旅人を、客房にて休息させよ。語路五郎には今出て、對面すべし、といへといふに、老僕はこゝろ得果て立ぬ。かくて畑上語路五郎は、玄關の側なる、褊室にをり、あるじの出るを俟程に、秋の日はやく沒果たり。當下馬加常武は、若黨に燭を秉らしつゝ、やゝ土圭の間に坐を占て、こなたへ、と呼入るゝに、語路五郎は阿とばかり、應て膝行頓首しつ、あへて隔の敷居を踰さず、嚮にも告たる事ながら、並四郎船虫等が事の顚末、且犬田小文吾が武勇の事、又阿佐谷の田中にて、あらし山の尺八を、主君自胤に進らせたる、縡の趣如此々々と、はじめ尾を演しかば、常武聞て冷咲ひ、その並四郎とかいふ奴が、小文吾を殺さんと、謀りしことは一定なりとも、件の笛の失たるは、昨今の事にあらず。はや廿年に近ければ、必しも並四郎を、その賊也とは定めがたし。賊物としらずして、物買ふこともあるぞかし。そはとまれかくもあれ、これらのよしを逸速く、俺們には告ずして、中途に主君に聞えあげ、贓件の笛をも、俺們には見せずして、途にて主君に進らせしは、烏滸とやいはん、越度とやいはん。その職にあらずして、したり皃なる計ひは、これ長臣を侮る也。か

れ、今亦俄頃に夜を犯して、召さるゝはいかにぞや。と呟きながら下知狀を、懷に刺入れて、言承をして使をかへしつ。扨莊客們によしを告て、船虫を牽出すに、路次の用心等閑ならず、蕉火を把、捍棒を携たるもの七八人、索とりのもの兩三人、村長を後に立して、各々隊伍を整へつゝ、石濱を望ていそぐ程に、宵ははや二更の比になりぬ。既にして、石濱の城へは、坂東路一里(六町なり)あまりになりにたり。とく〳〵走れ、といそがす程に、前路の杜の樹蔭より、誰とはしらず忽然と、放かくる鳥銃の、音に駭く莊客們、こはそもいかに、とばかりに、慌忙き迯るもあり、腰を脫して輾ぶもあり。そが中に村長も、さらに生たる心持はせねど、猶罪人こそ大切なれ、と思へば目今莊客們が、捨たる索の端搔拿て、牽つゝ迯んとする程に、罩面したる癖者四五人、手に手に刀をうち振て、咄と嚾て殺て蒐れば、村長いかでか怺ふべき、亦船虫をうち捨て、喘々ぞ逃たりける。扨あるべきにあらざれば、村長は先に逃たる、莊客們を呼集ど、その地方の里人さへ、二三十人駈催して、舊所へゆきて見るに、人影はなくて、虫のみ聚く、小草の上に斷棄たる、捕索ばかり遺りたり。原來は、船虫を、奪ひ去られたるにこそ。こは同類の惡棍等が、所爲なるべし、と思へども、その一人だも捕得ざれば、まうし釋は立がたからん。いかにすべき、と路傍に、ついゐて額を集めつゝ、商量に小夜深にけ

勸て、小文吾を欵待す程に、秋の日既にかたむきて、未のあゆみ過にけり。浩處に、石濱へ遣したる、兩箇の夥兵かへり來て、某等、嚮に馬加殿の宿所にまゐりて、口狀を演しかば、且くして執繼の若黨をもておん答あり。旅人犬田小文吾をば、語路五郎伴ふて、城中へ將て還るべし。又賊婦船虫をば、なほ村長等に預け置て、翌こそ獄舍に繋ぐべけれ。いかにとならば、各々かへり參らん比は、はや黃昏になるべきに、さる癖者は路次の程、心もとなく思へば也。この意を得られ候へ、と傳られて候が。といふに語路五郎領きて、かたの如く相計ひつ。先村長にこころ得さして、莊客們を呼聚合、汝等は終夜、船虫を緊しく戍りて、洊て下知のあらん時、とく城中へ牽もて來よ。といと嚴に下知を傳へて、扨小文吾に如此々々、と事の趣を告しらし、將てかへらんとていそがすに、小文吾は濡衣の、乾きし甲斐もなまじいに、出水の河に留らるゝ、心持はすれど今さらに、勢ひ推辭むべくもあらねば、心苛だつ瑣細栗の、しぶしぶながら承引けり。かくて畑上語路五郎は、小文吾を俱し、夥兵等を將て、はや石濱へ立還れば、村長は莊客等と、團坐をしつゝ船虫を、縛めたる儘うち戍るに、その日も暮て甲夜の程、畑上殿の下知狀とて、下部使のもて來ぬるを、村長やがて披き見ろに、今宵罪人船虫を、將て參るべし。と書れたり。あなこゝろも得ぬ事かな。嚮には夜分の用心とて、船虫を預け措

の兩刀と、この笛をさへ失ひしより、年々に徇知さして、穿鑿憮りなければにや、盜賊やうやく顯れて、復この笛を見つる事、歡び何事かこれにますべき。彼船虫とかいふ賊婦を、緊しく鞠問したらんには、等しく失たる兩刀の、ふたゝび出來る事もあるべし。さばれ件の小篠落葉は、先君相傳の刀にあらず、只假染の祕藏のみ。笛は當家の重寶なれば、これ崐山の片玉に勝れり。しかるをその盜賊の、わが知る村に年來在りしを、汝も亦村長等も、けふまで絕て知らざりしは、怠慢の罪ありといへども、此度の功もて償ひ得させん。さるにても、彼犬田小文吾とやらんは、多く得がたき智勇の武士也。そのもの浪人ならんには、左も右も說勸めて、當家の股肱となす事あらば、是汝達が忠なるべし。けふ獵くらす小鳥より、その大鳥こそ獲まほしけれ。とは思へどもこれらのよしを、馬加大記に報知して、渠より聞えあげさせよ。わが歸城せん比及まで、犬田を厚く管待して、將て參るこそよかゝめれ。よくせよかし。と叮嚀に、ころ得さして床几をはなち、衝と立ときに近臣に、笛を持して眞嘗成、簑輪のかたへ過り給へば、語路五郎は思はずも、背に汗を流すまでに、いたく恐れ且恥て、目送る事半晌ばかり、ややうやくに身を起して、膝の塵埃を拂ひつゝ、村長許赴きて、事熟たる夥兵兩名を、石濱の城に還して、長臣馬加大記常武に、事の趣を報知らせ、その使のかへり來るまで、みづから盃を

き人の鈍ましや。といはせもあへず語路五郎は、眼を睜り肘を張り、怒れる聲を戰して、慮外の嘲哢、大膽不敵、是奴飽まで鞭懲さずは、輙く實を吐くべくもあらず。とく〳〵責よ。と敦圍く折から、高屋の村長走り來て、刀禰ばら知し召れずや。守には（千葉介自胤をいふ）小鳥獵の爲にとて、今朝しも御館を出させ給ひて、こゝらを逍遙し給へば、はやおん間も遠からず。そのおんこゝろ得あるべくもや。と報るに驚く語路五郎は、夥兵に下知して船虫を、阿佐谷の村長許牽もてゆかしめ、又犬田小文吾をも、おなじ宿所に伴ふて、酒食を羞めて欵待せよ。と阿佐谷高屋の村長等に、言葉せわしく分付て、僉共侶に追立遣し、その身は道次についゐて、主君自胤の過り給ふを、遙にうち見て待程に、千葉介自胤は、鳥網吹箭黐竿なンどを、近臣等に持しつゝ、四五十名の從者を、後に從へ先に立して、こなたへあゆみ近づき給ふに、眼代畑上語路五郎が、道次に額づきゐたるを、うち見て訝り立留り、近臣をもて故もやある、と問せ給ふに語路五郎は、おそる〳〵小膝を進めて、並四郎船虫等が、惡事の顚末を始として、旅人犬田小文吾が、智勇の働き如此々々、とはからずも手に入たるあらし山の笛の事、すべて遺なく告まうしつゝ、件の笛を懷より、とう出て返しまゐらすれば、自胤は聞く事每に、駭き嘆じ且歡て、手づから笛を嚢より、出してうち見て、うち戴き、われ弱冠の比謬て、小篠落葉




兩手を束縛せられて小文吾松虫を蹴挫ぐ
小文吾

ずして、辱めを受るといへども、犯人立地にあらはれて、疑を解れし事、歡びこれにますものなし。浮浪人では候へども、然とて仕官は願しからず。此度の旅にゆくりなく、同行等を失ふて、索遭まく欲するのみ。所要果なばこの處より、とく放遣り給へかし。と推辭を聽かず頭をうち掉り、いかでかは今放遣るべき。仕官の事はとまれかくまれ、旅客なりとも領主に功あり。然るを聞えもあげずして、立別れなば某は、後日の咎めを脱れがたし。御邊がゆくと留るとは、姑くこゝに議すべからず。といひつゝ夥兵が牽居たる、船虫を佗と見て、やをれ牝盜、家を抱きて臭きを忘れし、汝は非義の怨をもて、犬田ぬしを撃んとせしとき、夥兵等が愁に、女流と思ひ侮りて、不覺の働きをしたれども、わが身みづから逆へ撃ば、搦捕ることいと易し。なれども特に大切なる、笛を損ふこともや、とそこらに遠慮せし程に、小文吾どのを勞したり。かくても挑む歟、陳ずる歟。身より出たる鏥鎗に、縫れんは現天罰ぞ、とみづから思ひ諦めて、あらし山の尺八を、並四郎が竊たる、事の顚末同類まで、首伏せずや。と責問へば、船虫は低俯たる、頭を擡て冷笑ひ、あないかめしき問狀に、勢ひをもて威せばとて、なきことをいふ吾儕に侍らず。同類の名を聞たくは、そをうち出すに難くもあらねど、人の痛みになることあらん、と思ふていはぬが還て情。絆のこゝろを得知らずは、御家老さまに問給へ。氣疎

文吾を、撃んとするを夥兵們、驚騒ぎて立塞り、こは狼藉也不敵也。鎮れやッ。と制すれども、耳にもかけず突退る、女流に似げなき梟暴早剽、進むに前なき勢ひと、且その刃に辟易して、左右なく搦め得ざりける。透を得たり、と船虫は、小文吾目がけて突懸る、刃を外す身の翻し、捕壓へんにも兩の手は、背にかゝる縛の、索も心も紊れぬ大勇、避る刃尖あちこちと、再三たび疲勞して、足を蹉して丁と蹶る、角觝に熟たる力士の突衝に、船虫は霎時も得堪ず、弱腰撲れて横ざまに、撻と轉ぶを起しも立ず、片足に楚と踏すえたり。これにぞ弱る船虫は、虫ばかりなる息垂絶に、血の氣は失て全身も、眼も白くなるまで、に苦痛間なき程しもあらせず、夥兵等は面なげに、僉うち聚ひ立代りて、重索被る船虫を、引起してぞ推居ける。當下畑上語路五郎は、小文吾が縛の、索を手づから解棄て、傍に請じて辭を改め、鄕には玉石いまだ分れず、片言以獄を、折めんとせし疎忽の一條、今さら謝するにあまりあり。就中驚きおもふ、御邊兩手を括られながら、猛惡の船虫を、拉ぎ給ひたる、武藝といひ、膂力といひ、當今得がたき勇士にこそ。並四郎等が積惡發覺れ、喪たる笛の手に入る事も、みな是御邊の貺ものなれば、宜く吹噓いたすべし。御邊官途の情願ありて、武者修行などし給はゞ、今より當所に杖を駐めて、わが主君千葉殿に、仕へ給へ。と叮嚀に、いはれて小文吾うち微笑み、その罪にあら

見ても、席薦を見ても定かにて、紛れあるべうも候はず。今さら躊躇ふことかは。といはれて畑上語路五郎は、慚愧に勝ず夥兵に下知して、且船虫をうち戍らせ、遥後方に侍りたる、村長を案内に立して、さらに又兩三名の、夥兵等をいそがしつゝ、とく並四郎が宿所に到て、屋捜せよとぞ下知しける。且くして夥兵等は、村長共侶かへり來つ、跪坐きて報るやう、某等並四郎が、宿所を展檢してけるに、笛は果して褊窄なる、袋戸棚の裏面にあり。又並四郎が亡骸は、如此々々なり。この餘蒲團と席薦の大刀迹、人の出入せん爲に歟、砍落したる彼壁の、爲體に至るまで、すべてこの犬田とやらんが、口狀と吻合せり。先はやこれを御覽ぜよ。といひつゝ一人ゝさし寄て、笛を遞與せば、語路五郎は、嚢の紐を解かけて、手ばやく出して本末を、と見かう見つゝ大きに駭き、この樺巻といひ歌といひ、こは昔年故ありて、紛失したる當家の重寶、嵐山の一節切に疑ひなし。原來件の並四郎は、この笛を竊るもの、船虫が奸智もて、夫の怨を復さん、と謀りしより事顯れて、失たる笛の出ること、奇也々々。と小膝を敲て、只管感嘆したりける。船虫は小文吾に、伎倆のうらを缺れたる、こゝに至て一言半句も、諍ひ誣るよしのなければ、怒れる眼に朱を沃ぐ、兇相悪鬼に異ならず。帯の間に隱したる、准備の魚切庖丁を、逆手に拿て閃めかし、良人の讐敵。と叫びも果ず、跳り出走り蒐て、縛められたる小

りたる、啞子もかくやと思ふのみ、なほ疑ひは釋ざりける。當下犬田小文吾は、左右を佶と見かへりて、各位何と見給ひたる。曩にもよしを報たる如く、その夜さり船虫が、言葉巧みに彼笛を、先祖相傳のもの也とて、某に贈りたる、事の虛實も心の邪正も、いまだ知るよしなかりしかども、いと穢れたる人妻の、その手より今何をか受くべき。仂なしとは思ひながら、しばしば推辭に許さねば、姑くその意に任しつゝ、爾後渠は菩提所へとて、出てゆきたる留守の程、件の笛を臂近なる、板廚の内に遺し置きたり。されども笛を包て見せたる、行袱の形初に似ざれば、蚊遣火盆に燃殘りたる、枯木の枝を卷籠つゝ、そが儘肩にうち掛て、別れて彼處を立出しは、欺くに似たれども、濁りに染ぬ心の潔白。こゝに至て正に知る、彼尺八は船虫等が、先祖の遺愛にあらずして、並四郎が竊みしを、領主の穿鑿嚴なれば、年來ふかく祕おきけん。それを吾儕に贈り與へて、笛の賊とし訴て、無實の罪に陷れ、夫の怨を復さん、とたくみし賊婦の邪智奸計、おそるべし、嗚呼懼るべし。この外にも亦證据あり。その行袱なる太刀迹は、その夜さり並四郎が某なりと思ひたがへて、小襖の上より刺徹したる、雨衣さへに破れたり。かくても惑ひのまだ曉ずは、船虫を留めおきて、兩三名の夥兵達を、渠が宿所へ走らし給へ。錦の嚢に納たる儘に、笛は板廚の裡面にあらん。又並四郎が刺徹したる、大刀迹は蒲團を

此度上毛へ赴きたる、かへさに伴侶を失ふて、索ねてこの地に來つるのみ。始をいへば如此如此也。終をいへば箇樣々々と、高屋畷の野猪の事、又並四郎に誘引れて、一ト宿を彼處に曉す折、並四郎は小夜深て、路費の金を奪ん爲に還て、首を喪ひし、綷の趣如此々々と、おちなく告るに次第亂れず。その折女房船虫が、いひつるよしは箇樣々々と、贈りし笛の事までも、述る辭に委みなく、說訖らんとする程に、われから枉る榛の樹の、蔭より出る船虫は、遽しく語路五郎が、前面についゐて淚ぐみ、刀禰達必あの偸兒が、辯舌にな迷されて、鷺を鴉と謬り給ひそ。うたてやいへばいはるゝとて歟、現おそろしき口ばかり、よに朝榜なるものはなし。論より證據に何かはましたる。憚ながらその行包を、披きて笛を鑑さば、いづれ實事歟虛言歟。それが證據で侍らずや。と聲戰して怨ずれば、語路五郎頷きて、その怨みはさることながら、汝にいはるゝまでもなし。やよ夥兵達、その辮物の臟物を、とく／＼こゝへ。と取よして、手づから披く行包の、內より出るは笛ならで、一尺あまりの麁朶の殘灰、その他は疊みし雨衣の、外には物もなかりけり。これはいかに、とばかりに、迷ひは解ぬ語路五郎より、船虫は立て見つ、又居て見てもそこらには、有とし見えぬ尺八に、こころ忽地滅る如く、且驚き且呆れて、面を皺めつ頭を搔きつ、胸くるしさを今さらに、人には告るよしもなく、しらで黄檗を舐

尺八は千葉殿にて、十六七年むかしより、今も年々徇示させて、索ね給ふ笛に似たり。霎時某に貸給へ。とくその筋へもて參りて、いよ〳〵相違なきものならば、よき價を得てまゐらせん、といはれて駭く汝が猜惡、いたく醉たる體にもてなし、果は喧嘩に事托せて、只一刀に並四郎が、細頸丁と撃落して、逃去らんとしてけるを、あるじの女房船虫は、特に怜悧きものなれば、怨たる氣色を見せず、言如此々々に汝を賺して、そが儘留めて走らせず、並四郎が亡骸を、竊に寺へ送らん爲に、とく菩提所へ赴ん、といひこしらへて、宿所をたち出、扠村長許走り來て、箇樣々々と告るにより、われは亦毛檢の爲、夥兵等を將て五七日、當村に出役して、彼處に止宿の折なれば、聞捨がたく起出て、なほ船虫が訴を、みづから巨細に聽定め、謀し合せて彼女房を、宿所にかへしてこの處に、汝をまつこと久しかりき。不肖なれども千葉家の眼代、畑上語路五郎高成が、今ぞ漏さぬ天の網、車に逆ふ蟷螂の、霎時は臂を振ふとも、彼たる索の嚼入るまでに、縛めたれば、既にはや、芋虫にだも劣りたり。首に別るゝ時節ぞ、と思ひ絕て假名實名、その身の出處國郡、笛を盜し當時の形勢、箇樣々々と首伏せば、呵責の苦痛を脫れん。とく〳〵まうせ、いはずや。と辭せわしく譴問へども、小文吾騷ぐ氣色なく、こはゆくりなき誣言かな。某は下總なる、行德の民の子に、犬田小文吾悌順、と呼るゝもの也。

に立て目送りけり。却說犬田小文吾は、牛嶋のかたへ渡らんとて、河原を望て赴く程に、ゆくこと僅に三町許、尙新しき草鞋なるに、絲附の端緒の絕れしかば、そをよく結び合せんとて、ついゐて足を踏伸す、背に窺ふ捕手の夥兵等、捕的。と被る聲より速く、地上に礑と蹴倒して、登し蒐て組んとするを、小文吾は臥ながら、手足を齊一働して、掻爬み又反かへせば、或は二間、或は三間、投らるゝあり輾ぶあり。腰を折かれ頭を傷られ、齒を折り衄を出しつゝ、各々罵り騷ぐのみ。然れども多人數なりければ、彌がうへにをり累り、手を捕り足を抱縮めて、押へて索をぞ被にける。小文吾は思ひがけなく、かゝる手込の縲絏に、怒れる聲をふり立て、こはそも甚麼なる狼藉ぞや。犯せる罪はなきものを、浪人たりとも兩刀を、腰に帶たる某に、一言半句の作法もなく、索を被る事やある。そのよし聞ん。と敦圉たる、聲も曳せず一個の武士、この捕手の頭人なるべし。朱鞘の兩刀いかめしく、野裝束して十手を携へ、進み出、立對ひて、小文吾を佗と睨まへ、この癖者旣にはや、事のこゝに及べるに、陳ずればとて免されんや。汝はむかし當家にて、紛失したる古代の名笛、あらし山といふ尺八を、隱し持り、と密訴のものあり。只この一條のみならず、緣故を原るに、汝は昨夕阿佐谷なる、里人並四郎許宿投りて、夜食腹のよきまゝに、技に誇て件の笛を、竊にとう出て見せしかば、並四郎謀りて、この

に包みけり。とかくする程にはや、窓の隙よりしらみ初て、森を放るゝ鳥の聲に、小文吾は縁頰なる、雨戸を半開繰納て、帶締直しつ、臂近に、笠も脚絆も物とり揃へて、船虫が歸來ぬるを、今歟々々と待程に、且して外面に、近づく人の足音は、それかと思ふに、果して違はず、船虫は遽しく、門の戸開て進み入り、犬田ぬし今かへり侍りぬ。さぞ侍わびしくおもはれけん。菩提所の首尾よきまでに、こしらへ濟したりければ、さらばけふ後つかた、枕廻向の所化を遣らんず。亡骸を疾棺に斂めて、不覺に人にな見られそ、と住持の聖の宣ひにき。といふに小文吾頷きて、そはよくこそせられたれ。嚮にもいひしことながら、往方もしらぬ人を索て、いと忙々しき旅をすなるに、後の事だに障りなくは、はやこの儘に立別れん。あるじの横死は自業自得、悼みを述るよしもあらねど、只痛しきはそなたの薄命、一チ善一チ惡夫婦となりしも、皆是過世の業報ならん。なき人の爲身の爲に、佛事追薦肝要也。こは香奠とも見給ひね。といひつゝ軈て懐より、とり出す粒銀を、紙に捻りて亡骸の、ほとりに措つ、背向になりて、発し給へ。と膝立直し、着る脚絆も遶りあふ、程こそしらね別路に、迹を濁さぬ水色の、三尺手拭腰刀、身ごしらへして行包を、肩に被つゝたち出れば、船虫今は留めあへず、それはあまりに火急なり。朝飯ばかりも進らせん、と思へどもまだ炊をせず、遺憾しや。といひかけて、門邊

て、今宵はじめてさる悪心の、起りしものにはあるべからず。もししからずはこの家の、造りざまも田舎備ず、さまでふるくは見えざるに、彼首の壁のみ三尺ばかり、頽落しを修復はで、戸をもて塞ぎおくべうもあらず。昔もかくや淺草の、石の枕の故事にも、をさ〳〵劣らぬ癖者なりしを、わが思慮の足らずして、誘引れつゝ伎倆の弶に、係られんとせし愚さよ。かの時にもし睡覺ずは、毒惡の手に死んのみ。然るを女房船虫は、良らぬ夫と知りながら、けふまでその身を儘せし事、口と心はうらうへにて、只己のみ怜悧氣に、いひ瞞る歟、量りがたし。縱彼船虫は、素より悪心なきものなりとも、出所正しき證據もなき、この尺八をいかにして、受納むべき事にはあらねど、受ずは必夫の悪事を、人にや告ると疑ふべし。その内心はとまれかくまれ、夫の爲に一點も、われに對ひて怨を述ず、身の薄命をうち歎きて、只管救ひを求るものを、猶それをすら聽ずして、告訴する歟、と今さらに、疑れんは影護し、と思ひにければさりげなく、霎時その意に任したり。彼女房のかへらぬ間に、えうこそあれ、と遽しく、又行包を解披きて、件の笛を袋の儘に、出して四下を見かへりつゝ、衝と身を起して、袋戸の、小棚の裏面に容措つ、ふたゝび四下を見かへるに、緣頬なる遣蚊火盆に、握太なる樹の枝の、一尺あまり燃殘りしを、これ究竟と取あげて、灰うち拂ひて行袱へ、手ばやく楚と卷籠て、故の如く

第六輯　卷之二

第五十三回

畑上謬て犬田を捕ふ
馬加竊に船虫を奪ふ

船虫は曉かけて、菩提所へとて出てゆきたる、留守には小文吾ひとりをり。復らぬ悔も今さらに、過去しかたの畷なる、野猪といひ、このあるじといひ、人を替又物を替て、わが身を危くしたる事、今茲はいかなる星さへ祟りて、かさね〲し厄難の、かくまで纏る事やらん、と思へば猶も疑しく、心もとなきよしあれば、こゝにふたゝび尋思をするに、はじめ高屋の畷にて、並四郎を救んとて、撲傷の藥をたづねし折、膚著の財布より、沙金包の先出しを、とり藏るに暇あらで、笠の裡面に容措つ、扠並四郎を呼活しに、わが撃殺せし彼野猪を、見んといはれて共侶に、舊路へ還るに及びて、金を財布に收めしかば、わが懷に物あるを、彼奴には知られしならん。さればこそあれ並四郎が、陽には恩を復すと倡へて、己が宿所に誘引しは、殺して金を奪んとて也。斯思ひ合すれば、彼奴は竊に旅客を、殺して路費を奪略る、年來の强盗に

の光の高かゝるに、暁るには尚程も侍らん。菩提所までは十町に足らず。彼處で時を移すとも、天明烏の鳴く比には、遲くも還り侍るべし。暁がたは殊さらに、甲夜よりも蚊の多くて、摑で捨る程もぞ侍る。蟵はありても有がひなく、血に塗れしをいかゞはせん。蚊遣火盆は、彼許にあり。麁朶も侍るに焚つけて、燻し給へ。といひかけて、背門のかたより衝と出て、菩提所へとて走りけり。畢竟船虫がかへり來るまで、又いかなる物語かある。其は次の卷に、解分るを見て知らん。

吹おろすかたは高ねのあらしのみ音づれやすき秋の山里

といふ一首の歌を、高蒔繪にしたる也。小文吾つら〳〵これを見て、われも亦いとはやくより、尺八を好みしかども、そは虛無僧尺八にて、長サは一尺八寸也。この笛は亦異にして、一尺八分ならんと見ゆれば、必古代の一節切、四五百年の物なるべし。かゝる寶をいかにして、贈らるゝとて受られんや。且旅なれば些の物でも、荷の倍すはいと難義也。是はこの儘收め給へ。と返すを取らず、頭をうち掉り　推辭給ふはさる事ながら、かばかりの物腰に著ても、包の中にし給ふとも、何程のこと歟侍らん。恩に恩義の恩人の、重き情に、輕き一ト品、いつまで藏めおくとても、讓んと思ふ子もなきに、もしこれをしも受られずは、今さら心安からず。枉てうけ引給ひね。と卿々がましく薦めて已ねば、小文吾終に推辭かねて、しからば再會せん日まで、こはこの儘に預りおかん。といふに船虫歡びて、かくてこそ疑ひの、霽て心もおちゐたり。わらはは寺へ走りて來ん。この亡骸をいかにせん。棺を買ふまで片隅へ、寄せてや措ん。と手を掛れば、小文吾も亦身を起して、死骸を扛て壁際へ、よせて蒲團をうち被させ、わが行包を引解て、件の笛を袱に、巻こめて又中結を、絡て傍にさしおきけり。そが間に船虫は、裳引揚遽しく、緩みし帶を締びつゝ、小窻細めに推開て、天を眺て礙と闔、喃お客、星

が如くなるならば、わらははは頭髻を剪捨て、佛に仕てなき親良人の、菩提を弔はゞ早晩に、身の業因も滅ぶべし。これらのよしを聞わきて、許し給はゞこよなき善根、いかでか惡く報ふべき。許させ給へ。とかき口説くを、小文吾聞て、頭を傾け、親は子の爲に隱し、子は亦親の爲に隱すも、直きことはおのづから、その中にありと聞く、聖の教はよくも知らねど、先祖の爲に良人の惡事を、世に知らせじと願るゝは、現見あげたる心操、落淚までに感心せり。あれ見給へ。並四郎が亡骸は、なほ行包を刺留をり。妻たるそなたが證人なれば、願ひを聽じともいひがたし。われは素より人を索て、いと忙々しき旅をすなれば、これらの訴にかゝづらひて、日を費んは便なき事也。香華院だに承引なば、そはともかくも相計ひ給へ。といふに船虫うれしげに、小文吾を伏拜て、かゝる御恩を稟ながら、未明に出てゆき給はゞ、何の日にか報ひをすべき。これも本意なく侍るかし。家には先祖相傳の、尺八の侍る也。並四郎がいく度か、傳らんといひしを推禁て、家廟の下壇に祕おきぬ せめてはあれを進らせてん。先觀せ。といひかけて、納戸のかたに赴きつゝ、古金襴の袋に納たる、笛携來て小文吾が、ほとり近くさし寄するを、受とりて紐解ひらき、見れば寔に古物とおぼしく、長サは一尺八分ばかり、黑漆に樺卷して、

ぬ女子の悲しさ。さりとも心の直らん歟、と墓なく憑む久後の、いつとは知らぬ月と日を、けふまで送り侍りしに、子ふたつの比にやあらん、並四郎は潜やかに、背門のかたよりかへり來て、おん身に夥の沙金あり、と囁き告るに、はじめて知りぬ。されども受たる恩ある人を、殺して金を略んと迄に、思ふ心のあるべしとは、神ならぬ身の得もしらで、心緩して、敷妙の、枕ならべて睡りし間に、竊に臥房を脱出て、事のこゝに及べるならん。面目なや。と今さらに、返らぬことを繰返す、涙の瀧のいとせめて、心細げに泣沈めば、小文吾も亦嗟嘆に堪ず、聞くがごときはそなたの薄命、歎きは殊さら理りなれども、今はいく遍悔むとも甲斐なし。村長に告領主に訴へ、地方の法に任されよ。といふに船虫涙を收めて、そは勿論の事ながら、わらはがひとつの願あり。家の先祖は鎌倉の、北條家のおん時に、名ある武士で侍りしとぞ。その後子孫は零落て、百姓になり侍りしかど、近き世まではこの地方の、村長で侍りしに、血脈にあらぬ招壻の、個の並四郎が故をもて、先祖の名さへ汚されんは、いと朽をしく侍るかし。おん身の心ひとつもて、今宵の事を人にしらせず、翌は夙めてこの地方を、立放れて給はらば、外へは洩るゝよしもなし。天明ぬ程に菩提所を、よくこしらへて村中へは、頓死と告て棺を出さん。惡人なれども所天なるものゝ、なき身の後まで惡名を、世に謳するも本意ならず。願ふ

吾頻りに焦燥て、内かた怕れ惑ひ給ふな。賊をば既に撃留たり。やよ燈火を、とく〳〵。としばしば呼れてやうやくに、行燈引提て走り來つ、出居の紙戸推開て、さし出す灯の光に、小文吾は撃落したる、彼偸兒の首を見るに、是則別人ならず、あるじ並四郎なりければ、こは〳〵いかに、とばかりに、呆れてふたゝび辭を出さず、手を拱きてうち目戍る、嘆息の外なかりけり。されば又船虫は、行燈側にさし置て、只潸然とうち泣しを、やうやく思ひかへしけん、頭を擡て目を拭ひ、喃お客人、犬田ぬしとやらん、わらはが夫で侍れども、慾に惑ふて、命の親なる、おん身の寢頸を搔んと計りし、天罰覿面に報ひ來て、還ておん身に撃れしは、よにせめてもの罪滅し、うらめしとはつゆ思ひ侍らず。問ずがたりに似たれども、わらはが家はむかしより、村長で侍りしを、三代前の祖の時、身上いたく衰て、田地も過半沽却し、村の役義も人に讓りて、水飲になり侍りしかども、なほ農業は棄ざりしに、わらはが親に男兒なければ、この並四郎を婿にしつ。いく程もなく二親は、世になき人となりしより、本性あらはす良人の放蕩、酒と賭とに舊川水なる、田地田圃みな沒却て、生活なさにともすれば、窃き伎倆のこれ彼と、わらはが耳に入ることも、目にかゝる日も侍りしを、泣つ口說つ諫れば、その折ばかり先非を悔て、こゝろ得良も糠に釘、きかぬ夫のしぶとさを、疎ましとのみ思へども、思ふに任せ

ともしらず目睡けん、胷うち騷ぐに驚き覺れば、怪むべし、行燈の灯は滅て、定かには見えねども、出居のかたなる壁の頽に、推當たる戸は失て、そこらに人のをるが如し。原來盜賊ござんなれ、と思へどもなほ些も騷がず、うまく睡りしやうにして、襖の衣衿より窺ふに、果して彼首に人ありて、いまだ裡面には入らざりけり。當時小文吾思ふやう、今宵はあるじのをらぬを幸に、獨行と侮りて、殺して物を略らんとする歟。伎倆の程はしられたり。要こそあれ、と深念をしつゝ、先枕方なる脇挿の刀をやをら搔取て、竊に蟵を出るとき、襖の下には行包を、引入れて、故の如く、人の臥たるやうにしつ、息を籠し、しづかに跂ふて、袋戸棚のほとりなる、壁に身を倚せ、伏躱れて、猶も動靜を窺ひけり。さる程に偸兒は、件の壁の破隙より、入らんとしては又退き、退きては又進む。かう數回狐疑しつゝ、やうやくに進み入りて、又張ふこと半晌ばかり、疲勞て實に熟睡したり、とまさかに思ひ決めけん、忽地直身と立より速く、晃りと拔たる刃の雷母、幮の釣緒を斷落しつゝ、登しかゝりし小襖の上より、彼行包をぐさと刺す、刃の光を目當なる、小文吾透さず、跳蒐て、拔く手鋭く丁と斫る、刃の下に偸兒の、首は礑と落たりける。當時小文吾聲高やかに、やよ内方起出給へ。われ偸兒を撃留たり。とく脂燭して見せずや。と呼立られて船虫は、應口隱る聲かすかにて、狼狽たる歟、出ても來ねば、小文




小文吾

めつゝ、且して納戸より、幮携ていでて來つ。喃お客、並四郎はまだ還らねど、今聞えしは二更の鐘也。いざおん臥簟を備はべらん。些何方へも寄らせ給へ。といふを小文吾聞あへず、いな幮はその儘置給へ。あるじのかへり給はぬに、臥房に入るは何とやら、影護き所あり。なほ且く俟んのみ。と推辭ば船虫微笑みて、あな物がたき刀禰にぞある。並四郎はかの野猪の、賞錢など得たらんには、友達さへにうち聚合て、酒飲曉すも測がたし。然らでもをり／＼夜遊に、出てかへらぬことも侍るに、俟せ給ふは要なき所行也。いざとく／＼といそがして、近江木綿のみのぶとん、寐物語に敵手なき、小襖披きつ、木枕は、廬生が夢を一炊の、あはれふりたる幮の色、色紙當たる菅薦の、十府ならなくに、六布七布、足らぬ釣緒に、下締の、細紐解て結ひ乖、雨戸繰つゝ障子を閤て、燈心減らす行燈は、幮を隔の枕上、ゆたかに休らひ給ひね。と告辭して、出居なる、紙戸をやをら立籠て、庖湢のかたに退出けり。さる程に小文吾は、行包をも、二腰の、刀も枕に引著て、幮には入りしかど、蚤に責られ、蚊に叫れて、睡らんとするにいもねられず。船虫もはや納戸に入りて、熟睡やしけん音もせず。渉庭に浆く虫の聲、障子に響く竊虫の、生憎に耳につくのみ。親の事、友の事、曳手單節が事をしも、いかにいかにと思ひつゞけて、曉るを俟ば小夜深て、稍膚寒くなるまゝに、思はず小襖を引被て、寐る

唐紙張の袋戸の小棚あり。紫竹の押縁したる葭簀天井は、不破の關屋の廂ならで、月の漏るべき住ひにはあらぬを、いかなれば、出居のかたの壁、三尺ばかりいたく落頽れて、骨もなくなりたる儘に、あなたより戸を推被て塞ぎたり。この次の間は庖廚にて、別に夜物弆などする、納戸やうの處あり。其處に夫婦は睡るなるべし。又この女房船虫は、年歲も三十のうへを、六ッ七ッにやなりぬべからん、物のいひざま進止まで、よろづ男めきたるが、さりとて容貌の醜きにもあらず。頭髻は、竪ざまに結紈ね、櫛は橫ざまに揷光らしたる、をり〳〵釵を拔出して、額髮を搔く癖あり。男帶のふりたるを、腋下に結垂ても、褌のみ綺羅やかなるに、單衣の袖も身幅も、いと廣く長かるは、良人に貸て被せん爲歟、迭代に被る歟なるべし。小文吾はこれらによりて、腹裏におもふやう、こゝのあるじが爲體、百姓ならず、商人ならず。抑亦何をもて、生活にするやらん。もし俠客の類ならずは、袁彥道をも欺くといふ、博徒の煉たるものなるべき歟。そはともあれかくもあれ、あるじの留守なる人妻と、うち對ひをるばかり、心苦しきものはなし。えうなき宿を取りぬるかな、と竊に困じて、盃は、受たるのみにて飮ざりしを、船虫が云々と、浮上手にて許さねば、已ことを得ず一度過しつ、しば〳〵推辭てふたゝび受ず。とかくする程に更闌て、夜ははや亥の比になりしかば、船虫もさのみはとて、銚子も膳もとり納

野猪のこと、今宵の宿りを許されし、絆の趣如此々々と、その大かたを告知らして、燧袋を出して見すれば、船虫は聞く事毎に、或は驚き或は歓び、そは思ひがけもなき、御恩にこそ侍るなれ。嚮に聞たる野猪の事、あぶなき所爲ぞと禁めしかども、聴かで命の危かりしを、救ひ給ひし人さまならば、わらはが爲にも城隍神也。先はやこなたへ登らせ給へ。と應て軈て忙しく、盥に溫湯を汲もて來つゝ、草鞋を解して、足を濯がせ、座席に行燈引提來て、小文吾を上座に推すゝめ、今朝はいづれの里を起て、いくばく里來給ひたる。俗にいふ盆の後前とて、殘る暑の堪がたきに、さこそは疲勞給ひけめ。行水の湯を沸して侍り。あはせものは侍らねども、今夕饌をまゐらせてん。木枕もそこにあり、足踏伸して休らひ給へ。こゝ許は蚊の名どころにて、刺れし迹の瘡にもなるに、おん管待は蚊遣火のみ。些鬱悒とも怺給へ。といひつゝいと大きなる、素焼の火盆を竹縁の、ほとりに措て團扇もて、あふぎ立つゝ麁朶折燕て、又遽しく身を起し、扠小文吾に浴みさせ、はや夕饌を羞たる、管待態の精悍しく、團扇を取て小文吾を、うち扇ぎつゝ、給仕をしつゝ、果は中酒の盃に、鮒の烹蘸取添て、器物さへ鄙ならぬ、鄙めづらしき宿ながら、女あるじに小文吾は、言葉すくなく欵待の、よろこびを述るのみ。只つらく／＼と四下を見るに、こゝの一間は、外に物なく、席薦は六枚ばかり布たる、上座には、

ねば、日の暮たるに、宿投悩みて難義ならんを、和殿に遭しは他生の縁、しからば一宿を憑みたし。といふに歡ぶ並四郎、そはいと易き事になん。させる管待こそしがたけれ、女中の往方を、近郷にて、問定る爲にとて、いく日逗留し給ふとも、飯のみならば進らすべきに、心つかひなし給ひそ。こゝより直に宿所まで、伴ひ奉んと思へども、いかにせん、今宵この儘この野猪を、うち捨て置ならば、狼にや服せられん。某はこの獲物を、村長許引揚ゆきて、これらの事も、おんみの事も、告て迹よりまかるべし。この畷をゆきぬけて、鳥越山の根かたより、東北へ三四町、赴き給へば阿佐谷也。村盡處なる東のかたの、いと大きなる榎樹のほとりに、いとちひさなる幹淨房あるは、恥しながらわが宿也。留守には船虫といふ女房ひとりをり。ゆきて如此々々と告給はゞ、拒むべうはあらねども、倘疑はゞ不便ならんに、これもてゆきて見せ給へ。と辭せわしく說示しつゝ、腰に着たる燧袋を、そが儘とりて遞與すになん、小文吾はその好意の、よろこびを述て立別れ、阿佐谷を望て赴くに、思ひしより路の近くて、聞しに違はず村盡處なる、榎樹のほとりに幹淨房ありて、裏面より燈火の光幽に洩たり。こゝなるべし、と立寄て、折戸を敲きて呼門へば、誰そと應て、脂燭を秉て、出て折戸をひらくもの、これ則別人ならず、並四郎が妻船虫也。小文吾は先わが名を告て、縁頰に尻うち掛、さて並四郎が事、

亦この野猪をよく見るに、はじめ某が刺被たる、鎗傷の外に疵なし。おん身はいかなる術ありて、輙く殺したまひたる。こゝろ得がたく候。と問れて小文吾うち微笑み、否、われとても術はなし。手負野猪の癖なれば、只管狂ふて疲労れしとき、辛して撃殺せしのみ。そを疑るゝことかは。といひ瞞めつゝさりげなく、技も力も推隱すを、とはしらずして並四郎も、呵々とうち笑ひ、人には幸あり不幸あり。狗骨折て鷹が捉る、諺にも似たりけり。そはとまれかくもあれ、はからず御恩を稟たる某、今宵のお宿を仕らん。いまだ知召れずや。大約廣澤淺草よりこなた、無戸、金曾木、阿佐谷、高屋、千束の村々は、みな石濱なる千葉殿の、采邑にて候が、敵より間者の用心とて、他郷の人を留るには、いとむづかしき作法あり。况て獨行などは、宿するものも候はず。せめてもの御恩報しに、とく村長に由を告て、某相計たらんには、障りあるべうも候はず。扨もおん身は何國より、何國へ通らせ給ふやらん。名告らせ給へ。と慇懃に、問れて小文吾一議に及ばず、吾儕が故郷は下総にて、犬田小文吾と呼るゝもの也。此度上毛に赴きしかへるさに、從弟女同胞を相伴ひ、合鞍に乗せていそぐ折、その馬放れて往方をしらず。渠等にたづね逢ん爲、迹を追ひつゝ來つれども、いまだ便宜を得ざる也。現獨行としいへば、いづれの里でも歡びて、留るものにはあらねども、さまで緊しき法度ある、こゝらとしら

巻締、又一包の行袱を、やをら肩にうち被て、先に立つゝゆく程に、西へ距ること一町許、只一條なる田中の路に、かの野猪は斃れてあり。件の男はこれを見て、ます〳〵駭き且歡びて、遽しく小文吾が、ほとりについゐて額をつき、この野猪のかう死したるは、わが身ひとつの幸ひならず、阿佐谷高屋の村人が、なべてこよなき洪福也。抑この野猪は、何處より移り來にけん、鳥越山のほとりより、夜となく日となくいで來りて、芋を掘り圃を暴す、損毛大かたならざれば、莊客們商量して、獵夫を傭ひなどしつ、撃捕せんとしたれども、いと年ふりたる猛獸なれば、箭も鳥銃の丸も徹らず。これにより、村長の沙汰として、件の野猪を撃ものあらば、三貫文の辛苦錢を、取せんと徇られたり。某は阿佐谷の民にて、鴨尻の並四郎と呼るゝもの也。舊里に在りし比は、山獵を事として、さるすぢには些ばかり、こゝろを得たるよしもあれば、いかでわれ、かの野猪を撃留て、村の患を除くべく、辛苦錢をも獲ばやと思ふて、この日ごろ彼此と、猪徑をよく見おきつ、昨夕より寉濳せし、その甲斐もなく早りにければ、還ていたく掛られて、命も既に危かりしは、毛を吹き疵を求めしなり。然るをおん身の助力により て、命を拾ひしのみならで、三貫文も空しからず。且肉を鬻き皮を售らば、一貫文は又得つべし。かゝれば四貫の德あること、皆是おん身の賜ものなり。さばれ疑ひ奉るにあらねども、今

挿の刀に附たる、笄を抜とりて、やうやく口を推開て、薬を遺りなく哺しつ、懐帋を推圓めて、臂近なる田の水に、浸して口中に絞り入れ、薬を胃中に推下して、呼んとするにその名を知らねば、只喃々と呼活るに、且して件の男は、苦と噫きて眼を睜ひらき、鎗とり直し身を起して、忽地走り去らんとするを、小文吾急に抱き縮めて、やよ俟給へ、いふことあり。われは旅ゆくものなるが、和殿の殪仆たるを、見過すに得忍ねば、箇様々々に介抱せしに、甦生せられて本意に稱へり。おもふに和殿は老たる野猪に、掛られたるにあらざるや。われも亦彼方にて、如此々々の野猪にあひぬ。然れども怪我の功名にて、辛して撃留たり。疑しくは共侶に、誘ゆきて見給へかし。といはれて驚く件の男は、鎗投捨て跪坐き、原來おん身は再生の、恩人にてをはせし也。既に賢察せらるゝ如く、某も先の程、野猪に一鎗著たれども、閾所をや外けん、忽地鎗を振解れし、勢ひ當るべうもあらねば、逃んとせしに、それすら愜はず、果敢なく牙に掛られて、空ざまに投らるゝ、と思ひし後は東西をも覺ず。かくて今、やうやくわれに返りしより、又もや野猪に掛られんかとて、見給ふごとく狼狽しは、嗚呼とやいはん今更に、面目もなき趣舍也。刺留給ひし彼野猪は、何處にか候。と問れて小文吾うち頷き、遠くもあらず誘給へ。といひつゝ後方を見かへりて、心づきけん遽しく、沙金を取て肌着の、財布に蔵めて腹に

つゝ塵うち拂ひ、笠とりあげて今宵寢る、宿りを求めていそぐ程に、かの處より一町ばかり、ゆくての路の眞中に、仰反仆れし男あり。稍光を增す月影に、立よりて熟視れば、齡は四十餘なるべし。身には仁田山木綿の、裳短なる單衣を被て、足には木皮織の脚絆を、紐高に結著、腰には紅銅造の、二尺四五寸許なる獵刀を跨へ、手には長刃の短鎗を握拿たるに、その鎗はまだ放さねども、氣息は既になきが如し。當下小文吾思ふやう、こは近村の獵戸ならずは、百姓の悍きものにて、彼野猪を刺んとせしに、刺損じて度を失ひ、立地に掛られて、息絶たるにぞあらんずらん。幸ひにして手を負ぬに、よくせば生ることもあるべし。われは角觝を好みしかば、素より撲傷の奇藥をもてり。撲れて氣絶せしものに、わきて即功あるをもて、一日たりとも身をはなさず。舊里を出る日も、そを懷にしたりしかば、失はずは今なほあらん。用ひて見ばや。と遽しく、行袱を解披きて、あちこちと索るに、件の藥はなかりけり。捻服紗の內にかとて、又肌着の財布をとう出て、端引揚て揮ひ出すに、曩に蚕崎十一郎が、里見殿の賜祿とて、強て贈りし一包、三十兩の沙金のみ、先滾々と出しかば、これをば取て菅笠を、仰ざまにして入措きつ、ふたゝび財布をうち揮ふに、果して件の奇藥も出けり。そをよき程に撮取りて、踣仆たる彼男の口の中に入れんとするに、齒をいたく咬締て、開くべうもあらざれば、腕


並四郎が短銃何ぞ小文吾が一拳に及ざるとと知らん
小文吾



響て、杜のかたより昏みたり。こゝより人煙は近かるに、遡て宿りを求んとて、足の運びないそがす程に、と見れば前面の薬叢陰より、最大きなる野猪の、手負たりとおぼしきが、忽然と駈出て、こなたに建し路傍の、石の地藏を衝倒し、木ともいはず草ともいはず、當るに任して噬折く、勢ひ虎彪に敵すべく、驀直にぞ走り來る。小文吾吁嗟と思へども、左右はすべて深田也、避躱るゝに便なければ、手ばやく笠を搔投捨て、直立逆ふ程しもあらせず、野猪は哮りて牙を怒らし、矢庭に掛んとする處を、小文吾はやく身を翻して、野猪の脇磤と蹴る。蹴られて怯む氣色もなく、彌狂ひ倍哮りて、稍強向んとする程に、小文君閃りと身を跳らして、背の上にうち跨り、刀を拔くに暇なければ、左に野猪の耳を爬て、右の拳を鐵器の如く、握り固めて眉間のあたりを、續ざまに搏しかば、これにぞ聊弱る處を、なほ一身のちからを究めて、搏こと十拳に及びしとき、さしも老たる手負野猪の、腦骨碎け、目子飛出、血嘔を吐てぞ死でける。當下小文吾は、徐々に傍に下立て、死たる野猪をよく見るに、全身すべて古木のごとく、大きなること犢に等し。これらが年を經るときは、をり〳〵松脂を身に塗らして、矢石を防ぐ爲にす、と豫て聞しを、見るははじめて、暴虎馮河の戒を、忘れたるにあらねども、脫るゝ路なき禍を、免れしは現けふばかり、力が益に立たるのみ。思へば危き事なりき。とひとりごち

の、媒ならずといふものなし。あの河ひとつ打渡れば、はや下總國にして、わが舊里へ遠からず。忘れも得せぬ前月廿四日の曉がたに、犬塚等を送るとて、市川より漕出せしは、一兩日の行なり、と思ひしものをおもひきや、犬川が窮厄より、只殃厄のみ貪縁て、けふまで還らずならんとは。わが父もわが姑も、大聖も、蜑崎氏も、かゝるべしとはしらずして、さぞな待不樂給ひけめ。大八ひとりに慰かねて、益なき老の諄言より、房八が緣由、人にしられて又さらに、よからぬことのいで來はせずや。親に物を思はするは、寔にこよなき不孝也。親戚交遊これ彼と、約束の違へるは、信なきものに似たり。ゆくりなくこゝまで來つるに、翌は夙めて行徳へ、還りて情由を報べき歟。いな〳〵それも影護し。曳手單節が往方のしれぬを、そが儘にして舊里へ、立かへりしか、と犬山などに、思はれやせん、思ふべし。なほ兩三日新婦婦等を、索ても得あはずは、中山道をうち登りて、犬山犬塚四箇の友を、索て環會ん日に、絆如此如此と報て後、親の安否を問ふべき歟。いな〳〵それも四箇の友に、再會の日は測がたし。わが進退谷りぬ。死けん馬の再生て、奔りし奇特は有ながら、そを見きといふ人にだも、遭はで佗なる日を送る、わがうへばかり守らせ給ふ、神も佛もなき世歟、と思ひつゞけて、夏虫の、ひとりしゆけば宿に歸る、烏越山のこなたなる、一條路の畷に來にけり。この時入相の鐘適に

と箭の如く、駿足はじめに十倍して、往方も知らずなりし事、件の親子夫婦の義烈を、神明佛陀の憐みて、祐給ふにあらんずらん。如此有んにはけふ遭ずとも、恙あらじと思へども、然とてたづねで止べきにあらず。こゝらに露宿したらんには、還て人に怪しめられん。一椀の糧、一夜の宿を、求めてこそ、と肚裏に、處分既に決りければ、やがて樹下を立出て、一白屋に宿投りつ、形なき夜を曉しけり。されば又小文吾は、次の日の旦未明に、旅宿を出て、前路前路の、或は旅客里人等に、馬の往方を外めかしく、これ彼となく諮るに、絕て便宜を得ざりしかば、いよゝ望を失ひて、且疑ひ且聒み、只管渉獵ありくこと、はや三日四日になりしかば、來るとも知らず武藏なる、淺草寺に程近き、高屋阿佐谷の村間なる、田圃のほとりを過るとき、秋の日なれば短くて、下晡になりにけり。當下小文吾は、笠を斜に推擧て、ひとり四下を眺るに、新堀、湯島、神田の衆山、高く西北に連りて、樹木の葉はまだ染ねども、夕日に彩る、遠景觀く、宮戸、隅田、千住の長流、南北に横はりて、網引の聲は聞えねども、日暮の業、近村寂たり。向上れば、幾群の秋鳥、雲に入て還らず、直下せば、千頃の稻田、花を含て戰ぐのみ。露は道芝に玉を磨き、菊は藪陰に金を欺く。人音に駭き飛ぶ虫は、星を見て鳴んと欲し、案山子に狎てかよふ鹿は、圃を暴して飽ざるべし。見るに就き思ふによりて、皆是旅泊斷腸

第五十二回

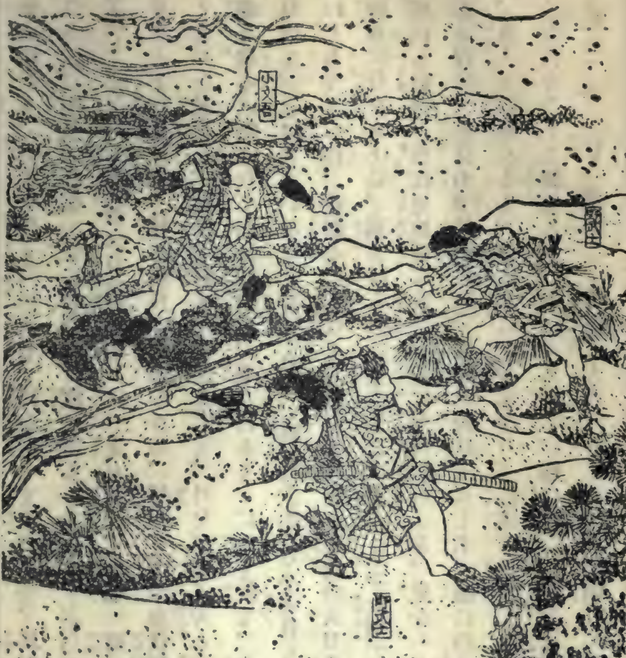
高屋畷に悌順野猪を搏にす
朝谷村に船虫古管を贈る

却説犬田小文吾悌順は、途に野武士等を斫棄しより、只管馬の迹を逐ふて、東を望て走る程に、その日も佩なく暮にけり。昨兎通宵今鳥終日、或は數百の大敵と鎬を削り、さらに又幾里の、道を走りて索る人に、遭ぬ憾に心さへ、身もいといたう疲勞たり。こゝは何處と里人に、言問ふだにも葉ばかりの、冬青の株に尻うちかけて、獨倩おもふやう、今朝しも荒芽山の鬪戰に、兵火彼山の土毛を焦して、敵の圍の解し時、豫て契りしよしあれば、犬山犬塚等の人々は、山うち越て西の方、信濃路へこそ走りけめ。然るを放れし馬ゆゑに、われは東へ道の程、かへり來つるも八九里歟、はや十里にも及べるならん。かくまで勞して功もなく、友に別れて又さらに、わが預りたる曳手單節を、その甲斐もなく喪ふては、よしやこの後道節等に、環あふ日の遐からずとも、われ又何の面目ありて、信あり義ある人とせられん。嗚呼是非もなし何とせん、いかにせまし、と手を叉て、瞻仰る天は夕月夜、曇らぬ影に胸狹く、霽ぬは心の迷ひ也。愚なりき、と身を責つ、思ひかへしつ尋念をするに、嚮に彼馬の馳たるとき、野武士の鳥銃にて撃れしに、いとも怪しき光物、そのほとりへ隕しより、馬は忽地身を起して、復奔るこ

す、刃を銜て立たる儘に、一推揉する角觝の秘訣、䯊を拈て揮解き、徒倚く項を雙の手に、掻攫み又引よせて、頭と頭を兩三遍、撲合さすれば堪難て、苦と叫ぶ聲もろ共に、足空ざまに差揚て、地上へ撻と狗兒放下、鬐に似たる風下へ、籠落しの野武士等は、ひとつ處に累り伏て、石に鼻づら、株に額、うつゝか夢歟、とばかりに、苦痛に堪ず蠢きて、起んとするを小文吾が、疊蒐つゝ撃大刀風に、一葉の露の玉櫛笥、ふたりが身とて四となる。いつしか積る兇惡の、むくひ來にけん天の網。七重やま風吹からに、こゝに天引く遠煙百千の國も萬みな、火宅なりきと悟りたる、おくこそ知らね無量劫、數盡されぬ煩惱の、俺にも狂ふ意馬心猿に、胷の靮を取留て、曳手單節が存亡も、往方も定めなきまでに、かさね〳〵し憂事に、身の疲勞すら忘草、路の秋草踏わきて、索ぞくらす壯士が、心の誠比なき。犬としいへば八の數、十日に近きふみ月の、筆に載てん是仁惟義、忠信禮智孝悌を、磨あげたる玉にしあれば、いづれ疎歯はなかりけり。

も衝破る、勢ひ尋常ならざれば、准備忽地相違して、近づくものは翻仆され、或は蹶られ蹂躙られて、矢庭に死するもの一兩人、半死半生なるものも、三四人に及びしかば、なほその恙なかりしは、纔に二人のみなりけり。されども不敵の奴原なれば、一人腰に著たりし、小筒の鳥銃取あげて、火蓋を斷て撞と放せば、はや三四十間隔りたる、馬は肛門のあたりより、强梁をかけて打抜れ、兩箇の主を乘したる儘に、四足を折てぞ伏たりける。さもこそあらめ、彼女子等を、逃しなせそ。と鳥銃投捨、これ彼槍を引提て、走りゆかんとする折から、怪むべし兩團の陰火、何處ともなく閃き來て、伏たる馬の頭の邊に、墜留ると見る程に、馬は勃與と起あがりて、軆戰しつゝ馳ること、はじめの駛にもいやまして、あれよ〳〵といふ隙に、往方もしらずなりにけり。有爾程に小文吾は、稍その邊に追蒐來つ、遙に馬の撃れし形勢、陰火の奇特も目擊、見つゝ只管驚嘆しつゝ、馬の往方を知らんとおもへは、喘ぎて走る足音に、呆れて立たる兩箇の野武士は、齊一後方を見かへりて、おもふに彼奴も落人也。馬共侶に追喪せし、女代りに物せずや。と誶く間も暴奪略、忽地路を要りて、槍を拈て突懸るを、こゝろ得たり。と小文吾は、左手に槍頭を握り留、引拔く刀に右手なる槍の、眞中丁と砍落す、本事に駭く野武士等は、槍投捨て左右より、利腕を捕て無手と組む。小文吾騒ぐ氣色もなく、はやく左に取なほ


野武士
落人を奇
貨として
野武士等
放馬を襲ふ


小文吾
野武士
野武士

が儘累り俯す折から、寄手の雜兵兩三名、煙を犯して走り來つ、馬の絆に手を被れば、曳手單節は又さらに、獵場の野鷄の箭にいたみ、鷹に寄るゝこゝちして、吽嗟とばかりもろ共に、頭を擡る程しもあれ、小文吾は只飛が如くに、走り近づく大喝一聲、左手に立たる一箇の敵を、ばらりずんと砍仆せば、殘る兩兵は驚きながら、晃めく大刀を拔翳して、前後齊一小文吾を、擊んとするを逸速く、閃りと翻す身を沈まして、外せば狂ふ刃と刃、覘は違て思はずも、馬の絆を磤と砍る。斷られて馬は同胞を、乘せたるまゝに衝と脫て、走る蹄の音高く、東をさしてぞ放れゆく。こは〳〵いかに、とばかりに、駭き見かへる小文吾も、又この敵の雜兵等も、ほゐなけれども今さらに、牽駐るに暇なく、厲しく擊あふ三個の大刀音、小文吾はこゝにもおらぬ、心頻りに苛立まゝに、奮勇はじめに十倍して、又一人を砍倒し、なほ踏込で閃めかす、刃の下に殘れる敵の、首は忽地前に落て、軀は仰反仆るゝを、見かへりもせず放れし馬の、迹を慕ふて追ふ程に、荒芽山の籬路には、近邨の野武士六七名、曩に白井の寄手等が、關の聲を聞しより、落人を剝略んとて、東の巷に聚合てをり。恁處に放れし馬の、兩箇の女子を乘したる儘に、こなたをさして馳來るを、遙にうち見て、竊に歡び、衆皆前路に立塞りて、鉤索竹槍桿棒などを、うち合し柵めて、捕駐んとしたりしに、馬は頻りに哮狂ひて、人をも籬埒を

岐路嫌ひなく、往方定めぬ四犬士は、別々になりにけり。さる程に、犬田小文吾悌順は、曩に母屋の餘炎によりて、敵の圍を脱れしとき、ひとり心に思ふやう、山風いたく吹暴て、火燄滿山を燒んとす、勢ひ寔に怕るべし。然るをわが預りたる、曳手單節を合鞍に、乘したる儘に彼首なる、樹蔭に馬を繋ぎ置しに、今はやかの樹に火の移らば、馬を喪ふのみならで、彼鞍壺にからまへ著たる、姉妹も亦いかにして、猛火に必死を脱るべき。幸ひにして彼方へは、火のまだ移らずと覺るに、かの災を脱るゝとも、敵の爲に擒とならば、後悔其處にたちがたし。さはあらずや、と肚に問、腹に答ていちはやく、燃る小草を踏越飛越、辛じてその樹のほとりへ、近づくまゝに前面を見れば、寄手の雜兵兩三名、はや曳手等を見出して、こは奇貨ぞ。と繋ぎたる、馬の絆を取んとて、前後を其處に爭ひけり。さらでも曳手單節等は、多勢としらるゝ敵の物音、母屋の猛火に山路の延燒、かくては舅姑も、故主も、亦彼友人も、脱れがたくやをはすらん。おなじ巷にともかくも、ならばやとのみ思へども、落ぬ爲にと憖に、幾重かからみ著られし、その麻索の淺ましく、釋ぬうらみはわれのみならで、煙に狂ひ樹を遶る、馬は頻に嘶きて、前脚高く幾遍となく、跳揚ればいとゞしく、鞍安からぬ姊娣、只瞑眩き胷潰れて、吁嗟々々と叫ぶのみ、禁るよしも軟弱々々と、馬より先に疲勞果て、心地死ぬべう鞍壺に、そ

大刀をふたゝび引拔て、ちからの限りうち振れば、刀刃の奇特外たず、その刀尖より濆る、水氣は遠く散亂して、百歩二百歩あなたなる、道節現八莊助等が、ほとりに閃めく火燄すら、うち滅されつゝ落てけり。當下信乃は聲ふり立て、諸君子これを見給はずや。火急の難義に心まどひて、この大刀あるを忘れしは、負たる兒を人に問ふ、譬にも似て愚なりき。この刃をもて道芝の、火をうち滅して山を越てん、續き給へ。と呼かけて、なほも刃をうち揮打ふり、わけ入る山も數ならぬ、高き奇特に道節等は、復生たり、と勇み立て、後れて見えぬ小文吾を、しばしば呼かけ見かへるのみ。こゝに待間もあら芽山、あるじ夫婦が戰沒の、迹は煙と立昇る、名殘も有繫惜れて、身は浮雲の草枕、翌は甚麼なる旅をやする、と思ひおもはず後方より、ひらけし路を栞にて、追蒐來つる三箇の助友、その隊の軍兵百餘人、手に〳〵鎗を引提て、返せ戻せ。と呼かけたり。四犬士これを見かへりて、小ざかしや巨田が輩、嚮には影武者の奇兵をもて、迷し撃んと謀りたる、智略の程は見透したるに、返すとて難き事やある。其處な退そと罵て、跳蒐て撲地と撃つ、四口の刃に佗撃なく、先に進みし雜兵四五名、或は鎗を斫折られ、或は腕を撃落されて、逃るを程よく追捨て、路をいそげば懲ずまに、又ならく〳〵と近づくを、追ひつ返しつ樹下陰、不知案內の深山路に、多勢と挑む再度の窮厄、且戰ひ且走る、岨邊

らんは遺憾し。敵は猛火に度を喪ふて、路の開けしこそ幸ひなれ。よしや煙を犯しても、母屋のかたに近づきて、燒迹なりと見まくほし。いかにせましと云々に、いひ合さねど友どちの、心意の一致して、踰ゆく路を求れども、風はいよ／＼烈しくなりて、西に吹ては東にかへし、南へ卷ては北に旋る、音凄じく沙礫を飛して、山林過半燒つべき、勢ひ犯しがたければ、母屋へ赴くことはさら也、五犬士は在つる儘にて、ひとつに聚合ことも得ならず。武尊駿獵の災、田單火牛の謀も、これにはいかでかますべきやとて、數百の敵には怕れざりしも、おの／＼舌を掉ふのみ。迭に手を抗意を示しつゝ、一ト圓山をうち踰て、煙を避ずは草木と、共に燒れんとく／＼、と招けば招く繁芒、茅萱も風に燒立られて、通ふ路なきのみならず、火燄ます／＼散亂して、彼此となく犬士のほとりに、間なく隙なく降かゝれば、襟に袂に燃うつるを、拂ひ落しつ、揉滅しても、なほ生憎に焦熱の、地獄の責に異ならず。そが中に道節は、火遁の術をみづから非として、今朝しも破棄たれば甲斐なし。よしやその術ありとても、身ひとつ遁れて何にせん。圍は解けて火に燒るゝも、みな是過世の業報ならん、と思ひ定めつなか／＼に、觀念の外なきものから、犬塚信乃がほとりへは、墜る火燄の殊さらに、多かりければ霎時も得堪ず、右へ走り左に避て、身は狂へども心には、正しく思ひつくよしありて、腰に納めし村雨の

て、祕術を竭す拳の冴に、血は涿鹿の野を浸し、紅波は盾を流すまでに、斫仆されたる雜兵の死骸は算を亂すが如く、きのふにも倍す五犬士の、さしも烈しき刀尖に、崩れ立たる癖なれば、迯る躬方に推著られて、助友さへに疾走るを、透さず追撃五犬士の、背に起る一隊の軍兵、中にも一人高く叫びて、逆賊道節等且く等、巨田薪六郎助友こゝにあり。返せ〳〵。と呼る聲に、五犬士齊一駭きながら、後方を佶と見かへれば、おなじ打扮の寄手の大將、彼も助友、これも助友、面影さへによく肖たり。それかあらぬ歟、とばかりに、逃る敵をば追捨て、近づく敵に駈向へば、又引返す已前の助友、隊勢を進めて先後より、引夾みてぞ攻たりける。時に母屋のかたに當りて、俄頃に發る猛火の光に、秋の山風吹暴て、火燄飛散り飛移り、樹木を焦し草を燒く、煙に堪ねば敵も躬方も、別々になるまでに、頭の上に降かゝる、火華を拂ひあへずして、周章大かたならざりけり。この時にしも五犬士は、前後の敵に隔られて、相距ること百歩二百歩、或は岨のほとりに在り、或は巖の蔭にをり。火は道芝にうつりにければ、輙く聚合に由なけれども、思ひはおなじ信義の心魂、天うち仰ぎて嗟嘆に得堪ず。憐むべし姥雪夫婦は、今はや家に火を被て、共に煙となりにけん、彼火の故に俺們が、圍を解しつ、ゆくりなく、死を脱るゝ時あるに似たるも、亦是夫婦が忠義によれり。然るをその存亡だも、見極めざ

甲に、皂毛織の陣羽折、十王頭の脚盾に、紫金作の大刀、鐺長に横佩て、弓杖つき立、聲高やかに、愚なり犬山道節、汝等なほも株を守りて、こゝにも奇兵を行ふ歟。然らずは走ることもや、と豫て謀りし案に違はず、躬方の多勢に比れば、彼九牛の一毛もて、襲撃んと欲するとも、いかばかりの事やはせん。既にその機を察したる、巨田薪六郎助友こゝに在り。敵ながらも可惜勇士ぞ、とおもひにければ、きのふは免しつ。先非を悔、刃を伏せて、降參せば首を續せん。さるを猶惑を攪て、虎狼の心を改めずは、此度は決して免しがたし。といはせも果ず道節は、ひとり眞先に進み向ひて、怒れる聲をふり發し、扠は助友ござンなれ、汝も讐の隻別なるを、撃漏したるきのふの遺恨、ふたゝび本事を見せんず。と罵りながら拔く手も尖く、うち振る刃は半輪の、月歟氷歟、影に添ふ、四犬士も亦相副けて、共に刃を晃めかしつゝ、撃んと進むを、助友は、彼射て僵せ。と下知すれば、左右に從ふ許多の精兵、齊一弓を彎固めて、切て發せし紊箭にも、怯まず去らぬ五犬士は、打落し砍捨て、よしなや裏をかゝれにけり、と思へば前計合期せず。今助友を討捕らずは、世四郎音音を拯ふに由なし。自餘の端武者に目な被そ。と迭に叫び激して、矢石を犯す奮擊突戰、面も揮らず駈散らす。死を只一擧に極めたる、勇士の大刀風、四下を拂ふて、五犬士一處に聚ひては、又五所に立わかれ、前に顯れ後に隱れ

だりに受流す、刃の冴も覺知の手裡、近づく敵を斫仆す、電光石火の大刀風に、さしも老樹と侮りて、われから嵐の木葉武者、帯出さるゝ外面には、助友ます〱焦燥て、蓬し進め。と鞍壺敲て、なほ繰入るゝ後陣の大勢、嘖き叫で攻著々々、火水になれ。と挑だりければ、木石にあらぬ老夫婦、心ばかりは早れども、これ彼共に手を負ぬ。秋の河瀬の丹楓より、八入に流るる鮮血のくれなゐ、今はかうと思ふになん、且戰ひ且退きて、家に火を被、猛火の中に、身を燒てん、と豫ての覺期も、心にかゝる主のうへ、曳手單節はいかにぞや、四犬士共侶この隙に、落給はずや、といへばえに、岩に碎る谷水よりも、堰留かねし多勢の刀尖、受流し又うけ流す、刃は彌となるまでに、なほその透を得ざりける。(話說分兩頭)、されば又道節は、信乃、莊助、現八、小文吾等共侶に、家を離るゝこと八反ばかり、鬪戰闌ならん時、敵の左右を襲んとて、茅萱の中に埋伏れて、且くその圖を俟程に、既にして母屋のかたに、寄手の颺る鬨の聲、谺に響して、箭叫大刀音漸々に、最も急迫しく聞えしかば、時こそよけれ、と手を抗て、示せば頷く四犬士も、彼此に草推分て、はや立あがる身輕の打扮、四人左右に立わかれつゝ、樹間立潛き、背門邊より、不意を撃んとする程に、ゆくことといまだ百步に過ぎず、思ひがけなき岨陰より、顯れ出たる、一隊の軍兵、忽地路を要りて、先に進みし一個の大將、萠葱威の身

き弦音に、佗箭なければ撥とたつ、引板の鳴子の群雀、稻の穗なみに風騷ぎ、よせては返すばかりにて、緈果べうもあらざれば、助友眼を瞪らして　いひがひなきもの共かな。さばかりのノへ箭に、何でふ怕るゝことやはある。退な進め。と罵たる、聲をちからに箭面に、たつとしいへば破障子、遣戸蹴放ち踏摧く、擬勢も有繋雜兵の、鋲、釟、頭衝棒、十手、得物々々をうち振て、ふたゝび進む程しもあらせず、猪平音音は既にはや、矢種も射盡したりければ、手には薙刀朴刀を、腋夾み拔歛めて、物の蔭より顯れ出たる、對の身甲、腕鎧、脚盾、老木の松に蘿蔓、かゝる打扮も子に代る、勇氣を示す軍の宏言、夫婦齊一聲ふり立て、あな物々しき捕手の大勢、われ雜兵には所要なし。大將は誰ぞ、助友歟。進みてわがいふことを聞け。萬夫も敵なき道節ぬし、かばかりの寄手に怕れて、逃隱れしにあらねども、時のいまだ至らねば、かさねて義兵を起さん爲、同盟の勇士と倶に、今朝はや他鄕に赴き給へり。かくいふものを、誰とかする。犬山殿の譜第の老黨、姥雪世四郎、一名は猪平、老妻音音共侶に、汝を俟こと久しかりき。とく討捕て手がらにせずや。といはせも果ず紛入る雜兵、ほざいたり老惚等が、よしなや主を延さんとて、死に出しは夏虫の、火虫に似たる白物也。物ないはせそ、彼奴から、搦捕らずや、迯すな。と多勢に誇る侶擬勢、前後左右に閲きて、擊んと競ふを、猪平音音は、右にひ

の中に埋伏れつゝ、敵いと遲し、と俟程に、推寄來つる討手の軍兵、樫實の只孤屋を、稻麻のごとく捕卷て、咄と鬩たる鬨の聲に、早雄の兵卒等、走入らんとしてけるが、庭の折戸に殺梟たる、三寶平駄一が首級を見て、忽地鬼胎を抱きけん、左右なく進み得ざりけり。當下大將巨田助友、柴の戸狹し、と馬乘駐て、やをれ、犬山道節等は何處に在る。嚮には同類の援によつて、不思議に網を漏るゝといへども、一味の奴原共侶に、この處に躱れをるよし、密訴ありて定かに知れり。斯多勢をもて捕籠たる、この助友を認遣れずは、名告らずとても膽に徹して、本事は豫てしりつらん。かくまで窮るその身の命運、今はしも籠の鳥、檻の獸に異ならず。とくとく出て、縛の索に係らば同類の命は時宜に依て免さん。いかにや奈何。と呼れども、軒端にかよふ松風の外に應はなかりけり。助友焦燥て、麾ふり揚、穢き敵の逃足に、武士の作法もいらばこそ。思へば無益の問答なりき。とく踏込で討捕ずや。と烈しき下知に　先隊の雜兵、うけ給はる。と答もあへず、群だち競ふて竹緣を、踏落しつゝわれ先にとて、走り入らんとする程に、箭來を譏る姥雪夫婦が、間近く敵を引よして、障子隔亮の間より、差詰彎詰射出す征箭の、裏缺までに至らねども、先に進みし五七人、矢庭に胸前射倒されて、おなじ枕に臥たりける。この弓勢に辟易して、人を小盾に搦擇しつゝ、色めく敵に、息をも吻せず、なほも隙な

の山邊に退きて、樹下暗き彼方より、不意に起て横さまに、敵の左右を撃崩さば、這奴等は必度を失ふて、躬方に伏兵ありと思はん。當下逃走る敵兵を、よき程に追捨て、僉共侶にいちはやく、他郷に避て時を俟ば、只今死するにますべきのみ。この議はいかに。と諭しつゝ、左右を屹と見かへれば、信乃、莊助、現八、小文吾等は、齊一掌うち鳴らして、說得て理あり、極めて妙なり。敵手に足らぬ雜兵を、幾人撃捕て死するとも、なほ隋侯の珠をもて、雀を彈くに異ならず。匹夫の勇は、えうなきものを。といふに道節悅びて、さらば先この奔走不便等を、とくとく馬にうち乘してん。嚮にも謀し合せしごとく、渠等がうへは左にも右にも、犬田ぬしを煩さん。よき來去を相謀ひて、媼雪夫婦もろ共に、行德へ將て還り給へ。と憑むを小文吾聞あへず、そはこゝろ得て候也。とく乘らずや。と緣頰へ、馬の鼻づら牽よして、曳手單節を合鞍に、落ぬ爲にと絆もて、あちこち楚とからまへて、一ト町ばかり牽退けて、繫ぐ樹蔭によせ來る敵を、まつや常葉の老夫婦、猪平音音は今さらに、爭ひ離て燒草を、家の內外に積寄せ投入れ、案山子ながらの圓竹弓も、俄頃准備の細竹の征箭、伐盡しつゝ携て、いるわが宿の片廂、遣戶障子を盾にしつ、霎時はこゝに隱口の、はてしなきまでいそがしき、必死の覺期ぞ哀れなる。斯有し程に道節信乃現八、莊助等は、背門の山邊に退きて、小文吾共侶露深き、茅萱

第六輯 巻之一

第五十一回

兵燹山を燒て五彦を走らす
鬼燐馬を助けて兩婦を導く

再說、上野國甘樂郡、荒芽山のほとりなる、道節主從が隱宅には、白井の城兵既にはや、程遠からず寄するに及びて、猪平音音は道節等の、五犬士を延さん爲に、夫婦寄手を防留めて、戰歿せんとはやりしかば、曳手單節も共侶に、死んと思ひ決めしを、五犬士いかでか從ふべき、迭に諫め爭ふて、言果べうもあらざれば、道節頻りに焦燥て、世四郎(猪平をいふ)音音が必死の覺期は、皆是忠義の爲にして、志はさることながら、視に餘る彼大敵を、老夫婦等が禦げばとて、いつまでか得拄ゆべき。況て曳手單節等が、愁に退かで、死して益なきのみならず、さしも犬山道節等は、命をしさに老弱男女を、遺して脫去たりなど、後々までも敵にいはれば、恥亦これにますものなし。さればとて汝達に、落よといふとも從ふべからず。よりてわれ亦思念あり。世四郎音音はこゝに籠りて、しばらく寄する敵を禦げ。吾們は七八反、背門

坊賈之捷利。素其所也。而猶有甚焉者。若拙著常世物語。三國一夜物語二書。其刻版係于丙寅之燬。或爲烏有。或亡其半。曩一賈豎。補刻常語之闕。又翻刻一夜語。然不告諸予乞校訂。擅改易常語書名及出像。而令是如新著。是以多不與舊本同。加之。其文誤衍亦多。拙劣不遑毛擧也。初予不知之。客歲涌泉堂。購得常語補刻之梓。而乞予校訂。於是予駭嘆久之。無所漏憤。譬如汚衣之油。屢洗乃耗本色。迨今又莫奈之何。且也一夜語翻刻。雖未得見新刷。而推思之。則亦不與舊版同。可知也。顧廿餘年前戲墨。吾豈敢懸念耶。但見賣名之慊。不得無言也。因贅數行於簡端餘楮。

曲亭主人再識

工依故。出像。則柳溪二子所畫。淨書乃田谷雨筆錄之。閱五六月而書畫盡成。嗚呼涌泉堂性太急。自克促工。而無虛日。及劂人告成。又乞顏予之自序於簡端。業在倉卒際。不遑含毫且回思。卽便述本輯稍久而出世趣。代序以塞其責。

文政九年菊月中澣書于著作堂雨牕

曲亭蟫史

八犬傳第六輯有序

予所著八犬傳一書。此秋夕冬夜戲墨。襲謬爲書賈山青堂所刊布。雖未足使楮價踊貴。而於書賈頗有贏餘焉。旦暮以此爲搖錢樹云。自是之後。屢續稿。而至第五輯。時山青堂耽於他事乃不果。俛仰之間。光陰荏苒。越歷四五年矣。今茲書肆涌泉堂。購得前書刻版。又揣刻。一日令山青堂爲介。告諸予乞代續梓。誅求數四。諄諄不已。予爲其言有理。漫然頷之。將創餘稿以充鎖夏之料。然無有宿構也。偶其所有。皆忘之矣。因沈吟構思。然後費燈油者。每夜一二盞。漸費至一二升。則稿了一卷。彌費迨斗許之夜。稿了者總五卷。其第五卷楮數最多。遂盆之以爲二本。編纂共六本。手稿竟完矣。輙授之于涌泉堂以登於梨棗。其書畫二

受し再生の、大恩をまだ一點も酬はず、況可惜兩賢息を、撃せし憾の大かたならぬに、今亦敵を叟等に任して、苟にも脱れんやとて、諸聲悍く否すれば、道節も亦いかでか聽べき、一步も退く氣色なく、倶に云々と諭すになん、曳手單節も共侶にとて、齊一死をぞ究めける。猜平音音はこれらの言に、又何とか答けん。畢竟姥雪夫婦の存亡、五犬士の進退いかにぞや。そは編を繼ぎ卷を更て、第六輯のはじめに解ん。姑く餘稿を、輯外に措のみ。

にこそといふ。そが中に現八は、檐旁の松にさや〳〵、と攀登り見わたして、閃りと降て、莞爾とうち笑み、思ふには似ぬ敵の軍配、其勢凡三百餘騎、田道里道挿詰て、既に間近く推寄來れり。しかりとも吾黨が、力を勠して撃破らんに、敗れずといふことやはある。おもしろしおもしろし。と勇る腕を扼りて、騒ぐ氣色はなかりけり。當下信乃は、小文吾に、彼分捕の刀を贈りて、某は幸ひに、犬山生の厚義により、復村雨の大刀を獲たれば、今は三口の刃をもてり。獨和殿は副刀なし。敵にあふてその大刀折なば、何をもて防ぐべき。且くこれを帶給へ。といひつゝ遞與せば、小文吾は、辱し。と受とりて、軈て腰にぞ挿添ける。その間に猪平音音は、力二郎尺八が、像見の身甲投被て、腕鎧に鉢巻精悍しく、音音は納戸に秘置たる、薙刀を取て挾み、猪平は朴刀を、腰に帶び跪きて、頻りにはやる道節及四犬士を諫るやう、嗚呼がましうは候へども、敵を侮るものは亡び、謀なきものは危し。諸君の武勇、向ふに前なく、鬼神を拉ぐ手段ありとも、寡をもて衆に敵すべからず。五指の彈くや、一指を折かば、後悔其處に立がたし。某夫婦はこゝに籠りて、命限りに寄手を防ん。近づかぬ間に敵を避て、とく背路より落させ給へ。行住不便に侍らめども、曳手單節がうへをのみ、憑み奉る。と只顧に、思ひ入たる必死の覺期に、四犬士は道節が回答をまたず、頭を掉て、こは思ひがけもなき。襲には

駄一が首級を、こゝらに捨て出て逍ば、慌て脱去りしといはれん。こは庭門に梟首せよ。といふに猎平身を起しつゝ、二級の首をもて出て、諸折戸なる逆釘梁に、串き並べて梟にけり。既にして起行の、准備はやくも整ひしかば、道節は愀然と、四犬士を見かへりて、某今一條の懺悔あり。家に傳へし祕書によりて、火遁の術を獲たりしは、甚しき愆なりき。件の術は左道にして、勇士の行ふべきものならず。その要領は難に臨みて、わが一身を免るゝのみ。敵に克ときは、絕て要なし。尤恥べきわざになん。よりて目今その書を燔て、ながく左道の異法を斷ん。皆見給へ。と懷より、火遁の祕書をとり出しつ、なほ燃殘る地炕の火中へ、忽地磤と投捨れば、燄々として立のぼる、火炎と共に捕手の兵、いつの程にか潛寄けん、一隊凡十人許、柴垣の蔭、樹杙の間より、簇々と走り出て、御諚ざふ。と呼かけ〳〵、はや緣頬にうち登りて搦捕らんと競ひ蒐るを、こゝろ得たり。と五犬士は、立逆ひ引受て、修煉の大刀風瞬間に、眞額肩尖、向脛、當るに任して砍例す、技も刃も海内に、儔稀なる勇士の働き、孰か一人も漏さるべき。頭顱を並べて撃れけり。さもこそあれ、と五犬士は、立並びつゝ衣の袷を、袺りかへして血刀を、拭ひ納る程しもあらず、逈に聞ゆる陣鉦大鼓に、衆皆耳を欹て、原來この隱宅を、はやくも知りて撃んとしたる、是等の雜兵のみならず、後詰の大軍白井より、推寄來つる

彼馬の事はしも、和子には豫て報侍りき。賓客達聞給へ。彼は古主の乘替にて、年來祕藏の逸物なれば、去年煉馬の沒落に、敵に取せんことのをしくて、兩個の媳婦を合鞍に、乘して重圍を脱れにき。さればこの地に落留りても、是ぞ古主の像見と思へば、貧しき家に畜立て、豫ては和子の乘馬に、と思ひしものを思ひきや、昨夕は子共の亡魂を、又合鞍に乘せて來つ、けふは又あの子共の首を、負して他郷へ遣らんとは。世とて時とて畜生までも、さぞ朽をしく思ふらん。不便にこそ。と今を思ひ、むかしを偲ぶ譚言も、忠義の外は他事ぞなき。現憑しき誠心やとて、人僉いよ／＼感じける。そが中に猎平は、道節に希望ふやう、婦女們を下總へ、遣されんはしかるべし。某は子共に代りて、君に從ひ奉り、同行の諸君子の行笈をも聚負てん。何處までも召されよかし。といふを道節聞あへず、そは究めて無益の議也。譬ば雲と水との如し。これより各袂を分たば、誰か亦その往方を定めん。われ既に犬塚生と、別後の事を相譚たり。今現在の六士の外に、同因同果の二犬士あらん。こは智力をもて招くに由なし。各隨意に武者修行して廻國年を歷るならば、遭ずといふことあるべからず。かゝれば從者なきこそよけれ。汝は音音共侶に、行德へ赴けかし。と諭せば又四犬士も、辭を添てぞ禁めける。猎平望を失ふて、悵然として退きかねしを、道節うち見て、やよ世四郎、さのみな心を苦しめそ。この三賓平と

首級を竊に葬りて、まづ女流を落すべし。といひつゝ傍を見かへれば、小文吾も亦頷きて、そは究竟の處あり。姥雪夫婦と兩孀婦は、われ行德へ將て適て、父文五兵衛と妙眞に、憑みおかば後安けん。疾その准備をし給へかし。と四人齊一勸れば、道節この議に從ふて、軈て猎平音音等に、綷のこゝろを得さしつゝ、なほ行末を相譚ふに、力二尺八が首級の事、今この敵地に埋葬んは、快からぬわざなれば、犬田ぬしを煩さん。こは行德へ遣して、彼地に葬るこそよかゝめれ。幸にして馬もあれば、衣裳調度を附負して、曳手と單節と迭代に、牽もせよ、乘もせよ。脫落なせそ。と急せば、音音は行李の准備して、晝餉の料の握飯を、人別に裹む程に、曳手單節は馬孤屋なる、馬に履穿、秣を飼ふて、緣頰近く牽よしたるを、檐の柱に繫駐て、ひとしく音音猎平等がほとりに並び跪きて、豫ては思ひ決めてし、自殺の事は、二かたの、禁めさせ給ふにより、こゝろに任せ侍らねども、切てけふより尼となりて、良人の菩提を弔まほし。この事のみは許させ給へ。といひも訖らず准備の刃物を、手に〳〵取て發願得度の、頭髻を弗と剪放ちつ、力二郎尺八が首に添て、二袱に推包み引締びて、鞍の前輪に附るになん、猎平音音は感嘆して、禁んとするに竟に及ばず。道節等の五犬士も、貞操節義を嘆賞して、いとど不便に思ひける。當下音音は曳手等が、荷を附る馬をつく〴〵と、見つゝ頻りに嘆息して、

娶ざりしを、亡父道策傳聞て、竊に憐み思ふものから、猜平音音を今さらに、許して夫婦にせんことは、いとなしがたき所行なれば、その子にはやく妻を娶らせて、親を慰めたるなるべし。爾るに力二郎尺八は、婚姻の次の日より、母に別れ、妻に別れて、再會の時しもなく、忠義の爲に身を殺せども、孝感の致す所歟、その二親を全して、婚媾の遺念を果せり。この事頗奇ならずや。といへば衆皆感嘆して、道策が惻隱の、大かたならぬを稱けり。且して信乃がいふやう、現成敗は必しも、前知しがたき事多かり。譬ば媼雪父子の存亡、吾黨の危難の如し。さればいぬる日猜平叟に、一封の書を委らしたる、某に先だちて、犬川生はこゝに來つ、あるじの媼に對面して、犬山ぬしの郷導をしつゝ、某等に引見したり。加旃彼書狀は、犬山生が開封して、後にそのぬしに見せたる、綷齱齟ふに似たれども、その叙な失はず、是則機變也。機變は前知すべからず。かゝれば彼根五平等を、漏さず撃留たればとて、こゝにをらんは究めて危し。さはあらずや。と聶けば、荘助も亦膝を進めて、彼定正は大敵也。縱令撃果さずとも、犬山ぬし身ひとつにて、越杉竈門等はさら也、敵兵夥討捕給へば、こも復讐の義に稱へり。又定正を討んとならば、八犬士具足の日に、里見殿を相佐けて、思ひの隨なる軍をしつべし。今はその時ならずといふ。現八これに同意して、兩兄寔に說得てよし。力二郎兄弟の

命、おもきがうへにかさね〴〵て、四柱の俊士英傑、氷人となり給はん事は、分に過たる僥倖也。當りがたく候。と固辭を道節推禁めて、爲に謝義を述、答禮して、音音曳手單節等を、四犬士に引見すれば、四犬士はその不幸を悼みて、懇に慰めつゝ、力二郎尺八等が、首級に對ひて恩を謝し、生る人にものいふごとく、誠心言下に顯れて、僉感涙に哽びにければ、曳手單節は酌にも得堪ず、頭を低てうち泣くめり。音音も頻りに目を拭ふて、只道節がうへをのみ、四犬士に憑み聞えたる、給といひ恰といひ、人情節義、膽に銘し、骨に徹する哀歡苦樂に、道節は猎平と、瞼潤ふ目を指しつゝ、しば〳〵嘆息したりける。かくてあるべきにあらざれば、四犬士は婚禮の式に據り提撕て、猎平音音に、形ばかりなる、合卺執締して、千秋樂とぞ祝しける。綷既にして果しかば、道節ふかく歡びて、更に又盃を、四犬士に勸る程に、曳手單節は庖湢に退りて、飯を炊ぎ膳立して、遺なく酒食を薦れば、音音は地炕の邊についゐて、酒を盪め茶を煮たる、管待大かたならざりけり。そが程に道節は、四犬士に告るやう、世に情人の夫婦となりたる、今も昔も多かれども、猎平音音が如きは稀也。就て又晤譚あり。力二郎尺八等は、青年某と同じかりしに、いとはやく妻を娶りしは、わが父の指揮によれり。そは音音が老實に、某を字育たる、又猎平が先非を悔て、漁者となるまでに、敢又他家に仕へず、亦別妻を

開く花を、挿頭すにもます歡びなれ。きのふ白井の厄難を、脱れて走るくらき夜に、不知案內の山路に迷ふて、この處へは立も得よらず、遙に適過たりけるを、幸にして莊助が、犬山ぬしとつれ立て、追つゝ索來つるにあひぬ。そは人煙遠き山陰にて、世に憚の關もなければ、野火を燒て、四下を照し、犬山ぬしに對面しつ。迭に意中をとき盡して、渴望の素懷を遂たり。かくて僉うちつれ立て、未明にこゝへ來たれども、愁歎悲泣の折なるに、驚さんはさすがにて、且く便宜を候ふ程に、兩賢息の義死孝感、彼不可思議の一奇事に、胷潰れ肉動きて、慷慨嗟歎に堪ざりき。かゝりし程に癖者等が、利慾の爲に機密を搜りて、不覺にその死を餽りたる、そは患るに足らねども、なほ又寄する敵もやあらん、と且く後詰を心がけて、對面遂に今に及べり。嗚呼義なるかな孝なるかな。世に有がたき兩賢息の、只俺們を延さんとて、其處に命を隕されしは、うち歎くにもあまりあり。况離別の二親を、ひとつにせんとて、亡魂の、一夕こゝに顯れしは、儔稀なる純孝也。今その遺志を果さん爲に、俺們四名はこの婚姻に、氷人たらん事を樂へり。便是力二郎尺八等の孝義に酬ふ、寸志ばかりに候かし。許さるべしや。と正首に、辭齊一來意を告て、その婚席を提撕ば、猶半羞たる面色にて、過世の業因ふかき故にや、死すべかりしを、得死ずして、子共を擊しつ、剩、相應しからぬ合巹、辭するに方なき故主の懇

かりも侍らんかし。といふに道節頷きて、甚佳々々。疾盃の准備をせずや。といふに單節はこゝろ得て、地炕に柴を折燒ば、曳手は庖湢に赴きて、酒壺をそが儘携來つ、同胞酒を溫て、折敷に載する盃の、緣は缺ても相生の、松は操の高蒔繪、昔堅地の老夫婦を、如此ぞ壽く亡夫達の、情願遂て俺們までも、面を起す主恩の賜もの、歡びこのうへあるべしや。と祝して移す銚子に、酒のみありて肴なければ、曳手單節は外に出て、求めやせん、と囁くを、道節聽く聞とりて、外に求る肴より、彼究竟なる物これあれ。田文の茂林より猎平が、持參の首級は當坐の納聘、駄一三竇平等を肴にせば、髑髏盃にもいやまして、誰か珍重せざるべき。とくとく席を改めてよ。とわりなく音音猎平を、對ひ坐して、と見かう見つゝ、かくてはいまだ物足らず、木を伐るものは斧をもてし、妻を娶るには媒をもてす、その人欲得、と見かへりたる、隔亮のあなたに聲立て、

わかやぐや、雪のしら髮も、うちとけて、もとのいろなる、相生の松。年ふりてけふあひ生の、松こそめでたかりけれ。

と、諷連つゝたち出て、齊一席に著くものは、是則別人ならず。一の著座は、犬塚信乃、次に莊助現八小文吾、皆猎平にうち對ひて、恩人命恙なく、はからざりける再會は、枯たる枝に

の、封皮を折きて見てけるに、力二郎尺八が、母の安否を問る狀也。又四犬士を紹介は、別紙に追書したれども、その手迹おなじからねば、そは猎平が筆なるべし。さばれその紹介にも、力二郎等が名をのみしるして、猎平が名を署せざりしは、嫌疑に憚る老人の、用心ならん、と猜しつゝ、その潔白を感じたり。この一條もて猎平が志を知るのみならず、身を過失にかへり見て、神宮に浮世を避しより、敢又他家に仕へず、子共の爲に、歸參を乞はず、音音が爲に、妻を娶らで、事のこゝに及べるを、もし賞せずは、天意に違はん。力二郎尺八が、魂魄いまだ遠く去らずは、復立かへりてこれを聽け。二十年來離別の父母を、ひとつに合せしは多く得がたき、汝等が孝心の、應報に疑ひなし。恨らくは汝等を、今まで席に侍らして、歡ぶ貟を見ぬことよとて、兩箇の首級を引寄せつ、うち覆ふたる袱を、半ひらきてつくぐくと、見つゝ苦しき胸にのみ、思ひを籠じ壯士の、泣ぬは泣くにいやましたる、至極の道理に諭されし、猎平音音は白腕の、有無の囘答に口隠りしを、曳手單節は慰めかねて、名をのみ遺す良人の手迹の、これも紀念になりにき、と思へば見れば堪がたき、思ひくの歎きせり。道節辭を勵して、噫いふかひなし、かくまでに、めでたき折に何をか歎かん。酒もやある。と啓れば、曳手單節は涙を禁めて、きのふ還らせ給ひなば、進らせばや、と思ひつゝ、いさゝげながら貯の、一斗ば

とだ朽をしく候。と辭せわしく怨ずれば、音音も羞たる額を撫て、婚緣の事などは、うち聞くだにも疎しき、戲言も事にぞよらん。要なきわざぞ。と呟きて、席にも堪ず立んとするを、道節急に呼とゞめて、嫗よ、さのみな腹たてそ。言一たび口より出ては、駟も及びがたし。われ豈漫に戲言して、老人老女を辱めんや。一日なりとも猪平と、そなたを夫婦にせずもあらば、忠孝に身を殺したる、力二郎尺八等が、志は畫餅とならん。母のみにして簑虫の、父と呼れぬ彼等が愁歎、その亡魂の顯れしも、只この事によりて也。かゝればその子を母のみにして、父なきものゝ如くしたると、けふより父あり母ありて、その孝心を果さすると、利害はえらまで分明也。彼樂みて淫するをのみ、婚媾といふべきや。これを推辭ば子共の爲に、慈なきものといはれん。便是力二郎尺八等が忠孝を、賞するの第一議、枉てわが意に從へかし。又猪平が音音を訪ひしは、素より情義の爲ならぬ、正しき證あるものを、われいかにして疑ふべき。件の證はこれなりとて、懷より二通の書狀を、とり出しうち披きて、これを音音に示していふやう、われ昨夕犬塚生に、はじめて對面せしときに、彼村雨の大刀を返して、迭に意中を說盡しつゝ、且猪平が事を問ひしに、犬塚生は云々と、亘細に告て、音音へ與る、その書狀を示されたり。そを疑へるにあらねども、はやくその意を得まほしさに、音音に代りて、件の狀

子に報知して、彼四犬士の往方をも、見究めんと思ひしのみ。爾るに昨夕圖らずも、田文とかいふ森蔭にて、君に撞見奉り、犬川生を拄んとて、とり違へたる四箇の首級は、舊緣の竭ねばならん、とはまだ迭に知らざりしを、子共の首級を、其處よりして、主君に携られし事、亦是恩義の感應なるべし。さればにやその夜さり、犬川生等の四犬士に、友垣を結せ給ふは、死して悔なき子共が遺忠を、はやくも遂て候。といひつゝ頻りに感激の、瞼に誠を顯せば、道節も亦感歎して、豫てその名を聞しに勝れる、老人の志氣鯁直、今眼前に行狀を、見ればいよいよ感ふかかり。若かりし時、一旦の、過失は誰もぞあらん。今までいたく羞ることかは。舊恩絕て忘るゝことなく、竊にその子を相助けて、わが爲に心を盡せし、その忠その功莫大也。かゝれば今これをもて、むかし犯せし彼一條を、贖ふに餘りあり。よりて亡父尊靈に、なり代り奉りて、勘當を免すなり。けふより音音を妻として、力二郎尺八等が、亡魂を慰めよ。彼等もさこそ本意ならめ。といはれて猎平額に汗して、こは思ひがけもなき、勘當赦免の一條は、歡しく候へども、頭に霜を戴て、浮世に望なき身也。況子共を敵に撃せし、歎きの狭霧、無常の嵐に、花は萎み、香は耗る、兩個の媳婦を寡にしつゝ、恥かゞやかしく妻を娶らんや。こはまだ免許を稟ざりし、昨夕音音を竊に訪ひしを、舊情に引れしならん、と思食たる故なるべし。い

末世の美談なるべければ、曳手單節も思ひ絕て、哀みにな傷られそ。亡日々々の追薦供養、ながく菩提を弔んこそ、なき人の爲なるべけれ。われと彼等は二世の主從、乳母子なれば、俗にいへる、乳兄弟にて恩義は敦かり。そを喪ひし心の憂ひを、いかばかりとや思ふらん。天飛ぶ鳥の兩翼を、うち落されしものに似たり。然とて歎くも甲斐なき所行也。世に儁たる力二郎尺八等が親となり、妻となりたる幸ひを、歎きに思ひかえよかし。虎は死して皮をとゞめ、人は死して名をこそ遺せ。老少壽夭は命也、と悟れば誰か死ざるべき。世に百歲の上壽を保つも、命終れる枕方に、殘る妻子のかなしみは、何時とてもみなかくぞあるべき。さは思はずや。と懇に、諭す言葉の末に置く、露歟雫歟漣々と、膝に落せし感涙に、顏を背けて嘆息す。恩義に厚き主命を、阿と感じたる音音はさらなり、曳手單節は辱さに、回答かねつゝ兩袖を、各顏に推當て、只潸然と泣にけり。そが中に猎平は、ひとり逈に退きて、緣頰のこなたなる、障子のほとりに手を叉き、頭を低て默然たりしを、道節うち見て、やをれ世四郎、などて圓坐に入らざりける。とく／＼。といそがし立れば、猎平は稍近づきて、まづ恭しく鉄鍜を、道節に返していふやう、不肖の某、愁に、死後れつゝゆくりなき、見參に入りし事、いと恥はしく思ひ候へ。況二十年來の、節を折きて音音を訪ひしは、力二郎尺八等が、陣歿の事の趣、竊に妻

とを慰めたる、絆おちもなく竊聞て、われはさらなり、犬塚犬川犬飼犬田の四犬士も、感涙坐に禁めかねたり。憐むべし力二郎、尺八等は、忠義の爲に、命を隕せしのみならず、年來離別の父母を、相合せんと念じたる、孝感空しからずして、その二親の再會は、子共の靈の致せしかも。われ犬塚等に聞ることあり。皆是過世轉輪の、業報とこそ覺るなれ。そをいかにぞと原るに、われは犬士の隊に入るべき、宿因の大かたならぬ、痣と玉との明證あり。この一條は云云と、昨夕犬川莊助に、告られし時外に立て、そなたも如此ぞ聞つらん。さればこそあれ猎平は、廼姥雪氏にして、舊名は世四郎也。雪は犬の姨といふ、世の鄙語もあるなるに、世四郎も亦犬塚生に、畜れし犬と同名也。況力二尺八の、四字をわかちて又合すれば、八房の二字となる。彼八房は里見の愛犬、吾黨の犬をもて、自然と苗字にせし事も、又身の中に痣ある事も、皆彼犬に類りけん、字畫をわかつ一條は、犬塚生の發明なるよし、昨夕彼人々と、迭に意中を盡せしとき、詳に示されたり。これは鑿説に似たれども、力二郎尺八は、名をのみ聞て、相識ならぬ、四犬士を延さんとて、敵を防ぎて戰死せしは、唯任侠の所爲のみならじ。彼もの共も山林房八が事に似て、八房の犬に宿因あらん。もししからずは四犬士の窮阨に代らんとて、可惜命を隕さんや。死せんと欲せし猎平が、得死ざりしは、子共の忠孝、天の命ずる陽報也。

出て、根五平が死骸に立たる、銑鋧を抜取りつゝ、頭を回して四下を見るに、荒田の畔に埋井あり。こは究竟の處にこそ、と思へば軈て件の死骸を、引摺起して、推落しつ又立かへりて、丁六顋介が、亡骸を掖もて出して、おなじ井の底へ落しにけり。この時既に天は明て、秋の初風涼しきに、朝餌を求食る群雀の、籬笆に降集る比なれば、かくは三箇の亡骸を、里人等に見せじとて、いちはやく隱せし也。音音はこれを見もかへらず、團扇を把て道節を、うち扇きつゝ含咲て、昨夕出させ給ひし隨に、曉ても還らせ給はねば、いかに〳〵と思ひ不樂て、安からざりし胸も稍、今ははつかにおちゐたり。さても昨夕はさま〴〵の、怪しき事のみ侍りにき。その疑ひは解たれども、いひときがたき根五平等に、絆の機密を知られしを、一人なりとも撃漏さば、枉津日の神いよゝ暴んを、よき折からに還せ給ひし、おん手裏の微妙さよ。と他事なくいへば、曳手單節も、後方に齊一額づきて、恙なきをぞ祝しける。道節聞て、さればとよ、われは昨宵更闌て、如此々々の處にて、犬塚等に索遭にき。よりて犬川共侶に、彼三犬士を相侶て、曉がたにかへり來つ、背門より入らんとせし折に、曳手單節が哭聲の、堪ぬばかりに聞えしかば、異あるべし、と思ふになん、呼門もせで彼人々、とそが儘奥に立聚居つ。扠猜平が事の趣、力二郎尺八等が戰歿の事、首級の錯悞、彼胞兄弟が亡魂は、霎時姿を顯して、親と妻

三刀打よと見えたる、先に進みし丁六を、脇斜に磤と砍る。砍られて苦と叫びもあへず、斧うち捨て外面へ、逃んとしつゝ縁頬より、落る軀は忽地に、兩箇にわかれて倒れけり。顋介はこれを見かへりて、駭迷ふて庖湢のかたへ、走り避んとする程に、音音が透さず逆撃つ、刃に額を劈れて、叫苦とばかりに外面へ、又引かへす肩尖より、背をふたゝび丁と砍られて、痛手に得堪ず幾歩歟、投るが如く跌き走りて、庭に倒れて死でけり。根五平はこの光景に、舌を巻き膽を飛して、立足もなく縁頬を、踏外し滾落て、拔せし腰を敲きつ伸つ、慌忙き逃走るを、猎平音音は佶と見て、血刀引提て共侶に、追撃留んとする程に、根五平ははや庭門を、出て頻りに走るになん、曳手單節も氣を悶て、倶に焦燥ほどしもあらず、奥のかたに人ありて、曳。と被たる聲と齊一、出居の隔亮の間より、打出す鉄銃の、寃違はず根五平は、背を胸まで撃れたる、苦痛の一聲、空を爬て、仰反仆れて息絶けり。思ひがけなき助大刀に、猎平音音は驚きながら、立駐りて見かへれば、曳手單節は立よりて、諸手をかくる破隔亮を、裏面より颯と推開て、顯れ出たる犬山道節、いと悠々と頤もて、諭す隔亮を曳手等に、宿の如くに閉さして、はや上坐に著しかば、これは〳〵、とばかりに、音音はまづその血刀を、拭ひ納めて遽しく、主のほとりへまゐるになん。猎平もこゝろ得良に、刃を納めてそが儘に、且外面に走り

仇紏繁扱井へ牽ん。腕を回せ。と呼りて、腰に著たる黒繩を、手ばやく取りて、投るが如く、根杕も拔よ、く張肘は、車に逆ふ蟷螂の、斧突立たる丁六顋介も、行材めかせし杣聲合して、と縁頰を、突鳴しつゝ鬪きけり。

第五十回

白頭の情人合巹を遂ぐ
青年の孀婦菩提に入る

音音は思ひがけもなく、敵の間者に裏を被れて、陳ずべくもあらざれば、曳手單節を後方に添して、寄らば砍らん、と懷劍の、鞆を握りて立んとするを、猪平はやく見かへりて、推隔つゝ些も騷がず、踢飀る裳を引折て、兩三步根五平等に、進み向ひて、冷笑ひ、噫物がまし、里人等が、捕手三昧烏滸ならずや。わが敵手には足るものならねど、獨死んは所作なきに、今さら無益の殺生も、放すによしなき讐敵の半隻、望の隨に死天三途の、瀨踏をさせん。と右手に携りし、朴刀を左手に取て、挾みたる必死の勢ひ、心ばかりは悍くとも、老人なれば、と思ひ侮る、根五平擬議する氣色もなく、彼薙什せ。と敦圍ば、丁六顋介は左右より、拿たる斧を振揚て、擊拗んと走り蒐るを、猪平閃りと遣違して、拔合したる刃の電光、左に流し右に拄て、兩


樵夫をねて
根五平音音
等を擒捕へし
根五平
ヤス平
丁六


道節
ひとよ
音音

し、殉死はその身の本意なりとも、歸參の免許を受ずして、わがこの宿所で自殺せば、法度を犯して故主を侮る、罪を亦復こゝに累ん。加旃莊役が、徇傳たる讐敵の下知狀、いはれし事もあるものを、天明てもまだ還り給はぬ、和子のうへいと心もとなし。舊恩實に忘れずは、撃れし兩個の子共に代りて、故主の瀨に立、影に添ひ、死すべき折に潔く、死んと思ひ給はずや。不覺なりき。と窘れば、猪平莞爾とうち笑て、寔にこれはいはれたり。われとおん身は私に、再會すべきものにしあらぬを、こゝにて死なば、瓜田の履、嫌疑を後に遺すべし。和子には見參憚りあり。いざさらば犬塚等が、往方を索て云々と、子共のうへも、わが宿志をも、報てとも叉かくもなりなん。嗚呼しかなり。と頷きて、やうやくに死を止れば、曳手單節は携りたる、拳を放ちて共侶に、辭を添て慰るを、猪平いよ〳〵諾ひて、刃を鞘に納めつゝ、告別して外面へ、出んとしたる緣頰の、障子を礙と踢ひらきて、並立たる三個の癖者、眞額鉢卷索襷、各身輕の打扮は、是則別人ならず、昨夕來たりし莊役根五平、丁六顚介を左右に將て、意氣揚揚たる聲高やかに、汝等胸が潰るゝ歟。かくあるべしと昨夕より、猜したれどもさり氣なく、宿所へ還る面色して、裏を垣根の間荒なる、背門より潛近づきて、簀子の下に終夜、一五一十をみな聞たり。音音はさら也、猪平等も、亦是煉馬の殘黨なる、道節が餘類なり。僉縛めて白

良人に立代りて、忠孝ふたつに命を保て、といはん料にぞあらんずらん。かゝれば浮世に存在て、良人の首を葬る日に、わが亡骸をも瘞めてたべ。是までなりと朴刀を、晃りと拔て、取直しつゝ、腹を切らんとする程に、吐嗟と見かへる音音より、曳手單節はいちはやく、身を投かけて、やよ喃。と叫びつ泣つ右ひだり、攜る拳にはふり落る、涙に聲をふり立て、こは物體なし俺們を、今まで諭し給ひぬる、道理に惺惚御こゝろに、相應しからぬ刃物三昧、自殺の覺期はいかにぞや。思ひとゞまり給ひてよ。と辭ひとしく姉妹が、力を勠し辛して、取鎭めんと刀尖を、筵疊に縫留させて、喘々諫れば、猜平頭をうち掉て、いな／＼放さぬ怪我なせそ。曩にいひしを何とか聞たる。いぬる二日に戸田河にて、死すべかりしを、けふまでも、存在たるは、子共の爲なり。年來故主へ一トたびも、わが愆を勸解ざりしは、亦是恩義の爲にして、疎遠はつや／＼不實にあらず。かゝりし程に主家の滅亡、子共に訪れて、大義に加り、この時にこそ身を殺して、彼舊恩に答ん、と思ひしものを今さらに、餘命をいつまで貪るべき。年老力衰へて、故主の先途を見るよしもなき、殉死は義士の素懐なるに、哀に迫りて、死を樂む、女子共と一列に、思はるゝはこゝろにず。其處退ずや。と敦圉て、疾視哮るを推居ても、曳手單節はせんすべなさに、やよ。と叫て見かへれば、音音は悚へず、衝と寄せて、噫情剛し猜平ぬ

世になき人をはや知りて、駭怕れて乗せじとて、狂ひにけり、とやうやくに、今曉るこそ甲斐なけれ。と喞ば單節もうち泣て、然る所以にこそこの兩包を、馬に負さでそが儘に、わらはが背負ひしかの時よりも、なほ重やかに覺るかし。阿姑さまも猜せ。大人も見給へ。喃阿姐、いざもろ共に。と同胞が、披く包は一雙の、黑革威の身甲の、鮮血に塗れて韓紅に、痛手を遺す鳥銃の、裏缺し痕も六七ッ、八花菱に小鍬の、腕鎧に脚盾とり添たる、これを見彼を想像る、良人々々が陣歿の、烈しかりける戰ひの、かゝありけん、と哀傷に、涙ます〳〵果しなき、音音も倶に塞る胷の、痞に帶を引締て、いふかひなしや媳御達、縱生涯歎くとも、憂を遣る瀨のあるべき歟。かくまで奇しき絆の顚末、これを夢とも現とも、思ひ得がたき親女房の、疑ひを解んとて、この兩包を遺したる、子共は寔に神なりけり。かゝればその妻子として、志の似ずもあらば、いと耻かしき事になん。涙を禁め給はずや。と辭雄々しく諫めても、心の底は弱り果て、鼻のみうちもかまれたる、歎きはおなじ親ながら、猪平はなほ羞てや、胸苦しげに嘘嘆しつ、音音が意見よしあるかな。この身甲も、腕鎧脚盾も、われは素より認りたり。こは力二郎尺八等が、池袋より落て來つるとき、わが家に脫藏めしを、戸田河原の戰ひに、とり出し膚に著て、終に陣歿したりけり。然るを彼等は世になき後に、これを妻子に遺せしは、今より

又彼ぬしの討捕給ひし、仇の首級をわが將て來つるも、主從忠信孝義の感應、こも庸事とはおぼえぬに、况死生は命あり數あり。良人に代りて姑に、仕へて且その菩提を弔はゞ、それこそ眞の貞女なれ。かくても聽ずや、いかにぞ。と辭せわしく諫れば、曳手單節は大かたならぬ、理りに切られて、かへすによしも泣顏を、いよ〳〵擡得ざりけり。されば音音はやうやくに、こゝろの闇も、天の色も、明くなりたる反故張の、窻の下を見出して、喃娘御達、心を鎭めて、且はや彼を見給へかし。力二郎尺八等が、姿は消も亡たれど、その行褁は兩個ながら、舊の儘にて彼處にあり。といはれて女同胞は、目を拭ひつゝ、と見かう見て、像見こそ、今は仇なれ是なくば、忘るゝ隙もあるべきに、いとゞ歎きを眞十鏡、影も像もなき人の、遺せしは現何にかあらん。いざとて軈て共侶に、立よる窻の片明り、姉も妹も手をかけて、提る包に力なき、憂身ながらにわれもかも、滅殘りたる燈火の、前面へやをら推居て、又潸然とうち泣たる、曳手は聲を口隱らして、かゝるべしとは夢にだも、しるよし絕て神ならぬ、地藏の茂林の曠野にて、彼二かたの病臥せしを、妹と倶に勦りて、馬に乘せんとせし時に、頻りに馬の屬強して、すべなかりしは畜生の、

髪なる雪の松、迭の心うち解て、本意ある對面を側ながら、いと歡しう思ふにも、只哀しきは俺們が、短き妹背の緣し也。別れて後はきのふまで、雁の翼も絶果て、音耗聞えぬふみ月の、けふは七日の曉も、名のみなりけりいかなれば、年に一たび牛織二星の、あふ瀨はあるに亡者の、影も留めず逝水の、かへらぬ旅の衣手を、綴り合して冥土まで、伴ひはせでつれもなく、長き嘆きを遺されし、この身この身は今さらに、措處なき憂にたえで、脆くも萎む朝皃の、果敢なき露の玉の緒の、たえなば絶よ、日も月も、照らさぬものをいつまで歟、何樂くて存命ん。骸は土にかへるとも、心變らぬものならば、後の世こそ憑しかるべけれ。死ばや死ん。と猪平が、左右より腕を伸て、朴刀を取らんとするを、取らしも果ず搔遣れば、音音も倶に推禁めて、狂ふをやうやく鎭めたる、當下猪平聲ふり立て、理りなれども娘御達、事の始終を見かへらで、死んと早るはいと淺き、女子ごころの惑ひ也。力二郎尺八等は、虛見つ日本魂の、人に捷れしものならずは、死しての後も主を思ひ、親を慕ふて姿を見せんや。然とておの〳〵その妻の、命をはやく斷んとて、いかでか靈を顯すべき。これらのよしを思はずに、天を恨み、世を憤りて、生を輕し、死を樂むは、只是愚痴の患ぞかし。おの〳〵良人の本意に悖りて、死して何等の益やはある。わが戸田河に投しに、趣は似て意異也。口を同して語るべからず。今

の光り鮮々と、窻より出るをわれひとり、振向見たる心のかなしみ、今までしらぬお身達より、八しほにましてわが胸の、苦しかりき。と口說立て、告れば音音も、娵婦同胞も、哽かへり咳入りて、泣より外にすべもなき、哀悼悲愁のそが中に、音音は僅に思ひかへせし、頭を擡て、喃曳手、單節もさのみ歎き給ふな。妻子の淚は、なき人の、身にしかゝると昔より、いふは實事歟、然もあらば、後世こそ人の大事なれ。凡貴きも賤きも、武辨の家に仕へたる、命を豫てなきものと、思ひしらずは人なみに、捷れし忠も義もあらじ。主の先途にあらねども、敎を守り、義に依りて、愛たき友を薦ん爲に、その日の敵も外ならぬ、亦是讐の麾下の武士、大石兵衞が陣番を、撃捕たるのみならで、犬塚犬川兩雄の、身がはりにせられしは、死して榮ある子共が武功、このうへや侍るべき。父も父なり、子も子なり。扠も面なし猪平どの、恩に負かぬ誠心の、子共に功を譲らんとて、捨し命の盡せぬは、神の祐歟、佛力歟。さらずは力二尺八が、孝心其處に船となり、筏となりて早河の、親の必死に代りけん。ともしらずして疎みたる、吾儕が愚痴と僻見より、世になき子共を怪まで、存在しその父をのみ、鬼にやあらん、變化歟、と疑ひし事の愚さよ。許し給へ。と白地に、勸解つゝ泣ば、共侶に、曳手單節も泣腫す、二重瞼に八重雲の、かゝる憂ひは世間に、儔罕なる再會別離、稚枝の花の年を歷て、共白

乾竹割に血けぶり立たる、刄の冴に、叫びもあへず、身を轉して仆れたり。これに聊慰めて、手ばやく鮮血を拭ひ納めし、朴刀もて叢を、わけつゝ包を取出し、又携て戶田河を、步涉して三四日と、夜を日に續てこの地に來つるは、一切わが身の爲ならず、件の事の趣を、由緣のものに遺さずは、力二郎尺八等が、忠死義歿を誰かは傳へん。音音は年來中絕しを、再會快からねども、渠ならずしてその人なし。法を踰るは、これ人情、義を見て進むは公道なり。故主の爲にも、子共の爲にも、兩ながら已べからず、と思ふばかりに阿容々々と、この隱宅に索來つ、既往をまだ云々と、報ねばいたく罵られ、拒れてもなほ懲ずまに、こゝに一宵をふし柴の、小屋に憩て外ながら、故主のうへと、子共が亡魂、竊聞つ、又閱窺つ、哀歡交腸も、袖も斷離るゝ感淚を、絞るにあまる不思議の一條。力二郎尺八等は、死して五日になりぬれども、靈はこの土を去らずして、在し面影まさしげに、且くこゝに顯れて、母と妻とを慰めしは、嗚呼孝なるかな、義なるかも。その折われは外に立て、彼𠰥譚を聞もしつ、障子の透よりつく〴〵と、見るに勝ねば呼かけて、おなじ圓坐に入らばや、と思ふ物からその頸を、携來つるわれに逢ば、消もや失ん、と躊躇ひし、生を隔の紙一重、佛を憑む唱名も、音にこそ立ね終夜、淚に暇なき魂を、誰促すにあらねども、八聲の鷄の鳴ばこそ、驚されて冥土ゆく、陰火

山晉五と呼るゝもの、四五十名の隊兵を將て、大塚より援來つ、連放たる鳥銃に、力二郎も尺八も、灸所の砲瘡、竟に得堪ず、間近き敵と引組で、刺ちがへてぞ伏たりける。かくて屬役仁田山晉五は、力二尺八が首捕て、大塚へ皈陣しつ、なほその功に誇らんとて、力二郎が首級をもて、犬塚信乃と僞り唱へ、尺八が首級をもて、小斷額藏と僞り唱へて、けふしも庚申塚の邊なる、棟樹の下に梟らるゝ、と絆人口に隱れなければ、うたてや子共を先だてて、死後れたる老が身の、やる方もなき鬱憤に、腸を斷歎きして、獨つら〳〵思ふやう、梟首せらるゝ子共が事は、悔むもその甲斐あるにあらねど、佞人等が僞名けし、犬塚犬川兩豪傑の、恥を雪めて、云々と、わが方ざまにも、その人々にも、報んずものを、と只管に、おもへば霎時しのぶ世に、その日を消すも一チ日千秋、されば更闌人定りて、庚申塚に赴きつ、心當なる棟樹の下へ、潛び近づき、辛して、取おろせし子共の首を、豫て准備の行袱に、推包み引提て、走ることまだいくばくならず、近邊に夜を衞る兩個の獄卒、捧挾み追蒐來て、癖者等。と呼制たり。絆既に急なれば、兩個の包を秋草の、中に隱して些も擬議せず、返しあはせ引つけて、晃りと拔たる朴刀は、老の拳におぼえの業物、先に進みし獄卒を、ばらりずんと砍伏せて、かへす刃に又一卒の棒もろ共に手首を、擊落しつけ入りて、閃したる二の大刀に、左の肩より乳の下まで、

れからに、快らぬ老後の寸功、兩個の子共に讓らん、と思ひ決めて戸田河に、投にけれど、死も得果ず、年來熟たる水技の、邪魔になりてや思はずも、淺瀨のかたへ流されて、東の岸に著しかば、いと淺ましく、朽をしき、わが身にこそ、と今さらに、棄し命を愁に、助る神の恨しく、濡たる儘に忙然と、且く水際に立在つ。とてもかくても業報の、まだ滅びずとしりながら、ながらふべくもあらぬ身の、水に入らねば死れぬものかは。いでや彼大塚の城兵等と刺ちがへて、其處に骸を曝ん、と思ふも苦しき恩愛の、絆に牽るゝ凡夫心、子共の先途を見まほしさに、舊の岸邊に赴けば、戰ひ果て、人影なく、敵賊躬方賊、彼此に、俯横れる死骸あり。噫わが子共は撃れずや、とおぼつかなくも暗き夜に、その生死の迹を索て、遺もなく檢せしに、いと暗ければ身甲の、威の色も見えわかざりし、軀のみにて定かならず。この故にこそ捨果し、命を霎時存在て、いかで子共の存亡を、聞定めて後に、ともかくも、ならばや、と思ひしかば、その曉に神宮なる、宿所に走りかへりつゝ、心竊に准備して、姿を變て次の日に、大塚へ赴きて、街談衢說を撈問ひしに、戸田河原の戰ひに、陣番丁田町進は、力二郎に撃れたり。さばれその隊の兵は、東の岸に踏留りて、尺八と戰ふ折、力二郎が援來て、胞兄弟力を勠したる、奮戟突戰瞬間に、雜兵夥刺伏せて、頻に克に乘るものから、町進が屬役に、仁田

にこそ。と共聲に、歎き彌倍す、愛惜の、首級を取て膝に乘し、紊れし鬢を搔揚て、見つゝ泣つゝ思へども、思ひ難たる味凝の、文に怪しき死喪のかなしみ、涙の雨に六の袖を、絞りもあへず泣淪む。憂には漏れぬ猎平も、慰めかねし頭を低て、斑なる齒を咋締る、われからわが身を攻念佛、胷に急鉦うつゝとも、夢ともわかぬ人間に、遁れぬは現會者定離、かうこそあれ、と觀念の、眼を閉てもはふり落る、涙に哽て泣然たり。當下音音はやうやくに、志氣を奬して、原來子共は擊れにけり。心やりにもなるべきに、その戰歿の爲體を、聞まほしさよ。といひければ、曳手單節は猎平が、左右に膝を衝詰て、世になき人歟と疑ひし、大人は還て恙なく、恙もなくてかへりき、と思ひし良人は死顏を、ふたゝび見する武藏の家裹、開て悔しき浦島の、なき玉匣ふたりまで、かうなり果し趣を、しらせてたびね。いかにぞや、やよ喃大人。と呼かけて、事問ふ聲も枯れぬべき、歎きます穗の繁芒、外には降らぬ驟雨に、撲るゝ如く俯沈む、媳婦と媳婦とにいとゞしく、泣立られし猎平は、涙の目皮しばたゝき、洟うちかみて幾遍歟、いはんとすれば生憎に、塞る胷を拳もて、搏つゝ息を吻とつきて、これらの事は問れずとも、詳に告んと思はずは、恥かゞやかしくわれやは訪ん。音音よ、勿泣そ。媳御達、涙を禁めて聞ねかし。大約人の幸不幸、倚伏は糾ふ纒に似たり。むかし犯せし罪科を、宥られてもわ

に近き柴垣の、蔭に立つゝ通宵、念佛の外他事なかりき。無事なるときは香を燒かず、事あるときは佛足を、戴くといふ世の常言に、似たるわが身ぞ罪ふかき。今さら思へば彼茂林にて、わがその包を遺せしとき、道節ぬしに拾れけん。ともしらずしてわれは亦、道節ぬしの二包を、掻撈取りてそが儘に、肩にかけつゝこゝへ來て、甲夜に單節に遞與せしかも。儻しからずはこれ彼の、置處やは違ふべき。これによりて猜するに、その二級の首こそ、道節ぬしの撃捕給ひし、兩敵に疑ひなし。以あるかなその二包は、眞の袱ならずして、單衣の袖をもてなり。これその證とするに足れり。地を打槌は外るゝとも、この言のみは必當らん。かくてもなほ疑はゞ、わが二包を解ねかし。然らばわがうへ、子共のうへも、立地にしるよしあらん。とくとく見よ。といそがしたる、言葉の本末今さらに、音音は甲夜に竊聞し、彼莊助と道節が問荅にさへ思ひ合して、こゝに僅にこの條なる、疑ひは稍解れども、解ぬ包の氣にかゝる、曳手單節は燈火の、ほとりへよする兩袱の、結塊にはや手をかくれば、音音も間近く膝を進めて、披くを見れば是も亦、兩個の人の首也。これはいかに、と呆れたる、三人齊一睛を定めて、ふたゝび右より左より、見れば無慙や、力二郎と、尺八が首級にて、色こそ變れまざ〱と、今まで在し面影に、紛ふべくもあらざれば、又胸潰れ心焦れて、喃淺ましの、所天よ伕よ。子共

ぬしにあらずして、誰か亦よくこゝに至らん。その名をいまだ問ざれども、必彼ぬしなるべし、と思ひ決めつ、慕しさに、霎時もあらず又舊の、野路をこなたへ走るになん、癖者も亦茂林より出て、頻りにわれを追ふたれども、及ざりけんこゝまでは、續きても來ずなりにけり。かくてわれはいちはやく、こゝの門邊に立しとき、單節が竊に憐みて、柴小屋へとて憩せたり。かかりし程に莊役が、白井の下知を傳へたる、絏の趣洩聞えて、心にかゝれば尻もおちゐず、竊に其處を立出て、或は背門より庭面より、間なく母屋にこゝろをつけしに、渠より先にうちつづきて、こゝに來つる兩人あり。その一人は道節ぬし、彼癖者と思ひしは、犬塚が友、犬川莊助、舊名額藏といひしものなりき。その値遇によりて不意、白井の仇撃、路次の竊阨、わが犬塚に誘誣たる、密書のいまだ屆ぬ事まで、遺もなく竊聞て、うち驚きつ歡びつ、かゝる便宜は多く獲がたし。とく見參に入らばや、と思ふ物からしかすがに、舊婦にすら罵られし、不似のこの身を見かへれば、恥かはしくて默止たり。若是て又道節ぬしは、犬塚等を索んとて、犬川共侶遽しげに、外面に出給ひしかば、この間にこそ子共のうへを、音音そなたに報んとて、幾遍となく緣頰へ、足踏かけても面ぶせにて、とさまかうさま思ふ程に、兩個の媳婦に相侶れて、來つるは力二と尺八なり。いと淺ましく、うれはしき、こゝろともなく退きて、檐下

この地へ來つる折、身長隆き一個の武士、腰に兩箇の包を著しが、白井のかたより走り來て、先に立つゝ適くありけり。これより先に彼邊にて、仇撃の事の趣、その風聲を途にて聞しを、是彼思ひあはするに、道節ぬしにあらずや、とはやくも心つきしかば、おぼつかなくも跡を跟て、見失はじとゆく程に、既にして日は暮たり。かくて初更の左側に、件の武士は杜蔭なる、塚のほとりに立よりたり。そのときわれは樹隱れて、その爲體を窺ひしに、天結陰りて闇ければ、定かには見えわかねども、腰なる包を取出して、塚に賻贈て祭るとおぼし。われ又倩おもふやう、彼人の賻贈し物は、讐の首級歟。さもあらば、わが推量の空しからで、道節ぬしにこそあらめ。近づきて問ばや、と思ふ折から一個の癖者、塚の蔭より顯れ出て、件の包を取らんとす。こなたの武士は取せじとて、挑爭ふ力量早技、優さず劣らず如法夜に、闇れぬ拳の奇奇妙々。さりとて時を移しなば、一箇は必傷けられん。且雙方を推鎭めて、その名を問ん、と老後の腕立、走蒐りてこの杖を、二人が間へ、かう突立て、推分んとせしときに、肩に掛たる兩個の包を、思はず撲地と落しつゝ、慌忙き彼此と、搔撈當て取る程に、彼癖者が拔閃かす、刀尖狂ふて石塔を、砍削りたる石火の光りに、件の武士も兩個の包を、引提て直躬と立よと見えたる、形は消て往方を知らず。是なん火遁の術なるべし。かゝる奇術を獲たりし人は、道節

せねば、然る疑ひは理りなれども、わが武藏より携來て、甲夜に單節に遞與たる、二包はこれならず。なほこの外に物あらん。納めし處を索て見よ。といふに單節は訝し、と思ひつゝ又舊の、棚の袋戸推ひらけば、曳手も俱に脂燭して、彼此隈なく呟獵ども　それ歟とおもふ物もなし●倘置處の違へる歟とて、夜具措く破戸棚を、ひらきて見れば、果して物あり。袱の色異なれども、その二包を結合せし、これ彼共によく似たり。單節ははやく兩手をかけて、棚よりやをら取おろしつ、これにや侍る。と指示せば、猾平うち見て、それなりそれなり。且く其處に措ねかし。といはれて單節は、こゝろを得ず、扠も不思議の事にぞ侍る。わらはが甲夜に受とりし、包が正しくこれならば、收置たる小戸棚に、あるべきものをいつの間に、處をかえし事やらん。加旃よく似たる、是彼四箇の累物、初の度にとり出したる、その二包は何人が、もて來て隱し置たりけん、これも怪しき事ならずや。といひつゝ傍を見かへれば、音音曳手も呆果て、寔に甲夜より曉るまで、こゝろ得がたき事のみ多かり。みな是物の障礙にこそ。必 油斷し給ふな。と心つくれば怖氣たつ、三人よせても女子の智惠の、淺瀨を渉る遠漁火、人歟鬼歟、と猾平に、疑ひはなほ釋ざりけり。且して猾平は、思ひ得たりし膝うち鼓して、音音よ、さのみな疑ひそ。わが物ならぬ包の事は、推量の外なけれども、そのよしなしとすべからず。われけふ

節をかけてぞ五六寸、砍込む刃を手ばやく引て、鞘に納めて、莞爾とうち笑み、大刀は武徳の名器にして、非常を檢し、非常を防ぐ。この故に妖怪變化も、これに遇へば本形を、顯さずといふことなし。素より寃鬼狐狸の、弄ぶべき物ならねば、その疑ひを釋くに足らん。いで〱といひかけて、そが儘裡面に進み入る、姿はいたく窶れても、心雄々しき老人の、絶て臆する氣色なく、はや上坐に著しかば、曳手單節は今さらに、顏のみうちも戍られて、口を箝て、呆れてをり。さばれ音音は油斷せず、半信半疑の膝を進めて、瞬もせず猜平を、見つゝ僅に頷きて、いはるゝ趣よしあれども、胡越に等しき姥雪ぬし、今さら忌も憚らで、吾儕を訪れし土產の二種、この斬首はいかにぞや。況おん身が戸田河へ、入水の事は甲夜の間に、犬川莊助とかいふ旅浪人が、竊に和子に報しとき、吾儕も巨細に竊聞たり。然るをおん身は恙なく、武藏の盡處よりはるぐ〵と、こゝに來ませしはいかにぞや。これ疑ひの二ッなり。且おん身が入水の事は、獨犬川に聞しのみならず、力二郎尺八等も、當日の戰ひ云々と、報にしものを思ひきや、告し子共は眞柴燒く、朝の炊またずしも、煙のごとく滅失て、今又おん身に見えんとは。是疑ひの三なりけり。かくてもおん身が變化ならずは、兩個の子共と見えたるは、抑亦何ものぞや、こゝろ得がたき事にこそ。と詰問れて猜平は、件の首級を、と見かう見て、緣故を詳に

ふ俺們が、心の憂ひをよく知れる、狐狸の所爲なるべし。かゝれば目今姿を隱せし、子共は眞のわが子にあらず。猾平どのと見えたるも、皆是心の迷ひのみ。誘給へ、脂燭して、まづ緣頰より庭のかた、柴小屋までも遄て見ば、獸の足跡ありもやせん。立給はずや。といそがせば、曳手單節は忽地曉りて、現よく御こゝろつかせ給へり。變化としらで今までも、物いひしことの悔しさよ。いざとて軈て共侶に、立出んとする程に、外面に人ありて、やよ等、霎時、立ずもあれ。一毫こゝに愆れば、その末違ふに千里をもてす。怜悧けれども婦女子の臆斷、理りに似てみな當らず。いで〳〵惑ひを釋んず。と推禁め呼被て、障子を颯と推ひらくを、と見れば是別人ならず、神宮河原の猾平なり。彼はいかに。とばかりに、亦復駭く兩個の媳婦に、音音ははやく目を注して、冷笑ひつゝ些も騷がず。噫烏滸かまし野狐が、漫に人を魅るとも、幾遍その術に乘せらるべき。もし速に立も去らずは、生皮剝て腹を冷ん。後悔すな。と罵りて、准備の懷劍二三寸、拔かけて佗と疾視たり。そのとき猾平手を抗て、阜るべからず、はやるべからず。われ豈妖怪變化ならんや。然るをなほ疑ふて、刃をもつて權すは拙し。そなたに豫て身を護り、仇を禦ぐ懷劍あらば、われも亦身を護り　仇を禦ぐ　刀あり。これ見給へ。と諭しつつ、突立もてる朴刀を、晃りと拔て、側なる、堅木の柱を礑と擊つ。修練の手裏、刀尖銳く、


ひとよ
ハス平



節よ、是歟。とさし示すを、引よせて左見右見て、わらはが受とり侍りし時も、烏夜なりければ、包の色を、定かに認め侍らねども、その餘はすべておほえあり。この二包で侍るかし。といへば音音は嗟嘆して、ぬしはこの世になき魂の、齎せし物ふたつまで、迹に遺るは怪しとも、あやしき事の限り也。何にかあらんその包を、とく〳〵披きて見給へ。といふに單節はおそるおそる、結合せし包の端の、堅きをやうやく解分れば、曳手も驚て手傳ふて、二箇の包を共侶に、披きて見れば、こはいかに、顯れ出し男子の斬首、變りし色も一雙の、死相に駭く娘姑、思はず齊一聲立て、退避たる背のかたに、忽地聞ゆる苦惱の兩聲、燦と燃たる鬼燐の光に、再驚く婦女輩。こは何事ぞ。と見かへれば、今まで在つる力二郎、尺八さへに忽然と、形は消てなかりけり。かさね〳〵し奇異怪傀に、誰かは瞞惑ざるべき。やよ力二郎よ、尺八よ。喃わが所天よ、わが伕よ。と三人齊一呼かへせども、答は絕て空蟬の、蛻の殼だに留めねば、胸潰れ心惑ふて、是も夢歟。とまだ覺ぬ、無明の醉に忙然たり。かゝる惑ひの中にしも、音音は佶と心づく、二級の首たゞ、燈火の、ほとり近く引よせて、つら〳〵見つゝ、喃曳手、單節もこれを何とか見たる。いづれもこれは見しらぬ頸なり。死したる人に靈ありとも、猪平どのの亡魂が、この忌しく穢き物を、何の爲にか齎て來給はん。うたてや日來子を思ひ、良人を慕

や無やを知り易かり。ひらきて見ばや、と遽しく、立んとするを力二郎は、呼禁めて、頭をうち掉り、噫大人氣なしおん身まで、無益の穿鑿することかは。今彼迹を索ずとも、後に必しるよしあらん。急がば歎きを倍すべきぞ。とこゝろありげに叱られて、應をしつゝ是も亦、釋どもとけぬ疑ひに、尋思の頭を傾れば、音音も眉根を顰して、單節が正しく行褁を、彼人より受あづかりし、といふはいよ／＼怪しき事也。執念深き人の亡魂が、行脚法師に誣誘て、故郷へ像見を贈りし事の、物の本にも見えたれば、世になき事とて誣がたかり。然るを力二尺八等は、あの戸棚だに開てな見そ、と禁るはこゝろ得ず。隱さるゝものの見まほしきは、えうなきわざであなれども、かばかりの事何かはあらん。吾儕が許す、娘御達、やよ、共侶に開て見ん。誘とて聽て身を起せば、曳手單節も後方に附て、戸棚の下に立よりたる、親には克んよしもなき、力二郎と尺八は、叶嗟とばかりうち騒ぐ、胸を貫く五更の鐘と、共に八聲の鷄の音も、鄰の塒遠けれど、吹おろす風にかどはれて、殊更近く聞えつゝ、はや曉がたになりにたり。時こそ來つれ、と周章の、兄は弟に目を指す、心の中に別を告て、竊に急ぐ起行の、准備に笠を引よせて、弛みし脚絆を、紐みじかに、結更つゝ嘆息す。ともみな知らねば、先に立し、音音は棚の袋戸を、開ても暗き彼此を、撈れば果して、手に當る、二包をとり出しつ、單

ははじめて猎平さまの、甲夜に強顔く拒れても、恨み給ひし氣色もなく、竊に告べき事ありて、來つるに霎時容れずや、とうち勸解給ひし痛ましさに、阿姑さまの御こゝろの、和ぎ給ふ折をもて、母屋へ案内し進せばや、と思ひにければ云々と、聶き報て、柴置小屋へ、扶容れ潜しつ、物まゐらする暇もなく、姉を迎とらんとて、いと倐しくたち出て、かへりて後もこれ彼に、事の繁くて彼かたを、得見かへらざりければ、心にかゝり侍りしに、今將夢歟幻歟、世になき人と聞きながら、彼處にゐます心地ぞする。加以彼人さまの、肩にうち被給ひたる、袱包ふたつまで、その折わらはが受とりて、あの置納の小戸棚へ、竊に藏め措たりき。そも又夢の跡もなく、大人共侶に滅失し歟、今なほあらん歟、いと怪し、とは思へども彼に此に、なほ疑んは罪ふかゝり。要なき所爲で侍れども、誘給へ、わが所天よ。いゆきて事の蹟を見ん。僉もろ共に立給はずや。といひつゝ軈て身を起すを、尺八急に推禁めて、こは何事ぞ、物にや狂ふ。今柴小屋へゆけばとて、又わが大人の見らるゝものかは。疑しくはひとりゆけ。誘引るるとも誰かは立ん。益なき事を。と呟けば、單節は有繋に爭ひかねて、戸棚のかたを見かへれば、曳手は、さもや、と頷きて、如右正々しき事さへあらば、ひとり單節が疑ふも、そのよしなきにあらずかし。柴小屋まで邁んより、まづ臂近なる戸棚を捜らば、その二包の行袱の、有

第五輯　卷之五

第四十九回

陰鬼陽人肇て判然
節義貞操迭に苦諫す

力二郎尺八等は、思ひがけなく父猎平が、甲夜の間に來て、門に立しを、音音が拒みて容ざりし、と聞つゝ倶にうち驚きて、頻に嘆息したりしかば、音音も今さら後悔の、額を撫て嗟嘆しつ。現彼人の心操、義に仗り恥をしらずもあらば、故主の爲に心を盡せし、此度の功を子共に譲りて、船を沈めて戸田河の、底の水屑になり給はんや。然ともしらねば、亡魂の、門に立日に見えしを、情由だに聞かで思ひの隨に、罵辱しめたりければ、むごき心と葛の葉の、うら見によりてなほ迷ふ、旅宿ながらの草の原、歸るによしもなきまでに、冥土の障となりやせん。痛ましさよと密音に、くりかへしつゝうち歎けば、曳手單節は胸潰れて、後見らるゝわが影だにも、項背寒くなるまでに、或は驚き或は歎く、心の悼みいとゞなほ、やる方なきをやうやくに、思ひかへして單節がいふやう、世に寃魂といふものの、ありとは聞けど目前に、見し

ものを、況此度の功をもて、勸解まうさん、と願ふは孝行、協ぬまでも折を獲ば、又せんすべもあらんかし。彼世四郎の猎平どの、今舊恩に答んとて、子共を資て云々の、事ありけりとは思ひもかけず。況入水の事などは、夢にだもしるよしなければ、あの人のむじんなる、年來歸參の勸解もせず、故主の滅亡を外々しく、仇人の民になり給ひしは、人にあらずと思ふになん、いと朽をしく腹立しさに、單節と甲夜に彼人の、噂をしつゝ既往を、晤り慰めたる折に、影さすといふ喩に漏れず、猎平どのが門に立て、宿りを投め給ひしを、罵拒みて去したり。今さら思へば亡魂の、幻に見え給ひしならん。と報るに驚く力二郎は、尺八と目を指して、思ひし事よ。わが父は、はや甲夜の間に來給ひけり といひつゝ倶に呆れつゝ、嘆息の外なかりけり。

はらば、一家の洪福この上なし。人の子として父なくは、これ禽獸に異ならず。うち歎くにもあまりあり。某等が年來の、心の憂ひはこの事のみ。賢察仰ぎ奉る。と膝を進めて右ひだりより、母の氣色を候ふ程に、秋の夜ながら尙長からで、幽に響く遠山寺の、五更の鐘ぞ聞えける。音音は媳婦と子共の情願、忠貞節義に感嘆しつゝ、淚頻りにはふり落るを、袖に隱して、貌を改め、留んといふは妻子の恩愛、適んといふは良人の勇敢、母は適けとも留れとも、今さら是非の判斷しがたし。又同胞が愁訴の趣、理りならずと思はねども、わが口親執繼て、いかでか和子に稟さるべき。いと恥しき事ながら、ありし昔の不義淫奔は、世四郞どのの罪重く、吾儕が科の輕きにあらねど、人に勝れし乳房に愛て、和子の乳母になし給はりしは、片手打なる、主君の裁判、道理に違はせ給へり、と思はゞそれこそ道理に違はめ。そを又奈何と推て見よ。奴婢密通の子共をば、畜產に比するといふ、本文に據らせ給ふて情郞には只何となく、身の暇を賜りつ、吾儕を留め給ひしなり。譬ば宿の畜猫が、他し牡猫と尾ぎつゝ、產たる子猫は母に隷て、その父はなきが如し。奴婢密通して產たる子共は、畜產に比せらるゝ、律とやらんの本文に、據らせ給ひし道策さまの、ふかき御こゝろを汲も得しらで、今さら和子に云々、と稟すは面なきわざならずや。しかはあれども凡世に、人の子としてその親を、思はぬはなき

更て異夫に、再び縁しを結べとは、聞たうもなき棄詞。そは情に似て情なし。小兒に淺瀬を問ふといふ、世の常言もあるものを、いと淺はかなる女子の言も、些しは聽て、智恵深き、男子の心ごころもて、是非の深念をし給はゞ、後悔絶てなかるべし。願ふは親の光もて、諫めてたべよ、阿姑さま。と呼びつ口説つ、一對の、情義に逼る兩貞女、歎きも對の紅涙悲泣は、いひ合さねど言の葉の、揃ふ誠ぞ哀れなる。恩愛節操無量の情致に、泣立られし力二郎、尺八も手を叉きて、聞つゝ歎息したるのみ。兩個の妻の泣沈しを、再び些も見かへらず、兒は弟に目を注して、母に對ひて稟すやう、曳手單節が切なる諫言、それにもまして母大人の、一ト言をもて貫き給ふ、おん慈愛は身に入て、名殘はいとゞ惜しけれども、とてもかくても某等は、永くこの地に留りがたし。就て又情願あり。そはわが父の事になん。神宮河原に漁獵して、細き煙を立つゝも、又異妻を娶り給はず。况故主の大恩を、報ん爲に身を捨て、彼犬塚等の四犬士を、輙くこの地へ引著給ひし、その績莫大ならずや。さばれその身の榮利を思はで、戸田河に投み給ひき。義烈任俠兩ながら、想像るだに腸を、斷るゝまでにいと哀しく、いと痛ましき事ならずや。かゝれば此度の功をもて、主君の勘當宥免あらば、世間廣く某等は、父と唱へ、子と呼れ、母御も正しき夫婦たるべし。これらのよしを郎公に、聞えあげ執成て、素懐を遂さし給

も、欺きがたき誠の言の葉。音音は傍にうち聞て、媳達適いはれたり。只管功を貪りて、早るは眞の忠義にあらず。曩にも如此ぞいひけらし、よしやその瘢は淺くとも、破傷風になることあらば、耆婆扁鵲にも及びがたけん。俗にいふ命が物種ぞや。と諭せば力二、尺八は、妻のかたを見かへりて、大地に等しきわが母の、おん慈愛の厚きはさら也、いづれも劣らぬお身達が、今にはじめぬ貞操節義を、等閑には思はねども、凡戰國に生れし武夫が、些の金瘢にかゝづらひて、空しく月日を送らんや。されば俺們兄弟は、この曉にうち立て、潜やかに鎌倉へ、赴んと思ふかし。かくて敵の虛實を窺ひ、便宜を獲ば郎公へ、報進らせん爲なれば、倘幸なくて、その事發覺れし、讐の手に死するものならば、是今生の訣れ也。又唯憑むは母御の事のみ。わが兄弟になりも代りて、奉養を盡してたべ。さてしもわが母百年の、後にはおん身同胞は、良家に再び緣しを結びて、めでたく一期を送り給へ。いひ置く事はこれのみぞ。と辭齊一とき示せば、曳手單節は聞あへず、侶音によゝとうち泣て、悍きも事によるぞかし。親をも身をも、妻をしも、思はぬが忠義なればとて、けふは白井のこなたにて、云々の事ありしにより、鎌倉までは遠くとも、仇人はいよゝ用心して、木を伐り草を芟拂ひ、穿鑿嚴密ならましを、知りつつ彼處へ近づきて、可惜命を阿容々々と、隕すが手柄歟、功名歟。思ひもかけず後の事、操を

ば和子も彼人も、この曉がたには還り給はん。歡び給へ。と聞けば、兄も弟も雀躍して、原來中途の騷動は、わが歡びで候ひし。けふ定正は逭れたりとも、討捕給ひし兩個の讐は、越杉籠門の徒ならん。犬塚いまだ來ずもあれ、はやその友に遭給へば、主君のうへは後やすかり。吁愛たしく〳〵。と齊一額に手を加て、怡悅の眉を開けども、金瘡に弱りし顏色の、いたく衰へ蒼ざめて、この世の人とは見えざりけり。事の趣始より、側聞しつゝ、兩個の娘婦も、膝の進むを覺ぬまでに、いと勇ましき良人の義烈に、或は感じ、或は阽む。曳手は思はず太息を吻きて、男子の悍き心をもて、忠義の爲に親をも妻をも、見かへりがたきは然る事ながら、可惜命の短くは、始終の功をいかにせん。向よりつらく〳〵見侍るに、わが所天も叔々も、おん顏の色生平ならず。物宣ふに呼吸の、苦しげに聞え給ふは、金瘡に惱みたまふならん。二親のうへ、妻の歎きを、思ひ給はゞ今宵より、おん身を愛し給へかし。とよに他事もなく諫れば、單節も倶に、正首に、二がた何と聞給ひし。姊の意見、理りならずや。旅にしあらば療養に、物缺く事もあるべきに、幸ひにしてこの隱宅へ、來ませしはなほ竭ぬ、命運にこそをはすめれ。看病は妻の役なるに、村に醫師のあらずとも、里を隔し縣まで、いゆき通ふて、藥劑を乞ん。なほいつまでも逗留して、氣長く保養し給へかし。といひつゝもはや目に餘る、淚の露は玉とし

事の序にわが母の、安否を訊ふて、吾妹子等をも、慰めばやと思ひつゝ、血を吸ひ痍に布を巻き、同胞迭に相扶て、遙けき路を辿るゝも、良三四日の旅宿しつ。今宵思はず吾妹子等に、環りあひしを、しらずして、親の隱宅に伴はれたる、綷の顚末かくの如し。われらが推量違はずして、郎公は既にはや、こゝにわたらせ給ふよしを、うけ給はりて安心せり。彼犬塚等はいかにぞや。大人の書狀を齎して、索てこゝへまだ來ずや。山路に迷ふて、立よらざりし歟。心もとなく候。と兄が演れば、弟が續て、綷遺もなく既往を、報れば母も兩個の娘も、毛骨立まで危さを、今見るごとく駭然たり。そが中に母音音は、思ひかへして、莞爾とうち笑み、現目覺しき唔譚、それでこそわが子共なれ。母が日來の疑ひも、忽地釋ておちゐたり。既に推量せられしごとく、和子は六月下澣、仇人定正が迹を跟て、わが家に來ましつゝ、けふしも白井の列幹原にて、兩個の讐を撃捕給ひき。只恨む、定正は、鎌倉を出ずして、此度の刃を遁れたり。お身達がけふ來つる途にて、里每に騷立しは、件の事を聞怕して、驚惑ふて、旅ゆく人の、足さへ駐めしものなるべし。又犬塚とかいふ人の、索て來つることなければ、書狀は今に屆ねども、そが一個の友達なる、犬川莊助といふ猛者が、ゆくりなくこゝへ來にければ、云々の事ありて、和子と忽地斷金の交を結びつゝ、彼犬塚等を索んとて、共侶に出てゆきたり。かゝれ




忠魂義膽
既往を話
音音
力二郎
ひくて

の、識量をもて、その圖を拔かず、彼豪傑等が下總より、かへさに船をよせし折、大人は早くも譚ひ寄て、その事とはなくわが母へ、書狀を屆け給はれとて、一通を委ね給ひつ。縡のこゝろは彼人々を、この處へ立寄して、なほ郎公と交りを、結せん爲なりしに、その事いまだ果さずして、彼人々に大厄あり。まづその危窮を拯はずは、志を示すに足らず、と大人の先見その由あれば、某等も亦その議によりて、父子三人豫てより、戸田河の東の岸に、船を浮め陸に伏し、彼犬塚等が敵に追れて、來つるを俟しに、果して違はず。思ひ設し事なれば、大人は件の人々を、船に乘しつゝ前面の岸へ、漕渡し給ふ程に、某等は敵を拄えて、陣番丁田といふものを、はや水中に擊捕たり。有斯けれども敵はなほ、多勢を憑みて退かず、追ひつ返しつ戰ふ程に、大塚の城よりして、加勢の兵五六十人、簇々と推寄來て、連放たる鳥銃に、兒は高腟を打破られ、弟は左の肘を擊れて、進退遂に合期せず。これより先に彼此へ、負ふたる淺疵の灸所へ係れば、是まで也、と面も振らず、水際の敵を殺崩して、その宵闇に紛れつゝ、同胞齊一水中へ、跳り入り底を潛りて、前面の岸へ泅ぎ著にき。斯丹精を盡したる、犬塚等が往方をしも、見屆けざらんは本意なき事也。且郎公は、鎌倉へ、竊に赴き給ふよし、豫てその報ありければ、今頃は彼處より、倘上野へ赴きて、荒茅山邊の隱宅に、をはします事ありもやせん。

否を得問はず。對面せし事なけれども、かゝる時にぞ見參して、竊に資を借らばやとて、潜びて彼處へ赴きて、はじめて父子の名告をしつゝ、父の胸中を探りしに、世を避け給へど今もなほ、舊恩を忘れ給はず、館の滅亡、故主の戰歿、うち歎かれし忠信の、言の葉切て適れ現、身の過を一點も、飾らで悍く潔き、心の底は顯れたり。かくてこそわが同胞の、親なりけれ、と憑しく、辱なさに感淚を、拭へども竭ぬ自然の恩愛、初對面より二鞋の、隔なき身を父に任して、神宮の宿所に潜びてをり。母をば諸はで離別の父に、身を寓たるは僻事ぞとて、怒らせ給ふこともや、と思はざるにあらねども、彼も此も私ならぬ、忠義の爲には親疎なし。主をおもへば孝ならぬ、猜忌を厭ふに遑なければ、馴染薄かる吾妹子等に、母を任しつ、この山里に、落留り給ふよしを、いかにしてかわが父の、仄に傳聞たりとて、曩に密語給ひしかども、機密の漏るゝこともや、と遠慮ふて信せず。知りつゝ物を思はしたる、不孝の罪はいと重かり。さる程にわが父と、密々に相譚て、或は他鄕の浮浪人、或は近國の俠客なンど、彼此となく交りて、竊に意中に擇めども、これぞと思ふものもなし。しかるに大塚の鄕の浪人、犬塚といふ壯士は、わが父と面識たる、是蓋世の豪傑也。唯彼犬塚のみならず、その友人に犬飼、犬田、犬川なンど呼るゝもの、智勇いづれも劣らず優さず。この人々を躬方に招かば、大事は成らん、とわが父

て、終に陣歿し給ひけり。しかれども、郎公（道節をいふ）は、淺痍だに負ひ給はず、勝に乘たる大敵を、殺散し駈脫て、雜司谷まで落給ひつゝ、馬の左右に從ふたる、某等を見かへりて、やをれ力二郎、尺八郎もうけ給はれ。既に君父を敵に撃して、われ亦命を惜むにあらねど、組んと思ふ敵に得あはず。名もなき伀武者を、十騎廿騎、討捕て死するとも、臣子の本意とすべからず。死は易くして、生は難し。けふの命を且く延て、仇人定正を狙撃は、忠孝倶に全かるべし。今よりして汝等も、わが志を心として、竊に躬方を招き集めよ。しかれども、烏合の徒黨多ければ、その事還て漏易かり。五指のかはるぐ＼に彈んより、一拳にますことなし。或は一旦の利に傾き、或は軽才にして虛名を貪る、烏滸の躬方は、ありても要なし。願ふは豪傑兩三輩の、資を獲ば事足りてん。汝等兄弟こゝろを合して、なほも武藏を去ることなく、深く隱れ遠く謀りて、世の豪傑と見るならば、淳く交り竊に探りて、說て躬方に勸め容れよ。その餘の事は云々と、叮嚀に示されて、身の暇を賜りたる、主命道理に稱せ給へば、一議に及ばず承伏しつゝも、惜む別れの愛哀苦、駒を早めて落給ふ、背影の見ゆるまで、目送る程に日は暮れたり。武藏は生れし國なれども、落人となりしより、迂濶に宿を投め難かり。神宮河原に世を避給ふ、離別の父の今の名さへ、年來傳聞たれども、有繋に主君に憚りて、去歲まではその安

で長途を急ぎつゝ、風を稟たる故なるべし。その痍俄頃に痛みしかども、はからず母御に對面したる、歡びはわが藥となりけん、痛楚は去て快し。と辭ひとしく答るを、音音は聞て、うち頷き、そは去歳の戰ひに、受たる舊瘡の發りし歟、然らずは近屬戸田河にて、敵を禦ぎ禁めしとき、痍を負ふたる歟、心もとなし。譬ば些のかすり痍でも、破傷風になるときは、いとむづかしきものぞとよ。といはれて兄弟愕然と、うち驚たる目を指して、嘆息しつゝ、嘷母御、この月二日の黄昏に、戸田河原にてありし事を、はや何人に聞給ひたる。訝しさよ。と疑問ば、音音は外面見かへりて、こゝろを付たる聲細やかに、さればとよ、けふまでも、お身達は生りとも、死せりともしらざりしを、甲夜に竊にある人が、和子に云々と告たるを、洩聞しより粗しれり。されば絆のいといたう、𢢽しき折なりければ、首尾はよくも得聞かず。扨もおん身同胞は、去歳の夏より、何の里の、誰家に身を寓たる。和子は頃日わが宿に、をはしませしを知りてぞあらん。親の安否を訊んとのみ、思ふて索て來つるにあらじ。詳に告よ、いかにぞや。と問かへされて力二郎は、尺八共侶膝を進めて、さン候、絆の機密を知し召れて候へば、何をか愿み候べき。去歳の四月の戰ひに、館（倍盛をいふ）をはじめ奉り、大家公（道策をいふ）も敵あまた、殺靡け斷散して、頻りに重圍を突給へども、躬方に續く兵なければ、弓折れ勢ひ究り

狩場の野鷄に似たれども、いかでか妻を忘るべき。只その契りの短き故に、面遺れしは、そなたのみかは。われらも面目なき物から、むかし魯國なる、秋胡とかいひしもの、妻を娶りていく程なく、他郷に赴き遊學して、年を歷てかへるさに、桑探る女子に懸想しつ、そは妻なりしを知らずして、車を駐め黃金を投て、調戯しは色好みなる、浮たるこゝろの惑ひのみ。今宵の事は秋胡夫婦に、似るべくもあらざるに、何でふ恥ることやはある。驩ぶべし〳〵、と稱て嘆賞したりしかば、尺八も亦感嘆して、夫婦面を忘るゝ迄に、短き契を仇にせず、艱苦の中に良人に代りて、老たる親を、けふまでも、いと安らけく養ひし、是をもておん身同胞の、心操を知るに足れり。天緣は疏しといへども、絕ることなしとかや。圖らざりける再會は、夫婦の誠心全しからで、神の導き給ひしならん。寔に愛たし〳〵。と慰められて姉妹は、面を赧す心地しつ。曳手は地炕に柴折燒て、茶を煖めて羞れば、單節は、緣頰に措たりける、行簞笥を引提來て、窗のほとりに移したる、管待大かたならざりけり。彼を見、これを見かへりたる、音音はいよゝ莞やかに、兩個の子共にうち對ひて、曩には途でお身達が、忽に病著の發りし、と聞たる儘に絆に紛れて、まだ容體を問ざりき。今の心地はいかにぞや、藥を用ひ給へかし。といへば兄弟共侶に、否々、さしたる事には候はず。某等は身の中に、聊金瘡の候ひしを、厭は

によしもなかりしかば、兄も弟も姉も妹も、夫婦不思議にけふ途で、環會たる甲斐もなく、迭に面を遺れても、義士と貞女の誠心を、皇天憐み給ひけん、はからず途の艱難病苦を、此彼救ひ濟れて、宿所に伴ひ還りしは、寔に竭せぬ情縁也。去歳の夏よりこの山里に、住不樂たりし憂苦辛勞、いはでもさこそと察し給へ。然るを兩個の娌同胞が、塵さへすえず勦りて、朝な夕なに慰めたる、よに孝順の誠もて、細き煙を立たりき。曳手單節が微りせば、憂に得勝ぬわが身ひとつを、いかでかけふまで存命べき。儔稀なる貞女ぞ、と譽て慰め給へかし。やよや、曳手よ、今さらに、何をか歎くことあらん。單節も涙を疾斂めて、良人のほとりへよらずや。とひとり欵待す親ごころ、歡び、言葉に顯るゝ、松の操ぞ憑しき。枯たる枝にも花娌の、さく夜の丁子頭さへ、今宵の祥歎、と思ひたる、曳手單節は行燈の、背のかたよりやうやくに、良人のほとりに近づきて、夫婦は二世の縁とかいへど、その宵限りに別れしより、なつかしとのみ思ひてし、心は霎時も變らねど、かはり果たる面影を、認遺れられつ、認遺れて、結びもあへず草枕、旅ゆく他し人とのみ、おほつかなさに外々しく、ものいひしことの恥しく、悔しく侍り。と共侶に、勸解て齊一目を拭ふ、哀歡交思ふ事、いはで言語の寡きも、誠は一句に籠りけり。良人はこれを見かへりて、力二郎まづいふやう、榮枯得失定めなく、軍敗れて家を喪ひ、

軃て母屋なる、窓の下に並びてをり。當下音音は、行燈の、火光に就て行客等と、はじめて面を對したる、老眼なれども定かなる、慌しげに膝を進めて、そは力二郎歟、尺八ならずや。思ひがけず。とばかりに、呼かけられて兩人も、驚きながらうち向上て、齊一膝をうち鼓しつゝ、こは淺ましや、宿のあるじは、わが母刀自でをはしましたり。外面に在りしとき、物賓ひしを聞しかど、大く苦勞をし給ふ故にや、おん聲の嗄給ひしに、孤燈の光細くして、彼處まで屆かねば、親なるべきを知るよしもなく、外々しく候ひし、不敬を許させ給へかし。一トとせあまりうち絶て、見參に入らぬ間に、頭は眞白になり給ひし、艱苦さこそと今さらに、推量り奉れば、いと痛ましくこそ候へ。さばれ時あり命ありて、恙なき面影を、見奉る歡びは、比んに物候はず。と辭ひとしく慰めて、齊一目皮をしばたゝけば、音音は、然なりと應つゝ、歡しさに胷充て、涙ぞやるせなかりける。側聞する曳手と單節は、わが所夫をもしらざりしを、羞て行鬟に名告もあへず、胷のみ頻りに騒がれて、おもはず顏をうち掩ふ、袖より餘る歡びの、涙に衿を潤したり。且して母音音は、鼻うちかみて、やよ力二郎、尺八もはや忘れし歟。彼は曳手と單節也。婚姻の次の日に、豊嶋煉馬のおん滅亡、物具ならぬ俺們まで、憂には漏れぬ習ひとて、親は子共の安否をしらず、妻は夫に引別れて、信絶し一年半。されば迭に隱宅だに、告る

ことあらん。且宿貸て後にこそ、せんすべあらめ、と思ひかへして、やうやくに頷きつ、しか聞ば推辭がたかり。行客をな留めそ、と莊役の徇傳へし、白井のおん下知はかしこけれども、恩ある人は格別ならん。天の明るまで憩し給へ。客人達はとまれかくまれ、同胞は物欲しからずや。馬にも草を飼ふたる歟。と問ふを曳手は聞あへず、割籠を遲く披きしに、途すがらの艱難苦勞で、まだ痞すら治り侍らず。いかでか物のほしかるべき。馬は野中に繋ぎし時、まにまに草を食せ侍りき。妹そなたはいかにぞや。と問れて單節は頭をうち掉り、おん身だに飢給はぬに、わらはは夕餐たうべて出たり。幾遍箸を把侍らんや。と回答て盥を傾けつゝ、洗足の水を推流せば、音音は母屋にとり散したる、苧桶草籠片よして、然らば兩個の行客達よ、こなたへ入りて休ひ給へ。といふを執繼ぐ同胞は、行客等にうち對ひて、聊障ることのありとて、姑の承引ざりしかば、心くるしく侍りしに、既にその事釋たれば、留めまゐらせよといはれ侍り。見らるゝ隨の白屋なれども、其處に在するにはますことあらん。母屋に入りて曉るまで、なほ又保養し給へ。といひ慰めて誘引へば、件の兩人見かへりて、そは歡しき事になん。情誼は人の爲ならで、途の難義を假初に、拯れしとて正首に、欵待給ふ心操、よに有がたく、いと愛たし。しからば造作に預らん、許し給へ。と共侶に、やうやくに身を起しつゝ、引れて

何人なるらん、と見れば妹がはるぐ〵と、わらはを迎に來つる也。迭に呼つ、呼かけられて、其處に集合ば忽地に、力つくまで慰めて、事の趣云々と、告て共侶に勦り侍るに、彼二がたの舊病は、聊差り給へども、さりとて長途を走りがたかり。願ふは馬にうち乘して、そなたの宿所に俱し給はゞ、今宵をやすく明すべし。只願この議を賴むのみ、といはれてそれすら推辭によしなし。霎時妹と商量しつゝ、合鞍にして二がたを、乘して還りし事の趣、告るに暇なかりしかば、こゝろ得がたく思はれけん。といへば單節も共侶に、よしや猛に白井より、おん下知のありとても、途の難義を拯れし、彼人々をいかにして、うち措てやは還らるべき。獨行といふでもなし、曉るに程もなき夜なるに、何かは苦しかるべき。と情由えしらねば執成て、有繫に出し遣りかねし、受たる恩の重荷すら、負ふて皈りしこゝろの誠を、理りならずと思はね共、音音はいとゞ胸苦しさの、頭を傾け、嗟嘆して、ひとり竊に尋思をするに、彼行客等が二人まで、齊一病痾の發りしとて、曳手が馬を合鞍に、借りて宿を投めしは、所以ありぬべき事になん。倘わがうへも、又和子の、潛びてこゝにをはするよしをも、竊に告訴せしものありて、事の虛實を探らん爲に、城より兩個の間者を、行客にして云々と、謀らするにはあらざる歟。然るを今愁に、强顏いふて出し遣らば、彼等はいよ〵疑ふて、戶に立、庭に伏す

を貸たる歟。行客ならば白井より、嚴なるおん下知あり。左右なく留めがたかるに。といふは今にも道節が、四犬士を將てかへり來ば、綷の妨なるべし、と思ふこゝろを得ぞしらぬ、曳手は問れて後方を見かへり、眞夜中過て行客達に、馬さへ貸て伴ひ侍れば、さこそ訝しく思ひ給はめ。けふ曛昏に白井の殿(定正をいふ)の、歸城の途にて不慮の騷動、情由は定かに得しらねども、猛に軍兵うちよするとて、何の里も人靡打て、かへさに路を去あへず、馬は駭き、人には壓れて、せんすべもなき折から、彼兩個の行客達、わらはが後より來給ひつ、綷の難義を見かねてや、噫痛ましの女馬士、吾儕が後に跟て來よ。いで〳〵といひながら、先に立つゝ稠人を、推分搔遣り、辛して、路をひらき給ふになん、稍その里を邁脫て、又その先も、路去あへず。しかれども彼二がたの、よに憑しく精悍しく、扶掖き給はりし、庇によりて恙なく、田文の茂林のあなたなる、曠野まで來つるとき、思ひがけなく行客達は、等く舊病發りしとて、草折敷て共侶に、枕を並べ給ひしかば、うち驚くのみ、術もなし。この人々の微りせば、わらはも馬も恙なく、こゝまで來ること難かりしに、資けられたる庇を仇に、一人ならず二人まで、病臥給ふを、そが儘に、捐て去んはさすがにて、馬を樹の下に繫ぎつゝ、うち守るのみ、藥はなし。人煙遠き野に立て、思はずも夜を深す程に、家路のかたより蕉火見えて、稍近づくを、





妹侅と、しら井に近き小松原、引れて外にねの日せし、仇なる夢の手まくら、覺れば舊の
水莖に、殘の雪と書せん。引

と、謌ひ連つゝ八重葎、宿の檐下に近づきけり。さる程に、曳手はいたく病疲れし、行客二人を合鞍に、乘したる馬を牽よすれば、單節はそが行笋篭の、兩箇を一荷に背負たる、右手に蕉火をふり輝し、先に進みて遽しく、鳴子瓦落めく諸折戸を、左手に開きて、聲高やかに、阿姑御よ、目今妖さまを、伴ふて還り侍り。曳手等ではべるかし。いまだ睡らでをはする歟。と呼かけながら姉妹が、笋篭を縁頬に解卸して、馬を檐下に牽居れば、音音は慌忙きて、開る障子の外面へ、行燈推向け、出迎へたる、歡び氣色に顯れて、などてやかくは遲かりし。恙なき貌見るまでは、寢るともいかでか睡らるべき。飢も疲勞もしたらめど、怪我せんにはなほますべきのみ。まづはや足を濯き給へ。といひかけて又遽しく、庖湢にいゆきて、准備の溫湯を、手桶に汲とり、引提て、縁頬へもて來つゝ、盥に移しなどする程に、曳手單節は、彼兩個なる、行客を馬より下して、まづその足を濯せて、馬に下洗して、厩に牽入れ、草鞋紐解く同胞も、迭代に足の汚れを、洗ひ流すを侍かねたる、音音は件の行客等が、外面向て縁頬に、尻うち掛し背姿を、と見かう見つゝ訝しさに、曳手が背を爪敲して、彼は何處の人たちやらん。戻馬

第四十八回

駄馬暗に兩夫妻を導く　兄弟悲て二老親を全す

音音は障子引闔て、思はず吻とつく息の、いとゞ苦しき胸をのみ、撫下しても安からぬ、追捕の沙汰は豫てより、覺期をしても下知狀の、こゝへもはやく屆きしを、知らで漫にたち出給ひし、和子こそ心もとなけれ。とく追掛て告んにも、西鄙東鄙おぼつかな。何處をさして年なみの、いそぢ過ゆく老が身に、代る子共の共侶に、家にしあらばかゝる時、又せんすべもあるべきに、うたてや媳婦さへふたりまで、かへらぬ事をくよ〳〵と、思ふがうへになほ思ふ、形なき世のたゞずまひ、絕ぬ苦勞を身ひとつに、憂とも丑の時の鐘、はや鎬々と報わたる、寂滅爲樂の響きには、誰が夢をしも破るらん。更ゆく隨に膚寒き、風がさそふて檐近く、幽けき馬の鈴の音、足搔に拍子をとらしたる、それかあらぬか、とばかりに、音音は耳を傾けて、聞ば女子の合唄に、馬追ひ勇む小室曲、嫋めく唱謌優しげに、

荒芽山、月こそあらめ曇る夜の、翌まで俟じ袖の雨。ふる郷遠くひとりぬる、かなしき秋の寤寐ぞと、風の便にしらせん。引

奉り、今日追捕せしむといへども、窮鼠還て猫を咬み、逃亡て往方を知らず。この賊、享年二十二三、骨體高く、色白く、月額の迹延たり。倘かくの如きものあらば、速に報稟せよ。搦捕て進らせなば、賞祿は宜功に依るべし。猶同惡のもの四五人あり。姓名いまだ詳ならず。知るものあらば告訴せよ。舍藏措ば同罪たらん。巨田助友等奉る。

と聲高やかに讀果て、又懷へ卷納め、姥御よ、こゝろ得られし歟。和主は他鄕の人なりしを、仁田の背人が紹介もて、去歲の夏よりわが村なる、こゝの空房を賺求めて、寡居の親子三口、息子は他國したりといふ。女子ばかりでさる癖者を、搦捕ること得ならずとも、そこらによろづこゝろして、得しらぬ人をな留め給ひそ。彼隱宅を知ることあらば、竊に吾儕に報給へ。賞祿は勿論、等分ぞや。苦しきものは莊役也。瘦村のかなしさは、鄰といふても三四町、家數少く道遠かり。非常の事のあらん歟とて、保伍兩名を駈催して、暗き夜すがら彼此を、敲起して、こゝが打納。倦勞れぬでもなかりけり。といひつゝ腰をうち敲けば、音音は聞て、うち微笑み、そはさぞ疲勞給ひつらん。丁六ぬしも、顚介ぬしも、尻をかけて休らひ給へ。焚つけて茶を進らせん。といふを根五平聞あへず、いな茶も水も欲しからず。然らば退らんとく〳〵。と兩個の樵夫をいそがして、そが儘走り去りにけり。

夜こそよけれと莊助に、うちつれ立て出てゆくを、音音は霎時目送りて、折戸引閾、裡面に入る、心ひとつに疑ひを、解くよしもなき物思ひ、曳手單節が皈らぬは、彼松原の戰ひに、適あはし走り後れて、流箭に瘢を負ふたる歟。さらずは馬を喪ひし歟。雜兵に亂妨せられて、還るに路のなかりし歟。かくまで遲きは何の方まれ、平事にはあらずかし。心にかゝるは是のみならで、兩個の子共は戸田河にて、彼大敵を殺拂ひし歟。思ふに就て悔しきは、世になき人と知らずして、强顏く邁せし猎平ぬし、健氣なりける最期にこそ。家廟に御燈進らせん。南無阿彌陀佛。と念じつゝ、身を起さんとする折から、外面に咳きして、挑燈片手に、推ひらく、折戸狹しと庭門より、姥御々々、と呼かけて、來る人を誰ぞ、と出て見れば、先に立しは莊役根五平、樵夫丁六顳介を將て、緣頰まで進み近づき、姥御よ、はやう出られたり。狹夜深たるに、まだ睡らずや。草木も定る夜を犯して、走り廻るは別義にあらず。白井の城より火急のおん下知、等閑にな聞給ひそ。といひつゝ軈て懷より、下知狀をとり出せば、丁六顳介はこゝろ得て、挑燈をさしよせたり。當下根五平恭しく、件の狀をうち披きて、

先亡煉馬倍盛が殘黨なる、犬山道節忠與といふものあり。竊に螳蜋の斧を擧て逆謀を逞くし、蚊蚋、山を負ふの力をもて、怨を報んと稱す。よりて巨田薪六郎等、逆 密 詑を

を、遺なく聞とり侍りしかど、おん辭の衷を折らじとて、今まで彼處に侍りにき。けふしも君父の讐敵を、二人まで撃給ひしと歟。媼が歡びいへばさら也、世の俊人達と、宿因のをはしまして交を結せ給ふは、かさね〴〵し幸ひなり。且けふまでも愍み給ひし、子共のうへまで洩聞えて、聊慰め侍りたり。就て怪しと思ふ事、なきにしもはべらぬに、曳手單節もまだかへらねば、なほまうすべき事のあれども、今とて出てゆき給ふを、いつまでか留めまつらん。そは又かへり來ますを俟て、申上んと思ふのみ。よしや曩には大敵に、殺克て恙あらずとも、追捕の沙汰はいちはやく、この地へも下知せらるべし。夜深の天に月はなくとも、この曉にはかへらせ給へ。といへば道節頷きて、乳母は母に等しきに、力二尺八等が事までも、豫て機密を告ざりしは、言の洩易きをおそれて也。まづ三犬士の往方を索て、伴ひかへりて緩やかに、聞くことあらば聞もせん。といへば又莊助も、共侶に慰めて、一樹の蔭に憩るも、一河の流を渡れるも、縁なきものは倶ならず。況宿因淺からぬ、犬士は影と形の如し。途に不測の事ありとも、相資けて無異を計らん。刀自よ、こゝろ安かれ。といふを音音は見かへりて、憑しきかな犬川ぬし、かへす〴〵も和子のうへを、委ねまつる。と他事もなき、誠心は現主おもひ、松明をもたせ給はずや。といへば道節頭を掉て、否、燈火を携ては、敵の目標になりもやせん。烏

心地死ぬべく覺し時、その玉を口に含めば、快然たらずといふことなく、その玉をもて身を撫れば、杖瘡忽地愈たり。且はからずも某が主の讐を撃たるは、知らで和殿と易たる玉の、忠字號の誼に稱へり。和殿は亦思はずも、村雨の大刀を獲て、今犬塚に返さんとす。これわが玉の義字號に稱へり。忠は義を兼、義中に忠あり。かゝれば犬士たらんもの、異姓にして骨肉の如く、玉の字號は同じからで、その感應異なることなし。こも亦自然の妙契也。驩ぶべし〱。と稱て倶に感嘆す。道節ます〱歡びて、和殿と某が胸臆は、迭に盡し得たれども、犬塚、犬飼、犬田等は、外へ赴きし歟、心もとなし。この地は究たる邊鄙にして、人煙少に、山路多かり。且定正が采地なるに、長途に疲勞たらんとき、再び不測の禍あらば、尤危き事ならずや。あるじ音音はいまだ還らず、そが媳婦共も宿に在らねば、これも亦故ありげなる、緈の趣面り、問まほしく思へども、渠等を俟に暇なし。誘給へ、彼此を、隈なく索て三士に逢ん。とくとく。といそがし立て、わが兩刀を腰に跨へ、村雨の大刀を携て、遽しく身を起せば、莊助この議に從ふて、刀を把て共侶に、出てゆかんとする程に、音音は慌忙きて、やよ俟給へ。と呼留つゝ、小柴垣の蔭より出て、目に有涙をふり絞り、媼が猛に呼留めしを、和子も、犬川ぬしとやらんも、こゝろ得がたくおぼすらめ。いとはやくよりかへり來て、これ彼のおん唔譚

月十三日、わが亡君亡父の爲に、音音が建たる窣都婆あれば、仇人の首級を賻贈んとて、彼茂林に立よりしに、忽地和殿に驚されて、祭りも果ず、兩級の首を、又携てかへり來つ。はじめて縡の趣を、告んと思ひし音音は在らで、再び和殿に驚かされ、義勇稀なる五犬士の、來歴を聞くのみならず、某もその一人たるべき、宿因を了解せし、歡びこれにますものなし。これらのよしを豫てより、夢にだも知ることあらば、圓塚山にてこの村雨を、和殿に遞與べかりしに讐を謀るに究竟なる、物を獲たりとのみ思ふて、女弟濱路が云々と、いひし末期の所望を許さず、且くも犬塚生を、苦しめしこそ悔しけれ。しかはあれども犬川ぬし、某が彼夜さり、女弟の仇人を擊留ずは、大刀の往方も知りがたからんに、不思議にわが手に入りし事、こも宿因の致す所歟。離合得失寔に時あり。犬士の隊に今ぞ入る、わが犬塚へ牽出物は、この大刀ならで何かあらん。さは識らざりし時だにも、四犬士は某に、代りて大敵と突戰し、某は又四彦の爲に、途より返し合しつゝ、夥の敵を擊退けたる、進退謀し合せし如く、倶に危窮を脫れしは、自然に協ふ、同氣の感應、嗚呼奇なるかな、妙なりけり。と既往報る長譚に、莊助も亦感嘆して、某もしか思ふかし。又唯けふの値偶のみならず、曩に和殿と某と、ゆくりなく玉を相換て、その玉いよ〳〵われに利あり。某は大塚にて、彼奸黨に誣られて、緊しく禁獄せられし日

て白井のこなたなる、列幹原に俟つけて、この村雨の大刀をもて、思ひの隨に謀り近づき、仇人管領定正を、衝倒し組伏せて、矢庭に頸を掻落せしに、豈おもはんや敵も亦、豫てその准備あり。わが撃捕りしは定正ならで、越杉駄一郎遠安といふもの也。しかれども遠安は、池袋の戰ひに、倍盛朝臣に鎗を鐫たる、こも亡君の讐なれば、聊鬱憤を慰めて、是より敵を擇むことなく、當るに任して撃散せしに、敵の大將巨田助友、藪蔭より士卒を進めて、前後に挾て撃んとす。さりとて陣歿すべきにあらねば、且戰ひ且走る、はや黃昏の折もよく、前面より來る旅人の、間に入りて立紛れ、頻に走りて見かへるに、追來る敵はあらずして、遙に聞ゆる鬨の聲、なほ彼竹叢の邊にて、烈しき戰ひあるが如し。當下某おもふやう、敵は件の行客等を、わが助大刀ぞと謬認て、捕籠て撃ならん。緈の危窮を彼等に賣て、脫れ去らんは本意ならず、人を殺して身を利せんより、寧共侶に死なばや、と思ひにければ遽しく、舊の處へ走りかへりつ、竊に竹叢に潜り入りて、鯨波を揚、箭を射被け、謀りて敵を驚かしつゝ、暗に和殿等を拯ひ得たり。さる程に、敵は退き、日は暮れて、舊の列幹のほとりに赴き、曩にそこらへ投捨たる、遠安が首級をとり揚て、包みて腰に附る折から、はからずも父の仇、竈門三寶平を撃捕て、そが首級をも腰に著、敵の伏兵兩三人を、なほも漏さず撃果しつ、田文の地藏堂の邊には、今玆四

塚を祭りしを、盗賊ならんと思ひしかば、拄て終に撃走らして、其處よりこゝへ來つるよしは、彼猾平が犬塚に、誂たる書狀あり。そはこの山の麓なる、老女音音へ與れる也、と豫て聞しをよすがにて、犬塚等の三友は、其處に宿投ることもやとて、やうやくたづね來て問ば、彼三犬士はいまだ來ず、こゝにて俟ば必逢ん、と思へば軈てにじり入りしを、あるじの老女は物買に、ゆくとて留守を任せしより、剩風に燈火を、うち滅されたる折に、和殿がかへり來にければ、疑心忽地暗鬼を生じて、こも亦賊にあらずや、と思ひ惑ふて辭をかけず。燃揚る火のなかりせば、烏夜に鎬を削るまで、迭に傷くこともあらん。危かりし。と膽むかふ、心の限りとき盡せば、道節これをうち聞て、笑片向て、頭を撫、親きを信じ、疎きを疑ふ、世の人情といふものから、これ宿因のなす所、かばかりおかしき事はなし。某はいぬる比、圓塚山を立さりて、鎌倉に赴きつゝ、讐の動靜を窺ひしに、扇谷定正は、云々の事により、上野白井へ赴くよし、風聞大かたならざれば、竊に跡を跟て來つ、乳母音音が宿所に隱れて、なほ又便宜を窺へば、定正はきのふより、戸澤山に狩倉すとて、こゝにも夫役を宛られたり。こは究竟の折也、と思へども音音にすら、意中の機密を告ずして、彼狩倉に程遠からぬ、明巍山のほとりにいゆきて、歸城の時刻をはや知たり。和殿に遠目鏡もて見られしは、その折にこそあるべけれ。かく

宿り給ひし。餘の三犬士はいかにぞや。と問ば莊助頷きて、さればとよ、その事なれ。吾儕四人、戸田河原の、再厄を脫れて、倶に三四日走る程に、けふしも明巍の山中にて、某漫に茶店なる、遠目鏡をもて直下せしに、和殿に似たる一個の武士、簏をあなたへゆくありけり。倘その人にあらずや、と思へば軈て三犬士に、云々と報知して、皆遽しく下山しつ。其處ともしらで彼此を、たづねくてこの曛昏に、白井の城へ程遠からぬ、如此々々の里を過りしとき、里人夥奔走して、云々の處に癖者あり。歸城の折を窺ふて、扇谷殿を犯したり。否撃れしは、管領ならず、御内の某甲なりなど、頻に罵り騷ぎしかば、吾黨もうち驚きて、その事果して實ならば、和殿が怨を復せしならん。とくその所へ赴きて、絳の虛實をしらばやとて、共侶に走る程に、前面より血刀を、引提て走り來るものあり。黃昏なれば面影の、定かには見えわかぬ間に、俺們四人が立たる間〻、紛れ入り走脫て、往方もしらずなりにけり。これにより吾黨は、思ひがけなく城がたの、追手の士卒に側杖撃れて、已ことを得ず戰ふ程に、敵に新隊の加りて、いよく難義に及びしとき、竹叢の中より鬨を作り、頻に敵を射仆して、援るもののありければ、終に重圍を殺脫て、異途同志に走りつゝ、日は暮れ、月は雲に入りて、東西をだにわかたねば、某ひとり後れたり。かくて田文の地藏堂に、且く足を休めしとき、和殿が

なせし面なさよ。彼猾平はわが父に、舊く仕へしものにして、當時は姓名を、姥雪世四郎といひしとぞ。渠はわが生れし比、如此々々の事により、追退けられしものなれば、わが面影を認らねど、神宮河原にさるものの、あるよしをはやく聞たりき。又この家のあるじ音音は、昔世四郎と情由ありて、力二尺八を産たりしに、亦此如々々の議によりて、音音はそが儘留められて、わが乳母になりにたり。よりて子共は母に隷て、某に仕へし也。かゝれば世四郎の猾平は、力二尺八が父なれども、えしらぬ人にも竊に恥て、父子なりとはいはざりけん。况子に羞、舊婦に、恥はしさの世をはかなみて、戸田河に投みし歟。寔に不便の最期也。又彼力二尺八等が、追手の大勢を防留めて、四犬士を延せしは、謂あることになん。某豫て君父の仇を、狙撃んと欲せしに、復心の郎黨の、殘るは僅に渠等のみ。倶に忠義の志、いと逞しき壯佼なれども、彼張良を相扶けて、秦始皇の車を摧きし、蒼海公には及ぶべからず。いかで三四の輔弼を獲て、大義を舒んと思ひしかば、力二尺八等を武藏に遺しつ、汝等兄弟こゝろを合して、世の豪傑と見るならば、實情をもて厚く交り、その胸臆を深く探りて、絆の便宜を得たらんとき、躬方に引入れよ、と命ぜしことあり。これにより、彼兄弟は、離別の父に身を寓て、まだ面識に暇なき、四犬士の爲にしも、志を盡せしならん。さるにても和殿只ひとり、などてこゝには

の城兵に追詰られ、渡りかねつゝ死を極めしに、神宮の猎平とかいへる、漁夫の扶助により
て、船を獲て敵を避たり。只彼猎平のみならず、そが親族なる兩個の俠客、力二尺八とか呼る
るもの、蘆荻の中より顯れ出て、奮戟突戰花々しく、力二郎は水中にて、追手の大將、丁田町
進を擊とりつ。尺八は前面の岸より、渡さんとせし敵を拄て、頻りに挑戰ふたり。吾黨遙に
これを見て、再び前面へ返し渡して、相助けんとて船を招くに、猎平一切うけ引ず、豫てより
世をはかなみけん、船を淪めて、身も共侶に、入水して亡にけり。これにより某等は、ほゐな
く其處を立去りにき。折から黃昏なりければ、彼兩俠者が存亡を、定かに見果るよしもなし。
こゝろならずもくらき夜に、路を求めて走りたり。と告るを音音は竊聞て、且驚き、且怪み、
舊夫の猎平ぬし、甲夜に正しくわが門に、立給ひしは寃鬼ならん、とは知らずしてつれもな
く、拒みて霎時も容ざりし、神ならぬ身こそ悔しけれ。それのみならで子共の存亡、心もとな
し何とせん、悲しきかな。と聲立て、泣ねどいとゞはふり落る、淚に恥て今さらに、裡面に入
るにも入りかねし、こゝろ隔の柴垣に、携りてひとり伏沈む。裡面には道節餘念なく、綷の趣
つく〴〵と、うち聞て貌を改め、現未曾有の奇談なり。縱宿因なしといふとも、いづれも稀世
の豪傑なるに、某眼力明ならねば、村雨の太刀を返さず、しば〳〵和殿と讐敵の、思ひを

妹、濱路節婦が結髪の郎にして、孝字號ある玉をもてり。次に下總滸我の浪人、犬飼現八郎信道、こは信字號の玉をもてり。次に行德なる市人の子、犬田小文吾悌順、こは悌字號の玉をもてり。次に市川の里人、山林房八が孤なる、犬江親兵衞仁、こは仁字號の玉をもてり。おのおのその身に痣ありて、所こそ異なれども、その形は相同じ。これらをもて推ときは、出生の地も、父母も、おの／＼同じからずといふとも、過世の兄弟なるにより、各々自然に犬をもて、苗字にせし歟、奇といふべし。いともかしこき事ながら、彼姫うへを、吾黨の、過世の母とし祭るとも、其を誣たりとすべからず。同因の八士具足せば、みな共侶に安房へ參りて、里見殿に仕まつらめ。これその原に返るの義なり。かくまで因果淺からねども、なほ宿業の係る所歟、薄命ならぬものもなく、今におの／＼安堵せず。されば犬塚戌孝は、伯母夫婦に謀られて、村雨の大刀を喪ひ、そを知らずして滸我へ參りて、思ひがけなき罪を得たり。その折犬飼信道と、組撃しつゝ船に陷り、はからず行德に漂泊して、犬田父子に扶られ、且山林房八夫婦が、身を殺してやうやくに、再度の危窮を釋得たり。某は又彼夜さり、思はずも主の讐を、當座に一人ヽ撃留めしを、讐の奸黨に誣られて、既に死刑に臨みし折、犬塚、犬飼、犬田の三雄、法場を劫し、奸黨を撃果して、某を拯ひつゝ、共侶に走る程に、戸田河のほとりにて、追手

して、和殿にこれらの痣あるよしは、圓塚山にて令妹に、告給ひしを竊聞て、粗しることを得たれども、今面りこれを見て、宿因空しからざるを了解せり。原るにこの玉は、これ人作の物ならず。近世、安房の里見の息女、伏姫と聞えしは、儔稀なる烈女也。彼姫幼穉かりしとき、云々の事により、役行者の示現あり。こは感得の珠數にして、除數の玉ぞとよ。かくて長祿二年の秋、伏姫富山に自殺の折、その除數の八の玉は、一道の白氣と共に、八方へ散亂せしよし、近會同因の兩三友、下總の行德にて、里見の舊臣、金碗入道、大坊、密使蜑崎十一郎等に邂逅して、その來歷を定かに知れり。かゝればこれ自他の玉は、伏姫臨終の誓ひにより、その氣と共に散亂して、吾黨と共侶に、又人間に出現したる歟。件の玉には仁義禮智、忠信孝悌の文字をわかちて、ひとつゞ〱にありとなん。これをもて因縁の灼然なるを知るに足れり。又吾黨の身の中に、牡丹に似たる痣あるよしは、八房の犬の毛色に、類りしものなるべし。彼八房の犬の事は、箇樣々々。とその槩略を、とき示して又いふやう、因縁かくのごとくなれば、われに等しき痣ありて、その相似たる玉をしも、藏弆せしもの八名あるべし。和殿を加えて六名は、既に相あふことを得たり。遺る二名も遠からず、その員に充んこと、類を推して知べきのみ。抑和殿とわが外に、同因果の豪傑は、武藏國大塚の人氏、犬塚信乃戌孝、こは和殿の令

肩袒ぎつゝ背向になりて、背の痣を示すになん。道節は遽しく、行燈を引よして、つら〳〵とうち見れば、莊助も亦痣ありて、こは身柱のほとりより、右の胛の下に至りて、形牡丹の花に似たり。豫て鏡に照して見たる、わが痣にしも異ならねば、思はずも大息つきて、奇なり奇なり。と嘆息す。當下莊助袒を斂めて、衣領の縫合に藏めたる、忠字號の玉を取出て、これは是和殿の肩なる、瘡口より出たる物なり。又某が祕藏の玉は、護身嚢もろ共に、かの折和殿に獲られしかば、文字こそ異なれこの玉と、相似たるを知りてぞあらん。よく見給へとて遞與すになん、道節これを掌に、受つゝ軈て行燈の、灯戸に向てと見かう見つゝ、感嘆いよ〳〵淺からず、わが玉を、まづ腰著なる、印籠の中に納めて、項に掛たる莊助が、護身嚢を返していふやう、曩にわれ、この嚢を披きて、世に未曾有の玉を見つ。又臍帶を包し紙に、和殿の乳名誕生日、及その玉を感得の、縡の趣云々、と書つけてありしかば、こは必庸人ならじ、再會の日のあらん歟とて、そが儘膚に著たれども、かゝる奇特のあるべしとは、一切思ひかけざりしに、わが瘡口より出たる玉と、痣さへこれ彼相似たれば、宿因なしとすべからず、只その故をしらざるのみ。己が痣はこれなりとて、左の衣領を推放べて、肩を顯して示しにければ、莊助は欣然と、護身嚢を受納めて、道節が痣を見るに、豫ての推量一點違はねば、思はず怡悦の膝うち鼓

單節がかへる歟とて、且く途に立在めども、前面より來る續松の火光は絕て見えざりけり。素より物を買ん爲に、出たるにあらざれば、其處より聽てかへり來つ、諸折戸の邊より、裡面のやうを窺ふに、道節と莊助が問答仄に聞えしかば、驚ながら左右なく入らず、歩を竊つゝ近づきて、緣頰のこなたなる、柴垣に手をかけて、なほその言を聞てをり。裡面にはさりとも知らずして、道節が今移す、行燈の火を見かへりたる、莊助やをら膝を進めて、喃犬山ぬし、和殿果して身の中に、牡丹に似たる痣あらば、わが過世の兄弟なり。憑み給ふな、いかにぞや。と再問へば、道節は、頭を傾け眉うち顰て、怪しきかなわが痣までを、いかにして知られけん。われは生れながらにして、左の肩に瘤あり。六歲のとき故ありて一旦横死したりしを、不思議に蘇生せし頃より、瘤の上に痣いで來て、形牡丹の花に似たり。かくて夥の年を歷て、いぬる月の十九日、圓塚山のほとりにて、和主に瘤を砍られしとき、聊もその痛楚を覺えず、次の日、肩を揣て見しに、瘤は愈て、刀瘡の、迹だに絕てなかりけり。原來そのときわが瘡口より、出たる玉のあるにこそ。不思議といふも餘りあり。さりとてもこゝろ得がたきは、何等の故にわが痣をもて、過世ありといはるゝやらん、因緣甚麽。と疑問へば、莊助莞爾とうち笑て、千萬言を費すとも、證なければ空語なり。疑しくはまづこれを、見給へかし。といひかけて、諸


大川荘助


うち燃え山
犬山道節

本意なかりしに、今宵の再會。(句)田文の茂林にてわが祈念の、妨せしも汝にあらずや。(句)彼舊塚を祭りしは、原來道節、和主なりし歟。(句)その折間にわけ入て、推隔しは何ものぞ。(句)われは得しらず。(句)われも得しらず。(句)そも亦後にしるよしあらん。(句)そは何人にもあらばあれ、心憎きは汝が骨法、武藝勇力凡庸ならず、迭に祕密を説明して、合體同志の契を結ばば、萬卒を獲たるにも、まして憑しかるべけれども、汝とわれと宿縁なし。況過世をしるよしあらんや。然るを過世のありといふ、われは一切信がたし。妖言をもてこの期を延して、油斷を撃んと謀るならずや、何でふその術に乘るべきやは。と詰る辭も果ぬ間に、刈草ははやなごりなく、燃盡しつゝ又さらに、黑白もわかずなりしかば、莊助聲をふり立て、緣故をとき盡さねば、疑るゝはさる事なれども、迭に正しき證据あり。そは此彼の玉のみならず、和殿の身に痣ありて、形牡丹花の似くならば、是則和殿とわれと、當に異姓の兄弟たるべき、第一の證也。まづ燈燭を。といそがせば、道節は身の中なる、痣さへ知られて半信半疑の、惑ひの烏夜にも心當なる、地炕の緣に一ト裂の、焠兒ありしを既にはや、火の燃るとき見てければ、探取りつゝ遽しく、行燈に火を移しけり。されば又あるじ音音は、竊に思ふよしあれば、去來不定の旅客なる、莊助に留守を任して、田文の地藏の茂林のかたへ、兩三町赴きつゝ、曳手

りて、且く透を窺ひつゝ、道節苛急て、撃んと進む、大刀を拔せず拄禁たる、莊助はやく聲を被て、早り給ふな犬山生。と呼れて道節こゝろを得ず、われを識たる汝は誰そ。と問へば莊助莞爾と笑て、われこそ和殿と過世ある、犬川莊助義任なれ。告べき事の多なるに、且その刃を退かずや。といはれて道節訝しげに、と見かう見つゝ、うち頷きて、刃を鞘に納めても、いまだ些も由斷せず。名告を聞てわれも亦、聊おぼえなきにあらず。いぬる六月十九日、その日もかゝる最夜中比、圓塚山の邊にて。といへば莊助膝立なほして、節婦濱路を火葬の愁歎、わが竊聞しを知らざりけん、彼村雨の大刀をもて、君父の讐を謀らんとて、立去らんとする程に、刀の鐺握留て、名告被つゝその大刀を、(句)取らんとするを振拂ひ、丁と撃たる刃の光りに、(句)こなたも透さず拔合したる、(句)互の修煉、虚々實々、(句)一上一下と砍結ぶ、刀尖餘りて腕へ、(句)受しは淺痍歟、(句)砍込む肩尖。(句)思はず瘤を劈れたる、(句)その瘡口より飛散る小玉、不思議にわが手に入りしかど、護身嚢の紐延て、あやにからまる刀の靶に、(句)心もつかずそが儘に、紲引斷て後に知る、嚢の中にはさゝやかなる、一顆の玉に鮮々と、顯れたるは忠義の義の字、(句)その身の中より出たる玉にも、自然と見ゆる忠義の忠の字。(句)とはしらずして、讐ならぬ、仇には有繋、千金の、身をし惜めば火遁の術に、(句)迹を埋めて往方をしらず、

搦坐して、彼此探求るは、燧箱を取んとてなり。又荘助は、道節が、かへり來しときおもふやう、亂れたる世の人心は、正直のもの寡して、奸悪の徒多かり。あるじ老女が眞實しげに、吾を憩して、出て邁きしを、今やうやくに猜すれば、この白屋は盗賊の、宿にもやあるべからん。さらば甲夜にかの茂林にて、塚を祭りし癖者等が、栖家も必こゝなるべし。かゝれば曩に猾平が、云々といひけん事も、亦一向には信がたし。縦その言に僞なくとも、都も鄙も一ト郷に、同名のもの多かれば、こゝの音音は猾平が、由縁のものにあらずして、賊の妻子にこそあンなれ。もし果してしからんには、われを謀りて外に出しは、そが同類に報知して、輙く害せんとてならん。遮莫、烏合の山賊、なほ外面に集ふとも、いかばかりの事やはせん。さは遺りなく引よして、鏖にしてくれんず、と忽地臆に尋思をしつゝ、些も動かで舊の儘に、手を叉きて息もせず。この時までも道節は、間近く人の在るをしらねば、燧箱を索ぬるに、終に探り得ざりけん、地炕の縁を掻掛て、火筋を取て、灰に推立、彼此頻に掻起す、埋火は嚮に荘助が、うち被せたりし刈草に、おのづから移りにけん、再び颯と吹入るゝ、煞鋭き夜風にさそはれて、忽地燄と燃揚る、火光にはじめて面を對して、驚く道節、訝る荘助、齊く刀を掻取て、等しく鐺を突立ながら、左手を加て疾視たる、互の身構、劣らず優さず、地炕を中に足場を揣

と吹入れて、燈火弗とうち滅したり。莊助これに迷惑して、焠兒やある、と搔撈れども、今來し儘に案内を知らねば、欲する物は手に當らで、思はず茶碗を拳倒し、又紡車に跌くのみ。ほとほと困じて、果て又、地炕の緣を揣廻しつゝ、火筋を取て搔起す、螢ばかりの埋火に、刈草夥うち被せて、顏さし入れて只管に、燒著んとしたれども、未枯の草多かれば、吹けども吹けども、早には燃えず。こゝろ頻に焦燥隨に、火吹管はあらずやとて、なほ懲ずまに探れども、こもその所に當らねば、せんすべ盡て闇室に、手を叉きて、呆れてをり。さる程に、犬山道節忠與は、甲夜に田文の地藏の茂林にて、兩箇の癖者前後にあり、わが携たる仇人の首級を、奪ひとらんと挑みし時、思はず發する石火の光に、火遁の術もて退き避しは、敵を怕るゝ故ならず、大事の前なる小事ぞ、と思ひかへして戰ひを、好ざるによりてなり。そは野干玉の闇にして、綷慌しき折なれば、彼老人が肩より落せし、其兩箇の袱包の、これ彼よく相似たるをもて、取違へしを終に得しらず、そが儘に又携て、只今宿所へかへり來つ、こはいと闇し。音音は在らずや。などて燈火をうち滅したる。曳手、單節。と呼立れども、絕て囘答をするものなければ、呟きながら進み入る、案内知たる白屋の、闇きに迷はず徐々と、家廚の邊の破戶棚へ、兩個の包を投納れて、戶を引闔て、なほ幾遍歟、音音々々。と呼つゝも、地炕の前面に搔

く量知りがたし。試して見ばや、とさり氣なく、汲出す晩茶の一柄杓、馳走態して、さていふやう、見らるゝ如く片山里に、幽けき煙を立侍れば、翌の炊の儲もなし。家の内なるものどもは、今朝出て、まだ還り侍らず。物調へんと思へども、留守なきをいかにせん。いと無禮なる所行なれども、霎時留守して賜てんや。といはれて莊助うち微笑み、そはいと易きことなれども、去來不定の旅人に、宿守らするはあぶなからずや。失たる物のあらんとき、われも亦影護し。今とて急ぐことかは。と推辭ば音音もうち笑て、寔にいはるゝ事ながら、錢財を有るものならば、さる用心をすべけれども、寒家の後やすさは、何をか厭ふ物のはべらん。この山中には蚊も蚤も、なしとはいへどこゝらには、更ゆく隨に、蚊は多かり。彼處の刈草攫出して、地炕に熏て俟給へ。只一走にかへり來ん。且く賴みまゐらする。といひかけてはや外面へ、そが儘走り出にけり。莊助これを目送りて、噫、氣早行なる老女にこそ。縱熟たる路なりとも、この暗き夜に松も燒さで、何處まで適くことやらん。物のいひざま進止、山家に育し人とは見えず。いかなるものの零落て、浮世に遠き山里の、賤婦としもなりにけん。いはぬこゝろの奥ゆかしさよ。とひとりごちたる頰頭へ、文と叫びて寄來る蚊を、頻に攅て、噫うるさや。現夥しき蚊にこそあれ。且燻一燻。と緣頰なる、刈草の籠引よする、折から荒芽の山下風、窓より颯

り氣なく、音音は吾儕に侍るなる。何處より來ませしぞや。と再問へば、歡しげに、原來そなたで候歟。某は武藏より、同行四人の旅人なり。しかるに同道なる一友人、或に憑れて、そなたへ屆進らする、書翰一封齎せしを、曩に白井のこなたにて、不慮の鬪諍に側杖打れて、各々亂走してければ、その友達に後れたり。さばれ今宵はこの處に、宿を投めし事もやとて、跡を慕ふて來つる也。われより先にさる人の、詣來しことの候はずや。と他事なく問れて、頭を傾け、否、さる人はまだ來まさず。武藏といへばこなたにも、音耗を俟よし侍れども、その狀なくは詮なきわざなり。なほ又そこらを隈なく索ねて、書狀を齎せしその人々を、伴ふて復來給へかし。といふに且く沈吟じて、いはるゝ趣こゝろ得たれども、はや甲夜過て、天いと暗し。山路に索迷んより、こゝにて俟ば必あふべし。霎時憩し給ひね。と請れて强顏く推辭も得せず。さらば草鞋を脫措て、母屋に入りて、休ひ給へ。と囘答て軈て案內をするに、莊助はやうやくおちゐて、後につきつゝ引るゝ隨に、緣頰よりうちのぼりて、地炕の邊に坐を占れば、音音は燈蓋搔起して、莊助をつらつら見るに、鬢薄して色白く、骨坐高くて、年尙若かり。當下竊に思ふやう、この人、貌は窶れたれども、兩刀を身に帶たれば、必武士の浪人ならん。うち見たる面魂の、惡棍にはあらざるべし。さばれ心は貌によらねば、こは敵がたの間諜者歟、輒

も、厭はぬは現こゝろの誠。かゝる孝順貞實の、同胞としも生れ來て、人の妻とはなりながら、などてやいたく薄命なる。わが子共には一雙の、夫婦と人に譽られん、暇もあらで只一夜、契りもあへず生死の、海とも山とも今宵まで、夫の信聞せぬは、產靈の愆歟。生れながらに山里の、賤婦ならばさてあらん。微職なれども親三世、武家に生れて物ひとつ、引提し事もなかりしに、晝は莽山に薪樵り、夜は秣切り、馬の屨、うつゝか夢の一年半、夢にもあはぬ良人をのみ、只なつかしく思ふめる、歎きの霧に袖の雨、音にはたてず氣かろげに、倶に吾儕を慰る、心の中の痛ましさよ。とかき口說き又口說きつゝ、獨し泣ば壁背に、友音を添る蟋蟀、夜は深として哀れ也。さてあるべきにあらざれば、志を激して、頭を擡て、淚を歛め、臆われながら愚癡なりき。歎きたりとて益やはある。心もとなき兩箇の媳婦が、今や還る、と緣頰に、立も懶き折屈み、足もて撈る草履を、引穿て復外面へ、出て且く立在む折から、犬川莊助義任は、心當なる麓の白屋、是首歟彼首歟、とばかりに、尋てこゝに北向の、窻より洩るゝ燈火の、甲夜過たるにまだ鎖さぬ、諸折戸に立よりて、呼門入らんとする程に、音音ははやく透し見て、そは何處へとて遄給ふ。と呼咎るを見かへりて、否、己は行客也。卒爾ながら物問てん。此邊に音音といふ老女の、宿所を知らば。諭てたべ。と問かへされてうち騷ぐ、胸を鎭めてさ

第五輯　巻第四

第四十七回

荘助三たび道節を試す
雙玉交其主に還る

單節は四鼓の左側まで、還らぬ姉を迎へんとて、いと精悍しく蕉火を、ふり照しつゝ走り出しを、音音は恍忙、呼かけて、やよ俟給へ甲夜にすら、そなたを出し遣り難しに、今さら遒ることやはある。こや吾儕こそ遒くべけれ。駐り給へ。と聲高やかに、戸口に立て招けども、天結陰りて路暗く、其處とも判かで松の火も、忽地見えずなりしかば、ひとり頻に嘆息しつゝ、悵然として立在しを、かくてあるべきにあらざれば、母屋へ退き入しかど、左に右胷は安からず、なほつく〴〵と思ふやう、この山里に落著し、去歳の秋の于蘭盆より、道策さまをはじめまつりて、戰歿しけん子共の爲、なき人々の菩提にとて、田文の茂林の地藏菩薩へ、燈明をまゐらする、大願を發せしより、日として懈ることはなけれど、黃昏毎に彼處まで、ゆきかよふすら寂しくて、不覺に四下の見らるゝまでに、こゝろよからぬ草原路を、皈らぬ姉も、ゆく妹

との鐘の、報るに曳手はまだかへらずや。と問れて單節は柴小屋より兩三束の續松を、とり添て走り出、さのみは御心苦しめ給ふな。わらはも月來熟たる路也。そこらまで逍て、見て來てん。と回答て母屋へ衝と入て、猎平が兩箇の包を、そが儘戸棚へ隱しつゝ、草鞋穿締め、裾壺折て、いそしく移す松の火を、ふり照してぞ外面へ、出て頻に走りける。

爲を、思食たる誠心なれば、腹歹くな聞せ給ひそ。この山邊には客店なし、且く彼處の柴置小屋に、途の疲勞を休ひ給へ。よき折を候ふて、母屋へ伴ひまゐらせん。わらはは單節と呼れたる、娵で侍り。と名告あへず、涙を袖に押拭へば、猜平ふかく歡びて、原來そなたは豫て聞く、尺八が妻單節なりし歟。わが年來の志と、情由を音音がしるよしなければ、罵らるゝとも厭しからず。廿年あまり胡越の如く、絕て久しき故主へ竭す、忠義といはんは鳴呼なれども、竊に令郎君に見參して、稟試ばやと思ふ一議あり。さらでも又子共がうへを、母にも娵にも告んとて、はる〴〵と來しものを、空しく還るは本意ならず。臥房はよしや何處まれ、一ト宿曉さし給ひね。といふに單節は、又うち泣て、世とて時とて物體なや。良人の爹々に宿貸あへず、甲斐なきわらはが言の葉を、緣に繫る誠ぞ、とかしこうも諾給ひけん。心苦しさ限りなけれど、彼處に霎時潜せ給へ。大かたは土間なれども、簀子も些は侍るかし。物欲しうはをはさずや。蚊遣の團扇進せん。其行裹の重げに見ゆるに、わらはに預け給ひね。とよに隔なき愛々しさに、猜平ます〳〵心おちゐて、田文の茂林にて、二箇の包を、採違へしとは思ひもかけず。しからばこれを。と肩よりおろすを、單節は左右に受携て、先に立つゝ柴小屋へ、案内をしてぞ休はすれば、二更の鐘の音すなる。當下音音は、障子をひらきて、單節は何處ぞ。寢よ

と歎圍卓き老女の一轍、そを理ともいひかねし、單節はいよ〳〵胷苦しさに、背向になりて嘆息す。猪平これを洩聞て、音音が恨、さぞあらん。われ豈夫婦の情義をもて、阿容々々として、漁おん身を訪んや。忘れがたきは故主の恩、一日も仇に思はねども、浮世の塵を避しより、漁夫となり果ては、又一介の功もなし。何面目に歸參の勸解して、子共の身の幅を陜くすべき。これは是素よりの、わが志なるものから、なほ心もとなきは、令郎君のうへになん。且又子共の事をしも、竊に報んとおもひつゝ、武藏の盡處からはる〴〵と、恥かゞやかしく詣來たり。且くこゝを開てよ。と敲く折戸の內に立つ、音音は子共のうへをしも、竊に報んといはるゝに、再び胷は騷げども、思ひかへして回答もせず。うち泣く娘を見かへりて、扠も單節が淚脆さよ。今の世の人心、親同胞でも油斷せば、身の仇になる例もあり。外に立人は敵がたの、間諜者にぞあらんずらん。わきて閉鎖に心をつけて、門の戶外され給ふなよ。益なかりき。と呟きて、履音暴く、緣頰なる、障子を礑と閫隔て、母屋へ退き入りにけり。單節はそなたを目送りつゝ、さしも氣剛き姑の、心の底を汲しらねども、いとなつかしき良人の安否を、問まほしさに母屋のかたを、見かへりながら遑しく、脂燭を弗と振滅して、竊に折戸を引開つゝ、猪平を透し見て、痛しや暗夜に、何時まで立せ給ふべき。阿姑御許の禮なし言は、年來大人のおん

を濯ぎて休ひ給へ。といひ慰めつゝ立出て、單節が秉れる脂燭の光に、思はずも亦行容と、面を對して、鈍ましや、錯ひにけり、と不樂しげに、迭に再びと見かう見たる、行容はやく呼かけて、そなたは音音にあらざるや。われは世四郎の猪平なり。見忘れたる歟、いかにぞや。と名告るに扠は、とうち騒ぐ、胷合がたき諸折戸を、裏面より礙と引闔たり。單節は件の老人が、名告るを聞て、その人なりき、と思ひあはする胸苦しさに、そが儘退く姑の袂を竊に掖駐て、しらぬ行容ならばこそ、強顔くいふて適しもせめ。彼は正しく良人の爹々歟。面影忘れ給はずは、おん心に入ずとも、今宵はこゝに歇まゐらせて、武藏の事の今昔を、語慰め給はずや。といはせも果ず聲苛やかに、そは何事をいはるゝやらん。心弱きを女子といふとも、浮世の義理には背がたけん。善思ふても見給へかし。廿年あまり緣絶たる、舊夫は兩箇の子共が、親にして親ならず。爾るを故なく名告も會ば、むかしの不軌に異ならんや。世四郎どのは緣斷たり。又猪平といふ翁に、訪るゝ覺絕てなし。譬ば認らぬ行容なりとも、故主の鴻恩、忘るゝことなく、忠義に厚き誠あらば、今宵は疎いつ／＼までも、留るよしのあるべきに、廿年あまり、一日の、歸參の勸解をまうしも出ず、仇人の民となるまでに、義理に背きし人と知りつゝ、何樂くて武藏の事の、今昔をやは相譚ふべき。只うち捨て措ねかし、情をな被給ひそ。

倶にいかにして、仇人に降參し給ふべき。そは有まじき事ながら、胸苦しきは世四郎さま、噂聞くだに阿翁とも、いはれぬ義理の柵に、かゝる歎きを外にのみ、過し給ふは故こそあらめ。妹伕の縁しは絶給ふとも、兩箇の子達は、母御前共侶、二十年あまり犬山の家に仕へてをはせしに、歸參の願ひの聞えざりしは、それも故こそ侍りけめ。浮世の中に親として、子を思はぬはなきものを。と執成せば、頭をうち掉り、そはいはるゝ事ながら、當國も亦扇谷家の、釆地では侍れども、神宮の郷は、豊嶋の舊領、他し百姓はとまれかくまれ、彼人はなほ阿容々々と、仇人の民になられんや。爾るを厭ぬ心を推せば、故主の恩も、子共の事も、思ひやはする、忘れしならん。と腹立しげにいひ滅す折から、外面に立人響を、音音ははやく聞つけて、彼は曳手が還りしならん。疾燈燭を。といふ間に、單節は軈て椈脂燭して、先に立つゝ折戸の裡面より、姊さまかへらせ給ひし歟。などてやかくは遲かりし。といひかけて振照らす、脂燭に面を對すれば、それにはあらで、見もしらぬ、老たる一個の行客也。袱包を肩にして、竹子笠を引提つゝ、戸口に立て小腰を折め、某はこの山脚なる、由縁を尋るものになん。途にて賊に追れしかば、息頬れて堪がたし。水一瓢賜れかし。と乞れて忽地與覺貌に、なほつら〳〵とうち視戍るを、音音はいまだしらずして、曳手よ、さこそ疲勞けめ。とく〳〵馬を牽入れて、足

あらん。妹伕の契りは纔に一ト宵、一ト日も添ぬ良人の面影、倘視覺る遑だに、なき人とこそなりけんに、變ぬ操の姉妹が、山婦の手技に熟るゝまで、吾儕に優しき孝養節義を、おもふに就ていふかひなきは、舊夫世四郎ぬし、犬山の家を去りしより、神宮河原に不樂つゝも、猎平とか名を改めて、網引を業に只ひとり、細き煙を立械の、潮のまに〳〵今もなほ、恙あらず、と戸田船の、風の便りに聞しかど、廿年に餘る去歳までも、絶て歸參の願ひを立てず。況や主家の滅亡を、しらず㒵して阿容々々と、仇人の民になり果し、心は鬼歟、人にして、人とは思ひ侍らねど、緣は絶ても兩箇の子共が、親てふ文字は削られず。斷ども斷れぬ血脈を引ば、胞兄弟倶に父に似て、命惜しさに刃を伏せつゝ、仇人に降參することあらば、信なきもなか〳〵に、ます事ありと思へども、なほ片心にかゝるから、竊に和子に問まうせども、われは知らず、とばかりに何事もまだ告給はず。子といふものの絶てなくは、親のこゝろはいかばかり、長閑からんをかくまでに、われから物を思はする、愚痴は老女の癖にこそ。噫益もなき長物語に、夜延の隙を費したり。耳苦しくは聞れずや。といひつゝ鼻をうちかめば、單節も涙さし咜みて、よに有がたきおん物語は、皆教訓の端なるに、一ト言なりとも苟且に、うけ給はり侍らんや。婚姻の宵の儘にして、別れし良人はとても世に、在りとし思ひ決めねば、二世の契りを憑むのみ。胞兄弟

十條力二郎、弟を尺八郎と名づけ給ひき。十條は母の氏、吾儕が親は十條佐吾とて、御内の（煉馬家をいふ）歩輕卒也けり。加以胞兄弟を、道松和子の側侍にとて、手習素讀、武藝まで、和子と等しく習し給ひし、かゝる主君のおん慈愛は、譬を取るに物もなし。かくて去歳の春の季、豐嶋殿（左衞門尉信盛をいふ）の歩輕卒、禿木市郎ぬしの兩箇の女兒を、力二尺八が娘にとて、猛に緣談整ふて、姉の曳手を力二に妻せ、妹のそなたは尺八へ、その婚姻も同宵なる、時しも四月十二日、世に珍しき妹伕事、同庚なる主の和子、道松さまよりいちはやく、妻を娶らせしも道策さまの、皆おん指揮の隨なりし、その歡びは纔に一ト宵、明れば修羅の哀み來たる、思ひがけなき俄頃の出陣、池袋の敗軍に、豐嶋煉馬のおん一族、員を竭して擊れ給へば、誰か一人も殘るべき。吾儕が主君道策さま、おん身が爹々の市郎ぬしまで、其處に命を隕し給へば、煉馬の館さへ火攻せられて、家中の男女大かたならず、灰燼となりて失せし時、存命ふべくもあらぬ身の、なほ又おもふよしあれば、兩箇の媳婦を左右に將て、辛く重圍を脫つゝ、此の由緣をこゝろあてに、この山里に落住りしは、全く命を惜むにあらず、和子と子共の存亡を、撈聞て後にこそ、ともかくもならばや、と豫て覺期を究めし故也。その甲斐ありて歡しき、和子は信聞え給へど、おぼつかなきは子共のうへのみ。けふまでも音耗なきは、倶に戰歿せしにや

く程なく、獄舍の中に產帶を、解しは無慙や孖にて、そは力二郎と尺八なり。かゝりし程に阿是非どのの、願ひによりて不軌の科、糾しも果ず免されて、世四郎ぬしには穩便に、身の暇を給はりつ、吾儕は乳房のよく張ればとて、そが儘に留られて、和子の乳母になされたり。されば吾儕が產たりし、孖は近き里人許、杜鵑子に遣らして、七才の春まで、字し給ひにき。そは年來道策さまに、おん子育のなかりしに、道松和子の誕生ありし、おん歡のあまりにこそ。喪るべき首を續れて、母さへ子さへ懇に、庇み賜ひし主の恩、いかでか仇に送るべき、とそのとき思ひ決めしより、わが子のかたは見もかへらず、只和子をのみ掌の玉とし愛て、夜と日となく、字育まゐらせしに、忘れも得せず寛正三年、春正月のことなりき。主君の側室の二の町なりし、黑白といひしが腹にいで來し、正月といへる娘さまより、その母御前の惡心起りて、正妻にのほされし、阿是非どのは世を去り給ひつ、和子も一旦死し給ひしを、箇樣々々の事により、和子は不思議に穸より、甦生せ給ひつゝ、黑白をはじめ惡人は、なごりなく亡されて、彼娘さまは二才なりしを、大塚の莊官許、親知らずとかいふ約束にて、養女に取らし給ひにけり。この時にしも神に禱り、佛を念じて夜垢離執り、貳なく仕へたる、吾儕を特に憑しく、おほし食てや道策さま、その次の年の春、七とせ里に養せし、わが子共を召よして、兄を

一走遁て、迎侍らん。霎時の程ぞ、俟せ給へ。と懇に慰めて、立まくするを、引留て、おん身を出し遣らんとて、壁訴をやはすべき。二人列拉かへり來る、顔見るまではいとゞしく、又物思ひを倍んのみ。彼玄妙寺の鐘の聲、今撞出すは初更にこそ。早りて出て、邁逹んより、且く俟ばかへり來ん。今朝も今朝とておん身と曳手が、夫役に立を爭ひつゝ、いなわれ遁ん、彼ゆかんとて、女子にはよに相應しからぬ、馬追ふわざも、老たるわらはを、養ふ便著と眞實しき、心操はいづれを姉、孰を妹とわきがたけれども、聿姉がひに爭ひかねて、おん身は遺され給ひにき。その孝行を見るに就き、思ふに就て悲しきは、豐嶋煉馬のおん滅亡。といひつゝ外面透し見て、酸鼻たる聲細やかに、言可惜しくあなれども、受たる御恩は須彌より高き、吾儕が主君は陪臣でも、世に知られたる道策さま。こはいはでもの事ながら、恥を告ねば情由立ず、うたてき老の諄言、と挾せらるゝ歟しらず侍れど、いと若かりしその昔、彼處へ參り仕へし比、あるべき事歟、御内の若黨、姥雪世四郎といふ若郎に、思ひおもはれ、膽太くも、人視の闕を幾遍歟、踰てあふ夜の情の塊り、有身しより緈發覺て、郎と共に縛められ、命を召るべかりしに、主君の側室阿是非どの、其比懐姙し給ひつ、いと惻隱ある婦女子なれば、彼我が爲にまうし寛めて、そが儘日ごろ經る隨に、產給ひしは男兒にて、道松と命けらる。吾儕も亦い

脚の、孤屋なれば人しらず。親族もなく友もなく、住得し隨の別世界、言訪ふものは八重葎、檐端に暢ふ松風と、絶ぬ筧の音はすれど、女子世帶の水入らず、三人よすれば姦と、訓てふ文字は我うへならで、背門の秋蟬鳴暮したる、七月六日の甲夜過で、還らぬ人を俟わびしさに、門の戸はまだ鎖ざりけり。斯有て音音は績果ぬ、苧桶を搔遣り、後見かへりて、喃單節、きのふよりして管領家の、戸澤山の狩倉に、斯邊の盡處まで夫役を指れし、當日を辛く免れても、憖に售も得遣らぬ。彼瘦馬のある故に、けふまでは村長どのゝ、許さゞりしに困じたる、家に男子の絕てなければ、可愛や曳手が今朝未明より、馬を追ひつゝ夫に立て、出にし隨に歸りも來ず。途にて荷脫の馬に逢はゞ、繼してはやく歸らん、といひにしものを、いかにぞや、白井まではよも徵されじ。趣舍わろくて丁場まで、替馬に得逢はずとも、暮て歸らぬ事やはある。居つゝ物を思はんより、田文の茂林の邊まで、出迎ふて將て來てん。留守してたべ。といひかけて、身を起さんとする程に、單節はいそしく推禁て、物體なき事宜ふかな。生わかき身の骨を竊みて、天結陰る夜をこめつゝ、親を使ふて、留守やはせん。姉の今迄かう遲きは、わらはも心にかゝり侍れど、迎に出なば、阿姑さまの、獨寂しく慰めかねて、おん物おもひを倍ん歟とて、いはで苦しき胷にのみ、案じ煩ひ侍りにき。宵は倘甲夜に侍るなる、彼茂林の邊まで、走

に、面を認る程もなく、姿を隠せし道節は、火を獲て脱るゝ火遁の術に、往方もしらずなりたるを、老人はなほ跡を慕ふて、舊來し路へ走るになん、莊助は亦その足音を、はじめの癖者なるべし、と思ひにければ些も猶豫せず、續て茂林を走出つゝ、何處までも、と投かたの、荒芽山路へ追蒐しかど、曇りし隨に霽ぬ宵の、六日の月は沒にけん、いと暗ければその迹を、認かねしより只ひとり、心あてなる彼山の、麓村にぞ著にける。不題、上野國廿樂郡、荒芽山の麓村に、音音といふ微賤の老女ありけり。年の齡は五十あまり、二三にもなりぬべし、原は武藏のものなりしを、故ありて去歳の夏、この山里に世を避しより、熟ぬ手技に栲衾、素樸片木の薪樵る、鎌倉遠き不樂僑居、かくて月日をふる鄉の、空なつかしき三芳野の、田面の雁はまだ來ねど、秋としなれば急るゝ、冬を禦ん洗衣、綴刺とぞ鳴虫に、驚されて今宵より、夜延の續苧暇なき、現世わたりの苦しきを、今思ひしる浮世の中に、老の杖ぞと賴みてし、兩箇の子供はいぬる比、主の供して戰場に、赴きしより死せしとも、生りともまだ信聞えず。家に遺るは兩箇の娘御のみ。兄が妻を曳手と名づけ、又弟婦を單節と呼べり。年は二十と十八公の、松の操に常葉の竹の、子をし產せて見まほしき、妹伕ながらに玉匣、ふたとせ近く遠離れども、よに隔なき相娘の、優さず劣らず姑に、朝夕竭す孝行の、德は孤ならで鄰へは、いと〱遠き山

拳法の妙奥、互に知たる事なれば、地を踏凹ます力足、烏夜に目標は暴雄の、勝負孰とわきがたき、爭ひ果し奈末與美の、腕に甲乙なかりけり。この時までも彼老人は、樹蔭に息を凝らしつゝ、透し長視て、舌を吐き、その勇力に呆るゝ可り、端なく出も難たりしを、聊覺あるものなりけん、慄かねたる面色して、走り寄つゝ兩人が間へ杖を衝入れて、推分んとしてければ、道節も莊助も、再びこれに驚きて、思はず組たる手を放す、郤含に落せし首級の包を、兩人取らん、と立よる所を、取らしもやらず又老人は、間に直と躬を入れて、杖探なほし推隔たる、早速の働き、思はずも、己が肩なる兩袱の裹物をうち落しつゝ、遽しく躬を屈して、頻に四下を搔撈たる、程もあらせず兩雄は、齊一焦燥立如法夜に、認ぬ敵も、當坐の手覺、當るに任して左右より、彼老人を突退れは、蹌踉ながら轉も倒れず、兩三步退きて、小膝を突たる手下に、撈り當しは道節が讐の首級の二包ぞ、と思ひかけねばわが包よ、とこゝろ得手ばやく引よして、左右に抱きて身を起す。とは又しらで道節は、探り當たる老人の兩箇の包をわが讐の、首級とおもへば霎時も措ず、諸手に引提て直躬と立しを、それかとばかり莊助は、且く烏夜に透し見て、程を揣りて腰刀を、晃りと拔て、丁と砍る、竃は翦てその邊に、推倒されたる石塔の、棹石の稜、礟と撃つ。刀尖鋭き拳の冴に、その石四五寸打削られて、潑と出たる石火の光

茂林の中にぞ進み入る。浩處に後方より、年老たる賤夫の、梼の脚絆に褄端折して、竹子笠を戴きたる、肩には二袱の小包を、結合しうち掛て、道節が跡を跟て來つ、地藏堂のあなたなる、樹の陰に立躱れて、近くもよらず戍りてをり。道節はわが前後に、窺ふもののありとはしらで、塔婆の下に進向ひつ、腰に著たる兩包の、首級の締塊解おろして、塔婆の前に蹲踏つゝ、恭しく額つきて、頻に祈念を凝らすになん、莊助は塚の陰より、透し見れどもその意を得ず、肚裏におもふやう、この癖者が齎して、舊塚を祭れるは、引剝せし贓物を、邪鬼に供養して、なほ造化を願ふならん。這奴憎むべし、憎むべし。先うち驚して、試して見ばや、と石塔の間より手を出し伸して、並備へし二包なる、首級を無手と搔獲て、引入れんとする程に、道節はやく頭を擡て、驚きながら莊助が、腕を丁と攙詰て、引出さんと前へ曳く。莊助は亦引著られじ、とそが儘些も身を動さず。應に千尋の大木の、巨根を四方に張れるがごとく、千曳の綱手に被るとも、なほよるべくもあらざれば、道節はいよ〳〵驚き、ます〳〵怒て引あふ程に、迭に劣らぬ金剛力士の、世尊の鉢を爭ふて、紫雲を踏も外せし如く、間に兩箇の石塔を、瓦落離擋と推倒して、忽地籠盾のなくなりければ、道節獲たり、と衝と寄せて、股杖に臑を踏入れて、左手を帶の締塊へ、被んとするを、莊助は、臀を拈て振釋く。雙方入躬の最手抽手、相撲の極祕、

へ。と戯れつゝ、進み入り引おろして、柔も桃も漏すことなく、忽地に盡せしに、桃は三四よく潰て、甘液の多かれば、飢を忘るゝのみならず、渇もやがて止にけり。方便無量の佛恩かな。と又戯れて額をつき、退き出んとするときに、孤燈の油はや竭て、忽地に滅にけり。あの燈明はとまれかくまれ、空はなごりなくうち曇りぬ。雨は降るとも復月の出べくもあらぬ夜に、荒芽山まで邁ばとて、彼人々に遭んとは、今さら思ひ決めがたし。今宵をこゝに曉さん歟、なほ彼處までゆくべき歟、と尋思に胷は安からで、舌打すれば蛬、わが口眞似歟諸聲に、鳴立られていとゞしく、尻もおちゐぬ小堂の框に倚てつくゞゝと、猶ゆくするゑを思ふ折から、忽地人の足音して、前面より來るものあり。莊助はやく透し見て、初夜過たるにこの茂林へ、松も燈さで獨來るは、豈參詣のものならんや。こは必盜賊の、臥簟造るにあらんずらん。躱れて楚と見定めばや、と思へばやをら身を起しつゝ、竊歩しつゝ左邊なる、石塔の背に身を潜して、その近づくを窺ひけり。さる程に、犬山道節忠與は、君父の讐を撃果したる、兩級の首を腰に著て、はやくも其處を立退きつゝ、案内知たることなれば、捷徑を疾走りて、その夜初更の比及に、田文の地藏の茂林まで來にけり。この堂の邊なる、舊塚の間には、今茲四月十三日、君父の一周忌の追薦に、由緣のものの建たりし、塔婆一基ありければ、件の首級を手向んとて、

いたく朽傾きて、骨を顯す萱が檐に、田文地藏堂と題したる、扁額を掲たり。このとき莊助おもふやう、かくまで荒たる小堂なれども、土地に由緒ある靈佛ならずは、里遠離る茂林の佛に、誰か夜な〱燈燭を進らすべき。田文といへば耕作に、をさ〱利益あるもの歟。こは近鄕の歸依佛ならん、とおもへば、行婦の名を得たる、母の塚さへなつかしくて、悵然として立も得去らず、なほ彼此を見かへるに、地藏堂の左のかたに、苔埋たる石塔六七あり。そが間に、近屬建たらんとおぼしき、木塔婆もありけり。言訪ふものは樹間なる、草葉に虫の聲するのみ。さらでも闇き樹の間より、振離矚ればむら立雲に、又入る月の影ならで、幽けき遠寺の鐘聲を、聞漏さじとて傾れば、夜はまだ深けず、初更なり。とてもかくても後れしものを、急ぐとも甲斐やはあらん。且くこゝに憩んとて、地藏堂の扉を開きて、霎時念じて、裏面のやうを、つら〱と見入るゝに、石佛にして坐像也。身長は三尺許もあるべし。前机なる、一雙の花瓶に、草の花を建たるが、日ごろ經にけん萎みたり。そが机の中央に、兩皿の盛物あり。頸を推鶴してなほよく見るに、皿なるは、粢と桃なり。時に取ては是も亦、百味の飲食なりけり、と思へば漫に聲を被て、地藏尊々々々、六道能化の教主として、餓鬼を濟せ給ひなば、わが飢たるをも憐み給へ。御前の供物の好しきに、埜鼠をのみ肥さんより、己別當仕らん。許させ給

に、夜に紛れ迹を埋めて、同意異途に走りつゝ、やうやくに九死を出て、一生をぞ獲たりける。そが中に、犬川荘助義任は、いぬる日、庚申塚なる法場にて、三犬士に死を拯れし、恩義をこゝに答ん、と思ひにければ進むときも、三士に先だちて防戰ひ、退くときは殿して、殊さらに後れしかば、終に信乃等が往方をしらず。六日の月は出ながら、秋天の定めなくて、結陰ては又霽るゝ、影いと細き嫋竹の、しのぶに便よき宵なれども、いひ合したる事のなければ、何處を投て彼人々に、追著んよすがはあらぬを、猎平が信乃に誂しといふ、書狀の事を思ひ出て、おぼつかなくも心あてに、荒芽山の方へとて、其處ともしらぬ間道捷徑、足に信して走る程に、今ははや二三十町來ぬらんと思ふ物から、なほその山の麓に得著ず。嚮には目にあまりし大敵と、戰疲勞たるうへに、不知案內の夜行を、ひとり頻りに走りにければ、いといたう餓たるに、喉さへ渇きて堪がたかり。さばれ此邊は、邁どもゆけども茫々たる郊原にして、憩んと思ふに家もなし。と見れば右側なる茂林の中に、火光隱々と見えしかば、こゝにも栖ば、住む人ありけり、縱一碗の飯を獲ずとも、敲きて水を乞ばやとて、進み入ること一ト町許、件の茂林にいゆきて見るに、人の家にはあらずして、最老たる樹下に、褊小なる地藏堂あり。彼處で見たる火の光は、此佛へまゐらせたる、燈明の洩たるなり。堂は一間四方に過ず。これ將

の如く疾近づきて、足を飛して礙と踢る、爪頭尖く吮を、したゝかに撲折かれたる、灸所なれば聲も得立ず、手足を張て仰反たり。程もあらせず又一人、弓に箭刺ふて樹間より、出るを道節透し見て、遺たる鳥銃取るよりはやく、火蓋を鑽て、撐と放せば、響と共に樹下なる、彼一人も倒れけり。三人が外に今はしも、敵はあらじ、と道節は、鳥銃そが儘投棄て、袖を拂ふて悠々と、高峯のかたへ還りゆく、宿を何處とまだしらねども、なき後までも主を思ひ、親を忘れぬ犬山は、尾張のみかは上野の、白井の城の城將士卒も、その里人も、後の世までも、語繼ぎ聞傳へて、道節來つといふときは、顙泣兒も立地に、聲を斂て怕れしとぞ。三國の時張遼が武名に小兒を權したる、遼來々々よりも目覺しき、名を海内に揚にけり。

第四十六回

地藏堂に莊助首級を爭ふ
山脚村に音音舊夫を拒む

再說、信乃莊助現八小文吾等の四犬士は、思はずも白井なる、城兵に捕圍れて、苦戰に時の移るまで、なかなかに死を究めしに、誰か圖らん竹叢の中より、鬨を作り箭を射出して、われを助るものありければ、城兵これに辟易して、鐵壁よりも堅かりける、重圍忽地釋たるまにま

あるべき武士の名聞、首をわたせ。と罵たり。道節は願ふ敵ぞ、と疾視詰て、聲高やかに、原來汝が五行よな。その名は豫て聞しかど、面を楚と認らねば、撃漏せしに、居殘りて、出て名告るは天の賜、わが武運こそ憑しけれ。霎時も忘れぬ父の仇、其處な退きそ。と敦圍て、刀を晃りと拔放せば、三寶平も亦おぼえある、武藝に誇て、些も撓まず、迭に烈しく聲を合して、衝出す鎗、撃大刀の、音も隙なき生死の際、一上一下と術を盡しつゝ、霎時は挑戰へども、忠孝無二の道節が、獅子奮迅の怒もて、頻りに進む陽の大刀を、終には陰に閉かねたる、鎗を憂哩と卷落されて、大刀を拔んとする處を、大喝一聲道節が、うち閃かす刃の下に、三寶平は身を轉して、足空ざまに倒れたる、軀のうへを飛越えし、首は遙あなたなる、松に當りて落てけり。さる程に道節は、父の讐さへ思ひの隨に、撃果したりければ、歡び比んに物もなく、刃を斂めて樹下なる、仇人の首を引提來つ、又その死骸の袖を斷離て、包みて腰にぞ著たりける。浩處に、助友が、曩にこゝらへ留置たる兩三人の家隷は、おの／＼鳥銃携て、東西の樹下より、寬よりつゝ矢比を揣りて、火蓋を鑽らんとする程に、道節目ばやく透し見て、左右に摑む小石の飛礫に、西なるひとりは頬を、打破られて叫びもあへず、はや仰ざまに倒れたり。又東なる一人は、鳥銃を打落されて、驚慌て取らんとするを、取らしもやらず道節は、鷙鳥


犬山道節


四大士再
石白井の賊
兵と戦ふ

霎時睨てうち頷き、天運いまだ全からでや、管領定正ぞと思ひつゝ、撃しはその臣遠安なれども、這奴も先君倍盛朝臣に、鎗を鏁たる怨敵なり。彼染鼎の恥を雪め、睚眦の怨を復すは、皆是志士の本意なるに、打落したる仇人の首級を、捨て走らば大敵に、怕れにけり、と人はいはん。些少なれども今宵の家裹、わが先君を祭の胙、これに優すものあるべしやは。とひとりごちつゝ死骸の袖を、手ばやく散落離と裂とりて、件の首級を推包む、心のどけくその端を、帶に融して結附るを、後方に立て見るものあり。ともしらずして道節は、叫ぶ薮蚊を拂ひつつ、たち去らんとする程に、癖者等。と呼留て、晃りと衝出す鎗の刃頭に、こゝろ得たり。と道節は、片足代にあちこちと、身を跳して、佶と見かへり、此度の敵は一人歟。百騎にあまりし城兵だも、みな逃足は速かりしに、汝一人かへし來て、虎髯を拈るは殊勝なり。名告れ、聞ん。といはせも果ず、鎗を繁扱て、聲をふり立、道節さのみ廣言すな。われは初度の戰に、早りて、肘に痍を負ふたれば、又功名を貪らず、汝を捕手の駈駐は、朋雅に譲りつゝ、彼處の樹陰に退きて、思はず時を移したり。かくて空しく城中へ、還らんことの本意なさに、ひとり汝が往方を索ねて、目今迹を認めたり。わが名は音にも聞つらん。去歳の四月の戰ひに、汝が父道策と、組で當坐に首を獲たる、竈門三寶平五行也。親さへ子さへわが手にかくるは、過世

索るに、敵はひとりも在らずして、躬方の遺せし列卒縄を、彼此の竹に結びて措り。原來熟く謀られたり。遠くは邁じ追蒐よ。と再び罵騒ぐのみ、はや時移りて往方を知らねば、呆れて進む擬勢もなし。助友は後度の不覺に、安からず思へども、窮寇は追ふべからず、一圓白井へ退きて、便點をもつて遺なく、搦捕るこそよかめれ、と思ひかへして強ても追せず、竊に家隷兩三人に、謀を授け、留めおきて、眞弘之通共侶に、全隊の士卒をいそがしつゝ、白井の城にぞ還りける。かくて宵は、なほ甲夜ながら寂寥て、人跡絶たる列幹の松の、背を蒼田に風渡る、土堤の茅萱に置く露を、命と聚く虫の聲、高くも澄る夕月夜、影さへ薄き單衣の、裾を脛まで端折て、腰に帶たる兩刀の、外に一刀挿添たる、いとも怪しき一個の武士、稲塚の蔭よりして、四下を見かへり見かへりつゝ、忽然として立出たる、是はこれ別人ならず、犬山道節忠與なり。既に竹藪の奇計をもて、夥の敵を退けて、輙く四箇の旅客を、拯ひにければ、いよいよ躱れて、はやくも件の藪には在らず、近きわたりに身を潜して、豫て時分を揣りけん、助友等が全隊を將て、白井の城へ還りゆくを、遣過し目送りて、再び顯れ出たるなり。當下犬山道節は、彼此にいくらとなく、横り臥せし敵の死骸を、曲々に、と見かう見つゝ、嚢にわが投捨たる、越杉駄一郎遠安が、首級をやをらとり揚て、月を燭に又よく見たる、怨の外眥凄じく、

摭りて、索さへ漏さず左側なる、大竹藪に潜入りつゝ、敵の後に近づくを、しるもの絶てなかりけり。かくて又道節は、幾尋かある件の索を、彼此の竹にからまして、引動しつゝ忽地に、鬨の聲を揚しかば、城兵これに驚されて、こはそもいかに、と見かへる處を、竹藪の中よりして、射出す弦音、空箭はなく、矢庭に命を隕すもの、五七人に及びにければ、城兵怺へず騒ぎ立て、原來敵に伏兵あり。一ト闘こゝを退ずや。と罵る程に道節は、索を引ては竹を動し、箭を射出しては索を引く。暗さは烏し、藪中に、籠れる敵の多からん、と思ひ惑る城兵等は、いよ〳〵周章くのみ。父道寛の軍術を、見馴聞熟たる助友も、終に怺へず皆共侶に、人辟撲て崩れにければ、信乃莊助、現八小文吾等の四犬士は、忽地これに力を得たる、勢ひに乘しつゝ、敵をよき程に追捨て、はやくも迹を瞞しつゝ、荒芽山の方へ走りけり。城兵等は思ひがけなく、敗走りて息つきあへず、白井の城へ逃籠らんとて、頻に捫擇したりしかば、助友怒て、聲高やかに、穢き兵共の逃足かな。計るに敵は煉馬の殘黨、よしや伏兵あればとて、怕るゝに足るものかは。藪中へは箭を射被け、鎗を突入れて駈出せよ。逃たる奴をば、とく追蒐よ。只一人ンだも撃留ずは、後日の咎を脱れがたし。いふかひなや。と敦圉て、烈しく下知を傳れば、城兵これに勵されて、藪の邊へかへし來つ、且箭を射被け、鎗を入れ、果は端より搔分て、衆皆撈

べくは見えざりけり。有斯し程に道節は、辛く大敵を殺脱て、走ること三四町、旣にその日は暮にけり。追來る敵のなかりしかば、路傍の樹下なる、石に尻をうち掛て、且く息を吻く折から、忽地後方に閧の聲して、撃大刀音さへ聞えけり。道節耳を傾けて、原來なほわが來つる跡に、烈しき戰ひあるにこそ。嚮にわれ、頻に慕ふ敵兵を、砍拂ひつゝ走りし時、前面より來つる旅客等が、間に入りて立紛れずは、輙く敵に遠離らんや。折しも黃昏なりければ、敵は四箇の旅客を、わが助大刀のものぞと思ふて、捕籠て撃にやあらん。もししからずはわが來し跡に、いかにして戰ひあるべき。彼旅客等が來つる故に、われは輙く追手を脱れ、脱れし故に旅客等は、敵に撃るゝ事あらば、便是人を殺して、わが命を保るもの也。勇士のせざる所にして、恥亦これより甚しきはなし。いでや彼處へ走り還りて、旅客等を拯ひてん。拯ひ得ずともその人々と、共侶に死なば、生るに勝れり。吁しかなり、と肚裏に、思ひ決めて遽しく、緩みし帶を引締びつゝ、裳を褰げて驀直に、舊の處へ還りて見れば、果して四箇の旅客等は、城兵に捕圍れて、旣に戰ひ疲勞けん、その危きこといふべからず。賸城中より、加勢の武士百騎許、いで來れりとおぼしくて、勢ひ始に彌增たれば、道節霎時尋思をしつゝ、と見れば敵の捨たる弓箭、處々に多くあり、又紈たる列卒繩も有けり。是究竟と應手なる、弓を拈り、箭を

等は、只獨なる道節だに、得撃留ざりけるに、替る敵手は四犬士なり。譬ば山の幸雄等が、一虎を追走らして、百獅子に逆ふが如く、忽地に殺崩されて、一町あまり退きしを、助友ははや守返して、逃る士卒を罵激しつゝ、みづから短鎗を閃して、四犬士にうち逆へば、松枝眞弘、妻有之通、恥を知り名を惜む、武士なきにしもあらざれば、又助友を相援けて、刀尖より火出るまでに、嘖嘖て攻たりける。浩所に城中より、援の兵百騎許、汗馬に鞭ち、宙を飛して、はやくも近づく程こそあれ、躬方を勇る鬨の聲に、逃たる士卒も聲を合して、皆共侶に競ふて蒐れば、新隊は備を引わけて、横鎗をぞ釖たりける。この時既に日は暮て、影なほ細き六日の月も、むら立雲に隠されつ、又顯るゝ明闇不定の、藪を籠盾に四犬士は、一進一退力を勠して、苦戰に大刀の銅鐵續かず、簓のごとくなるまでも、淺痍一个所負ふものなく、千變萬化の祕術を盡して、頻に捷に乘るものから、不知案内の夜戰なり、緈は素より不意に起りて、われに援の兵なければ、思はずも蒐隔られて、迭に拯ふことを得ず、信乃莊助は、城兵の、新隊の中にとり圍れ、又現八小文吾は、助友が隊兵と、戰ひおの〱暇なき、四士四所に別れても、危窮はおなじ九死一生、阨難こゝに三たびに及べば、存亡いまだ知るべからず。寡をもて衆に敵するは、已ことを得ざるのみ。縦四犬士萬夫の勇あり、敵に一介の術なくとも、脫れ果

にて、管領撃れ給ひにけり。寇は一個の浪人にて、煉馬の殘黨なるものぞ。といへばいな〱、管領の、いかでか撃れ給ふべき。彼癖者に殺されしは、去歳の軍に名を揚たりし、御内の越杉といふ人ぞとよ。そはともあれかくもあれ、癖者は術煆煉也。單身にして瞬間に、死人で山を築きしといふに、逃てわが村に走りも入らば、いかにして禦ぐべき。門戸をとく鎖せ、女子ども、喧嘩の側杖打るゝな。と呼る音聲囂しく、皆東西へ奔走す、騒劇大かたならざれば、四犬士もうち驚きて、原來此わたりにて、復讐の本意を遂しは、彼犬山にぞあらんずらん。とくその處へ赴ずは、いかでか虚實をしるよしあらんや。暮ぬ間にと共侶に、歩の運びをいそがしつゝ、里遠離る晩闇、前面を透し長視れば、年尚わかき一個の武士、手に白刃をうち振て、追來る敵を物ともせず、敵近づけばとつて返して、殺靡け撃退けて、なほ戰ふこと兩三度、道のゆくての四犬士の、間に忽地衝と入りて、背に立か、と見かへれば、往方もしらずなりにけり。そのとき巨田助友等は、士卒を頻に駈立て、透間もなく追蒐來つ、前面に立在む四犬士を、是も道節を助大刀の、同類なりと思ひけん、彼撃留よ。と下知すれば、多勢を頼む捕手の雜兵、咄と噬て衝出す、鎗の刃頭は夕立雨の、電光にしも異ならず。四犬士はこはそもいかに、と驚き避ても一言の、問答に暇なければ、已ことを得ず腰刀を、拔合しつゝ戰ひけり。さる程に雜兵

ず助友に、走近づかんとする程に、助友騒がず、弓に箭刺ふて、能彎固めて飄と射る、矢声と共に道節は、身を淪してぞ避たりける。程もあらせず射出す二の箭を、大刀もて丁と切拂ふ、神出鬼沒の疾働きに、助友は心慌て、弓を戛哩と投捨つゝ、大刀を抜んとする程に、松枝妻有の近臣等、時分を揣りて返し來つ、助友に力を勠して、彼撃留よ。と下知すれば、その隊の兵数十人、推隔、とり圍て、微塵になれとぞ揉だりける。當下道節思ふやう、わが思慮の足らずして、敵の謀に當られたれば、先君の讐敵、眞の定正にいまだ得あはず、加旃父の讐、竈門三寳平五行も、この隊にあらずとおぼしきに、漫に進て戰歿せば、世の胡盧にならんのみ。大宿望を遂ん事、けふに限りて翌なからんや。幸にして黄昏たり。只一方を殺開きて、身を全して、時を俟ん。こゝにて死することかは、と尋思の臍を固めたる、奮戟突戰、初より、精神ます〳〵加りて、多勢が中へ割て入る、迅こと恰飈の如く、はや一條の血路を開きて、且戰ひ且走れば、助友頻に焦燥て、士卒を詈り奨して、眞弘之通共侶に、何處までもと追ふたりける。恁處に、信乃莊助、現八小文吾等の四犬士は、曩に明魏の山中にて、莊助が遠眼鏡もて、見たりしといふ武士を、いとなつかしく思ふになん、倘あふことのあらんかとて、山を下りて彼此と、尋索てその嚥昏に、白井の城へ遠からぬ、一村落を過る程に、里の老弱罵騒ぎて、今如此々々の松原

ず、近臣越杉が面影の、よく主君に似たるをもて、駄一郎に大將の狩裝束賜りつ、きのふ五日の早旦より、砥澤の山の狩倉は、彼建久のむかしを偲ぶ、汝を釣ん爲なりし。父の先見果して違はず、今招ずも網に入る、汝が命運はや殫たり。討捕るはいと易けれども、敵ながら可惜しき、勇士と思へばわが箭に被ず、及びなき身の力を量りて、非を悔ひ、時の務を知らば、降參せよ。とぞ呼りける。道節は謀りにけり、と思ひし敵に計られて、怒れる面に朱を沃ぐまで、疾視詰たる必死の覺期に、大刀とり直して、些も撓まず、扨は助友、ござんなれ、耳穢はしき降參呼り、九世を易るとも、讐の奴とわれやはならん。今定正を討得ずとも、わが先君に鎗を鎁たる、越杉もおなじ主の仇、思ひの隨に撃留たれば、聊亡君尊靈を、慰奉るよすがあり。恨らくは父の讐、竈門三寶平五行を、撃得ざりしこそほゐなけれ。然とて名もなき雜兵を、幾百人殺さんより、汝とわれと勝負を決せん。助友進め。と刃を抗て、頻に招く不敵の廣言、憎さも惡し、と捕手の兵、ヤッと被たる諸聲と、共に齊一衝閃かす、鎗を前後に飛越反蹤、右に受ては左に流す、手煅煉の刀尖丁々發石と、疾風に枝を折るごとく、鎗の蛭卷幾條歟、砍落されて逃るもあり。或は眞額乾竹割、或は胴劊筝車、矢庭に命を隕すもの、はや十人にあまりつゝ、遺るも痛手を負ぬはなし。忽地潑と開き靡けば、道節得たり、とますく進みて、面もふら

太なるを挾みて、鷲羽の征箭、兩條を把そえたる、その隊の兵三十餘人、おの〳〵短鎗の刃頭を揃て、道節が前後左右を、犇々と捕繞つゝ、復武者音をぞ揚たりける。當下件の若武者は、弓杖突て、聲高やかに、愚なり犬山道節、良將はおのづから、時運に稱ふ神助あり。管領いかでか汝等ごとき、孤客に撃れ給はんや。けふ謬て汝が爲に、命を隕せし假管領は、只是當家の勇臣なる、越杉駄一郎遠安と呼れしもの、去年池袋の捷軍に、汝が主君倍盛の頸捕て、名譽の感狀を賜たる、剛者なりけれども、汝が年のわかきを見て、漫に思ひ侮りけん、阿容々々として撃れしは、不思議の僥倖ならん。かくいふわれを誰とかする。管領補佐の一老職、武術文學、敷島の道にしも暗からで、その名は都鄙に高かりける、巨田左衞門大夫持資入道道寛の長男なる、薪六郎助友が、父の奇計を受行ふて、汝を謀りしとしらざるや。わが父道寛、豫てより、豐嶋煉馬の殘黨の、隙を窺ふ事もやあらん、とおさ〳〵遠謀あるをもて、去歲の秋より彼此へ、士卒をわかち遣して、竊に撈り問せしに、下野武藏の間にて、優婆塞に姿を變つつ、左道をもて愚民を迷し、錢を集めて、軍陣の、便點に充る汝が影迹、既にして顯れたり。さばれ幻術ありとかいへば、叨に捕易からず。油斷の體にもてなして、こゝらへ誘引よせんとて、わが管領は近日より、白井に在城し給ふ、とおぼろけならず徇知して、なほ鎌倉を出給は

手に楚と引著て、細頸丁と掻切たり。松枝竈門妻有の黨、敵の從類皆これを見て、吽嗟と騒ぐ大叫喚も、よしなや遠慮の手を下さで、遺恨に堪ねば今さらに、備を立るに遑もあらず、われ撃留ん、と刀尖を拔列ね閃して、八方より競ひ蒐れば、道節は左手に引提し、讐敵の首級を投捨て、乙と嗟て縱横無礙に、殺靡けたる必死の大刀風、雨歟、雫歟、名刀の、奇特に土を潤したる、道のぬかりに敵の雜兵、辷るを獲たり、と撲地と砍る、修煉の手のうち、瞬間に、血は涿鹿の野に滿て、撃るゝものぞ多かりける。されば一人當千の、向ふに前なき勇士の働き、譬ば餓虎をもて、群羊を駈るごとく、唯是一個の道節に、夥の士卒辟易して、こゝは足場の悪かるぞ、且退けと罵りつゝ、潑と亂れて逃迷ふ、雜兵に誘引れたる、松枝竈門妻有の諸士、心ばかりは早れども、大廈の倒れんとするときに、一木いかでかこれを拄ん、皆共侶に逸足を、踏亂しつゝ逃走るを、蓬し返せ。と呼被たる、道節は刀尖より、霤る水氣をうち振打ふり、一町あまり追ふ程に、一叢繁き藪蔭より、鬨を咄と作して、顯れ出たる一個の若武者、これ怎麼なる打扮ぞ。但見れば、素絽に皂絲もて、壺盧の花を、處々に、縫箔したる狩裝束に、萌葱威の身甲して、精好の奴袴に、龜甲釻たる肱甲臑鎧を、透間もなく具足ひつ、腰には二尺五六寸なる、金作の大刀に、海豹の尻鞘被て、九寸五分なる短刀を横佩、左手に、重籐の弓の握


名刀を
大山道節
扇谷定正
松枝十郎



大度の主命に、眞弘忽地閉口して、逡巡するのみなれば、大出太郎は欣然と、刃を引提て身を起しつゝ、しからば御免を蒙るべし。よく觀せ。と定正の、牀几のほとりに衝と寄りて、跪きつゝ件の大刀を、進らするやうにして、胸前捉て仰ざまに、突倒し推伏て、刀尖晃りとさし著れば、吐嗟と騒ぐ松枝十郎、竈門三寶平、妻有六郎、その餘の近臣、外様の諸士、雜色奴隷、列卒までも、さては癖者、射て殪さん歟、刺や留ん。と散動ども、賈誼が所云鼠に投るに、器を忌むごとく、よしや癖者を討とるとも、主君も倶に命を隕さば、その甲斐なしと躊躇て、握る拳の汗も只、沸がごとくに捫擇す。この時にはや定正は、刀の鞆に手をかけつゝも、剛敵に推伏られて、終に刃を抜くこと得ならず、兵共拯へ。と叫ぶのみ、又せんすべはなかりけり。當下件の癖者は、天地に響け、と聲ふり立て、管領定正慥に聞け。下總千葉の浮浪人、大出太郎と名告しは、且く汝主從を、計らんとての假の名也。去歳の四月十三日、江鄕田池袋の戰ひに、一族從類員を盡して、汝が爲に亡び給ひし、煉馬平左衞門尉倍盛朝臣の老黨に、さるものありしと知られたる、犬山監物貞知入道道策が獨兒に、乳名道松と呼れたる、犬山道節忠與とはわが事也。君父の讐を復さんとて、薪に臥し、膽を嘗、千辛萬苦の宿望を、今こそ果す、怨の刃、受よやッ。と罵れば、定正いよ〳〵驚怒て、反復さんとする處を、起しも立ず髻を、右

まで正しき證あれば、疑心は既に氷解せり。その大刀これへ、とく〳〵もて。といはれて太郎は欣然と、身を起さんとする程に、松枝眞弘推禁めて、こは不覺也、大出生、縱中途の見參也とも、貴人に咫尺したてまつるに、帶刀すらなほ憚りあり。況白刃を引提て、近づき奉るよしあらんや。大刀をわれらに遞與し給へ。といへども聽かず、頭をうち掉り、原來和殿は某を、なほ疑しく思ひ給ふ歟。人々われを疑はゞ、われも亦人々を、疑ひ思はざるにあらず。亂れたる世の習俗とて、凡貴きも賤きも、笑の中に刃を隱す、貪慾邪慳は量りがたかり。然るを今虛虛と、高貴人也とて心放して、身にもかへじと思ひし寶を、左右人達に遞與しつゝ、價も賜はで豪奪せられば、われは孤獨の旅客なり、斯夥なる人々と、爭ふたりともその甲斐なく、大刀をばとりも復さずに、可惜命を喪れん。さるむづかしき事ならば、售らで後悔なきこそよけれ。といふを定正うち聞て、十郎が當坐の遠慮は、愼ふかき所以なれども、そは亦人によるべき也。大約六十六箇國、龜甲の如く封彊を建て、數國を領する大諸侯、東にもなほ多かるに、予を良君と思はずは、家寶の大刀を齎して、はる〴〵こゝに推參せんや。かゝれば予はその村雨より、大刀の主こそ愛おもへ。時宜によらば高祿もて、召使ふべき大出太郎を、なほ疑んは要なき事也。聊も厭しからず。とく〳〵みづからこゝへもて、許すゆるす。と鷹揚なる、寬仁

てより傳聞たり。さりとても名を稱む、贋物をもて人を欺き、利をしも揣る鳴許人の、世には往々ある習俗なるに、汝が父の遺書也とも、認らぬ手迹の傳來錄を、誰か證据とするものあらんや。別に證とするよしなきや。と再問れて、些も擬議せず、御諚では候へども、贋物をもて利を謀れるは、狡商人のうへにあらん。高祿をだも欲せずに、一二世浪人の某さへに、疑れ奉るは、いと朽をしくこそ候へ。抑この大刀の銳ことは、陸には犀象を砍るべく、水には蛟龍を截といふ、唐山の龍泉太阿、我朝の小烏蒔鳩、鬼丸龍尾なンど聞えしも、なほこの右に出べからず。加旃拔放てば、刀尖より水氣流れて、太山の石滲に異ならず。うち振るときは村雨の、梢を洗ふに似たればとて、軈て村雨と命けられしを、語繼ぎ聞傳へし、人口になほ膾炙せり。鄙語にいふ論より證据、こは贋物歟、眞物歟、よく鑒せ。と誇良に、答も果ず拿たる大刀を、取直し拔放ちて、晃かしつゝうち振れば、不思議なるかな刀尖より、潸然として濆る、水氣四方に散亂して、彼警衛の近臣等が、面を撲て降沃げば、衆皆袖もて拂ひもあへず、遙に潑とぞ退たりける。さばれ定正は牀几をはなれず、扇をもつて避たる水氣の、なほ精好の袴の上に、被りて結ぶ白露を、見つゝ只管感嘆の、膝打鼓せば破落々々と、落て碎る名刀の、奇特に疑ひ忽地解たる、その歡びは大かたならず、思はずも聲高やかに、やよ等、霎時、大出太郞。かく

下て、道傍なる、芝上に牀几を立させて、そのもの召。といそがし給へば、眞弘再び走り向ふて、彼浪人を將て來にけり。その間に定正は、牀几に尻を懸給へば、近臣左右に警衛して、齊整としてついゐたり。されば件の浪人は、そが儘眞弘に倶せられて、間近く跪きたるを、定正霎時、と見かう見て、下總千葉の浮浪人、大出太郎は汝が事歟。明失たる母の爲に、家寶の大刀を售んと欲する、その孝行賞すべし。その大刀何等の德ありて、予に售んとて自負したる。三世家傳の由來を告よ。大刀の銘を何とかいふ、その來歷はいかにぞや。と問れて臆せず、小膝を進め、さゝ候。某が、祖父は故管領家(足利持氏)に、仕へたるものなりければ、兩公達に從ひまつりて、嘉吉の結城合戰に、陣歿して候ひき。よりて父は仕官を欲せず。下總千葉に退隱して、年四十にして身まかりたり。年來浮浪に、武器調度を、沽却して候ひしを、なほ一口の名刀あり。これは是世に名だたる、村雨の大刀になん。乃祖尊氏將軍より、持氏卿まで相傳せしを、春王殿に讓らせ給ひつ。爾後嘉吉の戰ひ敗れて、春王安王兩公達は、討れさせ給ひしかども、件の大刀は幸ひに、臣が家に祕置り。某が父は彼公達の、伽扈從なりければ、結城の城を拔れし日、村雨を腰に佩て、辛く屯を殺脫つゝ、千葉に僑居を卜たるよし、父が自筆の古記錄あり。紛れあるべうも候はず。といへば定正うち頷きて、現村雨の大刀の事は、予も豫

あらず。當下某おもふやう、世に千里の馬ありといふとも、よくこれを知る伯樂なければ、生涯田畝に糞ふのみ。連城の璧ありといふとも、よくこれを識る卞和なければ、瓦礫と共に碌碌たり。今わが企望の三諸侯は、みな千乘の君にして、只一口の大刀を得識らず、いかでか賢と不肖を擇て、擧用るものならんや。大約かゝる暗君には、わがこの刀を售ぬもよし。扇谷なる管領家は、賢に親み、不能を愍み、寛きこと海のごとくて、容給はずといふことなく、篤きこと地に異ならで、載給はずといふことなし。當今無雙の名將なりとぞ、世人はをさ／＼いふなる。彼君は今上野なる、白井に在城し給へば、路の程なほ遠くとも、彼處へ參らばこの名刀の、價を倍して買せ給はん。さはとて踵を旋らして、おん跡を慕ひつゝ、きのふこの地に來たれども、こゝにも相識絕てなければ、申入るゝよすがもあらず。砥澤に山獵し給ふよし、市中の風聞隱れなければ、歸城の折を候ふて、見參に入らばやとて、漫に虎威を犯したる、不敬の罪を宥られて、これらの事の趣を、聞えあけ給はらば、こよなきおのが幸ひならん。と憚る所もなく答たる、辯舌流るゝ水のごとく、一癖あるべき面魂に、見るもの聞くもの目を指しつゝ、適雄々しき人骨やとて、嘆賞せぬはなかりけり。そが中に眞弘は、そのいふよしを聞果て、舊の處へかへり來つ、則縡の趣を、云々と報まうせば、定正しば／＼頷きて、馬より

第五輯　卷之三

第四十五回

名刀を賣弄して道節怨を復す
窮寇を追失ふて助友敵を換ふ

却說樹下なる浮浪人は、騒ぎたる氣色もなく、松枝十郎眞弘にうち對て、某は下總なる、千葉の福草村の浮浪人、大出太郎といふもの也。父ははやく世を去りつ、母は明先て年來になれり。親ひとり子ひとりなる、寒家は孝養藥餌の、料足さへ竭てせんすべなし。纔に殘るものとては、この一口の大刀になん。祖父より某まで、既に三世の重寶なれば、身にしもかえじと思ふ物から、親の爲には惜むも要なし。美價を得ば售んとて、まづ千葉殿(名は胤康)に見せまゐらせしに、彼君眼豆のごとくて、眞玉も石も、得辨ねばや、贋物也とて、返されたり。かくてもなほ懲ずまに、滸我の御所に參りつゝ、親の爲なる願事を、聞えあげんと欲するに、人に紹介せられしならねば、左右人等疑ふて、綷いよ〱整はず、再び望を失ひつゝ、又鎌倉へ赴きて、山内の管領家へ、售らばやと思ひしに、彼御內にも相識なければ、誰とて汲引するもの

て、緒を解く笠を背のかたへ、一間許投退けて、初て面を顯したり。そのとき人僉睛を斜にして、遠近齊一これを望るに、年齢は二十といふて、なほ一二三には過べからず、面色白して髭鬚青かり。眉は秀て、遠山の如く、眼は朗にして、雙星に似たり。隆準丹脣、これこの一個の好男子、月額の迹、延黒みて、贜蠹の額を揆ふ歟と疑はる。容儀堂々、神表凜々、庸人ならずぞ見えたりける。畢竟この人定正に近づきて、又甚麼なる説話かある。そは次の巻に、解分るを見て知らん。

人は果敢々々しく、見かへりもせで、冷笑ひ、噫咻や、あながまや。燕雀那ぞ大鵬の、志を知るよしあらん。管領はいと貴き歟。現汝達の主なれば、貴きことに思ふなるべし。しかれども兩管領は、許我殿の舊老黨、京都將軍の家臣なり。貴きは將軍ばかり、世に貴きものはなし。しかれども、なほこの上に天子ゐませり、天子は無上至尊なれども、なほその上に宗廟在す。宗廟は是萬物の父母、天津日月の神になん。われは浮浪の武士なれば、主もなく家隷もなし。管領われに恩德あらば、貴くも思ふべし。管領われに德なくば、われはわが世を渡らんのみ。こゝらの街道狹きにあらず。只是一個の浮浪人が、この樹下に憩ひしとて、路の障になるものかは、僻事すな。と叱回して、ひとりごつこと初の如く、いよ〳〵高く呼れば、雜色等はます〳〵怒りて、大膽不敵の癖者かな。いふよし聞ずは縛ん。打よ仆せよ。と敦圍て、立かゝりたる三方より。なほ懲さんと競ふ程に、定正間近く馬を進めて、騷しや何事ぞ。彼鎭めよ。と制させて、鐙際に從ふたる、松枝十郎を見かへりて、云々と仰すれば、十郎はこゝろ得果て、其樹下に赴きつゝ、浮浪人にうち對ひて、其許は元來何處の人ぞや。かしこくも管領家の、みづから問せ給はんとて、おん使を立られたり。かくいふは御內の近臣、松枝十郎貞正也。誘々、おん前に參り候へ。とく〳〵。と急せば、浮浪人は阿と應て、拿たる刀を遽しく、腰刀に挿添




定正途に近習をもて貴劒の人を向しむ

馴松に月と銜を、銀の磨白にしたる鞍、四方差明く皆具して、紫の靮搔繰つゝ、馬上優に歩行せたり。相從ふ近臣は、巨田薪六郎助友、竈門三寶平五行、妻有六郎之通、松枝十郎貞正等、從類凡三十五名、外樣の若黨五十餘名、又弓箭鳥銃を肩にせし、雜色奴隸に至ては、毛舉るに遑あらず。夥の列卒に、野猪鹿など、くさ〳〵の獲物を扛擔したる、前驅後從の目ざましく、五町あまり續きけり。旣にして定正主從は、はや白井の城までは、二十町に足らぬ道の程の、並松原を過る折、と見れば一個の武士の浪人、皂蛇皮絹の單衣の、申時ばかりなるを被て、編笠をふかくしたれば、年の齡は定かならず。道のゆくての左のかたなる、年ふりたる松の下の、葛石に尻をかけて、右手に拿たる一口の大刀を、やをら膝に推立つゝ、忽地聲をふり立て、世に千里の馬なきにあらず、只これを知る伯樂なきのみ。今も鏌邪が劒なきにあらず、只これを知る良將なきのみ。惜かな、わかこの名刀。屠兒の肉俎に乘せられずは、農婦に鍋の炭を搔れん。恨むべし〳〵。とくり返し、又くりかへして、頻にひとりごちたりける。前走の雜色兩三人、うち見て軈て立よりて、こは奇怪なり、何人ぞ。知らずや管領の狩倉より、日今還らせ給ふなる、おん馬前に程近きに、笠をも脫ず、尻さへかけて、手に刀を拿たるは、禮儀に疎き白徒也。とく〳〵笠を脫捨て、ついゐて拜み奉らずや。と齊一吐懲らせども、浮浪

はるに、眼鏡を採て直下せども、遂にその甲斐なかりけり。當下信乃は沈吟じて、遠眼鏡もて見し人に、追著んと欲するとも、この處より總門まで、一里四町ありと歟いへば、飛鳥なりとも及ぶべからず。きのふ巷の風聲を聞たりしに、管領扇谷定正ぬしは、近屬當國に退居して、白井に在城し給ふといへり。彼道節は兩管領を、狙撃んと欲するならずや。しからんには渠も亦こゝらわたりを徘徊して隙を窺ひ、時を得ば、君父の怨を復さん、と謀ることなからずやは。これ彼をもて推量るに、犬川生が見たる武士は、道節なること疑ひなし。誘給へ、下向して、白井の邊に趣かば、萬に一ッ彼人に、環あふこともあるべし。とく〳〵。と急せば、莊助現八小文吾は、一議に及ばず同意して、聶きつ、又頷きつ、うちつれ立て足引の、山本見えてなほ遠き、千々の石階落すが如く、足に信して下向せり。不題、管領扇谷修理大夫定正は、近屬山内顯定と不和なるにより、猛に鎌倉を退きて、上野白井に在城す。當國より信濃越後まで、定正の采地なれば、をさ〳〵人馬を調煉して、不虞に備ん爲なるべし。これにより定正は、きのふ五日の早旦より、砥澤の山に狩競して、明る六日の申の比に、白井の城に回旋す。定正その日の打扮は、紋紗の狩衣に、精好の袴、豹皮の行縢穿て、金作の大刀に、虎皮の尻鞘したるを腰に跨へ、八分反の武者笠を戴きて、奧州驪の、太逞き馬に、紅の厚總掛て、磯

ば、萬尋の青壁は、凸凹としてなほ遙なり。空洞たる幽谷を、兢々として直下せば、千仞の緑苔は、穹窅として瞑眩く。葛藤の挂る處、人迹罕に及び、荊棘の繊る所、鳥路纔に通ふ。その奇その妙、面あたり、目に見、耳に聞く物から、夢に似て、夢にもあらず、現にして、現ならじ、とわれなほわれを疑へり。巨細に是を賦せんとて、左思が十年の苦を積とも、いかでか拙毫に及ん。目今こゝに說出せるは、是明月の前にして、片玉を採る類なるべし。斯有しかば四犬士は、この靈場を巡禮して、或は躋り、或は躓り、隈なく遊觀する程に、その日も未下刻になりつ。よりて中嶽の邊なる、茶店に霎時尻をかけて、疲れし足を休るに、この茶店に遠眼鏡あり。麓のかたに推向て、臺に居たる儘にして、放に客に貸めり。莊助は戲れに、遠眼鏡を引よして、山間遙に直下せば、毎には見えぬ麓路まで、いと鮮明に見えてけり。浩處に、藺織笠を戴たる一個の武士、總門のこなたなる、溪川の橋をあなたざまに、うちわたりつゝ邁ありけり。心ともなくなほよく見るに、圖らず後方を見かへりて、本社のかたをうち仰ぎたる、面影は笠の隙ながら、犬山道節に似たりけり。こはいかに、とばかりに、瞬もせず目送るに、はや總門の外に出て、往方もしらずなりにけり。遺憾きこと限りもなければ、只顧に嘆息しつゝ、信乃現八小文吾等に、云々と密語ば、三士も俱に嘆息して、もし返るや、とかはるが

乃莊助現八小文吾は、次の日旅宿を夙に起て、笠深くしてゆく程に、さしも急ぬ旅なれば、世を潜ぶ身もさすがにて、名所を咨ね、山水を見て、一宿二宿と日を彌りつゝ、おなじ月の初の六日、上野國甘樂郡、白雲山、明巍の神社に參詣す(明巍、今は妙義に作る)、若夫明巍山は、白井城の北隅に在り。其西北のかたは、碓氷郡を背にして、同郡の荒芽山と、南北に相對へり。僧正尊意の所開、南朝名臣の隱るゝ所、歷々として古蹟存焉。千年成阪蹬は、二十有八層より、百六十層なるもの、四阪五阪升降す。深谷の地を帶れる、崖岸の狀を見かへれば、鑿もて穿なせるが如く、高嶺の天に橫たふ、崗巒の勢をうち仰げば、刀して削れるに似たり。煙霞の子細なる、泉石の分明なる、實に天上の靈奇にして、人間の妙絕也。その神殿攝社を咨へば、地主神を波古曾と號け、本社を妙義權現と唱ふ。隨身、仁王、總門あり。神明宮、日本武、天滿宮、稻荷神社、辨才天、飯綱不動、觀音、聖天、大黑天、金毘羅、人麿の禿倉あり。本地、神樂、護摩の三堂、繪馬掛の四阿あり。香水、及菅公の硯水あり。枚舉るに遑あらず。神殿佛堂上久て、戰國澆季の世といへども、亂妨の兇徒あることなし。又その名蹤奇峯を問へば、仙人瀧、大黑嵓、地藏岳、塞河原、阿彌陀岳、大日岳、彎反嵓、金剛峯、釋迦岳、天狗岳、天蠋峰、高巃巖、五臺峰、金玉峯あり。俗にこの邊を奧院といふ。險峻たる靈嶽を、仰眇として向上れ

しば〳〵勸めしごとく、和殿は行德へ還り給へ。假初に送り來て、はや九日になりにたり。家尊の大人も妙眞も、さぞ待わびてあらんずらん。加旃前諾せし、丶大道德と蜑崎生に、約を違るに似て快からず。犬川生を拯ひ得たれば、遺憾きこともあらじ。還り給へ。と促せば、莊助も亦意を演て、倶に歸鄕を勸るに、小文吾いまだ從はず。いはるゝ趣よしあれども、行德は無異にして、こゝはなほ安からず、荒芽山まで送りゆきて、しかして後に袂を分ん。世の鄙語にも、佛を作ることは易く、魂を容るゝことは、最難しといふにあらずや。始ありて終なくは、よに大丈夫とすべからず。猎平が云々と、いひつることもあるものを、荒芽山の光景は、いかならんとも見果ずして、この處より歸去らば、彼佛を作れども、魂を容ぬに似たり。再な勸め給ひそ。と思ひ入て推辭しかば、信乃等も遂にせんすべなくて、聽てその意に任しけり。かく果しなき長談に、秋の日影の傾くを覺ず、下晡になりしかば、四犬士は又商量して、縱浮世をしのぶとも、この深山に露宿せば、猛獸毒蛇の愁もあらん歟。今宵は桶川に宿投るべし。さはとて齊一身を起して、又神垣をぞ伏拜む。別雷の名にし負ば、武運は甘雨の降るごとく、武名は雷霆の響くごとく、隈なく天の下にしも、播さし給ひね。とおの〳〵霎時默禱して、又彼の木果を拾ひつゝ、飽まで腹にみつ栗の、中の細道踏わきて、桶川の鄕へ下りけり。却說信

ば、そを乞て腰にせん。こは古人髑髏盃の、獍猛に勝れることあり。いざ〳〵。と勸れば、額藏は辭ずして、兩刀倶に換てけり。現八これを見かへりて、人義を以これに贈れば、人又義をもて必酬ふ。犬田生の牽出物は、犬塚より犬川と、三傳して舊に返れり。世の人は只眼前の、利にのみ走りて義に疎かり。こゝをもて酒食の友のみ。生涯信友に遭ぬなるべし。今三刀の奇遇を見ても、その宿因の深きを知れり。傳へて子孫の美談とせん。いとめでたし〳〵。と頻に稱贊したりしかば、額藏いよ〳〵歡びて、某諸賢の助によりて、萬死を復せしのみならず、けふよりして小厮の苦役を、免るゝことを得たり。むかし總角なりし比、竊に犬塚ぬしと謀りて、名字を莊助義任と改たれども、主の莊官に憚て、世には披露せざりし也。今はからずもわが父の、像見の兩刀を惠れたれば、額藏を改て、犬川莊助義任と呼給ひね。額藏とは莊官の、漫に名づけし字也。今さらおもへば、不祥の義あり。額は則比太飛と訓り。額は顯すものなるに、額藏と熟すれば、額藏るゝと訓をもて、世を潛ぶ貌あり。又死人の幎目に似たり。果して不測の罪を得て、世をしのぶこそうたてけれ。さは莊助の莊にして、助あるにますことなし。改名の趣意かくの如し。といへば、衆皆諾ひて、しかるべし。と應つゝ、この日よりして額藏を、莊助とぞ稱しける。商量既に果しかば、信乃現八は共侶に、小文吾にうち對ひて、曩にも

禍も三年俟ば、福になるといへり。そは塞翁の故事なるべし。一昨歳の秋の比、某が識れる賈人、その兩刀を携來て、こは捨賣にしたりとも、三十金にはなるべけれども、只今火急の要用あれば、價十五金を給はるべし。しからば進らせんといへり。見るにいと〳〵欲しければ、いはるゝ隨に買とりて、親文五兵衛に告しかば、聞も訖らず眼を睜りて、わが家初は武士なりけれども、今市廛に世を渡れば、汝も町人の子ならずや。さるをその身に要なき物に、十五金を費す事、いと愚なるわざにこそ。舊へ返せ、と叱られしを、なほいと惜みて祕おきつ、いぬる比犬塚ぬしに、初見參の牽出物とて、そが儘贈たりけるに、豈思はんやその兩刀は、犬川ぬしの家尊の大人の、像見の名物ならんとは。これ禍も三年俟ば、福になるといふ、世話に相似て面目あり。いと歡しく候。とその傳來をとき諦せば、額藏はます〳〵感じて、しからんには犬田犬塚、兩友の貺なり。有がたきまで辱し。世になき父と今こゝに、相見る心地に候。といひつゝ瞼をしばたゝけば、信乃は叉腰なる大刀を、やをら右手に拔取て、犬川生犬川生、この大刀とてもわが物ならず、社平が大刀と換給へ。桐一文字を惠れたれば、一刀にして事足れども、和殿のこゝろを休る爲也。武者の戰場に敵を撃たる、分捕の劍戟を、その子孫に傳れば、子孫以面目とす。某社平を撃ざれども、五倍二とその惡等き、渠も讐敵の半雙なれ

腰刀を贈りにければ、額藏は受とりて、見つゝ眉根をうちよせて、某六七歳なりしとき、傳聞たる事こそあれ。この表裝を見て推量るに、無銘なれども左字字に似て、刀尖に玼は候はずや。大刀も無銘に候はずや。と問れて信乃は訝しげに、そをいかにして知られけん。いはるゝ如く些の玼あり。兩刀ともに無銘にこそ。といへば額藏歡びて、扠も不思議の事になん。某が亡父犬川衞二が、年來祕藏の兩刀あり。鞘は云々、靶は云々、無銘なれども左文字なりき、と母の折々說示されしを、小耳に挾みて忘るゝことなし。しかるに今この腰刀を見れば、父の遺刀に彷彿たり。雪篠は家の定紋、刀尖些缺たるは、わが父嘗山獵を好みつ、一日矢傷野猪を刺留しに、刀尖餘りて側の石に、刺かすらしたりければ、そこらに玼はいで來たり。爾後父は堀越殿(足利政知をいふ)の、嬖政多慾を諫めかねて、忽地自殺しつるとき、彼兩刀は沒却せられき。何人の手に落たりけん、往方もしらずなりしとぞ、母はをり〳〵いひもて出て、うち歎き給ひしも、今は昔になりにしを、こゝに憶はずわが父の、遺刀を見れば、歡しく、又哀しさも一しほませり。犬田ぬしはこの兩刀を、何人より買とりて、犬塚ぬしに贈給ひし。奇なり奇なり。と感涙を、拭ひもあへず嘆賞す。信乃現八小文吾は、又この奇遇に感佩して、耳を傾け、目を拓しつゝ、齊一讃嘆したりける。そが中に小文吾は、小膝を擽とうち鳴らして、俗に

この腰刀はいぬる比、栗橋の宿りにて、竊に和君に見せまゐらせし、桐一文字の名刀也。いぬる六月十九日の夜、簸上宮六を撃留て、五倍二に痍を負せしは、この腰刀をもつてせり。某因徒となりし比、社平が掠奪たるならん。かくて又循環りて、某が手に落し事、亦是一奇といひつべし。しかれどもこの桐一文字は、和君の祖父匠作ぬし、先祖相傳の名刀也とて、亀篠どのに授給ひし、來歴は云々と、定かに聞ることあれば、和君の爲には茂陵の千金、これにますもの何かあらん。某はなほ社平が大刀あり、一口にして事足れり。彼村雨の名刀は、道節が手に落たれば、今請復すによしもなし。是を和君に讓まつらん、藏め給へ。とさしよすれば、信乃は欣然として、左右の手に、受取て、と見かう見つ、義なるかな犬川生、わが伯母附屬の刃をもて、當座に仇を撃しこそ、いと羨むべき績なれ。某滸我にて危難の折、大刀を喪ふのみならず、腰刀をさへ打折たれば、行徳へ著し日は、腰に寸鐵を帶ざりしを、犬田生がこゝろありて、所藏の兩刀を贈り給ひき。きのふ五倍二を撃留て、銳鈍を試しに、現拔群の銳刃なり。鞘は金の臥龍にして、甑も又紫金魚子に、金の雪篠を置たるもの、兩刀の表裝一對也。既にこの兩刀あれば、事足て候へども、桐一文字は先祖の重寶、有繫に捨がたき思ひあり、厚意に任してこの腰刀と、相換て腰に帶べし。まづはやこれを進らせん、納め給へ。と正首に、わが

列に入ることかなはず。しかれども房八は、その子に犬江親兵衛あり。只猪平が任侠は、因縁悟易からず、且力二郎尺八は、勇悍の壯佼なるに、惜しや陣歿したらん歟。彼等は三人命に換て、頼むといひしは何事やらん。これらはいよ〳〵解しがたし。犬塚ぬしはいかにぞや。と問れて信乃はうち頷き、某もしかおもふのみ。猪平が所望のすぢは、曉知るよしなけれども、倩と思惟るに、渠は本姓姥雪也。舊名は世四郎、と呼れたりとみづからいへり。某が畜犬の、その足四白なるをもて、與四郎と名けし事あり。彼と此と同訓也。又世の常言に、雪は犬の姨と歟いへり。その氏の姥雪なるは、亦是犬に縁あるならずや。且力二の兩字を轉倒すれば、便是方となる。又尺の字のへを上にすれば、便是戸の字なり。又これを全聚すれば、房の字となるにあらずや。さて尺八の八の字を、房の上に冠らすれば、八房の二字となる。強牽傅會に似たれども、亦是犬に縁あるならずや。後にかならず因縁の、定かにしるゝ事あるべし。今の急務にあらざれば、且く度外に措ねといふ、意外に出し妙論に、小文吾はさら也、額藏も現八も、只管に感服して、その才幹をぞ稱ける。かくて又額藏は、腰刀を右手にとりて、これを信乃に示していふやう、きのふ庚申塚のほとりにて、犬飼生の精悍しく、社平が兩刀を分捕して、某に貺りにき。そは紛紊の折なれば、さしも心つかざりしを、今朝はじめてよく見るに、

にて事足りてん。こは彼義女の爲にして、古人寒食足下の微意也。奸佞人等に謀られて、亡ひし村雨の大刀よりも、彼犬山道節こそ、なほなつかしきものなりけれ。渠はこの玉の、皮肉の間にありしかば、その身はこれをしらずとも、その姓氏の犬山なる、且この忠の字の玉ありて、名さへ忠興と稱すといへば、犬士たる事疑ひなし。しかおもへども環あふ、時をいつとも期しがたし。これもほゐなき事なりき。といひつゝ吒む感涙を、歛かねたるこゝろの誠に、小文吾も現八も、爲に貌を改めて、倶に感嘆したりける。且して現八は、額藏にうち對ひて、某が實父糠助は、和殿にも疎からざりし、と犬塚生に傳聞たり。某ははからずも、實父の名を知のみならず、はじめてその墓を祭しは、犬塚生の恩信によれり。然れば犬田共侶に、同盟の義を以、和殿の母前の墳塋所、行婦塚を祭りし事も、兩三度に及びたり。これによりて再おもふに、彼犬山道節も、過世の兄弟なるべきに、今は往方をしらずといふとも、環あふ日のなからずやは。といへば小文吾も又いふやう、凡同因果の六犬士は、おの〳〵親同胞あり。出生の地も同じからねど、その氣、倶に相通じて、眞の同胞にもますことあるべし。さるにより犬川生は、玉を道節と相換て、なほその玉の奇特あり。同根同氣の感ずる所、これをもて徴とせば、又何をか疑んや。只山林房八と、猾平等の三四の義士は、おの〳〵因果に深淺ある歟。犬士の

資し事、大約事の顚末を、曲に告て又いふやう、某禁獄せられし日、水火の苛責、痛楚に勝ず、心地死ぬべうおぼえしとき、この玉を口に含めば、快然としてその氣力、生平より壯になりぬ。又この玉をもて身を捺れば、杖瘡立地に愈て、その痕だにもなくなりぬ。この故に町進等は、法術ある歟と疑へり。これ亦奇妙といひつべし。これ見給へ。と遽しく、髻の中に藏したる、玉をとう出て示せしかば、信乃現八小文吾は、共侶にこれを見て、嘆賞聲を合しけり。當下信乃は泫然たる、瞼を思はずしばたゝきて、いかなれば吾黨に、有緣の婦人は悉、薄命かくのごとくなるや。伏姬うへは凡人ならず、權者の後身ともいふべき歟。しかれども、その終焉の爲體を、傳聞くだにいと痛まし。且阿沼藺といひ、濱路といひ、才貌節義の世に捷れしも、廿歳のうへを超ずして、皆これ非命に終を取れり。不幸これより甚しきはなし。且濱路が眞の親は、煉馬家の一老臣、犬山道策ならんには、その素生も賤しからず。某曾彼女子の、繆致十二分の趣ありて、嬋娟なりしを惜むにあらず。只その節義に勇猛なる、婚姻その期に及ばねば、一夜の情も被ざりし、某が爲に節を守りて、百年の命を捨し、心操を悼むのみ。幸にして犬川生、その宵、彼山路を過らずは、誰か最後の爲體を、認てわれに報知せん。某諸賢の資によりて、名を揚家を興すとも、又正妻を娶るべからず。子孫の爲に已ことなくは、妾のみ

也。とく〳〵納め給はずや。と諭されて額藏は、遂にその意に任したる、沙金を懷に挾つゝ、思はずも嘆息して、現只今いはるゝごとく、玉の文字によりて思ふに、我等と過世似たるもの、八人あるべきことになん。犬江氏の子とともに、既にして五人也。就て又一奇談あり。曩に某はからずも、圓塚山のほとりにて、一個の犬士に撞見たり。その故は如此々々。と信乃に栗橋にて別れし日、千住より日の暮れしかば、思はず路をとり謬て、圓塚山を過る折、左母二郎が村雨の刀をもて、濱路を殺す條より、犬山道節忠與が、左母二郎を砍倒して、濱路と名告合し事、且濱路は道節が妹なりし事、その父の事、母の事、濱路が節義、道節が孤忠、一五一十を竊聞せし事の趣、又道節は、村雨の刀をもて、亡君煉馬倍盛の仇、管領扇谷定正を、狙撃んと思ふにより、濱路が需に應ぜざりし事、濱路はそが儘息絶しを、道節が火葬せし事、綷果て額藏は、村雨の大刀をとり復さんとて、道節と挑戰ひし折、守護袋を道節が刀の鞘にからまして、遂に渠に取られし事、又道節が肩なる瘤を、一ト撃と砍しとき、金瘡口より飛散る玉の、怪しくもわが手に入りて、これ彼玉をとり換たる、その玉には忠の字ある事、道節は火遁の術をもて、竟に逃れ去りし事、爾後額藏は、左母二郎が首を、木の杪に斬梟て、云々と書遺せしは、濱路が爲に人の猜疑を、あらせじとてのわざなりしに、これによりて町進等が憯酷を

又いふやう、某行徳にありし日は、舊里の凶變を、夢にだも知らざれば、竊に和殿に對面して、事の趣を報んとて、犬飼生共侶に、船もて犬田に送られて、神宮の岸に著し折、漁者猾平に呼留られて、はじめてわが伯母夫婦の横死と、和殿の忠勇、非法の禁獄、詳に傳へ聞たり。これにより、犬飼犬田と密談して、瀧野川なる辨天堂に、七日許參籠して、云々と謀りつゝ、遂に和殿を拯ひ得たり。加旃、猾平尺八力二郎とやらんが援あり。既にして恙なく、四友面を接せし事、歡び何物かこれにますべき。こは里見殿よりして、徵聘の沙金也。蟇崎生の懇意の隨に、某且く預りおきつ、受納め給ひね。といひかけて懐なる、財布を搜て一包の、沙金をとう出て遞與になん、額藏は謹て、受いたゞきて、左右なく納めず。某いまだ里見殿に、一介の功もなし。和君達こそ屬日より、某が故をもて、纏腰の費多からめ。是よりの後進退は、和君達と共にすなるに、財を分んことは本意にあらず。こはこの儘に犬塚ぬし、なほ預りてたびねかし。と推辭ば信乃は頭を掉て、刎頸の交りは、迭に介意あるべがらず。某も和殿の爲に、蟇崎生に辭ひしかども、云々の議によりて、已ことを得ず諾ひたり。その功なきは皆おなじ。和殿に賜し物なるを、われいつまでか預措べき。この後纏腰乏しくならば、迭に相資んのみ、財を分つといふよしあらんや。曩に彼殿の徵聘を、且く固辭奉りしは、同盟全からねば

けり。當下額藏は、恭しく貌を改めて、きのふは事の慌しくて、曲に歡びを演得ざりき。こゝは人迹稀なれば、密談に究竟なり。いでや胸臆を盡すべし。犬塚ぬしは何等の故に、滸我に留り給はざる。況犬田犬飼の、兩友をさへ相伴て、某が必死の厄を、拯ひ給ひし爲體、不思議といふもあまりあり。つや〳〵思ひ得がたくこそ。といはれて信乃は含笑て、しかおもはるゝは理り也。某も亦滸我にして、免れがたき大厄あり。この故に下總なる、行德に流浪つ、ふたゝび危かりけるを、幸にして三四の豪傑、身命を擲て、遂に窮阨を釋れたり。その故は箇樣々々。と彼村雨の刀の失せし事、又現八と組撃して、滾て船に落たる事、文吾兵衛と小文吾が事、妙眞、房八夫婦が事、大八の犬江親兵衛が事、、大法師と蜑崎照文等が事、伏姫の緣故、珠數の事、八房の犬の事、すべて安房の里見に宿因ある、その槩略をとき示せば、現八小文吾も迭代に、その漏たるを補ひけり。額藏は聞く每に、駭然としてうち驚き、潸然としてうち歎く。房八が義烈はさら也、親兵衛が幼稚して、犬士の一人たるを喜して、いとなつかしく思ふにも、文五兵衛妙眞等が、心操の大かたならぬを、嘆賞して聲を斷ず。且、大が二十餘年の行脚の勤苦、又照文は母の爲に、從弟照武が子なりし事、その宿緣を感悟して、哀歡交みづから禁ぜず。いはんや亦現八小文吾が孝順義勇を眷愛して、いよゝ骨肉の如く思へり。そのとき信乃は

と見れば、いまだ名をだにしらぬ、高山の半腹に來にけり。軈て巓に登りつゝ、東細帶の間よりして、西北の方を直下せば、寂たる人煙逈に見えけり。なほ彼此と徘徊するに、山に荒たる神社ありて華表に掲し扁額に、雷電神社といふ四大字は、なほ定かにぞ讀れたる。信乃はつくづくと瞻仰て、諸賢はいまだ思ひ得ずや。こゝは栖川の東南なる、雷電山に疑ひなし。彼方に見ゆる人煙は、是栖川の鄕なるべし。きのふは思ひがけなくも、庚申塚のこなたにて、神雷の落かゝりて、夥の追兵を拉れしは、世に稀なるべき天恩也。かくて昨夕は途に迷ふて、今はからずも雷電の社頭にして天の明しは、因あり緣あり、奇ならずや。といふに有理と額藏等、三士も齊一瞻仰つ、且感じ且尊みて、石滴を掬ぶ朝淨水、おの／＼社壇に額づきて、倶に祈念を凝しけり。且して四犬士は、樹下に退きて、又彼此と見わたすに、神社の背に棗樹多かり。茱萸楊梅も少からぬに、みなよく熟して、半は落たり。軈て棗と茱萸を採て飢に充るに、甘きこと凡常に過ぎたり。忽地に疲勞を忘れて、心地淸々しくならぬはなし。山腹はおのづから、朝日の影遅ければ、樵夫牧童にだもなほ遭ず。鳥は綠樹に隱れて、聲いよ／＼高く、雲は靑巒に起りて、逌いまだ定らず。現靜けきは、山の德なり。名山靈峰いづれはあれど、時にとりての佳境かな、と皆共侶に嘆賞して、或は石に尻をかけ、或は朽幹に身を倚て、迭に相譚ひ慰め

人の返るにあらず、勇士を援る爲にもならず、猪平が俺們に、いひ遺せしよしを思ふに、荒芽山まで赴かば、恩に答るよすがもあるべし。誘給へ人々よ。通宵走りて無異に料らん。とくとく。と誘ひ立れば、現八も亦小文吾も、寔に然也と頷きたる、そが中に額藏は、遙に信乃を見かへりて、彼樊噲が、大功は、細謹を顧ず、大禮は小讓を、辭せずと歟いひしをおもへば、猪平が入水、勇士のうへは、尤惜むに勝たれども、水を隔ていたづらに、うち歎きしは、われもげに、女々しかりき。と相愧て、現八小文吾共侶に、うちつれ立て野干玉の、闇にしあれど猶も世を、しのぶに似たる岩しろの、蕨のかたに赴きけり。

第四十四回

雷電の社頭に四儔會話す
白井の郊外に孤忠讐を窺ふ

走るものは、路を擇まず、貧きものは、妻を擇まず、餓たるものは、食を擇まず、寒きものは、衣を擇まず。その時と勢ひと、人情すべてかくの如し。さる程に、信乃額藏現八小文吾等は、上野信濃を心當に、その終夜間道より、只管に走れども、比は七月初の二日、黑白も別ぬ烏夜にしあれば、邁こと五里許にして、忽地山路に迷ひ入りつゝ、とかくする程に、天は明たり。

も定かにしらるべし。今刀禰們を渡しつゝ、追兵を禦留たれば、われは神宮へ還りがたし。況彼壯佼等を、先亡ることあらば、誰を便著に立潛びて、餘命を何處に貪るべき。けふを限りの浮世ぞ、と豫て覺期を究めたり。然はこの船をこゝらに流さば、刀禰們の又渡し給はん、さらずは敵にとられやせん。船もろ共に身を淪て、赤心を顯すべし。さらば〱。といひかけて、はや河中へ漕出せば、四犬士は是をうち聞て、且感じ、且驚く、水際に足を翹て、やよ等給へ矠平叟。いはるゝ趣理りなれども、叟等三人を見つゝ死して、何地へか落らるべき。なほいふことあり。その船を、枉て且くよせてよ。と異口同音に呼禁れども、矠平は應もせで、河中遙に漕退けつ、豫て准備をしたりける、船底の栓を引拔捨れば、船は底より水入りて、人を乘せつゝ忽地に、波の下にぞ沈みける。四犬士は泫然と、見る目屆かぬ薄暮に、戰ぐ蘆の葉さはがしき、前面は修羅の大刀音矢叫び、よせてはかへす河風に、澳より黎む宵闇の、其處ともわかずなりにけり。かゝりしかども四犬士は、捨て走るに忍びずして、なほ悵然と立在しを、信乃はやうやく思ひかへしつ、忽地に聲を獎して、時なるかな命なるかも。必死を極めし俺們は兩三度危窮を脫れて、思ひがけなき矠平は、この河中に投て死せり。且兩勇士の存亡も、目今思ひ定めがたし。然ばとて云々に、この小節にかゝづらひて、河原に立て曉すとも、死したる

士なり。事情は叟こそしらめ、いと訝しく候。といへば猪平微笑て、彼等は曩に告たりし、川二郎尺八也。小人既に老たれば、けふの副に相譚にき。血氣に早るものどもなるに、豊嶋煉馬兩家の爲に、怨を復さんと思ふこゝろあれば、大塚の陣番等をさへ憎むこと甚し。よりて異議なく同意して、彼等は蘆原に躱てをり、機に臨み變に應じて、町進を撃捕たり。といふに信乃等は驚きて、しからば又彼兩勇士も、命を惜まで難に代る、我等が爲に恩人也。しかも叟にはいと親き、族なりと歟聞たるに、もし陣歿せば悔とも甲斐なし。その殃危を他に讓りて、苟にも免るゝは、勇士のせざる所にして、俺們も亦これを恥。その船を疾よせ給へ。再舊の岸へ渡して、生るとも死するとも、安危を彼人々と共にせん。今さら躊躇ことかは。と言葉等しく急せば、猪平頭をうち掉て、否、この船を寄すべからず。義を見て勇むは刀禰們の、志なるべけれども、彼等が敵と戰ふは、刀禰們を落さん爲也。然るを再彼處へ渡して、倶に陣歿し給はば、此彼共にみな益なし。うたてやな壯佼共が、町進を撃捕なば、扠あるべきに深入して、遂に命を隕しやせん。匹夫の勇こそ是非なけれ。やよ、うち棄て落給へ。さばれ彼等も小人も、只俠氣を旨として、今刀禰們を救ふにあらず。世の豪傑と思ふにより、命に換て頼ん、と欲することのあれば也。そは委まるらせし、狀を音音に屆給はゞ、彼等がうへも、小人が、こゝろ

けん、裏缺までに至らねば、搔投捨てぞ進みける。猪平は一の箭を、既に射損じたりければ、只顧にこゝろ慌て、二の箭を刺んとする程に、忽然として一個の壯夫、水中より浮出て、町進が衿上へ、抓子棒を楚とうち被て、仰ざまに引落しつゝ、腰なる刀を拔出して、押へて首を取てけり。その水中の疾働きは、目ざましなッどいふばかりなし。かくて件の壯夫は、町進が馬を奪ふて、水中にて閃りとうち跨り、後れて渡さんとせし雜兵を、抓子棒を以引倒し、突流し推沈れば、敵は忽地辟易して、舊の岸へ逃登るを、追ひつゝ馬を乘上たり。かゝりけれども城兵等は、水に濡れしも陸なるも、衆皆岸に踏留りて、推捕籠てぞ攻たりける。當下蘆原のほとりより、又一個の暴夫、突然と顯れ出て、はや横鎗を入れしかば、城兵は開靡きて、亂騷ぐを、得たりや應、と長柄の鎗の刃頭尖く、敵伏せ、刺殺す、千變萬化の働きも、勇士は纔に兩人なり。城兵は既にはや、大將を撃れたれども、有繫に大勢なるをもて、退くもあり、進むもあり。嘯叫て戰ひけり。四犬士は北の岸に、この兩勇士の働きを、瞬もせず眺てをり。四士齊一感嘆して、水際近く船を歇し、猪平を呼かけて、亂たる世の習俗とて、弱を助けて、强を折く、俠氣のもののなきにあらねど、老人のごときは稀なるに、彼兩個の壯夫は何處いかなる人やらん、名をだにしらぬ俺們を、拯んとて歟、仇を殺して、なほ大敵と戰ふ光景、世に珍しき勇

敵に啖留られつべし。危かりし。と村膽の、心の誠をとき諦せば、信乃現八小文吾は、いよ〵ます〵感嘆して、猎平が任俠義胆を、額藏に告るになん、額藏も亦感佩して、その恩信をぞ歡びける。既にして船は稍、北の岸に著にければ、四犬士は曲々に、歡びを演るに暇なく、猎平を見かへりて、皆再會を契つゝ、軈て水際にをり立けり。爾程に町進は、士卒共侶に聲を揚て、頻に船を呼禁れども、舟人は聞ぬ態して、亦漕かへすべくもあらねば、鞍壺敲きて敦圉悍く、彼射て捕れ。と下知すれば、雜兵凡四五十名、おの〵岸に立並て、箭繼早に射被れども、その間遠ければ、箭は徒に水中に、落るとやがて流れけり。町進はこの光景に、ます〵怒罵りて、いひがひなき兵共かな。士卒を夥殘害して、死刑の囚徒を奪去る、虐賊等を擊漏しては、われも尤を脫れがたし。河幅はいと廣けれども、このわたりには淺瀨あり。われに續け。といひ被て、馬を颯と乘入るれば、早雄の士卒六七十名、僉後れじと渡しけり。しかれども夕立雨に、河上より落す水、おもふにまして高ければ、士卒は左右なく渡し得ず。或は弓をもて、流に杖つき、或は臂を連て相扶け、推流されじと喘ぐ程に、町進は只一騎、馬を河の中央まで、辛して進るを、猎平は遙に見て、遽しく船底より、弓箭を取出て、能彎固めて、矢聲をかけて丁と發せば、町進が乳のほとりへ、篦深にぐさと立とぞ見えし。札よき裹甲を被たり

けん、神速微妙の援にこそ。といへば矠平含笑て、しかおもはるゝは理り也。刀禰們はいぬる比、小人が宿所を辭し去りて、南を望て赴き給ひし、道の程心もとなさに、竊に迹を跟て適しに、刀禰們は杜岡の、ほとりに霎時憩ひ給ひき。その折の密談を、圖らずも竊聞しに、みな同盟の義によりて、額藏どのを拯んとて、死をだも辭せざる武勇謀略、瀧野川なる辨天堂を、旅宿にせんと相譚給ひし、その智その勇、大かたならぬ、儁傑達なりけり、といよ〳〵認て憑しく、又慕しさも一トしほまして、宿所に還りておもふやう、彼人々は額藏男を、拯とらんと謀るとも、城中の守禦嚴重なれば、獄舍に潛び近づきて、竊出さんことはかなふべからず。かゝればその刑罰の日、法場を劫して、奪ふて走らんとこそ謀るらめ。いづれも不敵の豪傑なれば、本意を遂んは必定なれども、其處より城へ遠からぬに、再て夥の追兵を出さば、寡は衆に敵しがたし。縦追兵を殺崩し、且くは走るとも、近屬この戸田河には、渡船稀なれば、こゝに至りて追詰られん。もしその折に拯ずは、可惜義士を殺しやせん、と思ひにければ密々に、瀧野川へ赴きて、その進止を窺ひつ、又大塚へ赴きて、刑罰の日を問定めつ。けふしも船を彼處によせて、刀禰們を俟たりしに、俄頃の雷雨に黑白を別ず、はや刀禰們はあちこちと、水際を徘徊し給ひけん、とも知らずして且くも、物を思はせしのみならず、今些遲かりせば、

こそよき黄昏にて、道のぬかりは躬方の幸ひ、備を亂さずうち寄せなば、奇を出して中を割らん。目ざす讐敵は丁田のみ。人馬の足を立させな。と迭に諫奨して、必死の覺期勇しく、近づく敵をまつ折から、誰とはしらず水際なる、繁き高蘆をおしわきて、

漕よする一葉の舟のなかりせば秋の川なみ誰かとはまし

かく歌ひつゝこなたの岸へ、はやくも船をよするものあり。四犬士これをみかへりて、彼も敵歟、と訝れば、簑笠著たる一個の舟人、遽しくさし招きて、刀禰們はやく乘給はずや。縱萬夫の勇ありとも、敵の多勢に比れば、なほ九牛の一毛なり。可惜命を捨んより、とく〳〵。と勸めたる、聲ざまは神宮なる、猾平に似てければ、信乃現八小文吾等は、その人なるをはや知りて、天の祐と霎時も猶豫せず、額藏共侶身を跳らして、船に閃りとうち乘れば、猾平は櫂をとり伸て、岸をはなれてゆく船を、返せや復せ。と呼かけたる、町進は眞先に、水際に馬を騎居て、鞭を抗つゝ招けども、猾平は耳にもかけず、船底より簑笠を、四ばかり取出して、四犬士に遞與していふやう、折から逆風なれば、いかばかりに漕とても、速にはこの船を、前面の岸へよせがたし。雨はやうやく霽たれども、敵の箭を禦ん爲也。とく〳〵めされ候へ。と懇に勸れば、信乃等はます〳〵歡びて、思ひがけなき猾平叟、吾黨のこの危窮を、いかにして知られ

楯に取て、身は濡ながら敵をまちしに、天雷の祐により、力をも用ひずして、夥の敵兵亡びにければ、是凡事にあらずとて、瀧野川と王子の神を、遙におがみ奉り、なほも武運を默禱して、齊一間道を走りつゝ、戸田川まで來にければ、雷は收り、雨も細りて、はや黄昏に近かりける。とく〳〵前向へ渡さんとて、彼此と見わたすに、戰國の習俗にて、領主の嚴禁あればにや、渡船絶てなし。況て雷雨に水陸の、人迹稀なる折にしあれば、便船せんにも船を見ず。いかにすべき、と皆氣を悶て、東へ走り、西へ赴き、おなじ河原を幾遍となく、往返に果しなかりけり。かゝりし程に町進は、隊兵百五六十名を將て、馬を飛して追蒐來つ、遙に聲をふり立て、虐徒惡黨走るとも、今は脫るゝに路あらんや。汝等種々の幻術もて、或は王子の神助に假托し、或は猛に雷雨を起して、夥の士卒を殺せばとて、われ亦非常の備あり。再度の追兵を遣したるも、なほ心もとなさに、時を移さず多勢を將て、みづからこゝに追詰たれば、袋の物を取るより易かり。みな手を束て縛を、とく〳〵受よ。と呼れば、その隊の士卒共聲合して、鬨を咄とぞ揚たりける。四犬士はこれを見て、河には舟なく、陸には敵あり。進退こゝに谷りぬ。刀の刃の績ん限り、わが命のあらん際り、思ひの隨に戰ふて、陣歿するより外にすべなし。命は是義によりて、鴻毛よりなほ輕し。同盟、同日同時に死なば、故ら願ふ所なり。折も

て、和殿を害することかなはず。彼等は還て竹鎗に、縫れて命を隕せしこそ、王子の神罰なるべけれ。曩に俺們相謀て、和殿を拯んと欲せしに、手長の器械なきにより、王子村のほとりなる、農家にて鬻ぐ、鎗と弓箭を買とりて、大敵を殺崩せり。今はしもこの地に要なし。はやく戸田河をうち渡して、鄰郡まで退くべし。誘給へ。と急せば、額藏ます〳〵感佩して、信乃現八等を先に立つゝ、西北のかたへ足ばやに、走去ること六七町、まだ十町には過ざりけり。浩處に大塚より、新隊の雜兵二三十人、塵埃を踢揚て追蒐來つ。こは嚮に逃去たる、奴隷等が城に還りて、云々と報しかば、町進驚きて、疾行の雜兵に、その癖者を擊留よとて、頻に下知を傳へしかば、僉鳥銃を携たり。既にして城兵等は、はや四犬士に近づきて、箭來程よくなる隨に、筒頭を揃へ、連掛て、火蓋を切らんとする折から、俄然として降そゝぐ、夕立の雨、繁を紊して、忽地火繩を滅たりける。城兵等は思ひがけなき、暴雨に度を失ふて、且く躑躅する程に、轟々然と鳴わたる、疾雷に電光して、雨なほ烈しかりければ、城兵はいよ〳〵騷ぎて、まづはや雨を避んとて、僉樹下に立寄たる、頂の上に霹靂て、天地に響く一聲の、雷火に震れて死するもの、いくばくといふ數をしらず。たま〳〵震死を脫れしも、共侶に氣絕して、おなじ枕に伏たりける。四犬士は再度の追捕に、脫れがたしと思ひしかば、四下の松を籠

て、縛の索釋捨れば、現八も亦引かへしつ、社平が兩刀を分捕して、額藏にぞ遞與ける。爾程に小文吾は、扗る若黨獄卒を、一人も漏さず刺伏て、菴八にもあちこちと、數个所の深痍を負しにければ、迯んとしつゝ走り得ず、矢庭に倒れて死でけり。物員ならぬ奴隷なンどは、いちはやく迯去て、手にあふ敵のなくなりしかば、小文吾も鎗を捨て、樹下に聚合ふ程に、信乃は額藏を勦りて、危かりし犬川生、わがうへ又人のうへは、一朝に說盡すべからず。こは滸我殿の御内人、犬飼見兵衛老人の養ひ子、和殿も豫て相識れる、古人糠助の實子なる、犬飼現八信道也。彼は下總の行德人、古那屋文五兵衛の長子なる、犬田小文吾悌順也。この兩友もわれに等しき、痣ありて、彼玉をもてり。さるによりて日來より、某を相助けて、こゝに和殿を拯れし、歡びこれにますものなし。と引見すれば額藏は、恭しく小膝をつきて、某何等の天福ありて歟、萬死を出て一生を、保つ幸ひのみならず、この儁傑達に、面を接せざりし日より、かくまで愛顧せられし事、倂犬塚ぬしの、鴻恩によるもの也。他日もし事あらば、身を殺して贖ふとも、なほ慊らず候。と歡びを述、義を美して、感涙坐に吒めば、現八小文吾慰めて、俺們も亦幸ひに、和殿と兄弟たるべき宿世あり。聊死力を盡せしは、素より義の仗る所にして、つやつや恩とすべきにあらず。社平、五倍二、菴八等が、残毒の竹鎗は、天理人望に違ふをも

り、首をわたせ。と呼留たる、聲に駭く菴八は、阿と魘て飛揚る、運歩取次に見かへれば、信乃現八に一齒増て、骨逞しく、色白く、肥膏づきたる大男、奉納牌を結下たる、王子の竹鎗閃して、透間もなく突立れば、菴八は遽しく、竹鎗をもて受つ拂ひつ、且く防戰ふ程に、菴八が若黨と、五六人の獄卒、おの〳〵應手物をうち振て、共侶に援來つ、繫倒さん、と競ひ蒐るを、小文吾は物ともせず、精神ます〳〵加りて、薙立駈立進みけり。その間に信乃現八は、拄る敵を思ひの隨に、八方へ擊散しつ。なほ菴八を擊んとて、驀直に走來る、前向に勃興と身を起すは、是五倍二と社平なり。この時われにかへりければ、肩に立たる箭を拔捨て、刀を晃りと拔連つゝ、寄ば砍らん、と立たるを、信乃現八は信と見て、望む讐敵ぞ、ござんなれ。漏しはせじ。と東西より、大喝一聲、譴て懸れば、社平は現八と刃をまじへ、五倍二は信乃を拄て、戰ひいまだ十合に至らず。五倍二は拿たる刃を、憂丁と卷落されて、驚賺て迯んとするを、脫しも遣らず背より、腹へ孔斜と刺貫く、鎗に縫れて轉つ輾つ、頻に悶苦しむを、そが儘地上に縫留て、今こそ復す伯母の仇、思ひしるや。と罵て、拔く手尖き太刀風に、首を撲地と擊落せば、社平はこれに舌を棹て、刃を引て逃走るを、現八透さず追詰て、敲伏せ、刺殺して、なほ逃まよふ夥兵等を、縱橫無礙に追拂ひつ。信乃ははやくも額藏を、樹上より扶下し

そけて簇々と、走り進まんとする程に、なほも射出す神箭に、皆紛々と射倒されて、右往左往に辟易す。周章勝ていふべからず。當下稻塚推倒して、顯れ出たる兩個の武士、東西齊一弓投捨て、准備の竹鎗搔取て、淸朗なる聲高らかに、荼毒の酷吏、騷ぎなせそ。額藏何等の罪かある。虎威を借て、刑罰を濫り、私怨によりて、忠義を凌虐す。是汝等が行ふ所、神は怒り、人は恨り。されば同盟の義に仗て、天に代て、塗炭を拯ひ、虎狼を獵て、人心を快くす。作麼俺們を何人とかする。本郡大塚の人氏、犬塚信乃戍孝、下總滸我の浪人、犬飼現八信道等、こゝにあり、こゝにあり。弓箭も鎗も、王子の神寶、今汝等が五毒の竹鎗、その身に出て、その身に返る。觀念せよ。と罵責て、鎗を捻て走蒐れば、菴八いよ〳〵駭騷ぎて、敵は箭種の竭たるぞ。彼とり籠て、撃仆せ。と胴聲烈しく呼れば、夥兵はこれに奬されて、手に〳〵棒をうち振て、逆進むを信乃現八は、もの〳〵しや。と右に受、左に拄て些も擬議せず、瞬間に五六人の、鳩尾中脘刺伏たり。菴八遙にこれを見て、敵は纔に兩人なれとも、猇雄當りがたければ、禦ぎもあへず額藏を、奪ひ去らるゝ事もやあらん。彼奴をはやく結果て、後やすくするこそよけれ。と腹裡に尋思しつ、遺たる竹鎗とり揚て、遽しく棟のほとりに、近づかんとする折から、忽地後方に人ありて、酷吏菴八且く等。犬塚犬飼同盟の一死友、犬田小文吾悌順こゝにあ


犬塚信乃
社平


法場を騒して三犬士
額蔵をまもる
額藏
犬飼現八

が如し。そのとき社平五倍二は、衣も袴も結取り褰げし、身輕の打扮、物々しげに、龜甲入たる臑衣の、上まで高脛露して、青竹の鎗わき挾みたる、勢ひ猛く進み出て、兩人齊一額藏を、左右に丁と疾視て、虐賊額藏、天罰の、かゝるべしとは今しるや。國土の爲には大犯人、われらが爲には怨敵也。三年竹の短鎗の串刺、受るやいかに。と呼かけたり。痛しきかな額藏は、屠舍の牛羊、釜中の魚鼈、三寸息絶れば、萬事休ん。天日これが爲に暗して、油雲漠陌より走るが如し。遙にこれを望るものは、潸然として目を拭ふ、涙は茅が軒端に傳ふて、落る玉水歟と疑ふべく、又樹下の土を潤して、葉漏の露歟と怪しむべし。爾程に社平五倍二は、拿たる竹鎗琉々と、素突に素扱試つゝ、左右齊一閃して、額藏が脇肚を、刺貫ん、と刃頭を引て、呀と被たる聲より先に、五十歩許東西なる、稻塚の蔭よりして、兩方一度に射出す鏑箭、弦音と共に鳴渡て、五倍二社平が肩尖へ、搖一搖て瞟と立。倶に灸所を外れしかども、痛手なれば霎時も得堪ず、兩人苦と叫びつゝ、鎗を捐てぞ倒れける。菴八等は、こはそもいかに、と驚きながら立よりて、と見ればその箭に五六寸なる、紙牌を結提て、奉納若一王子權現、所願成就と書たりける。原來眞の征箭ならず、守を否して、賊を愛する、百姓們が所爲にやあらん。疚蒐出して生拘れ。と聲ふり絞りて下知すれば、うけ給はる。と夥兵共、東西に立わかれて、稻塚目

にして菴八等は、庚申塚に來にければ、塚を去ること二反許、年ふりたる楝の下に、額藏を牽居さすれば、三十餘名の夥兵等は、手に〳〵捍棒を突合して、徂徠の人を禁めたり。かゝりけれどもなほ觀んとて、屋棟に跨り、樹に登りて、眺望するものいと多かり。當下卒川菴八は、床几に尻をうちかくれば、獄卒等は額藏が桎梏を釋去て、八重索被て守てをり。菴八これを佶と見て、やをれ額藏、汝が罪科、五逆に當れり。よりて大石殿の下知狀あり。謹て承れ。といかめしく呼かけて、懐より一通の刑書を取出て讀聞すれば、額藏頻に嗟嘆して、戰國澆季の世とはいへども、日も月もなほ照し給ふに、人の心は虎狼に等しく、良民を屠殺して、これを名づけて法度とす。善を惡とする故に、忠義を誣て、五逆と罵り、惡を善とする故に、奸曲を美して、君子と稱す。むかし東海の孝婦、誣殺せられて、遂に三稔の旱魃あり。杞梁が妻いたく哭して、忽地に城陷れり。寃民の天地を動かす、その祟速なり。汝達は是斗筲の小人、いふにしも足るものならねど、犲狼をもて扞城とし給ふ、大石殿の家風こそ、かへす〴〵もこころ得ね。といはせも果ず菴八は、怒れる眼尻逆立て、憎き末期の擬廣言、物ないはせそ、とくどく。と床几をはなちて焦燥ば、獄卒等は八重括せし、額藏が索の端を、楝の枝に投かけて、力に任して釣揚れば、足は倏忽に地をはなれて、六尺あまり引登されたる、背は幹を負る

述、別を告て、おの〳〵宿所に退りつゝ、をさ〳〵准備をしたりける。かくてはや、その日も些し斜なる、屠所のひつじのあはれげに、急がぬものを時の數、八としいへば獄舍より、牽出さるゝ額藏は、桎梏忽ならぬ、縛の索、端短に、とる手緊く追立る、五六個の獄卒と、三十餘名の夥兵等に、稻麻の如く圍れて、庚申塚へ赴けば、檢監卒川菴八は、信濃麻の夏衣に、紕の段々筋の陣羽織を裝て、精好の野袴に、純子の裾緣彩たるを、腰高に穿下して、紫金作の兩刀を跨へつゝ、網代の塗笠を、紐短に結戴きたる、左右に兩個の若黨を從へて、鎗、柳箱、床几をもたせし、奴隷を後に立し、先を追して、いかめしくねりゆく程に、後方に續く簸上社平は、これも、身甲に釬臑衣して、袴の下を結端折せし、打扮をさ〳〵菴八に劣らず。就中副佩の一刀は、曩に額藏が腰刀の、銳刀也と見てければ、社平はこれを掠奪りて、この日も腰に帶たりける。故あるかな、件の短刀は、鞴は金の華桐なり。中心に梵書の一字銘あり、よりて桐一文字と名けたる。便是大塚匠作三戌が、年來祕藏の有試物也とて、女兒龜篠に取せしかば、龜篠も亦年あまた、護身刀にしたりしを、曩に信乃を擊せんとて、竊に額藏に貸たる也。間話休題、五倍二も衣袴、大小刀まで具足ひて、この日を晴と打扮たる、その裝ひ、社平とこれ一對なり。おの〳〵從者には、短鎗、竹鎗、床几を持して、陸續として城を出たり。既

ればとて、用捨はこゝに揣るべからず。宮六ぬしは陣代なり、額藏は小厮也。主の讐を撃たりとも、さばかりの罰はあらん。況てふかく誣られたるを、今速に解んとせば、紊れし糸を急に引て、いよ〳〵固く結るごとく、人は救はで、身も罪せられ、妻子に歎きを遺すべし。漫に早りて後悔すな。と利害をときて諭せしかば、里人等は只管に、憾るのみすべなくて、衆皆思ひとゞまりけり。爾程に七月二日になりぬ。(、大が大塚へ赴んとて、行德を船出せし日也。)この日巳の比及に、町進は、菴八、社平、五倍二等を廳に聚合て、額藏を誅戮の、隊配を示すやう、渠は幻術あるべきもの也。よりて卒川生を檢監とす。夥兵三十餘名を將て、をさ〳〵非常を警むべし。きのふ里老等が、すぢなきことを聞えあげたる、事情を察するに、日來額藏に魅されて、叨に親愛すればならん。とかくに遊行のものを禁めて、人の觀ることを許すべからず。某も亦武者汰して、城外をうち巡らん。用心かくのごとくならば、縱額藏幻術ありとも、刑に臨てその術を、施すによしなからん。籤上生には兄の讐、軍木生にはその身の仇也。思ひの隨に刺留給へ。といへばみなそのこゝろを得て、一議に及ばず承諾す。當下社平は膝を進めて、番長の遠慮、その所以あり。しかれども額藏は、檻の獸、網の魚也。些の法術ありといふとも、何事をかしいだすべき。貴意をな費し給ひそ。と誇負に慰れば、五倍二も欣然と、歡びを

て、圓塚山にて人を殺せし、同惡のものなるよしは、その宵額藏が書遺せし、落書によりて察せらる。さるを惡事なしとして、莊官にせまほしなンど、胡論の所望は、民として、守を謀るの罪輕からず。再いはゞ恐、搦捕て獄舍に繋ん。汝等命を惜ずや。と席を拍て敦圉たる。權に壓れて里老は、諫爭ふべくもあらねば、阿容々々と里にかへりて、軈て件の趣を、衆人に傳へしかば、皆齒を切り、腕を扼りて、更に又議するやう、しからば事の趣を、鎌倉へ告訴して、額藏を救ふべし。俺們はその宵の事を、認たるものならねども、簸上が濱路を娶らんとて、媒妁軍木共侶に、莊官の宿所へ來て、酒宴して夜を深せし、その事の趣は、誰とてしらぬものもなし。さるを品革へいゆきゝかへさに、立よりしなンどいふ、みな酷しき誣罔なり。額藏をだに救ひ得ば、犬塚ぬしの冤枉は、爭はずしてかならず釋ん。よに志あるものは、とく鎌倉へ赴かずや。と一人がいへば、又一人、三人四人と散動て、果は適じといふものなく、いと喜しく罵騷ぐを、里老等推鎭めて、人々不平の述懷は、寔によしある事なれども、縱令より夜を日に繼て、鎌倉に赴きても、往返三十里に餘れるものを、翌は誅せらるゝといふ、彼男を救ひがたし。世の鄙語にいふことあり。長き物には卷るべし。高き物には手も届かず。一虎斃れて、一虎進む。簸上殿と丁田殿と、奸曲刻薄甲乙なし。今鎌倉に推參して、領主に愁訴す

る折、遠方よりかへり來て、主の怨を復せし事は、婢女們こそ粗知たれ。曩に問せ給ひしとき、定かに申あげざりしは、連係を怕れて也。渠等に再問せ給はゞ、相違あるべうも候はず。又犬塚信乃が事、曩に滸我へ赴て、その宵は宿所にあらざりし。こは奴婢倶にみなしれり。誰が支黨といふことや候べき。且蟇六が莊園も、すべては渠が有ならず。その中なる三が一ッは、信乃が親番作より、讓られたる莊園なりしを、久しく蟇六が横領せり。かゝれば是彼人は、大塚氏の嫡孫にて、素より惡事あるものならず。莊官たるべき由緒あれども、今は滸我へ赴きて、寵用せられば、さてあらん。もしかへり來ることあらば、あはれおん疑ひを解せられて、信乃を莊官になし給ひね。こは衆人の情願なり。大約此度の凶變を、彼人與知らずといふ、證人はいと多かり。明鏡も曇れば照さず、千慮にも亦一失あらん。猶且再問再勘ありて、恩赦の沙汰こそ願しけれ。といはせも果ず菴八は、眼を瞪らし聲ふり立て、こは奇怪なる奴原かな。額藏が罪惡は、曩に背介が首伏せしに、なほくさぐ〵の證據あり。よりて脱るゝに辭なければ、みづから罪に伏せしを、今さらに又誰にか問ふべき。彼蟇六が下女共は、主の撃れし爲體を、露ばかりも見ずといひしに、又云々といふよしあらば、そは汝等が囑賂を畜ふて、極惡大辟の刑人の首を續せんと謀るならん。信乃が事も亦爾なり。彼奴は濱路を誘ひ出し

第五輯　巻之二

第四十三回

群小を射て豪傑法場を閙す
義士を渡して俠輔河水に投む

却說丁田町進は、大塚の里老等を召よせて、卒川菴八していはするやう、蟇六が小厮額藏は、主の夫婦を害したる、逆惡既に明白なり。いはんや又、前陣代主從を犯したる、圓塚山のほとりにて、夥の人を殺したる、その罪戻一にあらず。これにより彼罪人は、明日極刑に處せらるべし。背介はいぬる日身まかりたれば、今さら罪科の沙汰に及ばず。曩に汝等に預措たる、蟇六が奴婢は罪なし。みな舊里へ放遣せ。且蟇六が莊園は、その家庫とともに沒却せらる。券書によりて進呈せよ。又蟇六が妻の甥、犬塚信乃といふ癖者は、額藏が支黨也。竊にその往方を索ねて、搦捕たらんものには、夥の賞錢を賜らん。倘隱しおくものあらば、信乃と同罪たるべきぞ、と儼にいひしらすれば、里老等は呆果て、霎時目と目を指しつゝ、怺難たる一兩人、膝の袴の稜引揚て、緣頰に進み近づき、御諚では候へども、額藏はその夜さり、蟇六亀篠が撃る

られたりければ、町進等は欣然として、軈て社平五倍二に、主命を傳へつゝ、明日未の比及に、庚申塚のほとりにて、刑戮を行ん。宜準備あるべし。と懇にぞとき示す。この時五倍二が眉間の痍、はや過半愈しかば、兩人雀躍して、主恩を拜謝し、町進が計議を徳として、且歡び、且勇む、意氣揚々と含咲て、免許の復讐ならずとも、彼奴が腋肚刺串かば、是怨を雪るに足れり。誅戮の義を任されしは、武運に稱ひ候。と言承してぞ退出ける。嗚呼奸黨の殘毒なる、且く天に捷もの歟。畢竟額藏が性命奈何ぞや。そは次の巻に、解分るを見て知らん。

小斷に似げなく、夥の人を殺せし事も、その故あるべき事になん。もし幻術を得たらんには、思ひの隨に責さして、脱去ることもやあらん。はやく殺すにますことなし、と肚裏に尋思しつ、遂に使者を鎌倉へ遣して、主の大石兵衛尉に、讞獄の趣を訟るに、背介が首狀云々なり。圓塚山にて人を殺せしも、額藏と信乃が所爲なるよしは、云々の議によりて、顯れたるにより、額藏も既にして、陳ずるに辭なく、莊官蟇六夫婦を害して、身の罪を脱れん爲に、還て宮六五倍二を、主の讐なりと誣たる也、と曲に首伏せり。されば背介は曩日に、獄舍にして身まかりぬ。信乃は滸我へ走りし、とその聞えこれあれども、鄰國敵地の事なれば、いまだ追捕の議に及ばず。但額藏は、苛責を屑とせず、幻術邪法を修するもの歟、折々怪しき事多かり。速に誅戮せずは、非常の事もあらん歟、と忠義を誣て、奸邪を資け、菴八と連署して、實事しやかに報たりける。かくて七月朔日に、その使者鎌倉より歸來れり。よりて町進は、菴八と共に、主の下知狀を披見するに、蟇六夫婦を殺せしもの、小斷額藏ならんには、既に五逆の罪人なり。當に竹鎗の刑罰に行ふべし。かゝれば籤上社平等が、復讐の議は協ねども、さしも兄の讐なれば、法場に臨て、獄卒に立代り、額藏に鎗を鎕ん、と願はゞそは隨意なるべし。額藏が梟惡なる、加ふるに邪術あらば、是凡庸の罪人ならず。をさ〳〵非常を儆めよ、と下知せ

といふ、汝が奸詐顯然たり。天罰件の如しと書しは、これその自識としらざるや。と敦圉悍く詰れども、額藏は些も擬議せず、その宵の事は云々、といひ解んとする程に、町進はいよ〳〵哮て、兵共彼奴が骨を拗て、首伏させよ。と焦燥ば、獄卒等は阿と應て、額藏を斂木の上に、推仰向括著て、目口もわかず沃き被る、水は垂氷の凍解る、霤よりも間なければ、額藏は霎時も得堪ず、忽地に息絶しかば、獄卒等は苛責を駐て、倒に推立つゝ、水を吐しなどするに、且して甦生せり。これよりして兩三日、町進は術をかえて、ます〳〵苛責を重くすれども、額藏は初のごとく、主の仇人を撃しといふのみ、苦痛を忍びて遂に屈せず。しば〳〵氣絶したれども、獄舍にかへれば恙なし。故あるかな額藏は、いぬる夜犬山道節が肩の瘤を劈て、わが手に入りし忠の字の玉は、この時までも身をはなさず、はからずもわが玉に、換たる物と思ふになん、或ときは、頭髻の中に籠おきつ、ある時は耳に隱し、又口の中に含てをり。さる程に杖に撲れ、或は水を沃るゝ、種々の苛責に筋骨痛て、心地死べう覺るとき、件の玉を口に含み、又これをもて身を拊れば、苦痛立地に除去りて、心地淸々しくなるのみならず、杖瘡は一夕に瘥て、その痕もなくなりにけり。町進等は玉の奇特を、露ばかりも知らざれば、竊に怪み思ふやう、額藏は苛責に撓まで、杖瘡さへ忽地愈るは、いかなる法術あるやらん。渠は莊官の


額藏を誣て
社平等


いと川菴八

彼奴は首伏せすとも、背介が首伏をもて證據とせば、刑罰に障りなし。今しばらく俟給へ。としのびやかに回報しつ、腹心の夥兵兩三人を、圓塚山へ遣して、左母二郎が事を記せし、彼樹の幹を、伐とらしてこれを見るに、果して云々の數十字あり。よりて又額藏を、獄舎より牽出さして、筆と紙をさしつけつゝ、われ聊思ふよしあり。左母二郎と書け、濱路と寫け。天罰仍件の如し。六月十九日の宵と書べし。とく〳〵といそがして、右手の縛を緩しにければ、額藏は勢ひ推辭べくもあらねば、いはるゝ隨に書てけり。そのとき町進は、額藏を、初より特に緊しく縛さして、彼伐とりし幹の文字と、これ彼を合して見つゝ、勃然たる聲高やかに、やをれ癖者、これを知れりや。圓塚山の樹を推削りて、これは是、惡黨網乾左母二郎也。或祕藏の大刀を掠て、又處女濱路を拐擊し、その從ざるを怒て、こゝに烈女を殘賊せる、天罰仍て件の如し。六月十九日の宵、子の初點、と識せし幹は、伐とらしてこゝにあり。汝が手迹と合し見るに、同筆なること疑ひなし。かゝれば信乃と謀し合して、濱路を盜出せしも、又左母二郎等四個の追人を、殺して世の猜疑を掩ん爲に、云々と書遺せしも、みな是汝が所爲なる事、世の風聞と吻合せり。彼處に濱路が死骸なければ、豈左母二郎に殺されんや。信乃に濱路を將て走らしたる、僞書は汝が作意也。この一條をもて推すに、蟇六夫婦を殺せしは、宮六五倍二なり

點頭んとするときに、額藏歟と問れしかば、勢ひ點頭ざることを得ず。その辭を聞ずして、只介をもて黑白眞僞を、決め給ふはいかにぞや。といはせも果ず推伏せて、一百あまりぞ撲たりける。憐むべし額藏は、背破れ、皮肉爛れて、忽地氣絶してければ、獄卒は杖を駐め、引起して水を吹被るに、且して息出けり。社平菴八はこれを見て、心地よしこゝちよし、といはぬばかりに笑片向て、ふたゝび背介をうち見てをり。町進もと見かう見て、額藏が大膽なる、一朝には首伏すべくもあらず。彼背介奴が物いはぬは、額藏を竊に資し、罪を脱れんとての所爲也。彼奴をも鞭ずや、いと手ぬるし。と敦圉ば、獄卒は暴やかに、又背介を推伏せて、撲こといまだ十下に至らず、叫び苦しむ聲細りて、忽地に息絶たるを、やをら引起して、口中に、藥を沃入れしかば、纔に息のかよふのみ、又生べくも見えざりけり。とかくする程にはや、二更の漏刻音すれば、町進は、額藏背介を、獄舍にかへし遣せしに、背介はその曉がたに、終にむなしくなりにけり。しかれども額藏は、弱りたる氣色もなく、罪に伏すべくもあらねば、社平五倍二は氣を悶て、町進に密書を遣し、物夥賄賂て、媚諛ずといふことなく、その斷獄を急するに、町進も亦利の爲には、傾きやすき小人なれば、竊に社平五倍二を慰めて、背介は脆く死したれども、きのふ既に首伏したれば、是第一の案驗也。某亦復處分あれば、額藏を問落すべし。縱

れも亦分明なるべし。軍木殿はその身の羞を、掩ん爲に誣給ふとも、某より些し已前に、主の撃るゝを認しものは、則これ背介也。五倍二殿に小鬢を砍られて、簀子の下に躱れてをれり。かくまで正しき證人あり。問せ給はゞこれも亦、言明白に候はん。といへば丁田が左右なる、社平は竊に菴八に、目を指しつゝ冷笑ふ。當下町進は、膝に立たる扇杖をとり直して、やをれ背介。と呼被るに、背介は齢六十に餘りて、小鬢に深痍を負のみならず、辛く獄舍に繋れたる、恐懼によりて胃道衰へ、頭を戰し頷くのみ、果敢々々しくは答ざりしを、町進は佶と見て、背介はその宵、蟇六とその妻の撃るゝを、定かに認しことある歟。件の夫婦を殺せしは、額藏なるや、宮六なるや、明々地に聞えあげよ。莊官夫婦を殺せしは、額藏にぞあらんずらん。額藏歟、額藏歟。としば〳〵問ども應を得せず、頻に點頭のみなれば、さもこそあらめ、と町進は、額藏を佗と疾視て、不敵の癖者、なほ陳ずるや。今背介を糾明して、蟇六夫婦を殺せしは、宮六歟と問ば、頭を揮れり。額藏歟と問ば、頻に點頭く。その應答分明也。這奴鞭ずはいかにして、速に首伏すべき。とく〳〵と焦燥ば、うけ給はる。と獄卒等は、杖を揚て立かゝるを、額藏急に見かへりて、各位且く等給へ。背介が頻に頭をうちふり、又頻に點頭しは、みな渠が病の所爲也。その頭を掉んとするとき、宮六歟と問れしかば、勢ひ頭を掉ざることなく、その

て、とく〳〵事の趣を、まうし上よ。と責たりける。かゝれども額藏は、騒ぎたる氣色もなく、主の仇人の見遁しがたくて、當坐に撃留め候ひし、そのことの趣は、曩日聞えあげたる如し。別に仔細も候はず。といへば町進聲をふり立、やをれ額藏、汝は信乃と謀し合して、主の女兒を盗出せし、その宵圓塚山のほとりにて、追捕のものどもを砍仆して、筆者無名の書を遺せしは、人を欺んと欲するの奸計ならん。風聲既に定かなり。かくてもなほその慾に飽かで、主の宿所に立かへりて、錢財衣裳を盗ん爲に、莊官夫婦を殺せし折、邁あはしたる宮六と、若黨二人を殘害して、剰痍を負したる五倍二が命恙なければ、その口狀と風聞と、符節を合して分明なるに、汝が外に誰をさして、今さら主の仇人とするや。嗚呼の癖者かな。と罵れば、額藏撓まず小膝を進めて、いと憚あることなれども、宣ふ趣こゝろを得がたし。某はその前日に、主の使をうけ給りて、下總よりかへりしのみ。緣故を定かにしらねど、主人夫婦の殺されしを、見つゝ遁すべきにあらねば、簸上殿を撃留たれども、朋輩に抑留せられて、軍木殿を撃漏せしは、尤遺恨の至り也。況彼犬塚生は、その前日故ありて、下總へ赴きたり。そは傍輩の奴婢を召て、問せ給はゞ分明ならん。又莊官の女兒濱路を、豪奪して走りしは、浪人網乾左母二郎なり。且濱路を殺せしも、左母二郎が所爲なるよし、建たる牌に記しあらば、こ

とぞ書たりける。是により、大塚の城主、大石兵衛尉が鎌倉の邸中には、老黨を聚合て僉議あり。これ彼と擇れて、出頭人丁田町進を陣代として、大塚へ遣すべしと定めらる。よくその情僞を拷糾して、社平菴八等が訴の趣、その事いよ〳〵實ならば、刑罰は律の隨に、執行ふべきもの也、と猛に命ぜられしかば、町進は次の日の曉に、鎌倉をうち起て、頻に馬を早めしかば、十六里を四時の程に、大塚の城へ乘著て、社平菴八等に對面しつ、主命を述傳へて、五倍二が刀瘡を檢るに、眉の上僅に一ヶ所、淺痍なれば物のいひざま、生平よりも爽なり。よりて事の趣を咨るに、五倍二答て、某はいぬる十九日、宮六に倶せられて、品革濱に赴きつ、かへるさははや更闌たり。折から張燈の蠟燭の、いと乏しくなりしかば、そを蟇六に借ん爲、且湯をも乞ばやとて、渠が宿所に立よりしに、彼小厮額藏が、主の夫婦を砍仆して、迯去んとしたりける、撞見に不意を撃れて、宮六と若黨二人は、矢庭に命を隕したり。某さへにかゝる趣舍、遺恨に堪ず候。と實事しやかに陳じけり。町進うち聞て、既にかくのごとくならば、事忽にしがたしとて、その晡昏より廳を開けば、夥兵等は額藏背介を、獄舍より牽出して、緣頰ちかく推居たり。當下町進は、やをれ額藏。と呼かけて、事の顚末を鞫問するに、右に菴八あり、左に社平あり。夥の燈燭晃きて、亭午のごとく明かるに、夥兵は索を牽、獄卒は杖を揚

となし。今俺們が危窮存亡、譬ば疲馬に鞭うちて、大敵に向ふが如く、その身は矢石に傷られて、なほ一陣を戍るに似たり。緦麻の服ありといふとも、わが身の慾に祭るにあらねば、神は允させ給はん歟。いでや彼瀑布に祓禊して、同盟犬川生の爲に、窮阨解除の冥福を禱るべし。さはとて齊一衣を脱て、おの〳〵瀑布に身を搏しつゝ、當山岩窟辨才天、幷に瀧の不動明王、若一王子權現と、念じて丹精をぞ凝しける。追前齣再說、簸上宮六が弟簸上社平は、いぬる六月二十日の朝、屬役卒川菴八と共に、搦捕たる額藏背助を、緊しく獄舍に繫して、腹心の步卒兩人に、訴狀一通を齎して、鎌倉へ遣すに、往返一晝夜を限りしかば、その宵初更の比及に、緈はや鎌倉に聞えたり。さればその告訴の趣き、額藏を誣て、信乃を疑ひ、莊官蟇六夫婦はさらなり、宮六を殺して、五倍二に手を負せしは、蟇六が小廝、額藏が所爲にして、老僕背介といふものこれを資け、蟇六が妻の甥、犬塚信乃といふものも、亦その惡に與れり。但信乃は逐電して、いまだその往方をしらず。これより先にその夜さり、蟇六が女兒、濱路を盜出せしも、そが追捕のものを四人まで、圓塚山にて殘害して、云々と書遺せしも、信乃額藏等が所爲なるよし、風聞既に定か也。よりて額藏背介等を、當朝に搦捕て、既にその身を禁獄せり。冀くは額藏等を給はりて、兄の怨を雪んと欲す。仰ぐ所憲斷にあり。狀訴仍て件の如し。誠惶誠恐

も聞ざりけり。爾程に小文吾は、日々に大塚の城中に赴きて、麻と木綿を賣る毎に、本價の多少に拘らねば、廉からずといふものなし。これにより、彼此にもてはやされて、はや知人もいで來しかば、なほそのすぢに陽交りて、獄舍の光景をよく見ばや、額藏の莊助を、竊出す便もがな、とをさ〳〵肺肝を摧けども、城中に入ることを得て、まだいくばくの日を經ざれば、かゝる大事を倉卒に、相譚べきよすがもあらず。とかくする程に、夏をなごりなく客宿に過して、秋としいへば蒐悲しき、七月朔日になりにけり。小文吾は黃昏に、大塚よりかへり來つ、信乃現八と團坐して、竊に城中の沙汰を報るに、みな憤胸に滿て、うち聞毎に嗟嘆に堪ず、けふを限りとおもふになん、便宜の進退を定めんとて、且く閑談する程に、食堂より夕膳を羞めけり。當下信乃等は寺僧に對ひて、前月廿四日より、某等が七日の參籠、今宵にて滿願せり。かゝれば明朝巳の比及に、身の暇を給はるべし。是は屬日の食料也。これは當坐の布施物也とて、小文吾が賣遺したる、麻と木綿と、永樂錢一千五百文を贈りにければ、寺僧はこれを受おさめて、いよゝ叮嚀に欵待けり。日暮て三犬士は、岩窟堂に赴きて、更に叉議するやう、今この同盟三士の中に、淸淨なるものは犬飼のみ。その餘は伯母と妹の服あり。さるを日來この神窟を、談合谷にしたる事、神慮その憚なきにあらねど、軍陣には神を祭るに、絕て觸穢を忌こ

共にこれを祭れり。いづれも同盟の義をもつて、親の如く子の如くす。祭果て現八は、親の菩提院に赴きて、住持に對面して、糠助が舊里人なるよしを告て、布施をすゝめなどする程に、小文吾は玄關に尻をかけてをり。現八は、住持と雜談する序に、蟇六が事の趣を咨るに、蟇六は宮六に撃れ、龜篠は五倍二に殺されしといふ。又額藏が事を問ふに、城中の沙汰はよくもしらず。當下現八は膝を進めて、某同行の商賈あり。大塚の城中へ、出入せんことを願へり。もし紹介を許し給はゞ、こよなき幸ひなるべしとて、他事もなく請求れば、住持は布施の多きに愛て、疑おもふ氣色もなく、大塚の城中には、些の檀越なきにあらず。折々ゆかばおのづから、好財主にあふこともあるべし。さはその人に對面せんとて、小文吾を召のぼして、城中なる檀越の姓名を記したる、手實一枚を與へしかば、兩人ふかく歡びて、恩を謝し別を告て、小文吾は大塚の城中へ赴きつ、現八は金剛寺へかへり來て、信乃にけふの首尾を告けり。小文吾既に城中へ、交加することを得たれば、信乃はいよ〳〵ふかく隱れて、又大塚へ赴かず。現八は折々いゆきて、阡陌の風聲を揆るに、扇谷山内の兩管領は、近き比滸我の御所と、和睦やうやく整ふ物から、なほ迭に狐疑あるにより、大塚の陣番等は、信乃が住方を索るに、滸我までは穿鑿り得ず、只そのかへり來るをまちて、搦捕んと議するのみ。現八が事などは、絕て傳へ

信に、感涙を拭ひあへず、水を汲かけ、樒を手向て、追慕の哀みやるかたもなく、地上に平伏し、慟哭して、時の移るをしらざりけり。信乃も有繋に懐舊の、涙を沃ぎて倶に祭るに、田舍の墓所は寺内にあらで、多く田の畦にあるをもて、かゝるときにも自在也。小夜更たれば寺に詣ず、信乃は又先に立て、額藏が母の塋域、行婦塚に赴きて、現八と共に祭れり。その子の爲に災害消除を、こゝろに占て禱るなるべし。又現八は甲夜の間に、蟇六が一件の風聲を、彼此にてうち聞しに、猎平が告たるごとき、精細なるに及ねども、言大かたは異なることなし。とかくする程にはや、廿四日の月高く升りて、丑三ならんと思ふ比、行婦塚を祭果て、信乃は現八共侶に、その曉がたに瀧野川なる、岩窟堂にぞかへりける。小文吾は信乃現八に、事の趣をうち聞て、然らば翌はわれゆかんとて、竊に示し合する程に、天は明て、朝烏の啼聲す。寺にて早飯を果すとやがて、小文吾は亦現八を儐にして、大塚に赴くに、途なる農家にて、王子權現へ獻する竹鎗と、弓箭を賣るもあり、又麻と木綿を織るもありけり。小文吾はこの處にて、麻と木綿を十四五反と、箬篭と袱をさへ買とりて、信濃路などよりいで來たる、商旅に打扮つゝ、現八を先に立て、大塚に赴きけり。現八は笠ふかくして、しらぬ人にもなほ潜べり。さして訪ふべき家もなければ、この日も亦行婦塚、番作夫婦の墓、糠助の墓に詣て、小文吾と

にも遭ず、瀧野川より大塚まで、その道二十町に過ざれば、はやくも莊官蟇六が宿所のほとりに來て見るに、門には竹の柵かけて、裡面には人影ありともおぼえず。今さらに淺ましくて、嘆息しつゝ退きて、そが前面なる網乾が宿所を、外のかたよりさし覗くに、現こゝも空房になりたり。この處はその初、糠助の宿所なりし、と信乃が告るに、現八は、懷舊の涙を禁めあへず。家はむかしの儘とし聞くに、親の面影は夢にだも、見るよしなしとぞ喞ける。さてあるべきにあらざれば、信乃は現八が袂を引て、親の墓所に參詣す。祖母と番作手束の墓には、里人等が齊眂しならん、水も涸れず樒もありけり。又十歩ばかり左のかたに、近屬葬たらんとおぼしき、墳塋兩基並びたり。こは蟇六と龜篠が亡骸を瘞しなり。こゝには絕て樒もなし。信乃はつら〳〵見かへりて、その德の厚薄は、死後に必見るべき事あり。親と伯母との甲乙を、思ふに就てなほ思ふ、錦を被て夜故鄕へ、歸るといふ諺にも、劣るはおのが不肖なり。許させ給へ。とわびしらに、二親の墓、祖母の墓、彼新しき墳塋にも、水を沃ぎ莽草を挿て、曲々に祈念を凝せば、現八もそが後方に、跪きつゝ念じたる、回向に夏の夜更初たり。かくて又、信乃は現八に儐して、糠助が墓所に赴くに、この夫婦の墓にも樒たえず。こは糠助が身まかりし比、信乃が蟇六にとき勸めて、香華料を寄せしかば、その菩提院より植る也。現八は信乃が恩

貸給はらば、幸甚しからんといふ。かゝる事折々あれば、寺僧は聊も疑はず、そはいと易き事也とて、姓名を問、住所を訊ふに、實を告んはさすがにて、三士は某甲某乙と、慢に名告けり。よりて寺僧は儐して、信乃現八小文吾を、客殿の側なる、子舍に安措して、夕膳を羞る程に、はや黄昏になりにけり。かくて、三犬士は縁頬より、あちこちと見わたすに、庭は石神川の流を引て、水清く、山高からず、茂樹青葱として、瀑布あり、奇石多かり。夏を忘るゝ佳境なれども、心の憂は山水を、うち見て慰むべくもあらず。傍に人のをらずなれば、三士は再額を聚めて、こゝより大塚へゆきかよふ、緈の便宜を相譚ふに、信乃は後方を見かへりて、某は彼里人に、多く面を識られたれば、夜艾ならでは赴きがたし。兩友は白晝といふとも、里に相識る人のなければ、後やすき事ながら、鄕導の爲なれば、今宵は某犬飼を將て、潛やかに適て見ん。三人共侶にと思へども、一人も岩窟堂に通夜せずは、法師們に怪れん。且神佛を欺くに似て、こゝろに愉からずかし。今宵は犬田留り給へ。犬飼生を先にすなるは、その實父の墓彼處にあり、そこらを儐せん爲のみ。愚意に從ひ給はんや。といふに兩人領きて、この議寔にしかるべし。とく〳〵。と急しつゝ、寺僧には岩窟堂に、通夜すといふて外に出れば、既にして日は暮たり。さる程に信乃現八は、辨天堂を潛出て、足に信して急ぐ程に、宵闇なれば人

思惟るに、某は縁を求めて、彼城中へ入らんとすとも、商賈などに打扮ずは、忽地人に怪れん。しからばわがこの額髪を、剃落さでは便なき事也。しかおもへども剃刀なし。今この鋏を獲たりしは、亦はからざる幸ひならずや。わがこゝろ既に決せり。兩友と共に進むべく、獨故郷へ退くべからず。いで〳〵。と左手をかけて、引出す額髪を、みづから件の鋏もて、はやくもはさみ落しけり。信乃現八はこれを見て、齊一感じて遂に禁めず。犬田生犬田ぬし、鋏の譬喩は究めて妙なり。かくまでめでたき前象あるを、いかでかその意に任せざらんや。はさみし迹に長短あり、刈平さし給ひね。といふに小文吾歡びて、さもこそあらめ。と拊て見つ、鋏を現八に遞與になん。こちへ向ね。とほとりについゐて、はさみ遺せし額際を、遺もなく刈とりしかば、前日剃し月額と、おなじ程になりにたる。信乃も側に左見右見て、適徽妙く肖つきにけり。姿を窶すに便よし。誘給へ、計りし如く、瀧野川へ赴ん。といひかけて笠をうち戴れば、兩人も笠をふかくしつ、後に跟き先に立て、舊の畈畝に立出れば、日影は落て視も逈に、戰ぐ稻葉に風渡る、下晡になりにけり。かくて件の三犬士は、金剛寺に赴きて、岩窟堂に詣つゝ、辨才天を默禱して、食堂にいゆきて呼門へば、寺僧出迎へて來意を問けり。當下信乃は進みよりて、某等は、辨才天に宿願あり。七日參籠すべく思ふて、遠方より來れり。休息所を

腹あしくな思ひ給ひそ。兩友ちからを勠し給はゞ、幸ひ尤甚し。しかれども犬田ぬしは、假初に送り來て、逗留この地に日を彌らば、親を忘るゝものに似たり。和殿は船を乘かへして、行德と市川へ、これらのよしを報給へ。さらずは彼人々の、待わびて、さぞ物を思はん。還り給へ。と叮嚀に、諭せば小文吾頭を掉て、某も親の事を、思はざるにあらねども、彼處は既に無事にして、こゝには火急の難義あり。舊里人に待れじとて、立かへりてふたゝび來ば、竟にその期に合ずして、轍鮒を枯魚の市に見ん。豈是をしも義とせんや。且大塚の城中へ、親しく交加することなくば、何を便著に犬川生を、拯ひ出すことを得ん。犬塚ぬしは勿論也。犬飼ぬしも濟我殿より、その沙汰彼所へ聞えし歟、これも亦知るべからず。されば城中の爲體を、日每に窺知るべきもの、某ならで誰かあらん。是見給へ。今來し途の田の畔にて、この鋏を拾ふたり。鋏は進みて物を剪れども、退くときはその功なし。剪は鋏の本字にして、鐙櫃に前の字をも、又剪の字を書て前後をわかつは、をさ〳〵この義を取れりとぞ。某總角なりし比、手迹の師たる人はいひにき。鎌鍫なンどの農具ならば、田の畔に遺てもあらめ。あるべき處ならずして、この鋏を拾ひしは、前みて仇を剪るといふ、十字占ならんと思ひしかば、歡びてとり揚たり。然るを今行德へ、退くときは鋏の功なし。事既に奇異なれば、こゝにふたゝび

大塚に赴きて、街談衢說を撈るとも、誰か亦彼ほどに、曲に告るものゝあるべき。現禍も禍ならず、福も亦福ならず。世は塞翁が馬なりけり。顧ふに彼猪平は、人を識の量あるもの歟。われに信あり義ありとせずは、疑ずしてはる〴〵と、一翰を委んや。書狀を輙く誂しは、こゝろありての所行ならん。十室の邑にも忠信あり、傾蓋故舊の如しといはまし。さるにてもわが伯母夫婦の、横死は思ひがけなき事也。みづから釀せし禍なりとも、一家の不幸はしかすがに、是某が不幸なり。濱路も亦憐むべし。渠憖に節義を守りて、親をも身をも喪ひし歟。往事はこゝに悔ても及ばず。額藏の莊助は、その罪にあらずして、今縲紲の中にあり。犬飼犬田はとまれかくまれ、某は總角より、彼人と義を結びて、死生を倶にせんと誓へり。況わが伯母夫婦の仇を、立地に撃たるをや。術計共に空して、勢ひ拯ひ得がたくは、共侶に死んのみ。他し事なく候。と思ひ入て聶くを、現八小文吾聞あへず、その述懷は犬塚ぬし、和殿一個のうへのみならんや。某等は犬川生に、いまだ面識ならずとも、玉と瑤とをおなじうせば、既に異姓の兄弟なり。財をもて拯ふべくは、盤纏を竭して共に計らん。又智力をもて拯ふべくは、死を共にして相資ん。親疎を論ずることかは。と辭等しく怨ずれば、信乃は莞爾とうち笑て、刎頸の交りは、いづれに親疎あるべきならねど、某は就中、故舊の微意を演たるのみ。

そ乏しからめ、浮世に遠き山里なれば、逗留し給ふともけしうはあらず。よりて憑み奉る。といひ被て恭しく、件の狀を遞與になん、信乃はやをら受とりて、いはるゝ趣こゝろ得たり。遲速は定かならねども、信濃路へ赴かば、由縁を訪て屆べし。和殿の所望はうけ引たり。些の物なほ受ずや。といふに猾平ます〳〵感じて、かくまでに宣すれば、且く領り奉らん。辱し。と受いたゞきて、紙に拈りてそが儘に、硯筥に納れば、信乃は件の一輸を、懷に挾つゝ、現八小文吾共侶に、謝を述、別を告て、おの〳〵笠をふかくしつ、南を指て出てゆけば、猾平はほゐなげに、門傍に立てぞ目送りける。

第四十二回

夾剪を摭て犬田進退を決む
額藏を誣て奸黨殘毒を逞す

信乃現八小文吾等は、猾平が宿所を辭し去て、青田の畔を五六町、南を望てゆく程に、左に細小なる岡ありて、樹杪隙なく生茂れり。且くこゝにと立よりて、齊一株に尻をかけつゝ、ふたたび進退を相譚ふに、信乃はしば〳〵嗟嘆して、某甲には神宮河にて、村雨の大刀を盜れしを、知らで滸我殿に罪を得たり。今は又彼河原にて、猾平に邂逅して、圖ざる資を得たり。縱

て筩螺を、舊の柱に掛たりける。當下信乃は件の銀を、あるじのほとりにさし寄て、嚮にもしばしばすゝめしごとく、願ふはこれを納め給へ。竊に主人の應答と、その氣質を察するに、浮世をはやく簑笠に避て、この水濱に隱れしもの歟。昔ゆかしく候。といへば猜平額を撫て、否さるものには候はず。わかゝりし時いさゝけなる、武士の祿を食たるのみ。本性は姨雪也。舊名を世四郎といへり。形のごとき下司なりしを、なほ愆ることありて、舊里なればこの處へ、追退けられ候ひき。小人が相識る老女、去年よりして上野なる、荒芽山の麓に在り、と近屬仄に聞えたり。倘信濃路へ赴き給はゞ、訪ふて宿を投め給へ。便もあらば、と豫てより、一通を寫めおきつ。なほ又おん身三はしらの事をし書加まゐらせん。と眞實だちて身を起しつゝ、棚の隅よりとり卸す、塵埃染たる硯を吹て、茶碗に殘る茶を滴む、墨は曲れどいと直き、黄軸の禿筆拔出して、かくる眼鏡の玉匣、ふたとせになる船日記の、末なる白紙引裂て、走書して一通の狀もろ共に卷籠て、飯桶の簀蓋反揚て、撮とりたる飯粒もて、封じて標識を書しるしつ。犬塚ぬし是はこれ、いとも無禮なるわざなれども、心くまなきことぐさに、この一通を委ねまつらん。荒芽山の麓ぞ、と風の便に聞たるのみ。迭に年來疎遠なり。彼處へいまだ適ても見ねば、いとおほつかなき事なれども、必諮ね給へかし。老嫗の名を音音といへり。よろづに物こ

受られずは、何をもて某が肺肝を表すべき。一河の流も他生の縁、その落薄を見て相憐むは、僉天稟の善心なめれど、主人のごときは多く得がたし。善に與して不義を憎む、鯁直人とおぼしきに、いかなれば惡棍の名にしおふたる土太郎を、傭ふて船を漕せしやらん。といへば猪平微笑て、否小人はこの年來、只一日も土太郎を、傭ひし事はなかりしに、彼日に限りて莊官の、土太郎を傭ひてよ、と宣はせしによりて也。爾らずはいかでか彼惡棍に、わが船を漕すべき。小人は年老て、生活だに懶惰ければ、人のまに〳〵せざることなし。只兩個の猶子ありて、そが一個の名は力二郎、一個は尺八と呼れたり。近き比こゝに來て、網引にその日を送れども、任俠剛毅の壯佼なれば、舊領主豐嶋殿の、滅亡をうち歎きて、扇谷の管領家をすら、忌憚る氣色なし。況大塚の陣番などは、屑とも思はずといふ、彼等が言を愼まで、禍を取ることもやあらん、と思へば小人教訓して、しば〳〵儆たりければ、爾後は罵らねども、志は今に撓ず。こゝより戸田へ捷徑あり。彼等に送らせ候ばや。といひつゝ簀螺をとり揚て、吹鳴さんとする程に、現八小文吾是を禁めて、かさね〴〵し誠心は、感ずるにあまりあれども、吾儕兩人はる〴〵と、送りてこゝまで來たりし甲斐に、行侶は乏しからず。このうへになほ人を増さば、なか〳〵に視にたつべし。といふをしづかに見かへりて、しからば隨意し給へ。と應て軈

り、故鄕の訃を聞くのみならず、身に係るべき寃尤を、潜やかに告げられしは、多く得がたき幸なり。聞くがごとくば今さらに、大塚に還りがたし。信濃は母の生國なれば、彼地へや赴くべき、いまだ思ひ定めねども、こゝらに逗留すべくもあらず。水際に繋留たる船を、この友人の還る日まで、預りてたびねかし。いはでも如才あらざめれど、俺們が下總より、かへりし事もいひつる事も、和殿一個の胸に祕て、親しき友にも告給ふな。といふを猜平聞あへず、そはこゝろやすかるべし。宣ふまに〳〵諾ひたり。大塚の莊官は、年來の花主なりしに、おん身はそが令甥なり。世の評判は舅公にまして、賢人君子といはれ給ふ。可惜武士の薄命なる、けふはからずも再會して、亦痛しさも一トしほませば、いといひがたき事をすら、潜やかに告たるのみ、酬を受ん爲にはあらず。このわたりは近き比まで、豐嶋の采地なりければ、この舊恩をこそ思へ。管領には民親しまず、況大石殿の陣番等は、民の膏膄を絞るのみ、忠義を誣て奸佞を、逞しうせらるれば、誰かそれを德とすべき。犬塚ぬしはこゝらにゐまして、人に知られ給ふとも、大塚の陣番へ、告訴せんものありとも覺ず。しかれども彼城中より、こゝらまで穿鑿りて、折々夥兵のうち巡れば、一ト宿も留進らせがたし。名殘は最惜けれども、はやく他鄕へ避給へ。この賍は要なし。と推辭を信乃は再びすゝめて、好意はさる事なり。さばれ是だに

早り給ひそ。いといひがたき事なるを、明々地に告べき歟。こゝろに悖ふことありとも、そは聞ながし給へかし。世の風聞に就て思ふに、犬塚ぬしはその初、荘官の壻がねならずや。然るを陣代の密議によりて、遠離られ給ひし、と世の人はいふめれど、社平ぬし五倍二ぬしは、なほ娟く思ひけん、腹心のものに流言さして、濱路を誘ひ出せしも、又蟇六が追捕に蒐たる、左母二郎とその餘の三人を、圓塚山にて殺せしも、信乃額藏が所爲也、と喋々しくいはせしかば、犬塚ぬしにも疑ひかゝりて、往方を索らるゝとぞ。大塚の里人等は、犬塚ぬしを最屓ぬもなければ、竊に胸を苦しめたる、僉手に汗を握れども、爲にいひとく證のなければ、只舊里へかへりなせそ、と念じて口を鉗てをり、と彼里人はいふぞかし。小人も大塚に、聊相識るものあれば、これらのすぢさへ粗聞たり。さるを誰にもをはじませ、犬塚ぬしの友也とて、彼處へ邁てこれ彼、と言問ひ給はゞ捕れて、辛きめにあひ給はん。いと危しとも危し。と手首ふりて密語ば、現八小文吾はいとゞしく、忿激に堪かねしを、思ひかへしてうち頷き、そは甚しき誣罔なれども、危邦には入るべからず。よくこそ知し給ふたれ、歡しく候。と應て信乃に目を注すれば、信乃は腰纏の財布より、粒銀四五顆とり出て、懐紙にうち載つゝ、これを猪平に進めていふやう、こはいと些少の物なれども、好意を謝するのみ。某等ゆくりなく、和殿に邂逅したるによ

但背介とかいふ老僕は、額藏よりはやく還りて、莊官夫婦の撃るゝときに、淺瘡を負て倒れたり。そは額藏の證人とて、云々と聞えあげしに、背介は口よく利ものならぬに、年は老たり、瘡は負たり、果敢々々しくもいふことなければ、これさへに誣られて、日毎の苛責を脱れず。かゝれば件の兩人は、ちかきに首を刎らるべし、といひもて罵るもの多かり。可惜忠義の壯佼を、寃枉に殺されなば、いと憐むべき事也とて、知るもしらぬも彼舍弟と、軍木を憎ぬものはなし。悔みまうすも胸苦し、漏たる事も多からん。なほよく人に聞給ひね。と言葉せわしくとき示せば、信乃はさら也現八も、小文吾も驚呆れて、齊一嘆息したりける。當下信乃は愀然たる、眉根をよせつゝ、現八と、小文吾を見かへりて、わが伯母夫婦の心ざま、そは好もあれ歹もあれ、總角の比よりして、養れたる恩惠をおもへば、哀戚の涙禁め難かり。さるにても額藏は、その處を去らずして、主の仇人を撃し事、よに羨しき大義也。しかるもいたく誣られて、命危きをいかにせん。わが同盟は一人として、薄命ならぬものもなし。歎ずべし〱。と怨じて瞼をしばたゝけば、兩人も亦遺恨の外眥、睨詰たる拳を捺りて、慷慨嗟嘆は皆相同じ。さればとて彼人を、拯出す術もなし。俺們兩人彼處にいゆきて、なほ又里の風聲を、聞定めて後にこそ。といふを矠平推禁めて、各位は犬塚ぬしに、甚麼なる由縁あるかはしらねど、漫にな

二郎を撃捕て、首を樹枝に伐梟つゝ、云々と書遺したり。只左母二郎のみならず、土太郎、加太郎、井太郎なンど呼れたる、三個の破落戸さへに、おなじ山路に殺されたり。土太郎はいぬる日に、彼網船を漕したる、傭篙工で候へば、犬塚ぬしにも識られしもの也。或はいふ、加太郎井太郎等は、旅轎を舁ものなれば、左母二郎に傭れて、濱路どのを駕して來り、土太郎はこの夜さり、莊官に憑れて、左母二郎を追蒐來て、倶に命を隕せしとぞ。就中傳へ聞くだに、いとゞ心苦しきは、額藏男の薄命なる、主の仇人を撃たれども、敵手は特に威勢ある、陣代なり屬役也、その方ざまに誣られて、わがいふよしは一切聽れず。背介とかいふ老僕とともに、むごく獄舍に繋れたり。かゝりし程に鎌倉より、大石殿の下知を受たる、丁田町進とかいふ一個の老黨、陣代として大塚に下向しつ、額藏背介を牽出さして、日毎の苛責間斷なし。そは彼簸上の弟なる、社平といふ壯佼と、五倍二がこしらへて、怨を復すと聞えたり。莊官夫婦の殺されしは、婚姻の宵に令弱を、網乾に奪去られしと、壻引手の名刀が、似ても似つかぬ贋物なりしを、壻がねも媒妁も、怒り狂ふて事起りしかど、社平ぬしも五倍二ぬしも、さる事は絕てなし、蟇六夫婦を害せしは、則小廝額藏也、宮六と五倍二は、その折彼處に適おはして、事のこゝに覽る也、と實事しやかに誣る物から、眞夜中ごろの事なれば、これ彼ともに證人なし。

る。しからば曲に告べきに、こなたへ來ませ。と先に立て、己が宿所に誘引けり。三士は思はず目を指したる、胸中いよ〳〵穏ならず。かくて猎平は、河原にそふたる白屋の、門の戸を推開て、遽しく箒を把つゝ、簀子の塵を掃片よせて、信乃現八小文吾を、上座に請のぼし、地爐に枯葦折燒て、茶釜の膚を拊試たる、心のどかに火を吹ば、信乃等は頻に焦燥て、主よ、茶も湯も欲からず。大塚の事心もとなし、彼凶變とはいかなる故ぞ。と再問れて小膝を進め、小人も彼處へいゆきて、親しく見たる事ならねども、こゝらに風聞隱れなければ、聞たる隨の趣を、物がたり仕らん。扠もいぬる十九日、眞夜中比の事にやありけん、大塚の莊官夫婦は、陣代簸上宮六ぬし、屬役軍木五倍二ぬしに、砍られて卽死し給ひぬ。その折莊官の小厮なる、額藏とかいふ猛者が、遠方より歸あはして、主の怨を報ひしとぞ。宮六ぬしは當坐に撃れて、五倍二ぬしは、淺痍才痍、あちこちと負ながら、辛して逃亡たり。緣故を尋るに、彼陣代の威勢もて、莊官の獨女を、娶らんとて約束せしに、これより先に息女の母御が、左母二郎にも約束して、壻にせんといはれしを、猛に變改せられしかば、左母二郎はふかく怨みて、その宵竊に令弱を、略奪て走りつゝ、圓塚山まで將てゆきしに、令弱濱路どのとやらん、そのこゝろに從はでや、左母二郎に殺され給ひき。いと痛ましき事になん。その折に亦誰とは知らず、左母


犬塚信乃
犬田小文吾
犬飼現八


船を
神宮の渡

笑み、はや忘れ給ひし歟。小人はいぬる比、網船を貸進らせし、船主にこそ候なれ。わが名は矠平と呼れたる、土地に久しき漁者なれども、年老て子もなければ、今は網引の業をせず。さばれ漁船は、なほ一二艘持たれば、傭艪工して人に貸すを、生活にしてこそ候へ。大塚の莊官は、漁獵を嗜み給へば、年中には幾遍となく、こゝに水獵し給ふ折、わが網船を貸進らせしも、はや年來になりにたり。只おん身とは昨今なれども、忘れもえせずこの月の、十六七日の比になん、おん身は一個の壯佼と、共に莊官に携られて、漁獵に來給ひつ。その折小人心當に、莊官に問候ひしに、彼はわが妻の甥なる、犬塚信乃といふもの也。これはわが里人なる、網乾左母二郎と呼るゝものぞ、と報させ給へば定かに知れり。その日は莊官の過失て、船より滾落給ひしを、おん身がいとも精悍しく、彼あげ給ひしにあらずや。扨も大塚の凶變は、心苦しき事になん。彼騒動を外にして、何地にか適給ひし。と眞實だちて聽けば、信乃は再び驚きて、現いはるればその事あり。われは殺生を好まぬに、心におもふ事の多くて、面忘れせし疎さよ。知らるゝごとくいぬる比、伯母夫に倶せられて、こゝに遊びし次の朝、吾儕は下總に赴きつ、彼處の友に送られて、只今かへり來にければ、何事もまだ聞しらず。大塚の凶變とは、何なる所以ぞ、聞まほし。と問へば矠平頷きて、原來彼件の趣を、露ばかりも知らでやなはす

事なれば、又今さらに思ひ合して、倶に遺恨に堪ざりけり。扨あるべきにあらざれば、神宮の岸に船を繫ぎて、旅宿の事を相譚ふに、信乃は且く沈吟じて、この所よりわが舊里へ、一里あまりもあるべからん。しかれども、豫て報たる情由あれば、伯母夫許赴きがたし。さればとて、このわたりなる里人は、農夫ならざれば漁者のみ。絕て客店あることなし。こゝより西南のかた、二十町許にして、瀧野川といふ村あり。この村に、金剛寺といふ古刹あり。辨才天の靈地也。某八九歲なりし時、母の爲に祝禱して、しば〱詣し事あれば、案內はよく知れり。箇樣々々にこしらへて、彼僧坊を旅宿にせば、世を潛ぶに究竟ならん。且大塚へ遠からねば、額藏の莊助と、往來に便よし。これを捨ては戶田わたり、驛路はなほ遙なり、瀧野川こそよからめ。といふに兩人諾ひて、齊一岸に上る折から、一個の賤夫水際に立り。はやくも信乃を見かへりて、おん身は大塚なる莊官の、令甥とやらんにをはさずや。と問れて信乃は驚きながら、その人をつら〱見るに、年齡は五十あまり、六十にもやなるべからん。舊たる梼の單衣を被て、手に一挺の藻刈鎌を携たり。さしもその面魂、惡棍とは見えざるに、旣にわがうへ知られしを、愿果べうもあらざれば、現八小文吾に目を注して、進み對ひて莞然とうち笑み、現推量せらるゝごとく、われは蟇六が由緣のもの也、抑和主は何人ぞ。と問かへされて、うち微

給ひそ。とこゝろを付れば頷きて、軈て袂を分つになん、情由を得しらぬ依介も、惜む名殘は異ならで、路は異なる北南、別れておの〳〵急ぎけり。爾程に文五兵衛は、その宵初更の比及に、市川まで走りかへりて、里の形勢を窺ふに、撃殘されし惡棍等は、有繫に公聞を憚てや、何地ゆきけん影もせず。又犬江屋の門傍より、裏面のやうをさし覗くに、篙工等はいまだひとりも還らず、留守なる婆々は苧を績て、細き燈火の下にをり。これ彼すべて無事なれば、僅にこゝろを安くして、獨つら〳〵思ふやう、行德の宿所にかへりて、わが浦船に乘らんとせば、はや夜の更てその船を、輙くは出すべからず。こゝより水行を進まんとて、案内知たることなれば、とかくして一艘の快船を借とりつゝ、足をまし、篙工を倍て、武藏を投て漕しけり。されば又照文は、急ぐとすれど行侶は、老女なり痍負なり。辛して二更の比、大和田の里に宿投りつ。是より日毎に五六里の、路を進みて上總に赴き、異なく安房にかへり著ぬ。照文妙眞等が事、この下に話說なし。案下某生再說、犬塚信乃、犬飼現八等は、いぬる六月廿四日の朝未明に、犬田小文吾に送られて、船路をゆくこと六里許、宮戸河より北のかた、千住河を泝りて、その日未の比及に、武藏國豐嶋なる、神宮河原に著にけり。いぬる比某六が、信乃をふかくも詐謀て、村雨の大刀を奪せしは、こゝなりけり、と豫てより、現八も小文吾も、傳聞たる

りがたかり。扨もわが人々は、南へ走り給ひし歟、市川へ還り給ひし歟、或は撃れ給ひしさ敵に拘れ給はずや、と思ひかねつゝ樹下に、立在て候ひしに、うちも揃ふて恙なき、面をあはし奉れば、疼痛を忘れて足も進めり。只この中に坊さまの（親兵衞をいふ）、見え給はぬはいかにぞや。と問へば妙眞目を拭ふて、大八がうへに就ては、くさ〴〵の話あり。いとも怪しき事なりき。といふに依介驚きて、そは亦甚麼なる事ありし。と問ふを照文うち滅して、途中雜談究て益なし。古那屋の主人はこゝよりして、とく還るこそよかンめれ。われは犬江の祖母を將て、兩人南に赴んに、わが年いまだ五十に至らず、婦人も四十あまりとおぼし、柳下恵にあらざれば、影護く思ひしに、依介既に甦生して、こゝに遭しは幸なるかな。渠を安房まで將て適かば、心ぐるしき事もなし。かゝれば今宵の宿りに急がん。古那屋の主人よ、彼地の事は、曩に示しあはせし如く、彼人々に言傳給へ。脱落はあらじ、こゝろ得たりや。といふを文五兵衞聞果ず、そは御こゝろやすかるべし。犬江の阿嬢、さらばぞよ。嚮にもいひしことなれども、われ彼地よりかへり來ば、留守も折々見まふべく、安房へも適て安否を問ん。よしなく物を思はずに、氣ながく逗留し給へ。といへば妙眞うれはしげに、そはほゐもなき別にこそ。闇きに歩をいそぐとも、こゝろして跪き給ふな。秋の暑の堪がたきも、今霎時の程なるべし。病な煩ひ

來にければ、前面なる樹下に、一個の人立在たり。つく〴〵と透し見るに、額の素きは、亡者の被る、地藏楮にやあらんずらん。背の高きは一袱の包物を負るなり。手に竹杖を突立たる、その模樣大かたならず、依介に似たりけり。妙眞遙にこれを見て、遽しく文五兵衛が袂を引つゝ聲を細めて、彼見給へ。依介が、冤魂の顯れたり。彌陀佛々々々。と唱れば、文五兵衛は頷くのみ、共に念佛する程に、照文はいちはやく、ほとりに進み近づきて、そは依介にあらずや。と問へば然なりと應つゝ、杖に携て樹蔭を出たり。當下妙眞と文五兵衛は、前に立、後に遶りて、眼を定めて再び見るに、地藏楮歟と思ひしは、白曝の手巾もて、額の瘡を卷たるなり。原來いまだ死ざりし、と思へば齊一聲を被て、やよ依介歟、恙なきこそ幸なれ。そなたは嚮に惡棍等に、いたく撃れて倒れしかば、縡絶たらんと思ふになん、今も今とてその事を、いひつ歎きつ、亡骸を、とり歛んとて來る途にて、ゆき遭たりし歡しさよ。といへば依介微笑て、僕は彼ときに、一旦は死せしならん、われをも知らで倒れし程に、日は暮れ、天は結陰て、暴き風雲の過るまに〳〵、わが面を撲つ驟雨の、口にさへ入りにけん、忽地に甦生しつ、四下を見れば薄月夜、喞がましき虫の音のみ、敵も躬方もあることなし。われはともあれ人々は、いかになり給ひけん、と思へば心安からず、辛して身を起せば、漸々に撲傷の疼痛を覺て、速には走

が、餘毒を避るに究めてよし。今さら澁ることやはある。われはこゝより立わかれて、竊に武藏へ赴くべし。かくて道德と犬士等に、事の趣を報知して、又立かへりて市川なる、留守の宿をも折々訪ふべく、時宜によらば安房へいゆきて、おん身に對面すべきなり。其時おん身はかへり來るとも、亦只彼地に留るとも、そは左も右も隨意なるべし。長僉議せば小夜のみ更ん。今宵の宿りへ急ぎ給へ。と言葉せわしく勸れば、妙眞やうやく頷きけり。照文ふかく歡びて、しからば月の沒ぬ間に、とく〳〵と誘引立て、舊の大路へ赴くに、妙眞はその道すがら、文五兵衞を見かへりて、さるにても痛ましきは、依介が事也かし。渠が心ざまの淳樸なる、他し箇工等に立優りて、主の爲になるべきもの也。人にしらせぬ旅なれども、渠なればこそ途までもとて、憖に將て來たるにより、可惜命を隕さしたれ。不便なる事してけり。といひつゝ涙呑めば、文五兵衞も嘆息して、われも爾こそ思ふなれ。心急ぎのせらるゝとも、亡骸を埋めずは、狗鳥に傷られん。としてやよけん、かくやせまし。と相譚てゆく程に、聊先に進みたる、照文これをうち聞て、現彼依介とかいふ小斷は、大敵を見て怯せず去らず、遺たる杖をとり揚て、且く防戰ひつゝ、其處に命を隕せしは、よに有がたき義僕也。その亡骸は今竊に、道次に埋置て、後に改葬るべし。まづ彼處までいそがずや。といふに兩人歩を早めて、舊の松原に

いひかけて目を拭へば、文五兵衛も堪かねて、頻に洟をうちかみけり。照文聞て頭をうち掉り、剃髪の事はとまれかくまれ、ひとり不覺に行脚して、孫の往方を索ん事は、遂がたうして且危し。さればとてこの儘に、市川なる宿所に還らば、舵九郎が夥計の悪棍、撃漏せしも多かるに、又横ざまに恨を含て、寇せんとこそ謀るらめ。かゝれば宿所に還るも危し。一旦安房へ赴きて、しかして後に進退を、國司の仰に從はゞ、身はやすくして危からず。又大八の親兵衛は、神明佛陀の擁護によりて、雲に駕り空を翔らば、今はや安房に赴きたる歟、これも亦知るべからず。縱その事あらずとも、辛して將て來つる、犬士を途に失ふて、その祖母だも俱して邁ずは、何を證に云々と、わが君に聞えあぐべき。こは只おん身がうへのみならず、その進退は某が身にしも係る事なりかし。かくまでに言をわきて、薦引ても聽れずは、わが命運も是までなり。さは一犬士を失ひし、愆をいかにせん。進ては里見殿に、まうし解ん證もなく、退きては、大等に、ふたゝび面を向がたし。進退こゝに谷まりて、自殺するより外にすべなし。事情を思ひ汲で、人をも身をも謬たば、行脚の功德もその甲斐あらんや。みづから深念を決めてよ。と理切て諭せども、妙眞はなほ思ひかねて、文五兵衛に相譚へば、聞も訖らず眼を睜て、蜑崎ぬしの宣ふ趣、理りならずといふことなし。現市川へ還るは危く、安房へ赴けば悪棍等

はやきによりて、神慮に協せ給はねば、且く隱し給へるならん。さばれ只是推量のみ、當らずといふとも據あり。今ゆくりなく失ひし、親兵衛に恙あらば、玉を握りて生るべからず、身に亦丹花の痣もいで來じ。孫の爲に自愛して、還さるゝ日を俟給へ。祖母外祖の愁歎は、恩愛の切なるも、私の情義にして、只その一家のうへに係れり。彼稚兒を失ひし、わが愁歎の八しほにましたる、君の爲には不忠に似たり。友には不信と怨みられん。今此時の不祥に惑ふて、事の不如意に怒狂はゞ、われこそ腹を切るべきに、死なぬは命を惜むにあらず、死してその益なければ也。心を定めてわがいふよしに、就て惑ひを解ねかし。世を憤るは愚癡にこそ。後の榮を俟ずや。と頻に諫奬せば、文五兵衛は言下に悟りて、亦共侶にぞ慰めたる。妙眞僅に涙を斂めて、蜑崎ぬしの白地に、料らせ給ふ如くならば、後憑しく侍れども、過世いかなる業報にや、子さへ孫さへ失ひし、わが身ひとつの薄命は、樹枝に離れし猿猴にも、及ばぬものをいかにして、後の榮にあふよしあらん。よに惜からぬ命なれども、得死れぬは罪障の、いとしも深き故なるべし。吾儕には身の暇を給はせ、剪たる髮を剃捨て、斗藪行脚の比丘尼とならば、萬にひとつ親兵衛に、環あふ日のありもやせん。譬ば素懐を得遂ずして、旅より旅に野ざらしの、屍は獸を肥すとも、罪障竟に消滅せば、後の世こそやすかるべけれ。安房へ參るは要なし。と

るに、大八の親兵衛は、鬼神の爲に隱されて、今その往方をしるよしなくとも、決して恙あるべからず。何となれば、渠は四歲の小兒なれども、原是犬士の一人たり。犬士の一人たるときは、伏姬うへのおん子に等し。伏姬うへのおん子ならば、役行者の擁護もあるべく、觀音薩埵の利益もあらん。さればこそいぬる比、父房八に踢られしとき、一旦息絕たりけれども、丶大法師に扛抱れて、忽地甦生せしのみならず、その胎內より握固たる、左の拳をうち拔きて、仁の字の玉顯れ出、なかりし痣の身にいで來て、形牡丹に似たる事、是未曾有の奇特なれ。大約かくのごとき神童は、窮阨の中に在りといふとも、鬼魅もこれを犯すべからず、水火もこれを損ふべからず。凡庸痴呆の童子に等しく、野狐天狗に勾引れて、豈溝壑に死すべきや。神慮と佛力は凡智もて、量知るべき事ならねども、舵九郎を屠戮して、親兵衛を拯れしは、役行者の應驗ならん歟。爾らずは伏姬の神靈成、神謨にぞあらんずらん。彼姬うへは心雄々しく、且孝にして、信あり義あり。その心術と行狀は、丈夫にも多く得がたし。終らせ給ひし爲體と、御遺言の趣を、今さら思ひ合すれば、骸は富山に瘞れて、二十年あまりふる塚の、標の松を肥すとも、靈は必犬士のうへを、護らせ給ふ事あるべし。わが推量に違はずは、他し犬士と倶ならで、此度彼小兒をのみ、まづ一人將て還りて、君の見參に入れんとせしは、時のなほ

しや軀を引裂れて、七段八段になりたりとも、今一トたび見まほしけれ。あらずやいかに。と問かけて、又潸然と泣沈めば、文五兵衛もはふり落る、涙に鼻をつまらして、否舵九郎こそ引裂れし、亡骸は彼處にあれ、大八の親兵衛が往方は知るよしなけれども、頤ふに渠は小兒なり、犯せる罪のあるものならぬに、夜叉歟天狗の所行なりとも、兇暴虎狼の悪棍と、ひとしく命を絶れんや。世に神隱しといふことありて、速ければ一兩月、遲くとも兩三年には、還さるゝものぞとよ。歎くは渠が爲ならず、神に祈り佛を念じて、かへり來る日を俟給へ。今とて術はあらずかし。といひつゝ目皮を押拭へば、妙眞いよゝうち泣て、大八の親兵衛は、おん身の爲にも孫なれども、男はよろづに心つよくて、しかばかりだに諦め給はゞ、思ひ絶てもありぬべし。況小文吾どのといふ、佗とせし男兒一人あり。吾儕は曩に子と媳を、喪ふてまだ幾日もあらず。僅に遺す樫實の、ひとつといふて掛替もなき、孫さへ神に獲られしを、歎かでいつまで待るべき。絶ぬ思ひに病髐ふて、世にも人にも疎れんより、この野の露と消なまし。憖に呼活られて、強顏きものは命也。悲しきかな。と身を投倒て、哽咽亦咳逆る、哀傷さこそ、と文五兵衛は、人の歎きもわが涙も、禁かねつゝついゐたり。照文聲を勵して、恰悧けれども婦人の臆斷、時の不祥に値ばとて、生を輕じ死を樂ふは、亦甚しき惑ひならずや。吾つら〳〵と思惟

南總里見八犬傳

東都　曲亭主人編次

第五輯　卷之一

第四十一回

木下闇に妙眞依介を訝る
神宮渡に信乃猪平に遭ふ

蜑崎十一郎照文は、文五兵衞共侶に、逃る惡黨を追走らして、舊の處に來て見るに、妙眞は小草の上に、伏沈みたる儘なるを、頻に呼ども應をせず。こはいかに、と驚睞て、兩人右より左より、やをら扶起しつゝ、遽しく石滂を掬て、顔に吹被などしたる、介抱等閑ならざれば、妙眞は稍こゝちづきて、眼をひらきて吻く息の、狭霧は雨と降更る、涙を袖に堰かねて、膝より傳ふ行潦、ながらふる身をうらみ貞なる、胸さへ曇る夕月の、幽き影に、と見かう見て、嚮古那屋の翁、蜑崎ぬし、うちも累る殃厄の、一箇脱れて又一箇、いとも怪しき風雲の、降集程に見えずなりし、稚きものはいかにぞや。その亡骸は樹杪に、掛られたる歟、地に落し歟。よ

第七輯 卷之七

南總里見八犬傳 目錄 二

文政五年陽月上澣　　　　簑笠漁隱

八犬傳第五輯自序

余常以謂。有遊乎世者。有爲世所遊者。遊乎世者。適於自所適。不適於人所適。是以樂在內無竭也。爲世所遊者。適於人所適。不知自所適。是以徵其樂於外以自苦焉。若狂接輿遊于歌詠。莊周遊于寓言。左思司馬相如遊于文場。杜甫李白遊于詩詞。羅貫笠翁遊于傳奇小說。雖所遊不同。而其樂一致。亦惡踏人之足跡哉。蓋鸞鳳不羣飛。葛藤不獨立。葛藤也者。吾欲拂之。鸞鳳也者。不可得而爲友。雖然。人世一夢中。其所遊。非華胥必南柯。寤寐在我。何遠之有。能知是樂。而後遊者。心之欲與不欲。無往不樂。遨乎遨乎。余固也久矣。今玆端月。本編脫藁。贊嘲人告成。卽是言爲序

南總里見八犬傳

貳